

ガンダム nearmiss

ヨッシー♪

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

宇宙世紀0079年

アースノイドを主体とした政策を取る地球連邦政府に反旗を翻したジオン共和国は独立果たそうとジオン公国を名乗り地球連邦政府へ宣戦布告を行うと、両軍は地球圏に住む全人類までも巻き込み酷く醜い戦いを繰り広げる事となる・・・

そんな混沌とした戦争の半ば主人公で有る地球連邦軍空軍少尉シヨウ||カノウ少尉はひよんな事から試作機のテストパイロットをする事となってしまった!!?

寡黙で頼りになるが小さくて可愛いものが好きな少し危ない上官に無茶振り大好きな女性オペレーターと軽くて軟派だが友情に熱い同僚にとにかく過激なチューニングが大好きな女性整備兵とマッドサイエンティスト等々・・・沢山の愉快仲間が出て来るたまにシリアスなシーンも有りますが基本的にふざけてるシーンが多いガンダム小説となります。

注意としてはエブリスタからの転載となりますので一つの作品が一話となるので読まれる方は覚悟して読んで下さいね？（笑）因みに現在の時点で約113万文字・・・29話分になります。

一応ハーメルン用に修正はして行くで仕方ない付き合い合ってるか？と言うお暇な方は是非お気に入り登録おねがいしますね？

ヨッシー♪

目次

プロローグ	1
モルモット!?	
シヨウ カノウ	7
新しい任務	13
新型機!?	22
安らぎの場所	28
大乱闘!	34
イエーガー バウスネルン登場	40
ドッグファイト!	45
アメリカ アン ウオーカー登場	

襲撃!?	54
馬鹿な男達	
どんでん返し!?	74
シヨウの底力!	80
生還	87
対面	93
リンとマリア	100
楽しいひと時	107
アメリカの秘密	115
決着	123
一目惚れ!?	130
告白	138

二人の気持ち

疑惑

リンの気持ち

遅く起きた朝は・・・

東の間休日 その1

東の間休日その2

東の間休日 その3

熱帯夜その1

熱帯夜その2

熱帯夜その3

悪夢

再スタート

危ないチーム!?

218 213 208 203 198 192 185 179 171 161 154 145

敵襲

物事は言い様

疾風

本領発揮

チャーリーの意地とアメリカの疑惑

244

後輩とその1

帰還祝いその1

帰還祝いその2

後輩とその2

後輩とその3

初めての対MS戦闘

初めての対MS戦闘その1

276 271 266 260 255 250 239 233 228 223

初めての対MS戦闘その2	—	282
初めての対MS戦闘：・初めてのその	—	289
4	—	
初めての対MS戦闘その4	—	295
初めての対MS戦闘その5	—	302
初めての対MS戦闘その6	—	308
初めての対MS戦闘初めてのその7	—	313
初めての対MS戦闘その8	—	319
ミデアの人その1	—	327
ミデアの人その2	—	337
ミデアの人その3	—	343
その名はカスケード隊！その1	—	

349	その名はカスケード隊！その2	—
354	その名はカスケード隊！その3	—
360	その名はカスケード隊！その4	—
366	機種転換訓練	—
	機種転換訓練その2	—
	機種転換訓練その3	—
	強行偵察!?	—
	強行偵察その2	—
	強行偵察その4	—
411		
401		
392		
386		
379		
372		

強行偵察その3	416
強行偵察その4	424
強行偵察その5	432
強行偵察その6	436
強行偵察その7	442
強行偵察その8	447
チャーリーの日	453
チャーリーの日2	463
チャーリーの日その3	469
チャーリーの日その4	475
チャーリーの日その5	480
チャーリーの日その6	486
チャーリーの日チャーリーのその7	486

招かざらぬ人達	492
敵MS調査その1	499
敵MS調査その2	505
敵MS調査その3	510
敵MS調査その34	515
敵MS調査その5	521
MS調査その6	526
敵MS調査その7	535
敵MS調査その8	540
敵MS調査その9	545
敵MS調査その10	551
因縁その1	556

厄介な奴等 5	642
厄介な奴等 5	634
厄介な奴等 3	626
厄介な奴等 2	621
厄介な奴等 1	616
因縁その 9	610
因縁その 8	601
因縁その 7	593
因縁その 6	587
因縁その 5	582
因縁その 4	576
因縁その 3	568
因縁その 2	562

厄介な奴等 6	651
厄介な奴等 7	663
厄介な奴等 8	669
厄介な奴等 9	678
厄介な奴等 10	686
厄介な奴等 11	695
厄介な奴等 12	701
厄介な奴等 13	707
厄介な奴等 14	715
厄介な奴等 15	721
カスケード隊、旅にでる。	
離れる二人・・・その 1	730
離れる二人・・・その 2	736

807	離れる二人の距離・・・その10	791
	離れる二人の距離・・・その11	796
	離れる二人の距離・・・その12	801
	離れる二人の距離・・・その13	
785	離れる二人の距離・・・その9	
	離れる二人の距離・・・その8	778
	離れる二人の距離・・・その7	771
	離れる二人の距離・・・その6	766
	離れる二人の距離・・・その5	757
	離れる二人の距離・・・その4	747
	離れる二人の距離・・・その3	741

オデッサ作戦

	離れる距離・・・その25話	885
	離れる距離その24	879
	離れる距離その23	873
	離れる距離その22	867
	離れる距離・・・その21	861
	離れる距離・・・その20	855
	離れる距離その19	847
	離れる距離その18	840
	離れる距離・・・その17	834
	離れる二人の距離その16	828
	離れる二人距離その15	821
	離れる二人の距離その14	813

マ ド ラ ス 基 地 強 襲 ・ ・ そ の 7	920	マ ド ラ ス 基 地 強 襲 ・ ・ そ の 6	914	マ ド ラ ス 基 地 強 襲 ・ ・ そ の 5	908	マ ド ラ ス 基 地 強 襲 ・ ・ そ の 4	902	マ ド ラ ス 基 地 強 襲 ・ ・ そ の 3	896	マ ド ラ ス 基 地 強 襲 ・ ・ そ の 2	891	マ ド ラ ス 基 地 強 襲 ・ ・ そ の 1
			952	マ ド ラ ス 基 地 強 襲 ・ ・ そ の 11	946	マ ド ラ ス 基 地 強 襲 ・ ・ そ の 10	940	マ ド ラ ス 基 地 強 襲 ・ ・ そ の 9	933	マ ド ラ ス 基 地 強 襲 ・ ・ そ の 8	926	

プロローグ

昔から僕は機械が好きだった。ロボットとか飛行機とか……とにかく機械なら何でもそうだった。

そして月日が経ち平凡な学生時代を送っていた僕は18才の時に就職するか進学するかを悩み、父親しか居ない家庭だったし……食うに困らないのと自分の趣味も合わせて地球連邦軍士官学校へと希望した。

まあ親父も親父で元から放任主義だったから特に反対も無かったし、頭はそんなに良く無かったがどうかギリギリで合格……まあ今時軍隊に入る奴も珍しかったお陰かな？と今でもそう思う……

そして2年後……成績は学課と実技で極端だったが機械好きと言うのが良かったのか実技の教官の評価が良かった為にどうにか僕が卒業の目処が立ってオーストラリアの端に有る田舎基地の戦闘機パイロットとして配属される事になった。

そして更に2年後の宇宙世紀0079年・・・ただの戦闘機パイロットだった僕はジオン公国独立戦争・・・後に一年戦争と呼ばれるここ地球圏に住む全人類を巻き込む大きな争いに自分の身を投じる事になった・・・

~~~~~

宇宙世紀0079 7月

インド洋上空

「ああもう・・・マジでしつこいって!？」

定期的なパトロールだったが敵戦闘機とニアミス、突発的な戦闘に突入してしまった。

随伴機がいたのだがはぐれたらしい・・・堕ちてなければ良いな思っている地球連邦

軍のパイロットは先程からジオン側の制空戦闘機で有るドップに後ろを取られっぱなしで反撃出来ずに必死に逃げている所だ……

こちらのトリアーエズは連邦空軍の制式戦闘機だが、スピード、旋回性、火力の全てにおいて全て向こうのドップに劣っているらしく、こう後ろを取られては反撃のしようが無い……

「何でそんな不恰好なのに、性能良いんだよっ！」

連邦軍のパイロットはコックピットでジオン軍戦闘機ドップのデザインに悪態を吐くがこの状況が変わる訳でも無い……

(くそつたれ全然振り切れないな……ホントにツイてない!)

連邦軍の戦闘機パイロットは、けどこんなところで死ぬわけに行くかつ!とアフターバーナーを吹かしながら操縦桿を右に倒し急旋回を行うが、後方のドップの方が旋回性能が高いのか自機よりも内側に入り込んで来る。

「チツ、ロックオンされた！」

連邦軍のパイロットはコクピットにビーッと鳴り響くロックオンアラートに舌打ちしながら右脚のライダーペダルを踏み込み愛機で有るトリアーエズを海面へと一気に<sup>降下</sup>ダイブさせる。

「ドツプの奴ミサイル撃ちやがった・・・こなくそおーっ!!」

連邦軍パイロットのトリアーエズはアフターバーナーをカットしフレアをばら撒きながら機体を海面スレスレに引き起こすと、ドツプから放たれた熱探知型の赤外線ミサイルはフレアに向かって突き抜けるとそのまま海へと着弾する。

「日頃の行いの良さってね！」

連邦軍のパイロットはフウ!と安堵の息を吐きながらアフターバーナーを吹かし機体を上昇させると、後方のドツプは引き起こすのが遅れたのか海面に機体を打ち付けながらバランスを崩しているのをパイロットは確認する。

「良し貰ったっ！」

連邦軍パイロットは今まで後ろを取られっぱなしで鬱憤が溜まっていたのかこの絶好の機会に反撃に出ようと、スロツトルを最低出力にワザと失速させると機体が下を向いた瞬間再びスロツトルを最大に上げる。

「コイツ・・・今度はこっちの番だからなっ！」

連邦軍のパイロットはそう呟きながらH<sup>ヘッドアップディスプレイ</sup> U Dに映る海面スレスレを飛行しているドップに向けレクティルを合わせ操縦桿のトリガーを絞るとトリアーエズから放たれた20バルカン砲がドップの胴体と右翼に被弾し火を噴くとドンっ！と音を上げながら海へと叩きつけられてしまう・・・

「やったねビンゴッ！」

そう声を上げた連邦軍のパイロットはふと安心した瞬間、目の前の雲の切れ目からヘッドオンして来る新手のドップにギョッとした顔になると、マズっ・・・と言いかけた瞬間には前方のドップから発砲された30ミリバルカンが機体の左の主翼と水平尾翼に直撃してしまい機体のコントロールを失い始め出す。

「ええいクソっ?! トリントンコントロール聞こえるか? こちらは基地守備戦闘機隊の第一小隊二番機のカノウ少尉だ。パトロール中に敵機と接敵し被弾した・・・エマーゼンシー! エマーゼンシー・・・」

カノウ少尉と名乗ったパイロットは必死に機体を立て直そうとするが鳴り響くロツクオンアラームに無理か! と叫ぶと足元にある緊急脱出装置のレバーを引きベイルアウトする・・・

「クソ……めんな……」

脱出した直後にドップにより放たれたミサイルにより爆発した愛機に敬礼しながらパラシュートでヒラヒラと海面に着水すると、辺りを見回しながら、海水浴か…サメに襲われませんように…とにかく祈った。

「普段は神なんか信じちやないけどね……」

そう呟いた僕は半分日が傾いた空を見ながらハア・・・と溜息をついたのであった。



モルモツト!?

ショウ=カノウ

宇宙世紀0079

人類は地上そして宇宙と別れて住んでいた・・・

地球連邦政府の圧政により苦しむスペースノイドは日々不満を募らせ、次第に反地球連邦政府運動が活発化する。

(スペースノイドの) ニュータイプへの革新を唱えたジオン=ズム=ダイクンの暗殺でサイド3の実権を握ったザビ家当主デギン=ソド=ザビが地球連邦政府に対し独立を宣言すると、彼はサイド3をジオン公国と名乗りを上げると同時に独立宣言を掲げ地球連邦政府に開戦を表明した・・・

その後ジオン公国軍は、サイド2にあつたコロニー・アイランドイフツシュをハイ

ジャックした上で、全住民をNB<sup>大量破壊兵器</sup>C兵器で虐殺すると言う残酷な行いを、そのコロニーを地球に有る連邦軍総司令本部ジャブローへ落下させると言う残忍な作戦・・・ブリテイッシュ作戦行う。だが・・・連邦軍の猛攻撃により落下地点がずれたアイランドイフツシユは、オーストラリアの首都シドニーに落下。オーストラリア大陸の三分の二は地図から消える事となった・・・

地球連邦軍も奇襲とも言える宣戦布告に遅れながらも応戦するが、ジオン軍の新兵器で有るMSと、(MS用に仕様変更された)核兵器による攻撃によって、各サイドは次々と壊滅してしまい・・・この通称1週間戦争で総人口の半分で有る約50億人が死亡したとされてる。

そこで賭けに出た地球連邦軍は、航空宇宙軍ルウム方面軍の艦隊司令で有る、エイブラハムレベイル中将(以下レベイル將軍)を総司令官に任命し、サイド5——ルウムでの(多くの戦力を投じて、これまでの反撃としての宇宙軍総出での)総力戦を行ったものの、ジオンの新兵器で有るMSによって地球連邦軍宇宙艦隊は壊滅し、レベイル中将の座乗艦アナンケも撃沈・・・脱出には成功したレベイル中将であったが、ジオン軍の黒い三連星と言われるエースパイロットによりランチ(脱出艇)が拿捕・・・捕虜となる。

そして開戦当初から優勢を誇っていたジオン公国に対し反抗の手段が無くなってしまった地球連邦軍は、自らの敗北を悟り（ジオン側の勧告した今次の戦闘に関する停戦要求と、そのための条約である南極）条約への締結を吞もうしていた（事実上の敗北宣言）。だが捕虜となっていたレベイル将軍が奪還され自体が急転する。

「ジオンに兵無し！」

その時行われた彼の有名な演説によつて反抗の意思を固めた地球連邦政府は、再び戦火へと踏み込んだこととなった。その半年後・・・オーストラリア方面軍トリントン基地に、パラパラとローターの音を轟きながら一機の救援ヘリコプターが、基地にある二つの滑走路を挟んだ所にある着陸地点へと降りると、毛布にくるまれたずぶ濡れの士官が―僕のことだ―はヘリの中から外に出た。

「やれやれ、どうやら帰つて来れたな・・・？」

ホツとした顔でそう呟く僕の近くでジープが一台止まると、おっ生きてたのかショウ

？と一人の男性士官―チャーリーだ―が声を上げながらニヤニヤしだした。うるさいぞチャーリー・・・こっちは死にかけたんだからな！とムツとしながら睨み返すと、チャーリーは、そんなに怒るな？と答えながらククつと笑みを浮かべた。

「無事に生還した記念に今日は奢ってやんよ？」

「そりやどうも・・・」

そう言いながらへへつと笑う軽い感じで明るい金色の頭した男は、僕の数少ない同期でチャーリーⅡフォンⅡウィルソン少尉。そして僕はショウⅡカノウと言ひ、士官学校からの友人で階級も同じなら、年も22才と一緒の上に同時期にここに配属されてしまひ、今となつては切るに切れない腐れ縁となつてしまつた・・

「それで海水浴は楽しかつたかよショウ？」

そうニヤニヤしながら首を傾げて来るチャーリーに、僕は救助が来る間ずっと見える

サメの尾びれの事を思い出すと、暫く海はいい……とその事かき消すように頭を振り出した。するとチャーリーが、『所で新人はどうなったんだ……?』と、今までとは打って変わって真面目な顔をして詰めて来る。

「正直分かんない……ベイルアウトした僕はすぐに救難信号を出してすぐに救助されたけど反応が無いってことは多分……」

「そっか……まあ、あんまし落ち込むなよ?それとショウ……司令が呼んでるぜ!生きてるんなら着替えてさっさと来いってさ?」

「了く解……それじゃ司令部まで頼むよ運転手さん」

そう言いながらジープの助手席に乗る僕に、チャーリーがハイハイと言いながら運転席に乗り込んでハンドルを握ると、あっそうだ!と何かを思いついた様に僕の方を見る。

「今日の晩飯はリン特製の魚のソテーとビールって言うのはどうだ?」

「ニンニクが効いていてすごくそそるけど魚はしばらく良いや・・・」

そう苦笑いを浮かべる僕に、チャーリーがあつそ・・・と答えながらギヤを一速に入ると、ギヤギヤつとホイールスピニングしながら二人を乗せたジープは司令部の有るビルへと走り出すのであった。

（（（

## 新しい任務

「送つてくれて助かったよチャーリー?」

司令部の有るビルの前で止まったジープから降りたシヨウはそう言いながら少し申し訳なさそうな顔になると、気にすんなよシヨウ?とニツと浮かべたチャーリーから返事が返つて来ると、所でシヨウ?とチャーリーが首を傾げて来る。

「お前に言われるがままここまで来たけど一体司令部に何の用が有るんだよ?」

「さあ・・・僕もヘリのパイロットから僕に司令部への出頭命令が出るからとしか聞かされてないんだよね?」

そう答えたシヨウに何だそりや?とチャーリーが呆れた顔になるとホントだね?とシヨウもハハッと苦笑いを浮かべてしまう・・・。

「取り合えずどつかで時間を潰しとくからさっさと終わらせて晩飯に行こうぜ？」

「分かったつて、それじゃあまた後で？」

そう手を挙げたシヨウにチャーリーも手をヒラヒラさせながらジープを急発進させると、取り合えず着替えるかな・・・？と独り言ちたシヨウは格納庫とは滅多に使わない本部ビルに有るロッカールームへ向かおうとすると今晚の当番で有る受付の女性下士官からあつかノウ少尉！と呼び止められる。

「何そんなに慌てて・・・？」

「いえ、司令官のバリサム大佐からカノウ少尉が来たら自分の所へ寄越す様に！といつてなく固い口調だったので・・・」

受付の女性下士官がそんな事を言いながら苦笑いを浮かべてくるのでシヨウは分かかった・・・有難う？と答えながらロッカールームへと向かうと新人パイロットの事かな・・・とハアと溜息をつきながら頭をポリポリと掻き出す・・・。



くくく

濡れネズミの恰好からクリーニングしたての少しラフな通常勤務用の軍服に着替えたシヨウは一回深呼吸した上でここトリントン基地司令官で有るロイ||バリサム大佐のオフィスが有る立派なドアをコンコンとノックすると失礼します！と声を上げる……。

「基地守備隊戦闘機隊所属第二小队シヨウ||カノウ少尉です。ご命令の通り出頭致しました！」

「開いている。良いから入れ……！」

普段の落ち着いた様子とは打って変わり妙に機嫌の悪そうな声を出す基地司令のバリサムの様子にシヨウはゴクつと息を飲みながらドアをゆっくり開けると、正面に体格の良い短い顎鬚を伸ばした大佐と言う割りには意外と若い壮年の男性佐官が立派な椅

子に背中を預けながら手に持った書類に集中している姿が見えるとバリサムから：先ずは生還おめでとうと言うべきか？と持っていた書類をデスクに置きながら首を傾げて来る。

「この度は自分の機体はおろか配属されたばかりの新人パイロットまでも失つてしまい申し訳りありませんでした！どんな処分でも受ける覚悟では有りますが・・・出来ればバリサム指令のご慈悲を頂ければと思っっている所存です!!」

敬礼をしながらいきなり謝罪をするシヨウにお前は何を言ってるんだ・・・？とバリサムから呆れた顔をされるとシヨウはへっ？と素っとなん狂な声を上げだす。

「まあ、確かに配属されたばかりの新人パイロットのエレメントリーダーとしては処分も検討する所だが・・・今回のケースに関しては突発的な戦闘も有り新人パイロットに運が無かった！と言う事で俺は判断する。」

元々戦闘機パイロットだった事も有り現場の事をよく理解しているのかそんな事を言つて来るバリサムにホツとしたシヨウはそれではどんな要件でここへ？とここへ呼

ばれた理由に首を傾げると、それなんだが・・・とバリサムが困った顔になる。

「カノウ・・・貴様は良く撃墜される割には必ず生きて帰って来るな？悪運が強いと言うか何と言か・・・」

「まあ悪運が強いんでしょう？僕自身まだまだ死にたく無いと思つて操縦桿を握つてるんで・・・」

そう答えるシヨウにバリサムがそうか・・・と言いながらガシガシと頭を搔くと肘を付きながら組んだ指

に自分の顎を乗せながらシヨウの方をジロつと睨みだす・・・。

「なあカノウ・・・しばらくテストパイロットをやってみないか？」

「テストパイロットですか？」

バリサムの言葉に首を傾げたシヨウにバリサムが少し困った顔をしながらそうだ……  
と言いなから話を続ける……。

「ジャブローから運用試験用の新型機が回って来たんだが……そこでだ！こんな田舎基地  
にお前に与える

様な余分な機体は無い上にお前はここトリントン基地の中でも断トツの撃墜数を誇  
るエースパイロットだ

し是非乗って欲れないかカノウ少尉？」

「いやまあ……確かに自分は操縦には自信が有りますがそれは戦闘機乗りと言う意味で  
テストパイロット

トとなると全然話が違って来るのでは？ですのでもっと落ち着いた操縦の出来る……  
そうだとウチの隊長

とかはどうですか？」

バリサムからの提案を面倒に感じたシヨウからあつさりと言つた上官をスケープ  
ゴートに捧げようとするがお前のその上官から推薦が有ったんだが？とバリサムがニ

ヤつと笑みを浮かべると逆に売られたシヨウはやられたつ!?!と内心思いながらハア……と溜息をつきだす。

「尊敬するバウスネルン大尉からも推薦されているのならばこのシヨウⅡカノウ空軍少尉は新型機運用の

テストパイロット任命を快くを受領いたします」

実際は嫌々だがシヨウはそう言いながら敬礼すると、期待している。と短く答えたバリサムが二つと笑みを浮かべるとシヨウの前へ先程見ていた書類の束を置き出す。

「俺もテスト機の仕様書を見たが……どうも今までの機体とは桁外れの性能みたいだから気を引きしめてかかってくれ」

バリサムがそう言いながら苦笑いを浮かべるとシヨウは机の上に置かれたファイルを手に取りながらV作戦……ですか?とバリサムとは別の理由で苦笑いを浮かべてし

まう・・・。

「V作戦とは本社も妙にダサイ作戦名を考えますね・・・？」

「おいカノウ・・・俺よりずうつーと偉いお偉いさんの考えた作戦なんだからな・・・間違っても他所で

は絶対に言うなよ!」

少し不安そうな顔のバリサムにシヨウは分かっていますって!とニツと笑みを浮かべると、しかし何でそんな作戦がこんな田舎基地で・・・?と首を傾げ出す。

「さあな? まあここは辺境の田舎基地だから極秘任務には最適と思っただろう・・・それと上手く行っ

たら俺はひよつとすると昇進してお前達問題児から解放されるかもしれん・・・是非とも成功を祈るおカノウ?」

「それはそれは、このシヨウノカノウは必ずや任務を成功させバリサム大佐をジャブローへと送り出し

て見せようじゃありませんか？」

皮肉たっぷりにもう返すシヨウにバリサムがため息交じりに分かったから早く行け……と右手をヒラヒラ振り出すとシヨウはそれでは失礼いたしました！と敬礼しながら部屋を出ると腕を組みだす。

「新型ね……取り合えずハンガー覗いてみるかな？」

そう呟いたシヨウは少しテンションを上げながら滑走路に有る格納庫に向かうのであった。

くくく

## 新型機!?

「おやつさーん居ますかー?」

バリサムから新たな任務を与えられたシヨウは指令本部ビルから真つすぐ滑走路手前に在るハンガーの中に向かつてそう叫ぶと、アア! 誰だこんな時間に・・・と開けっ放しのデカイ扉の奥から野太い声で返事が返つて来る。

「つて何だ坊主か・・・また墜とされたのかお前?」

F F-4 トリアーエズのエンジンの下からサングラスを掛けた中年の整備兵が寝板を使つて出て来るとそう呆れた声を出しながら整備班長の印で有る黒いラインの入つた作業帽を被り出すと怪我は無いようだな・・・?と少し安心した様にここトリントン基地の整備班の責任者であるホワイト大尉が二つと笑みを浮かべて来るのでシヨウはおかげ様でどうか・・・?と答えるとハハつと苦笑いを浮かべ出す。



「僕が生きてるのもおやつさんがイジツてくれた機体だからですね?」

「フン!おだてても何も出やしねえぞ坊主・・・所で撃墜された早々こんな所に何か用か?」

少し照れ臭そうな顔でショウに答えたホワイトが早く帰ってきつさと寝たらどうだ?と自分の作業帽の上に手を置きながら続けるとショウはちよつと気になった事が有つて・・・と急に真剣な顔でホワイトの顔をジツと見ると一体どうしたんだ坊主・・・?とホワイトから不思議そうな顔されてしまう・・・

「実はついさつきバリサム指令から試作機のテストパイロットを拝命したんですがおやつさんならん何か知ってるかな?」と思つて・・・?」

「何だ坊主がアレに乗るのか・・・バリサムの野郎からは明日までに使える様にしとけと言われたから組むのは組んだが相当なバケモンだぞコイツは?」

ショウからの質問にそう答えたホワイトがハンガーの奥に向かって右手の親指で指

すとシートに被った既存機で有るトリアーエズやフライアローよりも一回り大型の戦闘機らしいシルエットの機体が置かれているのが見えるとシヨウはアレが試作機：：と呟きながらゴクつと息を飲みだす。

「型式番号はFF—X7BST：：通称コアブースターって言うらしいんだが、この機体には従来機のターボジェットエンジンでは無く小型化された核融合炉ジェネレーターで動く熱核ジェットエンジン積んだ機体だ：：トリアーエズやフライアローの3倍以上の出力は有るから機体に振り回されるなよ坊主：：？」

「それって噂に聞くMSと同じじゃ無いですか：：そんな機体に僕が乗るなんて：：!？」

試作機のテストパイロットと聞いて内心少し浮かれたシヨウがホワイトからの説明を聞きながら呆然と少しだけ見えるコアブースターの機首を見上げていると、ハンガーの外から粗々しいブレイキ音がキキツとなり出すと同時に面白いシヨウ？と呑気そうに声を上げるチャャーリーの姿がシヨウとホワイトの前に現れる。

「やけに遅いから多分ここだろって思って来たんだけど・・・何か有ったのか変な顔してよっ。」

シヨウとホワイトの雰囲気に違和感を感じたらしいチャーリーが首を少し傾げるとシヨウがちよつと厄介な事になってね・・・?と苦笑いを浮かべると所でどうしたのチャーリーに首を傾げ出す。

「どうしたじゃねえよ! さつきCASSCADEカススケイドに晩飯食いに行くって約束したろうが!?

「そう言えば・・・ゴメンゴメン色々有って忘れてた!」

そう言いながらチャーリーの方へ駆け寄ったシヨウはそれじゃあおやっさん・・・機体の事は任せます!と叫ぶと、おうよ!と手を挙げたホワイトは隣を見ながらおいチャーリー!と怒鳴り声を上げだす。

「機体チェックリストが俺んとこに届いてねえぞ!!朝一で俺のデスクに無かったたら砂漠に埋めちまうから覚悟して置けっ!!!」

「あ、ヤベ・・・おやつさん明日には間違いない必ず絶対に!」

そう答えたチャーリーが焦った顔をしながら慌てて逃げる様にジープに乗り込むとシヨウは僕は知らないからね?と呟きながら助手席に乗り込むと呆れた様やれやれと溜息をつきだすと、何とでもなるつて?といつもポジティブなチャーリーからそう返事が返って来るとジープが急発進しだす・・・

「それよりもあのデカイ機体何だよ・・・呼び出された件と絡んでんのかシヨウ?」

基地の中を飛ばしながらチャーリーが首を少し傾げるとまあね・・・と答えたシヨウはハア・・・と溜息をつきだす。

「取り合えず詳しい事はリンの店に着いたら話すよ・・・色々有り過ぎて素面じゃ話せないや?」

「ふくん・・・それじゃあお前の癒しで有るリンの所に急ぐぜ!」

そう叫んだチャーリーが更にアクセルを踏み込むとシヨウのどう言う意味だよ!?!と抗議の声を無視しながら二人を乗せたジープは基地を出ると近くに有る町へと進んで行くのであった。

く  
く  
く

## 安らぎの場所

「お、今日も賑わってるみたいだな？」

ジープから降りたチャーリーからそんな声が聞こえるとシヨウも店の中から聞こえて来る賑やか声にそうだね？と答えながら町の外れに有るC A S C A D Eと書かれたパブの中に入ると同時に扉のカウベルがカランコロンと鳴り出すといらっしやいと威勢の良い女性の声がカウンターから聞こえて来る。

「悪いリン・・・二人何だけど良いかな？」

「あらシヨウにチャーリーじゃない・・・えつとカウンターで良いかしら？」

二人にそう言いながら目の前の席を指差すリンと呼ばれた黒髪の美人店主が目の前に空いている席を指差すのでシヨウは分かったと答えながらチャーリーと共に椅子に座ると、いや〜リンってホント綺麗だよなシヨウ？とチャーリーが揶揄う様にククつと

笑みを浮かべて来る。

「五月蠅いな・・・どうせ僕なんか相手にされる訳無いって!」

「お前のそういう思い込みは良く無いと俺は思うぜ?」

そう言いながらカウンタ―に肘を付いたチャーリーが呆れた顔でアレ見ろよ?と歩兵部隊の連中からちよつかい受けられているリンの方に顔向けるとアイツらっ!?!とそれを見たショウウは慌てて立ち上がろうとするが慌てんなって!と腕を掴んだチャーリーから窘められてしまう・・・

「バカ、邪魔すんなってチャーリー!」

「バカはお前だ。お前がここに来たらズーっとリンに片思いしてるのは知ってるけど周りを良く見ろって・・・この店に来ている女っ気のない奴は全員リン狙いで牽制し合っているって事はお前も知ってるだろ?」

そう説明して来るチャーリーにシヨウも分かつてる・・・と言いながら椅子に座り直している、向こうのオーダー取りに行くからまた後でね?と絡んで来た歩兵部隊の連中にフツツと微笑んだリンがカウンターの中へ戻って来るとシヨウとチャーリーの前でもうヤダ・・・とうんざりした顔をしてくる・・・

「ねえチャーリー・・・ちよつとあいつ等の所に行つてケンカ売つて来てくれない?良い感じにボコられた所でMPを呼ぶから・・・」

「おいおい・・・俺のこのハンサムな顔に傷なんか付いたらどれだけの女が泣くと思つてんだよリン!」

そんな子居るの?と、ここCASSCADEの美人店主と基地内で噂されているリンⅡローダンセがハーフアップに上げた綺麗な黒髪を揺らしながらクスクスと笑つて来るのでシヨウも確かにね?と便乗する様にククつと笑いだすと、ガクつと項垂れたチャーリーから俺の扱いがヒデエ・・・と小さく呟きが聞こえて来る・・・



「冗談だからそんなに拗ねないでよ．．．取り合えず二人共ビールで良い？」

「取り合えずそれで．．．あとリンのお任せで腹に溜まるのを適当に良いかな！」

グラスを取ろうとするリンにシヨウはそう声を掛けるとフツツと微笑んだリンから任せて♪と嬉しそうな顔で返事が返って来ると二人の様子を見ていたチャーリーがこいつ等自覚無いのかよ．．．と溜息をつきだす。

「何よチャーリー何か有ったの？溜息なんかついちゃって珍しいわね．．．」

「俺だつて悩む事くらい有んだよ．．．つて言うか何か有ったのは俺じゃ無くてコイツだぜリン？」

そう言いながら二つのビールジョッキを置いたリンにチャーリーが右手の親指で隣を差すと、どう意味．．．？と首を傾げられると、シヨウはお前なっ!?!と言う様な顔で内

心チャャリーに抗議しているとリンから言いなさい!とジロつと睨まれてしまう・・・

「いや、ちよつと・・・新しい任務に着く事になってさ!」

「おいおいシヨウ・・・今日撃墜された事も言わなくて良いのか?」

ムスつとした顔をするリンにシヨウはアハハと笑いながら説明していると二人の様子を見ながらチャャリーから茶々を入れられると・・・その言葉を聞いたリンがちよつと大丈夫な訳つ!とオロオロとした声を上げだすのでシヨウからも大丈夫だって!と慌てた顔で返事が返つて来る。

「け、怪我無いよね、どつか打ったりとか・・・?」

「う、うん・・・ずぶ濡れになった以外はどこも無いけど・・・」

シヨウの身体心配そうに確認するリンにシヨウがそう答えると、彼女は良かったあ・・・と安堵した表情でニコつと微笑む。

「それなら良いけど・・・心配するから余り無茶しないでよね？」

そう言いながら台所の方へ戻って行くリンの背中を見送った僕にチャーリーがニヤニヤしながら良いなシヨウは・・・と肘を突いて来る・・・

「あんな美人が優しくしてくれるんだから羨ましいぜ？」

「羨ましいって!?僕とリンは別にそんな関係じゃないし・・・」

そう言いながらビールジョッキを煽りだすシヨウに何だかな・・・と思つたチャーリーは苦笑いを浮かべるシヨウに取り合えず乾杯・・・と自分のジョッキを掲げるのであった。

くくく

# 大乱闘！

「それより聞いたかシヨウ？最近管制塔の方に新しい子が入って聞いたんだけどよ．．．  
凄っげえ美人らしいぜ！」

そう言いながらビールを煽るチャーリーにシヨウはそうなんだ？と興味無さげに首を傾げるが、たまには俺の話聞けよ！と、チャーリーからの抗議する声がシヨウの耳に聞こえて来ると、シヨウは聞いてるって．．．と答えながらうんざりした顔になる。

「一応言つて置くけどさ？士官学校の時みたいに火遊びはしないでよね．．．チャーリーの所為で何度酷い目に有つた事か!？」

そう答えたシヨウがチャーリーをジロつと睨みだすと、そんな事も有つたな？と誤魔化すようにアハハ．．．と笑い出しながらチャーリーが、所で指令の話つて何だったんだ？と急に真面目な顔になるのでシヨウはハア．．．と溜息をつきだす．．．

「さっき見た試作機のテストパイしろってさ？しかも……その機体がどうも、MSと同じ出力を持った化け物らしいんだ……」

シヨウはV作戦の事を大雑把に話すとチャーリーが成程な……？と首を傾げ出す。

「そのダサイ作戦名聞いたことあるな……連邦もやつとMSの試作機ができて、各地に試作の量産型が配備しつつあるって、そして実戦配備しながらデータ取るって言う作戦だろ？」

「で、その一つに僕が乗るらしい……」

そう答えながらガクつと項垂れるシヨウに、そりゃあ災難だなシヨウ？と、チャーリーがククつと笑いながらビルジョッキを傾けると、シヨウはお前な……と呟きながらカツツと自分のジョッキを合わせ出す。

「まあ、お前なら乗りこなせるだろ……エースパイロットさん？」

「そのエースって言葉は嫌いなんだけど・・・」

そう言つて来るチャーリーにシヨウがジロつと睨むと、悪りい・・・とチャーリーから頭を下げられたシヨウはムスツとした顔でビールを一口飲んでみると、雰囲気が悪くなった空気を嗅ぎ取ったチャーリーが、えらく料理遅いなリン？と周囲を見渡している、先程騒ぎが有ったテーブル席の方から再びリンの焦った声が聞こえて来る・・・

「おいシヨウ・・・リンが何か絡まれて無いか？」

「見たいだね・・・」

そう尋ねて来るチャーリーにシヨウが溜息交じりに答えると、助けに行かなくて良いのか？とチャーリーから首を傾げられると、向こうは陸戦部隊なんだけど・・・とシヨウは苦笑いを浮かべ出す。

「じゃあジャンケンで決めようぜ？俺が勝ったらリンを助けに行くからよ・・・もし、お

前が負けたら絶対に愛しのリンを助けに行けよシヨウ！」

そんな事を言ってくるチャーリーの賭けにシヨウは内心リンの事を心配に思いながら、分かったって！と答えながらその賭けに乗りながらチャーリーとジャンケンをし始める。

くくく

「ちよつと・・・離しなさいって！」

「金なら別にちやんと払ってやるから少し付き合えよ・・・？」

大分酔っているのか・・・顔を寄せて来る陸戦部隊の隊長に、止めてよ！とリンが必死に腕を伸ばしながら助けを求める様に周囲を見回すが、勘弁してくれ!?!と言った顔で近くに座っていた兵隊達は相手が上官なのかサツと目を逸らしてしまうので、リンは内心憤りながらアンタ達ね・・・！と舌打ちしていると

、お・おい・・・そこ酔っ払い!?と完全にビビっているシヨウの姿にリンは驚いてしまふ。

「えっ、シヨウ!?!」

そう声を上げるリンの小さい言葉を遮った陸戦部隊の男から、ああ?と凄まれたシヨウがまあ落ち着いてと、前に出した両手を慌てて振っている・・・何だテメエは!と立ち上がったリーダー格の軍曹の隙を突いたリンはコイツっ!と持っていたトレイで殴りつけながらシヨウの背中へと逃げ込んで来る・・・

「何だテメエっ・・・飛行隊のモヤシ野郎が、俺達陸戦隊に相手にケンカ売ろうってか!」  
「滅相も無い!?!」

ポキポキと拳を鳴らしながら言う軍曹にシヨウはハハつと苦笑いしながらリンを背中に隠して後ずさっていると、どこに逃げる気だ?と声を上げた二人の仲間が背後を囲みながらそう叫んで来る。



「ちよつとシヨウ!? 助けに來た割りはあんまり狀況が変わつて無いんだけど?」

「自分で言うのもなんだけどさ……僕つて喧嘩弱いんだ?」

そう告白して來るシヨウにリンから、そんな事は重々承知だつて!?!と焦つた声が聞こえて來ると、お喋りはお終いかつ!?!と陸戦部隊の軍曹がそう叫びながら殴りかかつて來るので、こなくそ!と叫んだシヨウはリンを抱きかかえて咄嗟に避けると、ククつと笑みを浮かべたチャーリーから、ご苦労さん?と足を掛けられた軍曹は物凄い勢いで頭から壁に突つ込んで行くのであつた……

くくく

## イエーガーIIバウスネルン登場

「まったく・・・あんまり危険な事をするなよなリン!？」

ハア・・・とシヨウは溜息をつきながら自分の背中に隠したリンを見ると、壁にぶつかったまま伸びている軍曹の方を見ながら、だつて・・・と声を上げたリンが何故か急にフフツと笑みを浮かべるので、シヨウから、えつと・・・という意味?と驚いた声が聞こえて来る。

「・・・ちよつとカツコ悪かったけど、シヨウが助けに来てくれて凄く嬉しかったわ。」

「そりやどうも・・・今度はもつとスマートにやるから期待しててよリン?。」

満面の笑顔を向けながらフフツと微笑んで来るリンにシヨウもそう言いながら二つと笑みを浮かべながらグツと親指を立てると、期待してるわね?と答えるリンの下へ誰かが通報したのか、MP<sup>憲兵</sup>が来たぞつ!と焦った声が聞こえて来るのでシヨウとチャー

リーがマズっ!?!と慌て出すので、こつちへ!とリンがカウンターの中に二人を押し込むと同時にバタバタと武装した数人のMP憲兵が店の中に駆けこんで来る。

「全員大人しくしろ!ここで暴れている兵隊が居ると通報が有ったが?」

トリントン基地からやって来たMPの隊長が周囲を見渡しながらそう声を上げると、彼らです…と突然リンは体を震わせながら伸びている軍曹を指差すと、ちよつと待つてくれ!?!と二人の部下達が慌て出す。

「確かに手を出したのは軍曹だけだよ?そつちも足を引つかけた奴が居ただろうが!」

「ちよつと!自分達だけが捕まるのが面白く無いからってウチのお客さんまで巻き込まないで頂戴…酔っぱらった軍曹が逃げようとした私を捕まえようとして勝手にもつれたんじゃない?」

フツツと強気な顔で微笑むリンは腕を組みながらそう証言すると、そつちの言い分は?と厳しい顔で腕を組みだすMPの隊長に対して、軍曹の部下達もリンの主張もそう間違つてはいない為に、えつと…と困った顔になるのでMPの隊長から…そこの

酔っ払いを連行しろ！と部下達に指示が下される・・・

「我が基地の者がご迷惑をお掛け致しまして本当に申し訳ございませんでした。ミス・ローダンセ・・・」

「良いのよ？また何か有ったら宜しくね隊長さん。今度来たらサービスするね！」

申し訳なような顔で謝るMPの隊長にリンがそう声を掛けながら見送っていると、おっとと!?と言いながら190は有る長身で短くした銀色の頭をした筋肉質な男が敬礼するMPの隊長におう！と答えながらすれ違いにリンの店に駆けこんで来る。

「おいリン!?うちのバカ二人がここで暴れているって聞いたんだが・・・」

「あら、イエーガー中尉いらつしやい・・・その二人ならここよ？」

そう焦った声を上げるトリントン基地守備隊に所属する戦闘機部隊第一小隊長イエーガー||バリスネン中尉にリンはクスッと笑みを浮かべると、もういいわよ。シヨ

ウ、チャーリー?と声を掛けながらカウンターの中を指差すと、お前からそんな所隠れていたのか!?とイエーガーが驚いた顔でキツチンの空いたスペースを除き込んで来るのでシヨウとチャーリーからギャ!?と驚いた声が響き出す・・・

「あれ・・・!?奇遇ですねイエーガーさん?」

「隊長もCASCADへ飲み?」

そう言いながらアハハ・・・と苦笑いを浮かべるシヨウとチャーリーの二人に、お前らな・・・と呆れた声を上げたイエーガーが頭を抱えだすと、取り合えず座つたら?とリンからカウンター席を勧められるとサービスなのかビールジョッキが目の前に置かれる。

「暴れたには確かだけど、二人が私の事を助けた事は事実だからさ?これで目を瞑つてくれないかな・・・イエーガー中尉」

「MPの隊長も見落としるんだ。お前からそう言われちゃ・・・俺からは何も言えねえよ

「？」

「フン！」と鼻を鳴らしたイエーガーがそう答えながらグビツとビールジョッキを煽るつていると、流石はトリントン基地一の伊達男ね？とフツツと微笑んだリンから褒められてしまったイエーガーは、その名で呼ぶな！と照れ臭そうにガクつと項垂れてしま  
うのであった。

## ドッグファイト!

翌朝・・・格納庫へと向かって歩いていくシヨウによつ!と後からバシつとチャーリーが肩を叩いて来ると。はよ・・・と答えたシヨウは眠たそうな顔で欠伸をしだす・・・

「おつす!・・・って相変わらずお前って朝が弱いよな?」

「チャーリーはいつも元気良くて羨ましいよまつたく・・・」

テンションの低いシヨウはチャーリーをジロつと睨みながら言うと、ヤレヤレ?とチャーリーがオーバーアクションに大きく両手を上げだす。

「そんなに気張るなって・・・たかが試作機だろ?お前の腕なら絶対に乗りこなせる。俺様が保証してやっても良いぜ!」

「チャーターに保証されても説得力無いな．．．まあ、多少は気がほぐれたよ？」

シヨウがそうフォローして来るチャーターに二つと笑みを浮かべながら二人並んで格納庫に入ると、おい坊主！とホワイト大尉．．．おやっさんの声がどこからか聞こえて来るのでシヨウは一体どこに居るんだらう？と首を傾げていると、ここだ！と暖気中のコアブースターのコクピットからヒョコつとホワイトが顔を出して来る。

「コイツの操縦系は坊主の好みに合わせているから安心して乗って来いよ！」

「有難うございます、おやっさん！」

グツと親指を立てたサングラスを掛けた強面の整備班茶にシヨウも二つと笑みを浮かべながらお礼を言うと、それじゃあまた後で！と声を上げたシヨウはホワイトの仕上げたこの試作機の運用試験：：FF—X7—Bst、コアブースターのテストパイロットとして乗り込むため、パイロットスーツへと着替えに更衣室へと

駆け込みです。



~~~~~

「良いか坊主！前に乗っていたトリアーエズと思わず慎重にスロットルを開けるよ？」

コアブースターのコクピットの中に納まったシヨウにホワイトが少し不安そうな顔でそう注意して来ると、分かってますって？と答えたシヨウがニツと笑みを浮かべるとホワイトに向かって閉めますよ？と言いながら親指をグツと立てると同時にキャノピーを閉じ出すと同時にホワイト大尉や他の整備兵達に見送られながら滑走路へとタキシングを始めだす……。

「こちらFF-X7BSTコアブースターのシヨウカノウ少尉です。システムオールグリーン、トリントンコントロールに離陸許可を求めます。」

「こちらトリントンコントロール離陸許可します。以後貴機のコールサインはCBPIと任命しますので注意して下さい。」

綺麗な声で指示を出す女性オペレーターにシヨウが、誰だろこの子．．．？と内心妙に気になりながら了解る答えながらメインエンジンの出力を上げていると、ホント良い声してるよな．．．？と聞きなれた声にビックリしたシヨウのキャノピー越しにチャーリーのFF-4トリアーエズが横に並んで来るのが見えて来る．．．

「なっ．．．おい、トリントンコントロール、もう一機来たがこれは何だ？」

「コアブースターの随伴機と聞かせており、コールサインはCBP2です。」

淡々と答えて来る女性オペレーターにシヨウが随伴機．．．？と答えていると、調子はどうだシヨウ？と相変わらず調子の良いチャーリーのククつと笑う声がヘルメットに聞こえて来るので、シヨウは隣を見ながら、何でお前が？と言いながら苦笑いを浮かべだすと、チャーリーから決まってんだろ？と呆れた声が返って来る。

「お前の無茶な機動に付いて行けるのはこの基地でも俺様くらいだからな．．．どんだけ凄いかは知らねえが、その新型でしつかり飛ばよなシヨウ！」

チャーリーがそう言いながらキャノピーの向こうでグツと親指を立てると、まった

く・・・とシヨウも溜息をつきながら同じくチャーリーにサインを送ると、発進準備OK!とシヨウはコントロールタワーに向かって通信を繋ぐと、了解です。と淡々と話しているが綺麗な女性管制官からの返事が返って来る。

「こちらトリントンコントロール、CBP1、CBP2、滑走路前方オールグリーン：発進どうぞぞ！」

女性オペレーターからアプローチの許可が下りたシヨウは一気スロットルを目一杯開け、アフターバーナーを吹かしながらコアブースターを一気に加速させると、ある程度速度が乗った所で操縦桿を引きながら機体をズ上空へとズームアップさせる・・・

「さすがは新型の試作機・・・凄い上昇力だなぁっ!？」

コクピットの中でそう楽しそうな声を上げるシヨウに、おいおいちよつと待てよ!とほぼ同じタイミングで離陸したにも関わらずチャーリー機が少し遅れながら背後にピタツと付いて来る。

「クソ！デカイ癖に何て上昇力するんだよ!？」

「へへん、旧式のトリアーエズじゃ付いて来れないって?」

「なっ！言つたなシヨウ・・・俺がロックオンしたらリンの店で奢りだからなっ!!」

シヨウの言葉にチャリーは頭に来たのかスロットルを最大に上げてトリアーエズのアフターバーナーを吹かしながら急に追撃態勢に入つて来るので、後悔するなよ?と答えたシヨウは内心、この勝負勝つたね!と思いつつながら推力の有利さ活かしコアブスターを更に上昇させるので、ついでに行けるかよ!と匙を投げた後方のチャリー機が追撃を諦めて機体を捻り降下し始める。

「相変わらず見極めが早いなチャリーの奴は!」

こつちの方が足が速いと確認したと思ひ離脱するチャリー機にシヨウはわざとアフターバーナーをカットしエアブレーキと併用でワザと失速状態に持ち込むと、操縦桿を右に倒しながら左脚のラダーペダルの踵部を蹴り上げ機体をヒラッと下方に向け

り込みだすと目の前に無防備なチャーリーのトリアーエズが見えて来る……

「貰ったあ!」

シヨウはHUDに映るチャーリーのトリアーエズをロックオンしようとするがチャーリー機もそれに気づくと、このままじゃ不味い!?と慌ててアフターバーナーを吹かし離脱を図るがそうは問屋が許さない……

「逃がすか……!」

そう声を上げたシヨウはHUDに映るチャーリーのトリアーエズを捉えようとするが、チャーリーもやられてたまるか!と降下した速度を生かしそのままループ・ザ・ループを決めながら背後へと回り込んで来る。

「今度はこっちの番だぜシヨウっ!!」

シヨウのコアブラスターを完全に捉えたチャーリーがロックオンする瞬間にシヨウ

はこなくそっ！と声を上げながらサイドコンソールのスイッチを上げながら機体各部に装着されたスラスタで強引に機体の向きを変え余りあるエンジンパワーで上空へと離脱して行くのでチャージャーからおいおい・・・と呆れた声がコクピットに聞こえて出す・・・

「いくら何でもその機体は詐欺だぞシヨウ？」

「僕もちよつと驚いてる・・・大型機の癖に操縦性も中々良いよコイツ!!」

これ以上の追撃は無理と諦めたのかチャージャーのトリアーエズが横に並びながら通信そうを繋げると、シヨウもこのコアブースターが気に入ったのか機体をロールさせながら答えているとピーツ！通信アラームが聞こえ出す。

「CBP1、CBP2おふざけはそれくらいにしてテストスケジュールに戻りなさいっ
！」

シヨウとチャージャーのコクピットに先程の女性オペレーターのピリつとした声が響

くと二人は慌てながら了解！と答えると指示通り高度を取りつつ作戦区域へと向うのであった。

く
く
く

アメリカアンウオーカー登場

「まったくもう！何なんですかあの二人は!？」

ヘッドセットを肩に降ろしながらそう声を上げた小柄な赤毛の下士官はムスっとしながら隣の上官でマリア曹長を見ると、あら知らないの？と答えながら首を傾げながらフフツと微笑んで来る。

「あの二人はここトリントンで1、2を争うエースパイロットよアメリカ？」

「へえ……ここに配属されてまだ一月ほどなので知りませんでした。確かに良い動きをしていたので納得ですね……」

つい最近ジャブロー基地から異動した来たアメリアⅡアンⅡウォーカー軍曹は管制タワーから離れて行く二機を見ながらそう領くと、基地の上空でいきなり空中戦をかました二機の綺麗な機動に自分自身も見惚れてしまい最後まで止めるのを忘れてしまった程である・・・

「あのバカ野郎共め・・・試作機の試運転だつて言うのにいきなり戦闘機動しやがつて！戻ってきたらとつちめてやるからな!？」

背後から聞こえて来た怒声にアメリアは慌てて振り向くと、いつの間にかここ管制タワーに上がって来た整備班のホワイト大尉が腕を組みながら背後に立っている。

「ホワイト大尉ここはハンガーの中じゃないのであまり大きな声出さないで下さい?」

「あん? ああ・・・悪い悪い・・・しかしバリサムお前もちよつとパイロットの血が騒いんだじゃ無いのか?」

そんな事を言つて来る二人にアメリアは指令も居たんですな!?!と内心驚いていると、

まあそうじゃ無いと言えは嘘になりますが・・・と答えた基地指令のバリサムがククつと苦笑いを浮かべる。

「しかしカノウの奴・・・あんな大型機で捻り込みをかますとは流石疾風仕込みの弟子ですなホワイト大尉？」

シヨウとチャーリーの空戦を見ていたバリサムが隣の整備班長で有るそうホワイトの方を見ながら首を少し傾げると、サングラスをクイツと上げたホワイトからへへと笑みが浮かび出す。

「シヨウもチャーリーも教官時代の弟子だからな・・・あれくらいの機動はどんな機体でも朝飯前だぜ？」

「それは良いんですがウオルフ中佐・・・いや今は大尉ですが、素行の方までまで真似をして欲しく無かったですね」

そう言いながらハア・・・とため息をつくバリサムにホワイトがそうだな？と答えなが

ら談笑していると、あのマリア曹長・・・?とアメリカは首を傾げながら管制官のリーダーを務めているシングルマザーで五歳ほど年上の上官に首を傾げ出す。

「さつきからずっと気になってたんですけど・・・基地指令と整備班長ってどんな関係なんでしょう?」

「ああ・・・、あの二人って元々先輩後輩の間柄みたいでね?基地指令のバリサム大佐の方が後輩なのよ。」

そう答えながらマリアが面白いでしょ?とクスッと笑って来るので、そうなんですかね?と答えアメリカは素行が悪かったんですかね・・・?と内心自分の事と思いきやながら、ハハ・・・と乾いた笑みを浮かべている間に自分の席に設置されているリーダーの液晶画面からピーっとアラーム音が鳴り響き出す。

「盛り上がっている所申し訳無いんですがバリサム指令にホワイト大尉・・・CBP1、2共に作戦予定空域に到達しました。」

「やつとか・・・俺にもヘッドセット貸してくれないか嬢ちゃん？」

そう言いながら横に立つホワイトにアメリカがどうぞ？と予備のヘッドセットを手渡していると、配属早々騒がしくてすまん？と基地指令バリサムから申し訳無さそうな顔で謝られてしまう。

「いえいえとんでも無いですバリサム指令っ!？」

「そうか？一応・・・君のジャブロー時代の経歴を見て、何でこんな田舎基地に来たのか少々不可解な所が有るが・・・もし何か有るのなら私にすぐに相談してくれよ？」

バリサムが優しい気な顔でそう言いながら二つと笑みを浮かべるのでアメリカはこんな事が気軽に相談出来る訳ないですしね？と内心困った顔しながらアハハ・・・と曖昧な笑顔をバリサムに向けるのであった。

くくく

襲撃!?

「そろそろ訓練空域だな・・・準備は良いかチャリー!」

「おうよ! バッチシだぜシヨウ?」

シヨウのコアブースターの左後方に付いたチャリーのトリアーエズがそう答えながら翼を振ると了解と答えたシヨウは先程の女性管制官とレーザー通信を繋ぎだす。

「こちらCBP1だ。トリントンコントロールへ作戦空域へと到達・・・これより予定通りミツシヨンに移行する。」

「こちらトリントンコントロール、CBP1、2へミツシヨン移行を了承します。」

シヨウは綺麗な声を出す女子オペレーター・・・アメリカに、了解!と小さく返事を返すと、すかさずチャリーから機体同士のプライベート無線が入ってくる。

「なあシヨウ・・・今の声って最近ここに配属されたって言う可愛い女の女性オペレーターじゃねえか？」

「確かに聞きなれない声だけど、キビキビしてていい声してるね？」

そう答えるシヨウに絶対に可愛いぜ！と妙に自信が有るのかチャーリーがククッと笑って来るとその彼女から突然通信が入って来る。

「CBP1、2へ・・・この後の指示は整備班長のホワイト大尉に委譲しますので宜しくお願いします。」

「ちえ、おやつさんかよ！・・・つまんねえっ!!」

チャーリーが面白く無さそうにそう呟くとコクピットに俺で悪かったなあっ！とホワイトの怒声がシヨウの方にも鳴り響いて来る。

「チャーリーとは後でゆっくりと話し合うとしてだ・おい坊主つてメエツ！組んだばかりのエンジンのいきなり無茶入れるたあ・・・どういうつもりだあ!!」

「いや、だっておやつさん・チャーリーがいきなり仕掛けて来るから仕方なくてですな
!?!」

明らかに堅気に見言えない風貌とドスの効いた声にシヨウが委縮しながら答えていると、五月蠅え！と怒鳴り声がホワイとから返って来る。

「つべこべ言つてねえでさっさと戻つて来い！さもないと砂漠に埋めちまうぞ!?!」

「分かりましたって・・・って戻るんですかおやつさん!?!」

そんな物騒な事を言つて来るホワイトに慌てたシヨウが首を傾げると隣に付いたチャーリー機とお互い首を傾げ合う・・・

「当たり前だ・・・今日は慣らしだったのにお前らがいきなり空中戦しちまうもんだから

中止だ中止？一回下ろしてエンジンの再チェックを行うぞ！」

ホワイトの声にシヨウとチャーリーはえええ!?!と同時に声を上げる。

「ここまで来たのに基地に戻るんですかおやつさん!?!」

「そうですよ!、せめて一回もう一回模擬戦とか・・・?」

シヨウもチャーリーも不完全燃焼なのかお互い揃って嘆願すると、ホワイトの怒鳴り声が二人のコクピットにダメだ!と入って来る。

「ダメだ!ただでさえ熱核エンジンなんていうノウハウの無いのを積んでんだ・・・これ以上の負荷は掛けたくないのを分かって!?!」

「・・・分かりましたって、おやつさんもこう言ってるし取り合えず基地に戻るよ?」

ホワイトからの通信にそう答えたシヨウはステイックと右のラダーペダルを踏み込

みながら基地の方へと機首を向けると、わーったって・・・と少し納得のいかない顔でチャーリーのトリアーエズが横に並びながらキャノピー越しに親指を立てて来ると、CB1、2聞こえますか!?!と管制官のアメリカから焦った声が聞こえて来る・・・

「こちらトリントンコントロール!レーダーコンタクト・・・敵影確認しました。CBP1、2ブレイク、ブレイクっ!!」

アメリカの焦った叫び声と同時にショウはロックオン警報が鳴り響いたコクピットの中で咄嗟に操縦桿を左下に倒し左脚のラダーペダルを蹴り込むと正面から放たれた熱赤外線式のミサイルが機体をスレスレに通り返けて行くと至近距離で爆散する

「クツ・・・敵機か!?!一体どうなってるんだよ!」

「カノウ少尉上です!ウィルソン少尉がドップの後ろに付いてますよ!?!」

そうフォローして来るアメリカにチッ!と舌打ちしたショウはキャノピーの中から上を見ると性能差も有る中で必死にドップに食らっているチャーリー機を見つけると

待つてろチャーリー!と声を上げながらコアブースターを上昇させる。

「所でさつきから気になってたけど君の名前は・・・?」

「私はアメリカンアンウオーカー軍曹と言います。つて・・・そんな事は良いから集中しなさい!」

そう叱つて来る下士官にシヨウは了解!と慌てて返事を返しているとドツプを捉えたのかチャーリーからFOX2、FOX2!と緊張した声がシヨウのコックピットに入つて来る。

「ちよつと待つてウィルソン中尉・・・後ろにもう一機居ますよ!」

雲に隠れていた敵機が突然レーダーに映ると同時にアメリカがそう声を上げると、おい冗談だろ!?!とチャーリーから焦った声が聞こえて来たシヨウはこなくそ!と声を上げながら割り込もうとする。

~~~~~

「CBP1、2へ！回避行動に専念しつつ離脱を・・・」

アメリカはショウとチャーリーにそう指示を出しつつ振り返ると、何か有ったのか!?と異変を感じて近づいて来た指令のバリサムとホワイト大尉が驚いた顔を見せて来る。

「現在、訓練空域に敵機を確認・・・現在RBP1と2が迎撃中！指令緊急出撃スケランブルの許可をお願いします！」

「何だ?!許可する。すぐにアラーム待機の連中を出すんだ!!」

そう声を上げるバリサムにアメリカの隣に座っていたマリア曹長から了解！と声がかかると同時に基地内に警報が鳴り響き出す。

『タワーよりアラート要員へ、訓練中の試作機体がジオン機からの奇襲を受けている：直ちに迎撃に出よ！繰り返す・・・』

マリアからの声にシヨウとチャーリーが所属する飛行中隊長兼第一小隊長で在るイーガーⅡバウスネル中尉もパイロットスーツに着替えていると、何やってんだイーガー？とたまたま通り掛かった同期でも有り第二小隊長のジャックⅡアルヴィン中尉が驚いた顔で首を傾げ出す。

「俺の部下がピンチなんだ．．．ジオンの奴等なんか絶対にやらせるかよー！」

「ホントお前って顔に似合わず熱いよな．．．？」

そう軽口を叩きながら二つと笑みを浮かべるジャックにイエーガーが五月蠅えな．．．と答えると、待つてろよシヨウにチャーリー．．．と内心不安を感じつつ呆れた顔をするジャックと共に格納庫へと向かうのであった。

〃〃〃

## 馬鹿な男達

「第二小隊一番機のジャックからトリントンコントロールへいつでも出れるぞマリア？」

そう通信を繋げた第二小隊長ジャックⅡアルヴィン中尉が搭乗するフライアローが僚機共に滑走路の離陸位置でエンジン出力上げ始めると管制官のリーダーで有るマリアの心配そうな顔がモニターに

映り出す。

「何だよそんな顔して・・・ちゃんとシヨウ達を基地まで帰還させてやるから心配すんなよっ。」

「何調子に乗ってるの・・・アンタも無事に帰って来ないと承知しないんだからね！」

そう叱りつけて来るマリアにわーっつてるって!?!とジャックから慌てて返事が返って

来るのでマリアは宜しい!と言いながらレーダースクリーンを確認すると再び自分のヘッドセットを掴みだす。

「進路はクリア・・・離陸を許可します!」

「よっしゃあ行くぜ!!」

マリアからの声にそう答えたジャックが僚機と共にアフターバーナーを吹かしながら離陸すると同時にハイレートクライムを行い一気に上空へとズームアップして行くのでその姿を見送ったマリアは全然人の話を聞いて無いわね・・・あのバカ!と呆れた声を上げてしまう・・・

「いやいや!?あれって低速からじゃ結構難易度の高いハイレートクライムですよね・・・生で見たの初めてです!」

「あら詳しいのねアメリカって?ここの連中って暇さえあれば訓練中に曲芸飛行するよいうなバカばかりだから腕はそこそこ良いんじゃないかしらね。」

そうしながらフツと微笑むマリアに、良いんですかそれ・・・?とアメリカが苦笑いを浮かべていると、マリア曹長!と基地指令のバリサムと整備班長ホワイトから焦った声が聞こえて来るのでマリアはハツとした顔でなんでしょう!と慌てて背後を振り向く。

「迎撃機の訓練空域到達までどれだけ掛かりそうだ?」

「たった今迎撃が上がりましたので・・・恐らく最短で約五分は掛かるかと思います。」

この基地からショウ達の居る訓練空域まで距離から計算したマリアからの報告にバリサムが間に合えば良いが・・・と難しそうな顔で顎を擦っていると、間に合って・・・と願う様に両手を握るマリアのヘッドセットにおい聞こえるかマリア!と突然馴染みの声が聞こえると同時に隣のアメリカからアレを見て下さい!と指を差すと、いつの間にか滑走路に一機のFF-4トリアーエズが待機しているのが見えて来る・・・

「こちら第一小隊長イーガー||バウスネルン中尉だ、トリントンコントロールへ離陸

許可を求める。」

「バカ！何やってんのよイエーガー!? アンタはアラート待機じゃないでしょうが!!」

イエーガー機のモニターにそう怒鳴り声を上げて来るマリアの引き攣った顔が映り出すと五月蠅え!!とイエーガーも怒鳴り返しながらエンジン出力上げ始めるのである。もう！とその様子を確認したマリアは頭を抱えだす。

「一応中隊長代理だから知ってると思うけどこれは完全な軍機違反よ・・・バリサム指令も見てるんだね!」

「そんな事は重々承知だ!それにだ・・・俺の部下がピンチだっていうのにこれ以上ジョーン奴等に好き勝手やらせてたまるかよ!」

普段は冷静沈着が売らないイエーガーで有るが先日も新人パイロットを失くした事も有り昔馴染のマリアはこうなったらダメね・・・と内心諦めながらハア・・・と溜息をつきだす。



「・・・バウスネルン中尉がああ言ってますが如何しますか指令？」

「やれやれ・・・帰ったらイエーガーの奴に始末書を出せと言って置け！」

後ろをチラツツと見ながら首を傾げるマリアにバリサムがガシガシと頭を掻きながら出撃許可を出すのでマリアは流石指令太っ腹！と声を上げながらニコつと微笑むと、ボンと自分お腹をポンと叩くバリサムから苦笑いされてしまう。

「聞こえてたわねイエーガー？バリサム指令からも出撃許可が出たわ！」

「こちらイエーガー離陸許可を感謝する・・・戻ったらリンの店で一杯奢ってやるよ？」

イエーガーからの提案に久々に良いわね？とマリアは嬉しそうにフツツと微笑むと、それじゃあ息子は預けとくからね？と言いながら通信を切るとイエーガーのトリアーエズがアフターバーナーを吹かしながら滑走路を加速して行く・・・

「イエーガー、テイクオフ！」

そう声を上げたイエーガーのFF-4トリアーエズがズームアップしながら上空へ消えて行くと、頼むわよ・・・と呟いたマリアはこの後の定期便は近隣の基地に回して！と隣のアメリカに指示を出す、何をする気だマリア曹長？とバリサムから不思議そうな顔で尋ねられる。

「ひよつとすると損傷機が出る可能性も有りますので滑走路をなるべく空けて置きたいので許可を頂けませんか？」

「そうか・・・そういう事ならウオーカー軍曹よりも俺からの方が話が通りやすいから近隣の基地には連絡して置こう」

そう言いながら戻って行くバリサムにマリアは少し驚きながらも流石指令♪と小さく声を上げているとアメリカから着陸予定の輸送機への誘導が終わりました。と報告が上がって来る。

「よし……ここからが本場よアメリカ！」

「二機のフォローは私がするのでマリア曹長は迎撃機の誘導をお願いしますね？」

そう声を上げるマリアにアメリカは任せて下さい！と気合い入れるとヘッドセットを掴みながらシヨウウ達に通信を繋ぎだす。

くくく

どんでん返し!?

「トリントンコントロールから、CBP1、2へ状況はどうですか？」

「こちらCB2、おかげ様で何とか生きてるぜっ！」

相変わらず淡々とした声で通信を繋いで来たアメリカにチャーリーもへへつと笑いながらそう答えはいるが内心背後にへばりついて来るドップに対してしつこいんだよ！悪態を吐きながら自機を右へ左へと激しく機体をロールさせながら回避行動を取っているとアメリカからホツとした感じの声で良かったです・・・と返事が返って来るのでチャーリーはドッグファイト中ながらもドキつとしてしまう・・・

「何・・・俺の事を心配してくれた訳？」

「当たり前じゃないですか！CBP1、2を助ける為に増援が上がってるんです・・・絶

対に撃墜されちゃダメですよ!」

そう注意しながらジロっと睨んで来るアメリカの顔でチラつきながらモニターに表示されるとコイツマジで可愛いな・・・と思いつつながらチャーリーはよし!と気合い入れると、後何分で粘れば良い?とモニターの向こうのアメリカに尋ねだす。

「増援到着まで約五分・・・それまでに私の指示で敵機の撃墜をするか自力で逃げ切るかの二択となりますがどっちが良いですか?」

「おいおいマジかよ・・・この可愛い管制官さんがドップ二機相手に試作機とポンコツのトリアーエズでどうにかしろって言ってるけどどうするよシヨウ?」

とんでもない二択を迫るアメリカにチャーリーが嘆くように指示を求めると、チャーリー機を追尾しているドップを牽制する様に背後を取りながらシヨウはそうだな・・・と苦しそうな顔でモニターに映るアメリカをチラつと見る。

「勝算がどれくらいあるのかだけ聞いて良い?」

「100・・・と言いたい所ですが貴方達のデータが無いので50%という所でしょうか・・・」

そう言いながらムウ・・・？と困った顔を見せるアメリカにシヨウはそう言う時は百パーつて言えよな・・・と内心苦笑いを浮かべるとチャーリー決めたぞ！と親友でも有る僚機に向かってシヨウが声を上げだす・・・

「彼女に命を預ける良いなチャーリー？」

「了解！頼むぜアメリカ!!」

そう二つと笑みを浮かべて来る二人にアメリカは満面の笑みを浮かべると、任せて下さい！と気合い入れながら自分のヘッドセットを掴みだすとCBP1、2！と矢継ぎ早に指示を出し始める。

「取り合えずCBP2の背後にくっ付いているハ工ドップをどうかしたのでCBP1はそ

の試作機の推力を生かして強引に割り込んで、その隙にCBP2は一旦離脱して先程CBP1が追っ払ったもう一機のドップの位置を探して下さい・・・コッチのレーダーには映らないので雲の中で警戒している筈です!」

「おいおい簡単に言うなって・・・けどそう無茶なのは大好物なんだよね?」

アメリカの指示にショウはニツと笑みを浮かべながらガンツ!とスロットルを開けると操縦桿を左に倒しながら同時に左脚のライダーペダルを踏み込むと前方のドップを追い越してバレルロールをかますとドップのパイロットも泡喰ったのかバランスを崩しだす・・・

「今だチャーリー!」

「おうよ!!」

ショウの声にタイミング良く答えたチャーリーがトリアーエズを上空へと離脱させるとピーつと今度ショウのコアブースターのコクピットにロックオンアラームが鳴り

響き出す。

「この機体速いけど旋回性能はそこまで高く無いって知らないだろうっ!」

思ったよりも鈍いロールにショウは焦った声を出しながらアメリカに向かって抗議の声を上げるとアメリカから頑張って下さい?と相変わらず淡々した返事が返って来るので、こなくそっ!?!と声を上げたショウはドップから放たれたミサイルをフレアを飛ばしながらとコアブースターの各所に装備されたスラスターで強引に機体の向きを変えながら回避する・・・

「どうだ見たかこの野郎!!」

そう声を上げたショウはコアブースターの姿勢を立て直しながら恐らくギョツとしているパイロットが操縦しているドップの背後に付くと、FCSの項目から装備されている筈の空対空ミサイルを選択するがネガティブとディスプレイに表示される。

「ちよ、ちよつと・・・まさかコイツ非武装って訳じゃっ!」



そう焦ったつ声を上げるシヨウにアメリアから悪い知らせです・・・と通信が入ると申し訳なさそうな顔で頭を掻くホワイトの顔がモニターに映り出す・・・

「お前さんには言つて無かったが・・・慣らしだったからその機体にはミサイルはおろか30ミリの弾丸さえも込めてねえぞ坊主？」

「ええ!?!それじゃあコイツって丸腰じゃないですか!」

シヨウは焦った声を上げながらどうしたら・・・と内心慌てていると、ホワイトからビームキャノンだけは使える筈だ!と叫ぶホワイトに了解・・・と答えながらFCSの項目から後部のビームキャノンを選択するとジリジリと必中距離までドップを追い込みだす・・・

## シヨウの底力！

「ここだ・・・貫ったぞトップの野郎めっ!!」

コアブースターのコクピットの中で叫んだシヨウはHUDに映るジオン地上軍の戦闘機であるトップをロックオンし操縦桿に有るトリガーを絞ると、コアブースターの後部ユニット装備された戦艦クラスの威力を持つとマニュアルにも書かれたいたビームキャノン砲から放たれたビームがトップの向かう方向と明後日の方に飛んで行くのがシヨウのディスプレイにも綺麗に映り出さすと、ちよつと何やつてるんですか!?!とアメリカから抗議の声が通信で入って来る。

「五月蠅いな！ビームキャノンの射線軸がズレてんだよコッチは!?!」

「ちよつ!?!そんな機体でまともに戦える訳有りません！CBP1はすぐに離脱を・・・」

シヨウはそう言い掛けるアメリカにチャーリーを見捨てろって言うのか!と怒声を

上げると、試作機を敵に渡すつもりですか?とアメリカが淡々とした声を尋ねて来るので、ショウはそんな訳無いだろ・・・と答えながらコクピットのサイドコンソールに有るキーボードを叩きながら先程の感触を頼りに射線軸調整を行っている、ショウ危ない!と高度を上げたチャャーリーから焦った声が聞こえると同時に急降下して来たもう一機のドツプが30ミリバルカン砲をばら撒いて来る。

「邪魔するなつてコイツ!」

高度を下げるしか逃げ場の無いショウは操縦桿を左上に倒しながら左脚のラダーペダルも蹴るとドツプからの攻撃を避ける為にコアブースターを左へとダイブさせると先程まで背後を取っていたドツプがシメシメ・・・と言わんばかりに高度を取って行くので、そつちに一機行くぞチャャーリー!と今度はショウが焦った声を上げだす・・・

「分かつてぜショウ・・・舐めんなよコイツ!!」

そう答えながらチャャーリーのトリアーエズがドツプに対抗するかの様に急降下して来るので、あのバカ!?!と声を上げたショウはコアブースターのアフターバーナーを吹か

しながら急上昇を掛けると急にコクピットの中へピーっとなるアラーム音とメインモニターに警告文が表示され出す……

「メインエンジンの温度が異常……このままだとオーバーヒートだつて!」

そう声を上げたショウは慌てて機体のテレメトリーを確認すると右エンジンの油圧が急激に下がっているのを確認すると、基地の方でも状況を把握しているのか整備班長のホワイトから言わんこつちやねえ!とショウのヘルメットに怒声が聞こえて来る。

「このまま飛んでたら機体ごと吹っ飛びかねんぞ!一旦離脱しろ坊主!」

「嫌ですよ?このままチャリーを見捨てる訳には行きませんかからね?」

ホワイトからの焦った声を無視したショウがニツト笑みを浮かべながらチャリー機の方へと向かうドップへ更に距離を詰めると、今度こそ……と呟いたショウはHUD内に捉えたドップに向かってビームキャノンの照準を合わせると食らえ!と声を上げながらトリガーを引くとコアブースターから放たれたビームはドップの右翼を掠る

だけに終わってしまふ・・・

「まだ甘いつ・・・!?」

そう焦った声を上げるショウにイヤッホウツ!!と叫んだチャーリーのFF―4トリアーエズが降下しながらふらついて速度を落とているドップ向かって20ミリバルカンを砲を正面当てながら撃墜すると、今度はフォックス2!!と言いながらショウの背後に張り付こうとしていたドップに向かって残った赤外線

ミサイルを全弾放つが・・・ドップの方も分が悪いと思ったのかフレアを焚きながら離脱した行く。

「チツ逃げられたか・・・!」

「見たいだね・・・けど良くこんな状況でしのぎ切ったよ?」

そう言いながら二つと笑みを浮かべるショウに確かに♪と隣に並んだトリアーエズのキャノピー越しチャーリーがグツと親指立ててくると同時に警告アラームが鳴ると、

ようやく到着ですね？苦笑いを浮かべたアメリカから通信が入って来る。

「こちら第2小隊長のジャックだ・・・折角来てやったのにもう終わったのかよシヨウにチャーリー!!」

「すみませんジャック隊長？美味しい所は俺が頂きましたよ!」

少し残念そうな声を上げるジャックにチャーリーがニヤつとしながらそう答えていると、あまり調子に乗るなよチャーリー!と前方から勢い良く飛んで来たイエーガーのトリアーエズがチャーリー機をスレスレにすれ違いながら旋回すると、危ないじゃないですかイエーガー隊長!とチャーリーから抗議する声が上がります。

「普段無茶ばつかやってるお前が言うな・・・しかし慌てて飛んで来たのに二人共無事みたいだな?」

「まあ何とかです・・・コイツの性能のお陰で何とか?!」

イエーガーにそう答えていたショウはポツ!と後方から聞こえる音に驚くと同時にコアブースターのコントロールを失いだすと何だ一体!と慌てた声を上げるショウに、落ち着けショウ!と声を上げたイエーガーのトリアーエズが追隨して来る・・・

「どうやら一番エンジンが音を上げたみたいだな・・・1番をカットして2番エンジンの出力を上げて機体を立て直すんだショウ!」

「了解ですイエーガーさん・・・こなくそつ!!」

ショウはイエーガーの指示通り片肺ながら左足のラダーペダルを踏み込み地表スレスレで機体を立てながら、どうにか生きてるな・・・と呆然とした顔で呟いていると、流石だなショウ?とニツと笑みを浮かべたイエーガーのトリアーエズがローリングしながら左に並んで来る。

「ハハハ・・・そうでしょ?」

「よし、今度はそのまま着陸だ。くれぐれも気を抜くなよショウ!」

そう言いながら離脱して行くイエーガーにシヨウはマジで!?!と声を上げるといつの間にかトリントン基地が目の前に見えてきている・・・



## 生還

「トリントンコントロールへ聞こえるか？こちらは基地守備隊戦闘機中隊第一小隊長のイーガーIIバウスネルン中尉だ。試作機のエンジンが不調により緊急着陸を行うので対応の方を頼む！」

敵機二機の内一機を撃墜し残りのドップを追い払ったとシヨウ達から報告が有って管制室内につい先程まで歓声が上がっている中・・・緊張気味の声でイーガーからそう報告が上がって来るのでアメリカは再び混乱が訪れる室内にハア・・・と溜息をつきだす。

「アプローチ前だつて言うのにとんだトラブルメーカーですね・・・」

「ちよつとアメリカ！ぼやいて無いでシヨウのCBP1の誘導を頼むわよ!」

そう注意するマリアが後ろを振り返ると司令官のバリサムに向かって救助隊の要請を出しますね！と声を上げるのでアメリカはその姿を横目にヘッドセットを掴みながらシヨウのコアブースターへと通信を繋ぎます。

「こちらトリントンコントロール、アメリカです。CBP1こちらの調子はどうですか？」

「順調……って言いたい所だけど、片肺の上に2番の方も油圧が上がらなくてこれ以上高度が上がらないんだよね……」

そう言いながら苦笑いを浮かべるシヨウの顔が映るモニターにアメリカは内心最悪じゃないですか……と思いつつと舌打ちすると、そのままじゃ着陸は無理では？と遠回しにベイルアウトする事を提案するが、絶対にイヤだね！とムツとした顔でシヨウから返事が返って来る。

「……まで来たんだ……コイツと一緒に絶対帰投する！」

「分かりましたよ・・・そこまで言うんなら付き合っただけですが、途中で落っこちても恨みっこ無しですよカノウ少尉？」

平凡な顔の割りに気合いの入った頑固そうな事を言ってくるシヨウにアメリカもどこか気に入ったのか二つと笑みを浮かべながらフラフラと降りて来るコアブースターに向かつて指示を飛ばし始めるとシヨウから了解！と返事が返ってくる。

「CBP-1はそのまま第一滑走路へ向かって・・・ちよつと！もつと機首を上げないと墜落しますよ!？」

「分かっているって!?!踏ん張れってコイツ・・・こなくそお!!」

アメリカからの焦った声にシヨウはフラップを全開し揚力を得ながら操縦桿を引いて強引に機首を上げながらタッチダウンに成功すると、今度は角度を付け過ぎた為にメインエンジンを尻餅を着いた為に大きく火花を上げながら滑走路の中で減速しだすとその様子を見ていたタワー内からワァーっ♪と歓声が上がります中・・・ホワイトが一人ジロつと睨みを上げだす・・・

「あの野郎やりやがったなっ!？」

シヨウのコアブースターの着陸にホワイトがそう怒声を上げる中、まあまあ!?!と宥めだす MARIA がチラツツと見て来るので AMERIA はコホンと咳払いしながらシヨウのコアブースターへ通信を繋ぎだす。

「こちらトリントンコントロールの AMERIA です。CBPI へナイスタッチダウンでした。」

「有難う……けど僕達が生き残れたのは君のお陰だよウォーカー軍曹?！」

そう言いながら二つと笑みを浮かべて来るシヨウに照れ顔を少し赤くした AMERIA もどうも……と照れ臭そうな顔で答えていると、俺にもご褒美の言葉をくれよ?と声を上げたチャリーのトリアーエズが管制タワーの目の前をスレスレを飛んで行くので驚いた AMERIA はちよつとウィルソン少尉!と抗議の声を上げだすと MARIA からも

あのバカ達つたら・・・と呆れた声が聞こえて来る。

「ちよつと・・・シヨウも無事に降りたんだから、イエーガーとチャーリーにジャックの第二小隊はいつまでも上空待機して無いで降りて来たら？」

「別に俺達はシヨウの心配なんか・・・なあジャック？」

マリアにそう答えながらイエーガーが同意を求めると隊は違えど心配していたらしいジャックからそうだっ！焦った声が聞こえて来るので何を言っただか・・・？とマリアがクスクスと笑い出す。

「ホントです。けど・・・仲間想いで凄く素敵な所です。この基地と皆さんは・・・」

「そう言っつて貰えると嬉しいわアメリカ？なんならシフト上がりに私が良く行きつけのパブに行ってみない？」

ニコつと微笑んだマリアからの提案に別に良いですけど・・・？とアメリカも首を傾

げながら了承するとマリアがヘッドセットを掴みながら今の聞いたわね野郎共！と声を上げると同時に俺も行くぜ！とノリノリの声を上げるチャーリーを始めにこの通信を聞いている全員から次々と参加表明が聞こえて来るのでマリアはちよつとマリア曹長!?!と抗議の声を上げだす。

「あの・・・二人じゃ無いんですか？」

「女だけと絡まれやすいし・・・飲むんなら人数が多い方が楽しいわよ？」

そう言いながら二つと笑みを浮かべて来るマリアにそれもそうですね・・・と内心納得したアメリカは淡々とした顔で分かりました。と答えながらも勤務が終わるのを待ち遠しく思うのであった。

## 対面

朝から始まった新型機の試作機での最悪なテスト飛行に引き続き．．．バリサムへの報告と整備班長で有るホワイトのお説教で結局丸一日潰れてしまったシヨウは司令部の有るビルの前に止めたジープのハンドル手を乗せながらハア．．．と溜息をついていと大丈夫かシヨウ？と助手席に座るチャーリーから苦笑いを浮かべながら首を傾げて来る。

「大丈夫だって．．．それにしてもマリアの奴遅いな？五時に管制タワーの下に迎えに来ていつて言った癖に！」

「化粧でも直してんだろ．．．どうせ今更誰も見ないつて言うのによ？」

そう言いながらククつと笑いだすチャーリーにシヨウは、おい．．．とバックミラーに映る明るく茶色の長い髪を左肩まで流した女性がムスっとした顔のまま近づいて来

ると・・・それってどう言う事かしらチャーリー・・・?と助手席から覗き込んで来たマリアが全く笑って無い目でフツツと微笑んで来るとチャーリーからうわっ!?!と驚いた声が上がります・・・

「ちよ、ビックリさせるなよなマリアっ!?!」

「人の悪口を言って置きながら良くそんな事言えるわねチャーリー!」

チャーリーにそう抗議の声を上げながらマリアがジープの後部座席に乗り込むとシヨウは振り返りながら久しぶりだね?と声を掛けるとマリアも二つと笑みを浮かべる。

「ホントね。息子の事も有るし・・・こうして二人とちゃんと話すのいつ振りかしらね?」

そう言いながらマリアが思案顔になると、子供は元気か・・・?と少し気まずそうにチャーリーから尋ねられたマリアは苦笑いを浮かべながらシヨウとチャーリーの肩をポンと叩き出す・・・



「ウチの旦那の事はいい加減忘れなつて……別にアンタ達の所為じゃ無いんだからさ？」

「そうは言つても、ライナスは僕らの同期で友人だったしさ……そう簡単には忘れられないつて？」

そう声を上げるシヨウにチャーリーもその通りだぜ？と言う様にコクつと頷くとマリアがハア……と溜息をつきだす。

「ホントアンタ達つてバカだね……そう思つてくれるのは嬉しいけど仇討とか言つて無茶するのは絶対に止めてよね二人とも！」

そう呆れた声を出すマリアに振り返つたシヨウとチャーリーも分かつてる……と答えているとマリアの背後から、すみません遅れましたっ!?!と赤髪の女性下士官が駆け寄つて来るのでマリアが大丈夫アメリカ!?!と心配そうに声を掛けるのでアメリカと呼ばれた下士官は息を切らしながらアハハ……と苦笑いを浮かべ出す。

「いや・・・ミリイとの引き継ぎにちよつと手間取つてしまつて?」

「相変わらずねミリイは・・・ホントのんびり屋なんだから!」

アメリカからの説明にその声を上げたマリアがまつたくもう・・・と呆れた顔で腰に手を当て出すと、ひよつとして彼らが・・・?と尋ねて来るアメリカにシヨウとチャーリーは顔を見合せながら二つ笑みを浮かべるとアメリカへサツと自分達の右手を差し出す。

「僕はCBP1のシヨウ||カノウ少尉です。」

「俺はCBP2のチャーリー||フォン||ウィルソン少尉だ。」

少しカッコつけながら自己紹介をするシヨウとチャーリーにアメリカも最初は少し驚いたが、すぐにクスつと微笑むと宜しくお願いします。と答えながら二人の手を握り返すと自分も自己紹介します。

「先程は失礼致しました．．．私は先日ジャブロー基地より編入して来たアメリカン  
IIウオーカー軍曹と言います。今後とも宜しくお願い致しますね少尉？」

そう言いながら敬礼して来るアメリカにこの二人にそんな固い挨拶良いって？と  
ニツと笑みを浮かべたマリアがその声を上げながら一緒にジープの後部座席を引つ  
張って来るのでアメリカからしかし．．．と困った顔で首を傾げられてしまう．．．

「マリアの言う通り気にしないでよ。基地の皆もシヨウとチャーリーって呼ばれるから  
気軽にそう呼んでいいからさウオーカー軍曹？」

アメリカとアリアにそう答えたシヨウが助手席の相棒に向かつて、なつチャーリー？  
と首を傾げるとチャーリーからもおうよ！と返事が返つて来るのでアメリカも観念し  
たのか分かりました．．．と言いながら恥ずかしそうな顔を見せて来る。

「それでは改めて・・・宜しくです。シヨウにチャーリー♪」

そう言いながらフツツと微笑んで来る綺麗な赤髪を揺らすアメリカにたシヨウとチャーリーはへへつと笑みを浮かべていると、何ニヤケてんのよ!とニヤニヤするマリアから席を蹴られると、それじゃ行くか!と声を上げるチャーリーの声で了解!と叫んだシヨウはジープのエンジン掛けるとキュキュつとタイヤを慣らしながらC A S C A D Eへと向かうのであった・・・

「基地の外とはいえ、ちよつと飛ばし過ぎでは!？」

「大丈夫よアメリカつてば心配症ね・・・この辺りは町外れだから通報が無い限りM Pも滅多に来ないわよ?」

そう注意するアメリカに沈着冷静で真面目な上官だと思っていたマリアからそんな言葉が聞こえたアメリカはええ!?!と驚いた声を上げだすと助手席のチャーリーがそろそろ着くぜ?と振り向いて来るのでアメリカは左右を見渡しだす・・・

「明らかに町外れの歓楽街って感じですね・・・基地の近くにこんな場所があると驚きです!？」

「もうちよつと行ったら男共が好きそうな所も有るわよ・・・ねえチャリー?」

そう驚くアメリカにマリアがニヤニヤしながら話を振ると、何で俺に聞くんだよマリア!?!とチャリーから抗議の声が上がり出すとショウもククつと笑いながらお目当ての店が見えて来ると着いたよ!と言いながらジープをC A S C A D Eの前で停車させます。

## リンとマリア

「ここが皆さんの馴染みのお店ですか？」

ジープから降りたアメリカがカスケードと描かれた古ぼけた看板を見ながらそう声を上げると二つと笑みを浮かべたシヨウからそうだよ？と返事が返って来る。

「ここはCASSCADEカスケードって言うパブで僕とチャーリーの行きつけの店なんだ。」

「それで、シヨウの大好きなリンが居る店でも有るよな？」

同じくジープから降りたチャーリーがニヤニヤしながら屋根越しにシヨウに向かって首を傾げると、五月蠅いな！とシヨウは顔を真っ赤にしながらチャーリーに向かって叫び返すと、まだ付き合っただけのね・・・と呆れた顔をするマリアと共にアメリ

アも店の中に入って行くと、カランコロンと鳴るカウベルの音に威勢の良い女性の声がいらつしやーい！と店の奥から聞こえて来るとすぐに黒髪をハーフアップにした綺麗な女性がシヨウ達を出迎えてくれる。

「お待ちせシヨウとチャーリーに……ってやだマリアじゃない！どうしたのよ急に！」

慌てた顔でその声を上げて来るリンにマリアが久しぶりねリン？とフフツと微笑んで来る。

「元氣なのマリア？最近めつきり顔を見せなくなったから心配してたんだからね！」

「ゴメンゴメン……息子の事も有るし中々来れなくてね。今日は最近同じチームになった子がここに来たいって言うから紹介ついでに羽目を外しに来たって訳♪」

二つと笑みを浮かべながらそう答えるマリアに、息子さんはどうしたの?と少し呆れた顔のリンから尋ねられるとマリアは同期の子に預けて来たわよ?満面の笑顔を浮かべる。

「さーつてシヨウとチャーリーの奢りだし久しぶりに飲むわよ!」

「あらそうなの?だからと言って帰れなくなるまで飲んだらダメだからねマリア!」

そう言いながらビシッと指をさして注意して来るリンに分かってるって!?!とマリアがタジタジとなった顔になると同時にシヨウ達から聞いてねえ!?!とツツコミが入り出すので、マリアは今言ったじゃない?と不思議そうな顔で首を傾げる。

「とまあ支払いの事は二人に任せるとして。今日はこの子を紹介したくてここに連れて来たのよ・・・ほら出てらっしやいアメリカ?」

マリアがそう言いながら背後に立っていたアメリカを前へと促すとリンからうわっ!?!と驚いた顔をされるのでアメリカは何か顔に付いてるんでしょか・・・?と思いが



ら自分の顔をペタペタと触り出す。それは間違いらしくリンがすっごい綺麗な子ね……?  
?とフフツツと微笑んで来る。

「私はリン、リン＝ローダンセよ。名前を聞いても良いかしら?」

そう言いながら満面の笑顔で自分の名前を覚えてくれるリンにアメリカもあつ!つ  
と思いつつながら慌てた顔すみません自己紹介が遅れてしまつて!?!と声を上げながらビ  
シツと姿勢を正しながら敬礼しだす。

「先日、本社《ジャブロー》よりここトリントン基地へ基地オペレーターとして配属され  
ました。アメリカ＝アン＝ウオーカー軍曹です!今後ともよろしくお願いいたします  
ローダンセさん。」

「そんなに緊張しなくて良いって?出来れば私の事は気軽にリンって呼んでねアメリカ  
ちゃん?」

リンは初対面のアメリカに緊張させない為にそう言いながらフレンドリーに接しながら首を少し傾げるとアメリカの方も余り人見知りしないタイプらしく、分かりましたリンさん♪とニコつと微笑んで来る。

「マリアの後輩にしては素直で良い子ね。こんな悪い先輩に感化されちゃダメだからねアメリカちゃん？」

「ちよつとどう意味よりン!? アンタこそアメリカに手を出しちやダメだからね？」

そう言いながらアメリカの肩に手を回したマリアがニヤニヤしだすとアメリカとりンからえっ!?!と驚いた声が上がりに出す中シヨウとチャーリーからもへっ!?!と素つとん狂な声が聞こえて来る。

「ちよつとどう意味よマリア!?!」

「どう意味も何もアンタって気に入った子が出来ると男でも女でもすぐに名前呼び出すじゃん? そこに居るシヨウに然りアメリカに然り・・・??」

少し怒声混じりのリンの声にマリアがシヨウとアメリアを交互に見ながらニツと笑みを浮かべていると、

リンさんってそう《・・・》なんですか!?!と驚いたアメリアはそう声を上げながら少し身体をのけ反り出すとリン方違うって!!?!と焦った叫び声が店内に響き出す・・・

「何て事を言うのよマリア!?!私はノンケでも無いしちゃんと好きな人が居るんだからね!!」

「ふん．．．それで好きな人って誰なの?」

マリアからの一声に今まで同じく騒々しかったトリントン基地の隊員達が一瞬静かになる中、それは・・・とリンはつい黒髪の少尉とバチッと目が合ってしまうとすぐにハツとなり周囲を見渡すと周囲からの目線に顔がボツと赤くなってしまう。

「ちよつと何見てんのよ!!」

そう叫んだリンがキツと睨みつける様に店内を見渡すので、ヤベつと隊員達も慌てて会話に戻る中、あくあもうちよつとだったのにと楽しそうなマリアの声が聞こえて来ると、いい加減しなさいよねっ!! 堪忍袋の緒が切れたのかマリアを　りつけるリンの聲が再び店内に響き渡るので有った・・・

## 楽しいひと時

「それで何飲むの・・・？」

不機嫌そうな顔でリンからカウンター席を案内されたシヨウ達は苦笑いを浮かべながら有り難うと言い席に座ろうとすると、アンタは向こう！とリンがマリアを一番端の席を指差す。

「ええっ？久しぶりに会った親友だっていうのにリンてばひどいじゃない！」

「誰が親友よまったく・・・これ以上変な事言ったらマジで店から追い出すからねマリア！」

そう言いながらジロつと睨んで来るリンにハイハイ分かったって・・・とマリアが席を立ると、じゃあここはシヨウね？と真ん中の席をシヨウに譲りながらニコつと微笑んで来るので、リンはさっきの事もあってか、ちよつとマリア!?!と驚いた声をだしてしま

う・・・

「ゴメンねショウ・・・何かマリアがはしゃいじゃって？」

「いや全然？ 僕もあんな楽しそうなマリアの顔を見たの久しぶりだし・・・何だか嬉しいかも」

そう言いながら二つと笑みを浮かべるショウだが少し切なそうな顔にリンもショウの心情を思ってたか、そうだね・・・と答えていると、注文良いかリン？と隣同士でアメリカと一緒にメニューを見ていたチャーリーから陽気な声が聞こえて来るので、しみじみとしていたショウとリンはおつといけない・・・と頭を振りながらチャーリー達の方を見る。

「俺はビールで、アメリカもビールで良いのか？」

「ハイ！ 後、チャーリーがここの料理は何でも美味しいと言うのでお任せしてもいいですかりんさん？」

チャーリーとアメリカからの注文にリンが任せてよ♪とグツと親指を立てていると  
マリアからじゃあ私はウイスキーのロックで・・・と注文が入るので、リンは却下！と  
言いながらマリアをジロつと睨みだす。

「何でっ!？」

「バカね・・・空きつ腹にいきなりそんな度数の高いのダメに決まってるじゃない・つて  
言うか子供を迎えに行くんだから今日はビールで我慢しなさい!」

そう叱って来るリンにマリアも仕方無さそうに分かったわよ・・・と渋々了承すると、  
リンも飲めば?とシヨウが二つと笑みを浮かべて来る。

「えっ・・・でも?」

「どうせ僕とチャーリーが奢るんだし、マリアもリンが付き合えば納得すると思うんだ  
けど・・・」

そう言いながらシヨウがチラつとマリアの方を見ると、良いわねそれ?!と嬉しそうな顔でマリアから

も返事が返つて来るのでリンは仕方ないわねえ・・・と少し嫌そうに答えながらもフツと微笑みを浮かべる。

「それじゃあ先にこれでも食べて少し待っててよ!すぐに全員分のビールを持って来るからね?」

リンがそう言いながらサラダが入ったボウルをシヨウ達の目の前にドンと置くとので、おつ!と嬉しそうな声を上げるシヨウに、これは何て言う料理ですか!?!とキョトンとしたアメリカから尋ねられるとシヨウはニツと笑みを浮かべながらこれはね?と答えると、ボウルの中に入ったリン特製のドレッシングが掛かったキャベツとツナのサラダを小皿に分けてアメリカの前に置き出す。

「これは塩もみキャベツって言って僕の故郷で酒のおつまみとして良く出るんだ。」



「塩もみキャベツ・・・聞きなれない料理ですね？」

シヨウにそう答えながらムウ？と首を傾げたアメリカが少し不安そうに一口食べる  
と同時に、んんっ!?!と驚いた声を上げ出すので、そんなに口に合わなかったか!?!と  
チャーリーから焦った声が上がります。

「いえ、その逆ですよ!!何ですかこれは・・・塩辛くってなんだか止まらないです!?!」

アメリカがチャーリーにそう答えながら塩もみキャベツをひたすら食べ続けている  
と、また一人ハマったみたいね?とビールを運んで来たリンからクスクスと笑われてし  
まう。

「シヨウから作ってくれて言われた時は、正直どうかかな・・・って思ってたけど、これっ  
てビールに最高に合うわよアメリカちゃん？」

「ホントですかリンさん!?!」

そう言いながら目を輝かしますアメリカに意外そうな顔でリンは結構お酒好きなんだ・・・?と内心驚きながら思っていると、それじゃあ全員グラスは行き渡ったなあ!!とチャーリーが乾杯の音頭を取り始める。

「それじゃあ新しい仲間で有るアメリカの歓迎に皆行くぜえ・・・カンパアアアイ!!!」

自分のビールジョッキを頭上高く上げながらそう声を張り上げてくるチャーリーにシヨウ達も乾杯!と互いのジョッキをカチつと当てる中、アメリカは少し恥ずかしそうな顔をしながらちよつとチャーリー!?!と抗議の声を上げだす。

「何だよアメリカ?なんか不味かったか・・・」

「違いますよ!?!正直凄く嬉しかったですけど・・・そんなに大きな声で私の名前を叫ばないで下さいって!」

そう言いながらジトつと上目遣い睨んで来るアメリカにうつ!?!と声を上げたチャー

リーが何かにつき抜かれた様に内心驚いていると、ほらアメリカちゃんも乾杯しよう？とリンが全員を集めてジョッキを傾けて来る。

「わ、分かりました！ほら、チャーリーもボットして無いで混ぜて下さいよっ」  
「お、おう・・・悪い」

リンに言われてジョッキを持ったアメリカに急かされたチャーリーも慌ててその輪の中に入ると今度は何故か MARIA が温度を取り始める。

「それじゃあ今度はリンとシヨウの幸せを願ってカンパニー♪」

ビールジョッキ片手に MARIA が突然そんな事を言ってくるので、ちよつと MARIA 何言つてのよおお!?!とリンが慌ててツツコんでいると、シヨウからもブツとビールが吹き出されるのでアメリカは楽しそうにその様子を見ながらクスクスと笑いながらビールを口に含むので有った。

}

}

}

## アメリカの秘密

乾杯から一時間程経ち全員それなり酔いが回り始めた頃、プハーと親父臭い声を上げながらビールジョッキを置くアメリカに、ちよつとアメリカちゃんたら・・・とマリアに付き合っていたリンが呆れた声を上げだす。

「そんなに飲んで平気なの？随分とペースが早いみたいだけど・・・」

「そうですか？正直全然酔っては無いんですが。」

そんな事を言つて来るアメリカの前には既に空いたグラスが3つも並んでおり、この子強いわね・・・と思つたリンは顔色を変えずケロつとしてゐるアメリカの様子に内心驚いていると、その隣のチャーリーからニヤニヤした顔でメニューを見せてくると、どんどん飲もうぜ！と下心丸見えの声が聞こえて来る。

「ちよつとチャーリー．．．ウチの子に手え出したらタダじゃ置かないわよ！」

「分かつてるってマリア!?俺はただアメリカのジョッキが空いたからだな．．．」

そう言いながら怒鳴つて来るマリアにチャーリーがあたふたしながら答えていると、大丈夫ですよマリア曹長?とアメリカはクスつと微笑む。

「これくらいじゃ基本酔いませんし、もし酔ったとして私に何かしようなら．．．その時は手加減が出来な思うので覚悟して置いた方が良いでしょうですよチャーリー?」

「えっ．．．それってそんなに激しいって事か!？」

驚きながらもどこか嬉しそうな顔をするチャーリーにアメリカはどこか違和感を感じながらも、ま・まあそうですね?と答えていると、アメリカつて結構肉食系なんだ．．．と意外そうな顔するマリアがリンの方を見ると、多分意味が違うんじゃない．．．?とリンから首を傾げられる．．．

「所でキアメリアって本社《ジャブロー》から来たって言ってたけど、前はどんな部隊に居たのか教えてよ？」

リン達との会話が途切れた所、興味本位でショウがビールジョッキ片手に尋ねると、アメリカは少し困った顔をしながらえつとそれはですね・・・と言いながら苦笑いを浮かべ出す。

「ジャブロー基地の事は機密扱いなんであまり詳しく話せないですよ・・・ね？」

そう言いながらアハハ・・・と曖昧な笑みを浮かべたアメリカがリンが持つて来てくれた新しいジョッキに口を付けていると、そっかあ・・・と答えたショウは残念そうな顔で頭の後ろで手を組みだす。

「しかし今日のアメリカの指示にはビックリしたな・・・あんな状況だつて言うのに落ちていてるって言うか妙に場慣れしてる感じだったし、ひよつとして前はどこかの実戦部隊に居たりして？」

「えっ!? そ・そんな事有る訳ないじゃないですか!」

そう言いながら少し焦った顔で両手を振り出すアメリカにリンからも何言ってるのよシヨウ? とクスクスと笑われながら肩を叩かれるとシヨウもそりやそうだよね? と一緒に笑ってククつと笑い始める。

「けど・・・前に居た部隊よりもこの皆さん達の方が居る方が不思議と落ち着きますし・・・正直な所こんなに笑ったの私久しぶりですよ?」

突然アメリカがフツツと微笑みながらサラつととんでもない事をカミングアウトすると、それって前の部隊で何か有ったって事? と急に真顔になった MARIA から尋ねられると MARIA は内心しまった・・・と思いつつ困った顔になる。

「何か有ったか? と言えは有ったんですが、すみません MARIA 曹長でも機密なので話せません・・・」



「ふうんそうなんだ・・・まあアメリカが話せないんなら何が有ったかは深く聞かないけどさ、私が今の上官なんだから困った事が有ったらすぐに相談しなさいよね？」

アメリカにそう答えながらこれは上官命令だから！と MARIA がニツと笑みを浮かべるとアメリカも了解です！と敬礼しながらフツと笑っているリンからわあ凄いと驚いた声が聞こえて来る。

「ちよつとリン・・・凄いつてどう言う意味？」

「いやあの MARIA がちゃんと上官やつてるなつて私ちよつと感動しちやつた・・・」

そう言いながら自分の臉を手で押さえるリンに MARIA がアンタねえ!と怒り出すと、苦笑いを浮かべたアメリカからまあまあ・・・と仲裁が入ると、それにしてもイエーガーさん遅いな!とシヨウも話題を変える様に MARIA とリンの方を交互に見ながらアハハ・・・と笑い出す。

「ああ、イエーガーのバカなら今頃バリサム指令に始末書出してるとんじやかしら・・・」

「あら珍しい・・・あの真面目そうなイエーガー中尉がそんなの出すなんて何かあったの？」

そう尋ねて来るリンにマリアがそれがね・・・？とビールジョッキを傾けながら答えていると、ドカッ！と大きな音が出しながらドアが開くとガランガランガランつとカウベルが激しく店内に鳴り響きだす・・・

「イエーガーにしては乱暴な入店の仕方ね？」

「ちよつとマリア・・・そんな冗談言ってる場合じゃ無いと思うんだけど!」

呑気にそんな事を言ってくるマリアにリンも呆れた顔をしながらそう答えていると、妙な雰囲気に店内に居た兵隊達もシン・・・と静かになる中、お礼参りに来たぜえ！と声を張り上げながら見覚えの有る軍曹を先頭に5〜6人の陸戦部隊の隊員がズカズカとカスケードの店内へと入って来るのでシヨウとチャーリ〜からあつ！と驚いた声が上がります。

「コイツ昨日の酔っ払いじゃないかシヨウ？」

「ホントだ!? 昨日の今日で懲りない奴等だね・・・」

そう呆れた声を上げるチャーリーとシヨウに件の軍曹が見つけたぞつ!! と叫ぶと血相を変えてチャーリーの胸倉を掴んで来るので、何すんだよ! とチャーリーも軍曹の胸倉を掴み返す・・・

「五月蠅え!! よくも俺らだけに罪をなすりつけやがったな・・・お陰で三か月の減俸を食らったんだぞコツチは!？」

「良く言うぜ・・・お前らがリンにちよかい出したのが悪いんだろうがよバカが! 正直言つて自業自得だぜ?」

へへつと笑いながらそう答えたチャーリーが軍曹を煽るり出すと、軍曹も昨日の一件でかなり頭に来ているのかテメエ!!と叫ぶと同時に何かがプチつと何かがキレたらしく渾身の右ストレートがチャーリーの頬にヒットするとチャーリーはグハつと声を上げながら背後に有るカウンター席のテーブルによるめきながら手をつくど運悪くアメリカのジョッキに当たつてしまい倒れてしまう・・・

「ああつ私のビールがああああ・・・!!」

そう叫んだアメリカの悲痛な声にチャーリーが顎を擦りながらもあつ悪りい!?!と謝っていると、軍曹はアメリカの容姿に気が付くと急にへへへ・・・下卑た笑みを浮かべ出す・・・

## 決着

「何だあ……戦闘機乗りのモヤシ野郎の癖に良い女達を連れてるじゃねえか？」

そう言いながアメリアの肩を掴む軍曹に何やってのよアンタ！とマリアが怒声を上げると特に表情を変えずに大丈夫ですから……と答えたアメリアは……どうするべきか考えている様子を伺っているリンとマリアを交互に見ながら二つと笑みを浮かべると、そのまま強引に手を引かれ背後の仲間達へと投げられてしまう……

「コイツっ!!」

そう叫びながら掴み掛かろうとするシヨウにアメリアがダメです！と言いながらジツと目で制していると背後の陸戦部隊の隊員からへへっ……とニヤつく声が聞こえて来る。

「やけに聞き分け良いじゃねえかよ。大人しそうな顔して乱暴にされるのが好きッて

か・・・？」

「おいおいマジかよ!?けど顔は良いけど身体がちよつとなあ?もう少しポリユームが有った方が良くねえか！」

アメリカを羽交い絞めにしてる隊員に別の隊員が冗談交じりにヒヒヒ!と笑っているとその会話を聞いていたチャーリーがチツ!と舌打ちするとこいつ等・・・と流石に我慢が出来なくなり二人の陸戦部隊の隊員に殴りかかろうとする。

「オラア!!テメエらアメリカを放せつてんだよ!!」

「ああつ!?オモチャに乗って戦ってる奴が俺達相手にケンカで勝てると思ってるのかよコイツ!!」

そう怒鳴って来る陸戦部隊の隊員にパイロットとしては並以上の腕が有ると自負しているチャーリー自身も勝てる訳無いと思いつながら拳をギュツと握り出すと、チャーリー!?と目の前のアメリカから焦った声が聞こえると同時に先程殴ってきた軍曹がそ

の腕を力任せに掴んで来る。

「お姫様を守るにしちゃあ．．．ひ弱過ぎるぜ騎士《ナイト》さんよ？」

「五月蠅えんだよ．．．アメリカに手え出したら絶対に許さねえからな手前え!!」

そう言いながらジタバタとするチャーリーにイラついた軍曹がお前こそ五月蠅えんだよつ．．．とチャーリーに向かつて殴りかかろうとした瞬間にドン!と大きな音が聞こえるとグウ．．．と先程までアメリカの腕を拘束していた部下が呻き声を上げているのが見える．．．

「その辺りで止めてくれませんかね．．．?」

「なっ?!お前何をした．．．」

そう不機嫌そうな声を上げるアメリカに驚いた顔をする軍曹と唾然としたチャーリーもアメリカの足元に転がっている陸戦部隊の隊員にギョツとなっていると、アメリ

アはクスッと笑みを浮かべながらちよつと寝て貰いましたけど？と首を傾げだす。

「クソ！よくも仲間をやりやがったなあ!!」

アメリカを羽交い絞めにしていた隊員をやられ呆然としていた隊員がそう叫びながら突然アメリカに飛び掛かって来るとアメリカは動きが大雑把なんですよつ！と返しながらその右手を掴むとそのまま背後に回り込みながらギリギリと腕を捻り出す・・・

「私も気にしていると言うのにさつきは良くも貧乳扱いしてくれましたね・・・？」

「ギャっ!?痛い痛いって・・・謝るから勘弁してくれよ!!」

そう言いながら肩を押さえているアメリカの手を陸戦部隊の隊員がタップして来るのでアメリカは情けない奴ですね・・・と言いながらチツ！と舌打ちしていると、今度はリーダー格の軍曹が背後からアメリカの首に腕を回しながら締め付け来る・・・

「オラア！荒っぽいのが好きなんだろ・・・？」



「クツ・・・そ・そうですねえ？但し荒っぽい目に合うのはソツチですよっ!!」

そう叫んだアメリカは床を蹴りながら背後の軍曹の鼻に向かって後頭部でヘッドバッドを食らわすと軍曹からグハっ!!と呻き声が聞こえ離れて行くのでその様子を見ていたマリアからうわっ痛そう・・・と苦笑い気味の顔でそう声が上がります。

「・・・まだやりますか？」

そう言いながらフウと息を吐いたアメリカが首を少し傾げると、先程のヘッドバッドで鼻血を出した軍曹からこの野郎・・・と恨み声が聞こえて来るのでハア・・・と今度は溜息をつきだす。

「良いでしょう・・・そっちがギブアップするまでトコトン相手をして上げますよ私は？」

「女だからって手加減してやりやあ調子に乗りやがって・・・覚悟しろよ teme!!」

そう怒鳴り上げながら掴みかかって来る軍曹の右手を掴んだアメリカは小さい身体を活かしフツとその懐に入るとそのまま一気に背中に背負い込みながら床へと叩きつけてしまうと動かなくなつた軍曹にやりすぎましたかね・・・?と苦笑いを浮かべ出す。

「それで・・・残つた皆さんはどうするんですか?」

アメリカは先程締め上げ完全に戦意喪失している隊員とここカスケードへ誰も入つて来ない様になっている見張り役の二人の隊員を交互に見ながら首を傾げると、おい開けろっ!何が有つた!?!とイエーガーの焦つた声が扉の外から聞こえて来るので見張り役の陸戦部隊の隊員達がビクつき出す・・・

「分かつた・・・今後一切この店は勿論の事、アンタたちにも絶対に関わらない様に軍曹へ言つて置くから勘弁してくれよ!?!」

「良いでしょう。ですがもし今度この店に姿を現したりしたら今度は両手両足全部叩き折つてやりますからね・・・?」

そう答えながらジロつと睨みだすアメリカにヒイツ!?と悲鳴を上げた陸戦部隊の隊員達が慌てた様子でぶくぶくと泡を吹いて完全に伸びている軍曹を肩に担いで店から出て行くと・・・突然開いた扉と入れ替わる様に店の中へ入って来たイエーガーから何が有ったんだ!?!と驚いた声が聞こえ出すとアメリカはアハハ・・・苦笑いを浮かべるので有った。

くくく

## 一目惚れ!?

「しかし驚いたわ．．．アメリカちゃんって凄く強いよね？」

そう驚いた声を上げるリンに先程の出来事を見て無いイエーガーがにわかに信じられないと言った顔でそうなのか？と首を傾げながらカウンター席に座ると、ビールジョッキ片手のマリアからもアンタも見たでしょう陸戦部隊の連中の事．．．？と首を傾げられる。

「確かに見たが．．．あんな華奢な身体でか？」

「そうなのよ！一方的にやられて行くあいつ等を見てた私自身も少し楽しくなって．．．マジで!?!と思いいながらも少しテンション上がったわ．．．」

そう言いながら苦笑いを浮かべるマリアにイエーガーもマジでか!?!と同じ反応をしなからビールを口に含んでいると、コッチの会話が聞こえていたのか目が合ったアメリカ

から困った様子でアハハ・・・と愛想笑いが浮かび上がる・・・

「ま、まあ・・・変な奴等も居なくなりましたし私の事は気にせずにパーツとやりましようよ! ねっ? パーツと!!」

先程の一件を誤魔化すようにアメリカが急に仕切り出すと、それもそうだな・・・? とイエーガーも取り合えず納得した所で改めて全員で乾杯していると、チャーリーが二人にしか聞こえない小さい声で、なあシヨウ・・・? とシヨウの脇腹を肘で突いて来る。

「んっ? 何だよチャーリー・・・」

「俺・・・アメリカに惚れた。」

シヨウは突然そんな事を言ってくるチャーリーにマジでっ!? と驚いた声を上げるとチャーリーから静かにしろって!! と怒られちゃう・・・

「おつと悪い・・・って言うかアメリカのどこに惚れたんだよ?」

「どこって・・・強さと可愛さのギャップ萌えて奴にか・・・？」

そう言いながらチャーリーがニヤニヤしながら首を傾げて来るのでシヨウは呆れた顔であつそ・・・と答えながらビールを一口飲みだすとチャーリーからもつとリアクションくれよ!?!と肩を揺すられる。

「零れるから止めろって・・・それで僕にどうしろっていうんだよチャーリー?！」

「流石に付き合いが長いだけ有って察しが良いじゃねえか?！」

シヨウはそう言いながら肩に手を回して来るチャーリーにハア・・・と溜息をつきだすと、チャーリーもそれを了承したと見なしたのかへっつとニヤつきだす。

「まあ、シヨウはそんなに深く考えず俺の良い所を言ってくれた良いって?！」

「チャーリーの良い所って言われてもな・・・いつも見たいにナンパした方が早いんじゃない

ない?」

テーブルに肘を付きながらそう提案して来るシヨウに今回はそう言うのじゃねえんだよ!とチャーリーが

真面目な顔して言ってくるのでシヨウは普段とは違う様子のチャーリーに内心驚きながら仕方ないな・・・と答える。

「分かったよ。応援はするけど・・・いつもみたいにくすぐりに手を出してアメリカを怒らせたりしたらチャーリーもさっきの奴等みたいになるって事だけは肝に銘じててよ・・・」

「わ・わーってるって・・・!?!」

シヨウは少し自信無さげな顔のチャーリーからの返事に少し不安を覚える・・・と言うのもチャーリーとは士官学校からの付き合いだが当時からとにかく女癖が悪くシヨウ自身もチャーリーの女性関係のトラブルに巻き込まれたのは一度や二度では無かったな・・・と思い返していると、ねえどうしたのシヨウ?と思案顔のまま固まっていた

シヨウに不思議そうな様子でリンから首を傾げられてしまう。

「えっ!?! いやちよつと．．．この困難なミッションをどうこなそうかと考えててさ．．．？」

「それって今の任務の事？ 忙しいのは分かるけど．．．食事の時くらいは忘れた方が良くわよ。」

そう言いながら空いたジョッキと入れ替える様にお代わりを置くリンにシヨウは気が利くね！と答えながら二つと笑みを浮かべていると、チャーリーってアメリカちゃんの事狙ってるの？とさっきの会話を聞かれていたのかカウンターの向こうから身を乗り出し来たリンから耳元で尋ねられる。

「う、うん．．．いつにも無く本気っぽいみたいなんだよね？」

「ふん．．．そう言う事なら私も手助けしても良いけど、あの軽くて女つたらしのチャーリーが本気になるとか意外ね．．．」



ここカスケードで女性隊員にちよっかいを出すチャーリーのナンパ行為に迷惑をしていたリンが苦笑いを浮かべながら首を傾げるシヨウにそう答えていると、早速アメリカと談笑していたチャーリーからおいシヨウ!?!と声を掛けたシヨウはリンと顔を見合せながら二つと笑みを浮かべると二人の会話に混ざり出す。

くくく

「けどさ、さっきのアメリカはマジで強かったぜ。まるで特殊部隊並の強さだったけど趣味で格闘技でもやってののか?」

「えっ?!ま・まあ・身体を動かす事は嫌いじゃないですけどね?」

そう尋ねて来るチャーリーにアメリカがアハハ・・と苦笑いしながら曖昧に答えると、どんな運動が好きなんだ・・?と耳元で囁かれたアメリカはチャーリーの言葉

にへっ!? 素つとん狂な声を上げながら顔をボツと赤くしてしまおうとお前なあ!?!と突然叫んだシヨウウからチャーリー頭の頭を叩かれてしまう・・・

「何すんだよシヨウウ?!」

「それはコツチの台詞だつて! 言ってる傍から何やってんだよお前は?!」

「何つてあんなに強いんだからどんなトレーニングしてるか気になって聞いてただけだろうが!」

そう怒声を上げるチャーリーに、言い方が紛らわしいんだよお前は!とシヨウウが怒り返していると、何だそう言う事か・・・と納得したアメリアは少し火照った頬を冷ます様にビールを飲み干しているとタイミング良くお代わりを置かれたリンから騒がしくてゴメンね?とアハハ・・・苦笑いを浮かべながら謝られてしまう・・・

「そんな事は有りませんよ?むしろ二人のやり取りを見ていると凄く楽しいです。」

そう言いながらアメリカがクスッと微笑みながら、どう言う意味だよっ!?!と驚いた声を上げだすチャーリーを見るので、へえ・・・とその様子に目ざとく気付いてしまったリンは少し驚くとアメリカちゃんって彼氏とか居るの?とニヤニヤしながら尋ねだす。

「彼氏・・・ですか? 悲しい事にこのガサツな性格の所為か一度も出来た事が有りませんけど・・・どうしたんです急にそんな事聞いて来て?」

「えっ意外ね・・・アメリカちゃんくらいの美人だったら言い寄って来る男なんて腐る程居たでしょうに!」

そう驚くりんにまあ・・・居ましたけどね?と答えたアメリカが急に声のトーンを落とすと、どうしたんだアイツ・・・?と言い合いしながらも二人の会話を聞いていたシヨウとチャーリーは目を合わせると取り合えず話を聞こうと自分達の椅子に座りだす。

くくく

## 告白

「自分でも言うのもなんですが士官学校時代は結構モテましたし友達も多かったです・・・ただそれは最初の内だけで数か月もしたら今でも親友で有る一人を除いて皆離れて行ってしまいました。」

アメリカはそう言いながら実はボツチなんですよ？と自嘲気味にクスッと笑うと、何でまた？と尋ねた現在の上官で有るマリアが内心不思議に思いながら、特別素行に問題の無さそうなんだけど・・・と思いながら首を傾げると、シヨウ達もそれに倣ってアメリカの方を見る。

「それはですね・・・私の生まれが宇宙『そら』だからなですよ？」

そう言いながら天井を指差すアメリカにシヨウ達がえっ・それって・・!?と言った顔を上げると、そうです。とアメリカは少し困ったような顔でコクッと頷く。

「皆さんの思っている通りで、私は現在行われている戦争の発端でも有る嫌われ者のスペースノイドなんですよ……?」

「へえ……ホントにイヤだわ……」

アメリアは飾る事も無くスパツとそう言い捨てて来るマリアにやっぱりそうすよね……と内心落ち込んでいると、生まれだけで差別するなんて本当に最低ね!とマリアが苦虫を噛み潰した様な顔で睨んで来るのでアメリアからマリア曹長!と素っとな狂な声が響き渡る。

「いや、私はあのジオンと同じスペースノイドの生まれで、今までも……」

「だから最低だって言ってるのよ……それって要はイジメじゃない?私ってそういうコソコソした嫌がらせってマジで大っ嫌い!!」

そう言いながら怒声を上げるマリアに、マリア曹長……とアメリアが驚いた顔で呟くと、マリアの言う通りだぜ……と低い声を出したチャーリーからも怒り心頭と言っ

た顔で言つて来るのでアメリカはキョトンとしながら全員を見渡しだす・・

「本当に不思議な方々ですね・・もし私がジオンのスパイとかだったらどうするんです？」

「あん？そんな時は俺が強引にでもお前を口説いて惚れさせた上で懐柔してやるから覚悟しとけ！」

冗談ほくも聞こえるが、真面目な顔でそう睨んで来るチャーリーに対し内心ドキッとしたアメリカが、絶対に口説かれまじっ!と少しドギマギしながら答えていると、そんな事させないわよ!とアメリカからも抗議の声が聞こえて来る。

「アンタみたいな節操無しに口説かれるアメリカじゃ無いんだからね！」

「う・うるせえぞ MARIA!?!お前はアメリカの母親かよ!!」

MARIA に対し少し狼狽えながらチャーリーがそうツッコんでいると、そうなんです

か・・・?とアメリカはムウと頬を膨らませながらジトつと目で睨みだす。

「そうよアメリカ?こいつはトリントン基地でも有名な女つたらしのチャーリーって有名で沢山の女性隊員達が被害に有って来たんだから有って来たんだから!」

「ちよつと待てつてマリア!?!確かにそんな時期も有つたけど今は・・・」

そう言い掛けるチャーリーに今は何ですか・・・?とアメリカが全く目の笑つて無い顔でニコつと微笑んで来るのでチャーリーからおいシヨウ・・・と助け船を要求されるのでシヨウはククつと笑いだす。

「まあ、確かにチャーリーってチャラチャラして軽そうに見えるけど・・・一度コレって決めたら絶対に諦めない奴だよ?」

「成程・・・と言う事は数ある女性と遊んで来たチャーリーが今度は私を狙つて来たと言う事で良いんですか?」

ビールジョッキを片手に尋ねるアメリカにそれは語弊が有るぜ．．．と言いながらチャーリーは苦笑いを浮かべると、シヨウが頑張れチャーリーと心の中で応援し始める。

「男だつたら興味の有る女性が居たら声を掛けたくなるだろう？」

チャーリーの聞き直つた様な言い訳にアメリカが少し腑に落ちない顔でまあ．．．そうですね？と答える中、隣で会話を聞いてたシヨウはテーブルに突いていた肘をズルつと滑らせながら自ら墓穴掘つてるし!?!と内心ツツコみながらハア．．．と溜息をつきだす。

「あの．．．結局の所チャーリーは私の事をどうしたいんですか？」

そう言いながら首を傾げるアメリカにチャーリーが色々したいけど？とニヤつきだすとシヨウはおい！と注意する様にコホンと咳払いすると、アメリカからへえ．．．？と低い声が返つて来る。



「いや、違うぜアメリカ!? その・・・色々って言うのはお前の事が気になってるから知っていたって言う意味で・・・?」

「ふくん気になるですか・・・私もそうですよ?」

そう答えながら少し意地悪くニコつと笑みを浮かべるアメリカに、えっマジ!? と驚いた顔のチャーリーが声を上げると同時にショウもマジで!? と内心驚いた声を上げていると、なんて顔してるんですか? と言ったアメリカからクスクスと笑われてしまう。

「まあ・・・さつき私を助けようとしてくれた所だけは格好良かったですよチャーリー?」  
「だけって・・・もうちよつと褒めろよな!」

そう声を上げたチャーリーがガクつと項垂れているのを見たショウは二人の様子を見ながら中々良い感じじゃない? とリンに小さく声を掛けると、あっゴメン・・・とハツとした顔でリンから返事が返って来る。

「珍しいね・・・リンがブーツとしてるなんてさ？」

「う、うんちよつとね・・・」

少し驚いた様子で聞いて来るショウに少し齒切れの悪い言い方をリンはそう答える  
と、アメリカちゃんがスペースノイドか・・・と内心呟きながらハアと溜息をつくので  
有った。

## 二人の気持ち

## 疑惑

「それではご馳走様でしたリンさん。」

リンの作った料理を楽しんだアメリカがそう言いながらニコつと笑みを浮かべて来ると、うん、またね？と答えたリンもフツツと笑い返しながら、所でホントに良いのアメリカちゃん？と完全に酔っぱらってしまいアメリカの肩に担がれているチャーリーを見ながら首を傾げ出す……

「らいじょうぶだぜえく？」

「うん、これは完全にダメね……」

完全に呂律が回って無い様子のチャーリーにリンは呆れた顔でそう答えると、ハハ……とアメリカの苦笑いが聞こえて来る。

「すみません・・・ちよつと私のお酒に付き合わせ過ぎちゃったみたいですね？」

「そんなに気にする事必要は無いわよ・・・どうせそのバカがアメリカを酔わそうとして自爆しただけだろうしね。」

大分まばらとなった店内の中でカウンター席に座ったマリアからそんな呆れた声が聞こえて来ると、間違い無いな？とシヨウとチャーリーの隊長で有るイエーガーⅡパウスネルン中尉もククツとアメリカの方を見ながらククツと笑いだす。

「そんなに信用が無いんですねチャーリーは・・・何か送って行くのが不安になって来ました。」

「まあ・・・もしそのバカが何かした時は腕の一本や二本折つても構わんからな？」

そう物騒な事を言いながら俺が許可すると続けるイエーガーに私も擁護して上げるからね？アメリカの上官で有るマリアまでも面白そうな顔でニヤつき出すのでアメリカ

アから二人して何を言ってるんですか・・・？と溜息交じりの声が返って来る。

「取り合えず手間賃としてここの支払いはしといてやるからそのバカの事を頼むぞ？」

「えっ・・・それは悪いですよバウスネルン中尉!？」

「悪いと思っているのが俺の方だぞウオーカー軍曹、本当なら俺がチャーリーを連れて帰るべき何だが・・・俺も隣で寝ているソイツの相棒の面倒を見ないといけなくなつたからな。」

イエーガーがそう説明しながら二つと笑みを浮かべると、チャーリー同様にカウンターに突つ伏して寝ている黒髪の青年で親指で指すので、アメリカはその更に隣から上官の言う事は絶対だからね？と冗談っぽく言って来るマリアの声を聞きながら、渋々了解・・・と返事をするので有つた。

くくく

「それではバウスネルン中尉にマリア曹長、私はこの辺りで失礼致しますね？」

そう言いながら敬礼をするアメリカに二つと笑みを浮かべたイーガーとマリアからまた明日？と言う様に手が上がると、じゃあねアメリカちゃん？とリンが肩にチャァーリ担いだアメリカを見送る為にカウンターのの中から出て来る。

「ハイ、また寄らせて頂きますねリンさん♪」

そう言いながら満面の笑顔を向けて来るアメリカに、う、うん・・・と答えたリンはその顔をジツと見つめながら固まっていると、アメリカからどうかしたんですか？と不思議そうな顔をされてしまう・・・

「あ、ゴメンゴメン・・・ちよつとボーツとしちゃつてね!？」

「大丈夫ですか？疲れているんなら早めに休んで下さいよ！」

そう心配して来るアメリカに対しリンが平気だから！と急に声を上げるので、リンさん？とアメリカから驚いた声が上がると同時に内心しまった・・・と後悔したリンは笑みを必死に笑みを作り出す。

「アハハ・・・ゴメンねアメリカちゃん？どうも今日の私は本当に疲れているみたいだね。」

「どうもそうみたいですわね？顔も何だか強張っている様に見えますし・・・今日は早く店を閉めた方が良いと思います。」

そう指摘して来るアメリカの妙な鋭さにリンがそうするわ・・・と答えると、それではリンさんおやすみなさい♪と一度満面の笑みを浮かべるアメリカにおやすみ・・・と鳥足のチャーリーを肩に担いだアメリカを見送りながらリンは手を振るとハア・・・と盛大に溜息をつきだす。

「上手く笑えてなかったかな・・・」

そう言いながら店の中に戻ったリンが自己嫌悪に陥っていると、アメリアが何かしたの？とマリアから少し驚いた様子で尋ねられる。

「いいえ・・・どつちかと言うと何かしたのは私ね？」

「何それ？アンタがそんな顔すんの珍しいわね・・・」

「・・・私だつてそう言う気分になる事も有るの！」

そう言いながら残っていたビールを一気に煽りだすリンにそう言う風に飲むのも珍しいな？とイエーガーも不思議そうな顔でツツコんでいると、リンから五月蠅いわよ！と機嫌の悪そうな声が返って来る。

「しかし変ね？いつもより飲んで無かったのにシヨウがこんなに酔いつぶれちゃうなんて・・・」



「今日は大変だったからなコイツ……?」

リンはもう一杯ビールを継ぎながら……危険な任務なの?と首を傾げながら煙草に火を点けようとしているイエーガーに聞くと、何だ知っているのか……?とイエーガーが少し驚いた顔になる。

「今、コイツ……新型の試作機のテストパイをやつてな?今日もちよつと危なかったんだよ」

「そうそう!アメリカの咄嗟の指示が無かったら今頃ここに居なかったわね……」

リンはマリアからの衝撃的な発言にえっそうなの……!と焦った声を上げると、そっかあ……と目の前で気持ち良さそうに寝ているシヨウの黒髪を優しく撫でながらアメリカの事を思うと再び溜息をついてしまう……

「おいおい……酔ってるのかリン?」

「え、何でイエーガー中尉……？」

急に呆れた声を上げるイエーガーにリンがキョトンした顔で首を傾げだすと、その手その手……とマリアから指摘されるとリンはハツとしながらシヨウの頭から慌て手を上げだす。

「いや……そのね、シヨウの頭にゴミが付いていたから？」

「そうね。分かったから変に誤魔化さなくても良いって……」

生暖かい目でそうツツコンで来るマリアに恥かしそうな顔でリンがううくと唸っている、イエーガーから変と言えば……？と煙草を啜えながら首を傾げられる。

「なあマリア……さつき言っていたアメリアの話なんだが、アイツって士官学校に居たんだよな……」

「何で階級が軍曹なのか知っているか？」

「いやそれがさ……私も配属されるって聞いた時にアメリカの履歴を確認したんだけど、ジャブローに居たって事しか記録されて無くてね……どこの部隊からの転属とか一切不明なのよ……?」

そう言いながら腕を組みだすマリアにイエーガーが何だそりや……?と首を傾げだすと、アメリカちゃんって不思議な子ね……と呟いたリンは仲良くなれるかな……?と内心不安になりながら注いだばかりのビールを口に含みだす……。

くくく

## リンの気持ち

それなりの時間と言う事も有り店内の客もまばらになると、リンはじゃあまたね？と店から出て行く客を見送ると、まだ良いの？と店に掛かっている時計を見ながらイエーガーと談笑しながら飲んでいるマリアに首を傾げると、あっ！と自分の腕時計見たマリアが慌てて帰り支度をし始める。

「もうこんな時間なんだ・・・悪いけどそろそろ帰るわねリン！」

「うん、早くママが帰って上げないと息子ちゃんが拗ねちゃうからね？」

そう揶揄う様にフツツと笑ったリンが首を少し傾げると、五月蠅いわね・・・と答えたマリアからもニツツと笑みが浮かび上がる。

「久々だったけどリンと飲めて本当に楽しかった。また時間を作って寄るわね？」

「ええ、いつでも良いから前みたいに気軽に寄ってよねマリア?」

そう言いながら立ち上がったマリアをリンが見送る為にドアに手を掛けようとする  
と、慌ててウイスキーの入ったロックグラスを飲み干したイエーガーからちよつと待  
マリア!と呼び止める声が聞こえ出す。

「何よそんなに慌てちゃって?」

「いや、外は暗いし俺が宿舎まで送って行く・・・」

そう言いながら立ち上がるイエーガーにマリアが別に良いって!?!と遠慮する様に両  
手をヒラヒラと振り出すが、ダメだ。と声を上げたイエーガーも問答無用と言った顔で  
食い下がって来る。

「ちよつとリン・・・送り狼なんていらなくてアンタからも言ってよ!」

「誰がお前何か襲うか!?!流石の俺にだって好みって言うのが有るんだからな・・・」

基本的に紳士な事を知っているイエーガーに対し何も心配をして無いリンはまあまあ二人共・・・と宥めていると、それはそうとシヨウの事をどうすんよ?とマリアから尋ねられるとイエーガーがそうだった・・・と言いながら困った顔になる。

「シヨウの事なら私が面倒見るから大丈夫。流石に閉店までには起きると思うしね・・・?」

イエーガーに答えながら首を傾げるリンにふくん・・・?と何故かマリアがニヤニヤとして来るのでリンは何よその顔!?!と少し慌て出す・・・

「いや別に・・・まあ、アンタがそう言うんなら任すわ?」

「ちよつ・・・違うからね!?!」

リンはそう意味有り気な事言いながら店から出て行こうとするマリアに抗議の声を上げると、どう言う意味だ・・・?とイエーガーがキョトンとした顔で首を傾げて来る。

「イエーガー中尉には関係無いって!?! 良いからマリアの事を頼むわね!!」

「分かった分かった!?! それと……シヨウが起きたら明日は非番だつて伝えて置いてくれないかリン、テスト機の修理に明日一杯は掛かるってな?」

顔を真つ赤にしながら背中を押して来るリンにシヨウへの伝言を頼んだイエーガーが cascade<sup>カスケード</sup>の扉から押し出されると、腰に手を射置いたリンからマリアを頼むわね!と何故か不機嫌そうな声が聞こえて来る。

「あ、ああ……じゃあシヨウにはゆっくり休む様に伝えてくれ?」

「うん、分かった。」

そう短く答えるリンに不思議そうな顔でイエーガーがそれじゃあ行くか?とマリアの方を見ると、また今度話を聞くね♪と妙に上機嫌なマリアにイエーガーから酔つてるのか?心配されると、早くソイツを連れて帰つて!とリンはシツシ!と犬を追い払う様

に手を振り出す・・・

くくく

「まったく・・・そんなつもりじゃないって言うのにマリアの奴つたら！」

イエーガーとマリアの二人を見送ったリンはそう独り言ちながら溜息をついていると、今日も美味しかったよリン！と最後の団体客がタイミング良く立ち上がる。

「今日はこれでお終いかな・・・」

先程の団体客を見送ったリンは店の扉に掛けていた札をclose閉店に変えると、どうしよう・・・

と呟きながらいよいよと二人きりとなった店内に緊張してしまふ・・・

「起こした方が良いのかな・・・けど、店を閉めてたら起きるかも知れないし・・・」



一人でブツブツと右往左往していたリンが取り合えず寝かせて置こうと考えを纏めて店の後片付けを行ったのだが、それから数十分後店を完全に占めたリンは全然起きないし……と思っていた以上に深い眠りについている様子のシヨウにハア……と溜息をつきだす。

「こうなったら仕方ないか……明日は非番って言ってたし一日くらいなら外泊しても良いよね?」

そう自分に言い聞かせるようにリンがシヨウの右手を掴みながら肩に担ぐと、うん……とシヨウから寝言が聞こえて来る。

「起きたのシヨウ! 少しでも歩けない?」

「う、うん……分かったリン……」

寝ぼけながらもそう答えるシヨウにリンがじゃあ行くわよ? と声を掛けながらゆつくりと螺旋

状の階段に足を掛けながら自分の部屋と滅多に使う事の無い客室が有る二階へと上がる。リンは再び土どうしよう・・・と困り出す。

「自分の部屋にはベッドが一つしか無いし・・・ましてや客室なんてここ一年は入ってないから多分埃まみれの筈・・・」

そこに寝かすには流石に申し訳無いと考えたリンが仕方なく自分の部屋へシヨウを運ぶと、もうちよつと頑張つて?と再び眠さで動き鈍くなり出すシヨウをどうにか自分のベッドに寝かせる事に成功したのだが・・・そのままもつれてシヨウの胸に飛び込む姿勢となったリンはうわっ!?!と変な声を上げながら顔を真っ赤にしてしまう・・・

「うう・・・これじゃあマリアの思つた通りのシチュエーションじゃない・・・」

まるで下心が有つて自分の部屋に連れ込んでしまった様な状況にリンはハア・・・と溜息をつきながらベッドの上に寝ているシヨウのお腹に跨ると、シヨウが悪いんだからね?と小さく呟くとそのまま抱きつくようにその頬へチュツと口づけるので有った。

# 遅く起きた朝は・・・

「知らない天井だ・・・」

目を覚ますと同時に違和感を感じたシヨウはそう呟きながら自分重い頭を擦ると、ここはどこだろう・・・？と周囲を見渡しだす。

「確か昨日リンの店で皆と飲んでた筈なんだけど・・・その後どうしたんだっけ・・・？」

酒の抜けきって無い頭でシヨウがそう必死に考えながら右手で頭を掻こうとした瞬間やたら重たい事に気付きギョツとした顔になる・・・

「隣で誰か寝てる!?!しかも僕の腕の上で……」

頭の上まで深くすっぽりと布団を被った人物にシヨウがそう焦った声を上げるとうん……もう少し寝かせてよ……と艶っぽい女性の声と共に柔らかい物体の感触が自分の身体に感じ出すと、その声ってひよつとして……と思いつながらシヨウは少しだけ見える綺麗な黒髪が覗く布団をドキドキしながら捲り出すとシヨウの身体を抱き枕の様にしてスヤスヤと寝息を立てているリンの姿を見つけてしまう……

「嘘だろ……何でリンが同じベッドに……?ひよつとしてまさか僕ツ!?!」

そう声を上げたシヨウが恐る恐る自分の下半身を見ると、良かったパンツは履いてる

など思いながら安堵していると、五月蠅いわねさつきから・・・と流石に起きたのか眠たそうに目を擦るリンから抗議する声が聞こえて来る。

「えつと・・・おはより、リン・・・？」

「おはよシヨウ・・・って何でシヨウが私のベッドに居るの!？」

そう驚いた声を上げながら跳び起きるリンにシヨウも僕も何が何やら・・・?と答えながら困ったかを見せると、あっ・・・そうだったわ!と昨日の事を思い出したリンが申し訳無きそんな顔でボンと手を置き出す・・・

「ゴメンゴメン・・・昨日酔いつぶれたシヨウを取り合えずここまで運んだけどね。この寒さじゃ床だと凍えそうだから一つしかしない私のベッドで一緒に寝ただけ・・・」

「そ、そうなんだ．．．けど良かったよ？僕が変な気を起こしてリンを襲ったりして無くてさっ。」

そう答えながらアハハ．．．と苦笑いを浮かべるシヨウにそうだね．．．とリンも少しバツの悪そうになると、えっ！こんな時間！？とシヨウが自分の腕時計を見ながら慌てた声を上げだす。

「不味い．．．既に大遅刻じゃないかよ!？」

「ああシヨウ．．．それなら大丈夫よ？イーガー中尉が昨日帰る前に試作機のエンジンがダメだから身体を休めとけ！って言ってたし．．．」

そう説明するリンに、つて事は今日は非番か・・・？と呟いたシヨウがそのままポスつとベッドに身を任せると、そうみたいだね？とニコつと微笑んだリンも同じように寝ころぶと何故か身体をくつつけて来る・・・

「あのさリン・・・起きたんならそろそろ離れて貰えると助かるんだけど・・・？」

「今更別に良いじゃない？朝からこんなに冷え込んでるんだし・・・このままもうちよつと寝かせてよ？シヨウにくつついてるとなんか暖かいし・・・」

そう言いながらリンが再びスヤスヤと寝息を立てたのでシヨウはハア・・・と溜息をつきだす。

「これじゃあ生殺しだって・・・」

そう独り言ちたシヨウが自分の胸に擦りつける様に眠りこくリンの綺麗な黒髪を撫でながらその欲望との戦い事となるのは必然で、僕も寝てしまおう・・・とシヨウも目を瞑り出すとやはり疲れていたのか次第に睡魔に襲われてしまうのであった・・・



く  
く  
く

「ねえシヨウもうお昼前よ？そろそろ起きなさいって！」

そう近くで叫んで来るリンの声にシヨウは何だか久々に良く寝た気がするな・・・と思いつつ目を開けると、トントンと何やら切る音が聞こえ目が開けると、台所に立っていたリンがこちらを振りむくとニコッと微笑む。

「あつシヨウ起きた？」

「う、うん・・・改めておはようリン・・・」

いつの間にか先に起きたらしいリンの少しラフな私服姿にシヨウが内心ドギマギしながらそう答えていると、おはようシヨウ♪と満面の笑みを浮かべたリンが隣に有るローテーブルに目玉焼きとカリカリのベーコンとコンソメスープを乗せて来る。

「シャワーは後で良いシヨウ？あんまり気持ち良さそうに寝てたから先に朝ご飯作っちゃった・・・」

「う、うん・・・って言うか、こんなちゃんとした朝ごはん食べるの久しぶりなんだけど!?」

そうテンション上げるシヨウにリンが良かった・・・と誰にも聞こえない様にホツとしながらローテーブルに向かって座り出すと、アジア系らしく胡坐を組みながら手を合わせたシヨウからうわあ美味しそう!?!と驚いた声が上がります・・・

「フフツ・・・お代わりは有るから沢山食べてね？」

「有難うリン！それじゃあ頂きます。」

そう微笑んで来るリンにシヨウは普段通っているPX売店に並んでいるサンドウィッチやおにぎりとは比べ物にならない程のローテーブルに並ぶおかずの数々にご飯を口に運ぶのが止まらなくなってしまう。

## 束の間休日 その1

リンの作った朝ご飯をペロリと食べ終えたシヨウはごちそう様！と満面の笑みを浮かべながら手を合わせると、お粗末様でした♪とリンもその顔を見ながらクスクスと楽しそうに笑いだす。

「所でさシヨウ？今日は休みなんでしょう・・・ちよつと買い出し付き合ってくれないかな・・・」

「いいよ別に？急な休みで予定何か無いし・・・」

そう答えながら首を傾げるシヨウにじゃあ決まりね！と妙に上機嫌となった顔のリンがガタつと立ち上がるのでう、うん・・・と面喰いながらも答えたシヨウは内心良し：！とガッツポーズを取る。

「けど僕なんかで良いの……リンが頼めば基地に居る暇な奴等がいくらでも手伝いに来ると思うけど……」

「ホントシヨウって鈍感よね……」

そう言いながらテーブルに肘を付いたリンが呆れた顔になるとシヨウはへっ……？と素っとなん狂な上げる。

「今何言ったのリン？」

「何も言っていない……取り合えずシャワー浴びてきたら？私は出る準備をしておくから！」

そう言いながら急に機嫌を悪くするリンにシヨウが良く分かんないな女って……？首を傾げながらシャワーを借りる為に浴室へと向かい出すとリンからタオルとかは適当に使ってね？と声が聞こえる中シヨウはハツとしてしまう……

「さつきまでリンも使ってたんだよね・・・？」

そう独り言ちながらシヨウは頭に浮かんだ妄想を打ち消す様に冷たいシャワーを浴びて頭を冷やすのであった・・・

くくく

「フウサツパリした・・・所でリンはどこだろう？」

リンに言われた通り浴室に有ったタオルで頭を拭きながら部屋に戻ったシヨウはキヨロキヨロしながらリンの姿を探すと下の方でキュルキュル・・・と聞こえる音にガレージかな？と思いい階の店舗へ降りると、アレ・・・おかしいな!?!と焦る声を上げるリンの声が聞こえて来る。

「どうかしたのリン？」

「あ、シヨウ・・・実はウチに有るトラックのエンジンが掛からなくて困ってるのよ・・・」

そう言いながら困った様に腕を組むリンにちよつと見て良い？と尋ねたシヨウが運転席に乗り込むと、任せたわ・・・とリンから溜息交じりの声が返って来る。

「それじゃあ掛けるね？」

そう声を上げたシヨウがキーを捻るとキュルキュルとセルが回るだけの音しかしないで回れって・・・と思いつつながらアクセルペダルを何度か踏み込むとエンジンがブルン！と音を立てながら掛かり出す。

「凄い掛かったわ！」

「いや・・・掛かるには掛かったけど、これで買い出しは無理だよリン？」



そう言いながらショウウがアクセルを戻すたびにガタつくエンジンを切ると、そのような……?とリンから急に落胆する声が聞こえて来る。

「リン……これ最後にメンテしたのはいつ?」

「ゴメン……私の両親がここに残していたのを使ってたから……もう駄目かな?」

「ダメじゃ無いけど……流石に僕じゃこの場での修理は無理だね……」

リンにそう答えながら明らかに数年は開けた様子の無いエンジンルームを見たショウウがお手上げのポーズを取ると腰に手を当てたリンから困ったな……と言う声が聞こ

えて来る。

「トラックが無いと買い出しに行けない無いし……このままじゃ店も開けられないじゃないー！」

「それはトリントン基地の士気に関わる大問題だね……？」

シヨウは仕方ないな……と自分自身に向かって頷くと、腕を組んだまま不安そうなリンにゴメンと言いながら両手を合わせる。

「ゴメンリン、ちよつと時間くれない？コイツの修理と代車を用意するから……」

「それは良いけどこの近くに車の修理工場有ったかしら？」

そう言いながら首を傾げるリンにシヨウは取って置きな所が有るんだ？とリンに向かつてニツと親指を立てると、へえ・・・そうなんだ？と答えたリンが不思議そうな顔になる。

「それじゃあ、ちよつとこのトラック借りるね？」

「う、うん・・・取り合えず店の掃除でもして待つてるからシヨウに任せるわ。」

自分ではどうしようも出来ない為にリンがそう言いながら手をヒラヒラさせると、じゃあまた後でね？とニツと笑みを浮かべたシヨウはトラックのエンジンを掛けながらアクセルを吹かすと、ジャジャつと砂埃り起こす様にクラッチを繋いで急発進させるとリンからゴホツゴホツと咳き込む様にむせだす・・・

「まったくもう・・・掃除するって言ったのに何で散らかすかなっ!？」

そう抗議の声を上げたりんは腰に手を置きながらハア・・・と溜息をつくど砂だらけになつた店の玄関口を掃こうと店の中に箒と塵取りを取りに入るので有つた。

く  
く  
く

## 束の間休日その2

リンのトラックを修理する為にシヨウはその当てが居る所へ行くためにトリントン基地のゲートの前で停車すると待機所の小屋からあれ・・・少尉じゃないですか？と警備担当の上等兵が不思議そうな顔で出て来る。

「どうしたんですかいそのポンコツは？」

「いやちよつと訳ありだね。取り合えず中に入りたいたいんだけど良いかな・・・」

そう困った顔をするシヨウにハアと答えながら上等兵がゲート開けてくれるとシヨウは有難うとお礼を言いながらエンストしたトラックのエンジンを再始動させると目的地で有るハンガーへと向かい出す。

「おやつさ〜ん居る！」

自分のテスト機でコアブースターの修理を行っている筈のハンガーの前でトラックを停車させたシヨウがそう叫ぶと、何だ五月蠅いな・・・とそのコアブースターの機体

下部から相変わらず不機嫌な声が返って来るので慌てたシヨウはすみません．．．と取り合えず謝ってしまう．．．

「別に怒ってねえよ．．．って何だあ坊主!?!またえらくビンテージな車に乗ってんな．．．?」

「ま、まあ．．．僕のじゃ無くてリンの所に有ったトラック何ですが、どうも調子が悪くて診て貰えないかと思って．．．」

そう頭を下げるシヨウに親父さんの使っていた奴か．．．とホワイトが腕を組みだすとシヨウはへっ?と素つとん狂な声を上げながら顔を上げだす。

「よし分かった。こんな古いのは俺しか見れんからな．．．ちよつと時間が掛かるから俺の使つてろ?」

そう自分のクルマのキーを投げて来るホワイトに向かってコアブースターのコクピットの中でキーボードを繋ぎながらOSの再調整を行ってた眼鏡姿の男性整備兵から苦情の声が聞こえて来る。

「明朝には仕上げろって指令から言われたつすよね!?!」

「五月蠅えぞシゲツ!!良いからソツチが終わったらエンジンの方を代わられてんだ!?!」

そう理不尽な怒られた方をされたシゲことシバ||シゲオ曹長がへえへえ．．．と答え

ながら手をヒラヒラさせるとフン！と鼻を鳴らしたホワイトがリンのトラックのボンネットを開けてエンジンに状態を調べ始めるとシヨウはあの・・・と不安気に首を傾げる。

「そんなに心配すんや坊主・・・ああ見えても奴の腕の腕は俺が保証するから・・・ってコイツはヒデえな・・・？」

「整備云々は心配してませんが、余り無茶なセッティングにしない様シゲさんに良く言つて置いて下さいね？前に酷い目に有ったんで・・・」

そう頭を掻きながら困った顔するシヨウに分かった分かったとホワイトが掛けていたサングラスの位置を直しながらククつと笑いだす。

「ちゃんと見といてやるから・・・それとコイツは今日一杯は掛かるからまた明日にでも取り来い。」

「あ、はい・・・有難うございますおやつさん。それじゃトラックをお借りしますね？」

そうペコつと頭を下げるシヨウに気を付けろよ！とホワイトが注意する様に二つと笑みを浮かべると、ホントにあの少尉の事気に入ってますね・・・？とシゲと呼ばれた整備兵がホワイトのトラックの有る方へと走って行くシヨウを見ながら首を傾げて来

る。

「そうか・・・？まあ、俺のイジツた機体に文句つけずに乗りこなしてんだからな・・・  
気に入らない筈が無いだろう？」

「そうなんすかね？俺つちも似た様なセツティングなんだけどカノウちゃんにはどうも  
不評なんだよな・・・」

そうボヤキながらスパナで肩を叩くシゲにこういういい加減な所だろうな・・・と思つ  
たホワイトがハア・・・と溜息をつきながら作業を再開すると、何で俺の顔を見ながら  
溜息なんかつくんすかあおやつさん？とシゲの不思議そうな声がハンガー内に空しく  
響くので有った・・・

くく

基地からリンの店へ戻る途中シヨウはアクセルを踏み込みながらへえコイツは良い  
や♪と上機嫌な声を上げるとギヤを上げながら更にトラックを加速させる。

「流石はおやつさんのトラックだな・・・結構パワー出てるしアクセルのツキが凄  
いや・・・」



そうしていたショウが町の中に入り段々と速度落とし始めると、そう言えば女の二人つきりで出かけるのって随分久しぶりだよなあ・・・と思いながら緊張し始めるとその相手が居るCASCAD Eと看板が掛かったパブが見えて来る・・・

「しかもあのリンと二人つきりとか大丈夫かな僕・・・?」

そう独り言ちながら小さく溜息をついたショウは右足と左足を器用に使いヒール&トウで減速をしながら小さなパブの前に停車すると、ボボボつと重低音鳴らすクルマの排気音に何事なの?!とリンが慌てて店から飛び出て来る。

「ゴメンリン、お待たせ!」

「いやお待たせって・・・それは良いんだけどさ?またえらく喧しいクルマで帰って来たわね・・・」

そう呆れた顔でリンがホワイトから借りたトラックを物珍しい顔で観察していると、おやつさんから借りて来たんだ?と運転席から顔出すショウはどこか嬉しそうな顔で二つと笑みを浮かべ出す。

「おやつさんって、まさか・・・ホワイトさんに修理出したの!」

「そうだよ? そう言えばおやつさんがリンの親父さんがって言ってたけど・・・」

そう首を傾げるシヨウにそう・・・と急に暗い顔したリンが俯くとシヨウはあれ・・・ど  
うかしたのリン! と慌て出す。

「あ、ゴメンゴメン・・・取り合えず行こっか? もうお昼前だし急がないとね!」

「う、うん・・・じゃあ行くよリン? シートベルト着けてね・・・」

そう同時にアクセルを煽りつつクラッチをパツと離したシヨウがトラックの後輪が  
砂煙を上げながらトラックを急発進させると、キヤア! とシートベルトを付けたばかり  
の助手席のリンから悲鳴が上がりながらもう! と抗議の声が上がり出す。

「今何か言ったリン?」

「言ったわよバカ! 折角掃除したのにまた砂だらけにして・・・!!」

そうムウつと頬膨らませて来るリンに帰ったら掃除するって・・・とシヨウが苦笑い  
を浮かべると、絶対だからね! とリンから返事が返って来ると、そのままドアに肘を付  
いて外を見だす彼女にシヨウは失敗したな・・・と思いながらトラックを走らせる。

## 束の間休日 その3

「所でさリン．．．どこに向かって走れば良いのか聞いて無いんだけど？」

トラックを走らせ始めてから約10分．．．そう首を傾げるシヨウに、そう言えば言つて無かつたつけ．．．とずっと無言のまま窓の窓の外を見ていたリンが思案顔のままコツチを見て来ると、シヨウは心配な顔で大丈夫とチラツとリンの横顔を見る。

「ゴメンゴメン．．．ちよつと考え事してたらブーツとしちやつたみたい．．．取り合えずこのまま海岸線に出て中立地帯にある市場の有る町へ行つてくれるかしら？」

「うん分かつた．．．って中立地帯だつて!？」

そう驚くシヨウにそれがどうしたの？とリンがキョトンとした顔で首を傾げると、

いやいや僕の服装見てよ・・・と困った顔を浮かべたシヨウは連邦軍正式の軍服とその上から羽織ったフライトジャケットを着た姿をリンに右手の親指を差しながら見せると、ああ・・・そう言う事ね。とリンから苦笑いされる。

「私も数回しか見た事無いけど・・・もしジオン兵と出会ったら面倒そうね？」

「面倒どころか相当ヤバいって・・・」

不安な事を言ってきたリンに頼むから居ないでくれよ・・・と内心祈ったシヨウは右腰のホルスターに収まっているUSPの存在を確認しながらそう答えていると、何か無いかしら・・・とリンがシートの後ろをゴソゴソと探り始める。

「あつ・・・これなんかどう？ホワイト大尉のジャンパーみたいだけど・・・」

リンがそう広げて来るジャンパーの背中の中の真ん中には大きくドクロマークのロゴとその下部には表現の出来ない下品な言葉が堂々と縫われており、これは流石に・・・とシヨウは苦笑いを浮かべる。

「そうかな・・・着たら意外に似合うんじゃない？」

「いや・・・何か別の意味で悪目立ちしそうなんだけどそれ!」

クスクスと笑いながら着せようとするリンに嫌がりながらそうツッコんだシヨウはトラツクを海岸線に出る道へとハンドルを切ると左手に見える巨大な海にリンが再び無言になってしまう・・・

「リンって海が好きなの？さつきからずっと見てるけど・・・」

「好きか嫌いかって言われたら嫌いかな・・・特にここのはね・・・?」

そうコツチを見ないまま意味有り気な事を言うリンにここのとてどう言う事？とチラツと見たシヨウが首を少し傾げると・・・所でシヨウの両親って健在なの？とリンから見当違いの返事が返って来るのでシヨウはへっ？と素つとん狂な声を上げながらそうだな・・・と思案顔になる。

「母親は小さい頃に出て行ったし……親父の方も今年の頭にジオンの降下作戦の時に撒き込まれたとかで死亡通知書だけが届いたよ……」

「そつか生まれは二ホンつて聞いたけど……今じゃ完全にジオンの支配下だし、それじゃあお父さんに会いたくても会えないね……」

そう悲しそうな顔をするリンにまあ……好き勝手やってた人だし……とシヨウは本人主義だった親父の事を心配してくれる彼女に申し訳無くなると、所でリンの両親は……?と首を傾げる……

「さつきもおやつさんがリンの親父さんの事言ってたし……どこか別の場所に居るの?」  
「いいえ……私のパパやママはあの場所に居たんだあの時……」

リンがそう海岸線の中心……コロニーの破片が落ちた爆心地で有る元シドニーの市街地を指差すといつ!?と驚いたシヨウは慌ててブレーキを踏み込むとそれより出来た

クレーターギリギリの所でトラックを停車させる。

「嘘だろリン……それって……!」

「うん。あの時たまたまシドニーに居たんだ二人共……その時コロニーが落ちてそのま  
ま……ね?」

そう泣きそうな顔をするリンにゴ、ゴメン……とシヨウが狼狽えながら謝るとリン  
もハツとしたのか私こそこんな暗い話なんかして……と困った顔でアハハ……と笑  
みを浮かべて来る。

「まさかそんな事が有ったとは思わなくて……本当にゴメン……」

「そんなに謝らなくて良いって……」

そう強がる様子を見せて来るリンに片思いと言う下心も有ったシヨウはええいまま  
よ!と勢いに任せてリンの

細い身体をギュツと抱きしめるとちよっ!?!とリンから驚く声を上げられながらもそのまま優しく背中へと手を回されてしまう……

「ひよっとして慰めてるつもり……?」

「う、うん……一応……」

嫌がる素振りも見せないリンの態度に内心では心臓バクバクのシヨウもそう答えるのが精一杯でリンがそれに気づいたのかクスッと微笑むと、調子に乗り過ぎよ!と少し顔を離れたリンからオデコをパチツとで弾かれたシヨウは痛つと涙目になる。

「ちよつと何すんだよリン……」

「彼氏でも無いのに勝手に抱きしめた罰よ! さあ、何してんの早く行かないと良いのが無くなっちゃうから急いでよねシヨウ?」

先程までの甘い雰囲気が無かった事の様リンがそう急かして来ると、何だかな……と



どこかやるせない気持ちになったシヨウはハイハイ・・・と答えながらトラックのアクセルを踏み込み再び目的地で有る中立地帯に有る町へと向かい出すので有った。

## 熱帯夜その1

少し不安だった中立地帯での買い出しも杞憂に終わり、シヨウはホワイトトから借りたピックアップトラックの荷台に荷物を載せていると、ゴメンね遅くなっちゃって……とリンが申し訳なような顔で更に段ボールを手渡して来る。

「良いって……どうせやる事無かったし、それにしても沢山仕入れたねリン？」

「たまにしか来れないから来れる時に買つとかないといけないからね……まあ店の保管庫とかに入れて保存にさえ気を付ければそこそこ持つから今度行くのはまた数瞬間後ね。」

そう思案顔を浮かべるリンの目線の先には酒に食材、その他諸々が入詰まったかなりの段ボールが山の様に積まれていてシヨウはこりゃあ明日から楽しみだね？と二つと笑みを浮かべる。

「そうそう！シヨウが好きな生魚も安く手に入ったから早速今晚作つて上げるわね？」

そう言いながら積まれた段ボールの隅に置かれた発泡スチロールの箱をリンが指刺

すと、マジで!?とやはりニホンの血が流れているのかシヨウは小躍りしたくなるのを抑えながらありがとうリン!と満面の笑顔でその手をギユツと握り出す・・・

「う、うん・・・分かったからシヨウ・・・手が・・・?」

「あ・・・ゴメン、リン!?嬉しくてつい・・・!」

そう慌てながら手を放すシヨウにいや別に嫌じゃ無いんだけど・・・と顔を赤くボソとリンが呟くとシヨウはえっ?と首を傾げる。

「何でも無い!・・・良いから早く帰ろう!お腹も空いたし・・・」

「う、うん・・・それじゃあちよつと飛ばすよ?」

そう言いながら助手席を乗り込むリンにシヨウも慌ててトラックのエンジンを掛けると、自己嫌悪に陥ったシヨウは何か気まずいな・・・と道中の一件と今の事を思い返しながら行きと同様海を見ながら無言のリンとCASCAD Eの有る町へと到着する。

「ねえリン・・・これ全部ホントに入るの!?!」

「入口は狭いけど・・・奥は意外と広いから大丈夫だつて?」

店へと到着した途端いつも様にテキパキと指示を出すリンに、内心良かったと思いつながらシヨウは少し安堵しながら早速荷台から数個の段ボールを抱えると、先を歩くリンに付いて行きながら店の食材保存庫が有る奥まで足を進める。

「これだけ広いなら全部が入りそうだね？」

「うん。一応常温で保存できる様にしてるし、奥には父の趣味で小さいながらもワインセラーも有るのよ。」

自慢げにフツツと笑みを浮かべて来るリンにシヨウはへえ……と驚いた声を上げる。

「ワインはあんまり飲んだ事無いけど……今度頼んでいようかな。」

「まあ、ウチの店でもそんな上品なお酒飲む人居ないしね？」

そう答えながらクスクスと笑い出すリンにシヨウも確かに？とククつと笑いだしながら外に出てその作業を繰り返すと、リンが荷台の上から最後の段ボールを手渡してくれる。

「これが最後みたいね。置き終わったら休憩しようつか？」

「オツケー……僕もお腹も空いたしさつきと終わらせませるかね！」

そう言いながらシヨウが乱雑に置かれた段ボールの上に積み重ねると急にグラグラと揺れ出すので、シヨウ危ないっ!?と叫んだリンからの背後からのタツクルにシヨウはグフっ!?と苦しそうな声を上げながら保管庫の床を転がると何故かリンが自分に馬乗

りになりながら見下ろしてる。

「えっと・・・結構大胆だねリンって？」

「ち、違っ!?! 私はシヨウを助けようとしただけで!!」

そう答えながら顔を真っ赤にするリンにシヨウはゴメン・・・と腕を伸ばしながらリンの頭をそつと撫でる。

「ねえシヨウ・・・私ずつと言いたかった事が有るんだけど聞いて貰って良い？」

頭を撫でる手を自分のと重ねながら首を傾げるリンにうん・・・とシヨウも答える。

「僕もずつと・・・リンに言いたかった事が有るんだ。」

「ホントに・・・?じゃあシヨウから聞かせて・・・」

そう目を潤わせながらジツと見つめて来るリンにゴクつと息を飲んだシヨウはあのねリン!と覚悟した様に彼女の肩を掴みながら起き上がると真剣な顔を見せる。

「僕・・・初めて会った時からリンの事がずつと気になって・・・好きなんだ!」

「そっか・・・シヨウっていつも私を助けてくれるし、凄く優しいからそうだよな・・・つて気づいてた。」

そう言いながら苦笑いを浮かべて来るリンにコレはダメな奴だ・・・と数少ないながらも感じた事が有る予感にシヨウがガクつとテンション落とすすと、でもね!と急に

顔を近づけて来るリンにシヨウはちよつとリン!?!と狼狽える。

「どうせ店に来る人と同じだな奴だつて思つてもシヨウつていつも優しいから・・・ワザと気付かない振りしてたけど私もシヨウの事が好き!」

そう声を上げながらキスして来るリンに嘘つ・・・!?!とシヨウが内心驚きながら右往左往する両手でやつとの事その抱きしめると、シヨウも何か言つてよ・・・?少し恥ずかしいのか照れ隠しの様にリンがハハっ・・・と笑つて来る。

「えつと・・・リンの勘違いなんかじゃ無くてさ、僕はリンの事が好き・・・ずっと前から大好き!」

「やつと言つてくれたねシヨウ・・・私もシヨウの事ずっと前から大好きだよ?」  
「リン・・・」

そう言いながら顔を赤くするリンにこれはヤバいな・・・と思つたシヨウは理性に負けつつ彼女が汚れても良いよう着ていたスエットの裾から胸の膨らみへと手を伸ばし

ながらリンの頭に手を回しキスする。

「んっ・・・ちよ、ちよつとシヨウ・・・ここじゃダメよ。」

「じゃあリンの部屋なら良い？」

そう言いながら二つと笑みを浮かべたシヨウが俗にいうお姫様抱っこをすると、手で顔を隠すリンからもうヤダ・・・と顔を真っ赤にしながら抗議の声が聞こえて来るがシヨウはすぐ着くから・・・？と素知らぬ顔で二階へと上がり出す。

「リン大好き・・・」

「バカ・・・私だつて好きよシヨウ？」

ベッドに押し倒しながらもそう悪態をつき微笑んで来るリンに僕の方が好きだつて・・・とシヨウは少しムツとすると、今日は寝かせないから！と流石に限界だったのか強引にキスを再開するので有った。

くくく

## 熱帯夜その2

「ちよつとシヨウ！起きなさいって．．．遅刻するわよ？」

「んっ、ん．．．リン？」

自分の身体を揺らしながら聞こえて来る声にシヨウがぼんやりとした頭で目を擦りながら開けると、やつと起きたわね。と腰に手を当てながらフフツと優しい気に微笑んでいるリンの姿が見えたのでリンおはよ．．．とシヨウはキヤツ!?と驚く彼女の手を引つ張りながらベッドサイドへと座らせる。

「そ、その．．．身体大丈夫？昨日大分アレだったし．．．？」

「う、うん．．．平気だよ!？」

昨晩遅くまで続いてしまった情事を思い出したのかリンがそう答えながら顔を真っ赤にすると、自分の体を起き上がらせたシヨウは良かった．．．と言いながらその細い腰を引き寄せながらリンのこめかみに軽くキスするとそのまま背後から抱きしめる。

「ちよつと．．．ダメだったらシヨウ．．．」

「マジで信じられないや．．．リンとこんな風に朝を迎えるなんてさ？」

そう言いながら肩口で二つと笑みを浮かべるシヨウに私だって．．．とリンも答えな



がらどちらと言う訳でも無く唇を重ねていると、ピーっとキッチンからお湯の沸いたポットの音が聞こえて来る。

「ん・・・朝ご飯作の準備するからシャワー浴びて来て。」

そう言いながらも艶っぽい目をするリンに分かったよ・・・とシヨウは渋々ながらリンを解放すると、ちよつとヤバいなコレ・・・と昨晚脱ぎ散らかした服を拾いながらバスルームへと向かう。

「あつ・・・何か凄く良い匂いがするね?」

シャワーを浴び終えたシヨウが再びダイニングへと戻ると、まあね?と満面の笑顔を浮かべるエプロン姿のリンがヒョコつとキッチンから顔を出す。

「今日飛ぶって聞いてたから簡単にスープとパンにしたんだけど?」

「あ、うん!それくらいの方が助かるよリン。」

リンの気遣いに嬉しく思いながらシヨウがテーブルに着くと、ホカホカと湯気を立てている香ばしい匂いさせるコーンスープとパンを乗せたトレーをテーブルへ置いたりも対面の席に座ると、こりや美味そうだね!?!とシヨウはテンション高めに手を合わせ出す。

「うん。トウモロコシを沢山貰ったから久々に作ってみたんだ。口に合うかは分からないけど、どうぞ召し上がれ?」

「リンが作ったんだから絶対に美味しいって?それじゃあ遠慮なく頂きます!」

そう言いながらガツガツとスープとパンを食べ始めるシヨウに何それ?とリンもクスクスと笑いながらスープを口へと運ぶと、「美味しい!」とついシヨウと声が被ってしまうのでシヨウとリンはお互い顔を見合せながらアハハ!と笑い出してしまふ。

「うわあ・・・すっごく甘くて濃厚!パンにも良く合うしさすがリンだね?料理上手!」  
「フフツ、ありがとうシヨウ。こんなので良かったらいつでも作るわよ。そ、その私達恋人なんだし?」

そう答えながら恥ずかしそうにコツチを見るリンにシヨウがブツ!と飲んでいたコーンスープを盛大に嘔き出すと、咳き込むシヨウにちよ、ちよつとシヨウ大丈夫?!とリンから慌てて背中を擦られる。

「い、いや大丈夫、ちよつとビツクリしたただけだから・・・そつかそうだよね恋人なんだよね僕達って?」

「ちよつと!あれだけお互い好きって盛り上がって置いておいて・・・この場に及んで今更一夜の間違いとか言ったら流石の私も怒るわよ!」

そう言いながら少し困った様にポリポリと頭を掻き始めるシヨウにムスつとした顔

でリンが詰め寄るので、いやそうじゃ無くてさ……と答えたシヨウは今度は真剣な顔でリンを見る。

「リンも知っている通り僕は連邦軍の戦闘機パイロットなんだ。確かに昨日は勢いで告白しちゃったしリンも僕の事が好きって事が分かって凄く嬉しかった……けど、僕の職業柄いつ死んでもおかしく無いと言うか……出来ればリンには悲しい顔をさせたく無いんだ?」

シヨウが少し俯きながらそう答えると、何それ!?とリンから腰に手を当てながら溜息をつかれるのでシヨウはえっ……と驚いてしまう。

「私は年上だし、今までずっと我慢してた気持ちをやっとなげたと伝えて言うのに……いきなり別れ話とかふざけてんじゃ無いわよ!」

そうドンつとテーブルを叩きながら怒声を上げて来るリンにでも今ならまだ……と煮えくららないシヨウにリンは五月蠅い!と首根っこを掴み上げる。

「良いシヨウ……そんなの簡単な話よ?どんないかなる状況でも生きて私の所にアンタは戻ってくれば良いの!」

そう言いながらニコツと微笑みながら言動と行動がかみ合って無いリンにわ、分かった……と半ば怯えながらシヨウがコクコクと頷くと、フツと微笑んだリンは宜しい

♪と満足そうな顔でシヨウを解放する。

「じゃあ改めましてシヨウ⇨カノウに聞きます。私と恋人として付き合ってもらえますか?」

「は、はい、僕は愛するリン⇨ローダンセの為に何が有っても絶対に死なないと誓います。」

そう緊張気味に答えるシヨウに絶対だからね・・・?とリンが優し気な顔でフツツと笑って来るので、分かったって・・・シヨウは苦笑いを浮かべる。

「約束だからね・・・破ったら承知しないんだから!」

リンがそう言いムスツと頬を膨らませると、絶対にリンは悲しませないよ?と答えたシヨウは彼女の身体を優しく抱きしめるので有った。

## 熱帯夜その3

急に出来た休日にリンと濃厚な日を過ごしたシヨウはじゃあ言つて来るね?と言いながら昨日借りたホワイトのトラックのエンジンを掛けると、ねえシヨウ?とリンが運転席のシヨウを見るように肘を付きながら覗き込んで来る。

「今日もウチに来る?」

「今日の訓練次第だけど・・・リンのトラックを入れ替えないと行けないからココには来るよ。」

そう言いながら二つと笑みを浮かべるシヨウにじゃあ待つてる・・・と少し寂しそうな顔をするリンから頬にキスされたシヨウは絶対行く・・・とそのキスに返す様にリンの唇を味わっていると、遅刻するって・・・と顔を真っ赤にしたリンから抗議する声が聞こえて来る。

「ゴメンゴメン・・・じゃあなるべく早く行くから!」

「ウン・・・美味しい夕飯作つて待つてるからね?」

そう言いながらクスッと微笑むリンに普段とは違いシヨウは朝からテンション高めに分かったと答えながらトラックを飛ばすとトリントン基地のゲートが見えて来る。

「朝帰りですかい少尉？」

そう言いながら苦笑いを浮かべる警備兵に自分の身分証明を出したシヨウがゴメン！と見逃してくれた軍曹に手を合わせながらゲートをくぐると、あれはチャーリーかと官舎近くを歩く金髪を見つけるとシヨウはパツパーとクラクシオンを鳴らす。

「ようシヨウじゃねえか・・・お前昨日一日どこに居たんだけ？」

「いやその・・・昨日はリンとずっとね・・・」

シヨウがそうしどろもどろしながら答えると、マジかよ!?とチャーリーから驚いた声が上がりにながらトラックの助手席へと乗り込んで来る。

「そつかそつか・・・いやくやつと結ばれたんだなお前達は!？」

「五月蠅いな・・・そう言うチャーリーはアメリカとどうなつたんだよ？」

そう言いながらバシバシと肩を叩いて来るチャーリーにシヨウが首を傾げながらトラックを再び発進させ出すと、チャーリーからいやそれがな・・・?と腕を組まれる。

「いや・・・昨日俺も気づいたら自分の部屋のベッドでぶつ倒れててよ?あの後アメリカ

と何を話したのか全く覚えて無えんだよな……」

そう言いながら考え込むチャーリーにシヨウはまさか!?!と思ひ慌ててチャーリーの方を見る。

「一応聞くけどアメリカに手一出した訳じゃないよね?」

「出すかよ……さすがの俺でもあれだけ飲んでたら勃たないつうの!」

そうこう言いながらお互いの目的地で有る格納庫の前に到着した二人がトラックから降りると、ようシヨウ?と挨拶をしてくれた同僚のパイロットがチャーリーの顔を見ると突然チツ……と舌打ちするのでシヨウはへっ?と驚きながらチャーリーの方を見る。

「何あれ……また何かやったのチャーリー!?!」

「いや、俺も分かんねえけど……昨日から妙に俺に対するヘイトが凄んだよな?」

そう言いながら首を傾げだすチャーリーにふーん……とシヨウも不思議そう格納庫中に入ると、おっ坊主!とコアブースターの最終チェックをするホワイト大尉がニヤニヤしながら手を上げて来る。

「その様子だと上手く行った様だな?」

「えつと・・・お陰様でリンとはそんな感じで・・・おやつさんにはホント感謝してます。」  
そう言いながらキーを投げるシヨウにじやあ今日はその恩を返せよ?と修理が終  
わったのかリンのトラックのキーを投げ返されたシヨウは今晩リンの店で・・・?と二つ  
と笑みを浮かべながらパイロットスーツへ気着替えようとハンガーの中へチャーリー  
と共に進むと、待ち構えていた様に小隊長で有るイエーガーⅡパウスネルン中尉から腕  
を組まれる。

「ようチャーリー・・・俺も今日になつて聞いたんだが?あの後飲んだ日の朝方にお前の  
部屋からウォーカー軍曹が出てきたって言うのは本当なのか?」

「えっアメリカが・・・?いや俺には何の事だかさっぱり・・・!?!」

そう答えながら驚くチャーリーにイエーガーから良く聞け・・・と溜息をつかれる。

「非番だったから知らんだろが・・・お前昨日今日でこのトリントン基地内じや女たらし  
のチャーリーって名で有名だぞ?」

「ちよ、何なんすかその不名誉な名前はっ!?!」

苦笑いを浮かべるイエーガーからの説明にチャーリーが目を見開きながら異議を求  
めていると、それに関して私は私が説明します・・・と格納庫の扉の外から関係者の一人  
で有る赤毛の下士官が覗き込んで来るのが見えるのでチャーリーからアメリカ!?!と驚  
いた声が上がります。



「どうしたんだよ急に?」

「いえ、その…どうも私がチャーリーの部屋から出たのを誰かに見られたらしくちよつと弁解にしに伺いました。」

アメリカがそう言いながらおずおずと格納庫内に入つて来ると、間近で見たコアブスターに興味深々な顔をしながらシヨウとチャーリーの前に立つ。

「な、なあアメリカ俺は決してお前に手を出して無いよな!」

「それは勿論です。それどころかチャーリーは自分の部屋を教えるのが限界で…どうにかベッドに寝させることに成功したんですが私もそこで力尽きてベッドを借りてしまつたんです」

そう答えながら申し訳無い顔になるアメリカにチャーリーはへっ?と素つ頓狂な声を上げる。

「こんな可愛い子が隣で寝てたのに俺って奴は…」

「いやいや、もし私に手を出してたら今頃病院のベッドの中ですよ?」

チャーリーに答えながらアメリカがクスッと微笑むと、これは手強いなチャーリーの奴とシヨウは親友を見ながら苦笑いを浮かべるので有つた。

## 悪夢

私は要領が良かったのか小さい時から何でも出来た。大きくなって友達に追いつかれそうになっても努力して勉強も運動も頑張った・・・そしてハイスクールを優秀な成績で卒業した私に当時何故か連邦軍からスカウトが掛かった。

「アメリカンアンウォーカーさんだね？工業科での君の実績は勿論だが体力面でも申し分無い・・・どうだい士官候補生として歓迎するから軍に入隊するのは？」

そう甘く囁いて来る連邦軍の徴兵官に私は当時サイドーでパン屋を営んでいる両親に喜んでその事を伝えた所・・・軍に入るとは本気か!?!と怒鳴られてしまったが、自分の実績を汲んでくれた事と学費も免除と言う事も有り渋々ながら許してくれた。

「あ、アンタが新しく入る子ね？私はケイキタムラよ。」

私がスペースノイドと言う事も有り少し遅れて地球に降りたルームメイトの子は真面目を自負している様な眼鏡を掛けた子だったが、明瞭でハキハキした綺麗な優しい子で士官学校を卒業するまでずっとコンビ組んでいた。

「ねえアメリカ．．．昨日一個上の先輩に告られてたでしょ？」

成人し放課後のバーでそう尋ねて来る親友に私が興味無いな．．．と答えていると、またまナンパして来たしつこい奴らを二人で退治した事も有る。

「良し！それでは卒業訓練を兼ねた模擬戦を行うぞ？」

そう言つて来る教官の傍に並ぶ特務部隊の隊長が並ぶと、今日は気合い入れるわよ？と隣からケイが肘を突いて来る。

「しょ．．．!?勝者はアメリカ!!アン!!ウォーカー!!」

仰天しながら自分の腕を掴む教官に驚いていると、こんな事．．．!?と驚きながらジロツと睨んで来る特務の隊長が睨んで来る。

「ウソツ!?アメリカ特務隊に内示が決まったんだ！えっ私？私は何でか知らないけど情報部から来ないかって言われてる．．．」

そう浮かぬ顔をする親友に私はケイなら大丈夫と言った。

「ウォーカー少尉ついて来ているな！」

最近噂に上がる様になったジオン共和国軍のスパイの拠点があるらしく酒場に飛び込んだ私は隊長に続き中に入ると、武器を構えた男性の事は勿論の事店の中にいた民間人も撃ってしまったが・・・特務では日常茶飯事なのか何もお咎めが無かった。

「ホントにウォーカー少尉は優秀ですね・・・ただ残念なのはスペースノイドだと言う事です。」

私をこのクソみたいな部隊に引き入れた私の上官はどうやら俗に言う地球至上主義らしくスペース・ノイドで有る私を嫌っている。

「お、おい・・・今サイドコロニーのアイランドイフツシュが地球に墜ちたらしいぞー」  
南米ジャブローの地下基地に有る食堂でいつもの様に味のしない昼食をこなしていた私はそう騒ぎ立てる様々の部隊の隊員達の声にえっ・・・と驚いた声を上げると、多忙の余りに毎月の様に手紙を送ってくれた両親の居たコロニーも全滅したと聞き静かに涙を流した・・・

「へへっ・・・ウォーカー？お前もジオンのスパイじゃ無いのか？」

ジオンによるコロニー降下作戦により更に居場所を失くした私にそう言いながら隊長で有るリンスと同じく地球至上主義を掲げる同僚たちがニヤニヤしていると、なあ脱げよ？と一人の男性士官が胸倉を掴んで来るので私は必死にもがいた。

「暴れるなって・・・俺の父親が連邦軍の高官だって知ってるだろ？それにこれから起き

ることは隊長も黙認なんだから・・・諦めろよスペースノイド?」

ここまで必死に頑張つて来たのに今まで溜まつていた物が爆発した私はその同僚に頭突きをかました後の事は良く覚えて無い・・・しかし今でも記憶に残るのは軍事裁判が行われた法廷で私に不利な証言証言をしたニヤつく上官の事だけである・・・

くくく

「うわあっ!?!」

久しぶり見た見た夢で起きたフラッシュバックにそう焦つた声を上げながら慌てて飛び起きたアメリアはここは一体・・・?と自分の部屋では無い場所に首を傾げだすと、もう飲めねえって・・・と隣で寝ているチャーリーからの寝言かにああそうだ・・・と手をポンと叩き出す。

「酔っぱらつたチャーリーを部屋まで運んだ後私も力尽きたんでしたっけ・・・?」

飲み過ぎた所為か二日酔い気味の頭を抱えたアメリアが先程見た夢を思い返しながから久しぶりに嫌な夢見たな・・・と独り言るとアメリアはサラサラと金髪のチャーリーの頭を優しく撫で始める。

「ちよつと頼りないナイトだけど・・・今度は信用しても良いですか・・・チャーリー?」  
フツツと微笑みながらそう呟くアメリカに、んーアメリカ・・・?とチャーリーから急に手を引かれたアメリカはウニヤつ!?!と素つ頓狂な声を上げながらベッドの中に引つ張り込まれるとそのままチャーリーの胸の中へと抱きしめられてしまう・・・

「ちよつと・・・起きてるんですかチャーリー!?!」

顔を真っ赤にしながらそう抗議の声を上げたアメリカがチャーリーの拘束から逃れようとジタバタするが聞こえて来るのはスヤスヤと聞こえて来る寝息だけで有る。

「これじゃあ帰れないじゃないですか・・・まったくもう!」

取り合えず朝になつたらまた考えようと思つたアメリカが取り合えずもう一度眠ろうと目を瞑つたその早朝・・・あれ自由に動けますね?とそのままガバッと起きたアメリカは隣を見ると寝相が悪いのかベッドの端で寝ているチャーリーの姿を見つけクスクスと笑い出す。

「良く寝てますね・・・じゃあ私は帰りますよ?」

完全に寝入っているチャーリーに呟いたアメリカが起こさない様にと静かにベッドを降りると、またね?と笑みを浮かべながらチャーリーの部屋を出た・・・のだがその時の事を誰かに見られたらしくアメリカはその日のシフトが上がると共に上官で有るマリアートパレス曹長から呼び出しを食らう事となつた。

## 再スタート

気を利かせてくれたのか少人数で使うミーティングルームの中に入った途端にマリアが、あのねアメリカ・・・?と真面目な顔で心配して来ると、アメリカは何でしょう?と不思議そうに首を傾げだす。

「えつと本題に入る前にちよつと聞こうと思っただけど、アンタが今朝チャーリーの部屋から出て来たつて基地内で噂になってるけどホントなの?」

「えつそうなんですか!?!気を付けたつもりだったのに・・・」

「気を付けたつもりつて・・・あれだけ私もチャーリーには気を付けろつて言つたじゃない!?!」

「そう言いながら頭を抱えだすマリアにムアメリカはどう意味ですか?とムウと首を傾げだす。

「どう意味も何もチャーリーの部屋から朝方出て来たつて事は寝たつて事でしょう!?!」

「え、ええ・・・確かに酔つたチャーリーに抱きしめられてしまい仕方なく一緒に寝てしまいましたね・・・」

そう答えたアメリカが昨晚の事を思い返しながら少し照れ臭そうな顔を見ると、シタんじや無いの？とアメリカの言葉に何か違和感を感じたのかマリアから首を傾げられると、そんな関係じゃ有りませんっ！とマリアの本意に気付いたのかアメリカは顔をポツと赤くしながらジロつと上官で有るマリアを睨みつける。

「そうだったら良いんだけど・・・酔つてる男の部屋に一人で行くなんて何か間違いが有つても言い訳出来ないんだから気を付けなさいアメリカ！」

「了解ですマリア曹長・・・所で本題の前にと先程言われましたが、このお説教の他にまだ何かるのですか？」

不思議そうな顔で尋ねて来るアメリカにそうそう忘れてたわ！とアメリカとチャリーの事が気になり過ぎていたらしいマリアが手をポンと叩きながら少し困った顔になる。

「実は先日行った試作機のテスト中に起きた敵機に対するアメリカの見事なサポートに感心したのかわからないけど、今奴等が行っているコアブースタープランとか言う専任のオペレーターにしたいとバリサム司令が言つて来てるのよ？」

「バリサム指令が・・・それにシヨウとチャリーの専属つて!？」

そう驚いた声を上げるアメリカに大抜擢ね？とマリアからクスつと微笑まれたアメリカはハア・・・と溜息をつきながら正気なんですか・・・とマリアに呆れた顔を見せ



る。

「私はまだここでは新任のオペレーターなんですよ。そんな重要なプロジェクトに参加するには荷が重いです！」

「私もそう言ったんだけどね……整備班のホワイト大尉からもアンタの肝つ玉にシヨウとチャーリーのストッパー役に丁度良いと太鼓判押されてるからね……諦めなさいアメリア？」

アメリアが説明しながらそう苦笑いを浮かべて来るマリアに分かりました……と洩々命令を拝命すると、じゃあ明日からあのバカ二人の事を頼むわね？と少し困った様に笑うマリアにビシビシと指示を出して見せますよ？とアメリアも二つと笑みを浮かべながら敬礼するので有った。

くくく

「よおシヨウ、チャーリー調子はどうだ？」

同僚のパイロット達からの挨拶しながら更衣室の中から出たシヨウとチャーリーはパイロットスーツと耐Gスーツで身を包み愛用のヘルメットを持ちながらハンガーへと降りると、急げ急げ！チンタラしているとオーストラリアの砂漠に埋めちまうぞテメえ

ら!!と整備班長ホワイト大尉の怒声に苦笑いしながらお互いの機体へと向かいます。

「それじゃあ今日も頼むよチャーリー?」

「任せろって相棒お前のケツは俺が守ってやるよ!」

シヨウが隣の随伴機で有るFF-4トリアーエズに乗り込もうとするチャーリーとそう言い合いながらお互いグツと親指を立てながら自身もFF-X7BSTコアブースターのコクピットへと収まると、機体の方はバッチシだからねシヨウちゃん?と整備主任のシゲが二つと笑みを浮かべながらハッチまで登って来る。

「一応おやっさんの指示通りにスロットルは相当絞ったから・・・前みたいにドカンと加速しないから失速にきをつけてよね?」

「うん、分かったよ。シゲさんありがとう!」

シゲにお礼を言いながらハッチ閉めるよ?と声を掛けると、グッドラック!と言いながら梯子を下りるシゲを確認したシヨウはハーネスのチェックと機体のシステムチェックを行い出す。

「良し・・・こちらCBP1システムオールグリーンだ。」

「トリントンコントロール了解です。CBP1・2共に滑走路への侵入を許可します。」

先日引き続きアメリカから指示にシヨウはどこか安心しながらハンガーから出したコアブースターを滑走路へとタキシングさせるとチャーリーのトリアーエズも横に

並び出す。

## 危ないチーム!?

「なあ前から君の声は綺麗だなんて思ってたんだ俺は・・・」

「ええ、少尉の事は先輩達からは遊び人だから気をつけるって言われるんですけどお？」

「そんなの噂だって!?俺がどれだけ紳士って言う事を教える為に今度飲みにも行かないか?」

そんな無線が聞こえて来る隣に座って居る後輩の管制官とチャーリーとの会話にアメリカはちよつとミリイ・・・?とジロつと睨みだす。

「どうしよつかなあ・・・ってなんですか先輩?」

「何ですかじや無いですよ!発進前のパイロットと何バカな事話してるんですか!」

「だってえ、向こうが誘って来たんですよお?」

ここトリントン基地のオペレーターとしては任期が長いが年下で階級も一個低いミリイ、タニグチ伍長があざとく首を傾げると、もう良いです!とアメリカは手元に有るスイッチを切り変える。

「じゃあさ今夜辺りとかどう・・・」

「すみませんが話はそこまでですCBP2!・・・さっさと任務に戻りなさいっ!」

イラつくようにそう怒声を上げたアメリカに対しチャーリーは元より隣のミリイもヒツ!?と悲鳴を上げてしまうので、ミリイは関係有りませんか?とアメリカが手を振りながらジェスチャーすると、ホントに貴方って人は!とプライベート回線を使ってヘッドセットの向こうに居るチャーリーへと怒り出す。

「私の事が気になるとか言いながら気軽に別の女性を誘って・・・私に喧嘩でも売ってるんですか!」

「ちよ、ちよつと待って待て!?!お前こそ昨日素っ気ない態度であしつた癖に・・・まさか俺にやきもちでも焼いたのかよ?」

そう言いながらへへつと笑いだすチャーリーに誰がアンタなんかに!?!とヘッドセットを掴んだアメリカが顔を真っ赤にしながら抗議の声を上げていると、ねえ先輩?とミリイから肩を叩かれる・・・

「何ですかミリイ!」

「痴話喧嘩はシフトが終わってからにしてくれないかなアメリカ：後ろでバリサム指令も睨んでるからさ?」

苦笑いを浮かべながらそう耳元で囁くマリアにギョツとしたアメリカは慌ててCB P2準備は良いですか!?!指示を飛ばし始める。

「コツチはいつでも良いぜ?」

「了解です。CBP1も良いですね?」

通常回線に切り替えたアメリカからの声にオツケーと答えたシヨウは何話してたの?と二人に尋ねると、他の女に声を掛けるなってよ?とチャーリーがニヤニヤしながらそんな事を言つて来るのでそれホントとつい聞き返してしまふ。

「自分の都合の良い様に解釈しないで下さいチャーリー!?!それとシヨウもチャーリーに感化されずに与えられた任務を真面目にこなす様に頼みますよ!」

まるで上官の様な物言いに違和感を感じたシヨウとチャーリーがコクピット越しに顔を見合わせていると、あつそうそう!と何故か妙に楽しそうな彼女の上官で有るマリアの声が割り込んで来る。

「今日からアンタ達が携わっているコアブースタープランの専属オペレーターにアメリカを置く事にしたから命令違反すると後が怖いわよ?」

「そう言う事なのでCBP1・2へ今日も頑張つて行きましょうか?」

そう言いながらニコつと微笑んで来るアメリカにマジかよ・・・と呟いたシヨウは隣のチャーリーが手を肩まで上げながらお手上げのポーズを取つて来るのを見ながら了解と答えながらハア・・・と溜息をつきだす。

「(こちらCBP1了解だ・・・CBP2も良いな?)」

「CBP2了解した。エスコート頼むぜアメリカ!」

シヨウとチャーリーの返事を聞いたアメリカがこちらこそお願いしますね。と真面目な顔になると、シヨウとチャーリーもコアブースターとトリアーエズのエンジン出力を徐々に上げながら滑走路を加速して行く……

「こちらトリントンコントロール周辺空域に異常無し、CBP1、2へ幸運を」

「サンキュー、トリントンコントロール!CBP1離陸する!」

「CBP2も行くぜっ!」

アメリカからの言葉にシヨウとチャーリーの二機が綺麗に揃って離陸すると、ドンッ!と急にアフターバーナーを吹かしながらハイレートクライムをかましながら急上昇を行う二機にアメリカはCBP1、2!と怒り出す。

「緊急出撃《スクランブル》じゃ無いんですから、試作機にそんな無茶しないで下さいよ!……後でホワイト大尉に怒られても知りませんからね?」

「無茶させた方がすぐに欠陥が分かった良いと僕は思うけどな……」

「無茶するのはシヨウの勝手ですが、その機体にどれだけの人員とお金がかかっていると  
思ってるんですか?良いから予定通りの飛行ルートに戻りなさい!」

アメリカからの溜息息交じりの言葉にシヨウは分かりましたよ?と答えながらチャーリーのトリアーエズと共にコアブースターの高度を下げながら作戦空域の有る

方へと下げながら機首を向けるので有った。



## 敵襲

「つて言うか先輩つて試作機の専属オペレーターになったつて聞きましたけどお．．．なんだか大変そうですねえ？」

「ホントですよ．．．聞けばあの二人つてこの基地でも有名な問題児つて言うじゃ無いですか？」

「確かにそうですねですけど腕は確かですよ。ここトリントン基地の撃墜数だけで見るとカノウ、ウイルソン両少尉がワンツーで．．．その次に僅差で彼らの上官で有るバウスネルン中尉ですからねえ．．．」

そう説明しながら首を少し傾げ出すミリイに腕だけ良くても困るんですよ．．．と答えたアメリカが苦笑いを浮かべていると、管制官のリーダーで有るマリアートパレス曹長からちよつと私語が多いわよ？と叱咤される。

「それとミリイにはアメリカがこんな状況だから今日は一人で定期便のエスコートを頼むわね？」

「ええ、私だけでやるんですかあ!？」

「元々アンタが先任なんだからアメリカに甘えないの!」

そう指示を出して来るマリアに分かりましたよお!とミリイが不貞腐れた声を上げると、頼みますねミリイ?とアメリカも彼女を宥める様にクスつと微笑むのでマリアから私もフォローするから?と二つと笑みが浮かび上がる。

「アメリカもこの前みたいなヤバい状況になつたらすぐ報告する事。私が間に入つて対応するからね?」

「あんな状況になる事なんか早々無いと思いますが・・・もしもの時は頼みます。」

そう答えながらヘッドセットを付けたアメリカがCBP1、2聞こえますか?とシヨウ達に通信を繋ぎだすと、何も無ければ良いけど・・・とマリアは妙な無騒ぎを感じながら自分の席に座ると上面に設置された大型のレーダーサイトに映る作戦空域へと向かう二つの光点に向かって絶対に帰つて来なさいよ二人共・・・と小さく呟きながら腕を組みだす。

~~~~~

「CBP1、2そろそろ作戦空域です。今回はコアブラスターのビームキャノンを使つての対地攻撃のテストを行いますので、いつもみたいにふざけてると怪我しますから気

をつけて下さいよシヨウ！」

「分かっているってアメリカ・・・」

アメリカからの指示にそう答えたシヨウがコアブースターのスロットルを一気に絞ると行くぞ！と声を上げながら左脚のラダーペダルを蹴つ飛ばし右前へとステイックを倒しながらシヨウはコアブースターを目標へと攻撃を仕掛ける為に急降下を仕掛ける。

「目標はコロニー残骸に隠した的ですが・・・本当に見えてるんですかCBPI?」

「そんなのとづくにロックしてるって・・・貰ったっ!!」

オペレーターで有るアメリカからのフォローを借りずにシヨウが操縦桿のトリガーを絞るとコアブースターから放たれた二門のビームが的を貫きその直後にドンっ！と土煙が空に向かって高く上がり出す・・・

「ビンゴ・・・そっちでも確認したろアメリカ?」

「え、ええ勿論です。まさか修正も無しに一発で当てるとは正直驚きましたね・・・」

シヨウはこういうの得意なんだ?と言いながらモニターに映っている呆気に取られた顔のアメリカに向かってニヤニヤとしていると、俺もビックリしたぜ!?!と上空で警戒していたチャーリーからも通信が入って来る。

「あんなダイブしながら的に当てるなんて流石はエースのシヨウだな?」

「エースって言うなって！それに動かない的に当てるのなんて簡単じゃないか!」

チャーリーに対しシヨウがそう言いながら急に怒り出すと、ちよつと二人共・・・とアメリカはああだこうだと言いつつ合いを始める二人に対しストップを掛けようとした瞬間にレーダーを表示させているモニターから警告音がピーつと鳴り響き出す・・・

「レーダーサイトに未確認機を複数機確認です!」

「コツチでも確認してるけど・・・定期便のミデアじゃないのミリイ!」

そう焦った声を上げて来るマリアに半分正解ですねえ・・・とヘッドセットを外したミリイから困った顔をしながら返事が返って来る。

「IFF 《敵味方識別信号》の確認を確認した所・・・3機の内1機は友軍機のミデアで残り2機はジオン軍機ですよおマリア曹長?」

「ちよつと・・・それって定期便が襲われてるって事じゃない!」

マリアがバンつ!と自分のデスクに手をつきながらそう驚き叫び出すと何か有ったのかねマリア?とどうにも騒がしい3人の所へとトリントン基地司令官で有るバリサム大佐が不安そうな顔でコーヒカップを片手に尋ねて来る。

「そ、それが・・・ジオン機に追われて来たのか定期便のミデアが訓練空域に進入して来たんですよ!」

「定期便のミデアだ?!・・・機長が誰かすぐに調べろ!」

そう言いながら急に慌て出すバリサムに MARIA がどうしたのかしら・・・と普段は温厚な指令を見ながら了解と答えると、出ましたよお？と普段はのんびり屋だがこういう情報系には強いミリイからすぐにパイロットの情報モニターへと表示される。

「IFF と照合した結果・・・機体番号からアレクサンダーⅡウオルフ大尉となっておりますがぁ？」

「ブツ！ウオルフ大尉の機だどっ！？」

そう叫びながらコーヒーを拭き出すバリサムにちよつと指令！と MARIA が抗議の声を上げると、いやスマン・・・と平静を取り戻したバリサムはコホンと咳払いするので有った。

物事は言い様

「警報を鳴らせ。アラーム待機班にスクランブルを急^緊発^急進^進せよ！」

「もうやってます。ミリイは当該空域に他の友軍機が入らない様に警告、アメリカはあの二人へすぐに空域から離脱する様に伝えて！」

バリサムにそう答えながらもそう矢継ぎ早に指示を出して来るマリアに了解！と答えながらミリイとアメリカが各々ヘッドセットで指示を飛ばしていると、おいおい友軍機を見殺しにする気かよ!?!とCBP2のチャーリーから驚いた声が返って来る。

「既にスクランブルが掛かっており迎撃機が向かいます。二人はすぐに離脱を……」
「バカか！ドップ相手をしているミデアに間に合う訳ねえだろうが!?!」

「私だつてそんな事くらい分かってますつて！」

アメリカが焦るチャーリーに向かってそうイラついた声を上げると、悪いアメリカ……とアメリカの心情に気付いたのかチャーリーから申し訳無そうな声が返って来る。

「いいえチャーリーは悪く有りません。悪いのはこんな情けない指示しか出せないオペ

レーターの私ですね……」

そう言いながら苦笑いを浮かべるアメリカの顔がシヨウのコクピットに映ると、じゃあこんなのはどう?とシヨウはニヤリと悪戯つぽく笑みを浮かべる。

「ちよつとシヨウ……一体何する気ですか?」

「僕とチャーリーがあえて離脱する方向を間違えるからアメリカはシヨウ達が!?とか言つて時間を稼いで欲しいんだ。それにこの位置なら僕らの方がミデアの救出に一番近いしね?」

「俺もシヨウに乗つたぜ。お前は どうするアメリカ?」

そう言いながらへへつと笑つて来るチャーリーに分かりましたよ!と腹を括つたアメリカはハア……と溜息をつくつと、とんでもない人達とチームを組む事になりましたね?と言いながらクスつと微笑むと、シヨウとチャーリーからも二つと笑みが浮かびながらグツと親指を立て来る。

「じゃあ行きますよ……ああもうあのバカ二人!」

そう声を上げるアメリカに合わせてシヨウとチャーリーの二機が作戦通りに別方向に離脱して行くと、どうしたウォーカー軍曹!?とバリサムが慌てて近寄つて来る。

「CBP1・2共に離脱する方向を間違えた模様です。」

「そんな事有る訳無いだろう!?! 早く呼び止めて基地に帰る様に言うんだ!」

「了解です。しかし応答が無いですね・・・恐らくミノフスキー濃度が高いのかと思いませんが?」

そう答えたアメリカがわざとらしくバリサムに向かって首を傾げていると、マリヤからスクランブル機上がります。と声が聞こえたバリサムは間に合えよ・・・と焦る様に頭を掻き始める。

「ねえアメリカ・・・ワザと二人を援護に向かわせたでしょう?」

バリサムの間隙を突いてそう聞いて来るマリヤに何の事だか私にはさっぱりですね。とアメリカが不思議そうな顔で答えると、ウソおっしゃい!とマリヤから怒られてしまふ・・・

「私もフォローして上げるって言ったばかりじゃないの! 始末書なら私も付き合っ上げるからアンタは二人のフォローをして上げさいな?」

「マリヤ曹長・・・恩に着ます。」

アメリカはそう言いながら二つと笑みを浮かべて来る頼もしい上官にお礼を言うと、CBP1・2!と即座に通信を繋ぎ始める。

「おいシヨウ、お前ってホントバカだな・・・」

「うるさいぞチャーリー、お前だけには言われたくない！」

呆れた顔でそう言うチャーリーにショウがそう返すとチャーリーからハアと盛大に溜息をつきだす声がおクピットに聞こえて来る……

「やれやれまた始末書か……」

「始末書だけで済めば良いけどね……っておいチャーリー二時の方向見えるか!？」

そう叫んで来るショウにコツチでも確認したぜ？とチャーリーも空にチカッと光る物体を視認していると、聞こえますかCBP1・2!とアメリカからもタイミング良く通信が入って来る。

「ミデアを見つけたぜアメリカ! ドップが二機へばりついてやがる……」

「了解です。こちらからも迎撃機が上がりましたが……戦闘空域に到着するのに5分は掛かりますので……ここは我々だけで暴れようじゃないですか二人共?」

「それは良い考えだねアメリカ……それじゃあ一丁行くよチャーリー!」

アメリカにそう答えたシヨウがコアブースターのアフターバーナーを吹かし上昇しだすと、チャーリーもそう来なくつちやな？とへへつと笑いながら愛機で有るトリアーエズをシヨウの機に追隨させながら高度を上げて行くので有った・・・

疾風

「本当にしつこいのう・・・こんな輸送機相手に必死になり過ぎだぞい！」

人員や装備等を各基地へと運ぶ輸送部隊に所属するこのミデアの機長で有るアレクサンダーⅡウォルフ大尉は先程から執拗に追いかけて来るドップに対しそう呟きながらチツと舌打つ。

「そろそろ仕留めに来る頃かのう・・・フルスロットル少尉じゃ！」

「既にもうエンジンの出力全開ですよ大尉!?!このまま負荷掛け続けたら焼き付いてしますって！」

悲痛な声を上げる隣の副操縦士で有る少尉にウォルフはええい！と叫びながらスロットル一気にミニマムにまで落とすと同時に操縦桿を左に倒し左脚のラダーペダルも踏み込みながら輸送機で有る鈍重なミデアバレルロールを行うと、嘘だろっ!?!と驚いた様子で攻撃を仕掛けて来たドップが攻撃をする事も無く前方へと通り抜けていく・・・

「良しこのまま地上スレスレまで急降下してドップを振り切るぞい！」

そう声を上げるウォルフにちよつと大尉!?!と慌て出す副操縦士で有る少尉の声を無

視したウォルフはスロットルを全開にしながら操縦桿を奥へと倒すとミデアを墜落させる様に地面へと近づかせる。

「た、大尉!このままじゃ地面にいいいい!」

「落ち着かんか・・・こういうのは慌てた方が負けじゃぞ?」

ウォルフはそうお茶らけた声で操縦桿を一杯引きミデアを引きおこすと、機体の底がほんの一瞬擦ったのかゴゴつと言う音共に振動が伝わって来る・・・

「このままあそこの渓谷に逃げ込むぞい!」

「冗談でしょう!?!あんな狭い所にですかっ!」

低空飛行のまま操縦するウォルフに隣の少尉が顔を引き攣らせながら叫ぶと、ウォルフは舌噛むから黙ってる!と言いながら悲鳴を上げる少尉を無視しながらミデアと同程度の幅を持つ渓谷へと飛び込んで行く・・・

「ワハハハッ!、ここなら奴等も追ってこれまいっ?」

「大尉が戦闘機乗りなのは知ってますが、あんまり無茶な機動は勘弁して下さいよ!」

豪快に笑いながら言うウォルフに少尉が気分悪そうに真つ青な顔で叫んでいいると、直上からドップが二機!と上空監視をしていた上部銃座から慌てた声が二人に向かって届き出す。

「チツ・・・いい加減しつこすぎるぞい!?!近くの友軍基地へ間違いない救^メ援要^デ請を出して

いるな少尉!」

「勿論です。ただ到着まで五分は掛かると……」

そんな絶望的な声を上げて来る副操縦士の少尉にここまでじゃな……と諦めた様にウォルフが呟くと同時に後席の通信士から友軍機です!と歓喜の声を上げて来る。

「な、何じゃと!?!一体どここの基地から……」

「識別信号IFFを確認しました。トリントン基地の機体です!」

通信士の声にウォルフがトリントン基地じゃと?と驚きながら顔を上げると、ドツプの方もミデアに接近して来る機影に気付いたのか慌てて機首を上げ高度を上げて行く……

「こちらトリントン基地飛行隊所属シヨウカノウ少尉です。援護に来ました。」

「同じくチャーリーIIフォンIIウィルソン!騎兵隊のお出ませえ!」

ウォルフは聞き覚えの有る名前と声と名前にニツと笑みを浮かべると後方の通信士に自分のヘッドセットに回線を合わせる様サインを出す。

「こちらミデア輸送隊のアレクサンダーIIウォルフ大尉じゃ!良い所に来たぞいシヨウ、チャーリー!」

「え、ウォルフ教官!」

「おいおいマジかよ．．．こりやあますます下手出来ねえじや無いかよシヨウ！」

シヨウとチャリーはお互い士官学校時代の教官の声に驚きながらキャノピー越し困ったかを浮かべてい居ると、ドップが回り込んで来てます！とアメリカから先程一旦離脱したドップの位置を通信で伝えて来ると、にシヨウとチャリーは了解と答えながらアフターバーナーを吹かしながらコアブースターとトリアーエズを迎撃コースへと乗せ始める。

「ドップはコツチで片付けますので、大尉はそのまま高度を低く保ちながら私の誘導のまま空域を離脱して下さい！」

「了解した。スマンが頼んだぞい二人共．．．？」

そう聞こえて来る二人の声に向かってシヨウがまた後で！と声を上げながら懲りずにミデアを執拗に狙おうとするドップに向けて牽制でビームキャノン撃つと、チツ！と舌打つように二機のドップが上空へと離脱して行くのが見える。

「おいシヨウ！俺が追うからお前が仕留めろよ良いな？」

そう言いながらドップのケツを追い掛けるチャリーのトリアーエズに向かって冗談だろっ!?!と慌てながらシヨウもコクピットの後ろから狙撃用のゴーグルを引っ張り出す．．．

「さてと．．．一発力マしてやりますかね？」

シヨウはデイスブレイの項目から火器管制 FCSの中からビームキャノンを選択すると
ヘッドアップディスプレイ HUDに現れた照準用レクティルに映る豆粒程度の敵機に向かってシヨウは操縦
 桿に有るトリガーを捻る。

「ちゃんと食いつけよ・・・イケえ！」

シヨウのコアブースターから放たれた二つの高出力ビームはドップとドップの間を
 掠りながら通り抜けた様で、シヨウはその威力に脅威を感じたのか一機がコッチへと
 真つすぐ向かって来るのを確認する。

「よし良いぞ・・・つと?！」

ドップの方はかなり泡喰っているのか、シヨウは真正面ヘッドオンの状態で熱探知ミサイル
 の有効射程距離ギリギリでロックオンされてしまいコクピットに警告アラームが
 ピーツと鳴り響く。

「そんなの当たるかかってえ!!」

シヨウは操縦桿を右下に倒し右脚のラダーペダルを踏み込むと、こなくそつ!とバレ
 ルロールしながら二機のドップが放ったミサイルを躲すと、今度はこちらの番だと言わ
 んばかりに機首部の30ミリバルカン砲とブースター部に搭載されている4門の25
 ミリ機関砲とビームキャノン2門を一斉射する。

「当たれえーっ!!」

シヨウは狙いもそこそこにトリガーを引いたのだが・・・すれ違いざまに1機のドツプが黒煙を吐きながら抜けて行くのが見えると、シヨウは振り返りながらそのすぐ着後にボボッと火を上げながら爆発する機影を確認するので有った・・・

本領発揮

『おいチャーリーこっちは一機やったぞ!』

そう聞こえて来るシヨウからの通信にナイススキル!と返しチャーリーは一HUD
《ヘッドアップディスプレイに映るドップの一ケツ》『後部』付けると、ピーっと鳴り響く
ロックオンアラームにチャーリーがフォックス2!と声を上げながらステイツクの発
射ボタンを押すと乗機であるFF-4トリアーエズの翼下から熱探知型の短距離ミサ
イルが発射される。

「貰ったぜえっ!」

完全に後ろを取った位置取りからの攻撃にチャーリーが自身満々の声を上げるが、フ
レアをまき散ららしながらローリングするドップの急減速にシザースだどつ!?!と
チャーリーは外したミサイルを華麗に回避した敵機を思わず追い越してしまうと、何を
やってんだよ!とシヨウから呆れた声がコクピットに響き渡る。

「うるせえな・・・俺だつて驚いてんだよ!」

『取り合えず僕が追いつくまで耐えろよチャーリー!』

そう叫んだシヨウが一旦通信を切るとわーつてるよ!と声を上げたチャーリーは待つてましたと言う様に鳴り響く形勢逆転したドップからのロックオンアームにチツ!と舌打ちしながら機体を左へとダイブさせると先程居た位置にドップからの30ミリバルカン砲がばら撒かれる・・・

「こいつはヤベエヤベエ・・・」

トリアーエズのコクピットの中でそう軽口を叩いたチャーリーがアフターバーナーを吹かしながらドップから距離を取ろうとするが、低高度の旋回性能には定評が有るドップがからの攻撃で左エンジンに煽り弾えを食らつてしまう。

「二番エンジンに被弾したっ!」

そう焦つた声を上げるチャーリーが黒煙を吐き出す機体のコントロールをどうにか取つてみると、チャーリー!?!とアメリカの慌てた通信が聞こえて来る。

「悪いなアメリカ・・・ちよつとヤバいかも・・・?」

『何バカな事を言ってるんですかチャーリー……絶対に還って来ると約束した筈ですよっ!!』

そう怒鳴りながらも泣きそうな顔をしたアメリカにチャーリーがモニターに映る彼女にお前……!?!と驚いていると、そのまま動くなよチャーリーっ!と相棒で有るシヨウの声がコクピットに響き渡る……

「貰ったあ……いつけエ!!」

追いついて来たシヨウがそう叫びながらチャーリー機にへばり付いたいたドップをコアブースターのビームキャノンで仕留めると、ピンゴーと叫ぶ声が聞こえだす……

『おいチャーリー無事か?無理なら早く^{緊急}ベイルアウト^{脱出}しろ!』

「いや、お前のおかげで俺自身も怪我は無いし機体もどうにか飛べるから心配するなって?」

エアブレーキを掛けながら横に付くシヨウのコアブースターにチャーリーがそう言いながらへへつと笑みを浮かべながらキャノピー越しに親指を立てていると、帰ったらお説教です!とムスツとしたアメリカからの通信にシヨウとチャーリーは顔を見合せ出す。

「やれやれ・・・じゃあ基地に戻ろうか？」

「今から起きる事を考えるとあんまり帰りたく無えけどな・・・」

シヨウのコアブースターが翼を振りながらトリントン基地へと旋回して行くと、チャーリーのトリアーエズも渋々と言った感じで付いて行く・・・

（（（

「レーダーから敵機のIFFをロス！CBP1とCBP2が撃破した模様です。」

「こちらも離脱したミデアから当基地への着陸許可を求められていますう！」

そう揃って報告を上げて来るアメリカとミリーの二人にそう良かった・・・と二人の上官で有るマリアから安堵する声と同時にヒヤッホーと歓声がタワー内に響き出すと、ホントに無事で良かったです・・・とアメリカも内心ホッとしながらクスッと微笑む。

「まったく・・・俺はアイツ等に帰還させると命令した筈だぞマリア曹長！」

「確かにそうですが、通信妨害を受けていたとアメリカからも報告を受けてますし．．．二人が独断で動いた結果では有りませんかバリサム指令？」

フツツと笑いながらワザとらしく首を傾げて来るマリアにまあ．．．今回はそういう事にして置くとバリサムが少し納得の行かない顔で戻って行くのでマリアは良かったわね？とアメリカの肩にポンと手を置きながら耳元で小さく呟く。

「今回は見逃してくれるみたいよバリサム指令？」

「ホントですか!?!こちらトリントンコントロールよりCBP1、CBP2へ今回はお咎め無しらしいので安心して戻って来て大丈夫ですよ！」

マリアからの言葉に喜んだアメリカは早速ヘッドセットを付け直しながらシヨウ達に通信を繋ぐと、まだ安心できねえな．．．と珍しく気弱なチャーリーの声が返って来る．．．

チャーリーの意地とアメリカの疑惑

『基地までもう少して所まで来たんだが・・・エンジンの油圧が下がってきて保つがどうか怪しくなつて来やがったぜ』

「大丈夫なんですかチャーリー!?ちよつと機体の状況はどうなんですかシヨウー」

『こちらCBP1・・・隣から見てもどうにかバランスを保っている感じでのままだと着陸は難しいと思う。』

隣を飛ぶシヨウのコアブースターからの報告に冗談じゃねえ!!とチャーリーが怒鳴り返しだす。

『俺は絶対にコイツと帰るぞ!シヨウの時だつてソイツのテスト飛行の時片肺で着陸しただろ。』

『僕の時も確かに片肺だったけどチャーリーのトリアーエズはエンジン両方の油圧が下がつて来てるんだらう?さつさと機体を捨ててベイルアウトしろつて!』

そう押し問答を繰り返す二人にイラつとしたアメリカはゴチャゴチャと五月蠅いですねえ・・・と呟くと、その迫力有る低い声にシヨウとチャーリーもビクつとする中マリアもちよつとアメリカ!?と少し後ずさつてしまう・・・

「分かりました。そこまで言うんなら着陸させてあげますが……もし失敗何かしたりしたらチャーリーの墓碑銘にバカ野郎と刻みますが良いですね?」

『お、おう……絶対にタツチダウンを決めてやるぜ!』

アメリカの条件を呑んだらしいチャーリーのトリアーエズが止めろって!と叫ぶシヨウを無視してギヤをダウンさせフラフラと着陸体勢に入ると、ミリイ!!とマリヤが慌ててその隣の管制官に向かって叫び出す。

「今から降りて来る機は全て上空待機にさせて!それと滑走路上に居る機は急いでタキシングさせて逃がしなさい!」

「もうやってますってえ!念の為にレスキュー隊も要請済みですよ!」

そう報告しながらヘッドセットをずらすミリイに來ましたっ!とシヨウのコアブースターとエンジンから黒煙を上げるチャーリートリアーエズを視認したアメリカが指差すと、タイミングを合わせた様に滑走路へと消火用の車両が数台飛び出して行く。

「トリントンコントロールよりCBP1へ滑走路が塞がると厄介なので先に着陸をしてそのままタキシングしてハンガーへ向かいなさい!」

『CBP1了解、じゃあチャーリー先に降りて待つてるからな!』

『CBP2了解、無事に降りたら冷たいビールを頼むぜシヨウ?』

こんな時でもしつかりと冗談を言ってくるチャーリーにシヨウは返答代わりにコア

ブースターの翼を左右に一度振りながら着陸体勢に入る。

『CBP1よりトリントンコントロールへこれよりファイナル^音アプローチ^陸に入る。』

「トリントンコントロールからCBP1へそのまま第一滑走路へ着陸して下さい。」

アメリカからの指示に声にショウのコアブースターが何事も無くキュキュとギヤの音を鳴らしながら無事にタツチダウンを決めると、さてここから勝負ですよチャーリー……とアメリカは心配そうにフラフラしながら滑走路へと向かって来るチャーリーのトリアーエズへと通信を繋ぎだす。

「トリントンコントロールからCBP2へこちらの滑走路はオールグリーンです。いつでも降りて来なさいチャーリー！」

「こちらCBP2、分ってるから少し黙ってるってアメリカ……!?!」

流石に余裕が無いのかチャーリーの焦った声にホントにバカですね！とアメリカが苛立つと、左に流れ過ぎてます！位置の調整と高度も低いですパワーアップ！と指示を出し始めるのでホント可愛くねえな……とチャーリーは気合いを入れ直す様に操縦桿を握り出す。

『うるせえなアメリカ……コッチも必死にやってるってんだよ！』

『ならしつかり操縦しなさい。それとも死にたいんですか?』

そう淡々と言って来るアメリカにそんな訳無えだろ!と叫び返したチャーリーは左脚のラダーペダルを蹴つ飛ばしながら操縦桿を引きフルフラップ機体の揚力を最大限に活用しながらギリギリで滑走路に届くと機体角度からバチバチとエンジンから火花を散らしながらタツチダウンを決めて来る・・・

『どうだ見たかアメリカっ!』

「CBP2の着陸を確認しました・・・パイロットは無事です。」

ホツとしながらチャーリーの安否を報告するアメリカにやったあ!!とマリアとミリイが彼女の両肩から飛びつく管制タワーの全員からもイヤッホウ!と再び歓声が上がり出す。

「ちよつと苦しいですって二人共!」

「そんな事言つて・・・一番うれしいのはアメリカでしょ?」

アメリカはフツツと微笑んで来るマリアに何の事ですか?と惚けていると、取り合えずアイツ等を出迎えに行つたらどうだ?とバリサムから指示が出される。

「良いんですか指令・・・」

「いや良いも何も君はあの問題児コンピの専属オペレーターだがウォーカー軍曹?」

そう二つと笑みを浮かべて来るバリサムに感謝します!とガタつと席を立ったアメ

リアが管制タワーから飛び出して行くと、お優しいですね？とクスクスと笑い出すマリ
アにたまにはな……？

と照れ臭そうに自分の席で頭を掻くバリサムから返事が返つて来る。

「指令も良い所が有りますねえマリア曹長？」

「そうですね……所でミリイ？ちよつと私の頼み事を聞いてくれないかな……」

そんな真面目な顔をするマリアにどんな事ですかあ……？とミリイから不安そうな
顔で首を傾げられたマリアは少し困った顔になる。

「アメリカの事を調べて欲しいのよ……ミリイなら得意でしょうそう言うの？」

「先輩の事をですかあ……何でもまたあ？」

そう不思議そうな顔をして来るミリイに今度お昼奢るからお願ひ！と手を合わせな
がらマリアが頼み込むと、事情は分かりませんがC定食にデザートなら良いですよ
♪と条件の提案するミリイからニコつと笑みが浮かぶのでマリアは好きな頼んで良
いから……と答えながらハアと溜息をつきます……

「やったあ♪それじゃあ今晚にでも基地のホストコンピューターに忍び込んで来ますの
でしばしお待ちくださいねえ？」

その間延びした声とのんびりした雰囲気で男性隊員からも人気の彼女なのだが……実

は基地内でも一番の情報通でハッキングの天才だと言う事は彼女と契約を結んでいるごく一部のみの隊員による共有の秘密である。

「いつも言ってるけど絶対に尻尾は残さないようにね？」

「分かってますよマリア曹長お。」

満面の笑みを浮かべるミリイに頼むわよとマリアが念を押すと、マリアはホント……何者かしらねあの子って？と以前感じた階級の矛盾と新任ながらも妙に場慣れした指示の出し方に違和感を感じるので有った。

後輩とその1

コアブースターのコクピットからガガッ！と滑走路で火花を散らしながらも無事に着陸したチャーリーのトリアーエズを見ながらシヨウは無茶して・・・と呆れた声を上げながらもホツとした顔を浮かべていると、久しぶりじやのうシヨウ！と士官学校時代の元教官で現役時代は疾風ウォルフと恐れられたファイターパイロットがキャノピーの下から声を掛けて来る。

「こちらこそお久しぶりですウォルフ少佐・・・今は輸送部隊に居るとは知りませんでした。」

「まあな・・・ただちよつと上と揉めた所為で今じゃ大尉になったんじやよ？」

そう言いながらも盛大にワーハッハッハッ！笑いだすウォルフにそうなんですか!?とシヨウが驚いていると、汗だくのチャーリーからあーマジで死ぬかと思った・・・と

滑走路まで迎えに行ったららしい小隊長のイエーガーが運転するジープから死に掛けた癖にお茶らけた声が聞こえて来る。

「ナイス・ランディングだったね相棒？」

シヨウは嬉しそうな顔でジープから降りて来たチャーリーの右手に向かってパン！とタツチすると、まあな・・・とチャーリーから苦笑いが浮かび上がる。

「しかし教え子で有るお前達に助けられるとはな・・・どうじゃこの際この疾風の名をどちらか引き継がんか？」

「え・・・いや、そのチャーリーどうだ？」

「いや俺はその・・・シヨウの方がスコア上じゃねえか？」

んっ？と笑みを浮かべて来るウォルフからの提案にシヨウとチャーリーがそう言い合いながら困った顔を浮かべてると、キュキュツと激しいブレーキ音と共にハンガーの中にジープが飛び込んで来るので一体何じゃっ!?!とウォルフから驚いた声上がり出す。

「あれ・・・アメリカ？」

チャーリーはジープから降りて来た赤髪の下士官に少し驚きながら首を傾げると、ちよつとチャーリー！と近寄りながらバチつと頬を叩いて来るアメリカにギョツとしながら痛てえな・・・とその頬を擦り出す・・・

「それは生きている証拠です．．．本当に心配したんですよ私！」

そう声を上げながらも少し泣きそうな顔でキツと睨んで来るアメリアに向かつてわ、悪い．．．とチャーリーが困った顔で頭を掻き出すと、これで女つたらしの名も卒業だな？とイエーガーから楽しそうな顔でククつと笑われるのでチャーリーは少し黙つててくれませんか!?!と抗議の声を上げながらアメリアの顔をジツと見つめだす．．．

「心配かけて済まなかった．．．ホントにゴメンなアメリア？」

そう謝りつつもどこか嬉しそうに二つと笑みを浮かべて来るチャーリーに対しドキッとしたアメリアがそう言えばなんでこんな事を!?!と内心ハツとしながらチャーリーの頬を叩いた事に驚くと慌てて頭を下げだす。

「私こそ急に叩いてしまい申し訳有りませんでした．．．」

「バカ．．．謝んнатてアメリア？お前の指示を無視して着陸しようとした俺が悪いんだし．．．」

そう言いながら気落ちしだす二人が気まずそうな顔になると、まあまあ？とシヨウは二人の肩に手を回しながら二つと笑みを浮かべる。

「折角同じチームになつたんだから仲良くしようよ？」

「そうだな．．．それじゃあ親睦を深める為に飲みに繰り出すか！」

シヨウからのフオローにチャーリーがそう言いながらアメリアを見ると、またですか

!?と呆れた顔で答えながらもクスクスと笑い出す赤毛の専属オペレーターに向かつてシヨウとチャージャーはククつと

笑い出す。

「それじゃいつも通りCASSCADE^{の店}に行くからシフト上がりに迎え行くよ?」
「ハイハイ分かりましたよ・・・今日は六時上がりなのでそれくらいに管制タワー下で待ち合わせましょう。」

少し強引に誘って来るシヨウに溜息交じりに答えたアメリカがそう提案すると、じゃあ俺も行けたら行くな?と言いながら手を振りながらジープに乗って帰って行くイエーガーにシヨウ達も一旦解散する。

くくく

その日の夕方・・・アメリカがシフト交代の隊員へ引き継ぎの準備をしながら、まだかな?と何度も自分の腕時計を見ていると、何か用事が有るんですか先輩?と後輩で有るミリイから首を傾げられたアメリカはちよつとね・・・?と困る事でも無いのだが苦笑いを浮かべてしまう・・・

「さつきからそわそわと時間ばつか気にしてるしい．．．ひよつとしてウイルソン少尉とデートとかじゃ無いんですかあ？」

「違いますつてえ!?!それに何でそこでチャーリーが出て来るんですか!」

アメリカはそう言いながら、んっ?とキョトンした顔で首を傾げだすミリイに向かつて慌てて両手を振りながら否定すると、ちよつと皆で飲みに行くだけです!と顔を真っ赤にする。

「それなら良いですけどお．．．ウイルソン少尉つてチャラいけど顔は良いので独身の女性隊員から結構人気があるから気を付けた方が良いですよお?」

「そうなんですか．．．」

そう心配してくれる後輩にアメリカは少し胸がざわつきながらそう答えると、そうだミリイ?と纏め終わった報告書を閉じると共に首を傾げだす。

帰還祝いその1

「もし良かったらミリイも来ませんか？ ショウの彼女さんがやつてるパブで飲むんですが・・・バウスネルン中尉とかも来ますよ？」

そう言いながらニコつと微笑むアメリカに何かに驚いたのかえっ！と声を上げたミリイがそれってジャック中尉も来ますかあ・・・？と首を傾げだすので、アメリカはうんと思案顔になる。

「ちよつと分かりませんが・・・何だったらショウ達に聞いてみますよ？」

「ホントですかあ？」

そう驚いた後輩が急に後でメイク直さないとお・・・とコンパクトを急に出すので色恋沙汰の疎いアメリカはどうしたんだろうミリイ？と首を傾げながら『今日アルヴィン中尉来ますか？』と基地内しか使えない通信アプリでチャリーへとメッセージを送ると、『聞いてみるな？』とすぐに返事が返つて来る。

「来るかは分かりませんが・・・一応聞いてくれるそうですよミリイ？」

お互い簡素な文面だが何か良いな・・・と思つたアメリカはクスッと笑いながら首を

傾げると、ヤツタあ♪とミリイから嬉しそうな声が上がります。

「ヤバいく何を着て行ったら良いですかねえ先輩？」

「そのままの方が浮かなくて思いますよミリイ。」

アメリカは何故か妙に気合いが入っている後輩にそう忠告しながら席を立つと、じゃあ先に行つてますね？と管制室を出る。

「了解ですう。引継ぎは任せて下さい先輩♪」

といつもの勤務よりも張り切った声を出す後輩にアメリカはいつもあれなら良いのにな・・・と思いつつながら通路を歩いていると、急にドンと足元に何か当たり出す・・・「こんな所に一体何が・・・ってうわあゴメンなさい!?!怪我は無いですかボク？」

何故か足元に居た2、3才程と見える男の子を抱きかかえたアメリカが慌て出すと、らーじよぶと元気な声でニコッと笑つて来る小さな男の子にホツとしたアメリカはクスッと微笑む。

「私はアメリカと言います。ひよつとして迷子ですか・・・？」

首を傾げながら尋ねるアメリカにんん？と自分でも良く分かつていないらしく自分

の腕の中でキョトンとしている男の子に少し困った顔をしていると、アメリカそのまま捕まえて置いて!?!と聞き覚えのある焦った声が聞こえて来るので、あれ?と振り向いたアメリカは慌てて走って来る自分とミリイの上官でアメリカ曹長に驚いてしまう。

「あのマリア曹長……この子は一体?」

「んっ? 私の子よ。誰に似たのかヤンチャですぐにどっかに行っちゃうのよ!」

アメリカから逃げ出した自分の子を受け取ったマリアがそう苦笑いを浮かべながら、ほら挨拶しなさいライナス?と自分の子に向かつて首を少し傾げると、あえりあ!と声を上げたライナスからキャハハと笑われるとアメリカはもう私の名前を覚えたんですね。とニコつと微笑みながらその頭を撫でる。

「賢いお子さんですねマリア曹長……旦那さんは別の基地に居るんですか?」

「えつと……シヨウやチャーリーと同期だったんだけどジョン機に撃墜されちゃってね。もう居ないんだ……?」

そうアハハ……苦笑いしながら困った顔となるマリアにえっ!?!と驚いたアメリカは申し訳ありません私知らなくて……と慌てて頭を下げると、もう何でもない様な顔を

するマリアからいや良いのよ!?!とこちらからも慌てて両手をヒラヒラと振られる。

「確かにライナス・・・私の旦那が撃墜されたシヨウとチャーリーから聞いた時はシヨツク以前に相当ムカついたわ・・・年下の癖にこの私に好き好き言っておきながら籍まで入れた上でまだ当時お腹に居たこの子を見ずに逝ちやつてさ!だから私は空の上から見ている筈のあのバカが羨ましく思うくらいこの子を愛そうと思つて育ててるのよ♪」
「成程・・・だから旦那さんの名前をそのまま付けたんですか?」

天国に居る旦那さんへの当てつけかな?と思つたアメリカの言葉にその方がアイツも悔しがるでしょう?とマリアが楽しそうな顔でクスクスと笑い出すので、アメリカは結構この人格が悪いですわね・・・とオンオフでの違いに内心戸惑いながらアハハ・・・と困つた顔で苦笑いを浮かべる。

「あつゴメンねアメリカ・・・何か愚痴つたみたいで?」

「いえ!?!私で良ければいつでも聞きます。」

少し申し訳無い顔をするマリアにニコつと微笑んだアメリカがそう返していると、マリア・・・とマリアの腕の中で眠たそうなライナスの声が聞こえて来るのでマリアはお眠の時間みたいね・・・?と優しい気な顔でその頭を撫でる。

「それじゃ私は部屋に戻るわね?アメリカは今からリンの所に行くみたいだけど・・・飲み過ぎちゃダメよ!」

「ハイハイ分かってますって．．．それではおやすみなさい。」

そう注意して来るマリヤ達を見送ったアメリカに、あつそうだ．．．と何かを言い忘れたのか完全に寝入った息子を抱きながらマリヤが振り返って来るのでアメリカはんっ？と首を傾げだす．．．

「今日見ててちよつと気になったんだけど．．．パイロットなんか好きになつたらダメよ？」

そう言うだけ言つて帰ろうする上官に向かつて、何ですかそれっ!?!と抗議の声を上げたアメリカは顔を真っ赤にすると、じゃあまたね〜?と言つて手を振つて食うそのマリヤの背中を見送るので有った。

帰還祝いその2

管制塔から出たアメリカはマリア曹長つたらもう……！と不機嫌そうな顔で待ち合わせ場所である格納庫まで辿り着き中を覗くとトップからの攻撃によりエンジンをやられたチャーリーのトリアーエズの前で腕を組みながら話している二人組を見つける……

「シゲさん、コイツどれくらいで治るんだ……？」

「そうだねえ被弾した左エンジンはオシヤカだし……それに加えて右も無茶させたから一回オーバーホールかな？もう乗り換えるのをおススメするよ……俺から言わせてもらえばもう限界だよこの機体はさ……」

シゲが腕を組みながらチャーリーのトリアーエズの現状を伝えるとチャーリーは、そっか……と言いなながらガクつと項垂れるとポンと背中を叩かれる。

「何落ち込んでるんですかチャーリー？」

「アメリカか？ いやちよつとな・・・」

そう苦笑いを浮かべるチャーリーに向かってアメリカはふくと言いながらチャーリーの機体に近づき被弾したエンジン部をそつと撫でる・・・

「チャーリーを守ってくれてありがとうございます・・・」

アメリカがそう呟くとすぐにチャーリーから不思議そうな顔で叫ぶ声が聞こえて来る。

「おいアメリカ何してんだ？」

「いえ何でも・・・それよりシヨウはどこですか？」

そう誤魔化すように首を傾げたアメリカが周囲を見ながらキョロキョロしていると、シヨウなら今日の訓練の報告書を纏めてるぜ？とチャーリーからハンガー奥の待機部屋を指差される。

「分かりました。ちよつとシヨウにも挨拶して来ますね？」

「おう、俺もすぐリンの店に行ける様に準備しとくぜ！」

そう返して来るチャーリにお願いしますね?と答えたアメリカは今日の報告書ですか・・・?と内心その内容に興味を持ちながら扉を開けると、うくん・・・と唸りながらデスクトップの前で独り言ちるシヨウの姿を見つけニヤニヤとしながらその背後へと近づく・・・

「コイツって高火力だしエンジン出力が高いのは申し分無いんだけど・・・旋回性能が無さ過ぎてドツグファイトには向かないんだよな・・・」

大体纏め終わった報告書を保存し改めてコアブースターの基本データをノートPCで開いた報シヨウがそう独り言ちたながら頭の後ろで腕を組んでいると、その割には結構乗りこなしてるじゃないですか?と突然背後から聞こえて来るアメリカの声にうわっ!?!と驚いたシヨウは慌てて後ろを振り向くと、フムフム成程・・・とコアブースターのデータを見ているアメリカの姿が有る。

「ちよつ、バカ見るなってアメリカ!一応これは機密扱いのデータなんだぞっ!?!」

「もう見ちゃいました。しかし・・・あの機体ってV作戦とか言う試作機の運用試験と同じ教育学習型のOSが搭載されてるんですね?」

そう首を傾げながら尋ねて来るアメリカに向かって少し違和感を感じたシヨウがやけに詳しいんだね・・・と少し不審そうに聞くと、いやジャブローでも噂になつて!?!と急に慌て出すアメリカにシヨウからそうなんだ・・・?と何やら疑う目をされたアメリカはそれはそうと!と慌てて話題を変え出す。

「さつきマリア曹長と会つたんですがシヨウとチャーリーは旦那さんと同じ部隊と聞きましたか・・・?」

「マリアが自分から話したのか!? アメリカに言うくらいだからアイツも大分吹つ切れたみたいだな・・・」

そう聞いたシヨウはホツとした顔をしながらもやはり仲間を守り切れなかった事も有り少し負い目が有るのかすぐに険しい顔を浮かべると、怖いですよ顔?とアメリカからクスッと笑われる。

「悪いアメリカ。しかしマリアの奴は凄いな・・・僕はまだ吹つ切れて無いのにさ?」
「それが普通だと思えますよ・・・」

そう一瞬暗い顔を見せて来るアメリカにシヨウがえっ!?!と驚いた声を上げると、いえ何でも有りません!と急にハツとした顔を見せて来るアメリカにシヨウはう、うんそれなら良いけど・・・?と答えながら首を少し傾げだす・・・

「おつとそう言えば、チャーリーを待たせてますし……そろそろリンさんの店に行きませんか？」

「そう言えばリンの所で帰還祝いするんだった……」

そう言いながら自分の腕時計を見る彼女に姿にヤバい遅刻するって!?!と慌てたシヨウは取り合えず何か隠し事をしている様な感じがする彼女の事を一旦頭の片隅に置くと、慌てて機材を仕舞ってアメリカと共にカスケードへと向かうので有った。

くくく

「あつ！やつと来たわねシヨウ！」

あれからすぐにチャーリーが運転するジープで自分の恋人が経営するPAPASCAD Eへとやって来たシヨウはランコロンと鳴るカウベルと同時に少しムツとして来るリンに向かつてただいま……と声を掛けると、すぐにコロつと最愛の恋人からおかえりシヨウ♪と満面の笑顔が浮かび上がる。

「今日も忙しそうだね？」

「お陰さまでね♪」

その顔にホツとしながらシヨウがリンと談笑しながらいつもと同じようにカウンター席に座ると、取り合えずビール下さい♪とすかさず酒を注文するアメリカに相変わらず色気無えな・・・と呆れたかおるチャーリーからツツコミが入るので有った。

後輩とその2

「それで今日のテストはどうだったの皆?」

リンが三人の前にお酒と料理を置きながら聞くと、まあ上々だったかな?と答えたシヨウは二つと満足そうな顔を浮かべるが、一体どの口は言ってるんですか?とアメリカに取ってはそうでもないらしくビールジョッキ片手に抗議する声が上がります。

「この二人ったら私の指示を無視してジオン機に襲われている輸送機の援護へと勝手に行くし……」

「ちよつと待てよアメリカ!お俺達の提案に乗ったのはお前じゃねえかよ!」

リンが作つたシチューに入っているジャガイモを乗せたスプーンで指を差して来る行儀の悪いチャャリーにその辺は臨機応変って言うんです。と答えたアメリカからフイツと顔逸らされると、あらあら?とリンは随分と仲良くなった様に見える二人にクスクスと笑い出す。

「何だかチャャリーとアメリカちゃんの距離感がやけに近くなつた様な気がするんだけどシヨウ!」

「ああ、多分今日の一件じゃないかな？被弾したチャーリーがギリギリで基地に辿り着いたんだけど、その時アメリカがさ……」

カウンターの向こうか身を乗り出しながら聞いて来ようとするリンにシヨウが着陸後に起きた二人の出来事を話さそうとしたに瞬間にシヨウ!?と顔を真っ赤にしたアメリカから口を抑えられると、あつ!と聞き損ねたリンはまた後で聞こつと思ひながらフツと微笑む。

「所で遅いわねイエーガー中尉……シヨウ達の帰還祝いつて聞いたけどまだ誰か来るの？」

「えつと、後はジャック中尉と……アメリカも後輩を誘つてるんだよな？」

そう聞いて来るシヨウにはい。と答えたアメリカがカランコロンと鳴るカウベルに丁度着たみたいですよ。と閉まったドアの前でキョロキョロとしていたピンク色のボブカットをした後輩を見つけると、ミリイこちですよ?と呼ぶ声にあつ居た居たあゝと声を上げながらミリイが歩いて来る。

「遅かったですねミリイ……マリア曹長の引継ぎになにか不備でも有ったのですか?」「いえ、ただメイクを直してたら遅れちゃってえ……所でジャック中尉はまだ来て無いですかあ!」

そう言いながら周囲を見渡しだす肉食系のミリイにまだ来てませんが・・・と答えたアメリカが苦笑いを浮かべていると、君がタニグチ伍長なんだ？とチャーリーから尋ねられたミリイは階級章を見ながらあっはい！と答える。

「俺はチャーリーⅡフォンⅡウイルソン少尉で隣のコイツはショウⅡカノウショウって言うんだけど・・・」

「ああ！お二人の事は以前から知ってましたが・・・直接お話するのは初めてですねえ？」

「確かに直接会う会うのは初めてだけどさ・・・やつぱり声と同じで顔も相当可愛いな？」

これはチャーリーの病気らしくムツとしたアメリカはえつとお・・・と少し困った顔する後輩を守る為にドストと容赦なく鳩尾に肘打ちを叩き込むと、チャーリーからグフっとうめき声が上がります・・・

「あの・・・先輩？ウイルソン少尉は大丈夫なんですかあ」

「あのバカは無視して良いです。」

椅子から転げ落ちながら悶絶しているチャーリーを心配そう見ているミリイに向かってフン！と機嫌悪そうにアメリカがそう吐き捨てながら自分の隣へ座る様に促すと、まあいつもこんな感じだから気にしないでね？と言って来るリンにミリイはそんな

んですねえ……と答えながらアハハと苦笑いを浮かべる。

「因みに私はそこに居るシヨウの恋人で、ここカスケードの美人店主のリンロローダンセツて言うんだけど……」

「あつ自己紹介が遅れましたあ！自分はウォーカー軍曹の後輩でミリイタニグチ伍長ですう♪」

そうニコつと微笑むミリイが宜しくお願ひしますねえ？首を傾げると、宜しくミリイちゃん？と答えたリンから何を飲むと尋ねられたミリイは急に名前で呼ばれて少し驚きながらもではビールでえ♪と答えながらアメリカの隣にちよこんと座り出す。

「ふくん……こんなお店が有ったなんて知らなかったですう？」

「私もシヨウとチャーリーの紹介されて知ったんですが……これほど心地よいお店は初めてですね。」

「そうですかあ……」

まだ知り合つて一月半程だが……いつも気難しいような顔をしている先輩の緩んだ顔にそう答えたミリイはこの人ホント可愛いなあ……と思ひながら上官で有るマリアから受けた仕事にハア……と内心溜息をつきだす……

「どうしたのミリイちゃん？溜息なんかついて・・・」

「いえ、何だか色々と面倒臭いなってえ・・・と世知辛い世の中に心の中で愚痴っていただけです。」

リンはそう言いながら渡したビールをチビチビと飲みだすミリイにそうなんだね・・・？と良く分からないまま首を傾げるので有った。

後輩とその3

「そう言えばあ、お二人と直接お話するのは初めてですねえ？」

アメリカの隣に並んで座って居るショウとチャーリーに向かつてミリイから話しかけられた二人はそうだっけ？と言った顔で首を傾げていると、それに結構カッコいいですうとミリイがニコつと微笑んで来る。

「えっ!?!おい聞いたかよショウ!あの子俺達の事を見てカッコイイって言ったぜ?」

「うんそうだね……。って言うか隣を見た方が良いよチャーリーは……」

そう忠告を兼ねたショウからの呟きにチャーリーがへっ?と不思議そうに隣を見ると、ムウ……。と明らかに機嫌悪そうな顔で睨んでいるアメリカの顔が映り込んで来る。「そうですかそうですか……。そんなにカッコいいと言われたいのなら私が何度でも呼んで上げますがチャーリー?」

「ちよつと待って!何でそんなに怒ってるんだよお前は!」

ニコニコと全く目が笑って無い顔をして来るアメリカに困惑気味のチャーリーがそう焦っていると、あつ因みに冗談ですよお?とミリイからクスクスと笑われてしまうの

でこの場に居る三人と少し離れて料理しながら聞き耳を立てていたリンからえつ！と驚いた声が上がります。

「顔はまあ正直良いですけどお・・・基地では女つたらしと言う名で有名ですしねえ？それならまだそちらの相棒でいらつしやるカノウ少尉の方が良いですねえ？」

「えっ!? 僕・・・?」

「ダ、ダメだからねシヨウは私のだからミリイちゃん!」

そう慌てた声を上げながら牽制しだすリンにちよつとリンっ!?とシヨウから驚いた声が上がると、そんなの知ってますよお?と二人を揶揄したらしいミリイは二人を見ながらニヤニヤとなる。

「へえくリンさんって結構独占欲強いんですねえ?」

「そ、そんな事無いわよ!」

年下のミリイによって完全に主導権を取られたリンがタジタジになると、おいアメリカ・・・と隣のチャーリーから肘で突かれたアメリカはビールを煽りながら何ですか?と言った顔で隣を見る。

「お前の後輩だろ・・・シヨウとリンが困ってるぜ?」

「そんな事私に言われても困りますって・・・」

正直アメリカもプライベートでミリイと会ったのが今日が初めてでその間延びした

口調と同じく普段からのんびり屋のミリイがこんなにも絡んでくると思ってたアメリカが内心頭を抱える思いで有る中チャーリーを挟んでその隣シヨウからピコンッと携帯端末の音が鳴り出す。

「あつ、ジャック中尉からだ。イエーガーさんと合流してここに来るそうだよ?」
「えっホントですかあ!?!ちよつとメイクを直してきますう!!」

そう声を声を上げながら化粧室へと駆けこんで行くミリイの背中を見送ったシヨウがどうしたんだ急に!?!と驚き出すと、どうもジャック中尉がお目当てらしいですね?とリンから新しいジョッキを受け取ったアメリカから呆れた顔で返事が返って来る・・・

「あら何言ってるのよアメリカちゃん!トリントン基地に居るパイロットの中から選ぶんならジャックって結構モテるのよ?」

「へえそうなんですか・・・声と名前は良く聞くんですがまだ会った事が無いんですね。」

そう苦笑いを浮かべるアメリカにまあ俺の方が顔は良いけどな!とチャーリーが何か張り合っていると、スマン遅くなった!と言いながらカランコロンとドアのカウベルが鳴り響き長身のイエーガーを先頭にもう三人程カスケードの店内へと入って来る。

くくく

「イエーガー中尉いらつしやい♪って言うかジャックは随分と久々じゃないかしら？」
「だなりん・・・最近ちよつとサボリ気味の小隊の所為で正直言つて忙しくて忙しくて俺も困つてるんだよ。なっイエーガー？」

イエーガーとは同期でのトリントン基地では第二小隊長で有るジャックⅡアルビン中尉がそう揶揄う様に肩を組みだすのでイエーガーは何も言い返せずうっ・・・と言葉に詰まり出す・・・

「分かった分かった・・・今日は俺が奢るから好きなだけ飲みやがれクソツタレめ！」

「マジで!?!よつしや今日はイエーガーの奢りらしいからトコトン飲めよ手前えら！」

そう声を上げるジャックに部下で有る隊員達が了解!と敬礼しながら次々とリンに向かつて注文しだすと、悪い人では無いようですね・・・とアメリカはジャックの様子を見てみると、んっ?目が合ったそのジャックから首を傾げながら声を掛けられる・・・
「えっと・・・初めましてだよな？」

「一応そうですね。管制タワーで声だけでのやり取りはしていますが・・・」

そう苦笑いを浮かべて来るアメリカの声に聞き覚えが有るのかジャックからえつ!と驚かれる。

「そつかお前がアメリカか・・・ミリイからも面倒見の良い先輩が来たって聞いてたけど? アイツの事を頼むな?」

「あつハイ!? こちらこそ宜しくお願いしますジャック中尉!」

そう答えながらアメリカがジャックと握手していると、化粧を直したミリイからあつ先輩!と睨まれる。

「先輩はウィルソン中尉狙いなんだからダメですよ!」

「ちよつとミリイ・・・私とチャリーはそんな関係じゃ有りませんって!」

先日上がった噂の事を言っているのかアメリカがミリイに向かつてそう抗議する声を上げると同時に、ヴィーヴィーヴィーと不意に聞こえて来る基地からサイレン音に店内に居る関係者達がリンの店で有るカスケードから慌てて飛び出して行く・・・

くく

初めての対MS戦闘

初めての対MS戦闘その1

「えっ!?何コレ・・・何の音なの?」

「・・・空襲警報ですね。敵機が基地近くまで接近しているのかと・・・」

「つて事はここが戦場になるのアメリカちゃん!」

「大丈夫ですよリンさん。そんな事は私達がさせませんから・・・取り合えずシヨウはリンさんと住民の皆さんを連れて地下のシエルターへ!」

冷静な顔でそう指示を飛ばして来るアメリカにシヨウが分かった。と答えながらリンの手を引いて酒蔵庫を兼ねたシエルターへとたまたま店に来ていた住民共々押し込むと、ねえシヨウ・・・と心配そうな顔で袖を引っ張られる。

「シヨウも飛ぶんだよね・・・」

「まあね。ちゃん帰って来るから心配しないでよリン?」

「絶対だよ!約束破ったら承知しないんだから・・・」

「んっ、分かってるって、じゃあ行つて来る。」

リンと軽く唇を合わせたシヨウが駆けて行くとその背中に向かってリンはシヨウだ

けじゃ無く皆も無事に・・・と祈り様に手をギュツと握るので有った。

~~~~~

「ゴメン遅くなって・・・」

「いえ、リンさん達は平気でしたか?」

「アメリカのおかげで今の所は落ち着いてるね。」

「そつか・・・それでこれからどうするかプランを聞いても?」

「そんなの有る訳無いじゃないですか・・・あれは一般人を混乱させない為のフェイクで今から作戦を考えるですよ!」

アメリカから聞こえて来る抗議する言葉にマジかコイツっ!?!と彼女の冷静さに騙されたシヨウが呆れた顔で周囲を見渡すとイエーガーとジャックが店内に居ない事に気付く。

「隊長達は?」

「二人共真つ先に基地に戻りましたよお? おかげで全然ジャック中尉と話せなかったですう・・・」

「それはご愁傷様・・・取り合えず僕らも基地に戻ろうよ!ここに居ても仕方無いし・・・」  
残念そうな顔でガクつと項垂れるミリイにそう声を掛けながらシヨウがチャーリー

とアメリカを見ると、そうですね。と思案顔をしていたアメリカから顔が上がり出す。

「そうと決まれば急いで戻りましょう。何だか嫌な予感がします・・・」

そう言うが早く店を出たアメリカを先頭に四人でジープに乗り込むと、よつしや飛ばすぜ!と声を上げるチャャーリーがアクセルを踏み込むと、ギャギャギャ!と砂埃を上げながらトリントン基地へと急行する。

「見てよ!もうスクランブルが掛かっている。」

その道中でジープの荷台からシヨウウが滑走路を飛び立とうとするFF-4トリアーエズの編隊を指差すと、ありやあアレート待機中の第三小队だな!と叫び返したチャャーリーは見えて来た基地ゲートに合わせて減速しだす。

「何スピードを緩めてるんですかチャャーリー?緊急事態何ですよ!」

「お前バカか!強引にゲート何か突破したら警備兵に撃たれちまうだろうがっ!!」  
「時間が勿体ないです。良いから突っ込みなさいっ!!」

チャャーリーは助手席からそんな声を上げながらゴーゴーっ!!と指示して来るアメリカに向かつてどうなっても知らねえからなあ!!と叫びながらギャをシフトダウンさせると、おいおいっ!?待て待て!!と声を上げながら停止を求めている警備兵を無視して



ゲートをぶち壊して基地内への侵入に成功する……

「バツカヤロウっ!!」

「顔はみたからなウイルソンっ!!」

そう叫んで来る警備兵二人をバツクミラーで確認したチャーリーは俺の事バレてんじゃない……と苦笑いを浮かべる。

「まあ幸い犠牲は一人だけで済みましたし……後は私達三人で挽回しましょう!」

「了解」

「ちよつと待て!俺って捨て駒なのかよ!」

何事も無かったかの様に纏めてくるアメリカ達三人にチャーリーが異議有り!と答えている中……トリントン基地司令部では基地指令で有るバリサム大佐の焦った声が響き渡っていた……

「ホントに敵機で間違い無いんだなマリア曹長!」

「IFF《敵味確認信号》は勿論の事、連邦軍の共用チャンネルから国際チャンネルまでありとあらゆるアプローチを掛けましたが有りませんって!」

「チツ!こんな端に有る田舎基地にまで進攻して来るとはジオン共め……迎撃機はどう

なっている！」

バリサムからの声に応えたマリアがキーボードを叩きながら頭上の大型モニターに既にながっている第三小隊計九機を表示させると、バリサムはムウ．．．右手で顎を擦りながらムウ．．．と唸り出す。

「第三小隊接敵までおよそ30秒です。更に一分後に第二小隊が上がるとの事です指令！」

「ジャックの奴早いな．．．よしマリア！ たった三機程度の爆撃機でこのトリントン基地を陥落出来ると思っていた連中に対しに鉄槌を下せっ！」

「イエッサー！ 第三小隊エンゲージ、敵航空部隊へ先制攻撃を開始せよ。」

バリサムの指示に従いオペレーターのマリアが攻撃許可を出すと、了解！と返して来た第三小隊長の声と同時に九機の戦闘機がミサイルを発射するのがレーダーにも映るがそれが即座に迎撃され第三小隊の機影も次々とレーダーから消えて行く．．．

「お、おい．．．何が起きている！」

「冗談でしょう．．．トリントンコントロールより第三小隊っ!？」

バリサムの声にマリアが慌ててキーボード叩きながら飛行第三小隊長へと通信繋ぎだす。

「トリントンコントロールより第三小队へ状況は！」

「こちら第三小队・・・敵機は爆撃機にあらずモビルスーツ・・・」

「応答せよ！ 応答せよ・・・バリサム指令第三小队全機のシグナルロストです・・・」

モニターを見ながらザーと聞こえて来るノイズ音に MARIA が顔を伏せると、最後に第三小队長から報告がありました。と言つて来るのでバリサムは悲痛な顔のままな今度はなんだ・・・と尋ねる。

「敵機は爆撃機では無くモビルスーツが居るとの事です・・・」

「なっ!? 本当かそれは！」

更に追い打ち求めて来る MARIA からの報告にバリサムがこれほどの不幸が有つて良い物かと打ちひしがれていると、遅れました!! と AMERIA と MIRIY がまるで遅れて登場するヒーローの如く飛び込んで来るので有つた。

くくく

## 初めての対MS戦闘その2

「では後ほど……!」

そう言いながらアメリカがミリイ共に手を振りなが司令部が有るビルにと勢い良く走って行くと、取り合えずどうする?と言いながらアクセルを煽りだすチャーターリーにシヨウはニヤつと笑みを浮かべる。

「取り合えずおやつさんの所に行くぞ!」

「だな……所でシヨウ?」

「何だよチャーターリー……」

「アメリカって何者だと思おう?」

「さあね……取り合えずこの厄介ごとが済んだら聞いて見たら?」

さっきの指示も有りアメリカの事が気になるのかチャーターリーからの言葉にシヨウが首を傾げているとそうだな……と答えながらチャーターリーが運転するジープがフルブレーキさせながらハンガー内で停車すると、何だあ一体!?!と整備班のホワイト大尉から驚いた声が上がります。

「おやつさん、僕のコアブースターの出撃準備……って、ホワイト大尉とウォルフ大尉!?」

シヨウがハンガーの中に入った瞬間目に入ったのは、取っ組み合うホワイトとウォルフで……何やら言い合っているのが見える……

「緊急事態なんじゃろうが!?……予備機でも良いから!?ワシが飛ぶと言うのに!!」

「んなものここにはねえ!それにもう何年も戦闘機に乗ってねえ奴に乗らせる訳ねえだろうが、このバカ野郎!!」

シヨウはああもう!と言いながら大人気なく言い争っている二人を強引に引きはがすと、呆れた顔で二人を見る。

「こんな時に何やってるんですか二人共……!」

「いや、ホワイトの奴の頭が固くての……?」

「ああ!?! 舐めんんなよウォルフツ! 昔のお前さんならともかく、今の凶体に収まる耐G スーツなんか有りやしねえんだよ……一昨日来やがれてっんだ!!」

シヨウはウォルフ大尉が基地の危機に飛びたいと言うのも分からなくも無いが……おやっさんの言う事も正論で有り、横に随分と広がってしまったウォルフ大尉に入る耐G スーツは存在しないし、そもそもこのトリントン基地には予備機が無いのも事実である。

「ウォルフ大尉! 代わりに僕らが飛びますから大尉は大人しくしててくださいいよ?」

「ムウ……シヨウがそこまで言うのなら仕方無いのう……」

現役パイロットで有るシヨウの言葉にウォルフがそう言いシヨウの目をジツと見ると、所でお前達!?

とウォルフを止めてくれた事に感謝しつつも整備班のホワイト大尉から焦った声が響き出す……

「おい坊主・・・出るのはいがバリサムの奴の許可は出てるのか?」

「出てませんよ? って言うか四の五の言っている場合ですか・・・」

そうジロつと睨んで来るシヨウにうつ・・・とホワイトがたじろぐ・・・

「分かった。坊主のコアブースターはともかくだ・・・お前えは一体何に乗るつもりなんだチャーリー?」

「何ってそりやあ・・・あつ!?!」

チャーリーはシートを被されている愛機であるトリアーエズに啞然とすると、ホワイトは仕方無えな・・・と頭を掻きながら整備主任で有るシゲの名を叫ぶ。

「おい、シゲ・・・このコアブースターと奥のセイバーフィツシュに燃料と弾薬を込めやがれつ!」

「ちよちよつと・・・おやつさん本気ですか!?!この2機は試作機ですし・・・しかもセイ

バーフィッシュの方はジャブローから入って来たばっかの新品ホヤホヤですぜえ!!」

「うるせえっ!んな事は俺も分かってるから、さっさと兵隊集めて出撃準備始めろっ…  
もたもたしてる奴から砂漠に埋めちまうぞっ!!」

ホワイトの怒鳴り声にシゲはハ、ハイッ!と敬礼しながらセイバーフィッシュの方へ  
駆けて行くと、チャーリーがああ…と困った顔をしながらホワイトに首を傾げる。

「おいチャーリー!俺が上手い事バリサムの奴に言っついてやるからさっさとコクピット  
に入って初期設定を行えっ!!」

「分かりましたっ!恩に着ますおやつさん…」

そう怒鳴って来るホワイトにチャーリーが敬礼しながらセイバーフィッシュの方へ  
向かうと、ホワイトは被っていた帽子のツバを掴みながらヤレヤレとニツと笑みを浮か  
べる。



「お前さんも甘いと言うか、浪花節って奴かのうホワイト？」

「う、うるせえな！」

ニヤつと笑みを浮かべるウォルフにホワイトは照れたのか被つてた帽子を深く被り直しながらそう呟く。

くくく

「状況はどうなってるんです！」

シヨウとチャーリーが出撃準備に取り掛かっている中・・・ミリイと共に司令部を兼ねている管制塔へ駆け込んだアメリカの声に上官であるマリアから左右に首を振らるとアメリカはチツ・・・と舌打ちする。

「誰か私に防衛ラインの展開を状態を！」

「じゃあ私がしますねえ先輩・・・」

そう声を上げるアメリカにミリイがマリアの隣でキーボードを叩き出すので、ちよつと二人共!?!と直属の上管でマリアは慌て出す。

「成程……モビルスーツ相手ではこの基地の戦力では太刀打ちできませんね。」

「えっ……アメリカ!?!」

ミリイから敵部隊の戦力をモニターで確認したアメリカが困った様に腕を組むと、では何か奇策でも有るのかね?と基地指令のバリサム大佐からジロつと睨まれる。

「無い事も有りませんが……その為には空と地上における全ての指揮権を私に預けて頂ける事が条件です。」

「バカを言えウォーカー軍曹……そんな事を許可出来ると?」

そう言いながら手を振るバリサムに向かってミリイがそうでしょうかあ……?何やら企んだ様にクスッと微笑んで来る。

## 初めての対MS戦闘・・・初めてのその4

『情報を制する者は世界を制す・・・これは例え自分が弱くても強くなれるおまじないだからねミリイ・・・』

4つ上の姉から小さい時に教えて貰った言葉を何度も反芻し覚えた技術を駆使したミリイはジツとアメリカを見つめながらその経歴を説明する。

「アメリカン・アン・ウオーカー元少尉・・・UC0077年オランダに有る士官学校を首席で合格し、その後は異例にも特殊任務部隊に拝礼され様々な任務で優秀な活躍を残すと有りますし・・・MSに対する訓練も受けているとの事ですがその辺りどうなんでしょうか先輩・・・?」

「何でその事を・・・!?!」

ミリイの説明にアメリカが目を見開きながら驚いていると、マリアからちよつとミリイ!と怒声が上がり出す。

「調べろとは言ったけどバラせとは言って無いわよ!」

「そんな事言ってる場合ですかあ？ここは先輩の素性を知らせた方が手ツ取り場合ですよおマリア曹長？」

そんな事を言つて来るミリイに困つた顔したマリアがうつ．．．と返す言葉に詰まっていると、ミリイの言う通りです。とアメリカは苦笑いしながら司令部に居る全員を見渡す．．．

「彼女の言う通り私は元特務でMSに対する訓練も受けてはいます。それでどうしますバリサム指令？」

「こうなつたら開き直るしかないと思つたアメリカがジツと基地指令のバリサムを睨んでいると、そのバリサムから勝算はどれくらい有る？と尋ねられたアメリカはそうですすね．．．と腕を組みだす。

「もし私の要求が全て通れば負けはしませんか？」

「どうせハナから負け戦だしな．．．宜しい君の指揮権を条件を呑むとする。」

「バリサム指令有難うございます。因みですが・・・では早速彼らの出撃許可をお願い出来ませんか」

「？」

そうニコつと微笑むアメリカの声に何だ一体・・・？とバリサムが滑走路の方を見ると、第一小隊のイエーガーのFF-4トリアーエズにシヨウウのFF-7bstコアブースター、チャーリーのFF-3セイバーフィツシュに続き第二小隊のジャック率いる戦闘機部隊も滑走路も滑走路上でタキシングを行っている。

「いつの間に・・・これも君の差し金かねウォーカー軍曹？」

「いえバリサム指令、そう言う訳では有りませんが・・・この基地を元よりすぐ傍に有る町を守る為にも承認をお願いします。」

そんなワザとらしい事を言つて来るアメリカに向かってバリサムがガシガシと頭を掻いていると、整備班のホワイト大尉から入電ですが!?!と補佐官から声を掛けられたバリサムは繋げ・・・と答えながら頭を抱えだす・・・

「もう良い・・・どう転んでもこのトリントン基地の戦力ではMS相手には太刀打ち出来

ん。こうなったら俺が全ての責任を取るからウォーカー軍曹・・・君に託すぞ」

どうせ一枚噛んでいるんだろうと思つたバリサムがジロつとアメリカを見ると、了解しました。と答え実戦指揮官と言う大義名分を得たアメリカはフツツと微笑みながらヘッドセットを装着するので有つた。

くくく

「アメリカの奴まだかよ・・・」

「落ち着けてチャーリー・・・多分アメリカにも考えが有るんだと思うしさ？」

このまま出ても軍機違反になります！と言うアメリカの注意の下ショウがチャーリーを窘めていると、ほう・・・お前もこの短い間で自分と成長したみたいだな。と自分が所属する第一小隊長のイーガーⅡバウスネルン中尉から驚いた様にニヤニヤと笑われるとショウはどう言う意味ですか！と抗議の声を上げる。

「俺が言った通りだ。今までのお前ならすぐにも飛び出そうとしたらどう？」

「そんな事は・・・無いとは言い切れませんね・・・」

シヨウの性格を承知しているイエーガーからの言葉にそう答えながらシヨウがそう答えているとピーと鳴る通信アラームと同時にアメリカから各飛行隊へ！と通信が入り出す。

『C B 1 C B 2 及び第一第二小隊へ通達です。これより各機はトリントン基地指令バリサム大佐の一任により私アメリカンウォーカーが指揮を執ります。』

そんなアメリカから指示に第一第二小隊の面々からへっ!?!と驚く声上がる中・・・いち早く反応したのがアメリカの事を気にしているチャーリーだった。

「俺は良いぜ？アメリカの指示なら間違いねえしな！」

「僕もチャーリーの意見に賛成・・・アメリカと指令のやり取りは全員聞いてたしね？」

そんな事を言つて来るシヨウに第一小隊長と第二小隊のイエーガーとジャックからもククつと笑われたアメリカはちよつとミリイ!とそんな事が出来る後輩に向かつて叱り出す。

「勝手に通信回線を弄らないで下さい!」

「あれえ?おかしいなあ・・・いつの間にズレたんだらうお?」

そうワザとらしく首を傾げるミリイに向かつてアメリカがまったくもう!と声を上げていると、全機上げるわよ!と叫んで来る MARIA にアメリカは慌てながらお願いします!と答るので有った。



## 初めての対MS戦闘その4

ザワザワと騒がしく混乱の真ただ中に有る管制タワーの中で基地指令で有るロイ  
|| バリサム大佐は目の前で戦闘指揮を執っている赤髪の下士官の後ろ姿を見ながら腕  
を組んでいた。

(優秀だとは思っていたが・・・まさか特務から来てたとは、それに何故彼女は降格した  
んだ・・・?)

新任のオペレーターが回って来ただけと思っていたバリサムが、後でもう一度その辺  
りの書類を確認しようと考えていると、バリサム指令! と駆け寄って来る管制官の纏め  
役で有るマリア曹長から声が掛かる。

「基地近くの街の住民避難ですがやはり間に合いません・・・」

「だろうな・・・しかしスマンなマリア? 雑用等させてしまつて・・・」

「いえ、そんな事は有りません。どっちにしろ今私があそこに居ても役に立ちそうに無

いので・・・」

そう苦笑いを浮かべるマリアの先には綿密な打ち合わせをしているアメリカと素早いタッチでキーボードを叩いているミリーの姿が有る。

(アメリカはともかくミリーも普段からあれくらいキビキビ動いてくれたら良いのね・・・)

内心ではそう愚痴りながらも仲間に入れない事にマリアは少し自分の役立たずに対し悔しく感じてしまうので有った。

「とにかく、私は住民避難の為に地上部隊との中継役に専念しますので二人の事を頼みます。」

「分かった。慣れんかもしれんがそっちの事も重要だから・・・あまり気負うなよマリア?」

マリアはフォローしてくれているのか、二つと笑みを浮かべて来るバリサムにキョトンとしながらもクスッと返事の代わり微笑む。

くくく

「各機へこれよりブリーフィングを行いますので良く耳をかつぽじって聞く様にお願います。」

口調こそ普段通りだがいつもよりピリっとした声出すアメリカからの通信に敵機へと迎撃に上がったシヨウ達はコクピットの中で緊張感に包まれる。

「知つての通りだとは思いますが、敵機はMS・・・所謂ジオンが開発した人型兵器で爆撃機が運びながら我がトリントン基地へと迫りつつ有ります。機数は三機、更に護衛にドップが一個小隊程ついている模様です。」

「そりやあまた大層なゲストだな・・・それで俺達はどんな風にエスコートしたら良い?」

そう割って入るジャックの冗談にアメリカを除く全員からククつと笑い声が聞こえます。

「そうですね・・・取り合えず、皆さんにはゲストの団体さんをダンスに上手く誘いながらも下手くそに踊って貰いましょうか?」

「んっ、どう言う事だアメリカ?」

ジャックのジョークに乗ったらしいアメリカの言い回しにイエーガーが首を首を傾げると、要はこうです。とアメリカは続ける。

「最初に一撃を加えたらすぐに離脱して下さい。絶対に交戦したらダメですからね  
!」

「おいちよつと待て!逃げるのか!・・・ジオンの奴等は基地を狙ってるんだぞ?」

「ええ、知って居ます。・・・ですが、はつきり言つてMS相手では戦っても負けまずよ。」

そう断言するアメリカになつ?!とイエーガーが言葉を失うと、じゃあ指揮官様は何か良い手でも有るのかよ!と若干ムツとしたジャックから抗議の声が上がると、勿論です。とアメリカは意地の悪い顔を浮かべる。

~~~~~

「これで空は良いとして今度は地上ですね・・・地上部隊とのホットライン形成はどうで

すかミリイ?」

「基地守備隊とは指揮系統が別ですからねえ……つと、今繋がりますう!」

シヨウ達に自分の描いた作戦内容を伝えたアメリカから尋ねられたミリイが通信回線の解析を終えエンターキーを叩くと、イエーガーやジャックと同年代に見える銀髪を長く伸ばしたどこかチャラ臭い男性が

メインモニターに映り出す。

「基地守備隊機甲部隊の指揮官をしているタンクⅡビンセント中尉です。私をお呼びとの事ですが……こんな時に一体どんな用でしょう?」

クセの強い物言いをするタンクと画面越しに向かい合ったアメリカは嫌いなタイプですね……と内心苦笑いを浮かべる。

「お初にお見えになります中尉殿。私はアメリカⅡアンⅡウォーカー軍曹と言い、今起きている迎撃任務の作戦指揮官を務めさせて貰っていますので、以後お見知りおきを……」

「へえ……アンタが噂のかわいい子ちゃんか？何で君みたいな綺麗な子が作戦指揮を執つてんのかは後で聞くとしてだ、俺に何の用なんだいアメリカちゃん？」

自分を小バカにしているのか軽々しく名前を呼んで来るタンクにアメリカからイラつとする様に舌打ちが聞こえると、先輩……とその様子を心配するミリイから顔を見上げてしまうので、ハツとしたアメリカはコホンと咳払いしながらニコつと微笑む。

「いえ、ちよつと中尉にお願い事が有るんですが聞いてくれますか？」

「デートのお誘いなら俺はいつも受け付けてるが……」

「成程……でしたら、お互い生き残る事が出来たらそのお約束を果たします。」

アメリカがそう答えながら微笑んだまま首を少し傾げると、思案顔を浮かべたタンクからふくん……と返事が返ると何か考える様に顎を擦り出す……

「そんな事を言つて来るとはこの厄介な状況をどうにか出来ると言う事で宜しいのかな……ウオーカー軍曹？」

「ええ、ビンセント中尉．．．その打開策には中尉の部隊が必要なのです。」

アメリカは真剣な眼となったタンクを更に押すと、すぐに分かった．．．と頭をガシガシと掻くタンクから返答が返って来る。

「そこまで自信が有るんならお前に賭けてみようじゃないかウォーカー軍曹．．．俺にここまで言わせたんだから絶対に着地と住民を守ると約束しろよ?」

「それは勿論です．．．ですが、勝てる保証は無いのでその辺りは勘弁してくれると助かります。」

そう困った様に苦笑いを浮かべるアメリカにどう意味だ．．．?とタンクが不思議そうな顔を浮かべると、もうすぐ戦闘空域に入りますよお!と声を飛ばして来るミリイにアメリカはそれではまた後で．．．と一旦通信を切るのの有った。

初めての対MS戦闘その5

「さあて面白くなってきましたね・・・迎撃機とジオン機との接敵まではミリイ?」

「約120秒後ですう!」

「了解です。各機へ再度通達です。先程も言いましたが絶対に敵MSとは戦わない様にお願いますよ!」

ミリイからの報告にアメリカがシヨウ達へ指示の徹底をしていると、いやいや笑って
るし!とミリイはクスッと微笑んでいる彼女の横顔を見ながら内心驚く・・・

(しかもこんな状況なのに何だか楽しんでいる様な気がしますねえ・・・?)

中央に有る戦術ディスプレイを見ながらニヤつくアメリカに対し、そう感じたミリイ
が不思議そうに首を傾げていると、ピーっ!と自分のデスクに通信アラームが鳴り響き
出す。

「先輩!第1小隊のバウスネルン機から敵機視認との事ですう!!」

「その様ですね・・・もう一度ピンセント中尉と繋いで下さいミリイ?作戦を第二段階へ
と進めます。」


~~~~~

「12時に敵機、アメリカの言っていた通り絶対に空戦はするなよ……特にシヨウトチャーリーは絶対にだ！」

「分かってますって……一撃加えた後は離脱する。心得てますって……なあチャーリー？」

「おうよ！俺達が約束破った事を有りますかイエーガー隊長？」

「ああ、山ほどにな……第二小隊も心の準備は良いか？」

問題児で有るシヨウトチャーリーの言葉にイエーガーが不安を感じながら隣を飛ぶ同期で有り第二小隊長のジャックIIアルヴィン中尉が搭乗するフライアローを見る。

「コッチもオツケーだ。ドツプの相手はコッチで引き受けるぜイエーガー！」

そう言いながらジャックがコクピットの中から親指を立てるのを見たイエーガーも頼む……と答え同じくジャックに向けてサインを送っていると、その右後ろで編隊を組んでいたチャーリーのコクピットにピーっと通信アラームが聞こえだす……

「アメリカからのプライベート回線……？」

会敵前に一体何だ？と思ったチャーリーが首を傾げながら繋ぐと、あつ……チャーリーとアメリカから少し戸惑った声を聞こえて来る。

「んっ？戦闘前だつて言うのに何だよアメリカ……」

「い、いえっ!?!その……ちゃんと無事に帰ってきてくださいね……?」

そう少し心配そうな声を上げるアメリカにチャーリーは顔を赤くしながら、えっ!と驚いた声をだす。

「ふくん……何だ俺の事心配してくれてる訳なんだアメリカは?」

「うっうるさいですね!私は別に心配何かしてませんし、ただ全員無事に帰って来て欲しいだけですよ!!」

「じゃあ何で俺にだけ通信を繋ぐんだよ?」

「うにゃ!?!」

チャーリーからの冷静な返しにアメリカから妙な声が上がると、コイツってホント変な奴だな?と思いつつながらチャーリーはコクピットの中でククつとつい笑ってしまう。

「仕方ねえな……ちゃんと無事に帰って来てやるからその時は一杯奢れよ?」

「むう……約束ですよ。」

プライベート回線の為分からないが、チャーリーは不機嫌なアメリカが時折見せる唇を尖らせる顔を想像しながら了解した。とニヤニヤしながら答えていると、アメリカからあつ……と焦った声が聞こえて来る。

「すみませんチャーリー……これで時間切れみたいです。ご武運を……」

「ああ、じゃあまたなアメリカ？」

そう答えるチャーリーのアメリカから通信を切られるとチャーリーはハア……溜息をつく。

「あんな可愛い事を言われたら絶対に死なねえじゃねえかよ……」

チャーリーがそう独り言ちていると、ピーつと再び通信アラームが鳴り響くので有った……

くくく

「ミサイルの有効射程距離圏内に敵機を捉えたぞ！各機エンゲージ……ありつたければら撒いて一気に奴さん達の後背へと突き抜けるぞ!!」

そう指示を飛ばすイエーガーのトリアーエズを先頭にシヨウのコアブースターとチャーリーのセイバーフィツシユがアフターバーナーを吹かしながら機体を加速させると、敵機もコツチに気付いたのか護衛機で有るドツプが前へと出て来る。

「敵機よりロックオン反応！」

「それはお互い様だ・・・全機一斉射！フレアを焚きまくれ!!」

ジオンが実用化に成功したと言われるミノフスキー粒子の所為で無線誘導兵器類は無力化され赤外線誘導ミサイルを放とうとしたイエーガーはH<sup>ヘッドアップディスプレイ</sup> U Dに映るドツプへとステイツクのボタンを押す。

「フォックス2！」

そう叫んだイエーガーの声と同時にトリントン基地所属機からも同様にミサイルが放たれると、対航となったドツプ三機からミサイルランチャーが撃たれる・・・

「当たるかよ・・・フォックス3っ!!」

フレアを機体後部から射出させたイエーガーが20ミリバルカン砲を牽制でドツプに向かつて撃ちながらシヨウとチャーリーと共に突破すると、しまった!?!と護衛を務めていたドツプの隊長が慌てる。

「ぜつ全機反転しろ!?!MSを乗せたドダイでは逃げ切れ・・・」

そう指示を言い終える前に後方からタイミングを合わせて来たジャックがその隊長機を撃ち落とすと、なつちやねえな・・・?とジャックはフライアローのコクピットの  
中で嘲け笑う・・・

「各機へ!まんまとケツを見せた間抜けな奴等を食い尽くせつ!」

そう叫ぶジャックの声に第二小隊の二機が隊長機を失い逃げまどうドップを追い掛ける出すので有った。

くくく

## 初めての対MS戦闘その6

「第二小隊が敵機との交戦に入ったのを確認しましたあ！良い感じに敵MS部隊との引き離しに成功してますよお先輩!？」

ミリイからの報告に戦況ディスプレイを見ていたアメリカもニヤリと笑みを浮かべる。

「私が思っていたよりも敵護衛機の練度が低いようですね。第一小隊はどうですミリイ?」

「接敵まで後10秒程・・・カウント行きますよお先輩・・・スリートウワン!」  
「各機ヘレッツ・ダンス!」

そう声を上げたアメリカがヘッドセットの向こうへと指示を飛ばすとイエーガー率いる第一小隊の動きが変わり出す。

~~~~~

「アメリカからの合図が来たぞ！俺にしっかり付いて来いシヨウにチャーリー!」

「誰に言ってるんですか。それくらい余裕ですよ?」

「そうそうシヨウの言う通りだぜイエーガー隊長?」

イエーガーはそう生意気な事を言ってきた部下二人に向かって抜かしやがれ!と声を上げると、目の前に見える爆撃機に乗った一つ目・・・MS06FザクIIに向かってHUDの照準を合わせる・・・

「乗って来いよ・・・フォックス3!!」

そう叫んだイエーガーがスティックのトリガーを引きながら乗機で有るトリアーエズから20ミリバルカン砲を撃つが、当然の如くMSの装甲に対しては歯が立たない上に向こうには更に大口径の武器が有る・・・そのまま何事も無い様にサブフライトシテムで有るドダイに乗ったままザクIIは主兵装で有る120ミリマシンガンを連射する。

「舐めんな一つ目野郎めっ!!」

トリアーエズのコクピットの中でイエーガーがそう叫びながら機体をバレルロールさせ必死に回避すると、さらにその上空からそのザクに向かって突っ込んで来る機体がある。

「イーツヤツホウ!!騎兵隊の到着だぜえ・・・くたばれ一つ目め!」

ブースターパックを装着したチャーリーのセイバーフィッシュがミサイルランチャーを発射しながら急降下すると、その攻撃により先行していたザクIIの頭部とドダ

イのкокピット付近を吹き飛ばしてしまい徐々にコントロールを失いだす。

「捉えた……」

そう様子をシートの後ろから引き出した狙撃用ゴーグルで見ていたシヨウがザクIIに向けてコアブースターに装備されているビームキャノンを発射すると見事に胸部に命中しドダイと共に爆散してするとシヨウは満足そうに二つと笑みを浮かべる。

「ビンゴ……!」

コアブースターのビームキャノンによる狙撃に成功したヨウがそう声を上げイエーガーとチャーリーと合流する為に高度を下げようとしていたそんな中……残った二機のザクの指揮官は憤怒していた。

「たかが戦闘機相手にやられたというのか!? 脱出の確認は!」

「出来てません……恐らく乗機共々……」

そう苦々しく答えて来る部下からの報告にその指揮官はそのまま離脱しようとするイエーガー達をモニター越しにキツと睨みつける。

「おのれ連邦の豚共め……伍長の無念を晴らす為にも生きては帰さぬぞ!!」

怒り狂う指揮官に部下も同じ気持ちなのか上部ミニターから無言でコクつと頷くと、第一小隊を追う様にドダイに乗ったザクⅡ二機が追い掛けて来る・・・

くくく

「奴っこさん達はどうかやら俺達の作戦に乗ってくれた様だな・・・?」

トリアーエズのコクピットから背後を見たイエーガーが二つと笑みを浮かべると、ここからが大変なんですよ・・・とシヨウから抗議する声が通信で入って来る。

「本当に上手く行くんですかねこの作戦は・・・正直言つて地上部隊と連携が上手く行くとは思えないんですが?」

「俺だつてそう思うが・・・ここまで上手く行っているのはアメリカのおかげと思うべきだぞシヨウ」

そう窘めるイエーガーに向かって確かに・・・と思案顔を浮かべるシヨウがモニターに映ると、まあその気持ちも分からなくも無いがな・・・とイエーガーも内心不安に思

う。

「何にせよだ。俺達は背後から危機迫って来る奴さん達と上手くダンスせんとならん……俺も含めだが上手く踊って舞台の中央まで誘い込めよ！」

「分かつてますってイエーガーさん。ただその相手が出来れば屈強な男じゃ無ければもう少しやる気が出るんですが……」

「違いねえなシヨウ？ だったら追って来るのをリンと思つて我慢したらどうだ。」

そう提案して来るチャーリーにそいつは良い！とイエーガーからもククつと笑われたシヨウは思える訳無いでしょう……と不機嫌な顔でチャーリーとイエーガーをモニター越しにジロつと睨む。

「バカやつて無いで行きますよ！」

そう声を上げたシヨウのコアブースターが編隊を崩し高度を下げだすと、おい待ってつてシヨウ！と声を上げるチャーリーのセイバーフィッシュとイエーガーもククつと笑いながらトリアーエズもその後を追い掛けるので有った。

初めての対MS戦闘初めてのその7

そのシヨウウ達の動きを戦術ディスプレイで見ていたアメリカはフフツと満足気に微笑んでいた。

「先輩、第一小隊が高度を下げ戦闘空域から離脱を開始しましたあー!」

「どうやら上手く逃がっている様ですね。地上の機甲部隊の展開状況はどうですかミリイ?」

ヘッドセットをずらしながら報告を上げて来るミリイにアメリカが腕を組みながら尋ねると、モニターに出すますねえ?とミリイから新たにアップデートされた情報が戦術ディスプレイに表示される。

「クセの強い方でしたが・・・素早い部隊配置ですね。」

「タンクⅡヴィンセント中尉は基地でも女癖が悪いという悪評も有りますしねえ?けど指揮官としては優秀な人ですよ!」

「そうなんですか・・・」

自分の事を調べ上げた事と言いつこの情報通の後輩に答えたアメリカは思案顔になる。

(ミリイって一体何者なんですかね・・・普段の業務よりも活き活きとしてますし?)

そう思いながらアメリカがムウ?と首を傾げていると、先輩く!!と間延びしたミリイから呼ばれる。

「ヴィンセント中尉から通信ですう!」

「分かりました。繋いで下さいミリイ・・・」

くくく

「どうにか間に合ったようだな・・・」

コロニーの残骸が散らばる砂漠地帯へと身を隠したトリントン基地機甲部隊指揮官で有るタンクは61式戦車の砲塔から顔を出したまま上空を見上げ苦笑いを浮かべた。

「最初に聞いた時は頭のネジが数本飛んでいると思ったが・・・」

・
そう呟くタンクは小一時間前の事を思い返す・・・

「おい正気かウォーカー軍曹!基地と町の防衛をせずに進軍し敵部隊を待ち受けると

は……」

「はい、どうせMS相手には10数輻程度61式じゃ歯が立ちませんし……」

そう困った様に苦笑いを浮かべるアメリカに役立たずと言われた気がしたタンクは内心コイツ……と腸が煮えかえる様な目でアメリカをジロつと睨んだ……

「……そこまで仰るので有ればさぞかし素晴らしい妙案が有るので?」

「まあ負けない程度の作戦なら有りますね。ただこれには空と地上での綿密な連携が必要となります……どうですヴィンセント中尉、私に賭けてみませんか?」

そうニヤつと笑みを浮かべたアメリカの言葉にゴクつと息を飲んだタンクは何故か急に高揚感に駆られククク!と笑い出す。

「良いでしょう……私も軍人の端くれです。貴女の作戦を聞いた上で町の住民を守れるのであれば賭けてみましょうよ!」

「分かりました。私の作戦はこうです……」

そうしてアメリカの説明を聞いたタンクは今現在も若干半信半疑ながらも自身の部隊を率い指定されたポイントで待機していた。

「まさかタンクやジャックの野郎たちと共闘する日が来るとはな・・・」

空部隊と地上部隊は基本的に犬猿の仲で有る。それを纏め上げたアメリカの指揮能力に驚きながらタンクがそう独り言ちていると、隊長！と隣の61式戦車の砲塔で双眼鏡を覗いていた副隊長から声上がる。

「上空に光源を確認・・・恐らく戦闘機かと」

「マジで来やがった・・・全車両には俺からの指示が有るまで絶対に撃つなと伝えろ！」
そう言いながらガンナー席に入り込むタンクに副隊長からヘッドセットに了解！と返事が返ったタンクは照準器を覗き込みながらペロつと舌なめずりする。

くくく

「シヨウ、チャーリー！アメリカが指定した高度まで来たぞ・・・分かつてるな！」
「分かつてますって!!」

「マジで頼むぜ……」

そう不安がる三人の機体が地表スレスレまで到達した瞬間……

「時は満ちました。……全機ロックンロールっ!!」

そう声を上げたアメリカからの声に目の前の三機が急上昇すると、何をバカな事かと……その背後を付けていたドダイに乗ったザクⅡの隊長はコクピットの中でククつと嘲笑う。

「航空機と違いMSは自由自在にどこでも撃てるだぞ?」

そうニヤついたザクⅡの隊長機が部下と共に120ミリマシンガンを構えのとなつた第一小隊の機体を仕留めようとするが、それはアメリカの指示で有効射程距離まで近づいてくれたタンク達61式戦車隊にも同じで有った。

「全車両一斉射っ!!間抜けなジオンの野郎共に撃ちまくれっ!」

そう指示を飛ばすタンクが一番ファイヤー!と二門搭載された155ミリ滑空砲で僚

機のザクⅡの胸部を撃ち抜くと、しよつ少尉殿！と声を上げながら機体ごと爆散した部下にザクⅡの隊長はおのれえ!!と自分の乗ったドダイが撃ち落とされながらも離脱に成功する。

「せめて部下達の無念をお前達でえ!!」

そうコクピットで叫ぶザクⅡの隊長が真下に見えるタンクの61式戦車隊に向け半ば自棄になりながら120マシンガンを連射する。

「あの野郎・・・全車両へ対空防御しながら全速で後退しろ!?!」
「遅い!!戦車程度でこのMSを相手にどうこうは出来まい?」

ここにきて優位に立ったザクⅡの指揮官にタンクが焦り出すと、タンク中尉!と頭上から一機の大型戦闘機が急降下して来る。

くくく

初めての対MS戦闘その8

一機だけ無傷のザクが真下の61式戦車隊へと攻撃仕掛けるのを確認したシヨウはメインエンジンをワザとカットしスラスターで強引に姿勢制御させながら急降下させ反転すると、どうしたシヨウ!?!と小隊長のイエーガーから通信が入る。

「敵MSがまだ一機生きて居ます!このままじゃ戦車隊がつ!!」

「タンクの奴撃ち漏らしたのかっ!?!」

「僕が突入するのでイエーガーさんとチャリーは支援を頼みますよっ!」

そう叫んだシヨウがイエーガーの許可を聞かずにコアブースターとそのまま急降下させると、あのバカっ!?!と悪態つくイエーガーの声を聞きながらシヨウはザクと交戦中の機甲部隊へと通信を繋ぐ。

「地上の機甲部隊へ、今から対地支援を行う。全速で後退されたし!」

地上に降りつつ有るザクの持つ120ミリマシンガンでの攻撃に大分混乱している

のか通信回線がノイズ混じりで酷い……

(返答無しか……こりゃあ精密な射撃が要求されるって事だね……?)

そう思いながら溜息をついたシヨウがコクピットシヨウは直上からそのザクⅡの頭部へとコアブースターのビームキャノンの照準を合わせた……

「貫ったあっ!!」

そう叫んだシヨウとザクⅡの方もロックオンされたのに気づいたのか上空へと120ミリマシンガンを撃って来る。

「戦闘機だどっ!?! 舐めるな連邦めがあ!!」

ロックオンアラームが鳴るザクのコクピットから叫んだパイロットが急降下するシヨウのコアブースターへと120ミリマシンガンを撃ち込むが、バレルロールによる巧みな操縦技術により全弾回避されてしまう……

「あっ……当たらないだどっ!?!」

「こなくそおおっー!!」

その銃撃をバレルロールで回避に成功したシヨウは操縦桿のトリガーを絞りコアブースターに装備されたビームキャノンを発射する・・・

「クツ・・・ジーク・ジオンっ!!」

誰にも聞かれずそう叫んだザクのパイロットが乗機ともに爆散すると、地表ストレスで機体を彦起こしたシヨウはフウ・・・と息を吐いた。

「どうにか間に合ったな・・・」

そう独り言ちるシヨウにピーと通信アラームが鳴り出す。

こちら

「機甲部隊指揮官のタンクⅡビンセント中尉だ。対地支援を感謝すると共に部下を守ってくれた事に感謝するシヨウ・・・降りたらリンの店で是非奢らせてくれないか?」

「有難うございますタンク中尉・・・ですが今回の作戦が成功したのは参加した全員の力です。飲むんなら皆で飲みましょう」

それが今回の戦いで散って行った戦友も含めていると感じたタンクはそうだな・・・と

「答えながら丁度上空を跳び越すシヨウのコアブースターに向かって感謝を込めて敬礼したので有った。」

~~~~~

「てっ・・・敵MS部隊の反応消失っ！護衛の戦闘機も全機撃破ですう!!」

「そう報告を上げるミリイの慌てた声にトリントン基地の司令部から一瞬時止まった様に静まり返ると」

「すぐに、ワアアアっ!?!と歓声が上がります。」

「こいつは驚いたなウォーカー軍曹・・・まさか本当にジオンのMSを撃破するとは!」  
「そう言いながら目を見開く基地指令で有るバリサムと同じ思いなのか上官で有るマリヤも驚いた顔でコクコクと頷くので作戦指揮官で有るアメリカはアハハ・・・と苦笑いを浮かべる。」

「負けない様にと考えた作戦ですが・・・どうも皆の頑張りがドンピシャにハマった様ですわね?」

「先輩っその皆さんがどうやら戻って来たようですよお!」

そう声を上げるミリイが指差す向こうに滑走路へと降りてこようとする第一、第二小隊の機体が明るくなる空の向こうに見えて来る……

「仕方無いわね……私が管制を引き継ぐから二人は出迎えに行きなさいな。」

「えっ!?! 良いんですかマリア曹長?」

「マリアさん有難うございますう!」

マリアの提案にその声を上げたアメリカとミリイの二人が勢い良く指令室から飛び出して行くと、

後輩思いで何よりだな?とニヤつくバリサムにマリアはフフツと少し照れ臭そうにヘッドセットを装着する。

くくく

「なあシヨウ? 滑走路の周辺に妙に人が居ねえか……」

マリアの指示で着陸コースへと乗ったチャーリーセイバーファイッシュからの通信に確かに……とシヨウもそう答えながらコアブラスターの高度を落とし出す……

「CBP1・2へ私からプレゼントが有るから着陸失敗なんて許さないわよ！」

「そんなへマする訳無いだろう．．．って言うかアメリカは？」

先程まで聞こえていたアメリカの声では無く急にマリアに代わった事にショウが違和感を感じていると、降りたら分かるわよ？答えて来る彼女の言葉にショウはチャールーに引き続き滑走路へと着陸した。

「やれやれ．．．どうにか帰ってこれたな．．．」

そう言いながらショウがキャノピー前方で誘導棒を振るマーシャルに気付きそのままゆっくりと機体を進めながら駐機場に収まったコアブースターのキャノピーを上げてフウと言いながらヘルメットを脱ぐと、ショウっ!?!と叫んで来るリンの声にショウはギョツとする。

「何でリンがここに．．．!?!」

コアブースターから降りたショウがそのまま自分の胸に飛び込んで来る愛おしい恋人に向かって驚いた声を上げると、リンから上目遣いでエへ．．．と微笑まれる。

「私も詳しくは分からないけど……バリサムさんやマリアの指示で町の皆を基地の中に入れてくれたんだ。」

「そっか……。二人には改めてお礼をしないと？」

そう答えたショウがリンをギュツと抱きしめていると、チャーリーっ!!とその隣ではアメリカの泣きそうな声が響いていた。

「ようアメリカ……。ってっ?!」

そう驚くチャーリーにアメリカもリンと同様に抱き付くとチャーリーは困った様に頭をポリポリと掻き出す。

「あの……。アメリカさん？」

「心配したんですよ……」

「悪かったって……」

そう泣きじやくるアメリカの頭をチャーリーが撫でていると、先輩良いなあ……。とミリイは横目で見つつお目当ての機体が降りて来るのを待つて居た。

「あつ、やつと来たあ・・・！」

そう声を上げたミリイの向こうでジャックのフライアローが着陸した。

こうして、ここトリントン基地で発生したジオン公国軍との対MS戦は連邦軍の勝利に終わったが・・・この事に対し新たな展開が起こればこの場に居る全員にもまだ分からぬ事である。

くくくくく



## ミデアの人その1

先日のジオン軍によるMS部隊との交戦から一週間程が経ち、基地内も大分落ち着いて来た。シヨウもコア・ブースターの運用テストの項目を全て終えた事も有り今度は新たに配備されたセイバーフィツシユのサポート要員として携わる事となった。

「調子はどうだチャーリー?」

「おう!上々だぜシヨウ・・・それじゃあ行って来るぜ!!」

そう尋ねるシヨウに気合い充分と言った顔でチャーリーがグツと親指を立てキャノピーを下げると、今度はその隣で機体をアイドリングさせているコア・ブースターのコクピットをシヨウは見上げる。

「あんまり無茶させないで下さいよイエーガーさん。」

「誰に言ってるんだ？お前よりも丁寧に扱ってやるから心配するなって！」

そう答えるイエーガーに間違いねえな？と整備班のホワイト大尉からククつと笑われたシヨウは少しムツとした顔になる。

「あんまり変なクセ付けしないで下さいよ！その機体が学習したデータはどこかに制式採用予定のコア・ブースターに採用されるそうですからね。」

「分かっている。それじゃあ機体も暖まって来たしそろそろ行くぞチャーリー？」

試作機のコアブースターに乗れて嬉しいのか普段より少しテンションの高いイエーガーがニツと微笑むと、低いエンジンを轟かせながら了解！とチャーリーのセイバーフィツシュと共格納庫を出てタキシングを始める。

「知ってるとは思うけど今回はセイバーフィツシュのブースターパックの高高度テスト

だから、無茶な機動は禁止だからねチャーリー！」

「シヨウ分かってるって、てかテストも何も一回実戦で試してただけどよ？」

へへつと笑いながら言うチャーリーにヘッドセットを付けたシヨウはまあ・・・確かにと先日のジオンMS部隊との戦いを思い出しながら苦笑いを浮かべる。

「心配するなシヨウ？その時は俺が随伴機としてちゃんと抑え込んでやるからな。」

「おっと、イエーガー隊長、旧式のトリアーエズから急に最新鋭機に乗ったばかりの癖にそんな事言つて良いんですか？」

「言つてくれるじゃねえか・・・チャーリー！絶対にお前のケツにへばり付いてやるからなっ!!」

チャーリーに煽られその闘志に火が点いたイエーガーがそう答えると、これは模擬戦じゃないって!?

!?とヘッドセットに向かってシヨウは焦った声で叫んだ。

「ご歓談中申し訳無いけど、CBP1及びCBP2へ離陸許可です。そのまま第一滑走路へ進んで下さい。」

そう割り込んで来た管制官のマリアの声に分かった分かった……と言いながらチャーリーのセイバーフィッシュとイエーガーのコアブースターが指定された滑走路へと向かうとエンジンの出力を上げ始める。

「CBP2、チャーリー出るぜ!」

「同じくCBP1、イエーガーテイクオフ!」

そう答えた二人がアフターバーナーを吹かしながら機体を加速させ一気に角度を付け急上昇させるのでシヨウはまったくもう！と呆れた声を上げる。

「テスト機にハイレート・クライムとか勘弁して欲しいんだけど・・・」

「何を言ってるんです？シヨウも同じ事やってたじゃないですか。」

背後から聞こえて来る淡々としたツツコミにシヨウが振り向くと、ニコつと微笑む赤髪の下士官の姿が有った。

「何だアメリカか、サボリか？」

「シヨウ達と一緒にしないで下さいよ！マリア曹長と交代となったので休憩がてらここに来ただけですっ!!」

ムウと唇を尖らせながら抗議して来るアメリカにそれは残念だったね？とシヨウは高度を上げて行くチャーリーのセイバーフィッシュを親指で指す。

「あくもう飛んじやつたんですねチャーリーは・・・」

「まあね。けど30分くらいで降りて来るから待つてれば？」

「そうします。後これは皆さんで飲んで下さいね。」

そう答えたアメリカが差し入れて基地のPXで買って来たドリンク等を袋から広げながら見せると、マジで!?!と整備班の連中がわんさかとしながら集まって来る。

「しかし坊主の言う通りチャーリーが居なくて惜しかったな嬢ちゃん？」

「うっ……ちよ、ちよつと待つて下さいホワイトさん!? 私は別にチャージャーに会いに来た訳じゃ無いですよ?」

アメリカからのお土産を手にするホワイトにアメリカが顔を真つ赤にしながら焦つた声上げると、何を言つてんだ? とホワイトを始めたとした整備班全員からニヤニヤと意味ありげにアメリカは笑われてしまう……

「そ、そう言えば今日のコアブースターに乗っているのは誰なんですか?」

これはマズイと話を逸らす為にアメリカが尋ねるとシヨウはイエーガーさんだよ? と答える。

「愛機のトリアーエズがオーバーホールに入ったから非番にも関わらず僕の代わりに乗りたいって言うからさ……」

「成程、イエーガー程の腕ならばあのジャジャ馬も乗りこなせるでしょうね。」

シヨウにそう答えながらアメリカがクスつと微笑んでいると、ゴオオオ・・・と轟音を上げながら数機のミデアが降りて来るのでアメリカはあれ・・・？と首を傾げる。

「おかしいですね・・・今日のフライトプランにはこの時間に定期便が着陸するとは聞いてませんでしたか？」

「何かの機体トラブルとかじゃないの。」

そう答えるシヨウにうくとアメリカも腕を組んでいると、そのミデアから一番近いこのハンガーへとジープが一直線にやって来た。

「私はジャブロー基地所属ミデア輸送部隊マチルダ隊の指揮官をしているマチルダⅡアジャン中尉だ。申し訳無いがここトリントン基地のバリサム大佐へとお取次ぎを願えないか？」



ジープから降りながらそう声を上げる赤毛の女性士官に何だって言うんだ!?!とこの場では一番上の上級士官で有るホワイトから焦った声が上がると、落ち着いて下さい。と答えたアメリカはその女性に前に立つ・・・

「ようこそトリントン基地へ、今確認を取りますので少しお待ち下さい中尉?」

「ああ頼む。」

そう答えるマチルダにクスッと微笑んだアメリカだが内心では焦っていた・・・

(マチルダ!!アジャンって確かレビル將軍の懐刀ですよね!?!何でそんな人がこんな所に・・・)

そう考えながらアメリカは混乱しているシヨウからヘッドセットを奪い獲る。

}

}

}

## ミデアの人その2

あれから暫くして基地指令のバリサムの執務室へと通されたマチルダは目の前でうゝむと唸りながら顎を擦るバリサムへとお気に召しませんか・・・と怪訝そうな顔で尋ねた。

「まあな・・・しかしこの命令書に書かれているのはホントかねマチルダ。アジャン中尉・・・？」

「ハイ勿論です。そこに書かれている通り、ここトリントン基地にジョン。コーウエン准将を責任者としMSの運用テストを兼ね備えた実戦部隊を設立します。」

そう淡々と答えるマチルダに一応確認したバリサムだったがバサつと自分のデスクに投げた書類には地球連邦軍総司令官で有るヨハン。エイブラハム。レビル將軍のサインも有りバリサムはハア・・・溜息をつきだす。

「コーウエンの奴は正気なのか？こんな田舎基地にそんな部隊を設立するとは・・・」  
「その事に関しては先日この基地で起きた対MS戦闘が要因と聞いてますが？」

そう首を傾げるマチルダにマジでか・・・とバリサムが頭を抱えていると、この部屋

をコンコンとノックする音が聞こえて来る・・・

くくく

「クツソ・・・痛つてなあ・・・」

「バカかお前は・・・あんな機動すりやあ身体はどこか痛めるに決まってるだろうが！」  
チャーリー向かつてそう叱り出すイエーガーに向かって静かにして下さい！と窘めたアメリカはバリサムの部屋の前で着崩した軍服の襟を正しだす。

「何でこのメンツで呼ばれたのか分かりませんが粗相の無い様にして下さいね。」

「そうだな・・・シヨウとチャーリーも良いな！」

そう指示を出すイエーガーに向かってシヨウとチャーリーも了解！と答えながら身だしなみを整える。

「それじゃあ行きますよ・・・」

そう声を上げたアメリカが緊張しながらドアをノックすると、良いぞ入れとバリサムから返事が返つて来るのでアメリカはゴクつと息を飲みながら部屋の中へと入った。

「イエーガー！バウスネルン中尉以下3名参りました！」

イエーガーの声に少し遅れてアメリカ達三人が敬礼すると、取り合えず座り給えとバリサムが自分のデスクの前に有るソファアを進めて来るのでアメリカはどうも……と答えながらイエーガー達と共に腰を落ち着かせた。

「それで……何故私達を呼びつけたのかお聞きしても？」

そういきなり口火を切るアメリカに驚いたのは対面に座るマチルダで有った。

「ふくん成程ね……報告書通り好戦的な性格のようねウォーカー元少尉は？」

そう言いながらクスッと微笑むマチルダにえっ!?!と三人から驚かれたアメリカは内心チツ……舌打ちする。

「おっと……怒らせるつもりは無いのよ。むしろ私は同じ女性としてウォーカー軍曹がした事は間違っていないと思ってるわ！」

「……その気持ちは有り難いです。ですがまだ私は仲間に明かしていませんのでこれ以上の事はご内密にお願いします……」

そう俯き出すアメリカにゴメンなさい……と謝ったマチルダが申し訳無そうな顔を浮かべるので、ここからは俺が話そう……と困った顔した基地指令のバリサムからフオ

ローが入る。

「唐突なのだが・・・実は本店から新たな部隊の設立をするという命令書がここトリントン基地に届いた。これは先日我が基地で起きたMSによる強襲を防いだ事が要因であり、主な関係者で有る君達を呼んだ訳だ。」

「・・・状況は理解しましたが、新たな部隊とは一体・・・？」

ここで三人よりも階級の高いイエーガーが尋ねると、それがな・・・と言いつつ薄くなった頭をガシガシと掻き出すバリサムに代わって私から説明します。とマチルダが立ち上がる。

「ここトリントン基地にMSの試験運用を主とした実戦部隊を設立します。」

そう言いながらニコッと微笑むマチルダに数秒遅れてアメリカはちよつと待って下さいよ!?!と慌て出す・・・

「正気ですか?!?こんな田舎基地にそんな部隊を設立って!ノウハウも何も無いんです

よ!!」

「あら、それなら元特務隊の貴女が持っている居るでしょうウオーカー軍曹……確かMSのシミュレーター訓練でも上位と聞いてますが?」

そうワザとらしく聞いて来るマチルダに私の事を完全に調べきつてますね……?と思つたアメリカはハア……と溜息をついた。

「それで……私に何をしろと?」

「話しが早くて助かるわ……貴女には先程バリサムが説明した。ジョン||コーウエン准将が進めている連邦軍が開発したMSを用いた戦闘教義ドクトリンを用いた試験部隊の指揮となつて欲しいのよ。」

そう説明したマチルダがニヤッと笑みを浮かべると冗談でしょう……?とアメリカは苦笑いを浮かべる。

「私が軍事裁判で降格処分となつた事を知つて置きながらそんな事言うなんてコーウエン准将とは相当イカれた人物の様ですね。」

「言い方は様々ですが、考え方は独創的な方だと思つてるわよウオーカー軍曹?」

そう挑発的にクスッと微笑むマチルダにアメリカはムウ……と不満そうにジロツと

彼女を睨みだす。

「良いでしょう。その命令には従いますが、勿論人事と装備に関しては私に一任して貰えるんですね？」

「ええ、この基地で部隊を作るので人事に関してはウォーカー軍曹に任せます。それと装備に関しては私達のメディアが運んで来たのが既に用意して有ります。」

そうニコつと微笑むマチルダとアメリカのやり取りに基地指令のバリサムに第一小队を率いるイエーガー達三人もヒヤヒヤしているとコンコンとノックする音が聞こえるので有った。

くくく



## ミデアの人その3

「マチルダ中尉、ミデアから荷が降りたのでご報告に上がりましたっ♪」  
そう言いながらニコつと微笑む女性下士官がドアの外から敬礼する。

「ご苦労ホワイト伍長、それでは皆さん早速見に行こうとしましょうか……我が軍の秘密兵器を見にへと？」

十一

「秘密兵器とはまた大層な言い回しをしますね。」

アメリカからの突っかかる物言いに対しマチルダが困った顔様に苦笑いをするが、アメリカには取っては急に現れた厄介者で有り実際に困っているのはアメリカ自身だ。

(いきなり来て無茶難題を押し付けるとは……そのジョン・コーウエン准将とやらの顔に一発ぶち込んでやりたい気分ですね。)

そう思ったアメリカが盛大にハア……と溜息をつくとき、それでは行きましようかとタイミングを見計らったマチルダの声に全員が領きバリサム執務室から出ると、彼女が秘密兵器と揶揄していた物が置かれていると言う滑走路脇のハンガーまでホワイト伍長の案内でアメリカ達はやって来たので有った。

~~~~~

「想像はしていましたが、まさか新型のMSを用意するとは上は本気なんですね・・・」

「勿論です。形式名称RGM-79「G」先行試作陸戦型ジムと言います、詳しくはこの機体のメインエンジンニアとなる彼女から話を・・・それではホワイト伍長お願いね？」

「ハイっ♪」

マチルダからの紹介にホワイト伍長と呼ばれた女性下士官がその背後からピョコつと前に出ると、初めましてっ♪と敬礼するのでアメリカ達も少し戸惑いながら宜しくお願います・・・と答えた。

「それでは早速この機体の説明と言う事なんです、その名の通りこの子は連邦軍が現在量産化を検討しようとしているMSの先行型でこの子達はそのMSに対しての実戦でのフィードバックが目的なんですっ。」

「成程ね。だから試作実験部隊か・・・」

「どう意味だよシヨウ？」

シヨウがホワイト伍長からの説明に腕を組むとそんな事を聞いて来る相棒に呆れた

顔になった・・・

「ちやんと話聞いてたのかよ・・・要は、僕らはこの試作機でジオンのMSと実戦を行い戦いの経験値を積んで来いって事！」

「それってひよつとして俺達がアレに乗って戦うのかよ!？」

「僕達にも見せるって事は・・・そう言う意味ですよねマチルダ中尉！」

そう不機嫌そうな声を上げるシヨウにご明察よカノウ少尉?と答えたマチルダは意味有り気にクスつと微笑む・・・

「まあ実際には、ウォーカー軍曹が先程言った通り彼女がどう決めるかだけだね。」

「そんなの決まっています。この私が巻き込まれた以上は一蓮托生です。勿論シヨウ達も私の仲間になって貰いますからこれからは指揮官として宜しく願いますね?」

マチルダの言葉に答えたアメリカがそう言いながらシヨウ達に向かってニコつと微笑むと、アメリカが指揮官ってマジかよ!?!とチャーリーからとてつもなく嫌そうな声が上がります。

「こんな可愛いくて優しい私が指揮官だと言うのに何が不満がなんですか!」

「いやいや俺達は戦闘機パイロットなんだぜ!?!いきなりMSのパイロットなんか無茶過

「ぎだろ！」

「大丈夫です。この私が優しく教えて上げますから？」

「……」

フフツと意味有り気な笑みを浮かべて来るアメリカに絶対に嘘だなど内心想ったチャーリーは今後の事に恐怖を覚えるので有った。

くくく

「所でさつきちよつと気になったんだが、そのホワイト伍長がメインエンジニアって事は……？」

そう言いながらイエーガーが手を挙げると、そう言う事ですよつととホワイト伍長からエヘへつと笑みが浮かび上がった。

「改めましてっ！今日付けでここトリントン基地へと配属されましたソフィー！とホワイト伍長ですっ！皆さん試験実験部隊のMSの整備を担当する事となりますのでこれからよろしく願いますっ！」

「「「ええっ!」」」

訊ねたイエーガーを含めた4人から驚いた声が盛大に響き渡ると、その様子を見ていたマチルダからフツツと笑われながらフォローが入る。

「こんな若いし頼り無さそうに見えるかも知れないけど、こう見えてホワイト伍長はジャブローでMS整備のスペシャリストとして研修を受けていてその腕前も相当な物と評価を受けてるわ」

「「「こんな小つちやいのがですか・・・」」

確かに長身のイエーガーと比べると彼女が小さいのは当たり前だが、女性の平均身長よりも更に低く小柄なアメリカよりもソフィーの背は低かった・・・

「小つちやくなんか無いですっ!」

イエーガーの言葉が禁句だったのか急にソフィーが大きな声を上げると、さつきからうるせえぞっ!と怒鳴ったここトリントン基地整備班の班長で有るホワイト大尉がハングアの顔を出して来る。

「ホワイト大尉すみません!ちょっと色々有りまして・・・」

「まったく頼むぜ嬢ちゃん……本店の連中がMSを置く場所を貸してくれと頼んで来たもんだから一応は了承したが、作業の邪魔すんなら今後は外で作業して貰うからな！」

頭を下げるアメリカに一通り文句言ったホワイトが帽子を直しながら再びハンガーの中に戻ろうとすると、相変わらず怒りっぽいなお爺ちゃんは「と腰に手をついたソフィーからムスつとした顔が浮かぶので、それを聞いた4人は再びええっ!?と素っ頓狂な声を上げると……彼女ソフィー||ホワイト伍長の5人で新しくチームを組む事になったので有った。」

その名はカスケード隊!その1

あれから数日が経った……。

新部隊設立の為に必要な物資と人材を運んで来たマチルダⅡアジャン中尉もまさかの実戦データが取れたテスト機で有るFFⅠX7BSTコアブースターを引きとり再びジャブローへと帰路へと立った。

そんな中……ハンガー^{格納庫}の奥に有るガラウタ置き場を詰め所として与えられた試験実験部隊の指揮官をする嵌めになったアメリカⅡアンⅡウオーカー軍曹はウニヤあーつと妙な声を上げながらデスクに突っ伏していた。

「大分お疲れの様ですねえ先輩?」

「当たり前です私はただの軍曹ですよ軍曹っ!なのに何でこんな事に……」

「まあ元少尉で特務出身の軍曹ですけどねえ?」

「……」

無言で答えるアメリカの前にコーヒを置きながら痛い所を突いて来る彼女はミリイⅡタニグチ伍長と言い先日まで一緒に管制タワーで管制官をしていた後輩で有る。

彼女は前回のジオン軍強襲の時に見せた情報分析能力や少し癖も有るがそこを気に

入ったアメリカがマリアと交渉し自分の補佐として引つ張て来たのである。

「軍事裁判有罪となり降格して、やつと面倒臭い奴等から解放されたと思つていたのに・・・何でこうなつたんでしょうね。」

「それは何だかんだ言つて上も先輩の能力を買っているからじゃ無いですかあ？」

「その上の一部の方々から私がスペースノイド言うだけでジオンの仲間と言うレッテルを張られたんですが・・・」

首を傾げるミリィに答えたがアメリカが苦笑いを浮かべていると、コンコンと詰め所の扉がノックされこの試験実験部隊隊長のイエーガーⅡバウスネルン中尉が入つて来る。

「アメリカ、頼まれていた俺が精査した転属願を持つて来たぞ？」

２メートル近い身長と筋肉質な身体から脳筋かと思われがちイエーガーだが・・・実は性格は細かく几帳面で有りこういった書類仕事は得意な事も有り、任せたアメリカはありがとうございます。と答えながら書類を受け取つた。

「思つていたより多いですね・・・もうちょっと絞れなかつたんですか？」

「無茶いうな。これでも悩みに悩んで半分を切ったんだからな!」

そう難しい顔をするイエーガーにアメリカはムウ・・・と唸りながら腕を組みだす。それは何故かと言うとここトリントン基地に配備される予定のMSの数は全部で9機で有り三個小隊一個中隊なのである・・・

「仕方有りません・・・志願者の皆さんには悪いですが、テストと言う名のふりに掛けて希望者の人数を減らすしか有りませんね。」

そう答えながら意地悪い笑みを浮かべるアメリカにどんな方法でやるんだ・・・?とイエーガーが怪訝そうな顔で首を少し傾げる。

「その辺は考えて置きます。それよりも機種転換の方はどうです?私のスコアくらいもう抜きましたか?」

「こんな短期間で出来るかよ!?!って言うかマニュアル片手にシユミレーターって鬼畜過ぎるだろう!」

「だって仕方無いじゃ無いですか?本来なら私が教えるべき何でしょうが・・・見ての通り書類処理が多くて?」

そう言いながら自分のデスクにアメリカがイエーガーの持って来た試験部隊の志願者リストを広げると、さつきまで億劫そうにコーヒー飲んでたのになあ・・・と補佐官のミリイからボソッと呟かれる。

「おいアメリカ・・・?」

「ハイハイ分かりましたよ・・・それじゃあちよつと指導に行くとしましょう。」

ジロつと睨んで来るイエーガーにそう答えたアメリカはミリイに如何なる手段を使い更にイエーガーのリストを絞る様に指示すると、金蔵音が鳴り響くハンガー内へと二人揃って出たので有った。

くくく

「MSのジェネレーターには幾重のもプロクテトが掛けられてるって言うのはこの前も話したと思うんだけど・・・それは核融合炉の安全面からで実際にはリミッターさえ解除すれば更なる出力向上が望めますねっ。」

「けどもしジェネレーターが暴走したら大変な事になるんじゃない?」

「その限界点を見極めるのが私達エンジニアの仕事ですっ♪」

地球連邦軍本部の有るジャブローでMSに対する専門的な知識を学んだソフィー||ホワイト伍長による講義にトリントン基地整備班主任のシバ||シゲオ曹長からいやあー流石おやつさんのお孫さん!!と太鼓判を押す様にパンと手を叩いて来る。

「こうなつたらもうおやつさんは引退つすね?」

「おいシゲ手前え・・・勝手に俺をロートル扱いすんじやねえぞ!」

そうニヤつくシゲにホワイトが噛みつく様に睨むと、アワワ・・・と怯えているソフィーに近寄つたアメリカがイーガーを連れながら相変わらず賑やかですと呆れた顔でその肩に手を置いた。

「ホワイト大尉? 若いシゲさんに遅れを取り苛立つのは分かりますが・・・貴方がこの基地の整備班の柱なので、ソフィーを筆頭にシゲさんと仲良くやって下さいよ?」

「まったく・・・嬢ちゃんに言われちゃ仕方ねえな・・・」

二回り以上は年下に窘められたホワイトが困つた様な顔でフツと苦笑いを浮かべた。

「所でシヨウ達を探してるんですがどこに居るか知りませんか?」

「それなら上だ。」

そう言いながら指さすホワイトにアメリカは成程・・・と答えながらハンガーにそびえ立つ陸ジムを見上げた。

その名はカスケード隊！その2

「3日以内に自分のスコアを追い越せとか素人相手無茶言い過ぎだろアメリカの奴っ
!?!」

その期限が切れた場合は元特務で有るアメリカとのCQC近接格闘と言う罰ゲームが待つて居る為にシヨウは必死な顔でメインモニターに映るMS-06FザクIIとシュミレーター戦闘を行っていた。

「クツ・・・そこだあ！」

サイドステイックを操作しながらシヨウが陸ジムに装備している180ミリキャノンの照準をザクIIに合わせてトリガーを引くと、ドンツ!!と鈍い音と共にザクIIの胸部に直撃した。

「ビンゴッ！これで今までのスコアを更新したっ・・・つてえ!?!」

倒れたザクのその背後から更に現れたもう一機に慌てたシヨウは照準は適当に牽制でサイドステイックに有るトリガーを引くと、ピーッ!と鳴り響く警告音と同時に目の

前に居たザクⅡの右肩が吹き飛んだ・・・

「ラツキー・・・でも無いってねえ。こんな時に弾切れなんてツイてないんだけど!!」

モニター脇に表示されたA M M O E M P T Y弾業不にシヨウは180ミリを捨てると、間に合えよ・・・?と思いつつ腰のアタッチメントに有る100ミリマシンガンを引き抜く・・・

「貰ったあ!!」

そう叫んだシヨウの陸ジムがヒートホークを振り降ろそうとしたザクⅡをバラララッ!と100マシンガンを連射し蜂の巣にする。

「これで最後か・・・?」

期限で有る3日目にしてやっとの事でスコアを達成したシヨウがそう安堵しながら息を吐いていると、ピーつと鳴る警告音に今度なんだよっ!?!とシヨウは驚きながら急接

近して来る敵機へと1000ミリマシンガンを構えた。

「クツソオ・・・速いつ!？」

見た事が無いシルエットの敵MSにショウの陸ジムが撃つた1000ミリマシンガンが素早い機動により全て外れると、不味い!？と思ったショウは懐へと踏み込んで来るスカートを思わせる下半身を持つ敵MSと肉薄した・・・

「くなくそつ!!」

そう叫んだショウが陸ジムの脚部に有るサーベルラックからビームサーベルを引き抜くとスカート付きの敵MSもザクが持つヒートホークでは無く刃が長いヒートサーベルで斬り込んで来る。

「大振りなんだよお!!」

そう叫んだショウがフットペダルを踏み込みながら陸ジムのバーニアを吹かし、上段から振り降ろそうとするスカート付きからの一撃をそのまま一気に躲しショウはやああ!!と声を上げながら左腰に構えたビームサーベルを一閃・・・居合い抜く様に胴体と下半身を斬り捨てながら駆け抜けたので有った。

「どうだこの野郎・・・僕の勝ちだからな!」

ハアハアと息を荒くしながらそう声を上げるシヨウの目の前にミツシヨンコンプリートとモニター表示されると、プシューと開いた陸ジムの上部ハッチからお見事でしたね?とアメリカが覗き込んで来る。

「私は最後のスカート付きにやられちゃいましたんですけど・・・シヨウって何か武道みたいなのをしてたんですか?何か妙にビームサーベルの使い方が上手かったですが・・・」

「小さい頃に剣道をしてたからね・・・胴抜きは得意なんだ。」

「そう言えばシヨウってアジア系ですもんね。確かサムライ・・・って言うですっけ?」
「侍とはちよつと違うけど・・・まあそんな感じだよ。」

アメリカにそう答えながらシヨウが苦笑いを浮かべていると、よつしや!ノルマクリアだぜ!!とチャャーリーからもガッツポーズが上がり出すのでシヨウはまったく・・・と呟きながらアメリカを見る。

「アメリカのスコア達成に僕ら3人が達成したみたいだしちよつと息抜きしない?」

「そうですね。あれ以来リンさんとも顔を合わせてませんし……」
「そう言いながら顔を俯かせるアメリカにシヨウは数日前の事を思い返す。

~~~~~

「ねえアメリカちゃん！どういふことなのそれっ!？」

そう怒声を上げるリンにその日アメリカは困った顔で自分が降格処分を受けた説明を続けていた……

「リンさん……怒ってくれる事は嬉しいんですがこれはもう決まった事なので覆さないんです。」

「でも……っ！アメリカちゃんは悪くないじゃない？自分の身を守るための正当防衛だよー!」

そう怒り出すリンにアメリカはホント変わった人ですね……と笑みを浮かべながら当時の事を思い返すと、元上官からの嫉妬に絡んだスペーススノイドへの差別に加え高官



を父に持つ部下から受けた強姦紛いの事実を説明したのだが、リンからは納得のいかな  
い声が続く……

「だからって!アメリカちゃんだけ処分されるのはおかしいじゃない!」

「まあ……それが軍隊つてもんです。しかし……そのおかげと言うのは変ですが、ここ  
に飛ばせて皆と出会えたのは私に取って幸運だと思つていますよ?」

そうニコツと笑つて来るアメリカに驚いたリンはシヨウ達と顔を見合わせた。

「それじゃあアメリカちゃん……改めて乾杯しよつか?」

「改めてですか……別に良いですが何に對してです。」

そう首を傾げるアメリカにリンは少し照れ臭そうに顔を赤くしたので有った……

くくく

## その名はカスケード隊！その3

「リンさんがあの日・・・あんなに私に起こった事に怒ってくれた事が凄く嬉しかったです。あの後大丈夫でしたかシヨウ？」

勤務も終わりいつものルーティンでリンの店を向かうジープの中でその時の事をアメリアが思い返していると、まあね・・・と運転するシヨウからチラツと苦笑いが見えた。

「解散して店を閉めた後もアメリアを襲ったって言う奴等に対して大分怒ってたよ・・・お陰で僕もそれに付き合ってたから大分飲まされたんだよね・・・？」

「それは申し訳ありませんでしたシヨウ!？」

アメリアがそう困った様に答えると、そう言えば・・・とシヨウは話を変える様にバツクミラー越しにアメリアを見た。

「さっきのシュミレーター戦闘の最後に出て来たスカート付きの動きの速いMS奴って何？」

「あつ俺も気になったぜ？あんなジオンMSが居るのかアメリア?？」

シヨウに同調しながらチャャーリーも助手席から振り向いて来ると、さあ・・・?と

アメリカから首を傾げながら両手が挙がった。

「私もヒトツメ・・・ザク以降のジオン製MSの事は詳しく無いんですよね?最新のシユミレーターに出て来ると言う事はそんな敵MSが存在すると言う事しれません。今後の事も考え適応出来るようにして置いて下さいね二人共?」

そう指示を飛ばしながら二つと笑みを浮かべるアメリカにイエスマム!とシヨウとチャーリーから返事が返ると、もう着きますよお!と指を差すミリイの声にシヨウ達は背後に付いて来るイエーガーとソフィーのジープと共に目的地で有るシヨウの恋人が店をするリンのCASCAD<sup>カ</sup><sup>ス</sup><sup>ケ</sup><sup>ー</sup><sup>ド</sup>Eが見えて来た。

くくく

「皆いらつしやい♪いつもカウンターで良いかしら?」

カランコロンと鳴るドアベルの音と共にこの店CASCAD<sup>カ</sup><sup>ス</sup><sup>ケ</sup><sup>ー</sup><sup>ド</sup>Eの女性店主のリンローダンセが出迎えるとシヨウ達をいつものカウンター席へと案内した。

「リンさん、ありがとうございます♪」

「フフっゆっくりして行っつてね？」

ハイっ！と頷くアメリカにリンが微笑むと彼女はアメリカの隣に座っていたシヨウに向かつてニコっつと微笑む。

「じゃあ私は料理の方やるからシヨウはドリンクお願いね？」

「はいはい……ではご注文をどうぞ？」

そう洩々と言った感じでリンからエプロンを渡したシヨウがカウンターに立つと目の前の仲間達全員からニヤニヤと揶揄う様な目線を感じる。

「クククっ……なあシヨウお前そのままリンに雇ってもらってたらどうだ？」

「確かに？ イエーガーさんの言う通りじゃねシヨウ！」

「リンさんと二人でお店やるのも素敵だと思えますよ？」

そう好き勝手言っつて来るイエーガー、チャーリー、アメリカの三人にシヨウはムスツと不機嫌そうな顔で

取り合えず最初はビールで良いね!と言いながら三人の注文を聞かずにビールを過ぎだす。

「あつウエイターさん、私とソフィーは甘めのカクテルをお願いしますねえ?」

「ハイハイ分かったって!」

それに加えミリイもニヤニヤしながら注文して来るのでコイツら・・・とシヨウは内心イラつとなる。

「はいお待たせー! って・・・どうしたのよシヨウそんな顔して?」

「別に何にも・・・」

何故かムスツとした顔するシヨウに不思議そうな顔をしたリンがカウンター席に料理を置くと、何ですかこれ?!と新たに仲間へと加わったソフィー|| ホワイト伍長が首を傾げた。

「揚げた魚の天ぷらよソフィーちゃん。取り合えず食べてみて、絶対に美味しいから!」  
「その前に乾杯だって・・・ほらリンの分も?」

そう言いながらシヨウがタイミング良く全員分のドリンクを置くと、シヨウ有難う・・・とリンはニコつと微笑んだ。

「じゃあ何に乾杯しようか・・・」

「この前と同じで良いんじゃないですか? 私はあの時の聞いたリンさんの声に正直心が

痺れたんですよね……」

ジツと見つめながらリクエストして来るアメリカに仕方無いわねえ……とリンが溜息をつくと自分のジョッキを上げながら全員を見た。

「この偶然の出会いと皆との永遠の友情に……乾杯っ！」

「「「カンパニー」」」

乾杯の音頭を取るリンに合わせてシヨウ達も声を上げながら各々ジョッキを当てると早速リンの作った料理を食べ始めた。

「うわっ何ですかこれは!? 表面はサクサクながらも中は魚の身から出る肉汁がじわっと沁み込んで来ますね?」

「アメリカの言う通りだぜ……おいシヨウ! 米くれ米っ!!」

「あつ私も欲しいです!」

この店に通い出してからかすっかかりアジア圏内の料理の味に慣れてしまったのかりんはハイハイと答えながらクスクスと笑い出す。

「良いですねこの天ぷらって料理は? ビールに良く合います。」

「だろ? 醤油じゃなくて塩で食べるのもっと美味しいから試して見てよ?」

「塩だけですか……確かに! 塩辛いのが更に良いですね!」

シヨウから言われた通り塩に付けた天ぷらにアメリカが太鼓判を押すと、お待たせ?

とリンから置かれたご飯にアメリカ達は天ぷらをおかずにガツガツと夕飯を楽しむので有った。

## その名はカスケード隊！その4

「いやあく美味しかったです。この料理はってリンさんが考えたんですか？」

出された料理を綺麗に食べ終えたアメリカが満面の笑顔で尋ねると、違うわよ？とリンはクスッと微笑む

「これはシヨウの考案……って言うか母国の料理よ。ねっ？」

「シヨウがリンさんに教えたって事ですか？って事は料理出来るんですね……」

リンの言葉に驚きながらアメリカが何故か不機嫌そうにムウ……と口を尖らせるのでシヨウは一体何だよ……!?!と首を傾げた。

「まあ小さい時に母さんが居なくなつたからさ……その代わりに僕を育ててくれた親父の事を思い出しながら僕が必然的に料理を覚えただけだよ。」

「そうなんですか……因みにお父様は今？」

「アジア方面に親父の居たニホンが有るんだ……因みに今はジオンの占領下だよ。」

「それって……」



少し困った顔をするシヨウに何か察したアメリカが自分の発言に失敗しましたね：：と内心悔やんでいると、でもね！とリンからフォローする様に慌ててシヨウの肩に手を置いた。

「シヨウがアドバイスをくれたから、この前仕入れた痛みかけた魚の処理が出来たのよ？」

「ちよつとリンさん!?それって腐りかけた料理を客に出したって事じゃ無いですか!」  
「火に通せば大丈夫だつて?しかも揚げてるし・・・」

抗議するアメリカにワザとらしくリンからキョトンされると、何だよそれ・・・とシヨウがククつと笑いだす。

「よし、辛気臭いのは止めてもう一度乾杯するぞ!」

その顔を見たイエーガーがタイミング良くジョッキを上げると同時に、そうですよ♪と少し酔ったのか頬をピンク色に染めながら同調するソフィーにイエーガーはドキつとしながら照れ臭そうにするシヨウをワザと見ながら乾杯の音頭を取ったので有った・・・

「所で先輩・・・部隊編成の進捗ってどうなんですかあ?」

あまりお酒に強く無いのかミリイがカクテルを半分残したままこの出来上がった状態で尋ねて来るとアメリカは彼女を補佐に選んだ事を本当に良かったと感じた。

(ミリイを見ていると何だかケイの事を思い出しますね・・・)

そう思いながらアメリカが士官学校時代に出来たしつかり者の親友の事を思い返している、先輩?と呼んで来るミリイの声にハツとしたアメリカはすみませんと答えながらコホンと咳払いした。

「今の所イエーガーに絞って貰った志願者は24名、しかしマチルダ中尉から与えられた私達の装備はMSが9機で3個小隊1個中隊規模です。」

「だけどお、その内の6機は通常のMSで残り3機が変わってるんですよえ?」

「その通りです。まあ・・・その3機の人員は既に決まっていますけどね。」

首を傾げるミリイにクスッと微笑んだアメリカの中では既に人選は決まっている。彼女が率いる試験実験MS部隊にはRGM-79「G」陸戦型ジムが3機でこれが第一

小隊、そして第二小隊にまだ機体は無いがRGM-79ジムでこれは陸ジムとは別の生産ラインで作られる制式量産機で有る。そして件の第三小隊だが・・・これが曲者で有つた・・・

「RX-75ガンタンク・・・こんな戦車もどきに好き好んで乗る奴なんか決まっていますよねえ?」

「そこなんですよミリイ・・・しかも相手はタンク中尉です。私の言う事聞くかどうか不安ですね・・・」

「先輩なら大丈夫ですつてえ?所で・・・第二小隊の隊長は誰なんですかあ!!」

アメリカを慰めたミリイが急に真剣な眼でジツと見つめて来るとアメリカはハア・・・呆れた顔になる。

「ミリイの念願通りジャックですよ・・・まあ基地内の実力から見ても当たり前的事ですがね?」

「フフフ・・・同じ部隊になったのだからこれで基地のお姉さま方の誰にも邪魔されずジャック中尉を誘惑出来ますねえ・・・」

「あの・・・お願いですから私を巻き込まないで下さいねミリイ・・・」

相変わらず肉食系の後輩にアメリカが苦笑いを浮かべていると、所でよ?と隣の

チャーリーから声を掛けられた。

「せっかく俺達で部隊を作るんだから何か名前を作ったらどうだ？」

「それは良いですね！試験実験部隊じゃ味気ないですし・・・」

チャーリーの提案にアメリカがムウ・・・と思案顔をしながら唸り出すと、ねえリン？とシヨウは自分の恋人に何かヒントが有るかも知れないかと尋ねた。

「リンはこのCASCAD Eって言う店の名前をどう決めたの？」

「えっ決めたのは父と母だけど・・・確かこの地域で良く出るビールから取ったとか？」

思案顔でそう答えるリンにカスケードか・・・とシヨウは空いたビール瓶を見ながらウンと頷いた。

「ねえアメリカ・・・僕らの部隊名はカスケード隊って言うのはどうかな？このオーストラリア大陸で出会いリンのお父さん達が作った店出会った僕らが組むんだ。」

「それは良いですね！さっきしたリンさんの挨拶にも有りましたけど・・・何か縁を感じた素敵な部隊名じゃないですか!？」

「じゃあ決まりだね。悪いけど店の名前を借りるよりん?」

興奮するアメリカにそう答えながらシヨウが二つと笑みを浮かべると、別に良いけどさ・・・と呆れるリンの了承の下・・・試験実験MS部隊カスケード隊がこの晩に結成されたので有った。

くくく

## 機種転換訓練

そしてその数日後、オーストラリア方面軍トリントン基地に創設された試験実験MS部隊・・・カスケード隊として14名がアメリカの下した過酷な訓練をクリアし整然と並び座って居た。

「えーこれまで私が与えた訓練に血反吐した皆さんはお疲れさまでした。これで合格とし機種転換訓練は終了とします。」

そう言いながら軍曹ながらもニコッと微笑むアメリカにイヤッホオウ!!と自分よりも階級が上の筈の男性士官達から大喝采が上がり出す・・・

「何ですかこの隊員達の喜び様は・・・?」

「恐らくですけどお・・・恐らく先輩の訓練から解放された所為じゃ無いですかあ?」

そうツッコんで来るミリイにアメリカはムウ??と首を捻りながらこの数日間の事を思い返した・・・

~~~~~

「それでは今日はランニングと行きましょうか？」

「おいちよつと待てアメリカ……本気でこんな物を着て走るのか!？」

そう異議を唱えるのはイエーガーで教官役のアメリカは歩兵部隊と同じ装備をさせた機種転換訓練に志願した候補生隊に向かって首を傾げた。

「勿論です。MSに乗るんならそれなりのGに耐える為にも基礎体力は必須ですよ？」

「いやそれは分かるが……俺達のほとんどは戦闘機パイロットだぞ。今更こんな訓練は必要無いんじゃないか……」

「それはそうですがイエーガー、それ以外の隊員も参加しているのでここは公平を保つ為に頑張ってください?」

そう答えながらニコつと微笑むアメリカに渋々と言った顔で了承したイエーガー達が士官学校で行ったフル装備の上にライフルを持ったまま基地の滑走路の周りを走ったり……

「じゃあ今日はCQC近接格闘訓練です。」

「つて事は訓練だからどこを触っても良いんだな？」

そうニヤついたチャーリーが瞬殺されアメリカに投げ飛ばされたり・・・

そしてある日は射撃訓練を行ったアメリカがそう言いながら腰のホルスターからハンドガンを引き抜きながらパンパンと的に向かって発砲した。

「MSの火器は私達人間と同様に狙って撃つものですが・・・ミノフスキー粒子の台頭によりロックオンの精度も従来より甘くなっています。」

そう言いながら撃った全弾をターゲットの頭に命中させたアメリカが特務時代から使っている愛銃のロツク17Lをホルスターに収めると、おおっく！とその瞬間を見ていた全員から歓声が上がった。

「生身でもMSでも所詮は兵隊で被弾すれば致命的です・・・なら一撃必中を目指すべきだと私は思いますので皆さん頑張ってくださいね。」

「まあ確かに……アメリカの言う通りかもね？」

その考えに頷いたシヨウが得意な射撃でアメリカを驚かせたりと、当初は30名近く居た志願者の他にもアメリカから見て個性的で目を引く人材を引き抜き精査した結果このメンバーでトリントン基地試験実験部隊カスケード隊が結成されたので有った。

「では、早速ですが……各小隊長とポジションを発表します。」

そう声を上げるアメリカにカスケード隊の全員から緊張しているのかビシッと姿勢を正した。

「先ずは第一小隊ですが、一番機イエーガー、二番機シヨウ、三番機チャーリー、そしてバックアップ指揮は私アメリカです。」

そう言ったアメリカの言葉にシヨウ達から良し！とホツとした声が上がるとアメリカは更に続けた。

「そして第二小隊の一番機にはジャック・アルヴィン中尉と二番機三番機はレオン少尉とユウヤ曹長でバックアップにはミリー・タニグチ伍長が担当します。」

「やったねえ♪」

嬉しそうな声を上げるミリイにアメリカがまだ途中ですよ！と窘めていると、それで俺達はどうなんだい？と担当する機体の所為も有り一番多くの隊員を引き連れて来たタンクⅡヴィンセント中尉からニヤニヤと笑みが浮かんだ

「各小隊長には事前に伝えてますが、タンク中尉の第三小隊は機体はあくまでも支援がメインですので私の指示に基づいて動いて下さいね！」

「ハイハイ、分かっているって．．．これから宜しくなアメリカ？」

そういいながら二つと何を考えているのか分からない得体の知れないタンクにアメリカは苦笑いを浮かべながらアハハ．．．手を握ったので有った。

くくく

そしてその日の晩アメリカ達は新たにジャックとタンクを加え結成したカスケード隊のメンバーでショウの恋人が店をしている部隊名で有るC A S C A D Eにお邪魔していた。

「はいお待ちませ！豚丼が出来たわよ皆？」

そう言いながらリンが焼いた豚肉と野菜を絡めたどんぶりを全員に出すと、何だコレっ!?とこの店に初めて来たタンクから驚いた声が上がった・・・

「こんな美人で美味しい店が基地の近くに有るなんて・・・ズルいぞ二人共！」

そう抗議するタンクに俺も初めてだつて・・・とジャックが異議を唱えながらイエーガーを見た。

「元々ここはシヨウ達の馴染みだ・・・それにリンはシヨウの恋人だぞ？」

「嘘だろっ!?あんな美人が何でシヨウと・・・」

意外な事実を知ったジャックが驚くとムウ・・・とその様子を見ていたミリイからジロツと睨まれた。

「ここにも可愛い子がますけどお！」

「どこにだ？俺には見えないが・・・」

そう煽るミリィにジャックもその好意を知っているのか誤魔化す様に苦笑いを浮かべると、その恋が実ると良いね？とシヨウウらら受け取ったミリィはビールをゴクゴクと一気に飲みほしたので有った・・・

くくく

機種転換訓練その2

そして更に数日が経った。

シヨウ達が受けて来た2週間以上に及ぶ機種転換訓練も大詰めとなり今ではMSを使った実機での訓練が多く実弾を使った射撃訓練やアメリカの特務時代の知識と経験を生かしたフォーメシヨンの訓練等々・・・毎日朝から晩までみっちりアメリカにしがかれている。

「シヨウどうしたんです？しつかり付いて来なさいっ！」

アメリカはそう言いながらフットペダルを踏み込むと同時に、バーニアを吹かした乗機で有るRGM-79「G」陸戦型ジムが瓦礫と化したコロニーの外壁に沿って上昇すると、背後から少し遅れて同じ陸ジムに乗ったシヨウが追って来る。

「クソっ、今日こそは負けないからなアメリカ！」

シヨウもアメリカ機をロックオンしようとフットペダルを床まで踏み込み機体を更

に加速させるが、前方のアメリカ機がそうはさせまいとコロニーの外壁を出した右脚で蹴りながら急に機体を方向転換させるので、ウソだろ!?!とシヨウはコクピットの中でギョツとする!

「貰いましたよシヨウオ!!」

そう声を上げながらアメリカが空中でバーニアを吹かし陸ジムを急降下させて来るのでシヨウはメインモニターに映るアメリカが操る陸ジムに向かって右手のサイドステイツクに有るトリガーを引いた。

「こなくそっ!!」

シヨウのヤケクソ気味に撃たれた100ミリマシンガンの銃弾をアメリカが咄嗟に踏み込んだフットペダルより機体をロールさせると、嘘だろっ!?!声を上げたシヨウの撃ったペイント弾は全弾外れてしまい今度はアメリカの番で有る．．．

「これでお終いです!」

そう叫んだアメリカの陸ジムが訓練用のロッドでシヨウの機体の頭部を当てようと

した瞬間に舐めんなあ!!とシヨウも負けじにロッドを引き抜きながら受け止めた。

「流石は元戦闘機。パイロットですね．．．良い反応してます。」

「そつちこそ．．．!!」

日に日に手強くなっていくシヨウに対しアメリカが賛辞を贈るとそう答えたシヨウはチツ．．．舌打ちしながらロッドを構えた。

（次で仕留めて見せるっ!!）

教官で有るアメリカと負けず嫌いのシヨウとのプライドを掛けたこの戦いは意外にも次の一手で決まったので有る．．．

「デヤアア!!!」

「このおおお!!!」

そう叫び合う二人に二機の陸ジムが互いにロッドを振るうとアメリカ機が上段から振るった鋭い斬撃をサツと避けながらシヨウはアメリカ機の胸を突いた。

「カノウ機の勝利!」

「オオっ!!」

そう声を上げる審判役のイエーガーと共に観戦していた第二、第三小隊の面々から歓声が上がるので、どうもどうも・・・と言いながらコクピットハッチに装備されたウインチで降りて来たシヨウはムスツとしたアメリカと相對する。

「お疲れさん。」

「お疲れです・・・」

「睨んでる理由を聞いても良い？」

　　そう言いながら首を傾げるシヨウにアメリカはだつて！と悔しそうな顔でシヨウを見た。

くくく

「まだ実機での訓練を始めてからちよつとしか経つて無いのシヨウに私は負けたんですよ。」

ムウ・・・と唇を尖らせるアメリカにシヨウはまぐれだつて!!と宥めながら二人で待機所まで戻ると、二人の模擬戦を観戦していた仲間達が指揮車輛で有るホバートトラックの上やガンタンクのキャタピラ部に腰掛けてお疲れさんくと手を振りながら声を掛けて来る。

「何を呑気に見物してるんですか・・・次はイエーガーとチャーリーの番です! ハリーハリー急ぎなさい!!」

「わ、分かつたつて!?! たく負けたからつて八つ当たりすんなよな・・・」
「・・・何か言いましたかチャーリー?」

そう焦った声を上げるチャーリーにアメリカがツッコむとタンクからククつと笑われ。た

「つたくチャーリーの野郎、女の尻に敷かれやがつて情けなえな・・・?」

タンクがなあ?と自分の部下で有る隊員たちにそう言いながらククつと笑い出すと、一人の隊員があつ・・・!と背後を指差すのでタンクは後ろを振り向きながらゲツ!と

顔を引き攣らせる・・・

「ほう・・・ガンタンク隊は随分と暇そうですね？」

腕を組んだまま睨むアメリカにタンクはイヤイヤと慌てて両手を振り出しながらガンタンクを指差す。

「いやコイツじゃ模擬戦に加われ無えしさ？それに固定された的相手の射撃訓練も飽きたしよ・・・」

「成程・・・要は張り合いが無いという事ですね？良いでしょう・・・じゃあ少しゲームをしましょうか？シヨウ180ミリキャノンを持って来てますね！」

アメリカの急な言葉にシヨウはへっ!?と素っ頓狂な声を上げつつも持って来てるけど・・・？と、答えるとアメリカはニツと笑みを浮かべる。

「じゃあシヨウは陸ジムに搭乗して180ミリキャノンを装備、勿論実弾ですよ？タンク達ガンタンク隊も同じく搭乗して下さい。」

「ちよ、ちよつとアメリカ!? 僕は今さつきお前との模擬戦終わったばつかなんだけど・・・」

「まあちよつとした余興です。」

アメリカがヘッドセットを付けながら首を傾げるとシヨウは了解・・・と答えながら陸戦型ガンダムとよばれるRX79「G」と共通で有るバックパックに装備したウエポンコンテナから180ミリキャノンを組みながら構えた。

くくく

機種転換訓練その3

「ルールは簡単です。お互いマニュアルで正面に見えるのを先に撃ち抜いた方が勝ちですよ?」

そう説明しながらアメリカが設置された的までシヨウの陸ジムとタンクのガンタンクを誘導すると二人から緊張しているのかゴクリと息を飲む音が聞こえた。

「それで先行はどっちにします?」

そう言いながらニヤリと笑うアメリカの背後では既にチャーリーが元締めとなり賭けが行われていた・・・

「ほらほらどっちだ?この基地の飛行隊で《撃墜王―エース》と呼ばれるシヨウと戦車隊では猛者と言われるタンク中尉・・・さあどっちに賭けるんだよ?」

「シヨウとタンクか・・・そりゃあどう見てもタンク有利だろ?」

「まあジャック中尉の言う通りですが・・・勝負っていうのは気まぐれですからね。」

そう答えながら賭けを締め切ったチャーリーがニヤつとアメリカへと笑みを浮かべた。

「今の所8対2でタンク中尉の有利だぜ?」

「分かりました!・・・って事で私もシヨウに賭けてるので絶対に勝って下さい。もしも負けたら分かってますね・・・」

「詐欺だ!理不尽過ぎるって!」

いくら掛けたかは分からないが、シヨウはジロつと睨んで来るアメリカに抗議しながら陸ジムの180ミリキャノンを構えた。

「先に撃つても良いですかタンク中尉?」

「あ、ああ・・・良いぞシヨウ!」

向こうも緊張しているのかタンクの慌てた声にシヨウも深呼吸していると、もう一度

説明しますね?とアメリカの顔がディスプレイに映った。

『それでは改めてルールの確認ですが、ショウの陸ジムとタンク達のガンタンクの二機がマニユアルで交互に撃ち合い三発での合計得点で勝負が決まります。』

そう説明したアメリカがソフィーを運転手をするホバートトラックのガンナー席から顔を出すと、ではショウからお願ひします。と声を上げるアメリカにショウはコクピットのシート裏から精密射撃用のゴーグルを引っ張った……

「これを外すとアメリカとのCQCが待つてゐるからな……絶対に当ててやるぞー!」

近接格闘訓練

コクピットの中で気合を入れたショウがサイドステイックを細かく操作しながら陸ジムが装備している180ミリキャノンの照準を的のど真ん中に合わせると、ここだつ!とショウは声を上げた。

「ビーンゴッー!」

そう続けながら的を撃ち抜いたショウが自分自身で驚きながらも銃身を上げると、どうせまぐれだ!と言ひながら悪態をつく砲手のタンクに操舵手のレティ曹長から何を言つてゐるんですか?と呆れた声が溜息と共に帰つて来た。

「そんなのは当ててから言つて下さいよ隊長？」

「うるせええ！ホント可愛くないなお前つて！」

「隊長以外にはちゃんと愛想よくしてます。」

そう淡々と答えて来る生意気な部下にチツと舌打ちタンクはシヨウと同じく精密射撃用のゴーグルを覗き込みガンタンクの両肩に装備された120ミリキャノン砲の照準を的に合わせた・・・

「一番ファイヤーッ！」

そう叫んだタンクのガンタンクから発射された砲弾はドン！と随分と的外れな場所に着弾音が鳴り響いたので有った・・・

「嘘だろ・・・この距離を俺が外すとか!？」

「オートでのロックオン照準に慣れすぎなんですすよタンクは!？」

驚いた声を上げるタンクにまったく・・・と腕を組みながらアメリカが叱咤した。

「第三小隊は支援任務が主なんですから・・・これはもつと訓練が必要の様ですね?！」

そう続けたアメリカから今日は居残り特訓です。と命令が下ると、まだ勝負はついて無いぞ!?!とタンクはモニター越しにアメリカに抗議するが、何を言ってるんですか?と彼女からクスッと意地悪そうな笑みが浮かんだ。

「機甲部隊を纏めていた癖に初弾をあんなに大きく外すとは言語道断です。」

「61式なら当ててた！まだ俺はコイツに慣れてねえ・・・」

「それは戦闘機パイロットだったシヨウも同じです。」

そう淡々と答えて来るアメリカにタンクがぐうの音も出ない程に言い負かされっていると、せんぱーい！とホバートトラックから顔を出したミリイから呼ばれたので有った。

「どうかしたんですかミリイ？」

取り合えずマニュアルでの射撃訓練をタンク達に命じたアメリカが彼女に近づくと、マリア曹長から緊急の入電ですう！と敬礼しながら報告するミリイの言葉にアメリカは何でしょうね・・・と首を傾げながらホバートトラックの中に入るとオペレーター席に座りながら付けていたヘッドセットをその回線へと繋げた。

「こちら試作実験MS部隊カスケード隊のアメリカンウオーカー軍曹です。トリントンコンントロールどうぞで？」

『アメリカ!?!良かった・・・今居るのはA31地点で間違い無いわね!』

「そうですが・・・何か有ったのですかマリア曹長？」

自分達の居場所を確認してきたマリアにアメリカはどこか違和感を感じた・・・

『近くを飛んでいたウチの偵察機が近くに有る補給基地に向かうジオンのMS部隊をみつけたらしいのよ・・・』

「ホントですか!?!その基地と連絡は・・・」

『それが取れないの：：悪いけど一番近いのがアメリカ達だし、バリサム指令も頼む！つて横で手を合わせてるから、ちよつと無理言つて悪いけど様子を見て来てくれないかしら?』

「まあ偵察くらいなら良いですが・・・」

『有難う助かるわ・・・バリサム指令からも今晚は奢つてやるから、だつてよ?』

そんな事言いながらマリアの通信から誰がそんな事を!?!と叫ぶバリサムの声を聞きながらアメリカが了解と通信を切ると、さてと・・・お仕事しますかね?と言いながらカスケード隊の面々に命令を伝える為にホバートラックから出たので有った。

強行偵察!?

「先程、トリントン基地司令部から近くの友軍補給基地へ所属不明が接近中との報告が有り、状況確認の為に我がカスケード隊へ強行偵察を命じられました。」

急に開かれたブリーフィングでアメリカからそう説明を受けたカスケード隊の面々はざわざわと騒めき出す。

「おいアメリカ・・・まさか強行偵察って事は実戦も有り得るって事なのか?」

「その可能性は充分に有り得ると思います。」

「マジかよ・・・」

不安な顔を浮かべるイエーガーからの質問に答えたアメリカは隊員達の前に立つと

ニヤつと楽しそうに笑みを浮かべた。

「ホントこんなに早く訓練の成果が試せるとは皆さんは良かったですね？」

「[[[[全然良くねえよ！]]]]」

カスケード隊総員からのツツコミの五月蠅さに耳を塞いだアメリカがちよつと良いですか！とジロつと全員を睨みだした。

「我々は試験実験部隊なんですよ？こんな時に経験値を積まないでどうするんです・・・」

「[[[[?!]]]]」

ビクつく隊員達を叱りつけたアメリカは小隊長で有るイエーガーとジャックの両名に向け更に続ける。

「分かったらMSを空挺装備に換装する。ハリー！ハリー！」

「りよ、了解!？」

と答えた二人が互いの部下を纏めて慌てて準備をしようと思った所・・・ちよつと待てよ?と思ったイエーガーとジャックは揃ってアメリカの方を振りかった。

「おいアメリカ・・・今、空挺装備って言ったか？」

「ええ、どうせだから空挺訓練も一緒にしようかと思ひまして？」

「思ひまして?じゃねえよ!?!そんな装備どこに有んだよ!!」

そう詰めかかつて来る二人にアメリカが落ち着いて下さいって!と二人を宥めていと、ゴオオオ・・・と轟音が頭上から聞こえて来た・・・

「どうやら来たようですね。装備はあの中に詰まれていますよ二人共?」

そう答えながらニヤつと指を差したアメリカの目の先には降りて来る二機のミデアの姿が有った・・・

~~~~~

「なあアメリカ!なんで俺達第三小隊だけここで待機何だよ!!」

「借りれるミデアがこれしか無かったんですよ・・・それに一応偵察任務なのでガンタンクが必要になるとは思いませんし・・・」

「威力・・・偵察だろうが!火力なら俺達の方が有るし、ジャックの第二小隊と・・・」

「くだいですね・・・良いからタンクはその下手くそな射撃がもう少しマトモになる様に

訓練でもして置いて下さい！」

アメリカからの下手くそと言う強烈な言葉のパンチを食らったタンクがダウンした様に膝から崩れると、早く出してください。とミデアに乗り込んだアメリカは操縦を担当するウォルフガングⅡアレクサンダー老大尉を見た。

「了解了解・・・しかし嬢ちゃんもキツイのう？」

「あれくらい言ってやらないとプライドの高い奴は言う事を聞かないんです。」

そう答えながらアメリカがコクピット後部に有る座席に腰を落ち着かせると、ハアと困った様に溜息をつく彼女にウォルフはそうじゃのう・・・と苦笑いを浮かべた。

「それじゃあ離陸するぞい！二番機も良いのう？」

『オール・グリーン・・・と言いたい所ですがMS何か積んだ事無いのでちよつと・・・』

「そんなのワシも同じじゃ・・・行くぞい!!」

そう声を上げたウォルフがフルスロットルでミデアを加速させると、重いもう!といつもより長い滑走距離に舌打ちする・・・元々ミデアはVTOL垂直離陸が出来る機体では流石に荷物MSが重すぎて失速する可能性が有る為に通常での離陸を行っている。

「すみませんウォルフ大尉・・・無理を言ってしまったて・・・」

「なあに・・・嬢ちゃんが謝る事じゃ無い。それにワシはシヨウ達に借りが有るからのう?これくらいの輸送任務はやらせてもらおうさのう?」

少しすまなそうな顔をするアメリカに答えたウォルフがワーハツハツハツ!と豪快に笑いだすのでアメリカも釣られてクスクスとつい笑ってしまう。

「そう言えば……チャーリーから聞きましたけどウォルフ大尉って皆の教官をしていたって本当ですか？」

「そうじゃ。今乗せているイエーガーやジャックは勿論の事、あの基地に居る大体の戦闘機乗りはワシが教官をしていた頃の教え子じゃな……」

それ以上は話そうとしない寂しそうなウォルフの声に何かを察したアメリカは内心しまった……と話題のチョイスに失敗した事に気付くと、そうですか……と取り合えず答えた。

（そうですよね……マリア曹長の戦死した旦那さんもウォルフ大尉の教え子筈なので絶対に辛い筈です……）

そう考えながらアメリカが沈痛の想いで頭を抱えていると、作戦空域に入ります。と副操縦士で有る少尉から声が上がった……

「よし、このまま高度を維持し旋回するぞい？」



「了解です大尉。二番機にも我が機に続く様に伝えます・・・っておいどうした!」

「何じや一体・・・何か有ったのかの?」

「いえ・・・それが妙にノイズが酷くて?」

そう報告を上げて来る副操縦士に対しノイズじゃと?とやり取るする二人に違和感を感じたアメリカはレーダー通信士の席へと近づいた。

「あの・・・ちよつと教えて欲しんですけど、現在のレーダーの解析度と基地への通信状況はどうなってますか?」

「それが・・・実は不明瞭で基地にもさつきから通信が繋がらないんだ。」

アメリカに答えた通信士が不安そうに答えると、これはヤバそうですね・・・と腕を

組みだした。

## 強行偵察その2

「ウォルフ大尉？すぐに出来ますので、我々が降下した後はすぐにこの空域を離脱し基地への救援要請をお願いします！」

そう言いながらコクピットから出て行くアメリカにウォルフが、おっおい!?と慌てて声を掛けるが既に遅く、アメリカはミデア下部と繋がっているMSコンテナへと駆け降りていた。

「あつアメリカちゃん！ホントにコイツを使うのかい・・・俺たちはお勧めしないよお・・・？」

そう声を掛けて来たのはトリントン基地整備班主任のシバシゲ曹長で有る。

「どうせいつかは運用試験しないといけないんですから一石二鳥って奴です。それよりもセツトの方は間違い無いんですよシゲさん？」

「そりゃあマニュアル通りには組んだけどさ……このジェットパックのテストまだやってないしぶつつけ本番になるからね！」

「その時はその時ですって？」

呆れた顔で腕を組むシゲにそう答えたアメリアはありがとうございまして！とお礼を言いながら敬礼するとソフィーとミリイが待機していたホバートトラックへと向かった。

「先輩おかえりなさいですう。」

「もう着いたんですかっ？」

車内へと入ったアメリカにミリイとソフィーが出迎えると、ええまあ・・・と曖昧に答えたアメリカはヘッドセットを付けながらオペレーター席に座った。

「先輩何か有ったんですかあ？」

「いえ、どうも通信状況が悪いそうで基地と連絡が取れないそうなんですよ。」

「ああ、そうれなら私も確認しました・・・どうも今から向かう補給基地周辺のミノフスキ濃度が妙に高いんですよねえ・・・??」

そんな事を報告して来るミリイの手際の良さにアメリカは感心すると同時に不安を感じた・・・

(そんなの敵が居るって証明している様なもんじゃないですか・・・)

「ホント・・・嫌な予感で一杯です。」

そう独り言ちたアメリカは既に機体の中で待機しているカスケード隊のパイロット達へと通信を繋ぐ為にキーボードを叩き通信回線を開いた。

「アメリカよりカスケード隊各機へ作戦空域へと到着、これより空挺での降下作戦を行う。各自マニュアルはしっかりと読んでますね？」

「こちらイエーガーだ。一通り読んだが・・・本気で空挺降下するのか？」

「勿論です。それに当初は訓練のつもりでしたがどうも雲行きが怪しくなってきたんですよね・・・」

そんな妙な事を言って来るアメリカにどう事だ？と訝し気にイエーガーは首を傾げた・・・

「トリントン基地と連絡が取れないくらいミノフスキー粒子の濃度が高いんです。ちよつとヤバそうですよイエーガー・・・？」

「考え過ぎだろう……しかしアメリカの言う通り警戒を厳にしていけどシヨウ、チャーリー！」

「イエーガーさん了解です。」

「了解イエーガー隊長！」

そう気合い入れるイエーガーの声にシヨウとチャーリーからも各々返事が返って来るのをアメリカも自分のヘッドセットで聞いていると、なあちよつと良いか？と第二小队のジャックⅡアルヴィン中尉から少し不満そうな声で尋ねられる。

「俺達の機体はいつ来るんだよ！」

「それは上の都合って奴です。代わりに陸ジムが送られて来ただけでもジャブローのマチルダ中尉に感謝してください？」

「わーってるよー！」

アメリカの説明にジャックから少し不貞腐れ様に返事が返って来ると、アハハ……とその内情を知っているアメリカは苦笑いを浮かべると、マチルダからジャック達の陸ジムを受け取った時に聞いたがどうやら量産機のベースとなる予定の試作機の到着が遅れているらしい……

（多分ウチに回って来るのは当分先でしょうね……）

そう思うアメリカ率いるカスケード隊第二小隊には型式番号RGM-79ジムの配備は無くなり代わりに先行量産型の陸戦型ジムが三機導入される事となった。

「さてご歓談中の所悪いがそろそろ降下地点に到着するぞい嬢ちゃん！」



「了解です。ウォルフ大尉、皆さんも聞きましたね？」

ヘッドセットに聞こえてきたウォルフからの声にアメリカがカスケード隊各機に尋ねると、イエス・マム！と元気の良い返事返って来るとアメリカはフツツと微笑んだ。

「良い返事です。それではこの場よりこの指揮車両のコールサインをウイスキー・ドッグと呼称します。そしてイエーガーの第一小隊はCSD1から始まり、そしてジャックの第二小隊からCSD6となりますので各自コールサインを覚えて下さいね？」

「CSD1イエーガー了解だ。」

「CSD6ジャック了解！」

第一第二小隊長からの返事と同時にタイミング良くMSコンテナの後部ハッチが開き出すと、再び機長のウォルフから通信が入る。

「それじゃあ射出準備は良いかの？」

「いつでもどうぞ！」

「行くぞい！」

そう声を上げたウォルフが操縦席脇に有る射出レバーを引くとハッチ上部に有るシグナルがレッドからグリーンに変わった……

「カスケード隊出撃です！」

アメリカの号令と共に一番機のイエーガー機が射出されると二番機のシヨウそしてチャーリーとウォルフのミデアから降下して行くと今度はアメリカ達が乗るホバートラックの番で有った……

「あのお……先輩？」

「何ですミリイ・・・」

「ほんとくに大丈夫ですよねえ・・・」

「私に聞かれても・・・ねえソフィー？」

「えつとですねっ・・・たしか成功率は80%つて聞いてますよっ？」

「・・・・・・・・」

何とも言えない微妙な成功率を知ったアメリカとミリイが無言になると同時にホバートラックも射出された。

「高度2000・・・1500・・・1000・・・このパラシュートとブースターは本当に点火するんですよえ!？」

「それよりも脱出用のパラシュートつて積んでましたっけ・・・？」

「怖い事言わないでくださいよお先輩!？」

「こんなに早く実戦データが取れるなんてラッキーだなぁ♪」

慌てるミリイとアメリカとは反対に落ち着いた様子のソフィーを乗せたホバートラックは台座付けられたブースターが点火し開いたパラシュートと共に六機の陸ジムと共に無事に着地したので有った。

## 強行偵察その4

「一体どうなってるんですか……間違い無く今の攻撃は補給基地の方からでしたよね？」  
「はい先輩。真正面の12時の方向から砲撃で間違い有りませんねえ……」

通信回線を繋ごうとしながらも器用にキーボードを叩いたミリィからの報告にアメリカは更にムウ……と唸りながら深刻な顔になる。

「まさかとは思いますが補給基地が既に占領されているんじゃないでしょうね……!？」

状況証拠でしか無いが実際に攻撃を受けた事からもそう考えたアメリカがそこに行きつくと問題が一つ浮かび上がる。それは補給基地に居る筈の友軍部隊の存在だ……

(このまま攻撃を仕掛けるのは危険ですね……味方にも被害が有り兼ねませんし)  
そう思案顔を浮かべるアメリカにアメリカさんっ!とソフィーから声が掛かった。

「取り合えずホバーをコロニーの残骸に隠しましたけどっ?」

「ありがとうございますソフィー．．．それで状況の方はどうですかね。」

ソフィーからの報告にそう答えたアメリカは20ミリバルカン砲が備えられてる銃座から顔を出すと双眼鏡で覗きながら補給基地の方を見た。

「今の所は音沙汰無し．．．ですか。」

そう呟きながらアメリカが困った顔になると、おいアメリカ!とチャーリーの焦った声がヘッドセットに聞こえてくるのでアメリカは何です?と散開しながらもコツチと同様に周囲に点在しているコロニーの残骸に隠れているMS隊を見渡した．．．

「何を躊躇してるのか知らねえけどよ．．．敵がいるんならさっさと倒しに行こうぜ?」  
「焦るなってチャーリー?アメリカも考えが有るんだろうからさ．．．」

100ミリマシンガンを構えながらソワソワとするチャーリーの陸ジムをシヨウが窘めながら抑えているのを見ていたアメリカは良いコンビですね。とクスッと微笑んでいると、先輩ちよつと!と下からミリーの慌てた声が聞こえて来た。

「どうかしたんですかミリー?そんなに慌てて．．．」

「良いからコレを聞いて下さいってえ!」

そう言いながらミリーがキーボードを叩くとアメリカの付けたヘッドセットに驚くような内容の会話が聞こえて来た．．．

『何で撃つたんだ!?!向こうは友軍機だぞ!』

『五月蠅えなあ……ここに来たって事は俺達の事を嗅ぎつけたって事だろう?だったら撃つしかねえな……だろっ基地司令官さんよお?』

『だがしかし……この事がバレたら私は?』

『大丈夫だ!コイツ等は俺達が片付けるからお前さんはこの基地の防衛力じゃジオンのMS相手は出来なかつたとか適当に行ってれば良いんだよ?』

『分かった……今の所正面のトリントン基地の奴等以外の基地からは出撃したと言う通信は上がっていないからすぐに片付けてくれよ!』

『へいへい……その代わりに弾薬と食料を頼むぜ?ここを俺達の前線基地とする代わりに契約したんだからな……』

『クツ……』

そこで音声が続けるとアメリカは嘘でしょ!?!と声を上げながらミリイを見た。

「これって明らかに物資の横領に加えて敵への情報提供……どうやってこんなヤバイ会話を拾ったんですか!」

「ああ、それは通信が難しそうだったから直接あの基地のホストコンピューターに忍び込んで通信回線の音声をコピーしたんですよお?」

「……」

確かにこれでジオンと癒着している補給基地へと攻撃する免罪符を得たアメリカだがその方法に無言で苦笑いを浮かべた。

「一応聞きますが……足跡とかは残してませんか？」

「その辺りは大丈夫ですよ先輩？ 私のハッキングは姉譲りなんでえ♪」

「それはまたロクでも無い事を教えるお姉さんですね……」

そう答えながらニコつと満面の笑顔を向けて来るミリイにアメリカが呆れた顔になると、それじゃあ私も仕事しましょうかね？とアメリカもキーボードを叩き出す。

「アクティブ・ソナーを展開……各機へとリンクを開始します。」

そう言いながらアメリカがヘッドセットを抑えると同時にホバートラックの左右からセンサーを兼ねたアンカーが地面へと突き刺さる。これは周囲数キロ圏内の音を拾い索敵するには優れたもの物ですぐにアメリカの耳に妙な音が聞こえて来た……

「音紋センサーにMSの起動音を確認……数は2……3いや6機確認ですつ！」

「そんなに居るのか……ってクソつ!!」

アメリカからの報告にちよつと顔を出したイエーガーの陸ジムが先程シールドを吹き飛ばされた中距離支援機からの砲撃に驚くと、ちよつとイエーガーさんつ！とカスケード隊のマスコット……もとい専属メカニックで有るソフィー!! ホワイト伍長から抗



議する声が上がった。

「それ以上その子を傷付けたら怒りますからねっ！」

「お前なっ!?その前に乗っている奴の事を心配しやがれ!!」

そう答えながらイエーガーから異議が上がると、真面目にして下さいよ!とアメリカが怒声を上げながらも指示を飛ばす。

「ウイスキードッグからCSD各機へ発砲を許可します。場合によっては撃破も構いません!」

「CSD2了解・・・エンゲージ!」交戦開始

そう答えたシヨウは物陰に隠れながらシートの上から精密射撃用のスコープを引き出したので有った・・・

## 強行偵察その3

「高度1000、800、700・・・ブースター点火！」

秒刻みでメインモニターに表示される高度計を読み上げたシヨウはフットペダルを踏み込むと、背中のバックパックに装着して有るジェットパックを点火させながら速度を落とし到達高度に達すると整備班のシゲからの説明の通り自動でパラシュートが開いた・・・

「絶対に戦闘機で空を飛ぶ方が怖くないってコレは・・・」

一応はMSと言う装甲の中にいるとは言え自由落下しながらの降下に相当冷えたシヨウが苦笑いしながら自機を地面に着地させると、同感だぜ・・・と僚機で有るチャリーの陸ジムもすぐ傍に降りて来た。

『CSD1より各機へ、全機生きてるな?』

安堵する暇も無く第一小隊長で有るイエーガーからの通信アラームがピピツと聞こえて来るとシヨウはチャーリーと共にハア・・・と溜息をついた。

「CSD2無事着地に成功です。」

「CSD3も同じく・・・って言うかなんでMSを使ってこんな事しないといけないんです?。」

シヨウと同様に相当怖かったらしいチャーリーからの抗議にシヨウも乗っかる様に「そうですよ!と続けた。

「大体今までの訓練もそうですけど、高高度からの空挺降下とか僕達は特殊部隊の訓練

を受けている訳じゃ無いんですよ！」

「バカよせシヨウ・・・俺もそうは思うが、俺達のボスが誰なのか忘れたのか・・・？」

そう言いながらイエーガーの陸ジムが肩を掴みながら接触回線で注意して来るが少し遅かった。自分達より少し遅れて降りて来たホバートラック・・・ウイスキードッグが近づいて来たので有る・・・

「成程・・・三人は私の訓練メニューにそれほど不満が有った様ですね。」

そう言いながらホバートラックの銃座から顔を出したアメリカがムウ・・・と不機嫌そうな顔を見せると、

「い、いや・・・僕はちよつとキツイかなーって？なあチャーリー!？」

「ちよつ俺に振るなよなシヨウ！俺はお前の指導に充分満足してるからな？」

シヨウに答えながらもチャージャーが器用に陸ジムが両手をヒラヒラと振りだすと、その通りだぞ!?!と小隊長のイエーガーからもフォローが入る。

「アメリカの訓練のお陰で俺達はこんな短期間で機種転換訓練を終えたんだからな?!」

「ふくん．．．まあ取り合えずそう言う事にしときますか．．．?」

イエーガーの一言で一応は納得したのかアメリカでは有るがすぐに二つと意地悪そうな笑みを浮かべて来る。

「まあ何にせよ指揮官で有る私に逆らった罰です。第一小隊は補給基地まで先行する様に!」

「イエス・マム．．．仕方ない行くぞCSD2、CSD3!」

階級では圧倒的にイエーガーの方が上なのだが機種転換訓練からコッチ・・・教官をしてたアメリカに頭が上がらなくなったシヨウ達第一小隊は前衛を勤めつつ補給基地へと向かう事となった・・・

「しっかし視界が悪りいな・・・基地まで後どれくらいなんだよアメリカ?」

アローフォーメションを取りつつ前進する一番先頭のチャーリー機から通信が入るとアメリカは現在起きてる砂嵐もそうだが、未だに復旧しないレーダーにチツ・・・と舌打ちしながら補給基地へと通信回線を開こうと悪戦苦闘している後輩を見た。

「ミリイそつちはどうですか?」

「ダメですう・・・ミノフスキー濃度もそうなんですがあ・・・どうもこの補給基地を中心に通信妨害されてる様なんですよお?」

「ジャミングフィールドが形成されてるって訳ですね・・・」

そう説明しながらカタカタとキーボードを叩くミリイに益々嫌な予感がしたアメリカ人はヘッドセットを掴みながら先行する第一小隊に向かって止まってください！と前進を止めるよう指示を出した。

「どうしたんだアメリカ？」

急な停止命令に先頭を歩いていたイエーガーがコクピットの中で首を傾げるとシヨウとチャャリーの陸ジムも続いてその場で足を止めた。

「何か有ったのか？」

「さあね・・・」

チャャリーにそう答えたシヨウが段々と晴れて行く砂嵐の向こうに見えた基地らしき構造物を確認すると何かキラつと赤く光った・・・

「12時の方向から熱源反応ですう!!？」

それと同時にミリイからの焦った声にアメリカは慌ててヘッドセット掴みながら指  
示を飛ばす。

「全機警戒を厳にしてください。敵からの攻撃が予想されます！」

「了解し・・・ウオっ!!？」

そう言うが早くイエーガーの陸ジムがドンっ！と言う音と共に背中から吹き飛ぶと、  
なっ・・・!?!とモニター越しにその様子を見たショウは焦った顔でイエーガーさんつ!  
と叫んだ・・・

「痛つつ・・・そんな泣きそうな声をだすなショウ・・・アメリカのお陰で俺はどうか  
生きてる。」



アメリカの咄嗟の指示が功を奏したのかイエーガー機に当たった攻撃は前に出した左腕に装備した小型シールドに直撃したらしくすぐにイエーガーの陸ジムは立ち上がったのだった。

「先手を取られましたね・・・全機散開！ソファイはホバーを全速で後退、ミリイはもう少し補給基地との通信を試みてください。」

アメリカからの指示に全員からイエス・マム！と返事が返って来るとアメリカはムウ・・・と妙な状況に腕を組みながら首を傾げるので有った。

## 強行偵察その4

「こんな状況MSでの初実戦とかホントにツイて無いんだけど・・・」

シヨウがコクピットの中でそう呟きながら陸ジムに構えた180ミリキャノンの照準をスコープ越しに合わせていると・・・友軍で有る補給基地の中で似た様な装備を構えた敵機と目が合ってしまった。

「CSD2よりウイスキードッグへ、敵機を確認したが本当に撃つて良いんだな？」

「ウイスキードッグからCSD2へ、当基地はジオン前線基地と化しています。責任は私がかかりますので遠慮なく撃ちなさい！」

「了解・・・ってうわっ!？」

アメリカと通信を交わしている間に前方のMS-06J陸戦用ザクIIからマゼラ

トップ砲を撃たれたシヨウは驚くと、コイツツ！と自機のシールドをバイポッド代わりにしてモニター越しに敵機を睨んだ……

「有効射程距離外だ。ロックオンが出来ない……」

「それは向こうも同じ条件です。それにシヨウがああ敵機をどうにかしてくれないと我々は身動きが取れないですよね……」

「頼むからプレッシャーが掛かるような事言わないでくんない!？」

若干脅迫気味にそんな事を言ってくるアメリカにシヨウはそう答えながらFCS火器管制からシ照準をマニュアルに切り変えると、ブンとモノアイを赤く光らすザクIIを最大望遠にしたゴーグルに捉えるとトリガーを絞り陸ジムが両手で構えている180ミリキャノンを発射した。

「初弾修正……右にコンマ3度ですう!」

優れたハッキング能力と言い素早い計算と言いついこののが得意なのかミリイニグチ伍長から間延びした報告にアメリカは聞こえてますね？とザクⅡの左を僅かに逸れ背後の倉庫へと外したシヨウへと通信を繋いだ。

「了解・・・今度は絶対に当ててやる・・・」

「その意気で・・・CSD2っ！次が来ますっ!？」

ミリイからの修正の通り180ミリキャノンの照準を合わせ集中していたシヨウにアメリカから焦った声が聞こえると、ザクⅡから放たれたマゼラトップ砲の砲弾がシヨウの陸ジムを大きく外し逆にアメリカ達が隠れているコロニーの残骸へと着弾するとホバートトラックの天井にガラガラと破片が落ちて来た。

「まったく適当に撃つて来て・・・次で絶対仕留めなさいシヨウ!」

キャアア!!とミリイから悲鳴が上がる中でアメリカがその声を張り上げながら指示を出す、了解・・・と答えたシヨウは右手のサイドスティックに有るトリガーを再び

絞ると陸ジムの持った180ミリキャノンが火を噴いた・・・

「連邦にMSが有るなんて聞いて無いが・・・しかし何にせよ撃墜すれば昇進も間違いないってな！」

地球連邦軍の補給基地内にも関わらず意気揚々とザクⅡのコクピットの中でその声を高々と上げたジオン兵はへへ・・・と舌なめずりしながらマゼラトップ砲を再びシヨウの陸ジムに向けようとした所でピーつと鳴るアラーム音にギョツとする・・・

「直撃弾だ?!回避は出来なっ・・・」

ザクのパイロットがそう言い終える前にシヨウの撃った180ミリキャノンがザクⅡJ型の胸部上から頭部ごと吹き飛ばすと、ビンゴ!とその様子を確認したシヨウは二つと笑みを浮かべた。

「こちらCSD2敵機の撃破を確認した！」

「こちらでも敵スナイパーの排除を確認、さあさあ皆さん今度はコッチの番ですよ？存分に訓練の成果を見せてやりなさい！」

シヨウからの報告にアメリカがカスケード隊各機へと号令を上げると、おうよ！と今までの鬱憤を晴らす様にジャックⅡアルヴィン中尉が率いる第二小隊が隠れていた岩陰から飛び出して行くと、俺に付いて来い！とジャックは二人の部下で有るユウヤ准尉とレオン曹長に向かって叫んだ。

「相変わらずだな・・・」

「イエーガー中尉に対抗してんだろ？」

「まあ第一小隊だけに良い恰好させたく無いしね・・・」

先行するジャックの陸ジムに追従しながらユウヤとレオンが共に武器を構えると三

人のコクピットにピーつとロックオン反応が入った・・・

「先輩っ！補給基地から敵MS部隊が出てきましたあ！CSD4からもエンゲージを確保ですう!!」

「おやおや・・・こうもあからさまにジオンのMSが出て来るとは、向こうも後がない様ですね・・・」

焦った顔をするミリィにそう答えたアメリカはヘッドセットを掴みCSD4ジャックへと通信を繋いだ。

「ウイスキードッグより第二小隊へ、絶対に単機ではフォーメーションを崩さずに連携を意識して下さい。」

「そんなのお前から耳にタコが出来るくらい聞いたっつーの……CSD5 CSD6へ、アローフォーメションだ。正面のザクをやるぞ!!」

アメリカにそう答えたジャックが部下達に指示を飛ばしながらバーニアを吹かすと、了解!と答えたユウヤとレオンの二人がその後が続いて行く。

「食らいやがれ!!」

そう叫んだジャックの陸ジムが牽制で試作型ビームライフルを撃つと、ビーム兵器だどつ!?と驚いたザクのパイロットが慌てて背後へとジャンプしながら回避すると……それは悪手ですね?とロックオンしたユウヤの陸ジムから撃たれたロケットランチャーがザクIIの下半身へと直撃した。

「じゃあな……」



そして落下したザクⅡの胴体へとレオンの陸ジムがビームサーベルを突き刺すとアメリアはこの第二小隊の連携の取れた動きに良し！と満足そうに頷いたので有った。

## 強行偵察その5

しかしミリイ、中々良い連携を取るじゃないですか第二小隊は？」

「そんなの当たり前ですよ？元々ジャック中尉が率いていた飛行中隊第二小隊はトリントン基地の中でも一番と言われる程に連携が上手い小隊だったんですからねえ！」

先程まで、ジャック中尉やるう♪と目をキラキラとさせていたミリイに尋ねたアメリカが成程ですね。と納得すると、因みにイエーガー達はどんな評価なんだろうかと考えたアメリカは試しに聞いてみた。

「えつとですねえ。バウスネルン中尉は優秀なんですがあ．．．カノウ少尉とウイルソン少尉がちよつとお．．．？」

「．．．まあ、コアブースターのオペレーターをしていた時から薄々感じてましたが、どうやらあのコンビはやはり問題が有るみたいですね．．．。」

そう答えながらハア．．．と溜息をつくアメリカにミリイからアハハ．．．と苦笑いが浮かんだ。

「まああの二人の撃墜スコアだけを見たら優秀なんですがあ．．．何せ命令違反の常習犯ですからねえ。バウスネルン中尉も良く纏めてると思いますよ．．．？」

ミリイから見た二人の印象と分析を聞いたアメリカが、イエーガーも苦勞してる様です。ね……と呟くと、何を言ってるんですかあ先輩？とミリイから首を傾げられたアメリカはどう意味ですか？と更に尋ね返す。

「いやだからあ。今度からその苦勞は先輩も背負うって事ですよお!」

「あつ言われて見ればそうですね!それはちゃんと躡けて置かないと……」

腕を組みながら若干気になる発言をするアメリカにミリイが敢えてスルーしていると、ピーつと通信アラームが二人のヘッドセットに聞こえて来た。

「ウイスキードッグ聞こえるか？こちらCSD1だ。それで俺達はどうしたら良い？特に指示が無いのならこのまま第二小隊の援護にでも回るか……」

イエーガーからの催促にアメリカはモニターに表示された基地周辺に展開している敵機の位置にむう……と唸りながら思案顔となる。

「……ミリイ増援はまだですか？」

「まだ何もお……」

そう答えながらヘッドセットを掴みながら首を横を振るミリイに向かって仕方有りませんね……と呟いたアメリカは覚悟決めてカスケード隊各機に向かって通信を繋いだ。

「ウイスキードッグから全CSDユニットへ、これより我が隊は強行偵察から敵機の殲

滅へと移行します。第一小隊は速やかに前進を開始し補給基地の右に展開している敵部隊を排除しなさい！」

アメリカからの指示にイエーガーは慌てた・・・先程の第二小隊の強襲はショウが敵スナイパーを撃破したので成功したので有って、向こうも敵機が居ると分かって迎撃に出て来るとなつては話が違つて来る・・・

「勘弁しろよアメリカ・・・いきなりの実戦でハードルが高すぎやしないか!？」  
「イエーガーなら大丈夫ですよ？健闘を祈りますね。」

そう言いながら通信を切るアメリカに頭を抱えたイエーガーはお前なあ・・・と言いつつもハア・・・と深呼吸し落ち着きを取り戻した。

「CSD1から各機へ、聞いてたとは思いますが女王様は安全な道を所望しているらしい・・・。」

「CSD2了解。要は敵機を全部撃破したら良いんですね？」  
「そうそうショウの言う通りですよイエーガー隊長！」

そう答えながら飛び出して行くショウとチャーリー機にイエーガーからちよつと待て!?!と慌てる声が聞こえると、どこから行くショウ?と聞いて来るチャーリーにそうだな・・・と答えたショウはウイスキードッグからリンクされた敵機的位置情報を確認し

ながらチャーリーの陸ジムへと送った。

「先頭の奴をやるるか・・・僕が出鼻を挫くからチャーリーはそのまま後ろの奴等を？」  
「りよーかい・・・頼むぜシヨウ！」

シヨウからの提案に軽く了承したチャーリーが陸ジムの100ミリマシンガンを連射しながらMS-06J陸戦用ザクⅡ三機で編成された一個小隊に突っ込んで行く。シヨウもその援護の為に180ミリキャノンを腰だめに構えた・・・

「コイツ正気かよ!？」

そう叫んだザクⅡのパイロットが120ミリマシンガンを撃ち始めると、へへっ・・・とニヤついたチャーリーはフットペダルを踏み込みし左右へとフェイントしながら陸ジムのバーニアを吹かした。

「そんな腕で当たるかってっ!!」

そんな声を上げつつチャーリーの陸ジムが驚いたザクⅡの脇すり抜けると、コイツっ!?!と叫んだジオンのパイロットがチャーリー機へと照準を合わせた。

「貰ったぞ連邦め!!」

そう呟きながらチャーリーの陸ジムを捉えたザクⅡのパイロットだったがその行動が迂闊すぎたのか、ピンゴ!と声を上げたシヨウの陸ジムが撃った180ミリキャノンによって背中から撃ち抜かれてしまったので有った。

## 強行偵察その6

「ぐッ．．．軍曹——っ！」

このザクの小隊を率いている少尉が突然ドンツ！と目の前で爆散してしまった部下の機体に驚いた声を上げると、軍曹がつ！?と同時に横に居た上等兵の機体からも焦った声が聞こえてしまった少尉は落ち着け．．．と自分を窘める。

「小隊長．．．軍曹が軍曹が．．．早く助けに行かないとっ!!」

「落ち着くんだ．．．目の前の事実を直視しろ上等兵。軍曹は死んだんだ．．．」

まるで自分にも言い聞かせるかの様に答える小隊長で有る少尉に上等兵からウウっ．．．と泣く声が自分のコクピットに聞こえて来た少尉は泣きたいのは俺の方だ．．．と内心焦りつつ頭を抱えた。

(まさかな．．．連邦にもMSが配備されつつ有るとは聞いていたが、ここまで動きが良いと聞いてないぞクソツタレめ．．．これでは藪蛇じゃ無いか!?)

どうやらカスケード隊の事を随分と侮っていたらしい少尉は上等兵のザクを下がらせつつも悪化しつつ有るこの状況を作ってしまった左方へと展開している別動隊へと通信を繋いだのだったが．．．

「こちらドラゴンだ！タイガーへ状況が芳しくない。一旦基地まで後退するぞ。」

「タイガーからドラゴンへ!!こちらの連邦の抵抗が激しく後退が難しい・・・支援を頼む！」

向こうもジャック達の第二小隊からの攻撃に大分手こずっているのかそんな事を言つて来るタイガー隊の指揮官に向かつて少尉はふざけるな！と怒鳴つたので有る。

「大体お前達が先走つて戦端を開いた所為でこんな事になつたんだぞ！自分のケツくらい自分で吹くのが筋だろうが!!」

「何だ?!? テメエだつて自分の手柄欲しさにノコノコと出て来た癖に大きな口を叩いてんじゃねえ!!」

そんな醜い言い争いをタイガー隊の指揮官としていた少尉のザクにピーつと敵機接近のアラームがコクピットに鳴り出すと、もう来たかつ!?!と基地へと逃げそびれた少尉はモニター正面に見えつつ有るチャーリーの陸ジムに向かつて120ミリマシンガンを構えた。

「こつなつたら迎撃するぞ上等兵!」

「イ、イエツサー!」

そう気合い入れる指揮官に対し新兵で有る上等兵は慌てながら答えた。

それもその筈で地球降下作戦で降りて来た彼らは一定以上の戦果または何らかの手柄を立て昇進するかでしか故郷で有る宇宙にへと帰れないので有る．．．因みに例外が有るとすれば怪我などにより戦線復帰の目処が立たない事が条件だがそれは運で有るとしか言いようが無かった．．．

「軍曹には悪いが上等兵．．．ここで連邦のMSを撃破でもしたら大手柄だ。ひよつとしたら宇宙そらに戻るかもしれないぞ？」

「本当ですか小隊長殿!？」

「ああ．．．これでこの劣悪な環境から逃げ出せるってものだ。気を引き締めて掛かれよ！」

「了解っ！絶対に故郷へ．．．宇宙そらへと戻ってやるっ!!」

小隊長で有る少尉からの言葉に上等兵もその甘い誘惑に釣られてしまい気合を入れながら120ミリマシンガンの照準を接近しつつ有る機体に合わせると、へへっそう来なくつつやなあ．．!!とチャーリーは陸ジムのバーニアを吹かしつつ脚部にサーベルラックからビームサーベルを引き抜いた．．．

「何だコイツはっ!?!死ぬ気かってえっ！ー!!」

そう叫びながら上等兵が左手のシールドを前に出しながら突っ込んで来るチャー



リーの陸ジムに向かつてザクⅡの120ミリマシンガンがガガガツ!!と連射すると、今だシヨウ!と叫んだチャーリーの陸ジムが地面を蹴り強引に左へと機体を逸らすと、その空いた射線によって後方で180ミリキャノンを構えていたシヨウの陸ジムは上等兵のザクを捉えた・・・

「先ずは武装を排除っ・・・!」

メインモニターに映るザクに向かつて呟いたシヨウがトリガー引くと、ドンと響く銃声と同時に上等兵のザクⅡの右腕部を120ミリマシンガンごとドンっ!と弾き飛ばしたので有る。

「CSD2ビンゴっ!ケツは僕が持つてやるからドンドン突っ込め!!」

「オーライ頼むぜ相棒!!」

シヨウの言葉を信じたチャーリーはそのまま回り込む様に陸ジムを上等兵の操るザクⅡへ肉薄させると止めを刺す為にビームサーベルを上段から振り降ろした・・・

「貫ったあああーっ!!」

「コイツっ!舐めるなよ連邦めえーっ!!」

意地でも死んでたまるかと言った咄嗟の抜刀でヒートホークで受け止めて来た上等兵のザクに対しビームサーベルとの鏖迫り合いでチャーリーはバチバチと火花を散ら

すメインモニターを睨みながらニヤつと笑みを浮かべると、上等じゃねえかよテメエつ!!と声を上げた。

「チツ・・・敵機と近すぎて撃てないや・・・!」

チャーリーを援護しようとしたショウもこの状況に180ミリキャノン撃つのを躊躇っていると、ピーつと鳴る接近アラームに別の敵機・・・?とショウはメインカメラをその方向に向けるともう一機のザクが接近しようとしていたので有る・・・

「三時だチャーリー!敵機つ!!」

ショウからの警告に何だどつ!!と慌てて叫んだチャーリーの陸ジムが右を向くとこの部隊の小隊長で有る少尉のザクが既にヒートホークを構えていた。

「貰ったぞ連邦の新型チャーリーつ!!」

「冗談じゃねえ!オツラアアチャーリーつ!!」

そう叫んだチャーリーが鏢迫り合いのまま右から迫つて来た少尉のザクを乱暴に蹴つ飛ばすと、なあつ?!と驚いた少尉は機体ごと後方へと吹き飛んでしまう・・・

「へえ・・・アメリカのCQC訓練も無駄じゃ無かったみたいだねチャーリー?」

「だな・・・咄嗟だったけどなんとか上手く行って良かったぜ・・・」

そんな物騒な事を言い合う二人に目の前で指揮官を吹き飛ばされた上等兵

は戦意を失ってしまった・・・

(連邦のMSは化け物か・・・絶対に無理だろこんな奴等に勝つなんて・・・)

確かに性能に後発機で有る陸ジムの方がスペック的に上なのは間違い無いがこの上等兵はまだ知らなかった・・・この事出来事が機体性能では無くアメリカンウオーカーと言う鬼畜指揮官のしごきによって生まれたと言う事に、、

## 強行偵察その7

「先輩っ!? 第一、第二小隊共に敵部隊を順調に追い込んでる模様ですう!」

とホバートトラック内で情報分析を任せているミリイからの報告に順調ねえ・・・とアメリアはリンクしているカスケード隊各機から送られて来た上部モニターに映る戦術マップに苦笑いを浮かべた。

「確かに第二小隊に関しては私の指示通り動いている様ですが、第一小隊は如何なものですかねね・・・?」

「何だかんだ上手くやってるんじゃないですかシヨウとチャーリーはあ・・・まあスタンドプレイみたいなものですけどお・・・」

そう答えながら苦笑いを浮かべるミリイにハア・・・と溜息をついたアメリアは腕を組みながら思案顔となった。このカスケード隊を率いる事となつてアメリアが全員に叩き込んだ戦法は敵機に対し常に多数での対応とその連携で有る。

(シヨウとチャーリーには後でお仕置きを考えて置かないといけませんね。)

そう思いながらアメリアが二人に与える罰と言う名の訓練メニューを考えていると、それとせんぱい?とミリイからヘッドセットを掴みながら首を傾げられた。

「その二人が撃破した内の一機からオープンチャンネルで降伏すると行って来てますがどうしますかあ？」

「えっ降伏って……まだ戦闘中ですよ!?!諦めるの早く無いですか?」

「いや……何だかCSD2と3に妙に怯えた様子で、すぐに連行してくれと喚いてますがあ……」

そう怪訝そうに報告して来るミリイに何をやったんだかあの二人は……と頭を抱えたアメリカがCSD1聞こえます?とヘッドセットを掴みながら第一小隊の小隊長で有るイエーガーIIバウスネルン中尉へ通信を繋ぐと、聞こえているがウイスキードック……?とこの状況にも関わらずわざとらしい声がイエーガーから返って来た……

「どうもあの二人が突出しすぎている様ですが……イエーガー?」

「現在その対処為に急行中だ。お咎めは後で聞くから一旦切るぞアメリカ!」

「あつちよつと……もうイエーガーつたら!!」

一方的にイエーガーから通信を切られてしまったアメリカがまったくもう!と腕を組みながらムウと頬を膨らませていると、ホバートトラックの操舵手をしているメカニックのソフィーIIホワイト伍長から大変ですねアメリカさんはっ?と楽しそうに笑われてしまう。

「笑いごとじゃ有りませんよソフィー!ホントに彼らを纏めるのは大変なんですからね

?!」

「アハハハ……ご愁傷様ですっ。」

そう答えながら苦笑いを浮かべるソフィーに向かってハア……と溜息をつきながらアメリカは今後の作戦行動の意味合いも含めて各機の損傷度は?と尋ねた。

「えつとつ……強いて言えばバウスネルン中尉の陸ジムが一番ダメージの蓄積度が高いですねっ……先程の攻撃で左腕部のアクチュエータに負荷が掛かっていますっ。」

ホバーの操縦席にも設置されているキーボードを叩きながらソフィーがダメージデータを色分けで表示した物を上部モニターに表示させるとアメリカはムウ……と再び思案顔となる。

「ザクが撃った砲撃を直接シールドでを受けてますしね……因みに作戦の継続には支障有りませんか?」

「いやいや何を言ってるんですかっ!あの子の装甲はルナ・チタニウム製ですよっ?超硬スチール合金のザクとは違うんですザクとはッ!」

「えっ?あ、ハイ……!?!」

アメリカがそう力説する祖父譲りの技術屋で有るソフィーの指摘に対しタジタジとなりながら答えていると、それを横目に見ていたミリィから変な子だなあ……と自分の事を棚に上げながらモニターに目を向けると基地方向からピーつと妙な反応を拾っ

たので有る・・・

「あれえ先輩・・・何だか補給基地から熱源を多数確認しましたよ・・・?」

「今何と言いましたミリイ・・・」

「だからあ・・・後方の友軍基地から増援が現れたんですよ! 現在後退しようとする敵MS部隊を支援しようとして展開中!!」

「音紋センサー展開・・・って! ちよつと・・・マジで連邦軍の車両じゃ無いですか!」

ミリイからの報告にアメリカ自身も慌てて自分の席でホバートトラックのアクティブソナーで確認すると出て来たのは友軍で有る連邦軍の主力戦車61式の駆動音で有るとアメリカは判断した。

「あの補給基地の司令官は本気何ですかあ・・・これじゃあ自分で罪を認めている様なもんですよお?」

「まあ・・・その証拠を残さない様に我々を消す為に出て来たんでしょう。」

「成程おく因みに負けませよねえ先輩・・・?」

そう答えながら不安そうにミリイが首を傾げると、そうですね・・・と呟いたアメリカは戦術マップを見ながら腕を組んだ・・・

(MSさえどうにかすれば大人しく降伏すると思ってきましたが・・・補給基地の指揮官はどうやら相当強気の様ですね・・・いくら戦車と言えども数が揃うと厄介過ぎです・・・)

そう考えるアメリカのこの補給基地の司令官の印象は間違っていない上に敢えて加えるなら粗野で横暴だった。

「全車へ目標は友軍のMSだ良いな・・・」

「本当に良いんですか指令・・・これは明らかな反逆行為になります。」

「ここまで来て何を？どうせバレたら全員銃殺だ・・・だったら何も残らない様に撃ちまれーっ!!」

もう後がないのか切羽詰まった様に叫ぶ指令官に基地オペレーターも前面に展開する戦車隊へと交戦許可を出しながらチツ・・・と舌打ちしながら内心クソ野郎と思っているとピーッとリーダーから何か反応を示した・・・

「リーダーにコンタクト!?友軍機が急接近中です。」

「何だ?!一体どこの部隊だ・・・すぐに引き返させるんだ!」

そう叫ぶオペレーターに基地指令が焦った声を上げると・・・、ワーハツハツハツ!とその急接近中のミディアの操縦席で疾風ウォルフことウォルフガングIIアレクサンダー大尉は高笑いを浮かべた・・・



## 強行偵察その8

「ウォルフ大尉、無茶ですって！止めましょうよこんな無茶な事っ!」

「ええい黙らんかい少尉！彼奴らが気張つとるんじゃ・・・ならワシ達だつて命を張つて物資を届けるのが仕事じゃろうが!!」

止めようとする副機長の少尉に向かって怒鳴りつけたウォルフが低空でミデアをカスケード隊と敵部隊のど真ん中を通るコースで侵入させると、長年の付き合いからか・・・ああもうっ!!と腹を括つたのか隣の少尉から高度計を読む声が聞こえ始めた・・・

「200・・・150・・・100・・・50フィート・・・流石にこれ以上は危険ですよ大尉!」

「分かつとるわい！さあて・・・お前さん達の出番じゃせいぜい気張つてくるじゃな？」

そう答えながらヘッドセットを掴んだウォルフが二つと笑みを浮かべるとミデアが積んでるMSコンテナのハッチ開閉スイッチを叩いた。

「あれはウォルフ大尉のミデア・・・一体何で!」

この事は連邦軍側・・・アメリカ達のホバートラックにもレーダーで確認されており、上部銃座から顔を覗かせたアメリカは双眼鏡を片手に超低空飛行で突っ込んで来るミデアに驚いた声を上げると後部のハッチが開いたので有る・・・

「ちよつとウォルフ大尉!? 一体なにをする気ですか!」

「おお、嬢ちゃんか? ワシからのちよつとした贈り物じゃい・・・上手く使うと良いぞ?」  
「へっ!?!」

妙な事言つて来るウォルフにアメリカが素っ頓狂な声を上げていると見ていたウォルフのミデアからカスケード隊へと配備された第三小隊のRX-75ガンタンクが三機程射出・・・正確に言うところと落とされたので有る。

「本気で言つてるのかよオッサン!? 降ろすんならせめて着陸してからにしろつて!!」

「そんな悠長に降りていたらお前さん達ごと蜂の巣になるのがオチじゃよ? 良いからサツサツと降りんか!」

そう言いながら機首を上げたウォルフが機体のロックまで外すとタンクllデイゴツト中尉率いるガンタンク隊は半ば無理やり最前線へと放り込まれてしまった・・・

「クソつたれめ! 頼むぞレティっ!!」

「やつてますつてえ!?!」

ウォルフへと悪態を吐くタンクに向かって操縦士で有るレティ曹長が慌てながらもフットペダルを踏み込みながらガンタンクをドリフトさせながら横滑りを制御させ着地に成功すると、タンクの教育が良かったのか二番機三番機その様子を做いつつ高い練度を発揮しながら後に続いたので有った。

「何で第三小隊がここに・・・？」

離脱して行くミデアを見ながらアメリカが不思議そうに呟いていると、ぜんぱういとミリイの呼ぶ声が下から聞こえて来た。

「これで戦力比は五分以上ですが・・・どうしますう？」

そう言いながらニヤつきだすミリイにアメリカも意地悪そうにクスッと微笑んだ：「良く分かりませんがここはウォルフ大尉の支援に感謝しますよミリイ！CSDユニット全機に総攻撃を指示・・・畳み掛けますよ！」

「了解ですう！こちらウイスキードック・・・カスケード隊全機へ、出て来た敵機は残らず排除せよ。」

そんな好戦的な指示を飛ばして来るアメリカ達に一番最初に動いたのは留守番を申し付けられていた第三小隊の指揮官で有るタンクだ。

「各機良いな！一斉射したら即時に離脱しろよ・・・欲張ってもいい事は無いからな？」

そう指示を飛ばすタンクに部下達も了解!と答えると、良し良し・・・とタンクは呟いた。

「おいレティ絶対に敵機には向かうなよ?」

「そんなの分かっても自殺行為はゴメンですつてえー!?!」

そんな焦った声を上げるタンクの一番機で有るガンタンクの操縦士で有るレティがガンタンクを全速で前進させると、コアブロックをオミットされた事に胴体が旋回可能となったガンタンクを右に旋回させたタンクは迫りつつ61式戦車をロックオンした・・・

「食らいやがれえー!」

そう叫ぶタンクの声と同時にジオンへと協力していた補給基地の戦車隊が120ミリ低反動砲と両腕部のガンランチャーの餌食になると、この状況に補給基地の司令官は驚愕した・・・

「全滅だと……我が基地の部隊がか!？」

「はい……協力していたジオンのMS部隊もろとも生き残った部隊は既に投降した模様です。」

そう答えながらオペレーターの男性士官がお手上げのポーズを取ると、ふざけるな!! とこの補給基地の司令官は大声上げながら腰から銃を抜くと男性士官へと突きつけた。  
「今すぐあの部隊の指揮官へ通信を繋げろ……!」

「いや、もう諦めた方が良いんじゃないかな……って自分は思うんですが?」  
「五月蠅いっ! 良いから繋ぐんだ……」

そんな切羽詰まった様子の指令官に男性士官がオープンチャンネルで通信を繋ぐと、彼の言う通りですね? と答えたアメリカはカスケード隊全機で補給基地の周囲を囲むと銃を構えながら司令部へと単独で乗り込んだ……

「銃を捨て投降しなさい……貴方にはスパイ容疑と横領罪で逮捕します!」

つい古巣で有る特務隊のノリでアメリカがグロック17Lを司令官へと向けながら申告すると、ヒイ!?! と焦った声を上げる彼の声にアメリカはおっと……と思いながら銃を下げたのあった。

「なあアメリカ……ホントに良かったのか？無断で戦闘した上に勝手に保補給基地まで制圧しちまってよ？」

ウォルフ大尉の救援によりトリントン基地と近くの基地からの増援で大分落ち着いて来た中でアメリカがチャーリーから尋ねらると、さあ……？とアメリカはホバートラックに寄り掛かりながら首を傾げた。

「一応上には、作戦上仕方無かった！って言う事で報告書を作りますよ。とにかく後の事は後詰め部隊に任せて基地に帰りましょう……正直疲れました。」

そんな声を上げたアメリカが肩を揉みながらホバートラックへ乗ろうとすると、一応ヤバそうな音声が消してますよお？とミリイがヒョコつと顔を出して来たのでアメリカはハア……と頭を抱えながら溜息をついた。

「まったく……個性豊か過ぎて今後が不安で一杯な部隊ですね……」

そう独り言ちたアメリカは後日イーガーと共に勝手に戦端を開いた事に対し基地指令のバリサムから命令違反の嚴重注意を受けたが、捕らえた捕虜からの証言によりカスケード隊は特別処分が下される事無く部隊としての初実戦を終えた。

## チャーリーの一日

「よっしや久々のオフだ！」

そう叫んだチャーリーだったが・・・正直に言つて彼にはする事は無かった。

「最近は何訓練と言う名のアメリカがやるCQC近接格闘訓練で心も体もボロボロだからな・・・ちよつとナンパでもして誰かに癒されるか・・・？」

せつかくの休日を楽しもうとチャーリーがそんな事を考えながらニヤニヤしながらトレーニングルームの前を通り過ぎると、んっ!?!と何かに気付いたチャーリーはすぐに引き返すとギョツとしながら中を覗き込んだ・・・

「イ、イエーガー隊長っ！こんな所で何をしてるんですか・・・!?!」

「おつ、チャーリーじゃないか？お前もトレーニングか・・・」

「トレーニングか．．．じゃ無いですよ！ドクターストップ掛かってるんでしよう．．．無理するなって!!」

先日行った作戦の後日に分かったのだが．．．実はザクのマゼラトップ砲の直撃をシールドで受けて吹っ飛ばされた際にイエーガーはアバラにヒビが入っていた事が判明したので有る。

「もう三日も立つんだぞ．．．痛みも無いしもう直ったって!」

「そんなすぐにくつつ付く訳ないでしょう．．．アメリカに報告されたく無ければすぐに止め下さいね?」

「分かったって! たく．．．身体を鍛えると言う俺の唯一の趣味を邪魔しやがって．．．」

「そんな汗臭い事が趣味なんて．．．」



「何だどつ！もう一回行つて見ろチャーリー!!」

ボソッと呟いたのが聞こえたのかイエーガーが掴み掛かる様な勢いで指を差して来ると、違いますつて!?!と慌てて両手を振ったチャーリーにイエーガーはフン!と鼻を鳴らしロツカールームへと入った。

「そう言えばお前の相棒はどうした。一緒じゃないのか?」

「シヨウは年上美人の彼女と買い出しデートだそうですよ・・・」

「ああ・・・リンとか。お前も誰か誘つて出かけたらどうだ?」

軍服へと着替え終わったがイエーガーはそんな提案をしながら出て来ると、何でオフなのにつ?とチャーリーが不思議そうなジェスチャーでイエーガーを見た。

「俺は良いんだよ!それよりもお前だ・・・そろそろ女つタラシのチャーリーとか言う悪名を捨ててシヨウみたいに真剣な愛に目覚めたらどうだ?」

「俺がシヨウみたいに真剣に……？勘弁して下さいイエーガー隊長……こんな俺がマジで恋愛なんて……」

「そんな事を言う割りにはアメリカの事を気にしてたじゃないか？」

そう答えながらニヤつくイエーガーにチャーリーはえつとそれは……と困り出す。

「単純にアイツは可愛いし……ちよつとヤレたらラッキー？みたいな……」

「それはホントか？それが冗談じゃ無かったら俺はお前をぶん殴らないといけなくなるが……」

そんな物騒な事を言ったイエーガーがジロつと睨みを利かせると、いや冗談だ……とチャーリーから慌てて両手を振られたイエーガーはそれで？と首を傾げた。

「実はかなり意識してる。ホントマジで……」

「ほお・・・基地の内外関係無くあれだけ遊び回っていたチャーリーⅡフォンⅡウィルス少尉様がついに真剣な恋に目覚めた?!?・・・これは明日のトップニュース間違ってないな?」

「マジで止めてくれよイエーガー隊長・・・そんなのバラされたら俺は愛した達の全員から刺されちまうって?」

「どうせ一晩限りの付き合いのクセに何を言ってもやがる・・・」

呆れた顔をするイエーガーにチャーリーが痛い所を突くな・・・と苦笑いを浮かべると、どうせ暇だろう?と誘って来るイエーガーにチャーリーはえっ・・・?と首を傾げるので有った。

くくく

「あのイエーガー隊長・・・朝飯に行くんなら食堂はアツチですよ？」

「ああ知っている。良いからちよつと付き合えチャーリー・・・」

そう言いながら基地のレクリエーション施設出たイエーガーに連れられて辿り着いたのはハンガーで有りチャーリー達カスケード隊のMSが置いて有る場所でも有る。

「まさか俺に陸ジムの扱い方のおさらいでも？」

「まあな・・・詳しくは彼女にでも聞いてくれ？おいアメリカ!!」

「えっ！おいイエーガー隊長まさか俺をここに誘ったのは・・・!?」

そんな狼狽える声を上げだすチャーリーに向かってイエーガーがニヤニヤと意地悪そうな笑みを浮かべると、イエーガー!?と驚いた声を上げた彼女から陸ジムのコクピットハッチに装備されたワイヤーで降りて来たアメリカはチャーリーの姿を見ると二度

ビックリした。

「ちよつとイエーガー……チャーリーまで連れて来て？昨日も言いましたがドクターの許可が出ない限り私はMSのパイロットには復帰させませんよ！」

「その件じゃない……そうじゃなくてコイツが話しをしたいって言うから連れて来たんだ。」

「チャーリーが……？」

急に出て来た名前にアメリカから不審そうな顔を向けられたイエーガーにチャーリーは肩を掴みながら背後を向いた……

「絶対に無理だつて！」

「最初から諦めるなよチャーリー!?!とにかく食事くらい誘って見ろつて!!」

「わ、分かった．．．アンタを信じて見る。」

情けない話し合いを終えた二人にアメリカからあの．．．？首を傾げられたチャーリーはコホンと咳払いをした。

「なあ．．．俺と朝飯．．．はもう遅いから昼飯を食いに出かけねえか．．．アメリカ？」

「私と．．．二人で．．．ですか？」

コクつと頷くイエーガーを見ながら尋ねるチャーリーが勇気を振り絞り、ああ．．．と答えると、ソフィー？とアメリカは上で作業をしているカスケード隊のメインメカニクで有る彼女へと叫んだ．．．

「ちよつと半端な時間ですが休憩にしましょうか？」

「分かりましたアメリカさんっ♪」

そんな陽気な声を上げるソフィーが一番機で有るイエーガーの陸ジムのコクピットから手を振って来ると、今は何をしてるんだ？と気になったイエーガーが尋ねた。

「ちよつとソフィーに頼んでフットペダルの調整を……しかし良くあんなに固いペダルを踏めますね？」

「俺は固いのが好みなんだよ！」

「あれは筋トレですって……それじゃ行きましようかチャーリー？」

突然そんな事を言ってくるアメリカにチャーリーからへッ……？と素つ頓狂な声が上がるとアメリカはクスッと微笑んだ……

「私とお昼に行くんでしよう？取り合えず私服に着替えて来ますからそうですね……30分後にここで待ち合わせましょう？」

「お、おう・・・分かった。」

「では後程・・・」

そう答えながら過ぎ去っていくアメリカに答えたチャーリーはバクバクと跳び跳ねる心臓を手で押さえると、ヤベエ・・・足が無え!?!とハンガーの中に向かって入って行った・・・



## チャーリーの一日2

あれから小一時間程経ち、チャーリーがある人から借りた車の中で遅えなアメリカの奴……とボヤキながら頭の後ろで手を組んでいると、お待たせしましたっ!?!と聞こえて来る彼女の声にホントに……と運転席から見たチャーリーは思わず声を失ってしまった……

「……、一応聞くけどアメリカだよな？」

「当たり前じゃ無いですか！久しぶりにプライベートで外出するので士官学校時代に友人から選んで貰ったのを引っ張り出して来たんですが……どこか変ですか……？」

そう言いながらアメリカが恥ずかしそうにすると、いや全然……と呟いたチャーリーは彼女の綺麗な赤い髪に映える膝丈の青いワンピースに白いカーディガンを羽織ったアメリカらしい似合った彼女の可愛い姿に目を釘付けにされたので有る……

(やっべえ……マジで可愛いんだけどっ!?)

心の中でそんな驚いた声を上げたチャーリーがアメリカに自分の動揺を気づかれな

い様にと内心ドキドキしながら、じゃあ行くのか?とスマートに助手席のドアを開けるとアメリカからありがとうございます。と返事が返りニコつと満面の笑みが浮かぶとチャーリーは頭を抱えだす……

「俺の理性持つかな……」

そう言いながら頭を左右に振り出すチャーリーに彼女から何をしてるんですか?と首を傾げると、今行くつて!?!と慌て出すチャーリーにアメリカもアハハ……とシートベルトを付けながら苦笑いを浮かべた。

(ついチャーリーに誘われて軽く返事をしたのは良いですが……これはデートつて奴ですよね!?)

そんな事を想ったアメリカも内心ドキドキしながらどうしよう……と考えるといつてもそんな時に思いつくのは士官学校時代の親友の言葉で有る。

『良いアメリカ……男つて言うのは食事を誘おうとすると大体が身体の要求をして来るから絶対に簡単に許しちゃダメだからね?』

『だけどホントに好きならどうするんです?』

『その時は段階を置いてちゃんとアンタが絶対に良いと覚悟したやりなさい。』

『分かりましたけど・・・何でか聞いても?』

その時の事を思い返したアメリカはハア・・・と溜め息をついた・・・

(確かケイの恋人ってクズ男が多かったんでしたね・・・)

自分に男性経験が無いと知ってるからこそアメリカはそんな事を教えてくれた今は遠くの部署で活躍しているで有ろう親友に向かって感謝の気持ちを持ってニコッと微笑んだ。

「・・・なあアメリカ。そろそろ出して良いか?」

そんな事を考えているとも思わずにチャーリーが遠くを見ているアメリカに向かって声を掛けると、

えっ!?!と驚いたアメリカはどうぞ?と答えながらも同時に聞こえて来る低いマフラー音に興味持つ。

「所でチャーリー・・・このトラックは誰のですか?」

「おやつさんに借りたんだ・・・足が無いからちよつと無理言つてな」

「車なら基地でジープでも借りれば良いのに・・・」

「それじゃあランチデートっぽく無くねえだろ・・・?」

そんな風に答えたチャーリーが悪戯っぽく二つと笑みを浮かべるとアメリカもまあ……確かにですね。と呆れた顔をする彼女じゃあ行くか？と声を上げたチャーリーはギヤを一速に叩き込むとトラックの後輪をホイールスピンスながら急発進させた……

「ちよつとチャーリー!? ホワイト大尉から叱られても知りませんからね!」

「向こうが俺とお前の為に好きに使えつて言ったんだせ?」

基地から出て落下したコロニーの所為で荒れた海岸線を気持ちよく流すチャーリーにまったくもう……と呟いたアメリカが窓から見える落下地点海を見ていると、なあ……?とチャーリーはハンドルをそのままに声を掛けた。

「何です……?」

「確かアメリカはスペースノイドで……その所為も有つて特務の連中と揉めたんだよな。」

「そうですよ。」

「それでどこのサイドだ? 両親とかは……」

そう聞きながらチャーリーは自分の会話のチョイスにボーツと海を差すアメリカにすぐに後悔する事となる……

「私の故郷サイドーアイランドイフツシユで……両親はあそこです。」

「悪い……俺知らなくてさ……」

慌ててブレーキを踏みトラックを止めたチャーリーが申し訳ない顔を見るとアメリカは慌てて両手を振り出す。

「誰にも言つてませんから当然ですつて!？」

「でもよ……」

「良いんですよチャーリー……何の因果かこの土地へと配属されましたが、これは私をチャーリー達を出会わせようとする両親の悪戯じゃ中と私は思つてるんです。」

そう答えながらクスッと微笑むアメリカにチャーリーも頭をガシガシと掻きながら困った顔になる。

「俺じゃ無くて……?」

「うにやつ!？」

出会った時から冗談交じりに口説かれてはいる彼女だがこんなに真剣な顔で聞かれたのはアメリカも初めてで有る……

「チャーリー……ちよつと!？」

「アメリカ……」

そんな熱っぽい顔で覆いかぶさつて来るチャーリーに先程の親友の言葉を思い返したアメリカは若干混乱しながら覚悟を決めた……

(私が好きと思つた相手なら良いんでよね．．．)

そう思いながら覆いかぶさつて来るチャーリーにアメリカもその背中に手を回すと、  
おわっ!?!とチャーリーは慌てて離れた。

「チャーリー．．．?」

「悪い．．．ちよつと暴走したぜ．．．」

そんな事を言うチャーリーが焦つた様に汗を拭くと、ムウ．．．と不満そうな顔をす  
るアメリカと正気となつたチャーリーは目的地で有る中立地帯の町へと着いた。

## チャーリーの一日その3

「どこに連れて来られたと思えば・・・まさか中立地帯の町とは驚きですね。」

「基地でランチ食うよりはマシだろ?」

そんな事を言いながら二つと笑みを浮かべるチャーリーにまあ確かにですね。と答えたアメリカはどこからどう見ても優雅なメインストリートとは言い難い雑多としては有るが陽気な屋台街に好印象を抱いた。

「ここには良く来るんですか?」

「いいや・・・今日が初めてだ。ついでに言うと言つて昼間つから女とマトモに出歩くのも初めてかもな・・・?」

「ホントにチャーリーが付き合った女性とは穢れた関係だけの様ですね・・・」

「まあ・・・良く言われる。」

そんな事を言いながら苦笑いを浮かべるチャーリーにアメリカからハア・・・と溜息をつかれた。

「って事は今日が私とチャーリーの初デートですね。」

「へっ・・・!?ま、まあ・・・そうだな。」

「じゃあ今日を楽しまないと損ですよチャャーリー?」

戸惑ってる様子のチャャーリーに向かってアメリカがそう答えると、おお焦ってますね・・・?と思ったアメリカは揶揄う様にクスッと微笑みながらギョツとチャャーリーの腕へと自分のも絡ませた。

「お、おいアメリカ!」

「デート何だから別に良いじゃ無いですか。それよりも早く屋台を見に行きましょうよ? 私のお腹がペコペコです!」

「わーっただから引っ張るなって・・・」

若干面倒臭そうな声を出しながらもちやんと付いて来るチャャーリーにアメリカもフツツと微笑んでいるが実は内心ではかなり焦っていた・・・

(デートってこんな感じで良いんですかね?正直・・・勝手が分から過ぎて特務に居た時のどんな作戦よりも緊張してますね・・・)

そんな事を思いながらアメリカは背中に嫌な汗をかきながら士官学校時代の親友から聞いたデートの時の話を思い返した・・・

『男って大体最初のデートの時は自分で支払おうとするんだけど・・・悪いと思って割り



勘とか言っちゃダメよ?』

『何ですかミユキ?』

『そんな事言つたらずつと割り勘になるからよ!』

過去にどんな恋愛をしていたかまでは聞かなかつたが・・・アメリカはその時は妙に力説して来る親友に

そうなんだ・・・と苦笑いを浮かべたので有つた・・・

「チャーリーはどうなんでしょうかね・・・?」

「何がだ?」

自分でも思わず呟いてしまった言葉にチャーリーが反応すると、しまった・・・と思つたアメリカは苦笑いを浮かべながら取り合えず目に付いた屋台を指差した。

「アレなんかどうかなーって?」

「何だありや・・・タコヤキって書いて有るが・・・」

聞いた事も無い食べ物売っている屋台にチャーリーから怪訝そうな顔が浮かぶと、

へいらっしやい!と陽気な声を上げるアジア人の若い男性に良い印象を覚えたアメリカ人は渋るチャーリーを引つ張り取り合えずどんな物か見て見る事にした。

「一体何のお店でしょう……」

「いやお前が見つけたんじゃねえか……一応は食い物売ってる様だな。」

スペースノイドのアメリカとヨーロッパ系のチャーリーが物珍しそうに見ていると、一個食べてみるかい?とその屋台の兄さんから二つと笑みが浮かんだ。

「じゃあ……一個だけ?」

そう言いながら顔を見合せたアメリカとチャーリーは焼きたての丸い物体をつまようじに刺さった渡されると、ゴクツと……二人揃って息を飲んだ……

「じゃあ行きますよチャーリー……」

「おうよ……!」

まるで敵陣へ突つ込む前かの様に言葉を交わす二人が勢い良く口の中に含むとすぐに絶叫が聞こえたので有る。

「ハフハフっ……!?!」

「熱っちーなんだこりゃ?!」

涙目でそんな事を訴えて来る二人に屋台の兄さんからアハッハッ!と楽しそうな笑い声が上がった。

「どうだいお二人さん？これはたこ焼きと言ってアジアに有るニホンって呼ばれていた国でお祭りの時に良く出る食べ物なんだが・・・美味しいだろう？」

「ああニホンね・・・知り合いが一人居るから後で聞いてみるよ！」

チツ・とニヤニヤとする屋台の兄さんに向かって舌打ちしたチャーリーだったが、4つくれ！と叫ぶ彼にアメリカはクスクスと笑い出すので有った。

「知り合いつてシヨウの事でしよう？」

「まあな・・・アイツには苦勞を掛けてるし？たまにはな・・・」

毎度ありー！と手を振って来る屋台の兄さんに向かって照れ臭そうにするチャーリーに代わつてアメリカが手を振っていると、じゃあ次に行きましようか？ニコニコするアメリカは再度チャーリーと腕を組みながら屋台を物色し始めた。

「まだ買うのかよ・・・」

「それだけじゃ足りませんって・・・あつ！今度は焼きそばって書いてますね・・・何だかソースの香ばしい匂いが空腹状態の私のお腹を刺激して来ますね！」

「つたく・・・」

普段は見せないそんな無邪気な彼女の姿にチャーリーもククつと笑い出した。

「なあ待てよアメリカ・・・その隣に有るお好み焼きも気にならないか？」

「良いですね！指揮官命令ですよチャーリー全部買っちゃいましょう!!」  
「イエス・マム！」

笑い飛ばしながらアメリカもそんなバカげた指示を出すとチャーリーと二人は屋台通りの先に有る広場で少し一息つくど、オープンテラスとは言い難い簡単に置かれた椅子とテーブルの上に屋台で買った戦利品を並べ出した。

## チャーリーの一日その4

「こんなもんですかね・・・よしチャーリーを乾杯しましょうか？」

「それは良い提案だ。因みに何に乾杯する？」

そう言いながら手渡した缶ビールを受け取ったチャーリーから二つと笑みが浮かぶと、そうですね・・・と腕を組んだアメリカはムウくと唸り出した。

「あつ・・・ならこれ何かですか？今日二人で過ごす素敵なランチに！」

「あつ、ああ・・・まあ天気も良いしな・・・それじゃあ素敵なランチに？」

彼女の二人で過ごす言った言葉にチャーリーが内心少し慌てながら缶を出すと、アメリカもカンパーイ！と無邪気な笑顔でチャーリーとカンつと音を立てながらゴクゴクと一気に飲み始めた。

「プハーッ、昼間つから飲むビールは最高ですね？」

「どこのおっさんだよ！」

「良いから早くチャーリーも飲んだらどうです。まあまあ冷えてて美味しいですよ？」

呆れた顔でツッコむ声を上げるチャーリーにフツツと笑った酒豪な彼女が早々に一本を空けきると、タコヤキタコヤキ♪とアメリカは楽しそうに容器を開けた。

「うん！少し冷めちやいましたけど、結構美味しいです♪」

「だな。しかし何でここには二ホンの屋台料理ばかり有るんだらうな・・・」

「さあ・・・？まあ美味しいから良いじゃないですか」

たこ焼きを頬張りながらそう言ったアメリカの満足そうな顔にそうだな・・・と答えたチャーリーがフツと笑うと、アメリカはそれにですね・・・と少し恥ずかしそうにしなから言葉を続けた・・・

「私はこんなランチ好きですよ？ちゃんと食事代を割り勘にされませんでしたし・・・」

「あん？そりやあ奢るに決まってるだろ！誘ったのは俺だし・・・」

「そんなもんなんですか？」

「そんなもんだらう・・・さつきから何変な事を言ってるんだお前？！」

まるで変な奴を見る様な顔でチャーリーがビールを飲むと、アハハ・・・とアメリカは苦笑いを浮かべながら有る決意をする。

(もう今後一切ケイのアドバイスは絶対にあてにしないと私は決めました。)

そんな事を思いながらアメリカが3本目の缶ビールを開けようとすると、あつ？とチャーリーから指を差された。

「それが最後の一本だぞ！さつき買う時に2本ずつって言ったじゃねえか・・・」

「おっと、そうでしたね。ちよつと考え事をしてたので・・・じゃあまだ飲んで無いので

コレを?」

「おお・・・ってどこに行くんだ一体?」

急に自分のバッグを持ち立ち上がろうとするアメリカにチャーリーが慌てると、

「もう何本か買って来るんですよ。それにチャーリーもまだ飲むでしょう?」

「ああなんだ・・・じゃあ俺が・・・」

「あつ!ダメですよチャーリー?」

財布からお金を出そうとするチャーリーにアメリカが制止する様に右手を出すとフツと微笑んだ。

「私は誰であろうとイーブンで有りたいたいと思つてますので今回は私が出しますね?」

「ああ・・・分かった。」

有無を言わせない様な彼女の言葉にチャーリーも渋々と言つた顔で財布をポケットに仕舞うと、それじゃあ行つてきますね?と歩き出すアメリカにチャーリーはなあ?と声を掛けた。

「凄く良い提案なんだけどよ・・・俺が買った分だけのビールなんか買われたら帰れなくなるぜ?」

「・・・それなら余つた分はシヨウ達のお土産にでもしたらどうです!」

チャーリーからの指摘にアメリカが恥ずかしそうに顔を真っ赤にさせると、そりゃあ

良い！とチャーリーは両手で指を差しながらニヤついた。

「とにかくっ！行つてきますから大人しく待つて下さい!!」

ジロと睨んだアメリカからそんな声が上がると同時にピシッと指を差されたチャーリーはククつと笑いながら彼女の後ろ姿を見送ると、ビックリしたぜ……とすぐにホツとするので有った……

「急にバッグなんか持つて立つから帰ると思つて焦つたじゃねえかよ……まったく俺らしくねえ……」

そう独り言ちたチャーリーは出会つた時よりも更に膨れつつ有る彼女への想いにど  
うしたものか……と葛藤しながら残つたビールを一気に煽るので有った……

くくく

（まったくチャーリーの奴！私を揶揄うなんて良い度胸してますね!!）

再び出店の有るメインストリートへと戻つたアメリカがムウと唇を尖らせながら歩いていると、まあしかし……とアメリカはそのチャーリーを思い出すとすぐにクスツと小さく笑いだした。

（まさかそのチャーリーと久々のオフを二人で過ごすなんて昔の私やケイが見たらきつ



と驚きますね?)

そんな事を考えながらアメリカがついさつきチャーリーと一緒に買った屋台を見つ  
けようとキヨロキヨロ

しだした・・・

「確かこの辺だった筈ですが・・・」

「ああっ!!今何て言ったあ・・・」

「へっ?!」

喧噪の中で不意に聞こえた怒鳴り声に変な声を上げたアメリカは目の前で起きてい  
る事態にギョツとした・・・ライフルを担いだジョン兵二人と屋台の老婆が言い合っ  
いたので有る。

## チヤーリーの一日その5

(向こうはライフルを持ったのが二人……って言うか何で武器担いで中立地帯の街にいらんですか！バカなんですか!?)

内心チツと舌打ちしながら悪態を吐いたアメリカは腕を組みながら思案顔を浮かべた……

「さて……連邦軍の私としてはこのまま様子見するのが正解なんでしょうが……」

出来上がった野次馬の中でアメリカがそう独り言ちていると、屋台の老婆から何か言われたのか、俺達から金を取んのかあババア!!とジオン兵達がヒートアップすると、この酔っ払い共め!と老婆も負けず怒鳴り返した……

「もう一度だけ言つてやるから良くお聞きつ?ここに書いて有る金額も読めない様な奴に売るもんは無いよ!!」

「チツ……このババア言わせておけば!?どうせこの戦争は俺達ジオンが勝つんだつ!今の内に俺達に媚びを売っていた方が良いと思うぜ……」

「ハっ!連邦もジオンも無くなっちまえば良い……わたしやどっちも嫌いだからねえ?」  
フツと呆れた顔で老婆がジオン兵の顔を杖で指すと、喧嘩売つてのかババア……

!!とバカにされたりリーダー格のジオン兵はライフルを振りながら店先の果物を地面へと叩き落とすとそのまま銃身を突きつけた・・・

(ちよつとお婆さんやり過ぎですって・・・って言うか確かに何の役にも立って無いかも知れませんが私たちも必死に戦ってるんですよ!?)

アメリカが老婆からの言葉に若干心を痛めねがら三人のやり取りをハラハラしながら見ていると、何すんだいっ!と老婆が再び怒鳴り出すので、ああ?とライフルを向けようとするジオン兵の行動にマズイ!?と思つたアメリカは肩に掛けていたバッグの中に手を入れるとサーツと顔が青くなる・・・

(しまった!出かける前に慌ててカバンの中身入れ替えて・・・銃もナイフもテーブルの上に置いたままじゃないですかあ!?)

「ほら・・・どうするよ婆さん?役に立たない連邦の連中にも助けを呼んでみたらどうだ!」

「そりやいい!ほら呼んでみるよ?俺達ジオンがいつでも相手してやるってよ!」

ククつと笑いながら煽るリーダー格のジオン兵に乗り降り部下の方も調子に乗ってライフルを向けるので、ひっ!?と老婆は勿論の事、周囲に居た住民達からも悲鳴が上がる中、チツ・・・と舌打ちしたアメリカは履いていたミュールを脱ぎ捨てながらこの混乱の中を駆け出した・・・



彼女の容赦ない攻撃にビクつくジオン兵に今度はアメリカが呆れた顔で異議を申し立てると、あんまり舐めてんじやねーぞっ!!と怒声を上げながら飛び掛かって来るリィダー格のジオン兵にやれやれ・・・と呟いたアメリカは首を横に振った。

「正直言つて子供のケンカじゃないんですよね・・・?」

殴り掛かって来たジオン兵の拳を難なく弾いたアメリカはギョツとするジオン兵の腕をすぐに掴み取ると素早く背中から背負いながら、せやあああーっ!と勢い良く地面へと叩きつけた。

「グハあっ!」

苦しそうな声を上げ動かなくなったジオン兵に向かって安堵したアメリカはフウ・・・と息を吐いた。

「せっかくのオフが台無しですね・・・」

そう独り言ちたアメリカの背後から危ないよっ!と叫ぶ老婆の声に振り向いたアメリカはハツとしながら身構えた・・・ある意味再起不能にさせたジオン兵が殺気だった目でハンドガンを抜いていたからだ・・・

「アメリカの奴……遅っせえな……。一体どこまで買いに行ったんだよ？」

そしてそんなアメリカのピンチにチャーリーも帰りの遅い彼女を心配して屋台通りまで来てみると、前方に出来た人だかりにチャーリーは何だありや……。？と首を傾げた。

(まさかアメリカが何かしたんじゃねえよな……)

知り合ってからというもののトラブルメーカーとしての彼女の才能を散々見てきている事も有り、ちよつとゴメンよ？と言いながらチャーリーが集まった住民達を掻き分けると嫌な予感的中してしまう……

「冗談だろ……。クソつたれめ……」

小さく悪態を吐いたチャーリーが到着したのはアメリカが一人目倒した所だった。そして二人目が飛び掛かろうした時にチャーリーは腰に差していたUSPを抜こうとするがそれは杞憂に終わった……。速攻でアメリカが自分よりも大柄なジオン兵を投げ倒してしまつたので有る。

(アメリカ強えええ!!流石元特務だぜ……)

改めてアメリカの強さを再確認したチャーリーが彼女を出迎えに行こうと前に出ようとした瞬間に危ないよ!と老婆が叫ぶので身構えたチャーリーはアメリカの背後で銃を抜いているジオン兵を見つけると、マジかよつ!?!と声を上げながら腰から引き抜い

たUSPの銃身をスライドさせるとアメリカの背後に居るジオン兵へと銃を構えた：  
（クツ俺の腕じゃ・・・だけどこのままじゃアメリカがあぶねえ・・・!!）

「アメリカしやがめえーっ!!」

「えっチャーリー!?!」

チャーリーの叫んだ声にアメリカとジオン兵もなっ!?!と言った顔で驚き固まってしまふと、貰ったあ!!と叫んだチャーリーはUSPのトリガーを引くと、パンっ!と乾いた音と同時にジオン兵の肩が撃ち抜かれたので有る。

「ギヤアアア・・・」

「オラ!これ以上動くなよ・・・これ以上こんな所でドンパチしたくねえからな・・・」

肩を押さえ悲鳴を上げるジオン兵の傍に有った銃を駆け寄ったチャーリーが遠くに蹴とばすと、今撃つたのチャーリーですか?と呆然としたアメリカから声を掛けられた。

## チャーリーの一日その6

「ま、まあな！マジで当たるとは思わなかったけど・・・」

「えっ最後の方が良く聞こえませんでしたか・・・？」

そう聞きながら顔を近づけるアメリカに向かって何でもねえよ!?と慌て出したチャーリーはそれよりもだ！とジロつと睨みだした。

「バカかお前は！いくら元特務だからって丸腰で突っ込むか普通!？」

「ムウ！バカとは何ですかバカとは!!大体チャーリーが居なくなつてアレくらい避けられましたー!!」

「はあ!?!人が助けてやつたつて言うのに・・・つたく!」

悪態を吐くアメリカにチャーリーも呆れた声を出しながらそのまま彼女の頭を優しく抱きしめると、うにや!?!とアメリカから変な声が出た。

「ちよつとチャーリー・・・苦しいんですが!?!」



「五月蠅えな．．．心配させたんだから少しだけでいいからこのままでいさせろよ．．．」  
少し怒っているのか．．．そんな低い声を耳元で囁かれたアメリカが顔を真っ赤にしながらも不思議そうに肩を撃たれたジオン兵に違和感を覚えた．．．

（真正面から撃った筈なのにジオン兵の肩は背後から撃たれてます．．．一体誰が？）

そう思うアメリカ達から少し離れた場所ですと顔をしなから護身用に持っていたM38リボルバーを路地裏で懐に仕舞う黒髪の青年が有った．．．

「やれやれ．．．間一髪じゃないかよ。チャーリーとアメリカの奴．．．」

「どうしたのシヨウ？なんだか通りが騒がしいみたいだけど．．．」

「買い出しを終えたリンが覗こうとするのをシヨウは何でも無いって!?!と慌てて両手を振り出す。」

「それよりもさ!?!今日欲しいって言ってた食材は手に入ったの?!!」

「あつ、そうそう聞いてよシヨウ!?!何だか知らないけどタコが沢山揚がったとかで一杯買ったのよ!?!」

「じゃあしばらくはタコ料理だね。揚げても焼いても良いし．．．刺身も．．．」

「良いわねそれ! 早速帰って教えてよ?」

そう言いながら引つ張っていくリンに上手く誤魔化す事に成功したシヨウは一足先にCASCAD Eに戻るのぞ有った．．．

〃〃〃

「助かったよアンタ達・・・コイツ等は私達で町の外に放りだして置くからね？」

「アハハ・・・お任せします。」

暴れたジオン兵二人組を縛り上げた老婆達にアメリカが苦笑いを浮かべながら退散しようとする時、ちよつと待ちな！とその老婆から声が上がった・

「お前さん達は連邦軍じゃないのかい？」

「えつと・・・」

そんな事を言う老婆に困った顔を浮かべたアメリカがチャーリーと顔を見合わせる時、俺達は正義の味方だよ？とチャーリーはニヤつと笑った。

「そ、そうです！私達は通りすがりの正義の味方ですから！」

「そうかい・・・まあ、また何か有ったら顔を出しな？悪い様にしないからね。」

そう言いながら二つと意味有り気に笑う老婆にアメリカもアハハ・・・苦笑いを浮かべながら手を振りこの中立地帯の町から出たので有った・・・

「なあ・・・さっきのどう意味だアメリカ？」

トラックのエンジンを掛けながら首を傾げるチャーリーにアメリカは何がですか？とわざとらしく答えながら窓から外を見た。

「さっきの婆さんから妙な事言われてたろ？」

「ああ・・・多分ですが、今回の一件で私達の事を信じてくれたのか・・・情報を売ってくれると言ったんですよ。」

「へえ・・・たまには人助けするのも良いもんだな？」

そう言いながらギヤを入れてトラックを発進させるチャーリーがへへと笑うと、確かに・・・と思いつながら行きとは違い海外線に目をやっていたアメリカは何だか楽しそうにクスッと微笑む。

「なあ・・・所で足はどうしたんだ？」

「足・・・？」

チャーリーに尋ねられたアメリカが自分の足下を見ると擦り切れたストッキングだけで履いていたミュールが無くなっていた・・・

「そう言えば・・・走った時に脱ぎ捨てままです!？」

「ほら・・・これだろ？」

地面に落ちていたサンダルをちやつかり回収していたチャーリーがアメリカの膝に

置くと、有難うチャーリー!とアメリカは満面の笑みを浮かべた・・・

「二つしかない外出用だったので本当に助かりました♪」

「今度は俺がもつと良いの買つてやるから・・・」

「へっ?そんな事言うと本気にしちゃいますよ私?」

いつもの冗談かと思ひアメリカがクスつと微笑むと、俺は本気だからな!と真面目な顔をするチャーリーにアメリカはえっ・・・と声を上げながら顔をポツとリングゴの様に赤くする。

「またまた・・・それよりも今度はこれに行きましょうよ!」

「限定スイーツ特集・・・?」

自分の気持ちを誤魔化すようにバッグから出した情報誌をチャーリーに見せたのだったが・・・

「じゃあまた連れつてつてやるよ?楽しみにしとけよなアメリカ!」

「えっ・・・!」

満面の笑顔を向けながらそんな事を言つて来るチャーリーに面喰つたアメリカは内心ドキツとした・・・

「ホントにホントですか・・・嘘ついたら射撃練習の的にしますよ!」

「マジだって……って言うか何だよその物騒な罰は……」

そう答えながらチャーリーが苦笑いを浮かべると、次の休みが楽しみになりました♪とアメリカから満足そうな答えを得たチャーリーはへへつと笑った。

「取り合えず帰ったらリンのCASCAD Eにでも行くかな……」

「良いですねそれ！結局全然飲めてませんし？」

「お前の所為でな？」

「チャーリーの援護が遅かった所為です。」

相変わらず生意気な彼女の返事に可愛くねえー！と言いながらもへへつと笑ったチャーリーは基地が有る町へとトラックを走らせた。

## チャーリーの一日チャーリーのその7

中立地帯に有る町で起きた騒動をどうにか繰り抜け、自分達が所属するトリントン基地近くに有る町に到着した二人は行きつけのパブへとトラックを乗り付けた。

「やっと着いたぜ・・・早くビールが飲みてえ〜!」

「私もです・・・さっきの戦闘で喉が渴いちゃいました。」

そう言いながらチャーリーとアメリカが同僚で有るショウの恋人が営んでおり部隊名の元となったCASCAD Eの中に入ろうとするが入り口には閉店と書かれた札が掛かっていたので有った・・・

「あ、そつか・・・そう言えば今日は買い出しに行くって言ってたなショウの奴・・・」  
「へえ・・・買い出しにですか・・・?それなら仕方ありませんね。」

チャーリーからの説明に何か引掛かるアメリカでは有ったが、今日は出直して基地の食堂に有る自販機で売っている合成アルコールで妥協しようとして提案していると、あ

れ……どうしたの二人共？とカロンコロンと鳴るカウベルの店の中からリンが顔を出した。

「どうも外が騒がしいと思つたら……飲みに来たの？」

「すみませんリンさん……定休日と知らなくて……」

そう言いながら申し訳無そんな顔をするアメリカにクスつと笑つたリンが良いわよ？と中へ招き入れようとするので、シヨウと一緒だろ？と折角のオフを邪魔したくないと思つたチャーリーは遠慮がちに手を横に振つたのだが……

「良いから入つて来いよ二人共！僕とリンだけじゃ食べきれないくらいの量が有るんだ……」

「なんだそりや？まあ……二人がそう言うんなら言葉に甘えるかアメリカ？」

よく訳の分からない事を言つて来るシヨウにそう答えたチャーリーはアメリカに首を傾げると、そうしますか？とフツツと微笑むアメリカの背中をリンもさあ入つて入つて！と押して来る。

「なんだこりや……またタコか……これ？」

「うん．．．リンが大量に仕入れたからちよつと試しに色々作つたらこんな事になつてさ．．．二人も手伝つてくれないかな．．．」

「別に良いけどよ．．．因みに俺とアメリカからもお前達に土産が有るから受け取つてくれないか？」

そう言いながらチャーリーがアメリカと共に苦笑いを浮かべながら出店で買った焼きそばやたこ焼きを渡すと、げつ．．．とあからさまにシヨウとリンから嫌な顔をされてしまった。

「なんで増やすんだよ!？」

「おいシヨウ!買つてきてやつたつて言うのに何だよその返事は．．．良いからさつさと食おうぜ?コイツの所為でほとんど食べて無いし飲んで無いしで全然満足してねえんだよ俺は!？」

「私はちよつと人助けをしただけです。」

チャーリーの言葉が聞き捨てならないのかアメリカから異議有り!と手が拳がりながらそんな声が上がると、はいはい．．．とリンから手を叩かれた。

「飲み物を取つて来るからケンカは店を出てからやつて頂戴!」

「じゃあビールで頼むなリン!」

「私もお願いします。」



「まったくもう……調子がいいんだから二人共！因みに今日は店の奢りだから好きなだけ飲んでいいからね。」

カウンターに並ぶまあまあ数の料理を片付ける代価としてなのかりんの提案にチャーリーとアメリカがやったね！とタダ酒に有りつける事に嬉しくハイタッチしていると、随分と楽しそうなデートだったみたいだね？とシヨウからニヤニヤと意味ありげに笑みが浮かんだのでアメリカはムウ……と思案顔を浮かべた……

「あの時チャーリーが正面から撃つたのにジオンの肩に当たった銃弾は背後から撃たれた物でした……シヨウですれ撃つたのは？」

「さあ……何の事やら……？」

「ついでもう一つ……私は元特務で同時に聞こえた二発の銃声を聞き逃す程間抜けでは有りませんよシヨウ……助けてくれてありがとうございました。」

アメリカからの淡々とした説明に言い逃れが出来なくなったシヨウが参ったな……と困った顔で頭をガシガシと搔いていると、じゃあ俺は何を撃つたんだ……？とチャーリーは首を傾げた。

「お前が撃つたのは僕の上に有った看板だよ……この下手くそ！」

「チャーリーは銃を撃つのは止した方が良いみたいですね・・・正直言ってバックアップには不向きです。」

二人から散々な言葉を浴びされたチャーリーがヒデエ!?お前達マジで酷いからなそれっ!と抗議の声を上げるのだが、ですが・・・とアメリカから嬉しように首を少し傾げられた・・・

「私を助けてくれた事は事実です。割と恰好良かったですよチャーリー?」

「そ、そっか・・・じゃあ良いけど・・・」

「って事で明日からはマンツーマンで射撃の特訓をしますね?今後あのような事態になつた時に困りますで・・・」

「ハハハ・・・」

アメリカからの提案に対し二人つきりで何かするなら他の事が良いんだけどな・・・と考えたチャーリー

が誤魔化す様に苦笑いを浮かべていると、何だ開いてるじゃないか?と声を上げるイーガーの声と同時にカウベルがカランコロンと鳴るのでドアの方を見たチャーリーはアレ?と不思議そうな声を上げた。

「珍しいっすね．．．イエーガー隊長が女連れなんて．．．?」

「ホントだ．．．ただ一緒に居るのはソフィーだけだね。」

チャーリーが驚くのも無理は無い．．．寡黙で硬派なイエーガーが基地の女性と二人になるなんて聞いたことが無い。そんなイエーガーにシヨウがツツコむと、五月蠅いな．．．と明らかに不機嫌そうな声がイエーガーから聞こえたので有る。

「お前とアメリカがコイツを押し付けたから俺は散々な目に有ったんだからな．．．」

「散々とはヒドイじゃないですか?!? アメリカさん達がランチに行くから私にもどうだ? って誘って来たのはイエーガーさんですっ!」

「だからと言って食堂に有った米を全部食べる奴が有るか! お前のおかげであそこのお婆ちゃんから怒られたじゃ無いか!!」

そう説明するイエーガーに向かって面目無いですっ．．．とソフィーからエへへ．．．と苦笑いが浮かぶと、じゃあコレも食べてよ? と奥からチャーリー達のビールを持って来たリンにカウンター席に並んだタコ料理の数々に目を輝かせたソフィーから良いんですか? と満面の笑顔が浮かんだ．．．

「こんなチビなのにどこに入るんだ．．．コイツは?」

そんな呆れた声を出しながらもククつと楽しそうに笑うイエーガーにへえ．．．と驚

いたチャーリーがククつと笑いだすので、どうかしたんですかチャーリー？と隣のアメリカからキョトンと首を傾げられたチャーリーは何でもねえよ・・・と答えながらビールを一口飲んだ・・・

(こりやあ暫く楽しめそうだぜ・・・あの二人は？)

そう思いながら悪そうな顔をするチャーリーにアメリカがムウ？と不思議そうな顔を浮かべながらビールを飲むので有った。

因みにだが、チャーリーとアメリカは中立地帯で起きたジオン兵との戦闘行為が指令のバリサムにしつかりとバテてしまい、そのとぼちりりでシヨウを含めた三人で仲良く始末書を書く羽目となったのは後日談で有る・・・

## 招かざらぬ人達

## 敵MS調査その1

宇宙世紀0079年 10月

ジオン地上方面軍司令官で有るザビ家三男ガルマⅡザビ大佐が北米大陸に有るキャルフオルニアベースにて戦死したと言う噂は多くの連邦軍将兵が驚愕し瞬く間に広がったのだが……この噂にはもう一つ逸話が有り、そのガルマ率いる大部隊を打ち破ったのは一隻の白い揚陸艦と一個小隊程度の戦力しか持たない小さな部隊だったと言うので有る。

しかし、そんな眉唾ものの強さを持つ部隊の存在は噂の域を出ないが……実際に連邦軍とジオン軍のミリタリーバランスは前者に傾きつつ、アメリカ達カスケード隊の活動地域で有るここオーストラリア大陸でもジオン軍に対する反抗の狼煙が立ちつつ有った……

「あくあホントにツイてない……これで野営するの何日目だっけチャーリー……？」

「そろそろ5日くらいじゃねえか・・・」

そう言いながらジムの上部コクピットハッチにシヨウとチャーリーが足を投げ出している、CSD2に3!と更に横に並んだアメリカの陸<sup>CSD1</sup>ジムから叱咤する声が上がった。

「いくら第二小隊と待機任務を引き継いだからと言って少しダラケ過ぎですよ二人共・・・まったく！」

「ハイハイ・・・わーってるって・・・」

そう言いながらもどこか気合い入らないチャーリーがコクピットハッチを閉じると、先に戻って昼飯の準備をしとくから?とシヨウの陸ジムもベースキャンプに戻り出した。

(士気の低下が著しいです。まあ・・・こんな状況じゃ無理も有りませんけどね・・・?)

二人の機体を見送ったアメリカがそう思いながら苦笑いを浮かべると、20キロ程離れた放棄された廃墟都市に向けて陸ジムのメインカメラをズームさせた・・・

「実際に来て欲しくは有りませんが、早く来てくれないと私の心が折れそうですね・・・」

矛盾を感じる事を独り言ちながらハア・・・と溜息をついたアメリカは二人の後を追

い掛けながら一週間前に与えられた非常に危険な任務の事を思い返すので有った・・・

~~~~~

その日、アメリカは基地指令のロイ||バリサムから呼び出されイエーガーと共に彼のオフィスを訊ねていた。

「えっ!?カスケード隊に敵新型MSの調査依頼とは・・・何でまた私達に?」

「上からの指示だ。」

驚くアメリカにバリサムが淡々と簡潔に答ると、むう?と不思議そうに首を傾げたアメリカは隣のイエーガーと顔を見合せた・・・

「一応ウチはその名の通りMSの運用データを取る実験部隊で有って、そんな危険な作戦は管轄外だと思うのですが?」

「その運用を含めた実戦データの収集の為に各基地を飛びまわっている奴が何を言っている・・・良いからコレを読め!」

そんな呆れた顔をしたバリサムが数枚の書類を自分のデスクに置くとイエーガーと共にその内容に目を通したアメリカは揶揄を込めたのかスカート付きと書かれたセンスの無い敵新型MSのコードネームに困った顔となった。

「情報部には私の友人も居るのですが・・・もう少し良いネーミングは無かったですか？」

「俺に聞かれてもな・・・ってそんな事はどうでも良いんだよ!？」

そう答えながらバシツと自分のデスクを叩いたバリサムからスペックを見ろ! スペックを!!と騒ぎ立てるので、ちよつと待って下さいよ・・・と数枚捲ったアメリカがそのまま固まると、嘘だろ・・・と覗き込んだイエーガーもギョツとした顔で情報部からの報告書を読み上げた。

「MSによるホバー走行を実現させた機動性の高い機体で更には装甲も厚く手持ち武器の火力も有る重MSとは、また・・・まるでデコレーションケーキみたいなパッケージングですな・・・」

「バリサム指令、イエーガーの言う通りです。そんなMSが本当に存在するのですか?」
試験実験部隊の隊長と実質的指揮官で有るオペレーターターの二人から不審そうな目を向けられた基地指令のバリサムは残念ながら・・・と答えると引き出しから取った

ケースから煙草を口に咥え火を着けた。．．

「ふざけたネーミングでは有るがこれは情報部も絡んでいて、先日お前達が捕虜にしたジョン兵から取った聴取で裏も取れている非常にヤバイ案件だからな？」

妙に緊張感の有る声で吸い終わった煙草を灰皿へと押し付けるバリサムにアメリカは事の重大さにゲツ!?!と内心関わり合いたくないと思いつつ顔を引き曇らせた。

「因みにだがウォーカー．．これは本社の情報部経由でオーストラリア方面軍本部から回って来たお前達ご指名の仕事だから拒否権は無いぞ？」

「えっ！何ですか．．．しかも情報部経由って!?!」

「．．．因みにこれは噂だがなウォーカー．．．お前の経歴を知ってかは知らんが、先日の補給基地の強引な作戦の所為で随分と向こうには目立ってる様だぞ．．．」

「それって．．．内務調査が入るってことですか．．．?」

そう答えながら自分の背中を椅子に預けるバリサムに焦った顔をしたアメリカが尋ねると、さあな?とバリサムは両手を上げた。

「先方からは一度お前に話を聞きたいとオファーが有っただけだからな．．．だがしかし、一応は暫く大人しくして置け? 妙な揚げ足を取られたら敵わんからな．．．」

「いや．．．バリサム指令．．．それでは作戦内容に矛盾を感じるですが!?!」

「良いからお前は大人しくしてろ．．．おいイーガー!!」

基地指令では無く後輩パイロットとして呼ぶバリサムにイエーガーがはい．．．？と不思議そうな顔で答えると、頼むぞ．．．！と念押しながら睨んで来る元先輩パイロットにお目付け役を押し付けられたイエーガーはマジかよ．．．と思いつながら苦笑いを浮かべた．．．

「よし．．．ならばこれで私からの話は終わりだ二人共．．．今日と明日は準備期間としゆつくりした後明後から出発する様に．．．以上解散だ。」

そう言いながらバリサムが二人を追っ払う様に手を振ると、ちよつとバリサム指令つ!?とやはり納得が行かないのか抗議の声を上げようとするアメリカの肩を掴んだイエーガーはでは失礼します！と敬礼しながら彼のオフィスを出たので有った．．．

敵MS調査その2

「それにしても友軍部隊の被害が随分とヒドいな・・・それほどまでにこのジオンの新型やらとは凄いのか？」

設営されたベースキャンプにて情報部からの資料を見ていたイエーガーが焚き火の向こうに居るアメリカを見ると、ええ・・・と胸の前で手を組んだアメリカは深く溜息をつき出した・・・

「我々にこの任務が与えられる前にも何度か調査隊が送られたそうなんです・・・」
「全員未帰還ってか・・・嫌な任務だな。」

そう言いながらファイルを閉じるイエーガーに頷いたアメリカもまったくです・・・と答えていると夕飯出来たよー！と今日の炊事担当のショウが声を上げるとすぐに待っていましたと待機任務に出たジャックの第二小队以外の全員がベースキャンプ内に有るテーブルへと集まった。

「おいショウ！今日の晩飯は何だ？」

「今日はリンのCASCADÉ仕込みのスープです。ちよつとだけですがベーコンも入って・・・あつちよつと落ち着いて!? 全員分は有るはずだから・・・」

そんな焦つた声を上げるシヨウを無視した隊員達が一斉に鍋に押しかけると、こんな最前線ですが・・・とスープを小皿を持ったまま元特務のアメリカは何だ?と言つた顔のイエーガーを見た。

「こんなに美味しい料理が食べられるのなら長期の遠征も苦になりませんか?」

「まあな・・・但しそれはリンが俺達の為に用意してくれた食料が尽きるまでの話で、もし軍用のレーションなんか出したらどんな事になるやら・・・」

「そんな事になれば暴動が起きかねませんね・・・」

イエーガーの言葉に苦笑いを浮かべたアメリカはすぐに対策を立てないといけませんね・・・と思案顔を浮かべるのだが・・・取り合えずは!と、目の前に有る美味しそうなシヨウの作つたスープを堪能する事にしたので有つた。

~~~~~

「やつぱりベッドじゃ無いとよく眠れないな・・・それにリンの声もかれこれ一週間近く聞いて無いし・・・」

次の日の早朝：…この作戦での長い遠征で恋人と会えない事に愚痴を独り言ちたシヨウはふわあ・・・と欠伸しながら大きく腕を伸ばしながら歩いていると、カチャカチャと自分の機体の上から妙な声が聞こえて来たので誰か居るのか・・・？と陸ジムを少し警戒しながら見上げていると、あれシヨウさんっ？とソフィーがコクピットからヒョコつと顔を出して来た。

「何だソフィーか・・・!?おはようさん。」

「おはようございますっ♪早いですねシヨウさんっ?」

「そっちこそ。因みに僕は今から朝飯の準備だよ。」

そう答えたシヨウは別に立候補した訳では無いのだがカスケード隊の専属シェフとなりつつ有り完全に部隊内の胃袋を掴んでしまっておりソフィーもその中の一人である。

「エヘヘ、シヨウさんの作るご飯って美味しいから大好きですっ♪」

「そう言ってくれると僕も嬉しいよ。今日の分は内緒で少し多めにしとくねソフィー」

「？」

下から二つと笑みを浮かべるショウにやったねっ♪とソフィーが嬉しそうにガッツポーズを取ると、所で何をさつきからしてるの?とショウはこんな朝っぱらから作業をしている彼女に向かって不思議そうに首を傾げる。

「いえ、ちよつとでもショウさん達の負担を軽減出来ないかと、今までの戦闘データを見て各パイロットの癖に合わせて機体のセットアップとそれに合わせてOSを書き換えてたんですよ?」

「うん．．．これならソフィーのイジツたコイツなら例の新型機にも楽勝だね。」

ソフィーからの説明にへえ?と驚いたショウが頷くと、．．．気休め程度ですけどねっ?といつになくソフィーは自信無さげに首を少し傾げた．．．

「私もイエーガーさん達から情報部が得たスカート付きの機体データを見ましたが．．．正直言つてスペック的には陸ジムは完全に負けてますっ．．．」

そんなにかよ!?!と思つたショウもアメリカからスカート付きとか言うふざけたコードネームを持つ新型機の事は聞いていたが．．．ですがっ．．．と答えるソフィーの真剣な顔に面喰つたショウは彼女の言葉を待った．．．

「そんな機体に負ける程この子達をヤワに仕上げてませんよ私はっ……ちよつとピーキなセッティングに変更しましたがショウさん達カスケード隊の皆さんなら乗りこなせる筈ですっ！」

「何をしたかは怖いから敢えて聞かないけど……君の為にも絶対に負けないと誓う。」  
「へへっ……それならショウさん。もう一つカスケード隊のメカニックつとして誓って欲しいですっ……絶対に無事で皆と共に戻って来て下さいねっ？」

そう不安そうな顔をするソフィーにうん……とショウがこればかりは保証が出来ないな……と苦笑いをながら頷くと、ソフィーも自分が無理な事を言っている事が分かっているのか……誤魔化すようにエへへ……と笑い出した。

「じゃあ朝ご飯を楽しみにしてますねっ？」

「うん。じゃあまた後で……」

そうしてニコつと笑みを浮かべるソフィーと別れたショウは手を挙げながらも彼女との誓いを破らない様にとバシと眠気覚ましも加えて自分の頬を気合い入れる為にバシツと叩いた。

## 敵MS調査その3

その日の夕刻、手の空いていた隊員達と共に夕飯の準備をしていると、これでよし：とシヨウは出来上がった味噌汁の出来に満足そうに笑みを浮かべた。

「味噌汁なんて久しぶりですよカノウ少尉っ!!」

その中の一人で第二小隊の三番機パイロットのユウヤシンジヨウ准尉が鼻息を荒くし尋ねると、そうだろ!?!とシヨウも興奮気味に答える。

「この前の非番の時にたまたま中立地帯の町で見つけたんだよ?」

「へえ・・・僕も今度行つて見ようと思います。」

同じアジア人で年も近いユウヤとシヨウは仲も良く、取り合えず武器は携帯して行けよ?とシヨウからの謎のアドバイスにユウヤがはい・・・?と不思議そうにしていると、全員居ますねっ?!と若干焦った様子のアメリカが補佐のミリイを連れて夕飯前のキャンプへと現れたので有る・・・

「おいアメリカ!何か有ったのか?」

「ええ・・・夕飯前で悪いんですが、これよりブリーフィングを始めます。」



カスケード隊の中隊長と第一小隊長を兼任しているイエーガーIIバウスネルン中尉が実際に隊の指揮を執っているアメリカンIIウオーカー軍曹からの指示に全員敬礼！と号令を上げると同時にカスケード隊全員が起立しアメリカの顔を見た。

「では、これより状況の説明を始めます。お願いしますねミリイ？」

「はいはい。」

彼女の癖で有るミリイIIタニグチ伍長の間延びした返事を聞いたアメリカは既に常設されている簡易的なプロジェクターにこのベースキャンプと監視対象で有る廃墟都市を中心としたマップを表示させた。

「今より50分程前に例の重MSらしきジオン軍の新型MSが友軍の前線基地が襲ったとオーストラリア方面軍本部から通信が入りました。ここから見ても距離は約60キロとかなり近いので補給の為に戻って来る可能性が有ります。」

アメリカの声に合わせて繋いだノートPCでミリイからプロジェクターに線を結ばれると、因みに被害は・・・？と手を挙げながら尋ねたシヨウに大丈夫ですよ？と答えたミリイがあざとくクスつと微笑んだ・・・

「近隣の基地には先輩の名前で防衛に徹するように注意喚起を促して置きましたから被害の方は軽微とことですう。」

「いつの間にそんな事をつ!!」

何も聞いて無かったのか・・・ミリイの報告にアメリカから驚いた声が上がると、それなら良かった。とシヨウはホツとした。

「全然良く有りませんってシヨウ・・・!ただでさえ目立つ行動を控える様にとバリサム指令からキツク言われてるんですよ私は?」

「まあまあ、お前のその名前のおかげで被害が少なかったんだから良いじゃ無い?」

恐らくこれは各基地へと教導訓練をしていた時の賜物だな?と感じたシヨウが苦笑いを浮かべると、まったくもう・・・!とアメリカからも声が上がると同時にムウと不機嫌そうな顔が浮かんだ。

「それはそうとしてだが・・・接敵までどれくらいだミリイ?」

「えつとお・・・向こう迂回すると考えてえ、到着予定時刻は30分後ですなぁ?」

「そうか・・・って!?30分後だぁー!!」

話を換えようと聞いた第二小隊長のジャックⅡアルヴィン中尉だったがミリイからの言葉に嘘だろ!?!と驚くと慌てて第三小隊長のタンクⅡビンセント中尉を見た。

「取り合えず俺の隊が先行するから支援は頼むぞタンク!!」

「任せとけ。それよりもせっかく良いのを見つけたんだ・・・無茶はするなよ?」

そう言いながらニヤつくタンクにうるせえな・・・とジャックが照れ臭そうに顔を赤

くすると、どう言う意味だ?と二人の話を聞いていたイエーガーから不思議そうに首が傾げられた。

「ジャックの奴ミリイと付き合いだしたんだとよ・・・」

「ほう・・・それは知らなかったな。お前もそろそろ身を固めたらどうだタンク?」

「お前に言われたくはないね!」

トリントン基地に所属する一部の隊員からは三バカトリオと呼ばれている三人だが・・・それは何だかんだ言いながらも仲の良い彼らに対する愛称で有り決して蔑称では無い事は近くで話を聞いていたシヨウとユウヤも周知している事実で有る。

「せめてスープだけでも飲んで下さいねジャック隊長?」

「おつ、ありがとうなシヨウ?お前の作る食事だけがこの遠征中の楽しみなんだよ・・・」  
しみじみとした顔で答えるジャックにアハハ・・・と苦笑いを浮かべたシヨウが味噌汁と先に握っていたおにぎりを手渡すと、コイツは良いな?とジャックから少し驚かれた。

「これならコクピットの中でも食べられると思ったので・・・」

「確かにな。ユウヤも適当な所で抜けるよ?」

そう言いながらジャックが自分の機体へと駆けて行くと、僕も行きますね!?!と慌て出

すユウヤにシヨウもああ．．．と頷いた．．．

「僕も合流するから後でなユウヤ．．．？」

「ハイ。それではまた後で！」

そう答えたユウヤが敬礼しながら隊長のジャックを追うと、絶対にだからな．．．とその背中に向かって呟いたシヨウの言葉は慌ただしく聞こえる喧噪によつて消えたので有った。

## 敵MS調査その34

「第一小隊CSD1より第二小隊と第三小隊へお客さんの出迎え準備は出来てますね！」

「こちらCSD4位置に着いた。」

「CSD7、こつちもいつでも良いぞ？」

以前の出撃で負傷しそのイエーガーの代わりに陸ジムに搭乗したアメリカの声に廃墟都市の外側に待機している第二小隊長のジャックと廃墟都市から少し離れたベースキャンプの近くで後方支援として待機する第三小隊のタンクから返事が返つて来ると、ウイスキードッグそつちはどうですか？アメリカとタンク達第三小隊と同じ位置で待機しているミリイのホバートトラックへと通信を繋いだ。

「それなんです、襲撃された基地から飛んだ偵察機が北からこちらへと向かっているMS2個小隊を補足した模様ですよ先輩？」

「それは朗報じゃ無いですか!?ようやくこの長い遠征から解放されそうです・・・」

「まあ・・・無事に任務を果たしたら・・・ですけどねえ？」

アメリカはそんな事を言いながらモニターの向こうで苦笑いを彼女に向かって確かに・・・と自分も苦笑いで返すと、聞いてましたね？とカスケード隊の全ユニットに対し先程も行った作戦説明の確認の為にもう一度訪ねた。

「先程ミリイも言っていました、街の北側から侵入する敵MS部隊に対して第二小隊は挨拶するだけにして街の中心部へと追い込んで下さいねジャック？」

「分かっているってアメリカ。その後は街の中心部に潜んでいた第一小隊と俺達第二小隊で包囲殲滅するって事で良いな？」

そう答えながら首を貸し上げるジャックにアメリカもその通りです。と頷くと、俺達の出番は有るのか？

と若干不服そうな顔で後方支援の第三小隊のタンクからムスつとした顔がモニターに映った。

「どんな任務でも作戦通りに行くとは限りませんよタンク？必要な時はすぐに助けを呼びますが・・・そんなに前線に出たいんなら私達が代わりますよ？」

「おっと・・・そいつは止めどころ。コイツの足じゃスカートを履いたお嬢ちゃんには追いつけそうに無いからな？」

情報部からも回っているMS-09ドムのスカート付きと言うコードネームを揶揄したのかククッと笑うタンクに隊員達もそれは間違い無い！とその冗談に大きく笑いだすと、緊張がほぐれたに隊の皆に対し内心タンクに感謝しながら同じ様に笑っているミリイとイエーガーにアメリカはプライベート通信を繋いだ。

「今回は私が現場の指揮を執る事になるのでイエーガーはミリイのサポートを頼みますね？」

「おう、任せとけって？お前よりも出来るって所を見せてやるからなアメリカー！」

そう答えながら二つと意地悪そうに笑みを浮かべるイエーガーにミリイからもその通りですよ先輩？と自満々の顔で笑みを浮かべて来た。

「私がカスケード隊の正式なオペレーターになった今・・・もうMSのパイロットとなった先輩の時代は終わったんですよ!!」

「いや・・・あくまで俺が復帰するまでの代わりだからなミリイ!？」

アメリカはニヤつくミリイとそれにツッコむイエーガーを見ながらハア・・・と溜息をつくるとホバーの操縦を兼任している整備兵のソフィーび再びプライベート回線を繋

いだ・・・

「ソフィー・・・危なくなったらホバーだけでも脱出して下さい。」

「えつとつ・・・そうならない様に私も頑張りますねっ!？」

ソフィーもアメリカ達の会話を聞いていたのか苦笑いを浮かべたので有った。

〃〃〃

「ウイスキードッグよりカスケード隊各機へえ！アクティブソナーに感有り・・・敵MS部隊がやって来ましたよお!？」

この廃墟都市周辺に撒いたセンサーとリンクしているミリーのモニターに反応があると、即座に位置は!？と街の外を警戒しているジャックの第二小隊から通信が入った・・・

「予想通り、北側の幹線道路だよおジャック!!」

「ウイスキードッグ了解した。ユウヤとレオンも良いな？一旦奴っこさん達を出迎えて



から撃てよ……！」

そう答えたジャックが廃墟都市の玄関口でも有る崩れかけた廃ビルに部下達と陸ジム潜ませながら確認すると、了解……と二人から緊張気味に返事が返って来る。

「敵機的目標ポイント到達まで約30秒お……!!」

「良っしゃあ! CSD5と6もエンゲージ! ジオンの奴等に向かって撃ちまくりやがれ……!!」

ミリイからの通信と同時にジャック達の第二小隊が通り抜けた最新鋭のMS09ドムとMS07グフに加えてお馴染みのMS06ザクの混成部隊の背後を取りつつ左右から武器を構えた。

「なっ?! 連邦軍の奇襲で……」

そう言いながらジャックの陸ジムが撃ったビームライフルにより最後尾のザクが撃ち抜かれると、ほらほら……さっさと行けよ? レオンが100ミリマシンガンで牽制すると後方支援を担当するユウヤは冷静にそのザクを支援しようとするもう一機のを

捉えた・・・

「逃げれば良いのに・・・」

普段は優しそうな顔だが・・・そう吐き捨てたレオンの陸ジムが構えたロケットランチャーで容赦なく仕留めると、嵌められた事にクソっ!?!と言わんばかりにドムとグフが街の中心部へと逃げて行った。

## 敵MS調査その5

「ウイスキードッグからCSD1へ！CSD4達を抜けたスカート付きは予定通りそっちへと向かってますよお!」

「ウイスキードッグ了解です。CSD1から2と3も聞こえてましたね?」

アメリカはオペレーターからのミリイからの状況報告に一旦通信を切ると、チャンネルを変えながら僚機のシヨウとチャーリー機に通信を繋いだ。

「状況は確認した。所でよ……乗ってるパイロットって男なのかそれとも女か気にならねえかシヨウ?」

「確かにね……あんな恥ずかしい機体に乗ってるんだからアメリカみたいな女性だと思うよ。」

「そいつは困るぜ……ほら俺ってどんな女にも優しくするって言うのが信条だからよ?」

こんな状況にも関わらず二人がバカ話に花を咲かせていると、何を真剣に話し合ってるんですか?!とアメリカから怒声が上がった……

「あつ、だけど一番はお前だから心配するなよアメリカ!」

「はいはい．．．そう言うのは後でゆつくり聞きますから今は仕事をちゃんとして下さい。」

チャーリーのいつもの冗談なのか頭を抱えながらアメリカが答えると、アメリカが冷てえ!?!と聞こえて来るチャーリーの声を無視したアメリカはCSD2何か?とアメリカ達とは別の位置に待機しているシヨウから聞こえて来る笑い声にムウと唇を尖らせた。

「ハハツ．．．いや、相変わらず仲が良いなと思つてさ?」

「そうですね?いつも通りだと思ひますが．．．」

「そっかな．．．」

「そうですね!」

妙にしつこいシヨウにアメリカが少しきつく答えると、確かに最近チャーリーの様子が変ですね．．．?と内心アメリカも不思議に思う事が多々有つたのだ。

(一緒に出掛けてからというもの．．．何だかずつと一緒に居るような気がしますね?)  
そう思つたアメリカは、まあ別に嫌では有りませんが．．．とどちらか言う嬉しさと感じるこの妙な感情に戸惑いながらもコクピットの中でフツツと微笑んでいると、ピー!と鳴る接近アラームに現実へと引き戻された。

「アクティブソナーに反応有り．．．近いですよ!」

元々敵機を都市の中へと誘い込んだ時の為にと仕込んでいたアクティブソナーの反応にミリーのホバートラックと位置情報をリンクしている各CSDユニットへとその情報が伝わった……

「こちらCSD2敵機を視認した。ウイスキードッグ攻撃許可を！」

街の中央に有る半壊した市庁舎の屋上でシヨウの陸ジムが接近するMS―09ドム……通称スカート付きを捉えると、そのまま待機を！とミリーからの指示にシヨウは急いでくれよ……と答えながらシートの後ろから狙撃用のゴーグルを引っ張ると180ミリキャノンの照準を先頭のドムへとその狙いを定めた。

「現在CSD1とCSD3が敵MS部隊の背後へと回り込んでますう!!」

「分かっているって！だけどこれ以上接近されたら射角が取れないぞ?！」

幸か不幸か真正面にターゲットを捉えてしまったシヨウは高い位置に狙撃ポイントを取っている為に真つすぐ接近されると狙いにくい上にその位置がバレるリスクが高いのだ……

「こちらCSD1です。2と共にポイントに到着しましたよウイスキードッグ！」

「ウイスキードッグ了解ですう！CSD2へ発砲を許可あ!!……」

敵MS部隊の背後を取ったらしいアメリアの声とミリイからの指示が聞こえたシヨウはメインモニター映るドムのモノアイと一瞬目が合いながらもこなくそーっ!?!と声を上げサイドステイクのトリガーを絞った。

だがシヨウの陸ジムが撃った180ミリキャノン正面のドムでは無くその背後に居たMS-06Jに直撃すると、その狙撃をホバーによる高機動の恩恵で避けたドムは右手に装備した360ミリジャイアントバズを構えるとシヨウの居る市庁舎へと数発撃ったので有る。

「こちらCSD2!?!ターゲットの撃破に失敗した! 現在敵機から攻撃を受け交戦中だっ!」

「CSD1と2も敵部隊と交戦中ですう! 第二小隊も援護に向かっているので頑張ってください。」

シヨウ少尉なら大丈夫ですよねえ?とそう淡々と言いながら通信を切るミリイに冗談だろっ!?!と叫んだシヨウはドムから撃たれたバズの所為でグラグラと崩れ出す市庁舎ビルにクソつたれ!と悪態を吐きながらフットペダルを踏み込んだ。

そのままバーニアを吹かし後方へと離脱しようとシヨウの陸ジムに向かつてドムが

更に追い打ちでジャイアントバズを撃つて来るとシヨウも牽制で180ミリキャノン  
を数発連射した・・・

「こなくそおーおー!!」

まあ咄嗟に撃ち狙いもそこそこでは当たる筈も無く、互いに外した事で無事に着地し  
たシヨウはこのまま戦うのはマズイと思い180ミリキャノンを地面に捨てると腰の  
マウントから100ミリマシンガンを引き抜いた。

「まったく・・・あんな化け物と僕一人だけで戦うのはちよつとキツイって!!」

そう独り言ちながらシヨウがハア・・・と溜息をついていると、ピーつと鳴るMSの  
反応にギョツとしたシヨウはなつ!と驚きながらジャイアントバズを向けて来るドム  
に咄嗟にフットペダルを踏み込む。

「しつこいんだよコイツっ!」

そう叫んだシヨウは何故か執拗に追つて来るドムをどうにかする為にも陸ジムを走  
らせながら100ミリマシンガンを撃ち込んだので有った・・・

## MS調査その6

「一体どうなってるんですか！ウイスキードッグっ!？」

ミリイの指示で敵部隊の背後に回り込んだは良いが、アメリカは突然起きた敵機の爆発によって混乱し生き残った数機の敵MSと撃ちあいになりビル陰に釘付けにされてしまった。

「恐らくスカート付きを狙ったCSD2の攻撃が後続機に当たった模様・・・そのままCSD2から交戦中との交信が入ってますが・・・支援どうしますう？」

「そんなのコッチが聞きたい所なんですけどっ!？」

そんな事を言いサブモニターの向こうから困った顔するミリイに向かってアメリカは抗議すると、コイツっ！と陸ジムのビームライフルで崩れた建物の陰から120ミリマシンガンで応戦して来るザクIIに向かって撃ち返した。



「ねえチャーリー！私達だけでこの数を突破出来ると思いますか・・・!!」

「無理に決まってんだろ!!?・・・でもやるって言うんだろアメリカは?」

道を挟んだ隣のビル陰に居るチャーリーの陸ジムからそんな溜息交じりの通信が返って来ると、良く分かってるじゃ無いですか?と答えながらアメリカはいつもの様に余裕の表れを示すようにクスッと微笑んだ。

「そう言うからには妙案でも有るんだろうな・・・」

「それは勿論。ウチの十八番で行きますよ?」

「ようは出たとこ勝負って事な・・・マジで勘弁して欲しいぜ。」

チャーリーもすぐにシヨウの援護に向かいたいのは山々なのだが、同じ思いなのか強

引な手段を取ろうとするアメリカにチャーリーはガクつと項垂れつつFCS火器管制から背後のバックパックからウエポンコンテナを降ろすとミサイルランチャーを取り出した。

「ウイスキードッグへこれより敵MS部隊へ突っ込みますので視界不良によるサポートをお願いします。」

「ヘッ!?本気ですか先輩っ!!」

「時間が有りません。急いで下さい!」

シヨウの事が心配なのか少し怒った声を出すアメリカに分かりましたってえ!?!とミリーも焦りながらキーボードを叩き出した。

「音紋センサーアクティブソナー展開・・・敵機の位置を確認っ!リアルタイムで誘導しますう・・・!」

更に精度を上げる為にミリイがホバートラックから地面に伝わる振動を感知するセンサーを突き刺すと、それでは準備は良いですか？とアメリカは陸ジム脚部に有るサーベルラックからビームサーベルの柄を掴むと、いつでも良いぜ・・・？と緊張気味の顔でチャャーリーも陸ジムのミサイルランチャーを構えた。

「それではスリーカウントで行くのでウイスキードッグがカウントして下さい？」

「了解ですう・・・それじゃあ行きますよお！3・2・1・GO——っ!!」

ミリイのカウントダウンの終わりと同時にチャャリーの陸ジムが顔を出しウオオっ！と叫びながらミサイルランチャーを6発全弾撃ち尽くすと、ドドンっ!!と着弾が起きると同時にアメリカはフットペダルを踏み込み陸ジムのバーニアを吹かし敵MS部隊へと一気に距離を詰めた・・・

「クツソオ連邦の奴等め！こっちも反撃に・・・」

そのままガガッ・・・と突然小隊長から通信が切れてしまったのでその僚機で有った少尉は慌てて隣を見た。

「どうかしたのですか中尉・・・っ!？」

チャーリーの陸ジムからの攻撃で視界が悪く少尉は段々と見えて来たその小隊長機のザクの姿に驚愕した。

「連邦だとオーオーっ!!?」

そう叫びながら120ミリマシンガンを撃ち出す少尉にアメリカはビームサーベルで突き刺したまま小隊長機のザクを盾にするとその陰から味方ごと撃って来るザクをビームライフルで仕留めた。

「おやおや、フレンドリーファイアは良く無いですね?こちらCSSDI二機撃破。」

「CSD3了解……つてアメリカ伏せろーっ!!」

ハツとしたアメリカがチャーリーの叫び声通り機体を中腰に落とすと、脇から飛び出して来たザクⅡに向かってチャーリーは陸ジムの100ミリマシンガンを放った。

「この野郎っ!!」

ヒートホークを振り上げようとしていたザクⅡがガガガつとチャーリーによって巣にされると、フウ……とアメリカはコクピットの中で安堵した。

「ありがとうございますチャーリー……おかげで命拾いしました。」

「つたく……お前はいつつも無茶しすぎなんだよ……!」

「えっ……えーとゴメンない……?」

そうお礼を言ったものの、先日の中立都市の時と同じ様に真剣なトーンで怒り出すチャーリーにアメリカが困惑していると、頼むから・・・とチャーリーから不安そうな顔がサブモニターに映った。

「お前に何か有ったらって思うと・・・だからこれ以上心配させんなって・・・！」

「へっ・・・何ですそれ？何だか私の事が好きって言ってる様に聞こえるんですが・・・」

そう答えながらもアメリカはあれ・・・？と過去の記憶を辿り寄せた。

(いや元々チャーリーは私の事を・・・いやいやあの時はただのナンパだった筈です!?)

初めて出会った時の事をリフレインしながらアメリカが真つ赤にしながら顔を左右に振っていると、その通りだけど・・・？と同じく照れ臭そうに言ってくるチャーリー

にアメリカはウニヤ!?と妙な声を上げながら顔をポツと赤くした。

「なあ・・・こんな場所で悪いけどよ。お前の返事はどうなんだ・・・?」

「そつそんなの急に言われたつて心の準備がつ!」

そう答えながらアメリカの本心は決まってる。

(二度も命を救ってくれたし、そんなのイエスに決まってるじゃ無いですか・・・)

そう思いながらも素直じゃないアメリカが答えを引き延ばそうとしていると、あの先輩く?と苦笑いを浮かべたミリイから通信が入って来た・・・

「正直言い難いんですけどお・・・お二人の会話が隊内に駄々洩れなんですがあ?」

「えっ・・・嘘ですよね?全部・・・!」

「はい．．．全部ですう。」

そう淡々と答えるミリイにアメリアからウニヤ〜!!?と素つとん狂な声が上がると、取り合えずそんなおもしろ．．．楽しそうな事は作戦終了後にしましようにお?と提案するミリイに全然言い換えてませんよ!とアメリアはハア．．．と溜息をつき出した。

「良いから残った敵機の情報を転送して下さい．．．」

まさかの戦場で起きたこの告白劇に、ミリイ達には邪魔されたくないと思つたアメリアはこの作戦が無事に終わつたら自分の気持ちを素直に伝えようと決めたので有つた。



## 敵MS調査その7

「こんな時にアメリカに告白するとか何考えてんだよチャーリーの奴!」

シヨウはムードの欠片も無い戦場でのロマンズを無線で聞きながら呆れていると、後方から追い掛けて来るドムから度々聞こえて来るロックオンアラムに向かって舌打ちした。

「チツ・・・良い加減しつこいんだよおっ!!」

ドムのロックオンから逃げ切る為に陸ジムのバーニアを吹かしたシヨウがビルの物陰に隠れながら後方のドムに向かって100ミリマシンガン撃つと、ヒューンとドムもホバー移動で攻撃を回避しながら対面のビルの物陰へと隠れた・・・

「残弾数がマズいな・・・次の一連射と残りマガジン1つで割と詰んでないかコレ・・・」

AMMOEMP弾薬不TY足と残酷な事を表示するメインモニターにハア・・・と溜息をついた。シヨウは手元のコンソールを操作しこの廃墟都市のマップを表示した。

（イザつて時にウエポンコンテナは隠して有るけど・・・あんな機動性を持つ奴から陸ジムで振り切るとか無理ゲーだしな・・・？）

その場所までMSなら一分も掛からないが、装備の換装時間を懸念したシヨウがどうしようか・・・？

？と考えていると、CSD2聞こえますう？とこんな切羽詰まった状況でも間延びしたミリイから通信に聞こえてるよ！とシヨウは若干イラついた声で答えた。

「そんなに怒らなくても良いじゃ無いですかあ・・・現在CSD2の救援にCSD1と3が向かっており到着予定時刻は120秒程ですう！」

「CSD2からウイスキードッグへ、こちらの弾薬が乏しい！もつと急かす様に言ってくれないか!？」

「そんな事言われても・・・ってえ、イエーガー隊長お!？」

急に慌て出すミリイの声に、んっ？と首を傾げるシヨウにおいシヨウ聞こえてるな？

といつもながらハスキーなカスケード隊の中隊長兼自分達の小隊長で有るイエーガー||バウスネルン中尉の声にシヨウはギョツとしながら聞こえますが・・・？と苦笑いを浮かべた。

「コッチはこつちでちゃんと支援してやるからシヨウ・お前は自分の仕事をしやがれ良いなー!」

「・・・信じて良いんですねイエーガーさん?」

「舐めんじゃねえぞ・・・問題児のお前とチャージャーを見て来た俺が何を考えてるか分からない訳無いだろうが!」

ホバートトラックのモニターを見ながら怒声を上げるイエーガーに了解です。と何だかんだ言いながらもイエーガーの事を信頼しているシヨウから通信が返って来ると、おいミリイ?とイエーガーが二人のやり取りに呆けている女性オペレーターにと声を掛けるとほえつ?と変な声が返って来た。

「そこで待機している第三小隊に仕事だと伝える。今からシヨウの援護の為に支援砲撃をするぞー!」

「それってシヨウ少尉の居るポイントにガンタンク隊で支援砲撃するって事ですよねえ!?!」

イエーガーからの指示にミリイが慌て出すと、それがどうした?とイエーガーは不思議そうな顔で首を傾げる。

「タンクはプロだ。絶対にシヨウに当てるなんてへマはしない。」

「しかし訓練データでは1キ口圏内の命中率は65%・・・CSD2が居るのに支援砲撃

を行うのは危険すぎますう!!」

アメリカから補佐としてこのカスケード隊に配属されたミリイだが彼女が一番欲しかったのはミリイの長けている情報処理でこれには隊内の全員が納得している。

「それは誘導しでの話だろ? それならミリイ・・・お前が俺に指示を出せ!」

「ええ!? タンク中尉まで・・・」

急にタンクが通信に割り込んで来ると、僕もミリイを信じてるからさ? とシヨウからも自分を信じると言ってくるのでミリイはどうなっても知りませんよお!?! と声を上げながらヘッドセットを掴みアクティブソナーの感度を上げた・・・

「ウイスキードッグよりCSD2へ準備オツケーですう!!」

「CSD2了解・・・さあて乗って来いよスカート付き・・・?」

緊張気味のミリイに答えたシヨウも腹を括くりながら時間を作る為に一度だけ牽制射を行い最後のマガジンと入れ替えるとミリイがスリーカウントを数えた。

「CSD2! ゴーゴー!!」

「こなくそーっ!!」

ミリーの声に反応したシヨウがフットペダルを踏み込み陸ジムのバーニアを吹かすと、タンク中尉!とミリーはヘッドセットを掴みながらドムの動き出す音を拾った。

「ウイスキードッグからCSD7ヘスカート付きはCSD2を追ってポイントD03から06を移動中ですう!」

「CSD7了解した。第三小隊各機へシヨウの事は気にせず撃ち方始めえ!!」

ミリーからの指示に小隊長機で有るタンクとレティが搭乗するCSD7では無くCSD8と9がピンポイント砲撃が行われると、良いんですか隊長・?と操舵担当のレティからこの命令違反にジロつと睨まれたタンクは良いんだよ!とスコープを覗き込みながらニヤついた。

「マジで撃って来やがったっ!」

第三小隊のタンクが率いるガンタンク隊の砲撃を避けつつビルの上を跳んだシヨウの陸ジムが更に牽制でドムの居た場所に100ミリマシンガンを撃ちきると、見つけた!!とウエポンコンテナを隠して置いた場所にと到着した。

## 敵MS調査その8

「CSD2が補給ポイントに到着し現在装備の換装中ですう！」

都市部と言う入り組んだ地形での作戦の為に予め隠して置いたウエボンコンテナが功を奏したのかイエーガーが安堵する様にふう・・・と息を吐くと、安心するのはまだ早いですっ！とカスケード隊のメカニックで有るソファイーⅡホワイト伍長はモニターに映る第三小队から放たれた砲撃を軽々と避けるドムの移動速度に違和感を感じた・・・

「ちよつとミリイ・・・おかしいつてっ!?!情報部のデータよりスカート付きの動きが速いよっ!?!」

「ちよつ!?!冗談きついつてソファイー!!」

その機体データから砲撃ポイントを指定したミリイがソファイーからの指摘でドムが通過した速度を改めて音紋<sup>アクティブソナー</sup>センサーで確認すると明らかな誤差が判明した。

「嘘でしょこんなの当たる訳無いってえ?！」

焦った声を上げたミリイが誤った砲撃データを修正する為に素早くキーボードを叩き出すと、適当な情報をやがって!とイラついたイエーガーはヘッドセットを掴みながらシヨウ達を追撃中のアメリカ達に通信を繋いだ。

「CSD1へこちらウイスキードッグだ!まだ突破出来ないのか!!」

オペレーターで有るミリイと入れ替わりハスキーなイエーガーの声が自分のヘッドセット突然聞こ得て来ると、えっイエーガー!?とアメリカから驚いた声が上がった。

「情報部のバカ共の所為で忙しいミリイの代わりに今から俺が指揮を執る。それで現在の状況はCSD1?」

「何だか良く分かりませんが、現在CSD3と共にCSD2の援護に向かっていたんですが・・・現在は先程逃がした敵MS2機と交戦中です。」

アメリカ機からの芳しくない報告にチツと舌打ちしたイエーガーは更に通信チャンネルをタンク率いる第三小队にも繋いだ。

「おいタンク聞こえてるな・・・」

「ああ・・・まあな。それで俺にどうして欲しんだイエーガー?」

長年の付き合いからかイエーガーが何を言うか分かっていた様にタンクがニヤニヤ

しながら聞くとイエーガーもフツ．．．と鼻で笑った。

「先ずCSD8と9にアメリカ達と交戦中の敵MSへの砲撃支援をして欲しい．．．」

「ちよつとイエーガー！シヨウを見捨てる気ですか!？」

「イエーガーさんの事を見損ないましたっ!!」

すかさずヘッドセットと直から聞こえるアメリカとソフィーの抗議にちよつと待て！とイエーガーがストップを掛けると、よく聞けよ．．．？と続けるイエーガーにこの通信を聞いている全員がごくつと息を飲んだ．．．

「どつちにしてもスカート付きの足が止まらないんならアメリカ達の方をクリアにして援護に向かわせた方が得策だ．．．それにシヨウだつてすぐにやられる様なタマじゃ無いつてお前達も知つてるだろう?」

「要はシヨウの悪運に賭けるつて事ですねイエーガー?」

シヨウの腕をよつぽど信じてるのか．．．イエーガーの強気な指示にアメリカも呆れながら頷くと、俺はどうするんだ?とCSD7のタンクから首を傾げられたイエーガーがこんな状況にも関わらずニヤつと意地悪そうな笑みを浮かべた。



「ミリイがスカート付きの速度解析を行っているからお前の出番はまだだぞ？」

「待て待てイエーガー・・・ひよっとして俺にスカート付きを仕留めろってか!？」

「ああ、お前なら出来るだろタンク？」

慌て出すタンクに向かってイエーガーがさも当然のことに首を少し傾げると、コイツ・・・!?!と声を上げたタンクはモニター越しに煽って来たイエーガーを睨んだので有った。

「おい！ガンタンクを前に出せレティ・・・絶対に当ててやる!!」

「はいはい・・・」

イエーガーに対するライバル心から操舵手のレティはいきり立つタンクに対し渋々ガンタンクを前進させた・・・

(まあ・・・何だかんだ言っただけウチの隊長ってバカに出来ないんだよね・・・?)

そう思ったレティの声と同時にイエーガーから砲撃開始っ！と指示が上がると、ドンっ！と後方の左右に付いていたCSD8と9のガンタンクからアメリカ達の支援の為に砲撃が始まった。

「行きますよCSD3！」

「おうよー！」

膠着しビルの物陰に隠れていたアメリカがチャーリー機と共に第三小队からの支援砲撃に感謝しながら飛び出すと、援護しろアメリカ！と叫んだチャーリーの陸ジムが100ミリマシンガンを連射しながら距離を詰めるとオラア!!と今回から運用試験として装備されたツインビームスピアを振りかぶった・・・

「舐めるな連邦めええーっ!!」

背後に着弾する砲撃に後退も出来なくなったジオン兵が接近して来るチャーリーの陸ジムに対しMS-06Jザクの持つ120ミリマシンガンを連射を連射した。

そして、ガガガツ！と鳴るザクが持つ120ミリマシンガンを吹かしたバーニアで左右に避けたチャーリーの陸ジムが懐に踏み込んだザクを一刀両断すると、これでお終いですね？とアメリカもビームライフルで最後の一機を撃ち抜いた・・・

## 敵MS調査その9

「<sup>アメリカ</sup>CS D1が敵機を撃破をし、CS D3《チャーリー》と共にドムの追撃を再開したか：まだ機体データの修正は掛かるのかミリイ!？」

「もう少しですう!!」

モニターを見ながら焦るイエーガーの声に素早いキータッチで情報部の間違っていたドムの機体データを修正していたミリイはそう答えると同時にカタカタと叩いたキーボードのエンターを素早く弾くとすぐにヘッドセットを掴んだ。

「<sup>タンの</sup>CS D7へ、スカート付きの機体データ修正を完了しましたあ!ポイントE06から05への支援砲撃を!!」

「CS D7了解……!」

ミリイからの指示にタンクはそう返事を返しながら乗機で有るRX-75ガンタンクの両肩部に装備された120ミリ低反動砲をリンクしたホバートラックのマップデータを元に照準を合わせトリガーを絞った。

「1番2番ファイヤー……っ!」

「当たれえーっ!!」

発射を伝えるタンクに操縦担当のレティも仲間の危機にと一緒に叫びながらモニターで弾着の確認を始める・・・

「弾着まで約10秒・・・321・・・ナウ!」

「当たったのか・・・?」

「いえ・・・こちらのモニター上には奴の反応がまだ残ってます!」

「何だと・・・!?おいウイスキードッグ!どうなってるんだ状況は!!」

レティーからの報告ここからではドムの撃破が直接確認出来ないタンクが苛立ちながら指揮車両で有るホバートトラックに通信を繋ぐと、コッチも確認中なんですよお!!と焦った様子のミリイから返事が返って来たので有る。

「絶対に直撃した筈なんですってえ!けどまだ機体の反応が残ってるって・・・一体!」

「何だか分からんが・・・とにかく—CSD2は無事なのか?」

「はい・・・今の砲撃で若干通信が悪く返事は有りませんが、機体反応は有り無事なのは確認してますう・・・」

「分かった・・・とにかく俺達は待機しておく、何か有ったらすぐに言えよ?」

コクピットで首を傾げたタンクに了解ですう・・・とミリイが不安そうな声で通信を切ると、大丈夫ですかねシヨウの奴・・・?と心配そうにするレティに向かってタンク

もさあな・・・と腕を組みながらシヨウの身を案じたので有った・・・

くくく

「おいおい冗談だろ・・・アレを避けるのかよアイツは・・・!?!」

タンクからの攻撃を察知したままはまだ良いが・・・あのドムは咄嗟に直撃弾で有ったガンタンクの砲撃をジャイアントバズを近くの廃ビルに撃ち込み直撃を避けると同時に更に撃ち込まれた砲撃もそのホバー移動による機動性を生かして機体をヒラリと回転させながら見事に逃げ切ったので有った・・・

そして、その機動性の高瀬にコクピットで驚愕していたシヨウがその様子を少し離れたビルの物陰から一部始終見ていると・・・コツチの視線に気づいたのか、メインモニターに映るドムのモノアイがブンと光り目が合ってしまったシヨウは慌てて先程装備したロケットランチャーを撃った。

「こちらCSD2！ウイスキードッグへ増援はまだかっ!?!」

当てようと思った訳では無く時間を稼ぐ為に撃ったシヨウの陸ジムの攻撃は照準も適当だった事も有つて勿論外れ・・・そのままフツとペダルを踏み込みバーニアを吹かしたシヨウは救援を求めるが先程からザーつとノイズ混じりでミリイは勿論アメリカ

達からも返事が無い・・・

「チツ！こなくそー！っ!!」

さつき補給した事も有りシヨウの陸ジムは追つて来ながらジャイアントバズを撃つて来るドムに左右に持ったロケットランチャーと100ミリマシンガンで応戦すると、流石に火力の差かドムが慌ててすぐ傍の角に身を隠すのを見てシヨウも陸ジムを地面に着地させながら対面のビルへと身を隠した。

(今は良いけど・・・このままじゃ罅が明かないな・・・)

そう考えながらシヨウが何か良い手は無いかと思案していると・・・ピッーと突然通信アラームが鳴り出した。

「CSD1!シヨウ!!聞こえますか!?!」

「アメリカか・・・?今どこだ!?!」

そう返事を返すシヨウにやっと思いつきましたよ・・・とアメリカからの安堵する声にシヨウもホッとする。

「すぐ近くです・・・ポイントE06付近・・・」

そう言いかけたアメリカの声と同時にビーっと響くドムからのロックオンアラートにシヨウはクソつたれ!!と叫びながら接近して来るドムに舌打ちした・・・

「チッ!何する気だコイツっ!!」

迂闊にも距離を詰めて来るドムに対しシヨウが若干戸惑いつつ陸ジムの100ミリマシンガンで牽制するがあまりに速いドムの間合いの詰め方にあつという間に懐に入られたシヨウはメインモニターに映るドムのヒートサーベルにゾクツと悪寒を感じた・・・

(ごめんリン・・・僕死ぬかも・・・)

そう思い自分の恋人に分かれた告げたシヨウはドムの斬撃を避けきれないと目を瞑ると、やらせるかよーっ!!と聞こえる相棒で有るチャーリーの声にハツとしたシヨウがチャーリーの陸ジムから撃たれた100ミリマシンガンでの援護でドムが慌てて離脱するのを確認するとその方向に今度はアメリカ機が突っ込んで来た。

「デヤアツーーー!!!」

ビームサーベルを逆手に勢い良く斬りかかって来るアメリカの陸ジムに面喰ったのかドムは驚いた様子ながらも何故か機体正面をこちらを向けて来るのでアメリカはムウっ?と首を傾げた刹那・・・突如ドムの胸がピカッと光りメインモニターがホワイ

トアウトとなる。

「モニターが焼き付いたっ!？」

アメリカがそんな焦った声を出しながらもこのままじやヤバイですっ!と本能的に身を守ったのか咄嗟に出した左手のシールドに強い衝撃を受けながら機体ごと地面へと叩きつけられた・・・



## 敵MS調査その10

「アメリカアアアアアアアアアア!!」

「チャーリー大丈夫ですって!?! 私はまだちゃんと生きてます……」

死んだのかと思いいチャーリーからの悲痛な声にアメリカが強烈な衝撃によって頭を振りながら答えていると、先輩怪我はつ!?!と随分と心配を掛けたのかコールサインも忘れ焦ったミリーの通信にアメリカは顔を赤くしながら少し困ったをする。

「身体は何とも無いですが機体にダメージが……メインカメラと左腕が使用不可です!?!」  
モニター脇に表示攫っている機体の負荷を表すインジケーターに陸ジムの頭部と左腕部が肩から真っ赤になってるのを確認したアメリカにとにかく無事で良かったですよ……とミリーからホッと安堵した声が返って来るがアメリカは全然良く有りませんよ!?!と怒鳴り出す。

「メインカメラがやられて外の様子が分かりません! そっちで復旧は出来ないんですか

ソフィー!!」

「無茶言わないで下さいよアメリカさんっ?! 恐らくその子はスカート付きから低出力のビーム攻撃を受けた様でメインカメラを交換しないと無理ですっ!!」

まだジオン軍は連邦軍に比べてビーム兵器の開発に遅れていると聞いていたソフィーがそうアメリカに怒鳴り返しながらその周囲のミノフスキー粒子を確認していると、第二小隊はまだかつ!!とイエーガーからチッ!と舌打ちが上がる。

「CCCD4急いでえ!」

「後60秒だっ!!」

自分の焦った声にジャックがアメリカを救おうと必死に追いかけているのをモニターで確認していたミリィーもハラハラしていると、こちらCSD2!!とシヨウウから通信が入って来る。

「僕がカバーするんでアメリカ機の回収をお願いします．．．」

「ダメだ! 中隊長として部下をこれ以上危機機にさらす訳には出来ん．．．」

「ですがアメリカは僕の支援に来たんですよ! それを見捨てると言うんですか?」

「．．．それは分かっている。だがもうすぐ第二小隊が到着から待つんだシヨウウ!」

航空隊に居た時もそうだが．．．いつも命令違反をするのは決まってこの二人で有り

イエーガーは頭をかかえ出す・・・

「すみませんイエーガーさん・・・相棒の為にこれ以上は待てません！」

「戻ったら始末書でも何でも書くんでっ!!」

そう言いながらアメリカ機を救おうとドムを挟み撃ちをする様に突出するシヨウトチャーリーの陸ジムがモニター表示されるとミリイはあの・・・？首を少し傾げた。

「良いからアイツ等の好きにやらせろ!!」

「了解ですう♪」

そう言いながら頭をガシガシと掻き出すイエーガーに二つと笑みを浮かべたミリイが指示を飛ばしだすと、何だ一体・・・？と今まで膠着していたドムのパイロットはいつまで経って助けに来ないアメリカの陸ジムに首を傾げていた・・・

(コイツを囷にして離脱してやろうと思ったが・・・流星に連邦軍も賢い様だな・・・)

友軍機の反応が消えた事を知ったドムのパイロットが冷静に判断しながら残り少ないジャイアントバズをアメリカの陸ジムに向けていると・・・

「アメリカアーーーーっ!!」

そう叫ぶショウの陸ジムにドムのパイロットはククつと笑った・・・

「迂闊なんだよ連邦めえーーーーっ!!」

「舐めんなあーーーーっ!」

アメリカ機を守ろうと咄嗟に飛んだショウの陸ジムがドムの撃ったジャイアントバズを地上でロールさせながら避けると、オラア!!と叫んだチャーリーの陸ジムがツインビームスピアでドムの背中を切り裂いた・・・

「いい加減くたばりやがれえ!!」

そう叫ぶチャーリー機にクソつと叫んだドムのパイロットは最後にアメリカの陸ジムだけでも!とジャイアントバズを向けたので有ったが・・・

「舐めんなじや無いですっ!!」

と叫んだアメリカが陸ジムの上部ハッチを吹き飛ばしながら逆手に持ったビーム

サーベルでドムのジャイアントバズを斬り上げると、でやああーっ!!と声を上げたショウの陸ジムが横薙ぎに一闪・・・ドムの胴体をビームサーベルで叩き斬ると・・・風通しの良くなったコクピットで安堵したアメリカはフウ・・・と息吐きながらウイスキードッグへと通信を繋いだ。

「CSD1よりウイスキードッグへ・・・敵新型MSの撃破を確認しました。」

「ウイスキードッグから各CSDユニットへ全ての目標の沈黙を確認・・・我々の勝利ですよお先輩!!」

そんな嬉しそうな声を上げたミリィからガッツポーズが上がったのは良いが・・・  
(あれでは情報部も敵MSの情報は得られないでしょうね・・・)

完全に撃破してしまったドムの残骸に苦笑いを浮かべたアメリカ達カスケード隊が  
トリントン基地に戻ったのはそれから更に数日後のことであった・・・

## 因縁その1

「やれやれ．．．しかし今回はひどい目に逢いました。」

「ホントですっ！特にアメリカさんが搭乗していた陸ジムの損傷はかなり酷く修理には少し時間が掛かりますからねっ!!」

「うにやっ!？」

ウォルフのミデアから運び出される陸ジムを横目にメカニツクのソフイーから叱られていたアメリカが変な声を上げていると、俺の機体が．．．と本来の正規パイロットで有るイーガーの落ち込む姿にハハハ．．．とアメリカは苦笑いを浮かべた。

ドムとの戦いで頭部のメインカメラはひび割れ左腕に関してはジャイアントバズの直撃でシールドごと肘が吹き飛んでいる姿に実際良く生きていたな．．．とアメリカ以外のカスケード隊全員は彼女の運の強さに強さに驚きつつハンガーへと運ばれて行く陸ジムを見送っていた。

「んっ何だアレ．．．どこの部隊だ？」

チャャリーがそんな中で指を差して来るのでシヨウも知らないな．．．と通常のみデア

アのととは違って濃いダーク系の塗装に赤い蜘蛛の部隊を掲げている機体に首を捻った。

「二人共行きませよ!」

「ああ今行くよ……」

報告の事も有り本部へと向かう為、アメリカがホバートラックの上部ハッチから急かして来るのでショウとチャーリーはあのミデアが気になりつつも慌てて乗り込むので有った……

~~~~~

「それでは私とイエーガーで指令の所に作戦の報告に行きますので、取り合えずここで一旦解散します。」

「そして今晚は全員の生還を祝してリンのCASCADで宴会を執り行うつもりだから来れる奴は来いよ?」

アメリカの指示に次いでイエーガーからの提案に全員からワアツ!!と歓声が上がると、頼むぞショウ?と二つと笑みを浮かべるイエーガーにコレは大変だな……?とショウは急な展開に苦笑いを浮かべた。

「因みに今日は俺の機体を壊した罰でアメリカの奢りだから存分に飲めよお前らーっ!!」

「はいっ?!?!ちよつとそんな話は聞いてませんよイエーガーっ!!」

「それでは解散だ。」

アメリカの抗議の声を無視したイエーガーの号令によりシヨウを始めカスケード隊全員からニヤニヤしながら了解っ!と敬礼されると、嘘ですよね・・・とガクつと項垂れるアメリカをイエーガーが本部ビルの上階に有る指令の執務室へと引きづって行くのを見ていた第二小隊長で有るジャックは苦笑いを浮かべる。

「えつと・・・今晚の予定は決まったとしてだ。取り合えず昼飯でも食いに食堂にでも行くか?」

「そうですね・・・」

残ったメンバーの中ではイエーガーとアメリカの次に慕われているジャックの提案に今回の作戦ではアメリカの代わりにメインオペレーターとして活躍したミリイも呆れた顔で続いて歩き出すとチャーリーは首を傾げながらニヤニヤと隣を歩くシヨウを見る。

「リンに会うのが久しぶりだからっていきなり襲うんじゃねえぞ?」

「五月蠅いっ?!?!お前こそアメリカにあんな事言ったんだから大切にしていられよチャー

リー？」

この手の話で珍しく揚げ足を取ったシヨウに、わっ……分かつてるつうーのっ!?!とチャーリー顔を真つ赤にするのを見たシヨウがククつと楽しそうに笑っていると……食堂の有る向こうから歩いて来る女性士官に気が付いた……

「あの子誰だろう……知ってるチャーリー？」

「いいや……つて言うかあんな綺麗な子を俺が知らなかったら変じゃね？」

「うん。確かにそうだけど……そんな事アメリカの前では絶対言わない様にね……」

トリントン基地でもプレイボーイを自称する女癖の悪いチャーリーにも分からない眼鏡を掛けた清楚系の女性士官が黒く長い髪を靡かせながら颯爽とこちらの横を通り抜けようとする、シヨウ達の声が聞こえていたのか……確かに綺麗な子だな……と呟くジャックにムツ！と嫉妬したらしいミリイが彼の尻をギユツとつねっていると、あちよつと良いかな……えつと少尉？とこの基地でチャーリーと一・二を争うこちらもプレイボーイと噂高い第三小隊長で有るタンクは何でしょう中尉……？と首を傾げる女性士官の前に立った。

「俺はカスケード隊第三小隊長のタンクIIビンセントだ。見た所……新任と見えるが、良かったら私が基地内を案内して上げようか？」

「へえ……貴方達が……？」

タンクの自己紹介にキョトンとした彼女が全員を見渡すのを見て何か違和感を感じたシヨウはんっ・・・?と首を少し傾げていると、オイタはそこまでですよ隊長?とタンクの部下で有るレティがタンクの腕を捻り上げた。

「イテテテっ!!おい放せレティ!!俺は上官だぞ!!」

「五月蠅いですよ!ゴメンね少尉さん。この人はアンタみたいな綺麗な子を見ると欲情する病気なのよ?」

「ちよつと待てっ!!俺はただ基地内を案内しようと・・・ギヤアアア!!」

まだそんな事を言うタンクにレティが更に曲げてはいけない方向に腕を向けていると、もう良いですから!!と慌てて両手を振り出した黒髪の女性少尉は腕に巻いた時計の時間にいけないっ!と声をあげた。

「申し訳有りません!すみませんがちよつと急いでますので、また後程!!」

そう言いながら彼女が腕に持った書類やファイルを両手に抱いてバタバタと駆け出して行くと、結局何だったんだ・・・?と呟くシヨウにしまったあーっ!!とやっつとレティからの拘束に解放されたタンクから悲痛な声が上がった・・・

「一体どうしたんですか・・・?」

「あんな綺麗な子の名前も連絡先も聞き忘れるとはこの俺一生の不覚・・・」

「一生後悔してたらどうです。」

そうレテイが冷たくツツコむの見たシヨウ達カスケード隊の面々はハア・・・と溜息をつくくと、ガクつと項垂れるタンクを一人残し食堂へと向かうので有った。

因縁その2

「あーあ．．．これで今月の私のお給料が吹っ飛びましたじゃなですか!？」

「何言ってるんだ。こんなご時世に何に使うんなら、人から喜ばれる様に使われた方が世のため人の為だろうが?」

「その民間人を守る為に私のグロックのマガジンを買おうとしてたんですけどね．．．」

「MSの存在が物を言う世界にハンドガンじゃ何も出来んと俺は思うがな．．．?」

そう言いながら首を傾げるイエーガーにアメリカも分かってますよ．．．と答えながらチーンと鳴るエレベーターの音に軍服の襟を止めながらイエーガーの後に続いて降りた。

「カスケード隊のバウスネルとウォーカーです。先日の敵新型機の報告に上がりましたのですが．．．」

ここトリントン基地指令で有るバリサムの執務室のまでコンコンとノックするイエーガーにちよつと待て．．．!と妙に慌て出すロイ||バリサム大佐の声にアメリカはイエーガーと首を傾げ合う。

「都合が悪いのならまた明日にしますが……」

「そうだな……後日こちらからまた報告を聞こうと思うので、悪いがまた今度にしてくれ……」

そう説明しながら部屋にも入れようとしないバリサムの様子にはあ……?と答えたアメリカ達が一旦戻ろうかと元来た道を振り返ろうとした瞬間、まあちよつと待て……?と尋ねる女性の声と同時にその扉が開いた。

「ちよつとお茶をしていかないか二人共?」

「へッ!」

そう言いながらバリサムの部屋から突然声を掛けて来るスーツ姿の女性に慌てたアメリカは困惑気味に変な声を上げたので有った……

くくく

「まあゆつくりしろ。と言つてもここは私のオフィスじゃないかな?」

「はあ……?」

基地指令のバリサムよりも力が有るのか……アメリカは我が物顔でソファアへと促すスーツ姿の女性に違和感を覚えながらイエーガーと共に対面に座った。

「あの……バリサム指令？これは一体……!?」

「いや……話せば長くなるんだが……」

そう困惑するバリサムに私から説明しよう？とニコつとするスーツ姿の女性と隣に座って居た女性士官が一緒に立ち上がりながら先ずはと自己紹介を始めた。

「私はジャブロー本部から来た情報部のアリスⅡミラー少佐だ。」

「そして、私も同じくジャブロー本部所属MS教導部隊アグレッツの一つでブラックウイドウ隊長をしてるヒルデガードⅡウインチエスカ大尉よ。気軽にヒルダって呼んでね？」

堅物ばかりのジャブローから来た割りには意外とフランクな二人に対し、少し驚きです。と内心少し驚いたアメリカもイエーガーと共に自分の所属と名前を答えた。

「試験実験MS部隊カスケード隊のアメリカⅡアンⅡウォーカー軍曹です。」

「同じく部隊の中隊長をしておりますイエーガーⅡバウスネルン中尉で有ります。」

そう言った所でイエーガーからそれでどんなご用件でしょうか……？と伺う様になが上があると、おつとそうだったな？とミラー少佐がニヤニヤとアメリカを見る。

「君達もバリサム指令から聞いたと思うが……先日の作戦行動中にウォーカー軍曹が独

断で敵と繋がってるらしく補給基地へ攻撃指示を出した事についての内務調査へと来たんだ。」

「やつぱりですか……ですがあの件に関しては、はつきりと逮捕者も出て白黒が付いたはずでは？」

上官として庇うイエーガーの強気な言葉に言う時は言いますね……？とアメリカが内心感動していると、まあその通りだな？とあつさりとは折れるミラーにへッ!?とアメリカとイエーガーから素つ頓狂な声が上がったので有る。

「それは対面的な事案で有って……実際にはもつと面倒な事でここに私は来ている。」

「面倒な事……とは一体なんですかミラー少佐……？」

てつきり自分を査問しに来たと思っていたアメリカがミラーからの説明に困惑していると、すみません！遅れました……と急にノックしながら聞こえて来た女性の声にビックリしたアメリカはえっ!?!と驚く声を上げる。

「おい、どうかしたのかアメリカ……」

「いえ．．．ちよつと知り合いの声に似ていたので．．．」

「知り合いだと．．．？」

そう言いながら首を傾げるイエーガーの向こうで遅刻だぞ！とミラーが入って来た自分の部下らしい女性士官を叱り出すとアメリカはバチつとその子と目が合った．．．（嘘でしょ．．．なんであの子がここに居るんですっ!?)

自分の感が当たってしまいギョツとするアメリカに先程シヨウ達とニアミスした眼鏡を掛けた少尉が綺麗な黒髪を流しながらピシつと敬礼をした。

「自分は情報部所属のケイⅡキタムラ少尉です。今回の作戦ではミラー少佐の補佐として頑張りますので宜しくお願い致します。」

アジア人特有なのかアメリカはそう言いながら深々と頭を下げる彼女にちよつとケイツ!?!と詰めよった。

「何でここにっ!?!?っていうか作戦ってなんなんですかケイ!!」

「立場を弁えなさい軍曹．．．上官ですよ私は？」

「クツ．．．分かりましたよ!」

そう冷たい視線を送って来る親友にイラつきながらアメリカが離れると、それでは作

戦の説明

をしようか？と重たくなった空気を交える様に教導隊のヒルダ中尉からパンつと手を叩かれたので有った。

因縁その3

アメリカが士官学校時代の友人で有る情報部所属のケイ・キタムラと衝撃的な再開を果たしている丁度頃・・・昼食を食べ終えたシヨウ達は時間を潰しにハンガーへと向かっていた。

「しっかしその小さい身体の癖に良く食べるなソフィーは・・・？」

「本当ですねぇ・・・一体どこに栄養が言ってるのか不思議ですう・・・」

歩きながら驚くシヨウと羨ましそうに見て来るミリイのジーンと見て来る視線にソフィーはちよつとっ!?と低い身長に比例して大きな胸を恥ずかしそうに手で隠した。

「ミリイったら、まったくもうっ・・・！」

「ゴメンゴメン〜って言うかぁ・・・ハンガーに行つて何をされるのお？」

「腹ごなしにあの子達陸ジムの修理箇所の部品出しと今回の戦闘データの抽出をしよう
と思つてつ」

「ホントにMSが好きなんだねえソフイーはあ?」

ミリイが折角の半日休暇だと言うのに仕事をすると言うソフイーのMSに対する愛を感じながら少し呆れていると、まあどうせ暇だし良いんじゃない?とシヨウはククつと笑いだした。

「まあシヨウが行くんなら俺も行くけどよ・・・お二人はどうするんで?」

そう言いながらチャーリーが頭だけ振り返すと、そうだな・・・とジャックとタンク
の両隊長は思案顔を浮かべる。

「まあ、行きたい奴だけで良いんじゃないか?」

「だな。って事で第三小隊はここで解散してまた晩にリンのCASCAD Eに集合だ。今日はアメリカの奢りらしいから遅れんなよ。良いな！」

「第二小隊もだぞ。」

ジャックとタンク両隊長の指示に了解！と敬礼した隊員達が自分の部屋に戻ったり別行動を取ったりする中で結局第二小隊のユウヤとレオンに第三小隊のレティが残りシヨウ達と行動を共にする事となった。

「お前もどっか行くと思ってたのに意外だな・・・？」

「今回の遠征じゃ全然役に立たなかつたから・・・せめて整備の手伝いでもしようと思つてな。」

ドムを仕留めきらなかつた事を悔やんでいるらしいタンクにそんな事有りませんっ

てえ!?!とオペレーターのミリイがムウと悔しそうな顔をしながら話に割り込んで来た。

「アレは私のミスです。今度は絶対に当てる様に誘導しますから期待してて下さいよタンク隊長お!!」

「へいへい・・・今度は宜しく頼むわ?」

「何ですかあそのヤル気の無い返事はあ!!」

「五月蠅え奴だな・・・お前の嫁をどうにかしろよジャック!」

そう言いながら自分の耳を塞ぎだすタンクにそれは今関係無いでしょう!?!と顔を赤くしたミリイが怒り出すのでまあまあ・・・とジャックから苦笑いが浮かび出す・・・

(まあ・・・アレはスカート付きのパイロットの練度が高かった所為だけどね・・・)

背後で繰り広げられる3人の様子に内心そうツツコんでいるシヨウに賑やかですつ

♪とソフィーもニコニコしていると目的地で有るハンガーが見えて来たのだが……ソフィーはアレっ?と何か違和感を感じ首を傾げたので有る。

「何でウチのMSが外に出されてるんだらうっ……?」

「ホントだ……」

アメリカがぶっ壊したCSDIを始めに第三小隊のガンタンクの三番機で有るCSD9までズラツとハンガーの外に並ぶ様を見てショウも不思議そうにしていると、おい見ろよショウ!!とハンガーの中を指差して来るチャーリー達にショウとソフィーも一緒に中を覗くとハンガー内にはぎっしりと詰められたMSで一杯で有ったのだ……

「何だこの数は……全部ジムか!？」

「えっええ……確かにそうなんですけどっ!手前の三機だけ凄いですよショウさんっ!!」

そう興奮しながら指を差すソフィーにショウからへっ?と変な声が上がると、どれだ

どれだ?とチャーリー達も集まって来た。

「一番手前が軽量化され出力強化されたRGM-79Lジムライトアーマーで次が中距離支援機のRGC-80ジムキャノン・・・そして最後がこれらの機体の母体で有るRGM-79ジムなんですが・・・私の知っている機体と少し形状が違うんですね・・・?」

「へえ・・・良く気付いたな嬢ちゃん?」

そう説明しながらんくつ?と腕を組むソフィーにパチパチと手を叩きながら見慣れない隊員が三人程近寄って来ると、アンタ達誰・・・?とシヨウが警戒する様にジッと睨むとおいおい・・・とリーダーっぽい男性士官から苦笑いが浮かんだ。

「そんな顔すんなって・・・俺達は教導アグレッサー部隊だ。」

「えっ・・・何で教導隊がここに!？」

「俺が知るかよ・・・それよりも嬢ちゃん。アンタが言った通り俺のジムはどこぞのニュータイプ部隊とか言われるMSパイロットが使っているガンダムとか言うMSをフィードバックして強化している指揮官用だ。どうだ凄いだろ？」

「あのガンダムのですかっ!？」

20代後半か人懐こい笑顔をする教導隊のリーダーにソフィーが懐くのでシヨウもすぐに警戒を解くと、シヨウ⇨カノウです。と自分の右手を差し出した。

「おう知ってるぞ。表に並べてある陸ジムのパイロットだな・・・俺は教導隊ブラック⇨ウイドウの小隊長でイワン⇨アレンスキー少尉だ。そしてこの不愛想なのが2番機のリー⇨フェイ少尉でコツチの真面目そうなのが3番機のジャン⇨ノベル准尉だ！」

「誰が不愛想だこのバカが・・・」

「アハハ・・・宜しくお願いしますね。」

向こうもコッチに負けず劣らず個性的らしくシヨウが苦笑いを浮かべていると、あのお・・・？と何か違和感を感じたのかミリイから首が傾げられた。

「何で私達がカスケード隊・・・だって知ってるんですかあ・・・？」

「ああ・・・多分その事はウチのボスがソッチの指揮官と話している頃だと思うがな・・・」

そう言いながらイワンが意味ありげにニヤッと笑みを浮かべるのでそれは一体？とミリイはシヨウ達と

一緒に不思議そうに顔を首を傾げ合うので有った。

因縁その4

「それで……本社ジャパンローでも特殊な部署で有る情報部と教導隊が一体何用得こんな所までに来てたのかお聞きしても……？」

あまりに妙な組み合わせとしか思えない二人組……ミラーとウインチエスカの二人にイエーガーが不審そうに尋ねだすと、確かにとその隣でアメリカは何で教導隊が居るんでしょう……？と内心不思議そうに思いながら首を少し傾げながら二人の返事を待っていたのだが、実はな……？と予想外にバリサムが話を切り出した。

「本社からお達しでな……この基地に新たなMS部隊が新設される事となつて、教導隊はその教練の為に来たんだが……」

「ちよつと待つて下さい。先任の私達が居るのにも関わらず部隊の増設とは……しかもエリート部隊の教導隊まで付いて来るなんて私達にも納得のいく説明をしていただけるんでしょねバリサム指令！」

自分が言い終える前そう捲し立てて来るアメリカに向かつておいウオーカー・・・と困った顔を浮かべたバリサムはコホンと咳払いしながらイエーガーを見て彼女を諷める様に目で指示を出すので有った・・・

「ちよつと放しなさいイエーガー!」

「良いから大人しく話を聞けつて・・・」

立ち上がったアメリカの肩を掴み座らせたイエーガーから続きをお願いします・・・とこちらも内心面白く無いのかジツと睨まれたバリサムはハア・・・と溜息をつくど、デスクに置いていたパイプに火を着けながらそんな顔をするな・・・と自分自身も面白くない顔を全員に向けた。

「大体がだ・・・私は部隊の増設はともかくとして、この突拍子も無い命令を出して来た奴が気に入くわんのだよ・・・」

「一体誰なんですバリサム指令・・・そんな妙な事を言う高官と言うのは?」

普段は温厚なバリサムの様子に顔を見合せたアメリカとイエーガーが不思議そうに首を傾げていると、ちよつとモニターをお借りします。と今まで隅で待機していたケイ||キタムラ少尉がバリサムの同意を得て彼の執務室のプロジェクトと繋がったタブレットを操作すると、?せ型の顔をした連邦軍の佐官と数名の隊員達が映るの

を見たアメリカは何でこいつ等が?!と驚きを隠せずに声を上げたので有る・・・

「おいアメリカ・・・?」

「ソイツの名前はジャミトフⅡハイマン大佐・・・特殊任務部隊、通称特務の総督で地球至上主義のクソ野郎ですね・・・他の連中は知らない顔も居ますが特務の隊員です。」

「ああっ!?!ちよつと待てよ・・・それつてひよつとしてこいつ等がこのトリントン基地に配属されるつて言うんじゃないでしょうね!!」

険しい顔をするアメリカの過去を知つてか慌てたイエーガーがパイプ片手に苦笑いを浮かべているバリサムを見ると、何を言っているんだ・・・と今まで黙っていたミラーからニヤつと笑みが浮かぶ。

「フフツ・・・もう奴等はここに配属されているんだよ中尉?ケイ・・・ターゲットの顔を出せ。」

「・・・了解しました。」

「んっ・・・?」

アメリカは上官からの指示でタブレットを操作するケイの戸惑った顔を見て違和感を感じているとすぐにその意味が分かった・・・

「ウォーカー軍曹・・・コイツの事は良く知っているな?」

「ええ・・・まあ・・・」

曖昧に答えたアメリカだがそんな事は当たり前で有る・・・このモニターに映し出さ

れた男……デイヴィッド・リンズ中佐は特務時代に冤罪で自分を陥れた張本人なのだから……

「それで彼がどうかしたんですか……?」

「ああ……それなんだが……奴は新設されるMS部隊の中隊長となる。」

「へえ……って!?何でリンズがつ!!」

嫌いと言え思わず元上官をアメリカが呼び捨てにしてしまうと、コイツは良い!と面白そうにクククつと笑いだすミラーに部下で有るケイから少佐!と窘められた。

「いや……さっきのジャミトフ大佐に対するクソ野郎宣言といい、お前とは気が合いそうだなウオーカー軍曹……?」

「はあ……そうなんですかね……」

「ああ、私は……と言うより情報部は君も知つての通り機密性の高い任務で良く対立するから特務とは犬猿の仲なんだよ。」

そう説明しながら何かを思い出したのかミラーが懐から取った煙草に火を着けだすと、それは納得ですね……?とアメリカも当時の事を思い返しながら苦笑いを浮かべた。

「ところでミラー少佐……何故リンズがここへ?奴は特務の部隊長だった筈では……」
「ああそうだ。確かにそうなんだが……知ってるか?ここ最近設立して各地で展開して

いる試験部隊の存在を……」

「ええ、知ってるも……その草案者で有るジョン・コーウエン准将の推薦が有って私達のカスケード隊が結成されたので……ってまさか!？」

「そう……そのまさかだ。ジャミトフ大佐は派閥も違う上に上官で有るコーウエン准将がこれ以上一幅を利かせるのが気に入くないって訳だ。」

そこまで説明し終えたミラーが吸い終わった煙草を灰皿に押し付けると、でも何故ここへ?とイエーガーはピンポイントでトリントン基地を何故狙うのか不思議に思った。

「まるで誰かを狙っている様に感じますが……?」

「そうだな……まあ同じレピル派で有るバリサム大佐の失脚も考えられるが……」

「いや待つてくれ少佐……私はどこの派閥にも参加した覚えは無いぞ!」

「覚えは無くともこうして目を付けられたんです……諦めた方が良いですよ指令?」

そう答えながらげんなりとするバリサムにクスッとミラーが微笑んでいると、決まっています。とケイが真剣な顔でアメリカを見た。

「恐らく奴はアメ……ウオーカー軍曹を狙って来たんです。」

「何だと……!？」

急に変な事を言つて来るケイにイエーガーから驚く声が上がると、ちよつと待つて下さい!とアメリカがストップを掛けた。

「今アメリカって言いかけましたよね？」

「ちよつと・・・今は真面目な所だからさ・・・」

昔みたいに呼ぼうとしたケイに嬉しそうな顔をしたアメリカが首を少し傾げると、相変わらず緊張感の無い彼女にハア・・・とケイは溜息をつくので有った・・・

因縁その5

そして・・・アメリカとイエーガーが教導隊の隊長で有るウインチェスカ中尉と何やら思惑が有るらしい情報部のミラー少佐と話し合っている頃・・・シヨウ達カスケード隊はMSハンガーで出会ったその教導隊のMSパイロットで有るイワンIIアレンスキュー少尉をリーダーとするブラックウイドウ隊に何故か気に入られていた・・・

「成程な・・・姉御から話は聞いていたが、お前達カスケード隊って結構修羅場をくぐってんだな・・・」

「そうでしょう凄いでしょ♪私達カスケード隊はあの噂のスカート付きまで倒したんですよお？」

興味津々と言った顔で聞いて来るイワンにミリイがドヤ顔で今までのカスケード隊の戦績を説明すると、そいつはすげえな!?!とイワンから驚き出しながらも急にチツと面白く無さそうに舌打ちされるとシヨウはどうかしたのかよ・・・?とその様子に首を傾げた。

「おつと恵りい．．．姉御から命令された今回の任務がどうも嫌でな．．．」

「ふくん．．．それよか、さつきから良く聞くけど．．．その姉御つて誰の事だよイワン．．．？」

「ウチの指揮官だよ。美人で頭も切れるがどうも頑固な人でね．．．」

「それはウチのアメリアと良く似てるよ。なあチャーリー？」

はあ．．．と困った顔をするイワンに同調する様にシヨウがチャーリーに同意を求めのだが．．．アイツのはただの思い付きじゃね？と身も蓋もない答えに思わず納得しそうになったシヨウはアハハハ．．．と苦笑いを浮かべた。

「ふくん．．．ウチも個性的な部隊つて良く言われるけど．．．シヨウ達のカスケード隊も中々見みたいだな．．．？」

「何だよイワン．．．顔が怖いんだけど．．．？」

「そうか？ そうだとしたらお前達に俺が更に興味を持ったつて事だなシヨウ．．．」

そう答えながらニヤつと笑みを浮かべて来るイワンに何だよそれ．．．？とシヨウが首を傾げていると、何だいアンタ達は．．．！と叫ぶ第三小隊のレティ曹長の怒鳴り声にシヨウは何だよ一体!?!と慌てながらブラックウイドウ隊のジャンから話を聞いていた筈の彼女達の方を見た。

くくく

「こんなキャノン付きの支援機なんぞ要らないって言ったんだよ！」

「しかし三機スリーマンセル一体を基本とした連邦軍のNS戦闘教義の中でも支援機支援機の存在は……」

「うるせえんだよお！このクソガキがつ……」

そう叫んだ隊員達がジャンを蹴つ飛ばすと、良くもやったねえ!!とレティが怒り出すのでタンクは待て待て……?と慌ててその肩を掴んだ。

「先に手を出すと厄介だぞこいつ等……」

見た事も無い隊員達とその胸に有るワツペンに違和感を感じたタンクが一旦止めると、おいおい来ねえかよオツサン?と煽つて来る若い隊員にタンクはカチンと来た……「ちよつと隊長……私にやるな言いながらまさかキレて無いですよね!」

「許せレティ……俺はまだ20代だぞ!!」

そう叫びながら殴り掛かるタンクにハア……と溜息をついたレティはそう来なくつちやね!と笑みを浮かべながら伸びたジャンを静かに床へと置くとタンクになく掛かるうとした隊員の胸倉をつかんだ……

「この男女がつ……!?!」

「ハハっ!威勢が良いねえ……寝言は寝て良いなあ!!」

そう叫んだレティがオラア!!とその隊員を勢い良く背負い投げのを見てタンクはさっすがレティ!と余裕綽々の様子で対峙していた隊員の腕を捻った。

「この辺にして置いてやるから・・・ソイツの言う通り帰って寝たらどうだ?」

「ギャアーーっ!」

普段はふざけて居ながらもイザと言う時は出来る自分の隊長にいつもこうなら良いのに・・・とレティが少し呆れていると、おいお前ら・・・!と逆上した隊員の一人が気絶していたジャンの頬にナイフを突きつけていた・・・

「あの・・・そんな事したら懲罰房どころじゃ・・・?」

「うるせえ!!俺達は特務隊だ・・・てめえらみたいな一般兵とは違うんだよっ!!」

目を覚ましたジャンの声に反応してレティが特務隊と名乗った隊員の間をすかさず、そいつは知らなかったねえ!!とその隊員の顔面に思いつき右ストレートを撃ち込んだ所でレティ姉さん!とシヨウ達が追いついて来た・・・

「一体何が・・・?」

「いや・・・何だか特務・・・?って奴等がジャンにイチャモンつけて来たからさ・・・」

そう答えながらカスケード隊でもアメリカの次に格闘術が強く基地内でも武闘派で有るレティ曹長が足元に転がる隊員達に向かってポリポリと頭を搔いていると、あ

の・・・とその彼女から助けて貰ったジャンから尊敬の眼差しを向けられた。

「とてもお強いんですね!? 凄く素敵でした!」

「えっ? えつと・・・まあいつも鍛えてるしね・・・?」

「そうなんですね! じゃあ僕もここに居る間だけトレーニングをお願いしても・・・?」
「いや・・・別に良いけど・・・」

明らかに年下だが・・・人懐っこい笑顔でジャンに押しきられたレティが困った顔で了承すると、コイツにもようやく春が来たか・・・とタンクからククつと楽しそうに笑い声が上がり出すので、これはこれは・・・と彼らの親玉らしい少佐の階級章を付けた男がシヨウ達カスケード隊の前に出て来たので有った・・・

因縁その6

「誰だいアンタは……こいつ等を含めて、この基地で見た事無い顔だが？」

「これは申し遅れました。自分はジャブロー特殊任務部隊からここトリントン基地MS部隊の中隊長として着任しました。デイヴィッド・リンズ少佐と言います。今後ともお見知りおきを……？」

そう説明しながらニヤつとリンズが笑みを浮かべると、特務ね……？とタンクはさつきレティがノックアウトした隊員も同じ事を言っていた事を思い出した。

「何で特務のアンタ方がこんな田舎基地に、しかも先任で有る俺達に挨拶も無しに中隊長に就任とは……納得の行く説明はして貰えるんでリンズ少佐？」

「ハハっ……これはまた妙な事を言いますね……えつと？」

「カスケード隊第三小隊長のタンク・ヴィンセント中尉だ。」

「成程……ヴィンセント中尉？貴方が納得するもしないもこれはジャブロー本部からのちゃんとした命令書によつて決まった人事なのですよ。たかが現場指揮官程度が何を

言うのやら……」

ハア……とタンクに向かって溜めいき交じりにリンスはそれにしても……?と倒れ込んだ部下達の不甲斐なさにイラっとしたのか、情けないですね!と自分の近く居た隊員の一人を蹴っ飛ばしたので有る……

「こんな一般兵相手にやられるとはそれでも本当にスペースノイド共を狩る精鋭の一人なのですか?」

「申し訳有りませんでした……リンス隊長……」

腹を蹴られゴホゴホと咳き込む隊員に向かって呆れるリンスに何やってんだよお前?!とタンクから驚いた声が上がると、その辺にしとけよ teme . . . と怒りに満ちた顔のチャーリーを先頭に正義感の強いシヨウやジャックが部下に暴行を加えるリンスに向かって立ちふさがった。

「アメリカからは聞いたけど……特務って言うのはホントにクソ野郎の掃きだめみたいですね……?」

「ああ……おかげで俺も久しぶりにキレた様だぜ!!」

以前聞いたアメリカの昔話からコイツ……リンスが元凶か?と感じたシヨウとジャックが両手を構えると、おやおや……?とリンスは困った様に首を傾げた。

「相変わらず彼ウォーカーはあの容姿で男を誑かしている様ですね……だからスペースノイドと言うのはずる賢い……」

「うるせえな！ シャンプー少佐さんよ……あんなに初心っぽい奴がそんな器用な事が出来るかってっの!!」

自称トリントン基地のイチの男前で別名……女つたらしのチャーリーとも呼ばれてる金髪の少尉から出た真剣な顔にシヨウ達も何か言おうと思つたのだが……先程のチャーリーから出たリンスの呼び方にププツ……と必死になつて笑いをこらえていた。「ほう……そんなにあのスペースノイドの事を知っているのなら貴方も何だか怪しいですわね……!!」

「チツ!! 特務の隊長とか言ってる癖に沸点低すぎだろコイツっ……!!」

チャーリーにとつてはちよつと揶揄つたつもりだったのだが、自分の名前をワザと言い間違えた事にキレたリンスがチャーリーに向かつて殴り掛かると、何すんだテメエ!! と叫ぶジャックに続いてシヨウも後から湧いて来た特務隊の隊員達にレティと共に突っ込んで行くのでタンクはまったく……と頭を抱えだした。

「どいつもこいつもアメリカの事で血が上つてやがる……おいお前ら!! 今すぐ本部に行つてイエーガーとアメリカを呼んで来い!」

「了解ですう!!?」

「アワワ・・・取り合えずジープを持って来ますね私っ!？」

カスケード隊対元特務隊との大乱闘に怯えていたミリイとソファイが坦克の指示で慌ててハンガーから飛び出して行くと、この様子を伺っていたリー||フェイは小隊長のイワンにどっちに付くんだ?と首を傾げた。

「決まってるだろうが!俺達もカスケード隊に加勢するぞ・・・!!」

「まあ・・・分かつてはいたがな?」

そう答えながら突っ込んで行くイワンに淡々と答えたりー||フェイがそれに続くと、レテイさんの為なら!とジャンも気合い入れて二人の先輩と共に教導部隊ブラックウイドウ隊もカスケード隊の加勢に向かったので有った・・・

~~~~~

「このリンスと言う男は情報部でも以前から目を付けていた人物なんです・・・主な理由としては作戦時における過剰防衛と思える殺人にジオン派と思われる民間人の虐殺・・・更にはスペースノイドに対する異様な差別が設けられます。」

正にそんな出来事が実際に起きている中・・・そう説明する情報部のケイにアメリカから手が挙がった。



「それで？情報部は私達に何をして欲しいんです。」

「私が望むのはデイヴィッド・リンズ少佐の逮捕よ……」

そう答えながらケイがムスツとした顔を向けて来ると、はあ……？と何でと不思議そうな顔するアメリカに彼女の上官で有るミラーが分からないか？と楽しそうに部下で有るケイを見た。

「コイツはどうしても親友の事を助けたいと自分の進退を賭けてまで君の冤罪を晴らす為に動いたんだぞ。」

「ちよつとミラー少佐っ……!?!」

ケイが自分の内部事情を簡単にばらす上官に向かって抗議の声を上げていると、本当ですかケイ?!とアメリカは驚きながらもすぐにニコつと微笑んだ。

「別にアンタの為じゃ無いんだからね!?!」

「はいはい、分かっていますよ？ケイが自分の為になるから動いてくれたんですよね。」

「そうよ。だから私に感謝する事ね?」

「ありがとうケイ……大好きですよ♪」

相変わらずツンとデレが激しいケイにアメリカがニコつと微笑むと、アンタ変ったわね……？とケイは首を傾げた。

「そうですか……?」

「うん．．．私が知ってるアメリカは愛想笑いばかりだったら今の方が良いわよ。」

そう答えながら不思議そうするケイにそうですか．．．？とアメリカが自分の顔をグニャグニャ触り出すと、失礼しますう〜!?!とノックする音と聞こえて来るミリイの声にアメリカとイエーガーは顔を見合わせた．．．

## 因縁その7

「まったくどうなってやがるっ!?!何でウチとそのリンスとか言う元特務の少佐の部隊がハンガーで取っ組み合い何かやつてるんだ?」

「そんなの知りませんってえ!そもそも最初に絡んで来たのは向こうなんですよお!?!」

ジープの後部座席から叫んで来るイエーガーにジープをハンガーへと急がせているミリイから抗議の声が上がった。

「分かったからもつと飛ばせミリイー!!」

「了解ですうー!!」

「アワワツーー!!?」

仲間達のピンチに更に更にジープが加速しソフィーから悲鳴が上がる中、リンスの奴……とイエーガーの隣でアメリカは小さく呟いた……

「おいアメリカ……絶対に短気な真似をするんじゃないぞ！良いな……？」

「すみませんイエーガー……状況によつては約束できないかもしれませんが。」

バリサムの執務室に慌てて飛び込んで来たミリイとソフィーから聞いた乱闘騒ぎに宿敵とも言えるリンスが絡んでいる事を知ったアメリカはまったく目の笑って無い顔でニコッと笑みを浮かべた……

「アメリカ……お前……!？」

「ハンガーにこのまま突っ込みますよお!!!」

何かしでかしそうな雰囲気醸し出すアメリカをイエーガーが止めようとしたが：：タイムイングが良いのか悪いのかそう叫んだミリーの運転するジープがスライドしながら勢い良くハンガーの中へと到着したので有った。

「私はリンスを探します．．．」

「おい待てアメリカっ!!」

そのまま後部座席から飛び出して行く彼女を追い掛けようとすると、テメエらも仲間か!!とリンスの

特務隊に阻止されたイエーガーは背後に居るミリーとソフィーを守ろうとイラつとしながら両手で構えた．．．

「特務か何だか知らねえが．．．そこを退きやがれえーっ!!」

くくく

「オラオラー！たかが整備兵が逆らうんじゃねえよ・・・」

「おっと？コイツは妙な事を言いやがる・・・大して動かしても無い癖に大きな事言うんじゃねえ!!」

この乱闘騒ぎに不満を持ったホワイト大尉率いる整備班も反旗を翻したのが・・・その特務の隊員達に胸倉を掴まれたホワイトはピンチに陥っていた・・・

「おやつさーん!?!」

「騒ぐんじゃねえ・・・このジジイを殺すぞ?」

整備班の主任で有るシゲの悲痛な声に特務の隊員がニヤニヤしながら自分達の強さを見せつけていると、それは困りますねっ!!と死角から攻め込んだアメリカはゲシッ!と後頭部に向かって回し蹴りを繰り出すと大丈夫ですか?と声を掛けホワイトを救出した。

「俺は平気だが・・・カスケード隊の連中が・・・!」

そう叫びながら指を差すホワイトの先でリンス率いる特務隊からボコボコにされている仲間の姿を見たアメリカはリンスーっ!!と叫び駆け出した・・・

くくく

「威勢が良かったのは最初だけだったみたいですね・・・?」

アメリカから鍛えられたとは言え現役の特務隊と戦ったカスケード隊でかろうじて立って居るのは第三小隊長のタンクと女だてらに武闘派と名乗るレティ．．．そしてアメリカを侮辱され根性だけで立って居るチャーリーだけで有る。

「ゴメン．．．チャーリー．．．」

「後は任せるぜ．．．タンク．．．」

シヨウは勿論の事ジャック率いる第二小隊のユウヤとレオンまで倒れたカスケード隊にタンクはチツ．．．と舌打ちした．．．

「どうやら俺達の負けの様だな．．．」

この状況から見て勝ち目が無い事にタンクが悔しそうに呟くと、ちよつと待てよ．．．？と既に限界の癪にチャーリーはニヤつきながらリンスを指差した。



「聞いてるぜ．．．お前はアメリカに負けたってな？ひよつとしてその仕返し来たってか．．．」

「馬鹿野郎！それ以上ソイツを煽るな．．．!？」

そう焦った声を上げるタンクの心配を他所にチャーリーが首を傾げると、誰が負けただっ!!と叫んだリンスはその首を掴みながら壁に叩きつけると死ぬ．．．と腰から引き抜いた銃をチャーリーの頭に突きつけ付けると．．．止した方が良いですよ？とアメリカからもゴリつと銃を突き付けられたので有った。

「その声はウォーカーか．．．何故撃たない？」

「貴方の事は殺したいくらい憎んでますが．．．私の上官から止められていますので．．．」

「ほう．．．では、その甘さが命取りとなると知るが良い!!」

そう叫びながら振り返るリンスに向かって焦ったアメリカが自分の愛銃で有るグロック17Lを撃とうした瞬間にアメリカー!!?とケイが止めると、この乱闘騒ぎのを止めようとミラーはそこまで!と

スーツの下から引き抜いたUSPを上に向かってパンパンと威嚇の為に撃った．．

「私は情報部のミラー少佐だ．．．全員武器を置け!」

「これはミラー少佐．．．何故ここに?」

「リンス．．．お前の邪魔をしたくてな．．．」

そう言い合いながらバチバチと火花を飛ばしだすミラーとリンスにそこまで!!と教導隊のキステイス中尉から手が挙がった。

## 因縁その8

「全員武装を解除！この場は私……ジャブロー直轄教導部隊ブラックウイドウの隊長で有るヒルデガードゥウィンスカが一旦預からせて貰います。」

「ちよつと待ちたまえ……たかが教導隊の隊長如きの命令に私が……ここトリントン基地のMS部隊の中隊長で有る自分が従うと!？」

まるで何を言っているのか分からないと言った顔で両手を上げて来るリンスにヒルダは呆れた顔でハア……と深く溜息をついた……

「少佐……何か勘違いをしているようですが……今回、私達ブラックウイドウ隊に課された任務は貴方方元特務隊の評価試験なんですよよね……？」

そう説明しながら意味ありげにヒルダがクスッと微笑むとリンスからどう言う事だ中尉!!と焦った声が上がると同時にまだ分からないのか?とミラーは呆れた顔でリン

スを見た。

「実績も有る先任の部隊が居るんだ。入れ替えるんならそれ相応の訓練くらい有るに決まってるだろう……」

「ムツ……だが、しかし我々はジャミトフ大佐がジャブローの上層部に取った指示でここトリントン基地への着任が決まっている筈だ!!」

ミラーからの説明に納得がいかないのかリンスが怒声を上げるのを見たヒルダはああそう?と答えながら一枚の命令書を見せた。

「ちよつと前後したみたいで少佐達には悪いけど……こつちもコーウエン准将の指示で動いてるのよね?」

「それはそうだろうか? 貴様たち教導隊やこいつ等試験部隊は奴の直轄だからな……」

「違います。ここの署名を見て下さい……」

そう答えながら命令書の一番下を指差す承認者の名前にリンスは驚愕した・・・

「ヨハンⅡエイブラハムⅡレビル・・・大将だとオ・・・!？」

「そうです。貴方達のボスで有るジャミトフ大佐がどの様な高官達から許可を取ったのかは知りませんが・・・この方よりも上つて事は有りませんよねリンス少佐？」

そう答えながら首を傾げる彼女にクツ・・・とリンスは悔しそうな顔で情報部のアリスⅡミラーを見た。

「流石は情報部の蛇女だな・・・こんな手を用意して来るとは・・・」

「おいおい勘違いするなよリンス・・・？私はたまたま別件でこの内務調査に来ただけだからな？」

「まあ今回はそういう事にして置くがな．．．」

「ああ．．．私も貴様達がこの隊員に行った暴行に関しては見なかった事にしてやる。今回だけはな．．．」

そう答えながらミラーが銃をスーツの下に直していると、覚えてろ．．．と吐き捨てながら元特務の隊員達を引き連れてリンスから捨て台詞が聞こえたミラーは負け犬の遠吠えだな．．．?とククつと笑いながら煙草が入ったケースを取り出した。

「それにしてもウオーカー．．．私が居る前で銃を抜くとは良い度胸だな?」

「申し訳有りませんでした．．．私の大切な人を傷つけようとしたリンスにどうしても我慢できず．．．」

そう説明しながら顔を俯かせるアメリカにまあ良いがな？と煙草に火を着けだすミラーにアメリカからヘッ!?と素つとん狂な声がかかる。

「どう言う事ですか！私は上官に対し銃を抜いたんですよ？」

「その本人が見なかつた事にすると言つたんだぞ・・・私としては仕事が減つて助かる。」

アメリカは意外と適当なのか、そんな事を言いだすミラーにはあ・・・？と首を傾げていると、それにだ・・・と答えたミラーはニヤつと笑みを浮かべながらアメリカを含めたカスケード隊の全員を見た。

「これは私からの貸しだからなウォーカー・・・この意味が分かるな？」

「分かりたくは有りませんが・・・私も今回だけ・・・は協力します。」

「ああ、今回はな？それでは後の事はウインスカ中尉とケイに任せるぞ。」

少し不満そうに答えるアメリカにククつと楽しそうに笑ったミラーがハンガーから出て行くと、了解です。と答えたヒルダはケイと共にリー||フェイを除いて傷だらけのイワンとジャンを連れて自分達ブラックウイドウ隊が護衛して来たミデアの中身を紹介した・・・

「今回の騒動で困ってるかもってマチルダ・・・から特別に手配された補給パーツを沢山持って来たんだけど・・・?」

「あの・・・ひょつとして中尉はマチルダ中尉の・・・?」

「ええ、彼女は同期よ。因みにさっきの命令書も彼女に頼んで偽造して貰った偽物なんだけどね?」

急に出て来た補給部隊の女性士官の名前にピンと来たアメリカにヒルダからとんでも無い真実を聞いてしまったアメリカは冗談ですよね!?と驚くが・・・それがマジなん



だよね?と答えたヒルダは困った顔を浮かべた……

「今の連邦軍は泥沼化したジオンとの戦争を早期に終わらそうと行動している和平派のレビル將軍と徹底的にスペースノイドの集まりで有るジオンを潰そうとしている地球至上主義の高官で二分化してるのよ……」

「だから……私達にこれ以上リンス達みたいな連中にいい様な顔をさせない為に協力しろと言う事ですね?」

そう答えながらアメリカがムスっとすると、まあそう言う事ね……と答えるヒルダに向かって特務隊にボコボコされたチャーリーからそんなの決まってんだろ?とニヤッと笑みが浮かんだ。

「アメリカの事と言いだ俺達カスケード隊の事と言いだ……ここまで馬鹿にされたんだ。絶対に許さねえかな……」

「僕も同意見かな．．．殴られた分くらいは返してやらないと！」

そんな事を言いながら怖い顔をするチャーリーとシヨウに加えてカスケード隊の現中隊長で有るイエーガーからは倍返しだな．．．と低い声が上がった。

「つてことだから、お願いねアメリカ？」

ヒルダも無茶を言っているのか分かってるのかワザとらしく自分の名を呼びながらお願いして来る彼女にアメリカはハア．．．と溜息をついた。

「ハイハイ．．．分かりましたよ！」

そう答えたアメリアはミデアの奥に潜む人型の新型MSを見ながら困った様に頭を掻き始めたので有った・・・

## 因縁その9

地球連邦軍オーストラリア方面軍に所属するトリントン基地。

そこから少し離れた町の外れにCASCAD Eと言うパブが有り、その女性店主で有るリンⅡローダンは遠征任務で暫く会えなかった恋人のシヨウとこの店の名を与えたカスケード隊の仲間達とで久しぶりに会えると楽しみにしていたのだが・・・何故か誰も現れないこの状況にリンは不安を感じながら店のドアのカウベルが鳴るのを待っていた・・・

「皆遅いな・・・もう約束の時間をとづくに過ぎてるのに・・・」

そう独り言ちながらリンが誰も居ない店のカウンターの上で頬杖をついていると、カランコロンと鳴るカウベルの音にバツと顔を上げたリンは遅いじゃないシヨ・・・と言いつつ掛けた瞬間に目を見開いたので有った。

「どうしたのよその顔はっ!?!」

「いや・・・ちよつとね・・・」

「何がちよつとよ!しかも良く見たらみんなも痣だらけじゃないの!?!」

一体何が起きたのかと困惑気味のリンが驚く声が上がると、ホントに色々と有ったんだよ……とアメリカに肩を担がれた格好のチャーリーの声にそのアメリカからも困った様に苦笑いが浮かんだ……

「取り合えずリンさん。皆の治療をしたいのですが……?」

「分かってるわよ……それはそうと、後でちゃんと事情を聞かせてもらおうからね!」

チャーリーとアメリカの様子からまたカスケード隊が何らかのトラブルに巻き込まれている事を感じ取ったリンは呆れた顔をしながら二階にと救急箱を取りに駆け上がったので有った。

くくく

「痛ててっ……もうちよつと優しくしろよミリイ!」

「何を言ってるんですかあ……ケンカ弱い癖に特務なんかと戦うからですよ!」

ジャックの治療をしていたミリイが呆れた顔でバシっ!と湿布を頬に張ると、涙目のジャックからギャア!?!と悲鳴が上がった。

「もうちよつと優しくしてやれば良いのにミリイの奴……」

「シヨウも同じじゃないの!!」

「痛ってえ!!？」

同情するシヨウに向かってリンが怒った様子でシヨウの頬に貼っている湿布を指で弾いてると、すまない……ここがCASCAD Eで合っているか?と聞こえて来る女性の声がかウベルと同時に聞こえて来ると、チャーリーの治療をしていたアメリカは即座に立ち上がり出迎えた。

「お待ちしました。ミラー少佐にウインスカ中尉……」

「いや、こちらこそ遅れて悪いな……さっきの事でバリサム司令と話していて少し遅れてしまった様だ。」

「いえ、こちらはまだ始まっても無いので丁度良かったですよ?」

「そうか……しかし本当にここで良かったのか?まだ基地の方が……」

込み入った話をするにはいささか不安を感じた様子のミラーにアメリカは大丈夫ですよ?と説明しながらクスッと微笑んだ。

「リンスが居る基地よりも私達のセーフハウスで有るここCASCAD Eの方が安心出来ますので……ですよねリンさん?」

「ウチはただのパブでセーフハウスじゃ無いけどね……」

シヨウやアメリカから事情を聞いているリンがハア……と溜息を付きながらカウンターのの中に入った。

「元々貸し切りにしてたから誰も来ないわよ……店の看板も閉店にして置いたわ」

「助かる店主。今日の支払いは情報部で持つ……」

「ホントですかっ!？」

リンの厚意にお礼を言おうとしたミラーにアメリカが食い気味に驚くと、何だ一体……?とミラーは驚いた。

「あつ……ちよつとコッチの事情です。」

「それなら良いが……」

何故か妙に嬉しそうな顔をするアメリカにカスケード隊からブーイングは起こりだすとミラーは不審そうな顔をしながら教導隊のウインスカ中尉と共にリンの案内で奥のテーブル席にと案内された。

くくく

「さて……さつきも少し話したと思うが、貴官達のカスケード隊には教導隊の立ち合いの下でリンスが率いる元特務隊と一戦交えて欲しいんだ。」

「あの……その言い方だとまるで実戦形式の様に聞こえるのですが……」

模擬戦での優劣で決めると聞いていたイエーガーの疑問にククつと笑ったミラーは

懐から煙草を取り出した・・・

「なあウオーカー・・・お前に聞きたいんだが、あのリンスの奴がここまでコケにされてマトモに模擬戦を行うと思うか？」

「いえ・・・恐らく何らかの難癖をつけて実弾での演習に持ち込んで来ると思います。」

以前にも経験が有るのかアメリカから確信を持つて答えると、マジかよ・・・と声を上げたイエーガーやジャックと言った小隊長達が顔を見合せながら驚き出すと、なあ・・・ちよつと良いか？とその中で一番落ち着いて居る様子のタンクから手が挙がった・・・

「俺もアイツらの事は気に入らないが・・・アンタ達に協力するメリットを感じないだが？」

「おいタンク・・・止め！」

そう注意してくるジャックに手で制したミラーはメリットね・・・と呟きながら煙草の紫煙をCASCADÉの天井へと吐き出した。

「確約は出来ないが・・・ウオーカーの仲間と言う事はコイツの罪状は知ってるな。」

「大体なら聞いてますが・・・まさかアメリカの事を帳消しにでも出来ると・・・？」

「それはお前達の働き次第だ・・・」

そう言いながらミラーが煙草を灰皿へと押し付けると、じゃあ決まりだな？と二つと



笑みを浮かべたタンクはイエーガーとジャックを見た・・・

「さーて・・・シヤンプーとか言う奴をぶっ飛ばすぞお前ら！」

「いや・・・リンスな？」

いきなり名前を間違えるタンクにジャックからツツコミが入ると、ホントに大丈夫か・・・？

？と不安そうにするミラーにトリントン基地の三バカ小隊長トリオと揶揄されているそのリーダーで有るイエーガーⅡパウスネルン中尉は勿論です。と内心不安を感じながらコクつと頷いた・・・

くくく

## 厄介な奴等1

「えっ……本気かよ姐御!? 特務の連中と事を一戦交えるって……」

「姐御じゃ無くて隊長! まあ……事によつてはね。ねえもう一杯くれない?」

部下で有るイワンIIアレンスキー少尉に先程の作戦内容を教えたヒルダが一気に飲んだウイスキーのロックを頼むとリンから不安そうな顔が浮かんだ。

「あの……ゴメンなさい。それって……シヨウが危険って事なの……?」

「ひよつとして貴女……」

軍人を恋人持つ身としてリンもシヨウの仕事に関してなるべく立ち入らない様にしていたのだが……彼女の気持ちに気付いてしまったヒルダはしまったな……と思いつながら内心の自分の迂闊さにチツと舌打ちする。

「もう彼とは長いの……?」

「友人としてはね。付き合いだしたのは割と最近だから……」

そう答えながらニコつと微笑むリンにそっか……と呟いたヒルダは受け取ったグラスをギュツと握りながらねえ……と小さく呟いた……

「軍人なんて止めた方が良いわよ……絶対に後悔するから」

「・・・どうしてか聞いても良い？」

「残された方が辛いからよ・・・」

「そっか・・・ゴメンね。変な事聞いて・・・？」

そんな何ともない顔をするリンにキョトンとしたヒルダからすぐにアハハハつ！と突然笑い声上がるのでリンはイワンと驚きながら顔を見合せた。

「おい大丈夫か姐御・・・？」

「ああ、ゴメンゴメン・・・彼女がちよつと意外過ぎてビックリしただけよ！」

「はあ!？」

妙な事を言つて来るヒルダにイワンから素つとん狂な声が上がると、どう言う意味？

とリンは首を傾げた。

「想いが強いって言ってるのよ・・・えーと？」

「リン!! ローダンセよ。それって私が重たいって事・・・？」

「違うわよ・・・良くそこまで信じられるなって呆れただけ!」

そう言いながら苦笑いを浮かべて来るヒルダに当たり前じゃない？と答えながらシヨウと交わした絶対に帰つて来る。と言った約束を胸にリンは満面の笑みを浮かべたので有った。

~~~~~

「ねえ・・・向こうで仲間達と飲まなくて良いの・・・」

「こんな辛気臭い私が居たら酒が不味くなります。」

「私なら良い訳・・・」

「はい・・・ケイは私の唯一信用できる親友ですからね・・・?」

そう困った様にケイは首を傾げて来るアメリカに向かつてハア・・・と盛大に溜息を付きながらカウンターに置かれたビールジョッキをゴクゴクと一気に飲み干した・・・

「フウ・・・」

「ちよつと大丈夫ですか!? そんなに一気に空けて・・・」

「五月蠅い! 素面じゃ話せないのよ・・・」

「はいっ!?!」

空きつ腹にビールが効いたのか顔を赤くしながら顔を寄せて来るケイにたじろいだアメリカから変な声が上がった。

「それなら何でっ!?! すぐに私に相談してくれなかったのよアメリカは・・・!!」

「すみません・・・ケイを巻き込みたく無かったんです・・・」

そう説明しながら謝るアメリカに向かつていつもそう!とケイは泣きそうな顔でジッと睨みだす……

「何でも自分で抱え込んで全然周りを頼ろうとしないし……そう言う所大っ嫌い!!」
「えっ……ケイツ!!」

士官学校時代も何度かケンカした事は有るが、ここまで激昂しポロポロと涙を流しだす泣き出すケイの様子にアメリカは正直言つて困つてしまつた……

(えつとえつとつ!!? こういう時は何て言つたら良いんですか!!)

いつも強気な姿を見せていた彼女にアメリカが内心困惑していると、そうそう……俺も困つてるんだよな?と言つて来るチャャーリーにアメリカからギョツとした顔が上がるとコイツは……?とケイは明らかに軽薄そうな男性士官に嫌悪感を見せた。

「おつと……昼に一度顔を合わせた筈だぜ?確か……ケイツキタムラ少尉だろ。」
「ああ……そう言えば居た気がします。」

そう淡々と答えて来るケイに、こっちが素か……と思つたチャャーリーは最初に見た愛想の良い彼女とのギャップに苦笑いを浮かべながらアメリカを見た。

「やつぱお前の方が分かりやすくして良いよな……」

「ちよつとチャャーリー!私の事をバカにしてるんですかっ!」

「違えよ……単純に可愛いって言つてんだよ?」

「うにやつー!?!」

先日の作戦行動中にも聞いた告白宣言を再び聞いたアメリカから変な声が上がると、この子とは本気なのよね?とケイは低い声を出しながら首を傾げた……

「おうよ!俺はアメリカと添い遂げると決めてるからな?」

「ふくん……あのアメリカがね……」

未だ顔を真っ赤にしている親友の姿に仕方ない……と納得したケイは真剣な顔でチャーリーに向かって指を差した。

「もし……アメリカをまた裏切るような事をしたら私が殺すからね?」

「おっおう……そうならない様に気を付けるぜ……」

まるで自分の代わりアメリカを守れと言わんばかり脅してくるケイの物騒な警告にチャーリーから苦笑いが浮かぶので有った。

厄介な奴等2

「なんか基地で大騒ぎになってるけど・・・またアンタ達が問題を起こしたんだって？」

「ちよつと!?まるで私達の事を問題児の集まりみたいに言うのは止めてくれませんかマリア曹長!!」

「そうですよお!!」

さつそくカスケード隊と新設された基地守備隊との騒ぎを嗅ぎつけて来たのか、少し遅れてやって来た元上官の楽しそうな顔にアメリカとミリイが抗議の声を上げると、間違った事は言って無いけどね?とマリアはクスクスと笑みを浮かべながらビールジョッキを傾ける。

「それはそうとアメリカ・・・例の元上官と模擬戦を行うって聞いたけど本当に大丈夫なの?」

「それは模擬戦の事でしょうか・・・それともリンス中佐の事ですか?」

「どっちもよ。．．．ちよつと小耳に挟んだけどアンタ銃を抜いたんだって？」
「良く知ってますね?．．．ですが撃つてはけませんよ。」

一応は情報部のミラーがその場で箝口令を敷いたのだがどこからか漏れたらしい情報通のマリアにアメリカが少し驚きながら答えていると、止めたのは私だけだね。と何処かムスつとした顔をするミラーの部下で有るケイの声がその隣から聞こえて来た。

「あら可愛い子ね。さつきから気にはなつてたけど．．．アメリカの知り合いかしら？」
「ハイ!私の親友で情報部のケイ!!キタムラ少尉です。」

「ちよつ!?!いつから私とアンタが親友になったのよ!」

「またまたケイつてば．．．いつも私がそう言うのと照れるんですよ?」

「照れてなんか無いってえ!!」

そんな怒声をアメリカに上げたケイが顔を真っ赤にして立ち上がるとマリアは仲良しみたいね?と答えながらアハハ!と笑い出した。

「自己紹介が遅れましたが私はアメリカの元上官でマリア!トパレス曹長です。そっか．．．少尉が『ケイ』．．．良く彼女から話を聞いてますよ?」

「ええツ!?一体何て．．．」

「えつとそうですね．．．冷静沈着でいつもツンケンしている様で凄く面倒見の良い子だとか．．．?」

「ウニャ!?!」

頬に自分の手を当てながら思案顔を浮かべるマリアの言葉に今度は妙な声を上げたアメリカが顔を真っ赤にとなった。

「そうそう・・・そう言えば何でも士官学校の時にバーで飲んでいた時にしつこく絡んで来たナンパ野郎を撃退してくれとか?」

「それは違いますよ!?!酔ったこの子つて力の加減が分からなくなるから逆にウチの男子生を守る為に制圧しただけです!」

「えっ?そうでしたっけ・・・」

「そうよ!初めて飲むのにテキーラをショットで何杯も頼むから大変だったのよあの時は・・・」

そう説明しながら頭を抱えだすケイに向かってアハハ・・・とアメリカから苦笑いが浮かぶと、それは興味深い話だなケイ?とマリアから聞いた部下の昔話にアリスⅡミラー少佐はクスッと笑みを浮かべながら空いたグラスをカウンターの向こうで待機していたリンへと渡した。

「ウイスキーをダブルで頼む。それで・・・トパレス曹長と言ったか、貴官は割と情報通のようだが・・・実際にリンスの奴は基地内でどんな評判なんだ?」

「そうですね．．．私が勤務するのは管制塔なので入って来る情報も限られますが、その情報を本当に伝えても良いのでしょうか？」

どこか不審そうな顔をするマリアがチラつとアメリカを見ると、中々に優秀な様だな曹長は？と答えたミラーはスーツの下から煙草を取り出すとフツツと笑みを浮かべながら口に啣えた。

「情報には価値が有るし、そう簡単に喋りたくは無いと言う事で良いかな曹長？」

「まあそう言うところですよ。そこで私からの要求ですが．．．本当に少佐はアメリカ．．．いえこの基地の味方でいらつしやいますか？」

このマリアから発言になつ．．．？と部下で有るケイは勿論アメリカやシヨウと言つたカスケード隊の面々からおいおい．．．とどよめきが上がつた．．．

「ふむ．．．どうやら曹長はこの私が信用するに値しないと思つてゐるらしいな？」

「そうは思いませんが．．．今回の件が片付いた後の保証が欲しいのです。」

ジツと真剣な顔をするマリアに成程な．．．と答えたミラーは火を着けた煙草の紫煙をフウ．．．と吐き出しながら腕を組んだ。

「良いだろう。今後のバックアップは我が情報で受け持つとしよう．．．」

「ありがとうございます。」

「何．．．どうせここには連絡員を置く予定だったからな。」

「えっ……」

そんな事を言うミラーに向かってマリアがここまで踊路らされた事に驚いていると、それじゃあ聞かせて貰おうか？とミラーは煙草を指に挟みながらニヤニヤとした。

「ハア……よく性格が悪いって言われませんか少佐って？」

「聞きなれてしまつて今じゃ誉め言葉と思つてるくらいだな。」

悔しく思つたマリアの皮肉も通じないのか何ともない様子でミラーが吸い終わった煙草を灰皿へと押し付けていると、ちよつとマリアつてば……と少し困つた顔でリンからウイスキーのお代わりを受け取つたミラーはクイツと一口飲んだので有つた。

厄介な奴等3

「シヨウお疲れ様。ゴメンね・・・結局最後まで手伝わせちゃつて?」

そう言いながら遅くなった晩御飯の準備をするリンに別に良いって?と答えたシヨウが漂つて来る美味しそうな匂いにグ〜とお腹を鳴らせた。

「凄いお腹の音ね・・・もう出来るから待つてね?」

「うん・・・出来れば急いで欲しいかも・・・」

そう答えながらCASCAD Eの二階に有るリンの部屋でシヨウがテーブルに突っ伏している、出来たわよ?と言ったリンは白ご飯とお味噌汁に塩焼きにした焼き魚を目の前に置いた。

「作つて置いてなんだけど・・・ホントにこれで良かったの?」

「これが良いんだって!!それじゃあ頂きまーっす♪」

1週間の遠征中で一応リンから自分好みの食料を貰ってはいたが・・・やっぱりのこの味だよな・・・と完全に彼女の作る料理に自分の胃袋を掴まれているシヨウはすぐにお茶碗を空にしてしまった。

「リンお代わり!!」

「はいはい・・・私の分は残しておいてよね?」

ご飯をよそいながら少し呆れたリンもその向かいに座って食事を始めると、うん美味し!と自分で自分を褒めた。

「所でシヨウ・・・アメリカちゃんの事だけど、本当に大丈夫なの・・・?」

大体食べ終わり、リンとのたわいもない話をしていたシヨウは急に切り込んで来る彼女の質問に飲もうとしていた味噌汁を拭き出しそうになった・・・

「大丈夫って何が・・・？」

「何がって・・・シヨウ達とアメリカちゃんはリンスとか言う元特務とか言う連中と戦うんでしょ！」

「ああ・・・そっちね。」

「そっちってどっちの事よ!!？」

そう声を上げながらガタつとテーブルを叩きながらリンが立ち上がるとシヨウはまあまあ・・・ちよつとは落ち着いてよ!?!と慌てて両手を振り出した。

「元特務か何だか知らないけど・・・MSでの模擬戦なら絶対に負けないよ。奴等には借りも有るしね・・・」

「まったくもう！それでシヨウがもう一つ心配してる事って・・・？」

トリントン基地に配属された元特務隊にボコられた事を言っているのか自分の傷跡を指差すシヨウにリンが呆れながら首を傾げると、いや・・・ちよつと変じやなかったあの二人？と言って来るシヨウにどう言う事？とリンは食後のお茶を飲みながら不思議そうに首を捻ったので有る。

くくく

「あの・・・チャーリー・・・？」

「なんだ？」

「いえ、何でも有りません。」

基地までの帰りしな・・・チャーリーはそう言いながら俯き出すアメリアにそれなら良いけどよ・・・？と答えながら再び歩き出すと段々と宿舎が見えて来た。

「じゃあ、ここで解散とするか。また明日なアメリア・・・？」

「ちよつと待つて下さいっ!!」

自分の部屋へと戻ろうとするチャーリーに向かって顔を真っ赤にしたアメリアが呼び止めるとチャーリーの耳に突然とんでもない事が聞こえて来たので有る・・・

「私の部屋でコーヒーでもどうですか・・・!」

「えっ・・・ええっ!!?」

まるで誘っているかのように言つて来るアメリアの声に驚き固まってしまったチャーリーは・・・じゃあ行きますよ!とこちらの有無も聞かずに引つ張つて行く彼女の成すがまま彼女の部屋へと押し込まれたので有つた。

「すみません。客人用の椅子が無いのでベッドにでも腰かけて置いて下さい・・・」

そう言いながら台所へと向かうアメリカを見たチャーリーがマジかよ・・・と内心ドキドキしながらアメリカのベッドに腰かけると彼女の付けている微かな香水の匂いがチャーリーの理性を刺激しだす・・・

(マズイ・・・このままじゃアメリカに手をだしちまいそうだけ・・・)

ケイに言われた手前も有るが・・・アメリカの事を大切に思っているチャーリーは彼女からの返事が無い限りは絶対に手を出さないと心から決めていたのだが・・・

「すみません・・・良く考えたらウチにコーヒーは有りませんでした。」

そう言いながら軍服の胸元を大分緩くしたアメリカが冷蔵庫から取って来た缶ビールを渡しながら隣に座ると、飲まないんですか・・・？とジッと見つめて来る彼女にえいクソ!!と声を上げたチャーリーはそのままベッドにと押し倒した・・・

「俺は我慢してたんだぞ・・・煽ったのはお前だからな！」

「問題有りません・・・私もチャーリーとこうなりたいと思ってましたから・・・」

「チツ・・・そんな顔しやがって・・・絶対に加減なんかしてやらねえからな!!」

そう答えながらクスッと微笑むアメリカに向かって深めたキスを送るチャーリーに
んんっ!?!と驚く声上げたアメリカは苦しくなりハアハア・・・息をしながらジロつと睨
んだ。

「相変わらず慣れてますね・・・」

「バーカ・・・ただヤル女にこんなキスするかよ。」

「本当に良いんですか？私って結構面倒臭いですよ・・・」

「それを承知で好きって言つてんだよ！」

そんな声を上げるチャーリーの真剣な顔にドキつとしたアメリカから私も好きに決まつてるじゃないですか・・・と声が上がるとチャーリーはやつと聞けた彼女からの返事に安堵しながらそのままギュツと抱き合しめた・・・

「やつと俺のになつたぜ・・・」

「何を言つてるんです・・・私は私のもですよ。心まで欲しいんなら愛想を尽かされない様に頑張つてくださいチャーリー・・・？」

そう答えながら背中へと手を回すアメリカに向かつて苦笑いを浮かべたチャーリーはとことん愛してやるよ・・・と答えながら再びアメリカと深い口づけを交わしたので有つた。

厄介な奴等 その4

「あのおミラー少佐……何故私達を指名したのかお聞きしてもお？」

翌日ホバートトラックのオペレータ席でミリイが首を傾げると、んっ？とこの辺りの地図データをタブレットで確認していた情報部のミラーから顔が上がった。

「ウオーカー達は今動けないからな……それに貴官はオペレータとして優秀だと彼女から聞いているぞミリイ」タニグチ伍長」

「はあ……どうも……」

そう素っ気ない態度を取るミリイに対しミラーからフツッ……と笑みが浮かぶと、今日はジャックとゆっくりするつもりだったのになあ……とミリイがボソツと呟くと何か言ったか伍長……？とミラーはジロつと睨みながら諸事情で不在にソフィーに代わってホバーの操舵手を務めている部下で有るケイキタムラ少尉に向かって叫んだ。

「おつと．．．そこを右だケイ！」

「はいはい．．．」

上官からの命令に渋々と言った様子でケイがホバートトラックのハンドルを目一杯切ると、あの．．．ミラー少佐？と尋ねて来るケイに向かってミラーは何だ？と首を傾げた。

「ホントに良いんですか．．．勝手にトリントン基地のMS部隊を動かして？」

「そんなに心配するなケイ．．．基地指令のバリサム大佐からもオフレコで許可は取って有る。」

そう答えながらニヤリとするミラーに分かりましたよ！と答えたケイがホバートトラックを更に前進させると、妙に近いな．．．？とミライ達が搭乗するホバートトラックを守る様に周囲に展開していた第二小隊長で有るジャックの陸ジムから妙な声が聞こ

えた。

「何が近いのおジャック？」

「訓練地域だ．．．俺達が良く使うコロニーの残骸のすぐ傍だぞ。」

ジャックからの報告に、本当だねえ．．．？と声を上げたミリイはケイにホバーを停車させる様に言うとすぐに音紋ソナーを地面へと突き刺す．．．

「音紋及び各ソナーの展開を開始しますよお．．．!!」

そう言いながらヘッドセットを挿んだミリイが周囲の音を拾おうと耳を澄ますのだが．．．

「何も反応がありませんねえ．．．？」

「フム．．．トパレス曹長からの情報ではこの辺りを哨戒していたリンスの部隊と通信が

途切れると言っていたが……」

そう言いながら腕を組みだすミラーにまあ確かに……とミリイはこの周囲に展開するミノフスキ粒子の濃度を見せた。

「これだけ高いと基地との通信はおろかレーダーの方も微妙ですう……」

「ふむ……これ以上の探索は止めておいた方が良さそうだな。」

ミリイからの報告と長年の情報部としての勘が働いたミラーが撤収命令を出すと、ホントに良いんですか?と操舵席のケイから振り返りながら首を傾げられた。

「借り物の部隊に何か有るとマズイしな……それにこれ以上藪を突くと蛇が出そうじゃないかケイ?」

「確かにそうですね……」

ミラーの言葉にケイ自身も妙な雰囲気を感じるこの場所に違和感を感じていると、ちよつと良いか？とホバートトラックの周囲を守っていたジャックの陸ジムから通信が入った。

「コイツの試射は良いのか？」

「おつとそう言えばあ．．．もう少してソフィーに怒られるとこでしたよお!？」

ヒルダ達ブラックウイドウ隊がジャブローから運んで来た大量の運用試験用武器の一つで普段カスケードの陸ジムが使っている100ミリマシンガンよりも長尺のライフルを掲げるジャックにミリイは慌てながら助かりましたあ．．．とお礼を言った。

「それじゃあ．．．的はつと．．．」

「適当にそこら辺に有るコロニーの残骸で良いんじゃないですかあ？」

ジャックは割と適当なミリイの提案にまあ良いつか・・・と呟くと次期主力機用と謳われているライフルを陸ジムの両手で構えるとメインモニターに適当な的をロックオンをさせた。

「じゃあ撃つぞ!!」

そう声を上げたジャックがサイドステイックのトリガーを絞るとダラララッ!!とフルオートで発射された90ミリの弾丸がコロニーの外壁に着弾した。

「集弾性は良好みたいですねえ・・・撃った感じはどうですかあジャック?」

「中々良いな・・・ジムライフルって言ったかコレ・・・」

「ハイ。口径は下がったけど貫通力が上がった事により威力が向上しているらしいですよお?」

ミリイからの説明に成程な・・・とジャックの陸ジムが好感触と言った様子でライフ

ルを下ろすと、ちよつと待ってえ!!?とミリイの焦った声にジャックは慌ててライフルを再び構えた・・・

「おいどうしたウイスキードッグ・・・?」

「今微かにですがあ・・・陸ジムでは無いMSの駆動音が聞こえた様なあ・・・??」

「本当かよ!?!・・・おいCSD5にCSD6!ウイスキードッグを中心にデルタフォーメシヨンだ!!」

驚くCSD4ジャックからの指示にユウヤとレオンの陸ジムもミリイ達が搭乗するウイスキードッグを護衛する様に配置に付いた。

「どうだ伍長・・・反応は?」

「・・・完全にロストですう。私の気のせいだったのかなあ・・・?」

そう言いながらヘッドセットを外すミリイからの報告に少しだけホツとしたミラーはふう……と息を吐いた。

「何にせよすぐにこの場から離脱するぞケイ！」

「了解です。」

ミラーからの指示でケイの操縦するウイスキーードッグとジャック達カスケード隊第二小隊が全速でこの場から離脱して行くと、ブン……とその姿を見ていた赤い目が複数光ったので有った。

厄介な奴等5

「また随分と沢山の試験用の部品を持って来ましたねっ!？」

まるで山の様に積み重なっているコンテナの数に驚いたソフィーが手に持ったタブレットに表示されているチェックリストを確認していると・・・その中でも別段に際立つ代物の前で固まっている銀髪の大男にソフィーは声を掛けた。

「さつきからブーツとしたままですよイエーガーさんっ?」

「あつ、ああ・・・ちよつと驚いてな。」

イエーガーがそんな声を上げるのも無理は無い・・・ソフィー達の前にはRXシリーズの陸戦型で有る。型式RX-79「G」陸戦型ジムが佇んでた・・・

「まさか俺がガンダムタイプに乗る事になるとはな・・・」

「アジア方面軍に与えるウチの一機をマチルダ少尉が回してくれた様ですよっ?」

そう答えたソフィーが陸ジムで慣れた様にコクピットハッチのウインチで上に上がると早速初期設定を始めた。

「早速やってますね・・・」

どこか眠たそうなアメリカの登場にニヤニヤとイエーガーは腕を肩に回した。

「その様子だとチャーリーと上手く行った様だな?」

「・・・セクハラで訴えますよ。」

顔を真っ赤にしながらジロつと睨んで来るアメリアに冗談だつて？と答えたイエーガーはいつも一緒にのコンビが居ない事に首を傾げた。

「ところでシヨウとチャーリーはどうしたんだ？」

「なんか・・・二人で話したいとか言つてシユミレータ室に行きました。」

そんな声を上げたアメリアがまったく・・・と呟いていると開いている一つのコンテナが目についた。

「ねえソフイー・・・この装備は？」

「えつとつ・・・確か近接特化に開発された武器となってますけど・・・」

「ふん・・・ハンドガンにナイフとは私好みの装備ですね・・・」

陸戦型ガンダムの上から聞こえて来るソフイーの声に思案顔を浮かべたアメリアは腕を組みながらイエーガーのお古となった予備機の陸ジムを見た。

「ソフイーにお願いが有ります・・・それが終わったらこの装備を予備機にセットして貰って良いですか？」

「えっ本気ですかっ!？」

明らかに対MS戦闘には向かない装備にソフイーから驚く声が上がると、それと機体のセットアップにも注文が有りますので・・・?とメカニック担当の彼女にクスッとアメリアはニヤついたので有った。

くくく

「……つたく！今日はやけに調子良いなチャーリーの奴!!？」

シユミレーター室のポッドの中……そんな慌てた声を上げたシヨウは直前で飛んだチャーリーの陸ジムからの銃撃に左腕のシールドで受けていると、まだまだだぜつ!!と叫んだチャーリーが更に振り上げたツインビームスピアで追撃して来ると……

「舐めんな!!」

第一小隊では後方支援担当をしているシヨウで有るが……その鋭いチャーリー機の鋭い斬撃に接近戦にも隊内で定評が有るシヨウは陸ジムの脚部に有るサーベルラツチから引き抜いたビームサーベルで斬り上げたので有る。

「今度はコツチの番だつ!!」

そう叫んだシヨウがそのままビームサーベルを腰に構えながら……デヤアああ!!と

得意な居合い斬りでチャーリーの陸ジムの胴体を泣き分けれにしようと横に一閃に払った……

「貫つたぞチャーリーっ!!」

「まだまだあああっ……!!?」

そう叫んだチャーリーの陸ジムがその斬撃を避けつつ深く踏みこみながらツインビームスピアを突き出した……

「おい嘘だろ……!?!」

胸部を尽きぬかれメインモニターに表示された撃墜表示に驚いたシヨウはクソ……つと悔しそうな顔でシュミレーターポッドのハッチを開くと、目の前に立ちながら、よお……?とニヤつくチャーリーに向かってチツ……と舌打ちした。

「約束通り今日は奢りだからなシヨウ♪」

「分かってるって・・・次は負けないからなチャーター？」

リンの店での奢りを賭けシユミレーターの勝敗でどちらが勝つか賭けていた二人で有ったが・・・チャーターの勝利で奢るはめとなったシヨウはハア・・・と溜息をつきながら相棒の顔を見ながら首を傾げた。

「それはそうと・・・相談って何だよ？」

元々それが理由で呼び出されたシヨウが尋ねると、いや・・・それがな・・・？としどろもどろとする相棒の姿にシヨウは更に首を傾げた・・・

「実は俺・・・アメリカと付き合う事になったからお前に教えたくてな・・・」

「それって・・・マジな奴？」

「大マジだ・・・」

そう答えながら真剣な顔をするチャーリーに驚いたシヨウは良かったな!!と満面の笑顔を向けながら親友を祝福したので有った。

「そうか・・・あの遊び人のチャーリーがアメリカとね・・・浮気なんかしたらヤバいんじゃない?」

「それはもう・・・昨日もベッドの中で物騒な脅迫を聞いたばかりだぜ・・・」

冗談を言ったつもりだったが・・・チャーリーの引き攣った顔にシヨウがそんなんだ・・・と苦笑いを浮かべていると、シュミレーター室の扉が開くと同時にシヨウにチャーリー?と聞いて来るアメリカの声にチャーリーがビクつとなった・・・

「どつどうかしたかアメリカ・・・!?!」

「いついえ・・・明日の模擬戦の事でミーティングをしたくて呼びに来ただけです・・・」

そう答えながら顔を真っ赤にする二人にシヨウはやれやれ・・・と頭を掻いた。

「二人共意識しすぎじゃない？」

苦笑いを浮かべるシヨウの声に更にポツ！と顔を真っ赤にしたチャーリーとアメリアはそんな事無い!!と誰にでも分かる嘘を吐いたので有った。

厄介な奴等 6

リンス率いる特務隊との模擬戦を控えたその日の早朝、フワアア・・・と欠伸したカスケード隊の中隊長で有るイエーガーⅡバウスネルン中尉は眠たそうな顔でハンガーに入ると新しく自分の愛機となった陸戦型ガンダムを見上げた。

「相棒・・・今日は頼むぞ。」

そうニヤつと笑みを浮かべたイエーガーがバシつと陸戦型ガンダムの脚部を叩きながらコントロールパネルを操作するとコクピットハッチから乗降用のワイヤーがウイイイ・・・と音を立てて降りて来た。

「この時間ならちよつとくらい動かしてもバレんだろう・・・」

イエーガーは配備された新型機に少しでも慣れようと早起きして来たのだが・・・

「スウスウ・・・」

「何でこんな所で寝てんだコイツは・・・!?」

作業終えて安心してしまったのか・・・そのままコクピットの中で寝息を立てているメカニックのソフィー＝ホワイトの姿にイエーガーから呆れた声が上がった・・・

(どうせまた徹夜でもしたんだろうな・・・このバカは・・・?)

自分の担当する機体の事をこの子と呼ぶ程に愛着を持つ機械オタクの彼女にイエーガーが風邪ひかない様にと自分が着ていたフライトジャケットを掛けると・・・そのまま優しくソフィーの頭をそつと撫でた。

「こー静かだと・・・可愛いよなこいつも・・・?」

そう独り言ちたイエーガーは二つと笑みを浮かべながらソフィーの寝顔を眺めていると・・・

「んん．．．まだ食べれますって．．．」

「まったく．．．どんな夢見てんだコイツは？」

妙な声を上げるソフィーを覗き込む様にイエーガーが楽しそうにククつと笑いだすと、そこですねっ！と寝ぼけたソフィーによって抱き付かれたイエーガーはちよつと待てっ!?!と言いなながらも童顔なクセにその豊満な胸へと顔を埋めたので有った．．．

(むぐ!!息が出来ないっ!?)

予想以上に威力の高い質量兵器を自分の顔面で感じていたイエーガーが窒息寸前で発見されたのはそれからすぐの事だった。

「まったく．．．!こんな事で二階級特進なんてふざけた事は絶対に許しませんからね!!?」

「ホントだぜ．．．」

イエーガーと同じで早めにハンガーに來たアメリアとチャーリーが情けない理由で救出したイエーガーに向かって盛大に溜息を吐いた。

「スマン．．．今後は氣を付ける。」

「いや私のミス．．．ですからっ．．．」

あんなアクシデントが有った所為か妙に意識しながら顔を真つ赤にする二人にまあ良いですけど．．．とアメリアが答えていると、それにしてもラツキースケベ過ぎるだろ．．．とチャーリーからボソッと聞こえて來たアメリアは無言で腰のホルスターに有る銃に手を掛けた．．．

「確かにソフイーと違つて私の胸じゃ物足りませんよね．．．」

「そうそう．．．つて違う!?てかつ落ち着けつて!!」

「悪かったですね。私の胸に谷間が無くて・・・」

「俺が悪かったから銃を下せてアメリカアー!?」

必死な顔で土下座して来るチャーリーに向かって今日の所は許して置きます・・・とアメリカがハンドガンのセフティを掛けながらホルスターに仕舞うと、とんでも無い奴に惚れたもんだぜ・・・と苦笑いを浮かべたチャーリーはアメリカと付き合う事になった事に内心少しだけ後悔した。

「それはそうと、イエーガーさんはどうしてこんなに朝早くからここに?」

「ちよつと新型機に慣れたくてな・・・」

「つて事は私達と一緒に事ですな。」

そう答えるアメリカがフツツと意味ありげに微笑むので何だそりや・・・?とイエーガーから不思議そうに首を傾げて来た・・・

「ソフィー……例の件と全機の準備は出来てますか？」

「はい……カスケード隊全機のアップデータは完了済みですつ。それと予備機の方もアメリアさんの言う通り仕上げて置きましたっ！」

そう答えながらフワア……と眠たそうに欠伸するソフィーに向かってお疲れ様でした。と答えたアメリアは相変わらず状況が呑み込めない顔をしているイエーガーを見ながらニヤつと笑みを浮かべた。

「少しの間ソフィーの事をお願いしますね？」

「いや、それは構わないが……一体何をやる気だお前は!？」

「ちよつとした保険ですよ。まあ……使うに越した事は無いんですがね。」

「良く分からんが．．．あまり無茶な事はするなよ？」

この数か月でアメリカの突拍子も無い考え方に大分慣れたのか少し窘めたイエーガーが眠たそうにするソフィーを連れてハンガーから出ると、じゃあ準備を始めますよ！と声を上げたアメリカはハンガーの奥に佇む予備機で有る陸ジムを見てニヤつと腰に手を当てたので有った。

くくく

「つたく!!何て機体に仕上たんだソフィーの奴!!」

今日の午後から有るリンスの部隊との模擬戦様にとソフィーがチューニングした陸ジムに搭乗したショウウから機体のピーキーさに苦情が入ると、少し離れた位置で様子を伺っているホバートトラックの中で、随分と苦戦してるようですね．．．？とカスケー

ド隊の指揮官で有るアメリカは不安そうに首を傾げた。

「カスケード隊の皆なら大丈夫ですよアメリカさんっ♪」

「・・・そうだと良いんですが・・・」

自分がイジった機体を自慢する様に大きな胸を張って来るソフィーに若干苛立ちながらアメリカが答えた・・・

「機体のレスポンスが前と違い過ぎるけど・・・これはこれで!!」

そう声を上げたシヨウウの陸ジムが機体の慣らし相手で有るブラックウイドウ隊のイワン機を視認すると・・・

「さあて・・・お手並を拝見と行くぜシヨウウ!!」

そうニヤついたイワンのRGM-79 指揮官型ジムがペイント弾を詰めたブルパツ
プマシンガンを一連射して来るとシヨウもこなくそっ!?!と100ミリマシンガンで応
戦を始めた。

「へえ・・・あのイワンが熱くなるのは珍しいわね・・・?」

ビームサーベルを引き抜きながら肉薄するイワンの様子を見たブラックウイドウ隊
の指揮官で有るヒルダから驚く声が上がると、まあウチのエースなので?と答えたアメリ
アはヘッドセットを掴んだ。

「ウイスキードッグからCSD2へ!一旦後退しCSD3と合流して下さい?」

「CSD2了解。悪いなイワン!」

アメリカからの指示にシヨウの陸ジムが1000ミリマシンガンで牽制しながら離脱を図ろうとすると、逃げる気か！と叫んだイワンのジムがバーニアを吹かしながらコロニーの残骸後を沿うシヨウの陸ジムを追い出した・・・

「おいおい・・・同じ連邦製のMSだっていうのにおかしくねえか!？」

徐々にと引き離すシヨウの陸ジムの推進力の高さにより、イワンから驚く声が上がると、バーニアの出力はビンビンに上げてますよっ？とソフィーは自慢げな顔で腕を組んだ・・・

「クツ・・・貰ったあ!!」

イエーガー達と合流するのについて来てもらっては困ると思ったシヨウが陸ジムのバーニアを一旦カットしながら機体を捻り込むと追って来たイワンのジムに向かって1000ミリマシンガンを一連射しながらそのまま降下した。

「BW01被弾っ！CSD2によって撃墜判定ですう!!？」

ミリイからの慌てた報告にウソでしょ!？と声を上げたヒルダは改めてカスケード隊の強さに驚いた。

「ウチがこれじゃ・・・リンス少佐達が可哀そうになるわねアメリカ？」

「何を言ってるんですか・・・こつちもチャーリーがそつちのリー||フェイ少尉にやられてるんですが・・・」

「でも・・・フラッグを取られたのはコツチよ？」

そう言いながらヒルダはフラッグ役のガンタンクを守っていたジャンのジムキャノンをみると、ここまでだな！と声を上げたイエーガーの陸戦型ガンダムによって1000ミリマシンガン突き付けてられた。

厄介な奴等7

「僕の所為で負けちゃいましたね・・・」

フラッグで有るガンタンクを防衛していたブラックウイドウ隊のジャン准尉が歩きながらガクつと項垂れると、本当だぜ！と頭の後ろで手を組みながらムスつとするイワンに向かってアンタも撃墜されたでしょうが！とブラックウイドウ隊の指揮官で有るヒルデガードゥウインチェスカ中尉がその頭を思いつきり小突いた。

「痛つてえなあー！?!何すんだよ姐御っ!!」

「五月蠅い!!ジャンがやられたのは小隊長のアンタが熱くなりすぎて撃墜された所為だつて分かつてんのイワンっ!!?」

「ちよつ、ちよつと待てよ姐御!?!あんなに機体の性能差が無ければ・・・」

「それをどうにかするのが私達教導隊でしょうが!!アンタこの仕事を舐めてんの!!!」

更に言い訳しようとするイワンにカチンと来たのかヒルダの怒号が訓練区域に仮設されたテント内に響き渡ると、何だか悪い事をした気がするな・・・?とそのフラッグを獲ったイエーガーから苦笑いが浮かんだ。

「それは違ふと私は思うね・・・あの時のジャン准尉はフラッグにこだわらずイエーガー中尉の迎撃を行うべきでは?」

実際にフラッグ役をしていたガンタンクに搭乗していた操舵手のレティの辛辣な評価にううつ・・・とジャンから落ちこむ声が聞こえて来ると、まあまあ!と彼女の上官で砲撃手で有るタンクIIピンセント中尉はブラックウイドウ隊の三番機で有るジャンを励ますようにその肩を叩いたので有った。

「レティの言う事も分かるが、あの状況では迎撃と護衛の判断は例え教導隊と言えども難しいのではヒルダ中尉?」

「そうね。だけど……どっち付かずのまま行動するのは一番ダメだからねジャン！」

そう窘める様にヒルダがニコつと人差し指を立てると、分かりました！とジャンから力強い返事が上がるのでレティはジロつと自分の上官を睨んだ。

「少し甘やかしすぎでは……？」

「お前が厳しすぎるんだよ……」

そうボソツと呟くレティ曹長から抗議にタンクが苦笑いを浮かべていると、お昼が出来たよ！と軍服の上にエプロンを着けたシヨウとその手伝いをしていたブラツクウイドウ隊の二番機で有るリーフエイ少尉がヒョコつと顔を出したので有った。

くくく

「おおっ！昨日も思ったけどお前ってマジで料理の才能有るなシヨウ!!?」

「そんな事は無いって!?!」

ガツガツと勢い良くパンとスープを食すイワンの満足そうな顔に慌てて両手を振ったシヨウウがリー||フエイが大分手伝ってくれたんだ?と無骨でまさに何らかの達人とも言える貫禄を見せるを一つに編んだ黒い長髪がトレードマークで有る寡黙な少尉を哨戒した。

「シヨウもそうだけだよ・・・お前ら二人共軍人よりもコツチの方が向いてるんじゃないかね・・・」

「うむ・・・それも悪くない。だが、先ずは戦争が終わらないと話が進まんじゃないかイワン?」

イワンからの冗談にリー||フェイから真面目な顔で首を傾げるのを見てシヨウがハハっ・・・と苦笑いを浮かべていると、あのおく?とミリイから申し訳無さそうな顔で首を傾げられた。

「本当に良いですかあ!?!私達だけ頂いちやつてえ・・・」

「残ると勿体無いしね。好きなだけ食べてよ?」

そんな声を上げるミリイ達のトレイの上には午後から始まる模擬戦に参加するパイロットとは違ってホカホカと食欲をそそる良い匂いがするシヨウとリー||フェイが作ったカレーライスが乗ってた。

「それでは遠慮なくう・・・」

今日の為にとリンから持たされた野菜やハーブに元々料理が好きなのかリー||フェ

イの協力によって完成したカレーを口へと運んだミリイはんんっ!?!と目を丸くした。

「口に入れた瞬間は甘いのに後から来るこのピリ辛さが絶妙ですねえ!?!」

「ホント・・・これは美味しいわね!?!」

大絶賛するミリイと同じくリー||フェイの上官で有るヒルダからも驚く声が上がると、口に合って良かった・・・とホッとするリー||フェイにやったな?とシヨウは二つと笑みを浮かべると二人でパン!と手を叩き合った。

くくく

厄介な奴等 8

「しっかしマジで強いなリー＝フエイは・・・」

「お前も筋は悪くない。後は恐れずにもっと前に出る・・・その方がこの手の武器は相手にとつて脅威になるからな？」

午前中の模擬戦でリー＝フエイのジム・ライトアーマーとの一騎打ちで負けたチャリーが昼飯を食いながら二人で反省点を話し合っていると、頑張つてますねチャリー・・・と小さく呟いたアメリカは嬉しそうにクスッと微笑んだ。

「ふくん・・・ホントに好きなんだ・・・？」

「ちよ!?!急に何なんですかケイ!!?」

背後から声を掛けて来たケイにアメリカがビックリしながら振り返ると、いや何で

も・・・？とニヤつきながらケイはその隣に座りながらシヨウとリー||フェイが作ったカレーを口へと運んだ。

「ところで・・・何でスープなの？」

「私もMSで出る可能性が有るからですよ！」

ワザとなのかニヤつきながら首を傾げて来るケイに向かってアメリカが悔しそうな顔を向けた。

(今日の晩御飯はリンさんの店で絶対にカレーを食べてやります・・・)

シヨウが作る物より絶対に美味しいリンのカレーを想像しながら心の中で誓っていたアメリカに向かって来たみたいよ？とケイからスプーンで指差されたアメリカはベースキャンプに近づいて来るリンス率いる基地守備隊のジム隊を視認した。

「お客さん達も揃って来たようですね・・・」

「お出迎えの準備の方は？」

「昨日の内に何とか!？」

「後は向こうの出方次第って事ね・・・」

士官学校時代さながらのテンポの良さに少し嬉しくなったアメリカはそうですね。とクスッと楽しそうに微笑んだ。

「それじゃあちよつとミラー少佐に言つて来るからこれ宜しくね?」

「あつ!もうケイつたら・・・」

ケイの食べ終えたトレイを押し付けられたアメリカはまったくもう・・・と独り言ちながら近づいて来たリンス率いる基地守備隊のMSを見上げた・・・

(RGM-79 ジムか・・・ソファイ曰く陸ジムに比べて汎用性に振った機体と聞いてますがリンス達の実力と合わせてどの程度の物か今から楽しみですね?)

ソファイが仕上げた機体とショウ達の実力を知っているアメリカがそう考えながらクスッと笑みを浮かべていると・・・

「随分と余裕そうじゃないですかウオーカー?」

そう言いながらコクピットから降りて来る元上官に対し先日的一件も有りアメリカは大人しく下げた。

「これはこれは・・・リンス少佐。」

「なんだ・・・模擬戦に勝てないと見て私に媚びを売りに来たのかウオーカー?」

そう答えながらニヤつき出すリンスに対しアメリカからはあ・・・!?と驚く声が上がった。

「いや・・・仰っている事の意味が分かりませんが・・・」

「だってそうで有ろう。そもそも我々アースノイドで構成されたエリートで有る特務隊がお前みたいな下賤なスペースノイドの居る部隊に負ける筈が無い！」

相変わらず地球至上主義が絶対なりンスの演説にイラつとしたアメリカは腰に有るグロツク17Lを抜くのを必死に我慢した・・・

「私はともかく・・・私が鍛え上げたカスケード隊を舐めていると痛い目に逢いますよりンス少佐？」

「ほ、ほう・・・そこまで自信が有るのならこちらも容赦しないからなウォーカー！！」

そう怒鳴り上げながら部下達と立ち去って行くリンスに向かって相変わらず短気な人ですね・・・と煽り耐性の低さにアメリカが苦笑いを浮かべていると、まったくだな・・・

とミラーの声が背後から聞こえたのでアメリカは慌てて振り返った。

「ミラー少佐にケイ……」

「おいウォーカー……後始末は私とケイで請け負ってやるから好きな様に暴れて来い？」

そう言いながら煙草をくわえだすミラーと親指を立てて来るケイに了解です！とアメリカは敬礼した。

くくく

「それでは、我が教導隊主導による模擬訓練を行います。双方とも危険行為の無い模範的行動をお願いいたしますね？」

ジャブロー本部所属ブラックウイドウ隊の指揮官で今回の審判で有るヒルデガード
|| ウインチエスカ中尉の言葉にカスケード隊の隊長で有るイエーガー|| バウスネルン
中尉が搭乗するRX-79「G」陸戦型ガンダムとトリントン基地守備隊の隊長で有る
リンス|| デイヴィッド少佐のRGM-79ジムが握手したので有った・・・

「ガンダムタイプと来たか・・・お前に乗りこなせるのか中尉・・・」

「ええ・・・そちらこそ慣れないMSにお気をつけ下さいシャンプー少佐殿？」

「私はリンスだーっ!!」

イエーガーに押搦られたリンスのジムが掴み掛かろうとすると、こう言う時の為に待
機していたブラックウイドウ隊のイワンのジムが二人の間へと割って入った。

「まあまあ？ここは落ち着いて・・・」

「貴様はウィンチェスカの．．．!?」

そう驚くリンスのジムがイワン機を振りほどくと、余りいい気になるなよ．．．? 睨んだリンスが部下達と共にスタート地点に向かおうとした所でそのリンスからそう言えは．．．?とアメリカ達は声を掛けられた．．．

「ミラー少佐も共に?」

「ああ、お前が負ける所を特等席を見させてもらうかと思つてな．．．?」

そう答えながらニヤニヤとカスケード隊のホバートトラックへと入るミラーの姿にあの女狐め!!と声を荒たリンスはコクピットの中でぐぬぬ．．．とイラつく声を上げた。

「おい、こうなったら全員始末する様に別働隊に伝える!」

「ハツ．．．」

控えていた自分の部下に指示を出したリンスはククつと楽しそうに笑みを浮かべた。

「我が主に逆らうとどうなるかその身で知ると良い・・・」

そう呟くリンスで有ったが・・・こうなる事を気づいていたアメリア達の反撃を知る由も無い無い彼は既にカスケード隊の手の内に有る事まだ知らないので有った・・・

厄介な奴等9

「ダガーリーダーから各機へ、気を引き締めて掛かれよ．．．？」

模擬戦と言う名の教導隊主導の評価試験が開始されると基地守備隊の第一小隊長で有るデイヴィッド・リンズ少佐は後に続く元特務隊でまとめられた部下達に注意を促した。

「珍しいですね．．．少佐がそんなに緊張してるとは．．．？」

「当たり前だ．．．何しろあのウォーカーが鍛えた部隊だからな。」

スペースノイドと言う点を除けばそれなりにアメリカを評価しているのかリンズが自分の副官で有るダガー一に対してそう答えていると、心配しすぎじゃないすかー？と彼女が居なくなってから特務隊に入隊した隊員からリンズのコクピットにニヤついた声で通信が入る。

「特務の先輩から聞きましたかけど誰でも寝る相当なビツチって聞いてますよ?」

「マジかよ!?!さつき見たけど結構可愛かったぜ・・・」

「くうく俺もヤリてえ!!」

そんな下品な会話を始めるダガー3率いる第二小隊に黙らんか!とリンスは怒鳴り声を上げた・・・

「へ・・・隊長・・・?」

「良いか?さつきも言ったが・・・アイツの事を甘く見ると痛い目に合うぞ。」

それは自分に対しても有るのか・・・真剣な顔で忠告して来るリンスに対し第二小隊長で有るダガー3はキョトンとしながら了解と答えた。

(つたく・・・スペースノイドなんかにはビビり過ぎだろ・・・?)

妙に慎重なリンスに向かってダガー3がコクピットの中で誰にも聞こえない様にチツと舌打ちするとメインモニターに反応が有った・・・

「センサーに感有り！MSの反応です!？」

「カスケード隊か!」

ダガー3の声にリンス率いる基地守備隊のRGM-79ジムが90ミリブルパツプマシンガンを全機構えると、ちよつと待って下さい・・・と副官のダガー1からストップが掛かった。

「センサーには一機しか反応が有りません・・・誘ってるのでは?」

「それも有り得るな・・・」

副官の冷静な提案にリンスが思案顔を浮かべていると、ドドドツ!!とカスケード隊のRGM79「G」陸戦型ジムが100ミリマシンガンを撃って来るのでクソ!と声を上げたダガー3は部下達と共に機体をビル陰に隠しながら撃ち返した。

「リンス隊長!迎撃に出ます!!」

「少し落ち着けダガー3!ここを出ると向こうの思うツボだぞ!」

「コッチの方が腕は上です!たった一機・・・すぐに倒せば問題無いですってえ!!」

リンスの指示を無視したダガー3が部下二機を引き連れ前方の陸戦型ジムに向かって先行しだすと、止せ!これは罠だ・・・と叫ぶリンスに支援に向かいますか?とあくまで冷静な副官で有るダガー1は淡々としながら首を傾げた。

「不要だ・・・私達はこの場で待機し第二小隊の報告を待つとする。」

「了解しました。ダガー3の戦果に期待と言う所ですね。」

「まあ、そう言う所だ・・・」

〃〃〃

「つたく・・・たかが一般兵ごときに特務隊がビビッてられるかつつーの！」

「そうですね。大体なんすかね実験部隊って？俺達実戦部隊の事を舐めてますよね！」

イライラしながら半壊したビル群を突き進む隊長のダガー3に向かって追隨しているダガー4がカスケード隊のことを馬鹿をする様にククつと笑いだすと、ホントホント！と一番最後尾につくダガー5からもニヤニヤと相槌が返って来た・・・

「つていうかそろそろ隊長が特務のトップに立つても良いんじゃないですか？」

「おっそれ良いな．．．どうも最近のリンズ少佐は日和ってる感じだしここは隊長が!!」
「止せて．．．だけどもあ．．．ここで俺が活躍してお前達が後押ししてくれたらワン
チャン有るかもな?」

そう煽って来る部下達にダガー3もまんざらじゃ無いのか悪そうな笑みを浮かべて
いると．．．

「その時は自分達をそっき．．．」

そう言いながらダガー5からの通信がノイズとなって途切れるのでダガー3とダ
ガー4のジムは慌てて背後を振り返った。

「え．．．」

「ダガー5．．．?」

頭部を撃たれ撃墜判定となったダガー5のジムが崩れ落ちるのを見ながら二人が驚き固まると、おつかしいな・・・？と角待ちしていたカスケード隊の二番機で有るレオン少尉は陸ジムのコクピットの中で首をかしげた・・・

「たった三機しか居ませんよジャック隊長？」

「お前が一機倒したから残り二機な・・・」

そう言いながらも反対の角から出て来たカスケード隊第二小隊長で有るジャックIIアルヴィン中尉の陸ジムがダガー3とダガー4に向かってジムライフルを構えた。

「ホントはここで基地守備隊を仕留めるつもりだったんだが・・・アメリカの言っていた様にお前さん達の隊長は慎重が過ぎる様な？」

そう言いながらモニター越しにニヤつき出すジャックに向かってダガー3からちよつと待てと？と焦った声が上がった・・・

「まさか俺達を餌にしたって事か．．．？」

「まあ、そういうことみたいだな。」

そんな声を上げるダガー3に向かってジャックとレオンの陸ジムの向こうから更に今まで陽動を担当していた3番機のユウヤの陸ジムが逃げ場を無くす様に100ミリマシンガンを構えたので有った。

くくく

厄介な奴等 10

そして、その頃・・・自軍陣地内でジャック率いるカスケード隊第二小隊と特務隊員で構成された基地守備隊との戦いにアメリカはハア・・・と溜息をついていた。

「まさかあんな幼稚な陽動に特務が引つ掛かるとは・・・ウチの事を舐め過ぎてますね。」
「ホントですう。これで6対3・・・こつちが負ける要素がありませんね先輩♪」

ルール上指揮車の誘導無しにも関わらずに一機の損失も無く見事第一陣を撃破したジャックの指揮に恋人のミリイも嬉しそうな顔を浮かべた。

「それでも特務だろう・・・あれでは体たらくが過ぎやしないか？」

『それはカスケード隊の練度と特務隊が違い過ぎる結果と思いますよミラー少佐。』

少し不満そうなミラーに審判役として配置して有る教導隊ブラックウイドウ隊長の有るヒルデガードゥインチェスカ中尉の通信が入って来た。

『そもそも分かりきっていた結果ですし……ここから本番かと……』

「だな……。その時は頼むぞウインチェスカ中尉。」

リンス率いる特務で構成された基地守備隊の不穏な動きにヒルダとミラーが神経を尖らせていると、第一小隊が敵陣地に到達ですう!!?とミリイから報告が上がった。

「さあて……。どう動きますかリンス……?」

模擬戦での勝利にチェックメイト寸前で有るアメリカはモニター越しに見えるリンスの部隊に向かって不敵そうにクスッと微笑んだので有った。

くくく

「CSD1イーガーからCSD2、3へ・・・状況を報告しろ。」

「こちらCSD2シヨウ・・・各センサーに反応無しです。」

「CSD3チャーリーも同じく・・・」

廃ビルの中に囲まれた幹線道路をアローフォーメションで組んだイーガーのRX-79「G」陸戦型ガンダムを先頭にシヨウとチャーリーのRGM-79「G」陸戦型ジムがその背後に付きながら進んでいると、妙に静かですね・・・？と二番機のシヨウは敵陣地に入ったにも拘わらず何も気配が無い事に緊張を覚えた・・・

「俺達にビビッて隠れたんじゃね？」

「バカヤロウ！既に数的に有利なのは確かだが敵を甘く見ると死ぬっていつも言ってる

だろうがチャージャー!!」

そう叱咤するイエーガーの怒声に調子に乗ったチャージャーからわーっってますよ・・・と少し反省した様子の声が返って来ると、やれやれ・・・と苦笑いを浮かべたシヨウはメインモニターの左端にフラッグ役で有る第三小隊のガンタンクを視認した。

「CSD2から各機へ10時の方向にフラッグを確認しました。」

元は公園だったのか開けた場所に待機したガンタンクにイエーガーはシヨウの報告を聞きながら左右を見渡した・・・

「何か反応は有るか・・・?」

「いいえ・・・ですが、畏で有る事は間違いかと思いますね・・・」

「俺も同感だ。」

あまりにもあからさまなシチュエーションに小隊長のイエーガーが戸惑っていると、じゃあ俺が行きますよ！とチャーリーの陸ジムが前に出た。

「もしもの時の援護は頼んだぜ．．．？」

「待てよ！お前が行くんなら僕が．．．」

そう言いながらシヨウの陸ジムがチャーリー機の肩を掴みだすと、良し分かった。とイエーガーの陸戦型ガンダムは二機の前に立った。

「俺がこの隊の小隊長だ。絶対にフラッグを獲って来てやる．．．」

「流石イエーガーさんっ!!」

どこか二人に乗せられた気がしないでもないイエーガーがお．．．おう？と少し納得しがたい顔で陸戦型ガンダムをフラッグで有るガンタンクへと前進させた．．．

(意外に誰も居ないんじゃないか・・・これ?)

基地守備隊の先行部隊が全滅してからのリンスの動向が不明な事も有り向こうもコツチの裏どりに気付いてないと思っただイエーガーはワンチャン行けるぞ!とガンタックに触れようとした瞬間・・・ビーツとロックオンアラムがコクピットに鳴り響き出した。

「やっぱりか!? 一体どこから・・・」

「イエーガーさん!! 右に回避してっ!!?」

後方支援が得意で視野の広いシヨウの焦った声に敵機の位置が分からないイエーガーが慌てて回避行動を取ると、バラバラっ!!とイエーガーの陸戦型ガンダムが居た位置に無数のペイント弾が着弾した・・・

「今のを避けますか・・・?」

「こつちには優秀なマークスマンがいるからな．．．」

ようやく姿を現したリンス率いる基地守備隊にへつとイエーガーが笑うとチツと舌打ちリンスは時間を稼ぎなさい！と命じると副官のRGM-79ジムがマシンガンを構えイエーガー機へと迫って来た。

「させるかってええー！！」

「クッ！」

そう叫んだシヨウの牽制射撃によって副官のジムが怯むと、何をしている！と僚機をみたが既に遅くチャーリーの陸ジムによって制圧されていたので有った。

「思ってたより弱えな．．．特務って？」

隙について飛び込んだチャーリーが模擬戦用に出力調整されたツインビームスピアを倒れたジムに突きつけながらニヤつくと、たった一機となったリンスから悔しそうな

顔でぐぬぬ……と声が上がると……

「ドンっドンっドンっ!!」

「何だ……信号弾か……?」

急に上がる三発の青色の信号弾にイエーガー率いるカスケードの面々が呆気に取られていると、準備が出来た様ですね……と呟いたリンスはペイントが入っていたマガジンを捨てながらニヤッと笑みを浮かべた。

「これからが本番ですよカスケード隊……?」

そう言いながらリンスが実弾が入ったマガジンを90ミリブルパップマシンガンに差し込むと、全機散開しろっ!!?と叫んだイエーガー達は慌ててビル陰に隠れたので有った……

}

}

}

厄介な奴等 1 1

「ねえ！今の見たアメリカ!!？」

「ええ・・・今の信号弾でしたね。」

こちら側の陣地での動きがまったく無い為にと暇つぶしにとホバートラックの銃座に上がっていた情報部のケイキタムラ少尉とカスケード隊の指揮官で有るアメリカンウオーカー軍曹は慌てて下に降りるとミレイ！と自分の補佐を任せているミレイキタムラ伍長に現在の状況を報告させた。

「たつた今CSDIイエーガーからリンス少佐の基地守備隊と交戦中エンゲージとの通信が入りましたよお先輩!!？」

そう答えながらミレイがヘッドセットを押さえながら振り返って来ると、向こうも本気みたいですね・・・とアメリカは形振り構わず攻撃を仕掛けて来るリンス達に対し

ハア・・・と溜息をついた・・・

「一番マズイのは向こうのフラッグとして待機させているCS D7ですね・・・まだ離脱は出来て無いんですよね!？」

「そんなの無理ですよお!!基地守備隊のど真ん中で第一小隊も近づけない模様ですう!。」

そんな焦った顔をするミリイの報告にアメリカがチツ!と舌打ちしていると・・・ピーつと通信アラームが鳴るとその相手はヒルダ率いる教導部隊ブラックウイドウ隊の三番機で有るジャンノベル准尉からだった。

『お話を聞かせて頂きましたが・・・要は向こうに居るレティ曹長達を離脱させたら良いんですよね?』

「えっ?ええ・・・そうですけど」

『じゃあ僕の機体にそちらのデータをリンクさせて下さい・・・早く!』

「そんな事を言われてもまずは隊長のヒルダ中尉を通して貰わないと・・・」

そう急かして来るジャンに対しアメリカが困った顔を浮かべていると、話は聞いていたわよ?と彼の上官で有るヒルデガードキステイス中尉の声がアメリカのヘッドセットに聞こえて来た。

「ジャンの腕は私も保証するから是非手伝わせて頂戴アメリカ!」

「ヒルダ中尉がそう言うのなら・・・ミリイ？」

「もうやってますってえ・・・ノベル准尉の機体とウイスキーードッグをリンク！CSD8とCSD9をその指揮下に置きますよお!!」

そう声を上げたミリイはアクティブソナーで的確な基地守備隊の位置を把握すると、了解！と答えたジャンのRGC-80ジムキャノンが240ミリキャノン砲を肩に降ろしながら彼女の指示を待った・・・

「ポイントは130、241・・・全機一斉射あぁーっ!!」

そう叫ぶミリイの声と同時にジャンのジムキャノンの砲撃がCSD8とCSD9のガンタンクと同時に発射されるとリンス達の基地守備隊のMS部隊を襲ったので有る。

~~~~~

「なっ何だっ!？」

「方向からしてカスケード隊からの攻撃ですリンス大佐!」

ジャン達からの砲撃でリンス達の基地守備隊が慌て出すのを見たタンクはコクピッ

トの中でククつと楽しそうに笑った。

「どうやらアメリカ達のうだな・・・ズラかるぞレテイ?」

「了解です。舌を噛まない様に気を付けて下さいよ隊長つ!」

そう叫んだレテイがガンつとフットペダルを踏む込みガンタンクを急発進させると、隊長あれを!?とリンスの部下が乗るRGM-79ジムから90ミリブルパップマシンガン向けられたレテイはチツ!舌打ちしながらフットペダルを踏み込むとガンタンクを右にスライドさせながら強引に狭いビルの合間へと機体を入り込ませた・・・

「ダガーリーダーからダガー1へ、奴等は人質して使う。絶対に逃がすな!」

「了解。行くぞダガー2!」

「了解!先行します。」

リンスからの指示に副官で有るダガー2が部下で有るダガー3に続いてタンク達が入っていった狭いビルの谷間に侵入すると、しつこい奴は嫌われるぜ!とタンクは背後から追って来る基地守備隊のジムに向かって悪態をつきながら足元の操舵手で有るレテイを見た。

「逃げ切れるかレテイ?」

「ええ勿論・・・と言いたい所ですがコイツの足じゃすぐに追いつかれますね。」

「じゃあ・・・やるしか無いか。」

最悪な状況ながらもニヤつと不敵な笑みを浮かべたタンクはコアファイターの搭載をオミットされ旋回が可能となったガンタンクの胴体を背後へと回すと肩部に搭載された120ミリ低反動砲の銃身をゆっくりと背後から迫って来る基地守備隊のジムへと向けたので有る。

「なっ・・・ダガー1敵機が!!」

そう叫ぶダガー2の機体がドンっ!と鳴る轟音と共に脚部を撃ち抜かれそのまま前に崩れると、一体何が!と驚く副官のダガー1のジムが警戒する様に左手のシールドを構えるのだが、もう一丁!!と叫んだタンクの放ったガンタンクからの砲撃にシールドを吹き飛ばされたダガー1はそのまま背中から地面へと叩きつけられた・・・

「クソっ!逃がすかーっ!!」

「当たるかよバーカ!!」

たった一機のガンタンクにしてやられたダガー1からの銃撃にへへつと笑い返したタンクは良くやったなレティ?と操舵手で有る優秀な部下を褒めた。

「隊長の腕が有ったからですよ。そろそろ抜けます!」

そう叫んだレティがガンタンクをビルに合間から突き抜けると、ビーつとなる口ッ

クオン反応にもう回り込まれたのか!?!と焦ったタンクは周囲を見渡した・・・

「タンクか!?!驚かせるな・・・!!」

「それはコツチの台詞だっつの・・・」

目の前に見えたイエーガーの陸戦型ガンダムが100ミリマシンガンを下すと運良く第一小队と合流出来たタンクとレティは緊張が抜け安堵したのか揃ってハア・・・と息を吐いたので有った。

## 厄介な奴等12

「CSD1より第一小隊各機へ数はコッチの方が上だ。一気に畳み掛けるぞ!!」

タンク達のガンタンクの確保に成功したイエーガーはリンス達基地守備隊への今までの鬱憤を晴らすように陸戦型ガンダムの100ミリマシンガンを連射すると、了解!と答えたCSD2とCSD3の陸戦型ジムも半包围する様に牽制射撃を始めた。

「クツ・・・コイツ!!」

チャーリー機を回り込ませまいとリンスの副官で有るダガー1のジムが90ミリブルパップマシンガンを撃ち始めるのを見てチャーリーはチツと舌打ちしながらビル陰へと機体を隠す。

「向こうも結構ヤルじゃねえかよ・・・」

100ミリマシンガンのマガジンを交換をしながら楽しくなつて来やがったぜ・・・とニヤつくチャーリーがフットペダルを踏み込みバーニアを吹かせながら陸ジムをビル陰から飛び出させると、速いつ!?とカスケード隊の迷メカニックで有るソフィー||ホワイト伍長によりチューンアップされた陸ジムの機動性の高さにダガー1はFC<sub>火器管制</sub>Sによるロツクオンが追いつかない・・・

「何で当たらないんだっ?!」

「何てセツトアツプしやがるんだよソフィーの奴っ!」

チャーリーはチャーリーでかなりピーキーにチューニングされた機体のGにビリビリと耐えながら腰のアタッチメントからツインビームスピアを取り出すと左右にステツプしながらダガーのジムへと一気に間合いを詰めた。

「貰ったあああーっ!!」

「あまり調子に乗るなよ!」

そう叫んだチャーリーの陸ジムによる斬撃をダガーのジムが咄嗟に引き抜いたビームサーベルで凌ぐと、良い反応するぜ・・・と苦笑いを浮かたたチャーリーはバチバチと目の前のメインモニターでスパークしながら鏝迫り合いをしているリンスの副官へと賛辞を贈った・・・

「何をしているダガーっ!!」

「なっ!!」

急に鳴り出したロックオンアラームと同時にダダダッ!と銃撃を受けたチャーリーが慌ててフットペダルを踏み込み陸ジムを後退させると、流星は特務の隊長と言った所か・・・イエーガーと対峙していた筈のデイヴィッド・リンス中佐のジムが現れた。

「流星に分が悪くなり過ぎました。一旦離脱し別動隊と合流しますよダガー!」



「・・・了解しました。」

チャーリーとの戦いを水を差されて少し不満そうな副官で有るダガーのジムがリンスと共にバーニアを吹かし離脱して行くと、おいちよつと待てよつ!!とその二機を追いかけてようとするチャーリーの下ヘイエーガーの陸戦型ガンダムとシヨウの陸ジムが追いついて来た・・・

「チャーリー無事か!? スマン・・・リンスの野郎に上手く抜かれちゃった・・・」

「そんなのは後で聞きますって! それよりも奴等が向かった方角は俺らの本陣・・・ウイスキードッグが待機してる方です!!」

イエーガーの謝罪を後回しにしながらもアメリカの下へ急ごうとするチャーリーの陸ジムの肩をシヨウの陸ジムが掴んだので有る。

「アメリカが心配なのは分かるけどさ・・・少し落ち着けて?」

「・・・恵りい。ちよつと頭に血が上っちゃったみたいだな・・・」

同期で相棒でも有るシヨウの声に少し落ち着いたのかチャーリーの様子に二つと笑みを浮かべたイエーガーはそろそろ良いか?と首を少し傾げた。

「いつでも。」

「どこでもー！」

「それじゃあ俺達の姫君を救いに行くとするか・・・俺に付いて来いよお前ら！」

そう叫んだイエーガーの陸戦型ガンダムがバーニアを吹かし飛ぶとショウとチャーリーの陸ジムもそれに続きリンス達を追撃する為にアメリカ達ウイスキードッグの下へと急ぐので有った・・・

~~~~~

「先輩っ！ジャック達も基地守備隊の第二小隊と交戦に入った模様ですう!!」

「練度はコッチが上でも戦術面では向こうの方が上みたいですわね・・・」

ヘッドセットを押さえながら振り返って来るミリイに基地守備隊・・・もとい元特務隊が行う展開の早さにアメリカがチツと舌打ちしていると、おいウォーカー？とウイスキードッグの中で呑気そうに煙草をふかしている情報部のアリスⅡミラー少佐から声を掛けられた。

「こういう時は焦った方が負けだぞ？」

「ご忠告は有り難いんですがこの中は禁煙何ですけど!!?」

イラッとしたアメリカの声に分かった分かった・・・と懐から携帯灰皿を取り出した

ミラーが煙草の火を消していると、ビーっと明らかに嫌なアラームがミリイのオペレーター席から聞こえだした・・・

「今度は何ですか!？」

「三時の方向からIFF《識別信号》に反応が無いMSが急接近中・・・数は一個小隊規模です!!？」

そんな焦った声を出すミリイに冗談でしょう!?!と驚いたアメリカは慌てて仲間である教導隊のヒルダに救援を求めたのだが・・・

『悪いけどコッチにも敵が来てるのよ!片付け次第駆けつけるからソッチでどうにか凌いで頂戴!!』

向こうも大分ぜつぱ詰まっているのか焦った声でヒルダから通信を切られたアメリカはああもう!と声を上げると傍で待機しているフラッグ役のCSD8とイザと言う時の後方支援で置いて来たCSD9のガンタンクに砲撃支援を指示したので有る。

「MS隊の援護が無い為に貴方達の力量に私達の命運が掛かっていますよ。各自任意で砲撃開始!」

アメリカからの言葉によるプレッシャーにこいつは外せねえ・・・と気合い入れ直したCSD8と9のガンナーはいつもより慎重に照準をつけると・・・スコープに映った

機体にギョツとした・・・

「こちらCSD8!06だ・・・現在接近中の敵機はジオン機だぞ!」

ザクだぞ叫ぶCSD8のガンナーの言葉に何でザクがここに!?!と驚いたアメリカがミリイを見ると音紋も照合したらしくコクつと領けられた。

「やれやれ・・・向こうも本気で潰したい様だな・・・?」

そう呟いたミラーは苦笑いを浮かべながら火の点いてない煙草を啜えたので有った・・・

厄介な奴等13

「ファングリーダーから各機へ再度確認するぞ。目標はカスケード隊の指揮車両だ。他には目をくれず確実に仕留める良いな！」

「イエツサー!!」

二機の僚機からの無駄のない返事に宜しい。とリンスの命令で構成された鹵獲機のMS-06J陸戦型ザク三機を率いるファングリーダーはターゲットで有るアメリカとミラーが乗るホバートラックを視認した・・・

「悪く思うなよ・・・これも命令だからな。」

そう呟きながらファングリーダーがザクの120ミリマシンガンをウイスキードッグに向けてロックすると同時に自分のコクピットにもロックオンアラームがピーつと鳴り響き出したので有る。

「何だ一体!!？」

「隊長！カスケード隊のガンタンクです。我々の方に向かって突っ込んで来ますっ!!？」

ファング1からの報告に何だと！と驚くファングリーダーのザクが120ミリマシンガンを用意した。ファング1のザクの脚部を撃ち抜いた。遅かった……

「貰ったあ!!！」

そう叫んだCSD8はガンタンクが誇る120ミリ低反動砲を撃つとドンっ!!と鳴る咆哮と共にファング1のザクの脚部を撃ち抜いた……

「今だ離脱しろウイスキーダッグ!!！」

ウイスキーダッグのピンチに駆け付けて来たCSD8が更に特務隊のザク2機を相

手にカバーに入るとアメリカはアメリカはギョツと拳を握りながら叫んだ。

「こんなバカげた戦闘で二階級特進何て有りませんからね！」

「分かってるって！俺達も適当な所で逃げるからサツサつと行け!!」

「クツ・・・ソフィー！全速で後退・・・例のポイントまで急いで下さい。」

「りよつ了解っ！全員しつかり掴まっててくださいいねっ!？」

ガンランチャーを撃ちながら前進するガンタンクとすれ違う様にウイスキードッグの操舵手担当のソフィーが巧みな操作でバックスピンスさせながら離脱を図ろうとする
と、逃がすかよ!!と叫ぶファングリーダーのザクに向かってCSD8のガンタンクが体当たりをかましたので有る・・・

「こんのーっ!!」

「タンクの癖に生意気なんだよ！」

そう叫んだCSD8のガンタンクに向かってファングリーダーのザクが腰から抜いたヒートホークを振り上げるとキャタピタラを焼き切りCSD8は操縦不能となりそのままビルへと突っ込んでしまった。

「CSD8!!?」

「生きてる……がスマン。これ以上は動けそうに無いな……?」

「まったくもう……後で回収しますからそこで大人しくして置きなさい！」

CSD8の安否にホツとしながらも窮地を脱していないアメリカは更に追撃を続けるザク二機に向かってチツと舌打ちを向けた。

「なあウオーカー……奴等の目的は私とお前……どっちだと思う?」

「唐突ですね・・・そんなのリンズに嫌われている時点でどっちとも決まってるじゃないですか。」

「だよな・・・ホント人気者は辛いなウォーカー?」

火の点いてない煙草を唾えながらミラーがニヤつと笑みを浮かべていると、冗談を言ってる場合ですか!?と彼女の部下でアメリカの同期でも有るケイⅡキタムラ少尉はホバートトラックの上部銃座に着いた。

「ちよつとケイ!? 20ミリなんかじゃMSの装甲は撃ち抜けませんよ!」

「そんな事は知ってるって・・・だけどこのまま何もしないまま死ぬ訳には行かないのよ!!」

そう答えたケイがウイスキードッグに装備された対空用20ミリバルカン砲のコツキングレバーを引くと目の前に迫るザクⅡJ型に向かってトリガーを引いたのだが、ダラララッ!と鳴る景気良い掃射音と比例して全てザクの装甲に銃弾が弾き返されたケ

イからチツ！と悔しそうな顔が浮かんだ・・・

「ねえ応援はまだなの！このままじゃ追いつかれるわよ!？」

護衛も無いホバートラック一両相手に余裕なのか慎重なのか・・・真つすぐ距離を詰めて来る特務隊のザク二機に恐怖を感じたケイが再度20ミリバルカン砲を撃とうとした瞬間に私に考えが有りますっ！とカスケード隊でMSの専門的な知識を持つソフィーⅡホワイト伍長から声が上がった。

「いくらMSと言ってもその全てに装甲を張る事は不可能ですっ!？」

「勿体ぶって無いで早くしてくんない!!？」

そんな焦った声を上げて来るケイにおつとそうでしたっ！と答えながらエヘへと笑ったソフィーがザクの持っている120ミリマシンガンとドラムマガジンの隙間を狙う様に指示を出すとケイは首を傾げながら20ミリバルカン砲のトリガーを引いた・・・

「一か八かだけど・・・当たれええー！！！！」

そう叫んだケイの20ミリバルカン砲がソフィーの指示通り命中すると追って来たファングリーダーのザクが持っていた120ミリマシンガンのドラムマガジンを強制的に飛ばしたので有る。

「さっすがケイ!?!相変わらず良い腕してますね?」

「ま・・・まあね。」

ホバートトラックの中から聞こえて来るアメリカの褒める声にケイが苦笑いを浮かべながら答えていると、コイツつ!!とファングリーダーのザクにサポートとして背後に付いていたファング2のザクが飛び出して来た・・・

「ケイ!!？」

「無茶言わないでよ!!」

慌てた声を上げるアメリカにケイが咄嗟にバルカン砲を構えると・・・

「そうはさせるかよ!!」

とそう声を上げながらチャーリーの陸戦型ジムが横から飛び出すとファング2から撃たれた120ミリマシンガンを左手のシールドで受け止めたのであった・・・

厄介な奴等 14

「ここは俺に任せて離脱しろウイスキードッグ!!」

そう叫んだチャーリーの陸ジムがアメリカ達の乗るホバートラックを守ろうとザクから発砲された120ミリマシンガンを左手の小型シールドで受け止めながら割り込むと、チャーリー!?!とアメリカは焦った声を上げた。

「出しますよアメリカさんっ!!」

「クツ．．．すぐに援護に向かいますからね!!」

急かす様に言つて来るソフィーの声にアメリカもそう言い残しホバートラックを前進させると、やれやれ．．．とチャーリーは目の前のザク2機を相手にコクピットの中で苦笑いを浮かべた。

「取り合えず助けに間に合ったのは良いけどよ．．．少し恨むぜイエーガー隊長にシヨウ．．．?」

思っていた以上に状況が悪いチャーリーはこの数分前に上官で有るイエーガーと相棒のシヨウウから言われた事を思い返した．．．

くくく

「何でザクが居るんだ!!？」

「僕が知るかよっ!!」

リンス達を追撃していた第一小隊の前に突然現れたMS-06JザクⅡの一個小隊に泡喰ったショウとチャーリーが応戦していると、おいヤバいぞ!!?と焦った声の小隊長のイエーガーから二人の下に通信が入って来た。

「ウイスキードッグが別動隊に襲われているらしく応援を求めている・・・」

「こんな時に冗談だろ・・・クソっ!!」

恋人で有るアメリカの事が心配なのか焦り出すチャーリーに大丈夫だって・・・とショウが声を掛けると、仕方無いな・・・とイエーガーは二つとモニター越しのチャーリーに向かって笑みを見せた。

「ここは俺とショウで何とかするからお前はウイスキードッグの援護に迎え！」

「いや、でもっ・・・」

「良いから早く行けっ・・・アメリカの事が心配なんだろ？」

戸惑いを見せるチャーリーにショウの陸ジムからもグツと親指を立てられたチャーリーは悪りい!!と声を上げるとフットペダルを踏み込み陸ジムのバーニアを吹かすとその名の通りアメリカの下へと飛んでやって来たので有った。

くくく

「アメリカさん着きましたよっ!!」

そう叫んだソフィーがウイスキードッグを急ブレーキを掛け停車させると、何よこれっ?!とそのまま銃座に着いていたケイは偽装され隠されていたMSが有るのに驚く声を上げた。

「念のために用意していた予備機です。ソフィー手伝って下さい!」

「ハイっ行きますよーっ!!」

そう言いながら二人がシートを引っ張ると、予備機となったRGM-79「G」陸線型ジムの姿が現れるとアメリカは脚部のパネルを操作し乗降用ウインチを使いコクピットの中へと乗り込んだ・・・

「OS起動・・・FCS異常なし、IFFの照合を確認。立ち上がるので離れて下さい!」

外部スピーカーから聞こえるアメリカの陸ジムの声に距離を取ったソフィーはインカムを押えながらアメリカさんっ!と叫んだ。

「注文通り機体からのジェネレーターの出力はバーニアと各部アクチュエーターに全振りしてますからオーバーヒートだけには気を付けて下さいよっ!!」

「分かってます。それじゃあ行きますよーっ!!」

そう言った傍から機動性重視にチューニングされたアメリカの陸ジムがバーニアを吹かしチャーリーの下へとジャンプすると、もうアメリカさんっ!!とソフィーからポンと言った顔で両手が上がったので有った・・・

「ミリイ聞こえますね。これより私のコールサインはCSDリーダーとしますので、各小隊に通達をお願いします。」

「それは良いですけどおソフィーが怒ってますよ?」

「後で謝って置きます・・・それよりもミリイ?ここから先の指揮は貴女に任せますね。」
「ええっ!?!何で私があゝ!!!」

急に振られたカスケード隊の全体指揮と言う大役にミリイから驚く声が上がると、何を言ってるんですか・・・とアメリカはモニターの向こうに映る彼女に呆れた顔を向けた。

「今から戦闘に入ると言うのに私からの細かい指示は無理に決まってるでしょう。」

「それは分かりますけどお・・・」

「大丈夫です。ミリイなら出来ますよ？何て言っただって私が育てた自慢の後輩ですからね！」

そう答えながらクスッとアメリカが微笑むと、分かりましたあ!!と気合いを入れ出すおだてに弱い後輩の姿にアメリカはホントに大丈夫ですかね・・・と若干不安を感じながらチャャーリー機の援護に急いだ。

~~~~~

「これでお終いだ!!」

馬乗りになったザクⅡのヒートホークをビームサーベルでどうにか受け止めているチャャーリーの陸ジムにもう一機のザクⅡが120ミリマシンガンを構えた・・・

「悪く思うなよ・・・これも命令だからな。」

「冗談じゃねえ!退きやがれクソツタレ!!」

今までに無いピンチにチャャーリーが焦っていると、チャャーリー!!と聞こえて来るアメリカの通信と共に自分の陸ジムの上に乗っていたザクⅡの頭部が吹き飛んだので有る。

「何だ一体っ!?!」

「良いから退けっつてんだよ!!」

急に視界を奪われ泡喰ったザクⅡを自分の機体から剥がしたチャーリーは同じく驚いているもう一機の

ザクに向かつて1000ミリマシンガンを向けた。

「これでも食らいやがれ!!」

「チッ！増援か!?!」

右肩のシオルダーシールドで難を逃れたザクのパイロットはチャーリー機からの射撃を受けながら新たに現れたアメリカの陸線型ジムに舌打ちした・・・

「生きてますねチャーリー!」

「へへッ・・・当たり前だろ。助かったぜアメリカ・・・」

窮地を脱し安堵した声を出すチャーリーにアメリカもホッとすると、さて・・・形勢逆転ですね?と呟きながら運用試験用の装備で有るハンドガンを右手にヒートナイフを左手に構えたアメリカの陸ジムがジリジリと間合いを詰めると予想外の展開に二機のザクが後ずさりを始めたので有る。

## 厄介な奴等 15

「どうするファング1っ!？」

「どうするも何もヤルしかないだろう!!」

アメリカ機の登場で五分となった戦況に両機で有るファング2からの焦った声に後が無いファング1が120ミリマシンガンを撃ち始めると、この野郎っ!!?と往生際の悪い特務隊の二機に向かって廃ビルに隠れながらチャーリー機が100ミリマシンガンで応戦した。

「チャーリー!スリーカウントで突っ込みますので援護を頼みます。」

自分の背後につきながらハンドガンの残弾数を確認するアメリカ機の様子に無理をするなよ・・・とチャーリーが心配そうな顔をモニター越しに向けてと、誰に言ってるんですか?と呆れた顔をしたアメリカはクスッと微笑むと3・2・1!とカウントしな

がらフットペダルを蹴っ飛ばしたので有る！

「オラアアアアーっ!!」

「出て来たぞファンング2！撃て撃てっ!!」

「速すぎてFCS火器管制が追いつかないっ!!?」

アメリカのタイミングに合わせたチャリーの陸ジムから援護射撃に泡喰った特務隊ザクの二機は機動性に全振りしたアメリカ機の動きに付いて来られず120ミリマシンガンを全て外すと、隙有りです！と声を上げたアメリカはビル横壁を蹴りながら陸ジムのバーニアを吹かした。

「デヤアアアアーっ!!」

そう叫んだアメリカが陸ジムを着地させながら間合い詰めるとザクの装備していた120ミリマシンガンに向かってヒートナイフで斬り上げると、なっ!!?と驚いたファン

グーは武装が無くなり固まってしまった・・・

「フアング2!!!」

「おいおい止せって・・・ここまでにしようぜ?」

そう言いながら100ミリマシンガンを構えるチャーリーの陸ジムにフアング2のザクも120ミリマシンガンを下ろすと、降参する・・・と言って来るフアング1にアメリアはやれやれ・・・安堵した様にフウと息を吐いた。

「CSSDリーダーよりウイスキードッグへ現状の終了を確認です。これより合流しますね?」

「ウイスキードッグ了解・・・って!?!ちよつと待って下さい先輩く〜!」

そんな焦った声を上げて来るミリイにアメリアがチャーリーと首を傾げていると・・・

「おやおや・・・情けないですぬ人達ですぬ？」

そんな声を上げながらリンスのジムがファング1と2のザクに向かって90ミリブルパップマシンガンを撃ち始めると、リンス隊長!?!と驚く二機に何やってんだ手前え!!と叫ぶチャーリーと共にアメリカは陸ジムの小型シールドで彼らを庇ったので有る。

「リンス!! 一体何を!?!」

「こうなったら証拠隠滅の為に消えて貰うしか無いでしょう・・・?」

自分の保身の為に部下に向かって武器を構えるリンスに向かってふざけるなあああ!!!とキレたアメリカが両手に持ったヒートナイフを持ち一気に間合いを詰めると、死ねウオーカー!!と叫んだリンスはバックパックから引き抜いたビームサーベルを振り降ろした。

「向こうの方が早いつ・・・!!」

土壇場での大ピンチにアメリカが驚くと、右に飛べええ!!と叫ぶシヨウの声に慌ててフットペダルを踏み込んだアメリカにシヨウはリンズのジムが振り上げたビームサーベルを180ミリキャノンで撃ち抜いたので有る・・・

「何だどっ!?!」

「ギリギリで間に有ったみたいだな!」

驚くりンズと相対してシヨウから安堵する声が上がると、用意して良かったですっ・・・とソフィーがホッとするとアメリカがこれでお終いですね?とハンドガン突きつけると、追いついて来たイエーガーの陸戦型ガンダムとチャーリーに陸ジムによつて抵抗が出来なくなったリンズはチツ・・・と舌打ちしながらコクピットから出て来た・・・

「これでお終いね・・・?」

「何がですケイ・・・!?!」

「いや・・・リンスとの確執がよ!!」

そう言いながら腰に手を当てるケイにそう言えばそうですね!と答えたアメリカはクスツと微笑んだ。

「だけど・・・皆と仲間になれたお陰かりンスの事は全然怖く無かったよケイ!」

「それなら良かったわ・・・」

ニコツと微笑むケイにアメリカが手を振っているカスケード隊に駆けて行くと、じゃあ行くぞ!と特務隊の面々を連行する上官のアリスⅡミラー少佐にケイもその後にくと・・・

「せめて貴様だけでも・・・ウォーカーあああつ!!」

そう叫んだリンスが最後のあがきでMPから抜き取った銃を構えると、アメリ



アーーっ!!と焦ったチャーリーが彼女を庇う様に抱きしめるとパン!と乾いた音にこの場に居た全員から緊張した顔が浮かんだ。

「冗談ですよね・・・ねえ返事をして下さいよチャーリー!!」

「すぐにソイツを取り押さえるんだっ!!」

「アメリカ・・・アメリカ・・・無事だよねっ!」

そんな焦った声を上げるミラーとケイにうん・・・と答えたアメリカがその場で固まっているとチャーリーからへへっ々と困った様に笑みが浮かんだ・・・

「へへっ・・・どうやら生きてる様だぜ!」

そう答えながらポリポリと頭を搔き出すチャーリー向かってこのバカ!!とアメリカが泣きそうな顔で抱きつくくと、じゃあ一体誰が・・・?と銃を仕舞うミラーに向かつてすみません・・・と自機の傍で銃を降ろしたシヨウから手が挙がった。

「二人を守ろうと咄嗟に発砲したんですが……」

「ぎゃあ!!?痛い痛い……早く治療を!!」

「五月蠅い。大人しく着いて来い!」

肩を撃たれ暴れるリンスをケイがMPと共に連行するとミラーはクスと微笑んだ。

「良い腕をしてるな……カノウ少尉。」

「それでも有りませんよ……?」

そう答えた得ながらポリポリと頭を搔き出すシヨウにそうか……と答えたミラーが二つと笑みを浮かべながらリンス達特務隊を捕まえたMPのトラックへと乗り込むと、ようやく終わったな……? 呟いたシヨウはカスケード隊の仲間達と今回の騒動が終結したのを見届けたので有った……



カスケード隊、旅にでる。

離れる二人・・・その1

リンスが率いる特務隊の騒動から三日が過ぎた・・・試験部隊とは言え、特別な任務が無ければ基本的にパトロール任務に回されたカスケード隊の一行はシフトが終わるといつもの様にリンの店CASCADÉへと集まっていた。

「それで・・・そのリンスって言う人はどうなるの？」

カウンターの向こうで首を傾げる店主のリンに向かってそうですね・・・と情報部でミラーの部下で有るケイ||キタムラ少尉はビールが入ったジョッキを傾けながら思案顔を浮かべた。

「今回の件でウチの上司が尋問し特務の闇を晴らすと思うので・・・恐らく降格処分になるんじゃないですか？」

「そっか・・・これでアメリカちゃんの心配事が無くなるって事ね！」

アメリカの事が大好きなのかアメリカはそんな事を言ってくるリンにアハハ・・・と

苦笑いを浮かべた。

「そうですね・・・今回の件で流石に特務も手出しが出来ないんじゃないや・・・」

「何言ってるのよアメリカ・・・相手はあのジャミトフハイマンよ？明日にでもミラー少佐は呑気に構えていると足を救われると言ってジャブロー本部に戻るんだからね。」

「へえ・・・そうなんですか。出発前に挨拶でも・・・って!?!じゃあなんでケイはこんな所で呑気の酒を飲んでるんです!!」

ふと気づいたアメリカの驚いた声にあれ・・・言ってる無かったけ？とニヤつと意地悪そうな顔をしたケイはカスケード隊の面々に向かつて敬礼した。

「暫くの間ですが、情報部の連絡員としてここトリントン基地に配属されました。ケイキタムラ少尉です・・・宜しくお願いします!」

そんな彼女の改まった自己紹介に本当なのケイっ!?!と驚いたアメリカが抱きつくと、ちよつと訳ありでね？とケイはチラツとリンを見た・・・

（まさかとは思うけど・・・復讐に燃えたリンスから彼女を守る護衛としてにここに残る事になるとはね・・・）

「あの・・・何か私の顔に付いてるかなケイちゃん?」

自分の視線に気づいたのか不思議そうにリンが見て来ると、いえ・・・何でも!と答えたケイですが・・・?と一つだけ注文をした。

「ケイちゃんと呼ばれるのはちよつと・・・」

「良いじゃ無いですか！私もアメリカちゃんって呼ばれてるのでお揃いですね♪」

「そうよ可愛いじゃないケイちゃんって呼び方？」

リンからもニコニコと首を横に振られたケイが顔を真つ赤にしながら分かりましたよ・・・と了承すると、それはそうと・・・と彼女から真面目な顔がアメリカに向かって送られた。

「まだ・・・正式じゃ無いけどアメリカあんた・・・今回の件で少尉に戻るからね。」

「へっ・・・!!」

そう言いながら残ったビールを飲み干そうとするケイに変な声を上げたアメリカは隣のチャーリーは勿論ショウやイエーガーと言ったカスケード隊のメンバーと一緒にえーっ!?!と驚くので有った・・・

くくく

「アメリカアンウオーカー軍曹・・・前へ」

それから更に数日後、基地指令で有るバリサム大佐の執務室へと呼び出されたアメリカはハッ！と声を上げると彼の隣に立つ秘書官となったケイからフツと微笑みなが

らケースがデスクの上に置かれた。

「今回の事件で君が過去に起こした暴力事件は情報部のアリスⅡミラー少佐の捜査によりリンスが指揮し特務隊で行なわれたウォーカー軍曹への暴力事件と変わった。その為君の罪状は無くなった・・・今日からは再び少尉として職務に励む様に！」

「有難うございます。」

そう答えながら敬礼したアメリカが階級章が入ったケースを受け取った所でフツとバリサムは顔を緩ませた・・・

「本当に頑張ったなウォーカー・・・」

「バリサム大佐・・・こちらこそご尽力有難うございます。」

そう答えたアメリカが再度敬礼すると、俺は何もしとらん・・・と照れたバリサムからクルッと窓の外を見られたアメリカはアハハ・・・と困った様に笑いながら部屋の隅で待機している金髪の少尉に首を傾げた。

「所で・・・何でヒルダ中尉が残ってるんでしょうか？」

アメリカ自身良く分からないが、命令で何故かここに残る事になったケイと違ってミラーでさえジャブローに戻った今アメリカは・・・教導隊の指揮官で有るヒルダの存在に不思議そうに首を傾げたので有る。

「それなんだけどね・・・実は今回の件で特務隊を打ち負かした事に私達のボスがアナタ達カスケード隊を非常に興味を持った様なのよ・・・」

そう困った顔をするヒルダにそれってひよつとして・・・と驚いたアメリカは同席していた中隊長のイエーガーと顔を見合せた。

「ええ・・・我々教導隊及び試験MS部隊の指揮官で有るジョン＝コーウエン准将は正式に自分の部下に迎え入れたらしいわ・・・」

「って事は私達も教導隊になるんですか!？」

「それは分からないけど・・・どっちにしてもそれはジャブローに着いてからの話ね?」

そう説明しながらクスッと微笑んで来るヒルダにアレ・・・と違和感を覚えた。

「ひよつとして私達って異動になるんですかあ!!?」



「うん、そうよ。追って辞令は出ると思うけどね。」

そう有無を言わさないヒルダからの笑みにアメリアはイエーガーと共に了解しました・・・と答えたので有った・・・

## 離れる二人・・・その2

その日の午後アメリアの後輩でカスケード隊のオペレーター補佐をしているミリイ  
⇨タニグチ伍長は戻って来た彼女の階級章を嬉しそうに付け替えていると、むう・・・と  
ずっと唸っている彼女に一体どうかしたんですかあ!とムスつとした顔を向けた。

「せっかく先輩が少尉に返り咲いたって言うのにく!!」

「ありがとうございますミリイ・・・それとケイから聞きました但がリンスとの通信を細かく録音  
してくれて助かった。とミラー少佐経由でお礼を言われましたよ?」

「先輩の為にと思つて徹夜して報告書を付きの証拠として提出したんですよ・・・もつ  
と褒めて下さい!」

そう言いながら自分の頭を撫でると出して来るミリイに向かってクスつと笑つたア  
メリアがはいはい・・・と甘えつ子な彼女を膝に乗せていると・・・

「おい全員集まれ・・・!」

いつも以上に難しい顔をするイエーガーの声に一体何だ・・・?と特務隊も居なくな  
り広くなったハンガーの中央にカスケード隊と整備班の面々が集まったので有る・・・

「何だよイエーガー?」

「ひよつとしてリンス達の件でボーナスでも出るのか!」

そんな声を上げるジャックとタンクの小隊長コンビにいやそれがな・・・といつもな  
らツツコミが入るイエーガーの口籠る様子に二人は真面目な顔を向けた。

「おい・・・指令の所でなんて言われんだよ!」

「らしくねえぞイエーガー・・・」

「・・・実は転属の辞令が出てます。」

言い難そうないエーガーの代わりに立ったアメリアの声にこの場に居る全員がざわ  
つきだした・・・

「転属つてどこだ・・・!?」

「まさか最前線じゃ・・・」

「ここに家族も居るんだぞ・・・」

「五月蠅いっ! 静かにしなさい!!」

特に聞こえる整備班からの慌てる声に怒声を上げたアメリアがふう・・・と自分を落  
ち着かせる様に息を吐くと、スマンな・・・と謝ったイエーガーは落ち着きを取り戻し  
た隊員達にこれからの事を説明した。

「今言つた様に転属とはなるが……ここをカラツポにする訳にはいかんから取り合えず先行して俺の第一小隊がジャブローに向かう事になる。」

「つて事は……俺達も後で合流するのかわ？」

そう首を傾げ合うジャックとタンクにそれはまだ分からんな……?と自分達を迎え入れようとするコーウエン准将の真意が分からないイエーガーは苦笑いを浮かべた。

「それで……途中で戦闘も有るかもしれないので整備班からも一人欲しんだが……誰か希望者は居ないか？」

「そうは言われてもね……俺っちたちもそんなヤバい橋は渡りたく無い……」

「ハイッ！ハイハイッ私が希望しますっ♪」

整備班の主任をしているシバシゲ曹長の声を食い気味にソフィーから手を上げると、あの……おやっさん?と恐る恐るシゲが整備班の班長で彼女の祖父でも有るホワイト技術大尉を見た。

「ダメかなっ……お爺ちゃん?」

「お前がそこまでして付いて行きたいんなら仕方ねえ……ソフィーの事はくれぐれも頼むぞイエーガー?」

ポリポリと頭を掻きながらジロつと睨んで来るホワイトに了解で有りますっ!とイ

エーガーから咄嗟に敬礼が上がると、どうしたんだらう二人共っ・・・？とソフィーはキョトンとしながら首を傾げたので有った。

~~~~~

「えっ・・・転属!? ホントなのそれ・・・」

いつもの様に飲みに来たカスケード隊の面々にリンから驚く顔が浮かぶと・・・

「私達も困った事に覆す事が出来ない真実何ですよね・・・」

と答えたアメリカが命令ですので・・・とぼかしながら答えると、ホントなのねショウウ? とリンは隣でカウンターを手伝う黒髪の青年士官を泣きそうな顔で見た。

「うん・・・アメリカの言う通りだよ。だけど・・・平気だつて? これまでもアメリカの指揮で生き残つて来たんだからさ!」

「そうですよ! 私が保証します・・・命に代えてもショウウをリンさんの下に帰しますから?」

「いや・・・それは流石に重たいかな・・・」

何か嫌な想像をしたのか目を瞑ったリンが慌てて頭を振り出すと・・・じゃあ指輪でも贈れよ?と言つて来るチャーリーからの突拍子も無い声にへッ!?と焦つたシヨウは顔を赤くするリンと顔を見合わせた・・・

「急に何を言い出すんだよ!」

「いや・・・もうどうするか決まつてるんならさつきとしとけよ婚約をさ?」

そう答えながらチャーリーがニヤつくとそれならお前達もだろっ!!と言い返すシヨウに思わずボツと顔を赤くしたチャーリーとアメリカからウニヤ!!?と変な声が上り反撃を食らつた二人がシヨウと睨み合うと・・・分かつたわよ!と開き直つたのかリンは顔を赤くしたままビシつとシヨウとチャーリーに向かつて指を差した。

「こうなつたら・・・私とアメリカちゃんの絶対に気に入る婚約指輪が見つかるまで付き合つて貰うからねっ!!」

「分かつた!!」

そんな乗り気な二人に私もですかっ!?!と巻き込まれてしまったアメリカの驚く声が C A S C A D E に響き渡ると、こいつら大丈夫か・・・?と他のメンバーは浮足立つシヨウ達を見ながら不安そうな顔を浮かべたので有つた・・・

離れる二人・・・その3

アメリカ達も帰り、しまったな・・・。とリンは閉店となったCASCAD Eの二階に有る自分の部屋で頭を抱えていた・・・

「アレって私がシヨウに逆ポロポーズした様なもんよね・・・」

チャーリーに乗せられたでつい指輪が欲しいと言ってしまったリンがベッドの上で悶々としていると・・・店の方は片付いたよ?と代わりに店を閉めてくれたシヨウの聲がガチャつと開くドアの音と共に聞こえて来た。

「ありがとう・・・シヨウ」

「ねえリン・・・やっぱり指輪を見に行くの止めよつか?」

そんなリンの顔を見たシヨウがそう呟くとえつ・・・とリンから不安そうな顔が浮かんだ。

「えつ・・・急にどうしたの!？」

「いや・・・さつきからずつと変な顔してるしき・・・」

「そんな事無いって!! だけど・・・ちよつと急ぎ過ぎかなつてちよつと思ってる。」

シヨウの事は好きだがそこまで先の事を考えて無かったリンが少し戸惑いを見せる
とシヨウからそつか・・・と少し残念そうな顔が浮かんだ。

「でも・・・リンと離れる前に指輪くらいは贈りたいかな？」

「シヨウ・・・」

もうこうして二人で過ごす時間が少ない事に寂しさを感じたリンはギュツと抱き付
くとシヨウの背中に手を回した・・・

「それじゃ・・・一番高いの選ぶね・・・？」

「あんまり高いのは困るな・・・」

そう見つめ合った二人はどちらからとも無くキスをした。

「シヨウが選んでくれるの楽しみ・・・」

ベッドへと押し倒されたリンが嬉しそうに笑みを浮かべると頑張つて選ぶね・・・？
と少し困った顔を浮かべたシヨウによつて段々と深くなる口づけを受けながら二人の
甘い夜は更けてつたので有つた。

~~~~~

「天気が良くてホントに良かったですね？」



「へへっ絶好のデート日和りだぜ！」

海岸線を飛ばすジープの運転席と助手席からアメリカとチャールリーのそんな陽気な声を聞きながらシヨウはリンと共に後部の荷台の上で苦笑いを浮かべた。

「朝っぱらから拉致られたと思つたら・・・まさか昨日の今日で行くことになるとはね・・・」

「こういうのは善は急げつて言いますからね？リンさんの気が変わる前に行こうとチャールリーと決めたんです。」

「そうそう。ひよつとしたらシヨウがリンに捨てられる可能性も有るからな？」

「まさかそんな事無い・・・よね!？」

アメリカとチャールリーの二人からの冗談にシヨウがギョツとすると、ハア・・・と溜息をついたリンは無いわよ。と呆れた顔をシヨウに向けると、所でちよつと良い？と首を傾げた。

「今日つて仕事じゃないの・・・三人共」

「イエーガー達もこの事を知ってますからね。哨戒任務つて事で許可を貰ってますよ？」

ニコつと笑顔でそう説明するアメリカにそうなんだ・・・と答えたリンが今度来たら奢つてあげないと・ね。と無理を聞いてくれたイエーガーに対しお礼を考えていると目

的地で有る中立地帯の町が見えて来たので有った。

くくく

「所で指輪なんかどこで売ってるんだ……?」

「えっ……知つてて来たんじゃないのかよチャーリー!？」

ジープを降りた途端キョロキョロとするチャーリーに呆れた顔でシヨウがツツコミを入れると、取り合えず先を進みましようか?と苦笑いを浮かべるアメリカにリンもそうね……とその後に続いた。

「ここなら有ると思つたんだけどな……」

「まあ最悪……リンの店の買い出しが出来るから良いけどね。」

出店が並ぶメインストリートを見ながらぼやくチャーリーにハア……とシヨウが溜息をついていると、ちよつとチャーリー!と慌てるアメリカから服を引つ張られたチャーリーは何だよ……?と首を傾げた。

「あのお婆さんを覚えてますか?」

「あれつて……前に来た時にジオン兵と揉めてた婆さんじゃ無いか!？」

以前、非番の日にここへ来て一騒動起こしたチャーリーから苦笑いが浮ぶと、ちよつ

と挨拶して来ますね?とアメリカは情報収集の為に老婆の店へと向かった・・・

「安いよ安いよ!ほら買った買った!!」

「一つ下さいな?」

「はいよ・・・ってアンタはあの時の連邦兵!!?」

「お久しぶりです。」

ギョツとする老婆にクスつと微笑んだアメリカはシーつと自分の口に人差し指を当てた。

~~~~~

「ふうん・・・婚約者に贈る指輪をさね・・・?」

「はい。この町のどこかにそう言ったお店が有るのなら教えて頂きたいんですが・・・」

アメリカから事情を聞いたが腕を組みながら不安そうにしているシヨウとリンを見ると・・・仕方ないね。とアメリカとチャーリーに向かって二つと笑みを浮かべた。

「お前さん達には借りも有るし・・・ワシの紹介でここの闇市を尋ねると良いぞ?」

「えっ・・・闇市なんか有るんですか・・・!?!」

「当たり前じゃ・・・」は何でも集まる中立地帯じゃからな。金さえ払えば何でも手に

「入るんじやよ？」

そう説明した老婆からヒツヒツヒツと怪しげな笑い声を聞いたアメリカはどうしま
すか……？

？と苦笑いを浮かべ三人を見た。

「ここまで来たんだから行くつきやねえだろ？」

「僕もチャーリーに賛成だね。」

「二人が行くんなら……私も着いて行くけど」

「じゃあ決まりですね。」

三人の同意を得たアメリカが頷くと老婆は健闘を祈るぞ……と路地裏に入って行く
四人の背中を見送ったので有った。

離れる二人・・・その4

「ちよつとねえ・・・ホントにこんな所に有るの・・・!？」

老婆の言った通り路地裏を進むシヨウ達にリンから不安な顔が浮かぶと、もう少し進んで見ましよう・・・と先頭歩くアメリカも少し緊張気味に答えた。

「おい止まれ・・・ここから先は関係者以外立ち入り禁止だ。」

もう少し進んだ所で開けた広場に出たシヨウ達は明らかに堅気では無い雰囲気の人組にゴクツと息を飲む見ながら先程の老婆から貰ったこの場所の鍵らしいマッチ箱を見せたので有る。

「果物屋の婆さんから貰ったんだが・・・？」

「婆さんの紹介か・・・良し通って良いぞ。」

老婆から渡されたマツチ箱を確認した男の一人が奥へと親指を指すとシヨウ達は広場に一面に広がる様々な武器や弾薬に貴金属と言った一般的に売りにくい商品を取り扱っている闇市へと恐る恐る足を踏み入れた・・・

「連邦やジオンの武器まで置いてますね・・・」

「これじゃあとリントン基地の武器庫も顔負けだな？」

「多様な銃器が並ぶその品揃えにチャーリーからヒューツと口笛が鳴ると、ここじゃない？とシヨウは老婆から渡されたメモを見ながらその店の看板を見た。

「フェアリー・・・ね？」

闇市と名乗る場所からは程遠いファンシーな店名に苦笑いを浮かべたシヨウが店の中を覗くと丁度気付いた店主らしい女性からお客さんかい・・・？と出て来た瞬間何故か急に腰から抜いたデザートイーグルを突きつけて来た・・・

「テメエら軍人だな・・・どうやってここに入って来やがった!」

「ツツ・・・!?!」

アメリカもそれに反応し慌ててバックに手を入れた所でチャーリーがその手を押さえながら間に割って入った来たので有る。

「まあまあ落ち着こうぜ・・・?」

「・・・どうやらガサ入れじゃ無さそうだな。」

二つと笑みを浮かべるチャーリーに敵意が無い事を知った女店主が銃を腰に戻すとシヨウはフウ・・・と安堵しながら老婆のマッチ箱を見せたので有った。

くくく

「婆さんの紹介ならそう先に言えよな・・・」

「いきなり銃を突き付けて来たのはそつちじゃ無いですか！」

誤解が解けたのか悪いかな？と謝って来るこの店の女性店主のニノにアメリカが怒っている、シヨウはフェアリーの店内に飾られている銃の種類にこれは凄いね：：!?!と驚く声を上げた。

「AKにステア・・・それにFALまで有るし・・・」

「へえ・・・詳しいねアンタ。じゃあコイツ何かどうだい？」

ニヤニヤと楽しそうなニノが出して来たハンドガンにギョツとしたシヨウはその銃

と二ノの顔を二度見した・・・

「これってCZ75だよね・・・しかもファーストモデルっ!？」

「この辺りの銃が好きそうだなって思ったんだけど・・・どうやら大当たりみたいだな？」

二ノの言う通りマニアックな銃が好きなのシヨウからずっと欲しかったんだよ！と興奮する声がるのを見てそこまで指輪を求めて無いリンはクスッと微笑んだ。

「そんなに欲しいんなら私の指輪じゃなくてその銃にしたら？」

「えっ・・・いや！今日はリンの指輪を買いに来たんだからね!!」

そう答えながら首を横を振るシヨウに良く言ったぞ相模・・・とチャーリーから二つと笑みが浮かぶと、ねえ・・・チャーリー？とアメリカが綺麗な赤髪を振りながら首を傾げて来た・・・

「私は指輪じゃ無くても良いですよ？」

「じゃあ何が欲しんだよ……」

「ここに有るグロック39でどうです？」

そう答えながらアメリカが愛用するグロックの小型拳銃を指差すとチャーリーから即座に却下……と返って来た。

「もうちよつと色気の有る物を選べねえのかよ!!!」

「ええ……こんなに小つちやくて可愛いのに……」

そう答えながらムウ……と唸ったアメリカはじゃあこれならどうです？とグロックの予備マガジンを見ると、その瞬間にドドドッ!!!と鳴り響くマシンガンの銃撃にこの場に居る全員から悲鳴が上がった……

「ツツ・・・これってザクの120ミリっ!？」

聞き覚えの有る音に反応したアメリカの声にシヨウ達が顔を見合わせると・・・大変だーっ!!?と見張りをしていた男達が焦りながら叫び出した。

「ジオンの連中がMSごと乗り込んで来やがったっ!!」

「ちよつと待てっ!・・・ここは中立地帯って知ってて来たのか!？」

・・・この中心的なリーダーナーなのか慌て出す二ノに中立地帯の住民達が集まり出すとアメリカは腕を組みながらハア・・・と溜息をついた・・・

「どうやら最悪なタイミングでここに来たみたいですね・・・?」

そう呟いたアメリカにシヨウもそうだね・・・と答えると不安そうするリンの肩を抱

いたので有った。

くく

そんなピンチなシヨウ達と打って変わり、トリントン基地の食堂でランチを取っていた第三小隊CSD7の操舵手を担当しているレティ曹長は目の前でニコニコとしている教導訓練で来ているブラックウイドウ隊のジャンノベル准尉に向かって不思議そうに首を傾げていた・・・

「なあ・・・あの時のお礼がランチの奢りで良いのか？」

「ハイ♪レティさんに奢られるなんて僕は嬉しくてあまりの幸せに死にそうです。」

「死なれたら困るんだけど・・・」

子犬の様に懐かれ過ぎて困惑するレティの様子を少し離れた席でククつと楽しそうにタンクが見ていると、変わった組み合わせね・・・?と急に現れたマリアにギョツとしたタンクは何だよ・・・答えながら冷めたコーヒを啜った・・・

「部下の幸せくらいそつとしておいたら?」

「バーカ・・・男つ気の無いアイツの為に俺は見守つてんだよ。」

「ただ面白がつてるだけのくせに・・・」

そう答えながらフーン!と鼻を鳴らすタンクに向かってマリアが呆れた様子で離れようとする・・・あつそうだ?と何かを思い出したのか急に手をポンと叩き出した。

「ついさつきだけど・・・ウチの偵察機が近くに有る中立地帯の町近くでジオンのMSを見かけたらしいからスクランブルが掛かるかもよ?」

「それつてシヨウ達が居る場所じゃねえか!!」

そう答え慌てて立ち上がるタンクにどう言う事よ!?とマリアが叫ぶと・・・その様子に気付いたレティとジャンは不思議そうに顔を見合わせたので有った・・・

離れる二人・・・その5

「良しっ・・・こんなもんかなっ?」

カスケード隊、第二小隊長機のジャックⅡアルヴィン機の調整を終えたソファイーがコクピットからウインチで降りると、悪いなソファイー?とその本人と部隊オペレーターとのミリイが飲み物を持って駆け寄って来た・・・

「疲れたでしょお。これ飲んでねえ?」

「ありがとっミリイ♪」

ミリイからの差し入れにお礼を言ったソファイーは自分の愛機で有るRGM-79「G」陸戦型ジムを満足そうに見ているジャックに向かってエへっとなつた。

「ジャック中尉の注文通り機体へのフィードバックを大幅に変更したんでかなりピー

キーにしちやいましたけど本当に良かったんですか?」

「ああ助かる。最近どうも機体の動きが鈍く感じていたからな・・・」

「それなら良いですけど、OSの書き換えに合わせてステイックの感度とかアクチュエーターへの出力も大分変ってるんで調整が必要な時はまた言っして下さいね?」

「ああ・・・お前達が居る間にな・・・」

そう答えながらジャックから急に寂しそうな顔が浮かぶのを見たソフィーは困った様にアハハ・・・と笑い出した。

「そんなの別に気にしなくても良いんですよ?私がここに居るのも残りわずかですから逆にこの機会にドンドン言っ来て欲しいですよ!」

MSの事なら何でもどんと来いと自称する程の腕前を持つソフィーの声を聞いていたミリイからハア・・・と深い溜息が聞こえると・・・

「どうしたのよそんな溜息をついて・・・」

「あつケイさんっ・・・サボリですかっ?？」

司令官付き秘書官で元情報部のケイⅡキタムラ少尉の登場にソフィーからそう首を傾げられたケイは違うわよっ!?!と怒りだったので有った・・・

くくく

「良い? 私はちゃんと仕事を終えて来たんだからね!」

「成程っ・・・それだけアメリカさんに会いたいつて事かっ・・・?」

そう呟くソフィーに何でそうなるのよっ!!と顔を真っ赤にしたケイがソフィーの頭

をぐりぐりと押さえだすと、痛いっ!! 痛いですっー!!?と悲鳴を上げるソフィーの声を聞きながらケイはそれでどうしたの?と目の前で困惑しているミリイに首を傾げた。

「実は・・・先輩と離れるのが寂しいんですう・・・」

「ちよつとミリイっ!?!その前に私を解放する様になっ・・・」

「そっか・・・アメリカの事を随分と慕ってるみたいだしねミリイは・・・?」

「私の事は無視ですかっ!?!」

涙目を見せるソフィーからの抗議を一切無視したケイの言葉にミリイからハイ・・・とコクつと頷かれた・・・

「こんな私を必要だと言ってくれた先輩にまだ私は恩返しが出来て無いですう・・・だからここに居る間に一人前になった所を見せたいんですよねえ・・・」

「ふくん・・・そうなんだ。」

（つて言うか・・・特務隊の時にアメリカから指揮権を預けられた時点で相当信用されると思うんだけどな・・・？）

そう答えながら更にもう一度溜息をつくミリイに答えたケイはアメリカが大好き過ぎるミリイにに苦笑いを浮かべたのだ。

「アンタって本当にアメリカの事が好きなのね・・・？」

「エヘヘ・・・私の中で一番大好きな人ですう♪」

「残念でしたねケイさんっ・・・ミリイにアメリカさんを・・・だから痛い！痛いんですって!!？」

嬉しそうなミリイの言葉にそっか・・・と答えたケイによって再び頭をぐりぐりとさ
れたソフィーから悲鳴が上がると同時にキユキユつとタイヤを鳴らしながらタンク達
が乗ったジープがハンガーの中に飛び込んで来ると大変だぞつ!!と珍しく焦り出すタ
ンクの声にハンガー内に居たソフィー達はざわつき出した・・・

くくく

「うわ・・・ヒトツメザクが二機にツノツキ《グフ》が一機の一個MS小隊に加え陸戦部
隊が一個中隊ですか・・・いくら何でもこの戦力で太刀打ちするのは死ぬようなもんで
すね?」

双眼鏡を覗きながら索敵をするアメリカの言葉にホントにツイて無い・・・とシヨウ
からぼやき声が上がった・・・

「それでどうするんだ・・・一応奴等の要求通り食糧や弾薬の準備はさせてるけどよ・・・？」

「向こうがその要求を呑んで大人しく立ち去れば良いんですが・・・最悪な事態も想定して置くべきです。」

アメリカがそう心配するのも、つい先日ニューヨークで北米方面軍司令官で有るガルマージビ大佐がホワイトベース隊によつて戦死したのが原因か徐々にジオン側の戦線が後退しているとケイから聞いていたからで有る。

「それって・・・この町が戦闘に巻き込まれるって事か!？」

「まだ分かりませんが．．．くれぐれも彼らを刺激しない様にして下さい。」

慌て出す二ノを宥めたアメリカはやれやれ．．．と困りながらシヨウとチャーリーにボソツと耳打ちした．．．

「恐らく奴等は敗走中の部隊の様です．．．このままじゃこの町が火の海になるのも時間の問題ですよ？」

「じゃあ基地に連絡したらどうだ？」

「連絡するにしてもジープまでどうやって行くんだよ．．．」

無線機が積んで有るジープまでの困難な道のりにシヨウから異議が上がると、まあ．．．無い事は無いがな？と二ノから少し困った様に苦笑いが浮んだ．．．

）
）
）

離れる二人・・・その6

「おい・・・今何と言ったバウスネルン？」

「ですから。中立地帯の町への威力偵察に出たカノウ少尉以下三名と連絡が取れなくなつたのでカスケード隊の出撃許可を頂きたいのです！」

威力偵察とは全くなのでまかせを言いながらズイッと顔を寄せて来るイエーガーの言葉に中立地帯の町ね・・・とトリントン基地指令ロイバリサム大佐はパイプに火を着けながら不審そうな顔でカスケード隊の中隊長で有るイエーガーバウスネルン中尉を見た。

「MSの試験部隊で有るお前達が何で威力偵察に・・・そもそも何故中立地帯なのか簡潔に説明しろバウスネルン・・・？」

「えっと・・・それはその・・・ちよつと色々ど！」

流石に勢いだけでは無理だつたらしく淡々と聞いて来るバリサムにイエーガー困っている・・・ここから私から説明します。と元情報部で現在はバリサムの秘書官を務

めているケイⅡキタムラ少尉が前に出たので有る。

「ここ最近ジオン軍が戦域を縮小して敗走を始めているのは指令も知っている事かと・・・」

「勿論だ。例のニューヤークでホワイトベース隊とか言う部隊がザビ家の三男を打ち取った影響だとか・・・?」

「ええ・・・その所為か各地でジオン兵による略奪が起きていると情報部の方に話が入っており、イエーガー中尉に頼んであの町に慣れているカノウ少尉達にちよつと偵察を頼んだらこんな事になったのです。」

そうスラスラと嘘をつくケイの隣でマジかコイツつ!?!とイエーガーが背中に冷汗をかいていると・・・

「本当かバウスネルン中尉・・・?」

「そりゃあ勿論です!ケイ少尉に頼まれたんですがシヨウ達も不運ですよね!」

明らかに疑っているバリサムの顔にイエーガーは隣から話を合わせて下さい!と睨んで来るケイの圧を感じながらそう答えたので有った・・・

「そうか・・・だがカスケード隊を動かすとなると基地の防衛がな・・・」

「でしたらバリサム指令・・・その間は私達が基地の守備に着きますわよ?」

部屋の隅で話を聞いていた教導隊ブラックウイドウ隊のヒルデガードⅡウィンチエ

スカ中尉がイエーガー達にウインクするとバリサムは頭を抱えながらも分かった……と答えた。

「カスケード隊に中立地帯への出撃許可を出す……が場所が場所だ。戦闘行為はなるべく控える様に！」

「ありがとうございますバリスサム指令……それでは！」

今すぐにも駆け付けたいケイがイエーガー共にバリサムの部屋を出ようとするうちよつと待つてくれない？とヒルダが呼び止めたので有る。

「ミラー少佐から優秀って聞いてたけど……結構大胆ねキタムラ少尉は？」

「私って猫かぶりなんです。それじゃあ！」

そう言いながら駆け出すケイが手を振ると……成程ね。と二人の背中を見送ったヒルダは楽しそうにクスクスと微笑んだので有った。

くくく

「一応ここが通信室だな……」

そう言う二ノからドアを開かれたショウ達が入ると部屋の中には充実した通信設備が有りアメリカからこれなら……!?!と声が上がると同時にムウ……と急に不満そ

うな声が上った・・・

「この通信設備はジオン製ですね・・・ちよつと使い勝手が良く分からないんですが？」
「俺を見ても分かる訳無いって!?!拾ったのを適当に使ってるだけだからな!」

こんな感じで今までヤバイ取引をしていたらしい彼女達にそうなんですか・・・とアメリアが苦笑いを浮かべるとリンさん・・・?とシヨウの婚約者でこの騒動に巻き込まれた彼女にアメリアは申し訳無さそうに頭を下げた。

「ここが一番安全そうなので居てくれませんか・・・?」

「ちよつと待ってアメリアちゃん・・・何で締めようとするの!?!」

そう慌て出すリンにゴメンなさい。とアメリアがドアをロックすると・・・ちよつとアメリアちゃん!?!とドアを叩き出すリンの声を無視したアメリアはホントに良いのか・・・?と首を傾げる二ノに向かってコクつと頷いた。

「民間人のリンさんを巻き込む訳には行きません!」

「他にも沢山居るんだが・・・それでどうするんだ?」

「ここまで来て完全主導権を取られたアメリアの声に二ノが首を傾げるとそうです

ね・・・と呟いたアメリカは武器を豊富に揃えている闇市を見ていると再びドン！とザクからの銃声が響き上がった・・・

離れる二人・・・その7

「なあソフィー・・・陸戦型ガンダムのメインカメラはこれ以上倍率上がらないのか？」

「ビームライフルを構える陸戦型ガンダムのコクピットからそんな不満を言いだすイエーガーにコレが限界ですよ・・・と答えたメカニック担当のソフィーから困った顔が浮かんだ。

「狙撃用に作られてませんし・・・いくら陸ジムよりも高性能とは言ってもメインカメラの性能は一緒なのですからねっ？」

「それは分かるが・・・俺の腕でCSD2の真似は無茶過ぎるぞ！」

後方支援を担当をしているショウとは違い精密な射撃が苦手なイエーガーから抗議の声が上がると、それは俺も同じだったの！と通信が入って来たジャックの第二小隊が指定されたポイントに辿り着いたらしい。

「こちらCSD6・・・狙撃ポイントに着きました。」

「こつちも狙撃ポイントに着いたぞイエーガー！」

「お前が撃つ訳じゃない癖に威張るなジャック!!？」

そんな怒声を上げるイエーガーの言う通り第二小隊でビームライフルを構えるのはシヨウと同じく後方支援役を担当しているユウヤ准尉の陸戦型ジムで有る・・・
(ビームライフルは初めてだから・・・せめて試射くらいさせて欲しかったな。)

そう思いながらユウヤが苦笑いを浮かべながら狙撃用のスコープをシートの後ろから引つ張るとメインモニター建物ばかりが映った。

「CSD6からウイスキードッグ・・・こちらからは敵のMSが視認出来ないが？」

「こちらウイスキードッグですう・・・コツちもアクティブソナーの範囲を越えてるので誘導が難しいですよ！」

ジオンのザクに発見されない位置に展開していたカスケード指揮車からミリイのそんな焦った声が聞こえて来ると・・・いざとイザつと時にイエーガーの二番機として待

機していた以前アメリカが使用した陸ジムが起動し始めたので有った。

「ちよつとケイさんっ！何をやってるんですか!？」

「要は向こうで敵機の場所を中継したら良いんでしよう・・・!!」

そう答えたケイが陸ジムを起すとバーニアを吹かし中立地帯の町へと飛んで行く
と・・・スツゲエなアイツ!?とまるでアメリカばりに無茶苦茶なケイの姿に三つ目のポ
イントで待機している第三小隊の名物コンビで有るタンク中尉とレティ曹長から呆れ
た声が上がった・・・

「最初見た時は清楚な黒髪美人だったけど・・・コイツ良いや!」

そんな楽しそうな声を上げる上官にレティはまた始まった・・・と頭を抱えた。

「私が言うのも何ですが・・・ちゃんとした付き合いつて有るんですか?」

「んっ? そうだな・・・因みにどこまで行ったら付き合つた事になるんだ。」

そんな事言いだすダメな上官にもう良いです・・・と答えたレティはハア・・・溜息を
つきながら次の指示を待つので有った・・・

~~~~~

「なあ隊長さんよお・・・さっさとこいつ等を殺してトンスラこいた方が良いんじゃないね?」

足元で自分達ジオンの陸戦部隊と撃ち合っている中立地帯の自警団を見ながらザクがマシンガンを向けると何を言ってる伍長!とこの部隊を纏めている少尉のザクが慌ててそれを止めた。

「我らは略奪する為にここに来たのでは無いんだぞ!」

「MSでここに入った時点で・・下で起こってるのが現実だぜ?」

へへつと笑った伍長がそう言いながら120ミリマシンガンをぶつ放すと丁度その下に居たシヨウウ達に瓦礫の山が振って来た・・・

「マズイっ!?!」

「早く逃げなきゃ!!」

「クツソ・・・ホントにツイて無い!!」

そんな声を上げる三人と一緒に付いて来たニノが慌てて駆け出すと・・・アメリカーっ!!と叫んだ陸ジムが上から振って来るとその瓦礫の山を背中で受け止めたケイはメインモニターに映る三人を見て安堵した様にハア・・・と息を吐いた。

「何でケイが陸ジムに乗ってるんです?!」

「話した後!早くこの場から逃げて!!」

そんな焦った声を上げるケイが機体を起すと突然現れた連邦軍のMSにアメリカ達を襲おうとしていた二機のザクが慌ててマシンガンに向けて来た・・・



「連邦軍だどっ!!」

「中立地帯には干渉しないじゃなかったんのか隊長さんよっ!!」

そんな声を上げながら120ミリマシンガンをぶっ放して来るザクからの銃撃にうわあっ!?!と三人が近くに有るビルの屋内に入ったの確認したケイは陸ジムの左手に有るショートシールドで受けながら後退すると角のビルで身を隠しながらアクティブソナーを展開すると続けてFCS火器管制システムを起ち上げる。

「武器武器武器!!・・・って何でこの機体にはハンドガンとヒートナイフしか無いのよ!?!」

アメリアの好みで特務隊との模擬戦使用のまままで有る近接特化の陸ジムに乗ってしまったケイはまったくもう!と半ばヤケクソでハンドガンとヒートナイフを両手に構えるとやるしか無いわね・・・と呟くと一気にフットペダルを踏み込んだ・・・

「たった一機だ・・・気を抜くなよ伍長!」

「分かってますって?どうもあのパイロットは女みたいだし・・・生け捕りにしてへっ・・・」

「いい加減にしろ伍長!!」

何を考えているのかニヤつく伍長を窘めていた少尉がハア・・・溜息をついていると

ピーっと鳴る接近警報に気付いていた時にはバーニアを吹かしたケイの陸ジムが伍長のザクにハンドガン突きつけていた。

「えっ・・・嘘だろ。こんな所で俺が!!?」

メインモニターに映る銃口に伍長が慌て出すとドン!と言う発砲音と同時にその乗機が倒れると・・・なっ!?!と驚き何が起きたのか理解出来ないのか少尉のザクがジリジリと下がり出す・・・

「コッ・・・コイツーっ!!?」

突然部下を失った恐怖からか120ミリマシンガンを撃ちまくって来るザクから身を隠したケイは勘弁してよね・・・チツと舌打ちした。

(勢いに任せて一機は倒したけどもう一機は難しいわね・・・)

後は増援が来る事を祈ったケイが牽制でハンドガンを撃っている・・・

『こちらはリンです!カスケード隊の皆さん聞こえますか!!?敵機は三機・・・陸戦部隊も沢山居てシヨウウ達が・・・お願いです聞こえていたら返事を!!』

そんな必死なりんからの通信が聞こえて来たケイはまだもう一機居るの!?!と慌て出した・・・

## 離れる二人・・・その8

外部との連絡をとる為にとアメリカの指示でリンは使った事も無い通信機器の前で四苦八苦しながらチャンネルを合わせていると初めてノイズでは無いクリアの受信帯に繋がったので有った・・・

(お願い繋がって・・・!)

アメリカから聞いていたカスケード隊との通信チャンネルに合っている事を確認したリンが祈る様に目を瞑っていると・・・

『こちらウイスキードッグ・・・その声はリンさんですよえ!?!』

「ミリイちゃん?!?良かった・・・さっきの私の声が聞こえたんだね?」

カスケード隊のオペレーター担当で有るミリイIIタニグチ伍長の声が自分のヘッドセットに聞こえて来るとリンはハア・・・と安堵した様に息を吐いた。

『ハイ!それよりもMSが三機居ると言うのは本当ですかあ?』

「ええ・・・だから早く救援に来て欲しいのよ!」

『安心して下さい。もうすぐ傍で待機はしてるのでえ・・・つてやつと来たあ!!』

通信状況が悪いのか・・・ケイの陸ジムから送られて来たアクティブソナーの情報  
ミリイのモニターにアップデートされると、何?どうかしたの!?!とリンは焦った声を上  
げた。

『大丈夫です。とにかくコツチで絶対に救出しますからリンさんはその場から動かず  
ジツと待つていてくださいねえ!』

「分かったわ・・・ミリイちゃん達も無理はしないでね!」

『了解ですう。それでまた後程・・・』

そう答えながらプチつとミリイから通信を切られたリンは愛する恋人と仲間達の無  
事を祈る様にギユツと手を組んだ・・・

~~~~~

「ケイが来たって事はカスケード隊も近くに居るって事ですよね・・・じゃあもうジープ
に向かう必要性が無くなった訳ですが・・・」

元々はカスケード隊と連絡を取りたいが為の強行軍だったのがまさかのリンがそれ
を成し遂げた為にアメリカは思案顔を浮かべた。

「町の住民はどうなってるんですかニノ？」

「二応非難はさせてるが・・・一部の住民がジオンの連中から中央広場に捕らえられてるみたいなんだ・・・」

不安そうな顔をする彼女から話を聞いたアメリカはじやあ決まりですね。と携帯しているグロツク17Lのマガジンを抜くと装弾数を確認した。

「おいおい・・・まさか俺達だけで救出に行くつもりじゃねえだろうなアメリカ!？」

「そのまさかですよ。このまま放って置くわけには行きませんか？」

そうニコつと笑みを浮かべるアメリカにああもう・・・お前って本当に！とチャーリーが頭を抱えた。

「僕もアメリカに付き合うよ。ニノにはリンへの婚約指輪を作ってもらわなきゃだし・・・」

「シヨウまで・・・わーっつたよ！俺も行くぜ!!」

そう言いながら二つと笑みを浮かべるシヨウにチャーリーも呆れた顔をしたが二人の決意に頷いたので有る。

「お前らつてホントに馬鹿だな・・・任務でも無いのにこんな町の為に・・・」

「私達は正義の味方ですからね・・・だから任務なんて関係無いんです。」

「やっぱり馬鹿だな・・・だけど私は好きだね。」

こんな軍人も居るんだと再認識した二ノからククつと楽しそうな笑い声が浮ぶとじゃあ行きますか!とアメリカを先頭にシヨウ達は住民達が捕らわれている中央広場へ向かった・・・

くくく

「伝令ーっ!連邦のMSがこの町に侵入しザクが一機撃破された模様です!」

「そんな事はもう知っておる・・・」

慌てて駆けこんで来た部下に一喝したこの部隊の隊長は遠くに見えるケイの陸ジムと交戦中のザクを見てクツ・・・と顔を曇らせた・・・

「それよりも食糧の補給状況はどうなっている!」

「この町のレジスタンスの抵抗によって余り捗っておらず・・・現在は予定の半分以下と言った状況で有ります!」

部下からの報告に大体一週間分か・・・これでは合流地点までギリギリだな。と隊長が呟いていると・・・

「この人で無しが・・・地獄に落ちるといいよ!!」

捕らわれている住民の中からそんな老婆の怒声が上がったので有る。

「婆さんの言う通りだ．．．出ていけジオン!!」

「そうだ! そうだ!!」

補給と言っているがこれは明らかな略奪行為で有るジオンの所業に住民から抗議の上がり出すと、五月蠅い黙れ!と動揺しだしたジオン兵達がライフルを構えだした．．．

「止せ! 絶対に民間人への発砲は控える!」

「コイツー!!」

止めに入ろうとした隊長の頭部に住民が投げた石が当たると．．．

「貴様ーっ!!?」

と激高した兵士の一人がライフルのトリガーを引こうとした瞬間．．．パンっ!と乾いた音が響いた。

「へっ．．．生きてる?」

撃たれたと思った男性が恐る恐る顔を上げると何故か目の前には肩を撃たれたジオン兵がもがき苦しんでいた．．．

「連邦軍だ。全員動くな・・・！」

そう言いながら護身用のM37リボルバーを構えたシヨウが出て来ると・・・ああもう！と頭を抱えたアメリカとチャーリーに二ノ達も仕方なく唾然としているジオン兵に向けてそれぞれ武器を構えたので有る。

「何で撃つたんですかシヨウ・・・？」

「人命救助なんだから仕方無いだろう・・・」

「それでこっからのプランは勿論有るんだろうな・・・」

「私は無い方に賭けるぞ。」

シヨウ達の登場に一時は混乱していたジオン兵だったが冷静になった途端一斉にライフルを構えるとダダダっ!!と撃ちまくって来た。

「ホントにツイて無い!!？」

「ほら私の勝ちだな!!」

火力と人数に圧倒的差が有るシヨウが一目散に撤退指示を出すとデザートイーグルで援護する二ノに言ってる場合ですかっ!?!と焦った声が上がると・・・あそこだーっ!!

と叫ぶチャーリーの声に全員が木造りの建物の中に飛び込んだ・・・

「取り合えずヘイトがコツチに向いただけでも良しとしましょうかね・・・」

「それまでに救援が来ればいいけど・・・」

連邦軍と名乗った上に仲間を撃たれた所為も有りジリジリと包围しながら距離を詰めて来るジオンの陸戦部隊にシヨウは苦笑いを浮かべた。

離れる二人の距離・・・その9

ジオン兵と銃撃戦を行なっているアメリカ達をモニター越しに確認したケイは正面のザクと対峙しながらヘッドセットを掴んだ。

「ケイからウイスキーードッグへアメリカ達がヤバいわ！支援出来ないの!!？」

『現在 C S D 4（ジャック）とCSD5（レオン）が急行中ですう！そちらで対処は出来ませんかあ!!』

「出来たらこんな通信してないわよっ!!？」

「伍長の仇だあぁあっ！」

そう叫びながらヒートホークを振り上げるザクにケイの陸ジムがチツと舌打ちしながら両手に持ったヒートナイフで受け止めていると・・・聞こえるかケイ少尉！と自分のヘッドセットにCSD6ユウヤの声が入って来た。

『僕が援護するからそのまま動くな・・・そこだ！』

シートの後後に有る精密射撃のスコープで狙いを定めたユウヤがサイドステイックのトリガーを絞るとケイの目の前でザクの頭部がビームによって撃ち抜かれた・・・

「こんな至近距離で援護なんて．．．!!?」

慌てたケイがそのままザクと距離を取ると．．．誤差下に0.2!と叫ぶユウヤにイーガーもスコープを覗くが．．．ちよつと待て!と焦った声が返つて来たので有る。

『三機目だ!何故気付かなかつたミリイ!!?』

『こんなにドンパチ音が響いてたら分かりませんつてえ．．．ケイさん三時の方向に新手ですう!!』

チツと舌打ちしたミリイからの指示に冗談!!?と焦ったケイは左右に挟まれたザクにハンドガンとヒートナイフを構えた．．．

「支援はまだなの!!?」

『俺が時間を稼ぐから離脱しろケイ少尉!!』

「だけどここのままじゃアメリカ達が．．．」

イーガーの陸戦型ガンダムが撃つたビーライフルによって二機のザクが慌てて後退しだすと、くつ!!悔しそうな声を上げたケイは一旦バーニアを吹かし二機のザクから距離を取った。

『コイツはヤバそうだな．．．おいレティ出せ!!』

『イエッサー．．．ガンタンク前進します。』

そう指示を出すタンクに操舵手のレティ曹長がフットペダルを目一杯踏み込んだ。

『CSD7からウイスキードッグへ！敵機の座標を送れ！』

『えっ？ウイスキードッグ了解ですう！』

すこし困惑しながらミリイのウイスキードッグとリンクしていた二人のガンタンクは彼女から送られて来たマップデータからタイミング良く中立地帯の町の中央に有るメインストリートでケイの陸ジムを仕留めようと追っている二機のザクを確認した。

~~~~~

「なっ・・・!?!」

突然現れたタンクとレティのガンタンクに驚いた頭部を失った少尉のザクが慌てて120ミリマシンガンを構えたのだが・・・レティの操縦によって右にスライドしたガンタンクは既に120ミリ低反動砲を降ろし発射体制が整っていた・・・

「一番ファイヤー!!」

そう叫んだタンクがトリガーを引くと同時に少尉のザクは下半身が吹き飛びそのまま前のめりに崩れたので有った。

「少尉殿ーっ!!コイツ・・・タンクもどきが良くも!!」

「全速で後退!!」

「分かってますよ!!?」

もう一機のザクが120ミリマシンガンを構えるの見てタンクとレティが慌ててガンタンクを後退させると、そうはさせるかよーっ!!と声を上げながらジャックの陸ジムがジムライフルを撃ちながら上から振って来た・・・

「これ以上の抵抗は止すんだな!」

「分かった・・・分かったから・・・!?!」

先程の攻撃で被弾しジャックの陸ジムの前で頓挫したザクからパイロットが腕を上げて出て来ると、コッチも降参したみたいです。と先程タンクが大破させたザクにレオンから通信が返って来ると、後はアメリカ達だけっ!!と叫んだケイは陸ジムのバーニアを吹かし戦闘中のシヨウ達の下へ飛んだので有った。

くくく

「どんだけ居るんだよこいつ等!!?」

ダダダッ!!とアサルトライフルを撃ちまくって来るジオン兵に対しM37リボルバーに最後の5発を込めるシヨウはチツと舌打ちした。

「ここは我慢比べですよシヨウ！」

そう答えながらアメリカがグロック17Lをドン！ドン！と撃ち始めると隣でU S Pのマガジンを交換するチャーリーから嘆く様に叫んで来た。

「これじゃあジリ貧だぜ!？」

「もうすぐ助けが来る筈です・・・」

まだ諦めて無いかチャーリーは真剣な顔をするアメリカにわーったよ！と返すと迫り来るジオン兵達に撃ち返した。

「もう弾が無いっ!？誰か38口径の弾丸を!!」

「しゃーねえな・・・コイツを使いシヨウ！」

そう言いながら二ノから投げ渡された銃にシヨウは本当に良いのか!？と驚いた・・・  
「良いから早く援護しろって!!」

「分かった・・・それじゃ遠慮なく！」

デザートイーグルを撃つ彼女の隣でCZ75を構えたシヨウはドンドンドン！と銃声を響かせると正面に居たジオン兵の肩を撃ち抜き沈黙させたので有る。

「相変わらずシヨウの銃の腕は凄いですね・・・!？」

速射で4〜5人のジオンを倒したシヨウに驚くアメリカの隣でヒュー！とチャーリーから口笛を吹いていると・・・

「ジタバタするな！こちららは連邦軍だ。そちらのMSも全て撃破した……直ちに武装を解除し投降せよ！」

外部スピーカーでそう警告しながら振つて来るケイの陸ジムの姿にやつと騎兵隊が来ました様ですね……と呟いたアメリカはホントだね。と安堵するシヨウと共に銃を構えながら建物から出た。

「聞いての通りです。捕虜に対する処遇は約束しましょう。」

「分かった……投降しよう。」

MSを失った上にケイの陸ジムからハンドガンを向けられたジオン指揮官もこれ以上は無理だと判断すると部下の全員に武装解除をさせると、今回起きた中立地帯での突発的な戦闘はカスケード隊の鎮圧と言う事でどうにか収まったので有った……



## 離れる二人・・・その10

(何とか無事終わってホント良かったわ・・・)

戦闘も終わりそう思いながらケイ||キタムラ少尉がは膝を突かせた陸ジムのコクピットからワイヤーを使って降りていると、お疲れ様でしたっ♪とカスケード隊でメカニック担当を担当しているソフィー||ホワイト伍長が下から声を労いの声を掛けて来た。

「本当に疲れたわよ・・・って言うか何のよ!この飛んでもなく扱い難い機体は・・・!」「アメリカさん用のセットアップですからねっ?ただアレだけ乗りこなせるって事はやっぱり・・・仲良しって事ですっ♪」

アメリカとの事を言ってるのかソフィーからニコつと楽しそうな笑みが浮かぶと、別に仲が良い訳じゃ・・・とやはりどこかツンデレな所が有るケイが困った顔で手を振ったのだが・・・

「ケイーーーーっ!!」

「何とか無事終わってホント良かったわ・・・」

戦闘も終わりそう思いながらケイⅡキタムラ少尉がは膝を突かせた陸ジムのコクピットからワイヤーを使って降りていると、お疲れ様でした♪とカスケード隊でメカニック担当を担当しているソフィーⅡホワイト伍長が下から声を労いの声を掛けて来た。

「本当に疲れたわよ・・・って言うか何のよ！この飛んでもなく扱い難い機体は・・・!?!」  
「アメリカさん用のセットアップですからねっ? だけどアレだけ乗りこなせるって事はやっぱり・・・仲良しって事ですっねっ♪」

アメリカとの事を言ってるのかソフィーからニコッと楽しそうな笑みが浮かぶと、別に仲が良い訳じゃ・・・とやはりどこかツンデレな所が有るケイが困った顔で手を振ったのだが・・・

「ケイーっ!!」

「えっアメリカ・・・って、ちよっと!!?」

走って来たアメリカからそのままギュツと抱きつかれたケイは倒れそうになるのを必死耐えながら受け止めると、危ないじゃない!と注意されたアメリカからは全く謝るつもりが無いのかゴメンゴメン!と嬉しそうな顔が浮かんだので有った。

「そんな事よりも何でケイがケスケード隊と行動を共にしてるんです?しかもMSまで乗ってるし・・・」

「MSのパイロットが足りないって言うからちよつと手伝っただけよ。」

不思議そうに首を傾げるアメリカに「フン!とケイが面白く無さそうに腕を組むと・・・いや・・・バリサム指令への裏工作から作戦の立案まで全部ケイ少尉が立てたましたよねえ?」

「ちよつと!?!何でばらすのよっ!!」

ホバートトラックを背もたれにしながらニヤニヤとするオペレーターのリイタニグチ伍長にケイが慌てながらツツコむとアメリカはそうだったんですね・・・と内心思ふと再びケイに抱き着いた・・・

「ケイって私が困った時には絶対助けてくれますね・・・本当に大好きですよ。」

「私は嫌いよ!アンタと一緒に居ると絶対にトラブルに巻き込まれるんだからね!!?」

そう嫌そうするケイにまたまたー♪とじゃれ合うアメリカ達を見ながら彼女と同じ様にどうにか生き延びたシヨウとチャーリーが楽しそうに笑っていると・・・ハツハツ！と息を切らしながら綺麗な黒髪を靡かせた女性が二人の目に映り込んだ。

「リン・・・!?!」

そのまま自分の胸に飛び込んで来たリンを受け止めるとシヨウはポロポロと涙を流している彼女の姿にギョツとした・・・

「一体どうしたんだよ・・・僕なら何ともないって?」

「だって・・・シヨウに何か有ったらって考えたらずっと不安になって・・・それでシヨウの顔を見たらつい・・・」

心配かけてゴメンなリン・・・とシヨウが安心した所為か涙が止まらなくなったリンの頭を撫でてしていると・・・ちよつと良いか二人とも?と今回の戦闘で色々と手助けしてくれたここ中立地帯自警団を纏めている二ノから声を掛けられたので有る。

「今回の件は本当に助かったよ。お礼とは言つちやなんだが指輪の方は格安で用意してやるからな。」

「本当に!?!良いのか二ノ・・・?」

「無理しなくても良いのよ・・・」

「良いんだよ。お前さん達のお陰で少し建物が壊れたのと怪我人が出たくらいで済んだからな・・・それとコイツは私からの婚約祝いだ。」

困った顔をする二人にニカツと笑った彼女はシヨウに先程貸したハンドガンを目の前に出したのだ・・・

「これって・・・」

「良いから受け取れって？どうせこんなマニアックな銃なんか置いといても売れないからな。」

「・・・ありがとう。大切にするよ。」

「へへっ・・・本当ならもつと気の利いた贈り物をするんだろうが私は見ての通りだからな・・・その代わり指輪の方はバツチシヤつとくから楽しみにしてろよ！」

そう言いながらニノが手を振りながら町の中に帰って行くと頼んだぞ！と手を振り返すシヨウと一緒に手を振っていたリンからはあ・・・と内心困った様に溜息をついていた事を知らないシヨウはニコニコとしながらその手をギュツと握ったので有った・・・

## 離れる二人・・・その11

中立地帯の町で起こったジオンによる襲撃事件から一週間が過ぎた。

無断外出していた三人を守る為にケイのでまかせで威力偵察をしていたとなったシヨウ達では有ったが・・・やはり基地指令のバリサムにはそれとなく分かっていたらしく恩情と言った形で一週間の基地から外出禁止と言う処分が言い渡されたので有る。

そんな常連の三人が来ない夕方・・・CASCADÉのカウンターに座って居た基地管制官のマリアートパレス曹長は目の前で溜息をつく友人のリンを見ながら飲み干したビールジョッキを置いたのだ。

「ねえ・・・その辛気臭いの止めてくんない？」

「別に良いじゃない私の店なんだから・・・」

そう答えながらお代わりのジョッキを置くリンにまったくもう・・・とマリアは呆れた顔を浮かべた。

「シヨウに会えないのは分かるけどさ・・・本来なら無断外出なんかしたら営巢入りなのよっ。」

「その事はマリアから聞いてバリサムさんにも感謝してるけどそうじゃないの・・・」  
「一体どうしたのよ・・・相談なら乗るわよ?」

困った顔を浮べるリンにマリアが首を傾げると・・・じゃあ聞いてくれる?とリンはこれまでの経緯を思い切って話し始めた・・・

「へえ・・・シヨウが指輪をね・・・良いじゃない早く結婚したら?」

「ちよつと・・・他人事みたいに!」

「実際に他人事だしね。」

そうアハハ!と笑い出すマリアに相談する相手を間違えたかな・・・とムスつとしたリンが腕を組みだすと・・・だけどね。とマリアは急に真面目な顔を向けた。

「これは前にアメリカにも言ったけど・・・イザつて言う時の事を考えるとちゃんとシヨウとは籍を入れていた方が良いわよ?」

「マリアの前で言うのは何だけど・・・シヨウが戦死する前提で話すの止めてくんないかな!?」

「バカね・・・いつ死ぬか分かんないパイロットと一緒になるつもりが有るんならちゃんと考えて置かないとダメよ!」

シヨウやチャーリーと同期で有る戦闘機パイロットだった自分の旦那を亡くした彼女だから言えるのだろう・・・分かつてるつもりでは有るけど。とリンは顔を俯かせた・・・

「良い？ウチの旦那も絶対に死なないからって言った癖に死んだのよ。シヨウの事が好きなんだだったら迷ってないで結婚しなさい。最悪の場合は自分と子供が暮らせるくらいは軍が保証してくれるからね。」

「だからそう言う前提で話すの止めてよマリア!!」

悩みごとを話して少しは気が晴れたのかリンからの怒声に冗談だって？とマリアがフツツと微笑んでいると・・・カランコロンと鳴るカウベルと同時にドアが開くとイエーガーを先頭にジャックとタンクと言ったカスケード隊の小隊長トリオが現れた。

「三人共いらっしやい♪マリアの隣で良い？」

そう言いながら案内するリンの向こうでマリアが手を振り出すと珍しいな・・・？と驚いたイエーガー達はマリアを挟む様に両隣の席に座った。

「それにしても奴等が居ないとこの店も静かだな・・・」

「確かにね・・・さつきもリンからシヨウが居ないって愚痴を聞かされてたんだ？」



「ちよつ！違う・・・もうマリアったら!!」

嘘では無いが真実でも無いマリアからの冗談にリンが困った顔をしていると・・・所でよ?とジャックが話を切り替えた。

「リンとショウの事もだけど・・・イエーガー達の送別会をしねえか?」  
「そういや・・・そろそろ本社に向かわないといけねえんだよな。」

MS試験部隊を統括しているジョンⅡコーウエン准将から辞令で地球連邦軍の本部が有るジャブローに向かう事になっているイエーガー率いる第一小隊にジャックとタンクが思案顔を浮かべた。

「どうせならパーツとここで纏めてやらねえか・・・お前達の婚約発表と送別会をよ?」  
「ちよつとまって・・・まだ私っ!」

タンクからの提案にまだ迷っているリンが慌てて両手を振り出すと・・・それ良いわね!と推して来るマリアにリンはジロつと睨んだ。

「ちよつとマリアっ!?!」

「諦めなつて・・・皆がアンタ達の事を祝おうとしてるんだからね?」

そう言いながらもニヤニヤとこの状況を楽しんでいる様子の彼女にリンはハア・・・と  
今日何度目かの為良いをついたので有った・・・

## 離れる二人・・・その12

「えっ・・・私達の送別会を今日リンさんの店でするんですか!？」

「うん。今日の19時にやるから遅れないでよね。」

そう淡々と言いながらケイがA定食のお味噌汁を啜ると・・・また突然ですね?とアメリアは向かいのケイを見ながらB定食の生姜焼きを口に運んだ。

「タンクとジャック中尉の主催らしくてね。私も昨日タンクから聞いたのよ?」

「へえ、レティ曹長からも二人が良い感じとは聞いてましたが・・・上手く行ってる様で良かったですね。」

そんな嬉しそうな顔を浮べるアメリアにそんなんじゃないからね!?!と慌てたケイがお箸で指を差されたアメリアは違うんですか?と首を傾げながら白米の入ったお椀を取った。

「違うわよ! って言うか・・・急にアプローチを掛けられて逆に困ってるんだけど・・・」

「本当にイヤなら士官学校の時にナンパしてきた男子生徒みたいに投げ飛ばしたらどうです？」

「別にイヤって訳じゃないんだけどね．．．って言うか投げ飛ばしたのは酔ったアンタが先におっぱじめたからじゃない!!」

困った顔をされたケイからツッコまれたアメリカはそうでしたっけ．．．?と誤魔化す様にクスクスと微笑んだ。

(でも嫌いじゃ無いんならこれは時間の問題ですね．．．ケイってば年上好きですし♪)  
そう思いながらニヤニヤと笑みを浮かべるアメリカを見たケイから．．．何よその顔は!と睨まれたアメリカは何でも有りませんって!?!と慌てて両手を振り出した．．．

「まあ良いけどね．．．所でちよつと小耳に挟んだんだけど、アンタ達カスケード隊が向かうマドラス基地方面で何だか動きが有るみたいよ?」

「動きとはまた嫌な予感で一杯ですな．．．」

お互い食べ終わり食後のお茶を飲みながらアメリカが尋ねるとまあね．．．と情報部との連絡役でも有るケイからジオン地上軍最大と言われるオデッサ鉾山基地の話の話を聞かされたアメリカは飲んでいたお茶を拭き出そうになったのだ。

「オデッサって．．．私達が經由するインドに有るマドラスに有る基地からちよつと北に

有る所ですよね!？」

「うん。この反抗作戦の指揮官はレビル將軍つて話だからコーウエン准将の実験部隊管轄下で有るカスケード隊には関係ないとは思うけど・・・一応ね。」

「そう心配そうな顔を向けて来るケイに助かります・・・とアメリカは苦笑いを浮かべた・・・」

「また何か情報が入ったら伝えるわね?」

「そう言いながら席を立つケイにお願いします。と頭を下げたアメリカはじやとケイがと手振るのを見送るとまた面倒臭い事になりそうですね・・・と深い溜息をついたので有った。」

くくく

「はくい・・・オーライオーライ・・・ストップですつ!!」

カスケード隊がジャブローへと向かう日が迫っている中・・・彼らの乗機で有るRG M-79「G」陸戦型ジムのメンテを終わらせミデアへの積み込み作業を終えたソ

フィーはその場でへにやつとへたり込んだ・・・

「やつと終わったあ・・・」

ソフィーちゃんお疲れさん、後は俺つちがやつとくから夕方まで休んでて良いからさ  
？」

今晚CASCAD Eで行われる送別会の事も踏まえているのか整備主任のシゲ曹長の言葉に甘えたソフィーはありがとうございます♪とお礼を言いながら立ち上がると早速食堂へと歩き出した。

「確か今日の日替わり定食はA定の塩魚とB定の生姜焼きだった筈つ・・・どっちにするか悩むなあ？」

そう思案顔を浮かべながら独り言ちるソフィーがハンガーを出ようとした瞬間に誰かとぶつかると・・・

すみませんっ!?!と慌てて頭を上げだすソフィーにソフィーじゃないか?とカスケード隊の中隊長で有るイエーガーⅡバスネルン中尉から驚く声が上がった。

「おつ丁度良かった。ソフィーが今から昼飯なんで・・・いつもみたいに頼みますね中尉？」

そう言いながら奥に有る予備機の陸ジムへ向かう整備班のシバⅡシゲ曹長を待て

待て!?!とイエーガーは慌てて引き止めたので有る。

「何で俺がコイツの食事をいつも面倒を見ないといけないんだっ!!?」

「だってほら・・・?」

そんな呆れた顔を向けて来たシゲはイエーガーの袖を引つ張っているソフィーを見ると苦笑いを浮かべた・・・

「おやつさんも心配してる様ですし・・・色々と頼みますよイエーガー中尉・・・?」

「ちよつと待て・・・色々ってどう意味だ!?!」

「それはご自分で察して下さいよ・・・」

そう言いながら手をヒラヒラとさせながらシゲが立ち去ると・・・面倒見の良いイエーガーは早くご飯に行きましようよつ?と言つて来るソフィーに頭を抱えた。

「分かったから今日は程々に頼むぞ．．．？」

「ハイ！お代わりは三回にしておきます♪」

そしていつも何だかんだ言いながら奢ってくれるイエーガーに甘えてソフイーがエへへと笑っていると．．．

『程々にしてやれよ．．．？』

そう言いながら基地の外にパトロールへと出て行く第二小隊長のジャックからククつと二人を揶揄う様に笑われたのだ。

「うるせえな．．．お前こそ俺達の送別会までには帰って来いよ！」

『はいはい．．．そつちこそ俺達が戻るまでに酒と料理を残しといてくれよな？』

そう怒鳴るイエーガーにジャックの陸ジムが手をヒラヒラと振りながらレオンとユウヤを連れてハンガーから出て行っただので有った。



## 離れる二人の距離・・・その13

そんなドタバタとしたトリントン基地から少し離れた砂漠のど真ん中でとある三人が怪しげな取引らを行っていた・・・

「これが依頼されたブツだ・・・間違い無いな？」

「ああ・・・確かに受け取った。」

綺麗な顔立ちだが多数のピアスと腕に彫られたタトゥーを持つ女性との取引が成立したのか黒髪の青年は相棒で有る金髪ヘコツチに車を回す様に手で合図した・・・

「流石に言うだけ有って上質だな・・・ニノ？」

「誰に言っただよ・・・それに今回はお礼も兼ねてるから相当気合いを入れてカッツしたんだぜ？」

そうニヤニヤと満足気な顔でニノはショウとチャーリーがリンとアメリカへと渡す指輪を見せて来た。

「リンの誕生石がルビーでアメリカが翡翠石で良かったんだよね？」

「ありがとよ二ノ．．．これならアイツも喜ぶぜ！」

そんな声を上げるチャーリーにサンキュー！とシヨウも満面の笑みを浮かべると、じゃあ出しな？と喜ぶ二人の余韻を消し去る様に二ノが右手を出した。

「お前ってホントに金に五月蠅いな．．．」

「何言ってるんだい．．．こちとら商売でやってんだよ！」

「それは分かるけどよ．．．ちよつと高すぎやしねえか二ノ!？」

指輪を買う為にとあつと言う間に溜めていた貯金の半分が消えたシヨウとチャーリーから不満そうな声が上ると．．．仕方ねえな。と二ノは腕を組んだ。

「その代わりと言っちゃなんだけどさ．．．最近この辺りで物資不足のジオン兵が暴れ回ってるらしいんだ。」

中立地帯の町を纏める二ノからの情報に驚いたシヨウとチャーリーは顔を見合わせた．．．

「それって．．．この前二ノ達を襲った中立地帯の奴等とは別のつて事か？」

「ああ．．．それなんだけどよ。どうも．．．西側の町も被害に有ってるらしいんだ。」

そう顔を曇らせる二ノに事情を察知したシヨウとチャーリーは顔を強張らせた。

「聞いては居たけど．．．ジオンの奴等め．．．」

「勝手な理由で攻め込んで置きながら略奪とか有り得ないだろつ!!」

そう憤慨する二人落ち着けて?と二ノが宥めていると・・・ピーピーと鳴るジープの無線機に気が付いた。

「基地からじゃないのか?」

首を傾げる二ノに一体なんだ・・・?と不審気にチャャリーがマイクを取ると、大変ですつ?!とアメリカの焦った声が聞こえて来たのだ。

「おいおい一体どうしたんだよアメリカ・・・?」

『今しがた基地へと第二小隊のミリイから救援を求め通信が入ったと管制塔のマリア曹長からコツチにコールが入ったんです!』

「救援って事は第二小隊が攻撃を受けてるって言うのかよ!!」

『詳細は不明です・・・こちらからの呼びかけにミリイが一切応じないんですよ!!』

そんなアメリカからの切羽詰まった説明に冗談だろ?!と声を上げるチャャリーに出すぞチャャリー!!とシヨウがジープのエンジンを掛けるとチャャリーはすぐに戻るぜ!とアメリカとの通信を切ると助手席へのりこんだ。

「何だかトラブルみたいだけど・・・無茶はすんじや無いよ!」

「ああ、それと今晚はリンの店でパーティーをするからお前も絶対に来いよ二ノ?」

「分かったよ。最高の酒を持って来てやるからな。」

そう言いながらグッドラックと親指を立てる二ノに見送られながらシヨウはアクセルを吹かすとジープを急加速させながらトリントン基地へと戻って行った・・・

~~~~~

「推進剤の補充急げーっ!!それとブルパップマシンガンの予備マガジンはどうなつてやがる!!」

「現在準備中ですつてえおやつさん!?!」

「チンタラしてる奴はここオーストラリア大陸の砂漠にち埋めちまうぞ・・・さつさと起動準備を始めやがれ!!」

まるで戦場の様にハンガーの中をバタバタと走り回るホワイト大尉率いる整備班の姿をアメリカはイエーガーと共に苦笑いを浮かべながら眺めていた。

「まさかここでリンス達が置いて行ったジムが役に立つとは皮肉ですね・・・」

「俺達の機体は既にウォルフ大尉のミデアに積み込みらしいからな・・・?」

因縁の有る元上官の機体に頼る事となり複雑そうな顔を浮べるアメリカに對しそう答えたイエーガーも困った様にガシガシと頭を掻き始めた。

「せめて予備機の陸ジムでもと思ったんですけど・・・先日の戦闘でまだメンテが終

わって無くてっ・・・」

「そんな顔をしないで下さいよ・・・ミリイと通信が出来ない以上は私も陸ジムに乗れませんからね・・・？」

そんな申し訳なさそうな顔をするソフィーにアメリカがフォローを入れていると・・・悪りい!!と叫ぶチャーリーがショウの運転するジープでハンガーの中に飛び込んで来た・・・

「それで状況は!!？」

キュキュ!とタイヤを鳴らしながら急停車したジープから飛び降りたチャーリーはショウと共にアメリカとイエーガー達へと駆け寄った。

「あまり芳しく無いです・・・通信途絶する前にミリイと交信したマリア曹長からの報告によると墜落するミデアを見た。と言う報告を最後に一切返事が返って来ないそうです・・・」

「マジかよ・・・」

後輩で有るミリイの事が心配なアメリカの浮かない顔にチャーリーも暗いを顔を浮

べていると・・・所でさ?とシヨウは大忙しでリンス達が使っていたRGM-79・・・量産型ジムの整備をしているホワイト達整備班に首を傾げたので有った。

「ひよつとしてリンス達が使っていたジムで出撃とか言わないよなアメリカ?」

「そのまさかです。まあ・・・操縦系のレイアウトは陸ジムと同じと聞いてますから問題は無い筈ですよ?」

「いやそれは知ってるけど・・・何かヤダな。」

「俺もだぜ・・・」

気分的な問題なのか・・・シヨウとチャーリーがとてつもなく嫌そうな顔を浮かべると、良いから準備しやがれ!と二人を小突いたイエーガーも内心嫌なのか溜息をついた。

「それで・・・目的地まではどうやっていくんだアメリカ?」

「それに関してはブラックウイドウ隊のミデアを借りれないかウオルフ大尉がヒルダ中尉と交渉中です。」

それを聞いてイエーガーはまた空挺作戦か・・・と苦笑いを浮かべたので有った。

~~~~~

## 離れる二人の距離その14

『こちらトリントンコントロール・・・ブラック・ウイドウへA滑走路への侵入を許可します。』

「ブラック・ウイドウ了解・・・タキシングを開始するぞい。」

管制タワーのマリアからの指示に黒く塗装されたミデアの操縦桿を握るアレクサンダーⅡウォルフ大尉は滑走路の手前で機体を止めると次の指示を待ちながら離陸前に行う最後のシステムチェックをし始めた。

「しかし・・・しつくりこんなぁ・・・」

「借り物の機体なんですから無茶は厳禁ですよ大尉？」

隣から聞こえて来る心配そうな副操縦士で有る少尉の声に分かっておる！とウォルフが答えていると離陸準備良いですかブラックウイドウ？と管制官のマリアから通信が入った。

「こちらブラックウイドウ・・・全てオールグリーンじゃぞ！」

『了解ですブラックウイドウ・・・それとミリイ達の事を頼みます・・・』

「それは嬢ちゃん達に言うんじゃないマリア・・・ワシの役目はこ奴等を無事に運ぶのが仕

事だからのう？」

そう言いながらウォルフからワーハツハツハツと大笑いされたマリアはそれもそうですね。とクスつと微笑んだ。

『それではアメリカ達にさっきの伝言をお願いします。』

「分かった・・・それじゃあそろそろ出るぞいっ!!」

マリアからの言付けを預かったウォルフがスロットルを全開にすると、ブラックウイドウへ離陸を許可します。と聞こえて来たマリアからの通信にウォルフはブレーキを解除すると滑走路を加速し始めた・・・

「V1、V2・・・テイク・オフ!!」

「行つくぞい!!」

計器の数値を読み上げる副機長の声にに応じてウォルフが操縦桿を引くと・・・どうか全員無事に帰って来てね?と離陸して行ったカスケード隊を乗せた黒いミデアを見送ったマリアは祈る様に両手をギュツと握ったのであった。

〃〃〃



「さてと・・・それじゃブリーフィングと行きますかね。」

ウォルフが操縦するミデアが水平飛行に移った所で始まったブリーフィングにアメリアは早速苦笑いを浮かべた。

「ジャック達の第二小隊との通信が途絶えたのはここです。その直前に墜落したミデアを見つけた。とミリイからの通信が入ってから既に一時間以上経つてます・・・」

「その言い方じゃジャック達が全滅した様に聞こえるぞアメリア・・・?」

そんな抗議の声を上げるイエーガーにですが・・・と答えたアメリアは顔を伏せた。

「ミリイと連絡がつかない以上・・・最悪の事態を想定していた方が絶対に良いと私は思います。」

「それはそうだが・・・」

軍人として死と隣合わせと言うのは重々承知で有るイエーガーからムスつとした顔

が浮かぶと、なあ……もうちよつと前向きに考えねえか？とチャーリーから手が挙がった。

「ミリーのホバーと連絡がつかないのも何かのトラブルかも知れねえだろ。」

「僕もチャーリーの意見に賛成だね……生きている前提の方がモチベーションも高いし」  
合わせて意見を述べて来るシヨウにそれはちよつと違うんじゃないかね……？とチャーリーがツツコみだすと……バシツとアメリカから自分の頬を叩く音がブリーフィングルームに響いたのだ……

「すみません……そうですね。ジャック達の事をちよつとネガティブに考え過ぎてたようです。」

「そりゃあ良かったぜ……それでどうするよ指揮官様？」

そう言いながらチャーリーが揶揄う様にククつと笑っていると……そろそろ当該空域に入るぞい！と聞こえて来たウォルフからの機内放送にハツとしたアメリカはすぐに指示を飛ばし始めた。

「今回の作戦は第二小隊の救援がメインです！もしジオン機と遭遇した場合はくれぐれ

も戦闘を行わずに離脱に専念する様に・・・良いですね？」

「「イエス・マム!!!」」

アメリカの言葉にシヨウ達三人がMSデッキへと駆け込んで行くのを見送りながらアメリカも無事で居て居て下さいね・・・とミリイを心配しながらその後を追った。

~~~~

「チツ・・・かなりミノフスキー粒子が濃い様ですね。」

「これじゃあ基地との通信は無理の様じゃな・・・」

隣の副機長から聞こえるボヤキ声にウオルフがノイズしか聞こえないヘッドセットの通信チャンネルを変えようとした瞬間・・・ピピピっ!とロックオンアラームが鳴り響き出した。

「大尉っ!!?」

「任せろいっ!!」

焦る声を上げる副機長に向かってそう叫んだウォルフは目一杯右足のフットラダーを踏み込むと操縦桿を思いっきり右に捻りミデアを急旋回させると、ちよつとウォルフ大尉!?とMSコンテナのアメリカから抗議の通信が入って来た。

「悪いがちよつと口を閉じてた方が良いぞい・・・」

『敵機の攻撃なら早く射出して下さい!』

「こんな状況で出来る訳無からう!?!」

無茶を言うアメリカを叱咤したウォルフの操縦するミデアはチャフ発射!と叫ぶ副操縦士によつて発射された金属板によつてロックオンが外れると至近距離で地上から撃たれたと思われる弾頭が炸裂したので有る・・・

「レーダー! 一体どこから撃って来たんじゃ!?!」

「ミノフスキ粒子の濃度が高い為曖昧ですが・・・恐らくカスケード隊第二小隊と通信が途絶したポイントの近くです!」

レーダー官からの報告にコイツは厄介じやのう・・・と呟いたウォルフは同じ思いなのかコクつと頷く副機長を見た。

「悪いが・・・一旦離脱するぞい?」

『何故ですか!?!』

「このまま降ろすのはリスクが高すぎるんじゃない・・・どうか分かってくれんかのう嬢ちゃん?」

補給部隊として積み荷を無事に運ぶ事を信条にしているウォルフの事を知っているアメリカは分かりました・・・と頭を抱えながら答えた。

『ならば・・・少し離れたこのポイントで降ろしてくれませんか?』

「了解した。無理を言っつてスマンが・・・頼むぞい!」

そう言いながらミデアを旋回させたウォルフが指定のポイントでハッチを開いた：「それでは皆さん・・・準備は？」

ウィーンと開くハッチを見ながらウイスキードッグに搭乗するアメリカが首を傾げた。

「いつでも！」

「どこでも!!」

「行くぞっ!!!」

そんな声を上げるシヨウ達三人が搭乗したRGM-79量産型ジムはウォルフの操縦するブラックウイドウから射出されるとオーストラリア大陸に広がる白い砂漠へと降下して行ったので有った。

離れる二人距離その15

そしてそんな一方・・・音信不通となっていたジャック率いるカスケード隊第二小隊は少し小高い丘に不時着したミデアを中心に下から様子を伺っているジオンのMS部隊と睨み合っていた・・・

「CSSD4から各機へ残弾数を報告しろ!」

『こちらCSSD5、マシンガンの残弾は今のと合わせて残りマガジン2つ!』

『CSSD6はバズの残弾3に100ミリマシンガンのマガジン一個のみですね・・・』

ヘッドセットから聞こえて来る部下からの報告にジャックはチツと舌打ちした。

「俺も残りはこれを入れて残りのマガジンは二つだけだ・・・」

FCSで確認したジャックがこれからどうするか思案顔を浮かべ出すと、あのジャック隊長・・・?と二番機のレオン機から不安そうな声が聞こえて来た・・・

「こんな状況で本当に基地からの援軍は来るんですかねえ・・・」

「分からね・・・だがその為にミリイが頑張ってるんだから俺達の使命はあのミデアを守るだけだ!」

こんな絶望的な状況にも関わらず諦めないジャックの声に多少は士気が上がったのかレオンから了解！と力強い返事が返って来ると、頼むぞミリイ！とジャックの陸ジムは奮闘している彼女が居るミデアの方を少しだけ見るとすぐに正面に展開する敵MS部隊にジムライフルを構えたので有った。

〃〃〃

「どうです．．．直りそうですか．．．?」

「メインは生きてるから多分．．．落ちた衝撃で基盤のどれかが死んだだけだと思うですけどねえ．．．」

墜落した時した怪我をしたのか．．．ミリイは頭に包帯を巻いた不安そうなお尉にそう答えながら潜り込んでいたミデアの操縦席から出て来るとすぐにコクピットの横に有ったボックスの蓋を開けた。

「えつとお．．．これかなあ．．．?」

「お若いのお詳しいんですね．．．!?!」

自分よりも随分と若い伍長．．．しかも女性で有るミリイの手際の良さに機長のお尉が驚いていると、姉の影響なんですよねえ．．．とミリイは苦笑いを浮かべた。

「それよりも・・・ウチの部隊が持つかが問題ですねぇ・・・？」

「大丈夫です。こうしてあなた達の部隊が我々を助けに来てくれたんです・・・絶対に神は私達を見捨てない筈です。」

そういう宗教を信じてらしい真剣な顔をする機長にミリイはだと良いんですが・・・と苦笑いを浮かべながらつい一時間前の事を思い返した。

~~~~~

定期パトロールの為にトリントン基地から出撃した第二小隊はスケジュール通りのルートで索敵をしながらぐるっと基地に戻る予定だったのだが・・・その途中でミリイが操縦するウイスキードッグIIにピピッと反応が入ったのだ。

「ウイスキードッグIIから第二小隊全機へセンサーに感有り・・・」

そう言いながら停車する彼女のホバートラックにジャック達の陸ジムも立ち止まると、おいミリイ！と先頭のジャックの陸ジムが上空を飛ぶミデアを確認した・・・

「アレじゃ無いのかミリイ？」

「いや・・・これはMSの熱源ですう!!」

ミリイがそう叫んだと同時に上空を飛んでいたミデアが下から攻撃を受けたのである。

「なっ!!?」

「こちらウイスキードッグII! トリントン基地へ至急・・・友軍機の墜落を確認ですう!! 救援部隊の要請をつ!!」

『え・・・リイ!? ノイズが酷・・・上手く聞き取れないわ・・・もう一度・・・』

恐らくリアらしいノイズ混じり声がミリイのヘッドセット聞こえて来ると冗談?!と焦った彼女は運転席のキーボードを咄嗟に叩いた。

「ミノフスキー粒子が戦闘濃度にまで上がってるう!!?」

「マジかよ・・・それじゃあ基地と連絡が取れないってか!」

「ううん・・・一応リア曹長にはコッチのピンチは伝わったと思うよお?」

そう言いながらミリイが首を傾げると、それを信じるしかねえな・・・とモニター越しでジャックは困った様に頭を掻き出した・・・

「CSD4から各機へこれより墜落したミデアの捜索に向かう。恐らく敵機との戦闘も

有るから気を引き締めろよ！」

「了解・・・CSD5はそんなジャック隊長の正義感の強い所が好きですよ？」

「CSD6も同じくです。」

そう答えながらニヤニヤと笑って来るレオンとユウヤに向かってジャックからうるせえ！と怒鳴り声が上がると・・・ジャックっ!!と叫んだミリイのセンサーに突如ピーつと反応が出るとヒートホークを構えたザクが現れたのだ。

「チツ・・・!!」

「隊長伏せてえー！！」

そう声を上げるレオンのジムが撃ったバズがうおっ!?!と驚くジャックの陸ジムの頭をスレスレに通り返けるとヒートホークを振り降ろそうとしたザクの頭部を吹き飛ばした・・・

「危ねえだろユウヤっ!?!」

「助けてあげたんだから文句言わないで下さいよ!!」

「喧嘩は後!さっきの通信を傍受されたのか敵機の反応がどんどんコッチに集まって来るよお!」

アクティブソナーで周囲の索敵を終えたミリイが二人を窘めながら離脱しようとし

た瞬間にピーっと鳴るMSの接近アラームと同時にホバートラックの操縦席からバチっ!と火花が上がったのだ……

「ミリイーーーー!!」

突如現れた青いMS……MS07グフが放ったヒートロッドの高電流により動きを止めたウイスキードッグIIにジャックが焦って叫ぶ中……一体何が!?!と全くエンジンが掛からなくなり無線も使えなくなったミリイはホバーを諦めると上部銃座からグフと対峙しているジャックの陸ジムに向かってジャックうー!!と叫んだ。

『ミリイ!?良かった……怪我はないんだよな』

「無いけどホバーは無理っぽい!!」

外部スピーカーでそう答えて来るジャックにミリイが大きく手を振ると、ここは自分が!とグフにむかって牽制射撃をする二番機のレオンの陸ジムと入れ替わりながらジャックは陸ジムの左手をホバートラックへと向けた。

「しっかりと掴まれよミリイ!」

「うんっ!!」

ジャックの言う通りミリイが陸ジムの指にしがみ付くのを確認したジャックはフットペダルを踏み込んだ……

「全機離脱するぞ!!一斉射ーーーー!!」

バーニアを吹かすジャックと同時にレオンとユウヤの陸ジムがマシンガンとバズーカを撃つと、流石に一機じや無理と判断したらしいグフも離脱して行くのを確認すとジャック達は不時着したミデアとどうにか合流を果たした・・・

だが・・・その時の墜落で乗組員は無事だったがミデアの通信機が破損しているので学生時代に電気工学を専攻していたミリイが修理に志願したのだ。

(これさえ直れば先輩達・・・第一小隊とも通信が繋がる筈！)

無茶な指示ばかりだが仲間想いのアメリカの筈・・・絶対に救援に向かっていると信じていたミリイは焼けた基盤の交換を急いだので有った・・・

## 離れる二人の距離その16

「そろそろ通信が途絶えた位置だな・・・」

ミリイが祈った様に実際に近くに降下したカスケード隊第一小隊はイエーガーの量産型ジムを先頭にアローフォーメーションを組みながら第二小隊をロストしたポイントと進んでいた。

「この辺りはミノフスキ粒子が高すぎてレーザーがほとんど役に立ちませんね・・・」  
「つて事はそれが原因でミリイと連絡がつかないとかっ?」

メカニック兼ホバーの操縦担当でも有るミリイからそんな声が上がると、まあ・・・それもあるでしょうね。と最悪の事態を想定しながらアメリカが囁かかったレーザーからサーマルセンサーにモニターを切り替えていると・・・こちらCSDI!とイエーガーから緊張する声がヘッドセットに聞こえて来た。

「どうかしたんですかイエーガー・・・?」

「アメリカさんっ!!アレ見て下さいっ!」

そう言いながら急ブレーキを踏むソフィーに一体何が・・・と彼女が指差す操縦席の窓の向こうにこのウイスキードッグと同型の指揮車両が見えたので有る。

「・・・イエーガー、第二小隊は・・・？」

「安心しろ・・・ウチのMSの残骸は無いぞ。有るのは乗り捨てられたミリイのホバートラックに撃破されたザクが一機だ・・・」

イエーガーからの報告に二人がホツとすると・・・ちよつと見て来ますね！と外に出たアメリカはミリイのウイスキードッグIIを中心に周囲を警戒しているイエーガー達のジムに手を振りながら中へと入ると車内を見渡した・・・

（血痕の跡も無し・・・どうやら怪我はして無いようですね・・・）

まだ確信では無いが可愛い後輩の安否を確認したアメリカがホツとしながら操縦席のキーを捻るがウンともスンとも言わないので有る。

「エンジンどころかメインコンピュータまで死んでる・・・だから全然通信が繋がらなかったんですね。」

音信不通となった原因は分かったが行方不明となった第二小隊にアメリカはムウ・・・と唸りながら上部銃座に上がると撃破されたザクの残骸を調べているシヨウとチャリーに声を掛けた。

「何か分かりましたかー？」

「そんな事言われてもな．．．」

「コックピットから上が吹き飛んでるからどうしようも無いぜ．．．」

苦笑いを浮かべながらそう答え来る二人にアメリカは腕を組んだ．．．

「残されたホバーに撃破されたザク．．．そして消えた第二小隊．．．これはミステリーですね？」

「そしてその真相はっ．．．」

「ただの戦闘後だからに決まってるまってるだろうが!!」

そう怒鳴りながら馬鹿野郎っ!とツッコんで来るイエーガーにちよつとした冗談じゃないですか?と答えたアメリカは一緒に乗ってくれたソフィーにねえ?と一緒に首を傾げた。

「そんなに怒るとソフィーに嫌われちゃいますよイエーガー?」

「えつとっ．．．私も怖いイエーガーさんは嫌いですっ!」

『ちよつと待てっ?!俺は別に怒った訳じゃ．．．』

わざとらしくプイッと顔を逸らすソフィーにモニター越しのイエーガーがあたふた



するのを見ながら本当に仲が好いですね・・・と思いつながらアメリカはキーボードを叩きウイスキードッグの左右から振動を感じするクローを突き立てた・・・

「アクティブソナーを展開！第二小隊の救援を最優先とする為に全機散開して下さい！」

「CSD1了解した。じゃあまたあとでなソフィー・・・」

急に真面目な声で指示を飛ばして来るアメリカの声にソフィーと話していたイエーガーも隊長として真剣な顔に戻すと、気をつけて下さいねっ・・・？と不安そうな顔をする彼女に頷いたイエーガーはお前ら行くぞ！とシヨウとチャーリーのジムと共にバーニアを吹かすと少し距離を取った所で三機が別々の方向に散るとアメリカはヘッドセットを耳に押し当てながら・・・ねえソフィー？と興味本位で聞いてみた。

「前々から気になっていたのですが・・・ひよつとしてイエーガーの事が好きなんですか？」

「好きですよっ？イエーガーさんって何だかんだ言いながらご飯奢ってくれるしっ♪」

そう答えながらニコニコと満面の笑顔を浮かべて来るソフィーにそうなんですネ・・・

と苦笑いを浮かべたアメリカはまだまだ遠い恋模様の二人の様子にアハハと笑ったので有った・・

くくく

「えーつくしよい！何だ風邪か・・・？」

急に鼻がムズつとしたイエーガーが鼻を擦っているとメインモニターにピーつと反応が現れた。

「CSD1からウイスキードッグへ・・・どうやらお目当てのミデアを発見した様だ。」  
『データをリンク・・・すぐにCSD2とCSD3を増援に向かわせます。』

そう聞こえきたアメリカの声にイエーガーのジムは小高い丘の上に見えるミデアの周囲を確認しようとして近くの茂みに入った瞬間コツンと・・・嫌な衝撃が左から感じたのだ。

「なんだ一体・・・？」

そう言いながらゴクツと息を飲んだイエーガーはジムのメインカメラを左に向ける  
とまさに

そのミデアを襲おうとしているジオンのMS部隊と一緒にになったので有る・・・  
「冗談じゃねえ!？」

物資調達の為に自分達が振り巻いたミノフスキー粒子の高さが災いを招いたのか突然現れたイエーガーのジムがブルパップマシンガンをばら撒きながらバーニアを吹かすと・・・何故ここに連邦の機体が!?!と驚いたグフのパイロットもイエーガーからの銃撃をシールドで防ぎながら部下達と一旦間合いを取った。

くくく

# 離れる距離・・・その17

『イエーガーCS D1からウイスキードッグリアへ敵機とニアミスした！至急支援を頼む。』

突然聞こえて来たイエーガーからの焦った声にギョツとしたアメリカはヘッドセットに手を当てながら了解！と答えるとイエーガー機の位置データから一番近いチャーリーCS D3へと通信を繋いだ。

「こちらウイスキードッグ！CS D1が接敵した模様・・・CS D3は今から送るポイントへと急行して下さい！」

『CS D3了解した。ここからだと二分以内に到着すると隊長に伝えてくれウイスキードッグ!!』

アメリカのウイスキードッグとデータをリンクさせたチャーリーのRGM-79ジムがバーニアを吹かしイエーガーの救援に向かうと、CS Dも了解した！と一番遠いシヨウからも通信が入ったアメリカは頼みます。と答えながら二人への通信を切るとホバーの操縦席からコッチを見て来るソフィーにアメリカはクスッと微笑んだ。

「という訳なんでソフィー・・・そんなに心配そうな顔をしないでください。」

「別にイエーガーさんの事なんか心配してなんかっ!？」

そんな事を言いながらソフィーからアワワっ!?!と泡喰った様子で両手を振り出すと、別にイエーガーとは言つてませんが?と答えたアメリカが首を傾げると・・・

「へっ!？」

「へっ、じゃなくて・・・本当に無自覚ですねソフィーって?」

そんなソフィーに呆れた顔をしたアメリカがキーボードを叩き出すと、どう意味ですか?!?と聞いて来るソフィーを無視したアメリカは操縦席に座るソフィーのモニターにイエーガー機の位置をポイントして送ったのだ。

「恐らくその近くに不時着したミデアとミリィ達が居る筈です。」

「アメリカさんってば意地悪だ・・・」

そう淡々と答えるアメリカにソフィーからムウ・・・と唸られたアメリカは仕方無いですね。と腕を組んだ。

「今感じている気持ちのままイエーガーと会ったら・・・何となく自分の気持ちが分かるんじゃないですかね?」

「なんだか良く分かんないけど・・・イエーガーさんと会ったら分かるんですねっ♪」

全てを教えると野暮だと思ったアメリカが少しほかしながら説明するとそう答えたソフィーはそれを実行する為にホバートトラックのエンジンを始動させるとアクティブソナーを収納しながらアクセルを踏み込んだので有る。

「ウニャっ!？」

「おっとっ・・・ちよつと揺れるのでしっかりシートベルトを付けてくださいアメリカさんっ?！」

「ちよつと所じゃないですってソフィー~~~~!!」

そんな声を上げるアメリカを乗せたソフィーが操縦するウイスキードッグは急行するチャャーリーとショウと共に苦戦中のイエーガーの下へと向かったので有った。

~~~~

「くそつたれ・・・せめて陸ジムならどうか出来るのに!!」

ジャブローへの出発の為に積み込みが終わったCASCAD E隊が持つ陸戦型ガンダムや陸戦型ジムでも無く先日の特務隊の一件で宙ぶらりんになっていた所謂量産型ジム・・・型式番号RGM-79ジムに乗る嵌めとなったイエーガーはメインモニターに映る三機のMSに向かって悪態を吐いた。

（汎用性は高いと聞いてたが・・・ソフィーのピーキーなセッティングに慣れた所為か全然噛み合わないな・・・）

そう思いながら防戦一方のイエーガー機にグフを隊長機とするザク二機は意外にも焦っていた・・・

「何だアイツ!?コッチの攻撃を器用に避けやがる・・・」

「どうしますか隊長!!」

「どうするも何もここまで来たらヤルしかねえだろうが!!」

補給物資の枯渇が原因でミデアを襲ったジオンのMS部隊がグフの指示で個々に襲って来るの見たイエーガーがチツ!と舌打ちしながら離脱の方法を考えていると、

ピーつと反応するモニターに友軍機の識別信号IFFを確認したイエーガーはやっと来たか!とコクピットで叫ぶとフットペダルを踏み込み迎撃に出たのだ・・・

「食らいやがれーっ!!」

ジムの頭部に装備された60ミリバルカン砲で牽制したイエーガーのジムが一番先頭にいたMS-07Bへと突っ込んで行くと、コイツっ!?!と泡喰ったグフのパイロットに僚機のザクも近すぎて援護が出来ず固まっていると・・・イイツヤツホウ!!と雄叫びを上げながら連邦軍のジムが上から振って来たので有る。

「連邦のっ!?!」

「騎兵隊の到着ってね!!」

そう驚くザクが向けて来る120ミリマシンガンをチャリーリーのジムが振ったツイーンビームスピアで腕ごと切り裂くと、テメエえええ!!と叫んだもう一機のザクがヒートホークを振り上げるの見たチャリーリーはチツ!!と舌打ちしながらその攻撃を咄嗟に左手のシールドで受け止めたのだ・・・

「死ねえ!!」

「そうはいくかよっ!!」

ザクによって地面へと押し倒されたチャリーリーのジムがジリジリとシールドを溶かすヒートホークに焦っていると、ピーッとロックオンアラームが鳴り響くと同時に後方

支援を担当しているシヨウからそのまま動くな！と通信が入った・・・

「これで五機目・・・俺もエースに!!」

そう叫んだ彼の乗った乗機はチャリーリーのジムをスレスレにシヨウが撃つた180ミリキャノンによつて上半身ごと吹き飛ぶと・・・生きてるか相棒？と狙撃用のゴーグルをシートの後後に直したシヨウからの通信が入ると、まあな・・・とチャリーリーは苦笑いを浮かべた・・・

離れる距離その18

イエーガーはCSD2とCSD3が二機のザクを撃破したのを確認するとジリジリと後ずさろうとする隊長機らしいMS-07グフに向かってジムの右手に有る90ミリブルパップマシンガンを構えた。

「もうこれ以上の戦闘は無駄だ・・・条約に沿って捕虜としての身柄は約束するから大人しく投降しろ！」

「ほう・・・スペースノイドで有る私に劣るアースノイドに下れと・・・？」

オーブンチャンネルでそう投降を呼び掛かるイエーガーだったがグフのパイロットにはそれが不服だったのか左腕に装備されて有ったシールドからヒート剣を引き抜くと・・・おいませ！とイエーガーのジムは足下に転がっている最初にチャリーが倒したザクを見た。

「勿論・・・お前の部下もだ。だから・・・落ち着け？」

「部下か・・・そう言うのなら考えても良いが・・・」

そう答えるグフのパイロットに安堵したイエーガーだったが・・・こんな奴いるかよバーカ！と叫ぶグフのパイロットが完全に戦意を失っているザクにヒート剣を振るの

を見るとテメエっ!!?と慌てたイエーガーは咄嗟にバックパックからビームサーベルを引き抜くとそのザクを助けようとバーニアを吹かした・・・

「ホント・・・連邦つてのは正義感を持った奴が多いぜえ!!」

そう叫ぶグフのパイロットが機体の右腕から鞭の様なロッドを伸ばすと・・・イエーガーさん避けてっ!!?とヘッドセットに聞こえて来る焦ったソフィーの声に、この野郎っー!!と叫んだイエーガーのジムが地面を蹴るとそのまま右足のフットペダルを踏み込んだイエーガーはまるで戦闘機のようにそのままバレルロールをかましたのである。

「ウソっ!!?」

「マジかっ!!?」

ようやく追いついて来たアメリカとソフィーが乗るウイスキードッグとヒートロッドを放ったグフのパイロットから驚く声が上がると、イエーガーさん聞こえますかっ?とソフィーはホバートラックを近づけながらライブラリーでイエーガー機と戦っているジオン機の特徴を伝えた・・・

「その機体はMS-07グフと言つて格闘戦だとジムじゃ分が悪いですっ!更にさつき

食らいそうになった電撃兵器を食らうとシステムがダウンするんで気をつけて下さい
いっ!!」

「もつと早く言えって!!?」

ソフィーからの説明にこれで納得がいったイエーガーはそうソフィーにツツコミながら90ミリ

ブルパップマシンガンバラまきながら連射するとグフもバックステップしながら一旦距離を取った。

「今のを避けるとは中々やるじゃねえか・・・?」

「ただの偶然だ・・・それじゃあそろそろ決着をつけるぞ!」

仕切り直すと言う様にイエーガーのジムのビームサーベルを構えると、いやいや・・・とグフのパイロットは不時着したミデアに向かって左手のフィンガーマシンガンを向けたので有る。

くくく

「良しっ……これでっ!」

基盤の交換と焼き切れた配線の修理を終えミリイがミデアのメインスイッチを回すと通信設備は元よりメインエンジンの稼働まで出来た事も有りギョツとした大尉は本当に嬉しそうな顔でミリイの手をギュと握ったのだ。

「これで故郷で私の帰りを待っている嫁と子供に会える事が出来ます……」

「ちよつとお……私は自分の役目を果たしただけですよお!」

まるで自分の事を女神の様に言つて来る機長で有る大尉にミリイが苦笑いを浮かべていると……ちよつと待てよ!と叫んで来る他のクルー達にミリイもミデアの正面に映る光景に冗談っ!と叫びながら驚愕する大尉と共に取り合えずしやがみこんだ……

「外はどうなってるんですか!」

「とにかく落ち着いてえ……今から私が仲間に連絡を取つて見ますう……」

ミデアのコクピットへとフィンガーランチャーの銃口を向けているグフに緊張しながらミリイは通信席の下から恐る恐るカスケード隊のチャンネルへと回線を合わせた。

「ミリイからカスケード隊へ……誰か聞こえてますかあ?」

『……こちらウイスキードッグ！感度良好ですよミリイ♪』

ミノフスキ粒子の濃度も有り若干ノイズ混じりだが……ミリイは聞こえて来たアメリカの声にホツとしたのか先輩?!と泣きそうな声を上げた……

「もう会えないかと思いましたあゝ!!?」

『何を言ってるんですか……良く頑張りましたねミリイ?』

そう褒めて来るアメリカにエへへと笑みを浮かべたミリイは所でえ先輩?とすぐに困った顔を浮かべたので有った。

「敵機が私達の方に銃口を向けてるのか説明して欲しんですけどお……?」

『その件に関してはコッチで対処中です。ミリイはソッチで出来る事をお願いしますね!』

「了解ですう……」

いつもの確に指示を飛ばして来るアメリカに矛盾を感じたミリイは何か考えが有る

と感じたのか機長お！とミデアのデツキクルー全員に向かって指示を飛ばし始めたので有った。

くくく

「分かった・・・お前が離脱するまで絶対に攻撃を加えないと約束する。」

そう言いながらマシンガンを捨てるイエーガーのジムにホントにチョロいな連邦は!!と煽り出すグフに180ミリキャノンを確実に当てる位置居たCSD2から苛つく様に射撃許可を！と通信が入って来た。

「保護対象で有るミデアがまだ近いんです・・・もう少し待ちなさい!」

「おいおい・・・いくら温厚なイエーガーさんでもそろそろキレルぜ?」

そんな心配をするチャーリーの予想通りキレたイエーガーのジムがグフへと跳び掛かると、今ですミリー！とヘッドセットを掴んだアメリカは逆噴射しながらグフが放つフィンガーバルカンを避ける様にミデアが逆噴射するとグフから撃たれた全弾が全て

外れたので有った。

離れる距離その19

「何だどっ!？」

ミデアを仕留め損なったグフのパイロットから驚愕する顔が浮かぶと、アメリカは残念でしたかね?とまるでグフのパイロットの顔が見えている様に悪戯っぽくニヤニヤと笑みを浮かべた。

「大方ミデアを撃破しそのどさくさに紛れて離脱しようと考えていたようですが・・・そうはいきませんよ!」

「チツ・・・だがもう一度あの輸送機ごと人質に取れば!!?」

切羽つまったグフのパイロットがフットペダルを踏み込みバーニアを吹かそうとした瞬間・・・させるかよ!!とミリイが乗ったミデアを守ろうとジャック率いる第二小隊の陸ジムの三機は立ち塞がった・・・

「CSD4ジャックから各機!!絶対にミデアをやらせるな!!!」

「CDD5ユウヤ了解です。」

「こちらCSD6レオン・・・愛しの姫君を守る為に尽力いたそうじゃ有りませんか隊長?」

そんな擲擧つて来るレオンの陸ジムが先陣を切り100ミリマシンガンを撃ち始めると、うるせえぞレオン!!と怒鳴り返したジャックは陸ジムの脚部に有るサーベルラックを展開すると流星に分が悪いと背後へとジャンプするグフヘビームサーベルを引き抜いた。

「貰ったあああ!!!」

そう叫んだジャックの陸ジムがバーニアを吹かし下から追撃を掛けるとあまり舐めるなよ連邦っ!!と声を上げたグフのパイロットから左腕に装備される5連装75ミリフィンガーバルカンを撃とうとした瞬間・・・CSSD2ナウっ!!と指示を飛ばすアメリカの声と同時にシヨウウが撃った180ミリキャノンによりその腕が突然爆散したので有る・・・

「なっ・・・!?!」

そんな驚く声を上げるグフに向かってジャックの陸ジムがビームサーベルを振り降ろすと、ふざけんな!!とここはベテランパイロットの意地をみせたグフのパイロットがその斬撃をヒートサーベルで受け止めるとジャック機のビームサーベルを斬り上げた。

「これでも食らいやがれっ——！」

「しまっ……」

そのままグフの放ったヒートロッドが自機のから空きとなった胴体に直撃すると、ジャックの居るコクピット内部が流れて来た高電流によつてバチつとスパークすると同時にシステムが全てダウンしたのだ……

「機体が動かねえ?!?!」

「さっきの威勢の良さはどうしたあ……オラア!!」

まるでサンドバックの様に動けなくなったジャックの陸ジムをグフが容赦なく蹴り飛ばすと、ジャックク——っ!!とミデアのコクピットからその様子を見ていたミリイから悲痛な声が上がると慌ててヘッドセットを挿んだ。

「ミリイからCSD5、CSD6へ!!ジャック……CSD4の確保を急いで下さいっ!?!」

そう叫ぶミリィから指示に了解！と答えたレオンとユウヤの陸ジムが動けなくなつたジャック機の救援に向かおうとしたのだったが・・・おいおい動くんじゃねえぞ？とそのコクピットへヒートサーベルを突きつけているグフからオーブンチャンネルで通信が入って来たので有る。

くくく

「とことん卑劣な手が好きみたいですネ・・・ジャックの方はどうですソフィー？」

アメリカ達が指揮車として使っているウイスキードッグにも聞こえて来たゲスな脅迫にチツと舌打ちしたアメリカはカスケード隊のメカニック兼ドライバーも務めているソフィー＝ホワイト伍長に先程のグフの攻撃によりダウンしたジャック機の状態を訊ねた。

「うんっ．．．機体の方は絶望的ですなっ」

グフのヒートロッドによって完全に電装系がやられた事でソフィーから復帰が無理と判断が下されると、それでパイロットは．．．？と恐る恐る聞くアメリカに大丈夫ですっ♪とソフィーはエへへと微笑んだ。

「ジャック中尉の生体反応は確認したので生きてますよっ？」

「それは良かったです．．．しかしどうやってジャックを救出したら良いのやら．．．」

ジャックの安否を確認したのは良いが．．．まだ窮地に立たされているアメリカは頭を抱えながら自分の配下で有る第一小隊の面々に通信を繋いだ。

「ウイスキードッグから各機へ現在の状況を伝えて下さい。」

『こちらCS D1イーガーだ。奴の近くには居るがジャックの位置が近すぎて手出し

が出来ない……』

『CSD3も同じくだ……奴の裏に回り込んでいるがちよつと厳しいぜ?』

そんな二機からの厳しそうな返答にそうですよね……とアメリカがこの困難な状況に困っていると、ピーつと鳴る通信アラームにミリイから?と驚いたアメリカは回線を繋ぐと彼女からの大胆な作戦案にど肝をぬかれた。

「そのミデアを囿につて……本気ですかミリイ!？」

『ハイっ!方法はコッチでどうにかしますから……お願いしますまず先輩っ!!』

ジャックを助きたい気持ちで一杯なのか必死な後輩に、ですが……とアメリカが渋つてると……すみません。とミデアの機長が通信に割り込んで来たので有る。

「彼女のお陰で救われた命です。その私達を救いに来た皆さん……カスケード隊を助け

る恩返しをしたいのですがダメですか？」

「ダメではありませんが……」

これではまるで本末転倒とも言えるミデアの機長からの申し出に折れたアメリカはハア……と呆れた様に溜息をついた……

「私も良く無茶な作戦立てると言われますが……ミリイも大概みたいですな。」

「それは先輩の影響だと思えますよお？」

そう答えながら首を傾げるミリイに痛い所を突かれました!?!とアメリカがクスツと笑みを浮かべながら通信を切ると、聞こえてましたねCS D 2?と聞こえて来た指揮官からの声にショウウはホントにツイて無い……と呟きながらその時に備え180ミリキヤノンを再度構えた……

離れる距離・・・その20

「すみませんでした！私の我がままに付き合わせてしまつてえ・・・」

ガバつと勢い良く頭を下げるミリイにこのミデアの機長で有る大尉から僕も一緒だからね？とニコつと笑みが浮かぶとミリイは不思議そうにえつ・・・と首を傾げた。

「あのジムのパイロットは君の大切な人なんだろう？」

「はい・・・そうですけどお・・・」

「だったら同じだよ。僕にも大切な家族が居るからね・・・」

そう答えながらミデアの再チェックを行う大尉にありがとうございます！と今度はお礼のつもりで頭を下げるミリイに何度も良いから・・・と苦笑いを浮かべた機長はコクピット上部に有るモニターを見ると唸り出した・・・

「何か問題でもお・・・」

「うゝん・・・さっきの逆噴射で機体に大分無理をさせてしまったからね。もうコイツも終わりかな・・・」

ミリイが切なそうに答える機長に不安にモニターに表示されたミデアのダメージ蓄

積値を見ると、その全てがほぼレッドコンディション・・・要は廃棄処分が決定した様な物で有る。

「重ね重ね・・・本当に申し訳有りませんですう・・・」

「いやいやっ!? 撃墜されたのは僕の責任だからね・・・それにコイツにはもうひと踏ん張りして貰わないとな・・・タニグチ伍長?」

「機長お・・・」

そんな前向きな機長に心を打たれたミリイと同じ気持ちなのか搭乗員達からもコクつと頷くとミリイはクスッと笑みを浮かべた。

「それではあ・・・このミデアが浮ばれる様にあのグフへの仕返しと行きましようかあ?」

「ああ、そうだな・・・最後の仕事だ。頼むぞ相棒・・・」

そう答えながらコクピットのコンソールを愛らしく触る機長を横目にミリイが通信席に座ると、エンジン始動!と声を上げる機長に1番から4番点火!!と副機長が答える
とミデアからキューーン・・・と最後のエンジン点火となる唸り音が聞こえて来た・・・

「コツチの準備は良いぞタニグチ伍長!」

まるで離陸する時の様にフットペダルを踏み込みながらスロットルを全開へとする

機長に了解ですう！と答えたミリイは頼みますよ先輩・・・とヘッドセットを掴みながらこちらと同様に対応に追われているアメリカのゴーサインを待つので有った。

~~~~~

「チツ・・・この量産ジムの倍率ってこれ以上は上がらないのかソフィー?」

「あくまでも量産型ですからねっ。」

普段使っている陸戦型ジムと違い汎用性と量産性に重きを置いたRGM-79ジムに対しショウウから苦情が上がるとソフィーは苦笑いを浮かべた。

「と言うかつ・・・ショウウさんの腕ならノーマルタイプのジムでも大丈夫なんじゃ?」

「おいソフィー・・・こんな任務に慣れてない機体で臨む僕の気持ちを分かってくんない!?!」

そんな心臓バクバク状態のショウウに成程っ!とソフィーが手をポンと叩いていると、準備はできてますねCSD2?と割り込んで来るカスケード隊の指揮官で有るアメリカにショウウはまあ大体ね・・・と苦笑いを浮かべた。

「なら良いです。ジャックが人質に取られている以上・・・この作戦はタイミングが非常

にシビアとなりますので、全員の生還はシヨウの腕次第となるので気を引き締めて下さいね?」

「異議有り!もつと他に良い作戦は……」

「有りませんよ。」

そう間髪入れずに淡々とアメリカから答えられたシヨウは本当にツイて無い……と頭を抱えた。

「シヨウには悪いですが……ジャックの救出を考えるとミリイからの提案を含めこれが最適とイエーガーとも話し合った結果です。」

「分かった……絶対に当ててやる。」

覚悟を決めたシヨウが精密射撃用のゴーグルを覗き込むと、助かります。と答えるアメリカにシヨウから注文が入った。

「ジャック中尉の事を頼むぞ・・・アメリカ?」

「当たり前じゃ無いですか・・・その後の事は任せて下さい。」

後輩で有るミリイの事も有るのか・・・確実なフォローを約束するアメリカに分かった・・・と答えたシヨウが敢えてロックオンをせずにマニュアルで標的で有るグフに狙いを点けた。

「お前を信じるからなアメリカ・・・」

それはお互い様ですよ?と答えたアメリカは今ですミリイ!とヘッドセットを掴んだので有った。

くくく

「クツソ・・・動けよ!!」

グフが放ったヒートロッドにより電装系が完全にオシヤカとなったジャックが陸ジムのコクピットで足掻いてる中・・・グフのパイロットはこれからの算段を考えていた。

「オーストラリア戦線も終わりだな．．．コイツを人質にどうにか離脱しないと．．．」  
そう思案顔を浮べるグフのパイロットはピーっ！と鳴るコクピットに突然聞こえて来る敵機の警告音に慌てて迎撃態勢を取ったのだが．．．

「イツケええ!!!」

そう叫ぶミリイの指揮の下突っ込んで来たミデアによつて弾けとんだので有る．．．  
「ふざけんなっ!?!」

まさかの事態にグフのパイロットも慌ててフットペダルを踏み込み地面への落下を避けたので有ったが、．．．ずっとその様子を見ていたシヨウのジムがトリガーを引くと．．．そのグフはシヨウの放った180ミリキャノンによつて下半身を撃ち抜かれたので有った。

## 離れる距離・・・その21

「ビンゴ・・・どうだ見たかアメリカ！」

無事に狙撃を終えたシヨウウからまるでガッツポーズを取りながらそんな声が上がると、ナイスショットでした。と答えたアメリカはハア・・・と安堵するとヘッドセット掴みながらミリイ達のミデアに通信を繋いだ。

「こちらウイスキードッグ・・・生きてますかミリイ？」

グフを弾き飛ばしたまでは良かったが・・・減速しきれずに岩壁へと突っ込んだミデアから何とかあ・・・とミリイから返事が返って来た。

「まったく・・・流星の私でもこんな無茶はしませんよミリイ！」

「そんな事よりもジャックはあ・・・？」

そう窘めるアメリカにアハハ・・・とミリイが笑ながら誤魔化そうとすると、ちゃんと生きてますよ？と答えたアメリカはホバートトラックの銃座に上がるとジャックの陸ジムをゆつくりと寝かせようとするイエーガーとチャーリーのジムの姿を見ながらくすつと微笑んだ。

くくく

「まったくどうなってるんだ・・・」

グフのヒートロッドを食らった所為で陸ジムのOSが完全にダウンしてしまったジャックが外との通信も出来ずに困っていると・・・聞こえますかジャック中尉??と聞きなれた舌足らずな声にジャックはソフィーか!?!と叫んだ。

「ハイっ!今から上部ハッチをパージするので頭を下げていてくださいねっ?」

「分かった。頼む・・・」

ソフィーの言う通り頭を下げたジャックが合図を送ると陸ジムのコクピット脇に有るコンソールを操作したソフィーによって上部ハッチが弾け飛んだので有る。

「やっと出られたぜ・・・」

「ジャックローっ!!」

長い間何も出来ずにコクピットの中から地面に降りた瞬間ミリイから抱き付かれたジャックは受け身も取れずにそのまま背中から地面に転がった・・・



「良かったあ・・・どこも怪我してない!？」

「あつああ・・・心配かけたみたいだな。」

ポロポロと涙を流すミリイの頭をジャックが落ち着かせる様に撫でていると・・・ミリイに感謝しなさいね?とクスクスとアメリカが笑みを浮かべてきた。

「その子はジャックを助けようと自ら危険を冒してまで助けたんですよ?」

「みたいだな・・・」

その時の状況は分からないが・・・完全にスクラップとなったミデアの状態にジャックは苦笑いを浮かべながら可愛い恋人を覗き込んだ。

「俺が生きてるのはお前のおかげだミリイ・・・何かお礼をしないとな?」

「じゃあ・・・私にも先輩達みたいに指輪をプレゼントするって言うのはどうですかあ・・・」

急にとんでもない事を言いだすミリイにハア!?とジャックが驚き出すと・・・逆プロポーズだな。とボソッと呟くイエーガーにこの場に居る全員からおおっ!と歓声が沸

くと祝福の拍手も同時に上がった……

「ちよつと待てっ!?俺の意見は無いのか!!」

「ちよつとジャック……私の可愛い後輩からプロポーズを断る気ですか……?」

「そんな事は無いが……」

「じゃあ決まりです。」

そう有無を言わせないアメリカにパワハラじゃねえか!?とジャックが抗議の声を上げると嫌なお……?と腕を組んで来るミリイに腹をくくったジャックはわーつたよ!!と叫ぶと……後にシヨウとチャーリーが頼んだ中立地帯の町に有る二ノの経営するフェアリーで指輪を買う事となるので有る……

「それでは予定外ですが……ミリイとジャックの事も含め万事解決って事で基地に戻りますよ!」

そんなアメリカの声におおっ!と答えたカスケード隊は送別会の準備をしているリンの事も有って足早に帰投の準備を始めた。

〃〃〃

「ねえ・・・皆無事かなケイちゃん・・・?」

既に出来上がった料理を見ながらカウンターで頬杖をつくりんに大丈夫ですと答えたケイは何も確認がないままコクつと頷いた・・・

「ケイの言う通りよ・・・この時間まで何も連絡が無いって事は無事だつて!」

「二人がそう言うなら・・・そうなんだろうね。」

そうフオローするマリアにリンがホツとすると・・・実際どうなんです?とケイはこそつと耳打ちした。

「ゴメン・・・ミノフスキー粒子の濃度が高くてアメリカ達の第一小隊とも連絡が取れて無いのよ・・・」

「チツ・・・勝手に死んだりしたら怒るわよアメリカ!」

そう興奮するケイをマリアが宥めていると・・・カランコロンと鳴るカウベルに三人は慌ててCASCADÉの入り口を見た・・・

「何だ・・・タンクか」

「期待して損したわ．．．」

そんな声を上げるケイとマリアに驚くなよ！と下がったタンクから見事墜落したミデアの乗員を救ったカスケード隊の面々が撃墜されたミデアの乗組員と共に現れたので有る。

「本当に良いのかい!?!」

「どうせ暫くは動けないんだから一緒に祝って下さいよお?」

そう驚くミデアの機長と乗組員にミリィが首を傾げると．．．シヨウとリン、チャーリーとアメリカの婚約を含めたカスケード隊の送別会が始まったので有った．．．

くくく

## 離れる距離その2 2

「良っし．．．メンツも揃った所で始めるぞカンパーイ!!」

今回は基地の防衛任務も有りミデア救出作戦に参加出来なかったタンクの音頭で皆がジョッキを掲げると同じく乾杯!!と歓声が上がると早速マリヤは今回の作戦で一番ピンチで有ったと言うジャックとミリイをジロつと睨みだした。

「もう．．．今回ばかりはホントにヒヤつとしたわよ二人共!」

ビールジョッキを置きながら叱つて来るマリヤにアハハ．．．とジャックとミリイが苦笑いを浮かべると私もですよ!とアメリカもムウつと唇を尖らせた。

「ミリイは私の後を継いでこの部隊のオペレーターとなるんですからあんな無茶を今後はしたらダメですよ

「アメリカ．．．アンタのどの口が言ってるのよ!?!」

そうツツコんで来るケイにそうそう．．．とマリヤも呆れた顔を見せると、どう意味ですか!?!と驚くアメリカにそっかあ．．．とミリイは寂しそうな顔を浮かべる．．．

「本当に居なくなっちゃうんですねえ．．．」

「そんな顔をしないで下さいってミリイ．．．ちゃんと手紙を書きますから？」

明日にはインド方面軍の主要基地で有るマドラスへと飛び立つアメリカに約束ですからねえ．．．とミリイから泣きそうな顔で左腕をギュツと抱きつかれたアメリカは約束しますって．．．と答えながらその頭を撫でたので有った。

〃〃〃

「ビールのお代わり2つ!!」

「もう注いでるから持つて行つて頂戴！」

自分達カスケード隊第一小隊の送別会だとだと言うのにも通リリンと共にCASCAD Eの台所に立ったシヨウはいつも以上に心地よさを感じていた．．．

(またこうしてリンと一緒にここに立てるのかな．．．)

明日からしばらく会えなくなる愛おしい恋人の顔をシヨウが不安そうに見ていると．．．ちよつとシヨウ!と腰に手を当てたリンがムスつとした顔を向けて来た。

「新しい料理が出来たから早く運んでよね！」

「ゴメン．．．ちよつと考え事しててさ!?!」

そう言いながら謝るシヨウにまったくもう!とリンが腕を組むのを見たマリアは

ビールジョッキを片手にねえ二人共・・・？と少し酔ったのかニヤニヤしながら首を傾げた。

「噂で聞いたんだけど・・・今日の送別会ってちよつとしたサプライズが有るんだよね？」  
「いや・・・私は初耳だけど・・・シヨウは何か聞いてる？」

突然振られたマリアからキラーパスを返す様にリンから尋ねられたシヨウはえつと・・・と困った様に頭を掻きだした。

「おいマリア・・・」

「良いじゃない・・・早く渡しちやいなさいって？」

そう答えながらマリアが楽しそうにクスクスと笑い出すと、ハア・・・と腹をくくつたシヨウは集中する視線を感じながらリンの手を引いて店の中央で膝まづいた・・・  
「えつとシヨウ・・・？」

「もう分かっていると思うけど・・・僕と結婚して欲しい。」

そんな真剣な眼差しを向けて来るシヨウにウン・・・と顔を赤く染めたリンからコクつと頷くと同時に司

会進行役のタンクがまるで自分がプロポーズを承諾された様によっしやーー!!と叫ぶとケイは少し不満そうにねえ!とジトつと睨んだ。

「何だよケイ・・・そんな顔をして!？」

「別に・・・」

何故か急に機嫌を損ねるケイにタンクが不思議そう首を傾げていると・・・ねえリン?と膝まづいていたシヨウは今回の作戦前に二ノから受け取っていた指輪が入ったケースを開けてた・・・

「これって・・・この前の?？」

「うん・・・今日の為に頼んで置いたんだ。」

中立地帯に有るフェアリーと名乗る二ノと呼ばれる勝気な女性店主によつてシヨウがカッティングされた自分の誕生石で有るサファイヤの指輪を嵌められると・・・綺麗



ね。と呟いたリンは満足したのかすぐ外したので有った。

「じゃあ返すね？」

「え・・・リン!？」

そう言いながら固まるシヨウにちよつとリンっ!とマリアから驚く様に声が上ると、ちよつと待つて!とリンは周囲を見渡しながら頭を下げた・・・

「ゴメンなさい・・・皆が私とシヨウの幸せを願っているのは分かつてるけど、この指輪はまだ受け取りたく無いの！」

そんな声を上げるリンに頭を抱えたマリアは理由を聞いても良いかしら・・・?と首を傾げると理由は簡単よ?とリンからクスつと笑みが浮かんだ。

「もし私がこの指輪を受け取ったとして・・・シヨウがピンチになった時どうする?」

「それは・・・非常に答えにくいな。」

リンの意地悪な質問にシヨウが困った様に頭を掻き出すと・・・そういう事よ。と答えたリンは恋人で有るシヨウを指差した。

「一緒になるのは良いけど・・・その指輪を渡したければもう一度私の前で膝をつく事ね

「？」

「ハイハイ・・・分かりましたよ。」

要は・・・最初に交わした約束の通り生きて帰って来いと言って来るリンの言葉にシヨウも頷くと・・・そろそろ良い時間ね・・・と二人の様子にマリアが声を上げるとC A S C A D Eでの送別会は一旦お開きとなったので有った・・・

## 離れる距離その23

「何だかモヤモヤします・・・」

リンの店での送別会も終わり自室へと戻ったアメリカはシャワーで濡れた髪を拭きながら自分のベッドに座ると・・・隣で缶ビールを飲んでるチャャーリーも確かにな・・・と答えながら目の前のローテーブルに置いた・・・

「でもよ。リンの言う事も一理有るぜ・・・俺が同じ立場だったらお前には絶対に生きて帰って来いって言うと思うぜ。」

「受け取った指輪を返しながらですか？」

「そう言われると辛いなシヨウの奴・・・」

「だからモヤモヤすると言ったんです・・・」

どっちの立場でも切ないですね・・・と思ったアメリカは置かれたチャャーリーの缶ビールを飲もうとしたら・・・顔を赤くしたチャャーリーからその手を掴まれたので有る。

「お前は受け取ってくれるか・・・コレ？」

今日の作戦前にシヨウと共に二ノから受け取った婚約指輪が入ったケース見せた

チャーリーは真剣な顔をしながら嘩然としながらベッドに腰かけているアメリカの足下に膝まづいた・・・

「流石にシヨウウみたいに皆の前で言うのは恥ずくてな・・・」

そう答えながらガシガシと頭を掻き出すチャーリーにまだちよつと困惑気味のアメリカは開けてみても良いですか!?!と少し慌てながらそのケースを開くと目を見開いた・・・

「これって・・・私の誕生石じゃないですか!?!」

「ああ・・・ニノに無理を言つて仕入れて貰つたんだから要らないとか言うなよ・・・?!」  
そう言いながらも若干不安そうな顔をするチャーリーにムウ・・・と唇を尖らせたアメリカはすぐに自分の左手を突き出した。

「付けて下さい!」

「おつおう・・・」

何故かジツと睨んで来るアメリカの薬指に若干ビビりながらチャーリーが彼女の誕生石で有る薄い緑色をした翡翠を乗せた指輪を嵌めるとアメリカからエへ・・・と嬉しそうに満面の笑みが浮かべた・・・

「大好きですよチャーリー・・・」

そう呟くと同時に抱き着いたアメリカが押し倒すとおわつ!?!とチャーリーから驚く

声が上がった。

「んっ……」

そのまま口づけするアメリカにこのままじゃ男が廃ると本能を發揮したチャーリーが軽い彼女の身体をひっくり返す様に下にするとニヤッと笑みを浮かべた。

「煽ったからには覚悟しろよ?」

「えつと……出来たら手加減を……」

そう言いながら不味そうな顔をするアメリカはククつと意地悪く笑ったチャーリーによって一晩中愛され続けたので有った。

くくく

「ねえ……まだ怒ってるの?」

そして時は同じにしてCASCAD Eの二階に有るリンの私室で不貞腐れているシヨウにリンは困った顔を浮べていた……

「さつきも言ったけど……私はシヨウと一緒にするのは全然良いんだよ?」

「じゃあ・・・何でこの指輪を受け取ってくれないのさ!」

自分の説明に納得して無いシヨウがわざわざ自分の為にと誕生石で有るルビーを綺麗にカッティングした指輪を見たリンは今はダメ・・・と罪悪感を感じながらもシヨウを見た。

「その代わり・・・シヨウの認識票をくれない?」

「僕のドッグタグを・・・別に良いけど。」

これは兵士が戦死した時の確認代わりなのだが・・・シヨウ達みたいな戦闘機乗りやMSのパイロットとなると回収は難しい事も有る事から何も考えず渡して来るシヨウとは裏腹にドッグタグは大切なものだと思っっているリンは大切にするわね。と大事にそう受け取ったので有る。

「それじゃあ・・・私の首に付けてくれない?」

「えっ・・・僕のドッグタグをか・・・?」

「うん。これをシヨウだと思っただけにするね・・・」

そう言いながらフツツと微笑んで来るリンに向かつてシヨウがはいはい・・・と答えながら自分のドッグタグを着けると結構重たいんだね!?!とリンから驚く声が上がった。

「じゃあ今度はシヨウ・・・指輪を貸して?」

「えっ……一体何を……」

困惑するシヨウから受け取り拒否した指輪をケースごと受け取ったリンはその指輪にチエーンを通すと屈んで?とシヨウに向かつて首を傾げた。

「これで良い……?」

「うん……これでお揃いだね♪」

何故か満足げなリンにちよつと待つて!とシヨウからツツコまれたリンはどうしたの?と首を傾げた。

「このやり取りって一体……」

「私の自己満足ね。お互いに自分の大切なものを持っていると緊張感が湧くでしょう?」

そう答えながら真剣な顔をしたリンはジロつとシヨウを睨んだ……

「絶対に死なずに私の下に戻って来なさい。これは命令ですからねシヨウ!カノウ少尉……?」

「イエス・マム。絶対に生きて戻る事を約束します……」

そう言い合いながらお互いプつと吹き出し笑い合うとそのままベッドに倒れ込むと

リンは優しい気な顔をするシヨウに髪を撫でられた。

「私はこれをシヨウと違って大事にするからシヨウはその指輪を私だと思って大事にしてね……」

「ああ……肌身離さずにと着けて置くから今度渡す時は覚悟しろよリン……？」

自分の耳元で甘く囁くシヨウにドキつとしたリンはウン……と答えるとそのまま目を閉じたので有った。

くくく



## 離れる距離その24

「あれ．．．もう朝!?!」

ピピピつと鳴り出す目覚まし時計のアラーム音に目を覚ましたリンはまだ眠い目を擦りながら隣を見るとハツとして慌てて起きると。

「シヨウっ!」

「ど、どうしたリン!?!」

台所からシヨウがフライパンを片手に出て来ると良かったつ．．．とリンはホッと胸を撫で下ろした．．．

「いや隣に居ないから．．．黙って基地に向かったかと思つてちよつと慌てちやつた。」  
「先に目が覚めたから朝飯を作つてたんだよ!」

変な誤解をされた事でシヨウからムスつとする顔が浮かぶとゴメンつて。とその頬にキスしたリンは床に落ちていたシャツを取り合えず羽織ると私も手伝うからね?と言いながらシャワーを浴びに浴室へと向かおうと思つたのだつたのだが．．．

「動けない．．．」

昨晚の行為が祟つたのかリンがそのまま床にうずくまると苦笑いを浮かべたシヨウ

から何かゴメン・・・と謝られたので有った。

「ねえ私が送るって!」

「良いから・・・それにまだ辛いんだろ?」

結局の所ショウに朝ご飯の仕度から何もかも任せてしまったリンはまあ・・・そうだけれどと答えながらお大人しく助手席へと乗り込んだ。

「まあ帰る頃にはまだマシになってるんじゃない?」

「誰の所為だと思ってるのよ・・・」

そう答えながらリンがジトつと睨んで来るとショウからそれじゃあ出すよ!と誤魔化しながらトラックを発進させた・・・

「何かこうしていると初めて二人で出かけた時の事を思い出すね・・・」

「初めてって・・・リンの買い出しに付き合った時の事?」

海岸線を流しながら答えるショウに向かってうん・・・と小さく答えたリンはコロニーの落下によってシドニー湾と名付けられた海を助手席から眺めた。

「また二人でこの風景を見れるのかな・・・」

「生きて帰って来いって言ったのリンだった筈だけど」

「だけど・・・」

そう言い掛けたと同時に急にキイ!と停まるトラックにどうしたの!?!とリンが横を振り向いた瞬間には口を塞がれていた……

「んっ……」

「その先は聞きたくない。絶対に戻って来るからその時は約束だからねリン……」

顔を離しながら自分に贈る筈の指輪をネックレスにしたシヨウから真剣な顔を見せられたリンは分かった……と頬を染めながらコクつと頷いた。そしてこの止まった場所には偶然なのか以前シヨウに自分の身の上話をした所でこのシドニー湾に眠る両親にも見られてたかな……とリンは内心気恥ずしくなったので有った。

くくく

「もう着いちちゃった……じゃあ気をつけてね。」

「ああ……届くのは遅くなると思うけど絶対に手紙書くから!」

うん待ってる……と到着した基地のゲート前で助手席から降りたリンがシヨウと運転を代わり帰ろうとしていると、少尉!といつも警備兵が手を振って来たのだ。

「基地指令から許可を貰ってるのでリンさんと一緒にどうぞ!」

そう説明しながらゲートを開け始める軍曹にええっ!?!と驚いたシヨウはリンと顔を

見合わせるとその指示に従い基地内へとリンのトラックを進めたので有る。

「民間人なのに本当に良いのかしら・・・」

「まあ良いんじゃない。バリサム大佐の許可らしいしさ？」

どこか不安そうなりンに向かって二つと笑ったシヨウは良い所有るじゃないか・・・と改めてバリサムの懐の深さを再認識すると内心感謝しながら仲間達が待つハンガーへとトラックを飛ばした・・・

「やけに遅いですね・・・」

そう呟きながら腕時計を見るアメリカに頭の後ろで頭を組んだチャーリーからククッと揶揄う様に笑い声が浮んだ。

「誰かさんみたいに激しかったんじゃね？」

「それ以上喋ると殺しますよ・・・」

そう答えながらジロつと睨んだアメリカが腰のホルスターに手を掛けるとそれを見たチャーリーから分かった！分かったから落ち着けて!?!と焦る声が上がった。

「何が激しかったんですかねっ？」

「・・・俺に聞くな。」

そんな二人を遠目に見ていた首を傾げるソフィーにイエーガーが目を逸らしているとキユキユつとタイヤを鳴らしながらシヨウの運転するリンのトラックがハンガーの中へと滑り込んで来たので有る。

「ゴメン遅れちゃって・・・」

「えつと・・・私からもゴメンなさい。」

何故かシヨウと一緒にリンも降りて来るとアレ?とアメリカ達は不思議そうに顔を見渡した。

「良くリンさんと一緒に基地の中まで入って来れましたね。」

「多分だけど僕達の見送りにバリサム大佐が融通を利かしてくれたんだと思う。」

そう話すシヨウ達の後ろからそれはちよつと違うわよ?と元情報部で基地指令付きの補佐官をしているケイキタムラ少尉の声がハンガーの入り口から響いた・・・

「私がバリサム大佐に無理言って入れて上げたんだから感謝しなさい!」

ツカツカと歩きながら指を指して来るケイにあ、ありがとう!?!と戸惑った顔するシヨウからお礼を受け取ると次にケイはキョトンとしているリンを見た。

「彼女の事・・・アンタの居ない間は私が守って上げるから安心して行って来なさい。」

「それってどういう・・・」

そう言い掛けるリンに分かった・・・とその役目を知っているシヨウがケイにコクつ

と頷いていると時間が来たのかそろそろ行きますよ！とアメリカの音がハンガー内に響き渡った・・・

「本当にこれで暫く会えないんだね・・・」

「うん・・・」

滑走路へと向かうトラックの荷台でシヨウとリンが名残惜しそうに身を寄せ合っている。とチャリーリーの運転するリンのトラックは暖気中のミデアの横へと静かに停まった。

「悪いなチャリーリー・・・」

「良いって事よ。それよりも・・・挨拶はもう良いのか？」

そう言いながらニヤつと笑ってくる相棒にシヨウは泣きそうな顔をするリンをギョツと抱きしめた・・・

「またね・・・シヨウ」

「ああまたね・・・リン」

最後にシヨウが別れのキスを額にするとリンは支える様に肩を抱くチャリーリーと共にミデアの中へと入って行くシヨウをケイと共に見送ったので有った。

## 離れる距離・・・その25話

「いよいよ出発だな・・・」

「・・・寂しくなりますね。」

一生懸命手を振って見送るリンとケイの姿に少し泣きそうになったアメリカは泣きそうになるのを我慢すると一緒にミデアに搭乗したチャリーに先に行つて下さいとミデアの操縦席の方を見た。

「ちよつとウォルフ大尉達に挨拶をします。」

「じゃあ俺は落ち込んでるシヨウを励まして来るかな・・・」

ククつと冗談交じりにチャリーから手をヒラヒラと振られたアメリカはお願いします。と返事を返しながらコクピットの中に入ると、何じやどうした？と機長で有るウォルフ大尉から驚かれたので有る。

「いえ・・・自分達の為に遠いジャブロー本社までの輸送任務を与えられた皆さんに少し挨拶をしておこうかと思ひまして・・・」

「そんなのはいらんって!?!ワシら輸送隊は積み込まれた荷物を確実に目的地までに運ぶ簿が仕事じゃ・・・だから嬢ちゃん達は荷物らしくゆつくり待つとれば良いんじやよ。」

そう説明するウォルフにクルー達もそうそうと同意する様に頷かれたアメリカがしかし・・・と納得がいかない様にムウと腕を組むとでしたらこれならどうです・・・？と副機長から何か思いついたのかニヤリとした顔でアメリカを見たので有った。

~~~~~

「そろそろ時間ね・・・」

管制タワーで時計を見た MARIA はミデア 031 便の離陸時間を確認すると少し緊張しながらヘッドセットのチャンネルを合わせた・・・

「こちらトリントンコントロールからミデア 031 便へ離陸準備はどうか・・・？」
『ワシの酒が残つとる以外は全てオールグリーンじゃよ MARIA!』

いつもの冗談なのか・・・いや実際冗談なのか聞くのが怖い MARIA はそれでは第一滑走路に向かって下さい。とスルーしながらミデア 031 便のタキシングを許可した。

『031 便了解したぞい。』

そう答えたウォルフがゆっくりとスロットルを開けながらミデアを滑走路まで侵入させると一旦止まり離陸前の最終チェックを副操縦士と一緒に確認する様にリスト読み始めた・・・

『主翼及び尾翼の動作異常無し』

『エンジン出力も安定・・・いつでも飛べるぞい!』

「こちら031便からのIFF受信を確認・・・離陸を許可します。」

全ての離陸シークエンスを終えたミデア031便がマリアの声と同時にエンジン出力を上げ始めると、こちら031便です。と不意に聞こえて来たアメリカの声にギョツとしたマリアはアメリカっ!?!と思わず立ち上がってしまった。

「どうやってこの回線に割り込んで来たのよ!?!」

『いや・・・何か急にウオルフ大尉達から通信士をやってくれて言われてしまって・・・』
困惑するアメリカにまったくもう・・・とウオルフ達のおせっかいにマリアが溜息交じりに答えるとマリア曹長?とアメリカからも不思議そうな声が聞こえて来た。

「何でもないわよ。それよりも何か聞きたい事があるんじゃない?」

『おっとそうでした。中継地点で有るマドラス基地までの天候データを頂けませんか?』

そう淡々と話すアメリカに今送るわね?と平静装ったマリアだったが内心では今から前線へ向かおうとする可愛い後輩に泣きそうなのを我慢していた・・・

(こっぴどくやってアメリカと交信するのも最後かもしれないのね・・・)

僅か数か月程の付き合いだったが・・・マリアは奇抜な発想に行動力と上官泣かせのアメリカに向かって一言呟いたので有った。

「絶対に私達の下に帰って来なさい。これは命令だからねアメリカ!」

『命令って・・・今じゃ私の方が上官なんですが・・・!?』

相変わらず強引なマリアに苦笑いを浮かべたアメリカが頷きながらやれやれ・・・と呟き出すと同時にメインエンジンが臨界を迎えたのかミデア031便は滑走路を徐々に加速し始めた。

(((

「V1、VR・・・V2!」

「良し行くぞい!!」

計器を読む副操縦士の声と同時にウォルフが操縦桿を引くとカスケード隊のMSを積んだミデア031便が離陸に成功すると続いてヒルダ率いるブラックウイドウ隊のミデアも飛び立った・・・

『トリントンコントロールから031便及びブラックウイドウ隊へさつきも送ったけど今の所は天候も安定してるから到着時間は約15時間後って所ね・・・長旅になるけど

気をつけてなさいね!』

「ありがとうございますマリア曹長・・・落ち着いたら手紙を書きますね?」

自分の事が心配なのか離陸してからもそんな声を掛けてくるマリアにアハハ・・・とアメリアが苦笑いを浮かべているとピーつとレーダーから警告音が鳴り響いたので有る。

「基地を出たばかりじゃぞ?」

「落ち着いて下さいウオルフ大尉・・・!」

敵味方信号

焦るウオルフに近づいていた機体のIFFを確認したアメリアはトリントン基地所属機のフライアローとトリアーエズを確認しホッとすると更に自分のヘッドセットに聞こえて来たぜんぱういとミリイの間延びした声にギョツとした・・・

「ミリイの声が聞こえるって事はあのフライアローはひよつとして・・・」

まるでミデアを護衛するかのようには先頭を飛ぶ機体を見たアメリアが驚いていると・・・ご名答!と答えたカスケード隊第二小隊長のジャックアルヴィン中尉からフライアローの翼を振りながらへへつと笑みが上がった。

『制空権が出るまでは俺達を守ってやるぜ?』

『そういう事なので安心してて下さいねえ♪』

そんな声をを上げる二人に出撃許可が下りて無かったのかちよつと二人共!!とマリ
アからの怒声を聞きながらアメリカが乗るミデアは無事に制空権を抜けるとそのまま
インドに有るマドラス基地に到着したので有った・・・

オデツサ作戦

マドラス基地強襲・・・その1

トリントン基地から飛び立ってから約半日過ぎた午後13時・・・

「こちらトリントン基地所属輸送隊第031便からマドラスコントロールへ着陸許可を求めます。」

基地では元々アメリカは管制官として働いていた事も有り、本来の通信士が休憩に入ったタイミングでジャブローへの中継地点で有るインド方面軍マドラス基地が見えて来たのだ・・・

『マドラスコントロールから031便へ、風も無く全てオールグリーンです。第一滑走路へアプローチ願を・・・？』

「031便了解です。ウォルフ大尉聞こえてますね？」

マドラス基地管制からの誘導にアメリカが確認すると、聞こえとる。と返したウォルフは管制塔の指示通りに高度を落とすと愛機のミデアを鮮やかに着陸させたので有った。

「内陸部にしてはあまり被害が無いようですね．．．？」

意外と綺麗な基地の様子に驚くアメリカに機長のウォルフからそりやそうじゃ。とククつと笑われた。

「ここらは連邦の勢力圏でも後方に有る上に海に面しているから攻めにくい構造になるんじゃよ嬢ちゃん？」

「へえ．．．だから水中用のMSが配備されてるんですね。」

ミデアのkokopittから見えるブルーを基調とした水中装備を施したジム系に向かって思案顔を浮べるとアメリカは所でウォルフ大尉．．．？と真剣な顔を向けた。

「何じゃい急に．．．」

「お腹空いたんで何か買って来ても良いですか？」

ここまで飲み物以外何も口にしてなかったアメリカから空腹の限界なのかキューっとお腹が鳴ると．．．ガクつと項垂れたウォルフからやれやれ．．．と呆れた声が上がった。

「まったく．．．じゃあワシらの分も適当に頼んで良いかのう？燃料の補給に小一時間は掛かるのでな」

「了解です。挨拶ついでにこの基地飯を買って来ますね♪」

カスケード隊の指揮官としての役目も有るアメリカが敬礼するとウォルフは氣をつけてな?と優しい顔で彼女を見送るとそんなに似てるんですか・・・?と副機長が意味深な顔で尋ねて来た。

「いいや・・・姿も性格もワシの孫娘には全然似て無いが・・・丁度年があれ位なんだじやよ・・・」

「確か第一次降下作戦の時にでしたよね・・・」

「そう顔を暗くする副機長にああ・・・と答えたウォルフはだからこそと誓った事が有る・・・」

「ワシはこの任務・・・絶対に嬢ちゃん達を無事にジャブローへ届ける。お前らには悪いが最後まで付き合っつて貰うぞい。」

「我々031便のクルーは貴方のお陰でこれまでのピンチを潜り抜けて来たのですよ?最後までお供しますよ疾風ウォルフ・・・?」

「ハア・・・と呆れた顔をする副機長に他のコクピットクルー達もグツと親指を立てるとウォルフはお前ら・・・と泣きそうな顔を隠すようにコクピットに座り直すと気合い入れて機体の再チェックに取り掛かった。」

くくく

「あく首が痛え……」

「同じく……」

アメリアと同様に交代で対空警戒の為に上部銃座についていたシヨウとチャーリーが首を回しながらミデアからマドラス基地の滑走路へと足を着けると……

「あれっ!?!もう配備されてるんだっ……!」

そう驚くカスケード隊の腕は良いが機体のセットに少し難が有る迷メカニックで有るソファイー。ホワイトからあまりの興奮にびよんぴよんと跳ねだすとシヨウは港の方へ眼を凝らすとジムらしい機体が警備しているのが見える。

「型式番号RAG-79 アクア・ジム……水中用に再設計された機体ですっ!」

「ジャブローでMSの整備カリキュラムを完了した事は有るわね……?」

そんな声を上げるソファイーに隣の滑走路に着陸した合流した教導隊のヒルダ中尉が流石ね?と彼女を褒めめたのだ。

「あわわ……そんな事はっ!」

そんな彼女からと照れたのか顔を赤くしたソファイーが困っていると……ミデアの後部デッキからカスケード隊のホバートトラックが出て来たので有る。

「どうかしたんですか?」

「それはコッチの話よ……一体どこに行く気?」

操舵席から顔を覗かせるアメリカにヒルダが首を傾げるとアメリカは決まってる
じゃ無いですか？と更に首を傾げた。

「お昼ご飯を買いに行くついでにこのマドラス基地の指令に挨拶をしておこうかと・・・」
「いや・・・先に基地指令に挨拶するのが先だからね？」

元々そのつもりで合流したヒルダからツッコまれたアメリカはアハハ・・・と苦笑い
を浮かべながらお腹から聞こえる空腹の音を我慢しながら了解です・・・と答えたので
有った

マドラス基地強襲・・・その2

「それじゃ・・・基地指令への挨拶には私とアメリカにイエーガー中尉で良いかしら？」
結局ソフィーが操舵手となったホバートトラックの中で教導隊ブラックウイドウの隊長で有るヒルデガードⅡウインチェスカ中尉からそう提案されたカスケード隊の指揮オペレーターで有るアメリカと現場指揮官で有る小隊長のイエーガーは了解と答えた。

「皆さんもうすぐ着きますよっー？」

ホバートトラックの前面窓から見えて来た本部ビルの姿にソフィーから声が上がると同時にすぐ後ろをジープで追走していたシヨウとチャーリーからもオオっ・・・と驚く声が上がった・・・

「流石はマドラス基地だな・・・俺達が居たトリントンとは大違いだぜ!!」

「まあ・・・オーストラリア方面軍でも一番端に有る田舎基地だしね。」

そう話しながら二人は先頭のホバートトラックが本部ビルの奥へと入って行くとその後には続き停車した。

「じゃあ私達はマドラス基地の指令へ挨拶に向かうので三人は昼食の手配を頼みます

ね。」

「ウチの分まで悪いわね・・・」

ここから別行動となるシヨウとチャーリーにソフィーの三人に自分達とウォルフ達ミアアのクルーに加えヒルダが率いるブラックウイドウ隊全員の弁当のテイクアウトを任せられ急遽結成された兵站部隊の隊長で有るシヨウは任された！とグツと親指を立てたので有る。

「イエーガーさんの分は私が見繕って置きますねっ♪」

「おっおう・・・頼むから常識の範囲内でもいいからな？」

その小さな身体に何故そこまで入るのかいつも不思議になつてゐるイエーガーがエヘヘっ♪と満面の笑みを浮かべて来るソフィーに不安がつてゐると・・・

「行くぞソフィー！」

「はーいっ！じゃあまた後でっ♪」

シヨウにそう呼ばれソフィーが駆けて行くのを見送つたイエーガーはやれやれ・・・と困つた様に頭をポリポリと搔いた。

「相変わらず懐かれますね・・・？」

「五月蠅え・・・サツサつと行くぞ。」

ニヤニヤとするアメリカの隣でイエーガーからぶつきらぼうに返事が返るとその二

人の背後を歩くヒルダはクスッと微笑んだ。

（本当に個性的な部隊ね・・・これならジャブローまで飽きなくて済みそうだね。」

そう楽しそうに思ったヒルダだったが基地指令の執務室に案内された彼女はすぐにそれを断られたので有った・・・

くくく

「どういう事かももう一度詳しくお聞かせ下さい基地指令っ!？」

珍しく焦った声を上げるヒルダに対しこのマドラス基地の指令官で有るフィツシャー准将は落ち着いてジャブローから送られて来た命令書を再度読み上げた。

「ジャブローに向かう教導部隊ブラックウイドウ隊及び試験実験部隊カスケード隊へ通達。ブラックウイドウ隊は直ちにジャブローに向かいカスケード隊は別命有るまで待機せよ。との事だ・・・これで良いかな中尉？」

「納得行きません！私達はカスケード隊をジャブローまで連れて行くように命令を受けていたんですよ!？」

そう睨みながらヒルダがツカツカと迫るとちよつと待て待てっ!?!とその勢いに負けたフィツシャー准将から両手を振られたので有る。

「気持ち分かるがこれは本社の決定だ。私じゃどうしようも出来んぞ!？」

「でしたら私が直接抗議しますのでレーザー通信の使用許可をお願いします!!」

そうデスクに手を置くヒルダの勢いに負けたフィツシャーはわ・・・分かった。すぐに手配しよう・・・と頷いたので有った。

「では私の方も情報を集めたいと思うのでまた後程伺います!」

「ああでは・・・」

まるで嵐の様に過ぎ去ったヒルダがフィツシャーの執務室から退出すると二人残されたアメリカとイエーガーはアハハ・・・と困った様に苦笑い浮かべた・・・

「いつもはもつとクールな人なんですが・・・」

「だろうね。命令書にも似たような事が書いて有るよ……ウオーカー少尉？」

そう溜息をつくフィツシャーから自分の名前が出て来た事でその命令書が口くでも無い所から回つて来た事を察したアメリカはどこからです？と首を傾げた。

「情報部のアリスIIミラー少佐からだ。それと今後の作戦の為に試作の武器も受け取っているから有効に使つてくれと伝言も受けている。」

「成程……今後の作戦の為……ですね。」

なんとなく彼女からの指令を解読したアメリカはありがとうございました。と基地指令のフィツシャーに向かつて頭を下げた。

「そうか……何の密命を受けているのかは知らんが一つだけ情報を与えよう。」

「あら……返す様なこちらには情報は有りませんが？」

ワザとらしくキョトンとするアメリカにフィツシャーからククつと楽し気に笑い声が上った……

「貴官との縁が結ばただけで充分だと思ふが……」

「そうですね……でしたら私の個人的なアドレスを渡しますのでここへお願いしますね？」

実際はミリイが掛けた何重のもプロクテトが掛かったホバートラックへの通信アド

レスを教えたアメリカがそれでは・・・とフィツシャーの執務室から出ると・・・おい
アメリカ!と一緒に退室したイエーガーからジロつと睨まれたので有る。

「さっきのやり取りは何なんだ・・・一体何が起きようとしている?」

「そんなの私が聞きたいですって・・・」

↓

そう答えたアメリカはただ一つだけ分かった事が有ります・・・と真剣な顔をイエー
ガーに向けたので有った。

マドラス基地強襲・・・その3

そんなピリピリとしたアメリカ達の状況を知る由も無い兵站部隊はシヨウが運転するジープで主要設備が揃っている基地の中央に有るレクリエーションを目的とした施設へと向かっていた。

「やっぱりトリントンとは規模が違うな・・・」

助手席でそう独り言ちるチャャーリーにちよつと見て下さいっ!!と荷台に座って居るソフィーから興奮気味の声が上がったので有る。

「何だよ一体!?!」

ハンガーへと牽引される大型の戦闘機に思わず目を引かれたシヨウは慌ててブレーキを踏んだので有る。

「ブースター付きの新型・・・」

一時的にテストパイロットとして乗っていたFF-X7 BSTコアブースターよりも一回り大型の機体にシヨウが驚いていると・・・すみませくん!!とその機体の関係者らしい男性が焦りながら駆け寄って来た。

「・・・・・・は立ち入り禁止なんです・・・」

「それはすみませんでした。何しろ今日この基地に来たばかりで・・・」

「ぜえぜえ・・・と息を切らす白衣を着るぽっちゃりした男性士官に謝ったシヨウがジープを出そうとギヤを入れたと同時にあのっ!とソフィーから手が挙がった・・・」

「アレってRX-78Eじゃ無いですかっ?」

「何でG-T-F-O-U-Rの型式番号を・・・」

「そう首を傾げるソフィーに対し男性士官が驚きのあまり目を見開いたまま固まるとソフィーはエヘっ♪と笑みを浮かべたのだ。」

「ジャブローで研修を受けてた時に試作データを見た事が有ったんですけどっ・・・もう実機が完成してたんですっねっ?」

「まあどうにか形にはなった。・・・って所が正直本音ですがね。」

「成程と言った顔でソフィーに苦笑いを浮かべたその男性士官はそう言えば!?!と慌てて敬礼しながら自己紹介を始めた・・・」

「申し遅れましたね。自分はオーガスタ基地所属ソウタロウ・タカナシ技術大尉で有ります。」

「技術大尉って事はシヨウさん達よりも上官じゃ!?!」

「そんな声を上げながらアワワっ!?!と慌て出すソフィーに少尉で有るシヨウとチャーリーも焦りながら敬礼したのだが何故かタカナシからいやいや!?!と恐縮する様に謝れ

たので有る。

「技術大尉とは言っても実戦部隊の皆さん対しては何の権限も有りませんからね・・・」
「そんなもんなんですかつ・・・？」

ガクつと項垂れるソフィーに向かってそんなもんですよ？とフツツと微笑んだタカナシが良ければ・・・少し話して行きませんか？と先程のガンダムGT—FOURが運び込まれたハンガーを見るとシヨウとチャーリーは顔を見合わせた・・・

「すみません・・・我々にも任務が有るので」

「そうですか・・・それなら仕方が有りませんね。」

どこか興味を引いたのかシヨウ達から断られたタカナシが残念そうな顔を浮べると・・・

「ちよつとだけっ！10分で良いから覗かせて下さいよっ・・・」

「本当に好きだよなソフィーって・・・」

MSに限らず機械なら何でも好きなメカキチのソフィーから懇願されたシヨウも最初は断つたのだが最終的に折れると後でアメリカから怒られるな・・・と苦笑いを浮かべるチャーリーと共にウキウキするソフィーに続きハンガーの中へとお邪魔する事になったシヨウはこの行動がアメリカとイエーガーを救う事になるとはまだ思っても見

なかつたので有った。

くくく

そして時は同じく・・・基地指令のフィッシャー准将との話を終えたアメリカが本部
ビルの前でポツンと立ちながら待ちぼうけしていると・・・

「それでな俺は言つてやったんだよ・・・ジオンにビビり過ぎじゃないですか？つてよ！」
「まあ戦車兵上がりだからなライス少尉は・・・ギャハハ！」

こここのMSパイロットなのか上官に対する軽口が耳に入ったアメリカはそれだけで
この基地の練度が低い事が伺えた・・・

（戦車兵上がりだからこそジオンのMSの脅威を知っている筈です。それなのにこいつ
等は・・・）

もし自分の部下だったら血反吐吐かせてでも躡けてやるのに・・・と思つていたアメ
リアの姿に気付いたのかそのパイロットとの一人からヒュー♪と口笛が吹かれた。

「ねえねえ!!どこの所属かな・・・見た事無いんだけど？」

黙つていれば可愛いと良く言われるアメリカの容姿に騙されたのかナンパされたア
メリアがムウ・・・と思案顔を浮かべていると・・・どうかしたの？とジャブローへと

確認を取っていたヒルダも更に合流すると二人のMSパイロットからニヤニヤ・・・とイヤらしい顔が浮かんだ・・・

「うわっこつちのお姉さんも超綺麗じゃねーの・・・」

「俺はさっきの子よりも好みだぜ・・・」

そう呟く二人とアメリカの様子にこんな時に・・・と頭を抱えたヒルダからハア・・・と溜息がつかれるとアメリカは下がって下さい・・・と彼女を守る様に前に出た。

「おい・・・この基地を守ってる俺達に刃向うってえ?」

小柄な女だと思ひ押さえつけようと思ったMSパイロットの軍曹だったが・・・その手を掴み懐へと踏み込んだアメリカはそのままデヤッ!と背負い投げると呆然としているもう一人のパイロットにも更に続け回し蹴りを食らわせたので有った・・・

「すみませんが・・・自分の身は自分で守るって恋人に言ってるんですよね。」

更にトドメと言わんばかりにアメリカがクスッと微笑むの見てヒルダは流石は元特務ね・・・とアメリカの強さを改めて確認していると・・・

『緊急緊急ーっ！所属不明機の当基地接近を確認・・・基地守備隊は迎撃に当たれ!!・・・』
続ける現在当基地に・・・』

ヴィーヴィーと鳴る警報と同時に聞こえて来る本部ビルからの指示にギョツとしたアメリカはチツ・・・舌打ちしながら二人のパイロットの胸倉を掴んだ。

「言いたい事は山ほど有りますが・・・今は自分の職務を果たしなさい！」

「わっ・・・分かりかりましたーっ!!」

ジロつと睨んで来るアメリカに恐怖を覚えたのか二人のMSパイロットが焦った顔でぴゅーつと飛ぶように駆け出すのを見たヒルダは苦笑いを浮かべた。

「個人的には助かったけど・・・今のはパワハラよアメリカ？」

「その前にセクハラだと思うのでこれは正当防衛では!?」

そんな抗議の声を上げるアメリカに分かってるわよ・・・とヒルダがお礼を含めた意味でフツツと微笑んでいると・・・遅れてスマン!?!と用を足していたイエーガーの登場に二人はハア・・・と溜息をついた・・・

「来るのが遅い!!」

くくく

マドラス基地強襲・・・その4

そしてほぼ同時刻・・・食料調達の仕事を与えられていたシヨウ達兵站部隊はその道中に知り合ったオーガスタ研所属のタカナシ技術大尉からの招待と同隊のソフィーからの強い希望によって試作機の見学に付き合っていた・・・

「なあソフィー・・・さつきRXナンバーの型式を言つてたけどこれもガンダムつて奴なのか？」

何だかんだ言いながらシヨウとチャーリーも興味が有るのかMSでは無い大型戦闘機のG-T-F-O-U-Rに

首を傾げるのを見たソフィーはクスつと笑みを浮かべた。

「この機体は可変機なんですよっ♪」

「可変・・・つて変形するのかコイツは!？」

まさに男のロマンと言つた顔で目をキラキラとさせる二人を視ながらあの・・・?と思案顔を浮かべたソフィーは隣のタカナシを見たので有る。

「因みに完成度つてどれくらいなんですっ・・・?」

「そうですね現状としては約70%・・・取り合えず跳ぶし変形は出来るんですがそこか

らの運用方法に難が有ると担当者からは聞いてますね。」

そう苦笑いを浮かべるタカナシに向かってソフィーからアレっ・・・？と違和感を覚えたと・・・

「G T—F O U Rの担当は一カタナシ《・・・》大尉じゃ無いんですか!？」

「私は現在ここに向かっている上官の代わりですよ？それと私の名はタカナシなのですが・・・」

「えっカタナシじゃっ？」

「いえ・・・もう良いです。」

アジア人の発音を表現するのが難しいソフィーに理解を求めるのを諦めたタカナシはちよつとこちらへ・・・と三人を更にハンガーの奥へと案内を始めた。

「さっきも言った通りG T—F O U Rの担当は他に居まして・・・私が現在開発中なのはコイツです。」

そう紹介するタカナシがトレーラーに載った長尺のライフルを見せるとシヨウ達はギョツとした・・・

「ワタクシのプロジェクトチームが製作中の後方支援特化型M Sに装備する予定の高射程、高出力タイプのスナイパーライフルで我々はロングレンジライフルと名付けまし

た。」

「コイツはまた凄いな・・・」

カスケード隊の中でもアメリカに次いで銃火器マニアのシヨウウから再び興奮する声が入ったのだが、ですが・・・とタカナシが困った様にポリポリと頭を掻き出すのでソフィーとシヨウウ達は顔を見合わせながら首を捻った。

「確かに上層部からの度重なる要求に応えそのスペックに辿りついた武器は出来たのですが・・・肝心の機体の方がジェネレーター出力問題も有ってまだまだ完成には程遠いんですよ。」

まさに本末転倒と言うべきかソフィーが機体よりも先に武器を完成させてしまったタカナシへと不思議そうな顔を浮べたのだ。

「それじゃあ・・・何でその武器をここへ持って来たんですかっ?」

「ええ、それは運用試験の為にジャブローに向かってると言う実験部隊へ引き渡す為なんですよ。」

そう説明するタカナシにそれってひよつとしてっ・・・?と首を傾げだすソフィーの頭上から突然ウィーツ!ウィーツ!!と何かの警告音が鳴りびき出した・・・

「何ですかこれは・・・!?!」

当たり前だがオロオロとする実践経験のないタカナシに向かってシツと指を立てた

シヨウは恐らくすぐに入つて来るだろう基地からの指示に耳を澄まし始めた・・・

『司令部から緊急、緊急ー！当基地沖合からミサイルらしき物体の発射を確認・・・総員、速やかに退避を急げ・・・繰り返すー！』

案の定聞こえて来た最悪の事態を知らせるスピーカーの音声と同時にズズン・・・と近くに弾着したのかチツと舌打ちしたシヨウは全員伏せろーっ!!とすぐ傍に居たソフィーの背中を押しながら倒れ込む様にコンクリートの床へと寝そべったので有る。

「全員無事か・・・？」

パラパラと落ちて来る天井からのコンクリートの破片を頭から払いながら起き上がったシヨウはじゅぶんの右手がムニつと何やら柔らかい物を掴んでいる事に気付いた・・・

「えつとシヨウさんっ・・・」

「悪いソフィーっー!!？」

不可抗力とは言え慌てて退きながら謝るシヨウに別に良いですけど・・・と助けたくれた事と胸を触られた事に対し怒るべきかお礼を言うべきか困ったソフィーは顔を真っ赤にしながら取り合えず俯いたので有った。

「それでラツキースケベのシヨウ・・・これからどうする？」

「変な名を付けるなって!・・・取り合えずウォルフ大尉のミデアに戻ろう。僕らも防衛に回らないと不味そうだし・・・」

シヨウからの提案にそれが妥当だな。と相棒で有るチャリーからの承諾も得たシヨウはマドラス基地防衛の為にハンガーの外に止めているジープへと急ごうとしたのだが・・・ちよつと待つて下さい!とオーガスタ研のタカナシ技術大尉から焦った声が聞こえて来たので有る。

「それではG T I F O U Rはどうなるのです!？」

「放つて置くしかないんじゃないかな・・・」

タカナシには悪いがどうしようも無いと言った顔でそう答えるシヨウに合わせてアソウも早く逃げた方が良いぜ?とチャリーからも申し訳無さそうな顔が浮かぶと・・・あのっ・・・?とソフィーから手が挙がった。

「あの試作機の完成度は70%と言つてましたが・・・それは運用的な問題で実用には問題無いんですよっ?」

「ええ・・・先程も言いましたが機体としては完成してますけど・・・ひよつとして飛ばす気ですか!？」

ギョツとするタカナシにそのままさかですつ♪と答えたソフィーはエへへと笑いなが

ら頭を抱えているショウとチャーリーに向かって指示を飛ばした。

「私がG T—F O U Rの最終チェックをしてる間に二人は耐Gスーツへと着替えて来て下さいっ！」

「はいはい・・・こうなったら乗るしか無いぞチャーリー・・・？」

メカに対する愛情は誰よりも深いソフィーのスイッチが入った事にショウが諦めた様に溜息をつくど、まあ・・・ソフィーのおっぱいを揉んだしな？と揶揄うチャーリーにアレは事故だっ!?と抗議したショウはタカナシと共にG T—F O U Rのコクピットで機体のチェックを行っているソフィーを横目にハンガーの奥に有る更衣室へと駆け出したので有った。

くくく

マドラス基地強襲・・・その5

「ハリーハリー！もつと急いで下さいイエーガー!!」

「無茶言うなアメリカ！道が悪すぎてこれ以上はスピードが上れん!」

先程受けた対地ミサイルによる一次攻撃により荒れた基地内をイエーガーはアメリカから急かされながら右に左にとハンドルを切りながらウォルフのミデアへと急行していた。

「まったく何て言うタイミングなのかしらね・・・良いアメリカ？この襲撃に応じて敵MSが強襲を掛けて来る可能性が高いわ。ウチとカスケード隊で迎撃に出るわよ!」

「了解です。結局お昼も食べて無いと言うのに・・・この恨みは許しませんよジオンの奴等め!」

食い物の恨みは恐ろしいとは良く言うが、まさに今のアメリカが良い例でブラックウイドウ隊の指揮官で有るヒルダⅡキステイス中尉はそんな彼女に指示を出しながらハハ・・・と苦笑いを浮かべながら滑走路脇に駐機している二機のミデアを指差した。

「二時の方向にミデア！近くに止めて頂戴イエーガー!!」

ヒルダからの指示に分かった!と答えたイエーガーがホバートトラックを急停車させ

ると、同時に飛び出しながらヒルダがまた後で！と黒く塗装されたブラックウイドウ隊のミデアに駆け出すのを見て手を振り消したアメリカはコツチも急ぎますよ！とイエーガーに頷くと隣に駐機しているウォルフのミデアの後部ハッチへと飛び込んだので有る。

「ウォルフ大尉聞こえますか？現在の状況を襲えて下さい。」

ヘッドセットを付けながらミデアのコクピットへと通信を繋ぐアメリカに無事みたいじゃの嬢ちゃん!?

!?!と機長のウォルフから安堵したかのようにホッとした声が返って来た。

「取り合えずはワシらが空腹な以外は被害無しじゃな?」

「って事はやはりシヨウ達は・・・」

兵站部隊として別行動を取っていたシヨウ達の未帰還にアメリカから不安そうな顔を浮べていると・・・何て顔してやがる!と小隊長のイエーガーがその頭を軽く小突いた。

「あの悪運の強いシヨウが一緒なんだ・・・チャーリーは勿論ソフィーも絶対に無事の筈だ。」

「そうですよね・・・すみませんイエーガー、ちよつと弱気になってしまった様です。」

自分もソフィーの事が心配にも関わらず叱って来るイエーガーに謝ったアメリカは

パチつと気合い入れ直す様に頬を叩くと、恋人で有るチャーリーの陸ジムを見上げながら陸戦型ガンダムに乗り込もうとするイエーガーに向かって叫んだ。

「私も三番機で援護します！」

「分かった・・・但し無茶はするなよ。後でチャーリーから叱られるのは嫌だからな・・・」

イエーガーなりの冗談なのかククつと笑いながら先に起動するRX-79「G」陸戦型ガンダムに向かって元々三人の機種転換訓練で教官をしているアメリカはそれはコツチの台詞です！と抗議しながら陸ジムのOSを起ち上げ始めた・・・

「システムの起動を確認、パーソナルコード認識、IFFが基地内とリンク・・・FCSの安全装置を解除・・・システムオールグリーン！」

機体の最終チェックを終えたアメリカが陸ジムを起すと、無茶はするで無いぞ！と忠告してくるウォルフからの心配そうな通信に分かつてます！と答えたミデアの後部ハッチから出ると待機していたイエーガー機と合流した。

「それでどうする・・・今日はシヨウもチャーリーも居ないが？」

どつちが指揮を執るのかと言っているイエーガーにそうですね・・・と普段ならホバートラックで後方から指示を飛ばしているアメリカが思案顔を浮べていると、待たせたわね！と少し遅れて出撃して来たヒルダが率いるブラックウイドウ隊にアメリカはそうです！と手をポンと叩いたのだ。

「アメリカからBWリーダーへ我々カスケード隊は貴隊の指揮下となりますので指示をお願いします。」

「えっ・・・ソッチが良いなら構わないけど、それじゃあブラックウイドウ隊及びカスケード隊はマドラス基地の防衛に当たるわよ！」

少し困惑気味のヒルダからの指示にこれなら良いでしょう？と指揮権の統一にアメリカがクスッと微笑むと、後で一杯奢らないとな・・・と結果的に責任を押し付ける事になったイエーガーは苦笑いを浮かべたので有った・・・

~~~~~

「沿岸警備隊より報告！沖合へと敵潜水艦の迎撃に向かった先行のフィッシュアイ隊が全滅したとの事です！」

「・・・後発のアクアジム隊もかなり苦戦している模様!?すでに損害率が基地守備隊の3割を超えています!!」

次から次へと聞こえて来る司令部から悲痛な声に基地指令のフィッシュャー准将はこれほどまでも・・・とジオン機との性能差に苦虫を潰した様な顔を浮べていると、傍にいた女性管制官からえっ!?と変な声がるのを聞こえたフィッシュャーはどうしたんだね・・・?と溜息交じりに尋ねた。

「それが・・・補給の為に立ち寄った教導隊から支援の申し出が入りましたが如何しましょうか!？」

「教導隊・・・確かキステイス中尉だったか、本当に助かる・・・」

MS隊の練度も低く猫の手も借りたい今の状況にフィツシャーがすぐにその支援を了承すると、また通信つ!?!と驚く女性管制官に今度は何だね!?!とフィツシャーは首を傾げた・・・

「えっと・・・現在当基地で運用試験中のオーガスタ研から試作機を空中退避させたいからと離陸の許可申請が入ったんですが・・・」

「例のRXシリーズの機体か・・・ここで失うとコッチに責任が飛びかねんし・・・ここは丁寧に送り出した方が良いか・・・って事で頼む。」

そう答えながらハア・・・?苦笑いを浮かべた女性管制官がヘッドセットを掴みながらタカナシ達が借りているハンガーへと通信を繋ぐと、キーーン!と暖気運転を始めているガンダムGTFOURの傍で最終チェックをしているソファイーへと離陸許可を受け取ったタカナシが慌てて走って来た・・・

「ハアハア・・・離陸許可はオツケーです・・・」



「分かりましたっ♪それじゃあ二人共グッドラックですっ!」

そう答えながら親指を立てたソフィーが離れるのを確認したシヨウとチャーリーは同じくグッドラック・・・と言いながら複座式のキャノピーを閉じると、こうなったら仕方が無い・・・と言った顔で急遽搭乗する事となったガンダムGTFOURのスロットルを少しだけ上げると滑走路へとタキシングを始めたので有った。

## マドラス基地強襲・・・その6

「複座でしかも後席か・・・なあチャリーちゃんと言とマニュアルは読んだらどうな？」

「大体な・・・まあなんとかなるって！」

相棒の性格上サラツと見たただけだなコイツ・・・と前席で操縦担当のチャリーからピースサインを

見せられたシヨウは頭を抱えながら自分のジャンケンの弱さを悔やんでいると、ピーつと管制タワーから二人の乗るガンダムGTFOURへ通信が入った。

『マドラスコントロールからタキシング中の試作機へ、先の攻撃でA滑走路が使用不可の為にB滑走路へへの侵入を許可します。』

「こちら・・・そう言えばコールサインはどうするチャリー？」

ソフィーの思い付きから突然この機体に乗る事となつた為にふと思つたシヨウが前席の相棒に尋ねると、そうだな・・・と思案顔を浮かべたチャリーからこれはどうだ？と悪戯っぽくニヤリと笑みが浮かんだので有る。

~~~~~

「あれ・・・おかしいわね？」

今さっきまで試作の誘導していた女性管制官の様子に何か有ったのか!?と気が付いた基地指令のフィツシャーが慌てて近づくと、急に返事が返って来なくなつたんですね・・・と首を傾げる女性管制官にまさか機体トラブルか・・・?とRX計画絡みの機体と言う事も有つて不安な顔をフィツシャーが浮べていると・・・通信繋がりました!と女性管制官からパツと顔が上がつた。

「試作機のコールサインはCBP1・・・マドラスコントロール了解。こちらの指示があるまで滑走路前で待機せよ!・・・一体何だつたんでしようね?」

「分かんが・・・基地守備隊の方が余り芳しくない。さつさと上げて上空で待機させるんだ・・・」

「本社の厄介事には関わり合いたくないって事ですか?」

「当たり前だ・・・派閥なんてものに私は興味はないからな・・・」

そう答え、手をヒラヒラと振りながら自分の席に戻ろうとするフィツシャーに女性管制官はハハっ・・・と苦笑いを浮かべながら、まあ確かにね・・・と思うと滑走路前で離陸前の最終チェックをしているショウとチャーリーが乗るガンダムGTFOUR

へ通信を繋いだ。

くくく

「エルロン、エレベータ、ラダー、フラップ……全ての可動翼の動作チェックよし……エンジン種出力もアイドリングのまま安定しているぜシヨウ！」

「了解……火器管制FCISのロック解除、敵味方信号自機のIFFと基地とのデータリンク確認した……システムオールグリーン！」

久々に行った離陸前のルーティンが済み一息ついたシヨウになあ……？チャーリーから苦笑いが浮んだ……

「本当のソフィーの作戦通りやるのか……」

「既に実弾まで積んだんだから今更怖気づくなよ……それに援護に向かうんなら派手な方がお前も好きだろ？」

そう答えながらククつと笑うシヨウに、まあそうだけだよ……とチャーリーから困った顔が浮かぶと同時に、聞こえますかCBPI？とピーと鳴る通信アラームと一緒にマドラス基地の女性管制官からの声が聞こえたシヨウは感度良好と答えた。

『宜しいCBP1、これより離陸を許可します。』

「ありが・・・」

「サンキュー、マドラスコントロール！その可愛い声が素敵だぜ!!」

今まで交信していた後席のシヨウを遮る様に軟派な声を上げたチャーリーがスロットルを全開に上げると、おいチャーリー!!と後席のシヨウから抗議の声が上った・・・

「アメリカの事を心配してたんじゃ無いのかよ!？」

「ああっ? あんなのただの挨拶だつて・・・そんな事よりもさっさと速度を読めつて!」
「アメリカにバレて殺されても知らないからな・・・!!」

アメリカとくっついて大分落ち着いたと思っていた軟派癖にシヨウは呆れながらディスプレイに映る離陸速度を読み上げると、同じく管制塔でチャーリーから突然ナンパ染みた声を掛けられた女性管制官も呆れた顔をしながら滑走路加速して行く試作機に首を傾げていた・・・

~~~~~

(あんな能天気なパイロットも居るのね・・・?)

聞いた声の無い二人組のパイロットにジャブローも人手不足らしいと感じた女性管制官は腕を伸ばしながら、まあこのまま大人しくしてくれれば……と呟いたのだが……大変です！と叫ぶレーダー官の声に慌てて立ち上がった基地指令のフィッシャー准将からどうした!?!と焦った声が上がったので有る……

「沖合の敵潜水艦からミサイルの発射を確認……！方位から見て目標は……司令部です!?!」

「くっ……基地内に通達！戦闘員には対空防衛を密にと、絶対に司令部をやらせるなよ!!」

レーダー官から第二波の攻撃を受けたフィッシャーの指示により司令部の動きが騒がしくなると同時にハツとした女性管制官も慌ててヘッドセット掴み離陸中のCBP 1へ通信を繋いだ。

「今の通信聞こえてたわね！急いで離陸を中止して安全な場所まで退避を……」

『悪いが離陸速度をV1を超えた……このまま飛ぶぞ!』

もう減速しても止まれない速度に達したと言うシヨウに対し、ならばそのまま上空に

逃げて下さい！と言葉濁さずはつきりと言って来る女性管制官の言葉にククつと笑ったチャーリーはヤードだね！とまるで子供みたいに反抗すると操縦桿を一杯引いた：

「何あれ・・・機体が急に空に向かって急上昇した・・・!？」

「あれはハイレート・クライムだ・・・まさかあの難易度の高い技を試作機でするとは相当肝が据わった奴か・・・何も考えて無いバカだな。」

キョトンする女性管制官の隣で呟いたフィッシャーは非常時にも関わらずその綺麗な機動に思わず感心したので有るので有ったが・・・勿論それは後者だった事はすぐに思い知る事になる・・・

## マドラス基地強襲・・・その7

「チツ・・・ソイツをやるならやるって言えよなチャャーリーっ!!」

テイクオフ直後の加速から一気に機体をほぼ垂直にズームアップさせるハイレート・クライムを予告も無しに行うもんだからシヨウは急激な機体の引き起こしから来る強烈なGに顔を歪ませながら前席のチャャーリーへと抗議の声を上げた。

「悪い悪い・・・それにしてもコイツの上昇力凄えな!もう1000フィート近くまで高度が上がったぜ!」

「ったく・・・ソフィーが言うにはコアブースターの1.4倍の出力が有るらしいからもっと丁寧扱えよな・・・!」

興奮気味のチャャーリーに向かってシヨウが呆れた顔をしながら注意すると、ピーっと



警告音を鳴らすレーダーにお出でなすった様だな・・・と呟いたシヨウはマドラス基地とリンクさせた情報をパイロットのチャリーへと送った。

「取り合えず先に基地への攻撃を防ぐ・・・このままの位置で上昇を続けるチャリー！」  
「了解ーっ任せろって・・・!!」

そう指示を飛ばすシヨウにHUDに映る敵潜水艦から発射された対地ミサイルへとチャリーがGTFOURを更に上昇させると、良し見えたぞ・・・とシートの後部から引き出した精密射撃のゴーグルでロックしたシヨウは右手のサイドステイツクに有るトリガーに指を掛けた・・・

「CBP1・・・フォックス3！」

戦闘機と言いながらも対空ミサイルを装備していないこの機体だが・・・機首に4門胴体に2門の30ミリバルカンに機体上部にはコアブラスターにも実装された二基のビームキャノンと固定兵装は充実しているのだが急な離陸の事も有りメカニツクのソ

フィーが見落としたのかショウとチャーリーが乗るガンダムGTFOURからばら撒かれた大量の銃弾と大出力ビームは進攻する対地ミサイルとはまるで明後日の遥か彼方に飛んで行ったのである。

「おいショウっ!!?」

「なっ……射線軸がコンマ3はズレてるぞコイツ!」

すぐにFCSを確認するショウにどうするよ!とチャーリーから焦る声が聞こえる  
と、やるつきやないだろ!と叫んだショウはさっきの射撃データから自分の勘と経験で  
射線軸を調整すると更に照準をマニュアルに切り替えた……

(基地にはソフィーは勿論……アメリカやイエーガーさん達カスケード隊の仲間が居  
んだ。今度こそ絶対に当ててやる……!)

「チツ……これ以上はミサイルと近すぎる。ラストアタックだからなショウ!!」

そう焦るチャーリーの声に上等だ・・・!とさつきと同様にゴーグルを覗き込んだシヨウは今度はロックオンせずにサイドステイクと連動させた6門のバルカン砲とビームキャノン进行操作するところの少し上を飛ぶ対地ミサイルを捉えた。

「CBP1・・・フォックススリーーっ!!」

そう叫んだシヨウがトリガーを絞ると同時に発射された6門の30ミリ弾と2門の高出力ビームは先程と違い機体に対し真つすぐ飛ぶと高度を落とし炸裂しそうな対地ミサイルを全て叩き落としたので有った・・・

「よっしやーービンゴ!!」

「流石シヨウだぜ!? 凄えぜホントによ!!」

あまりの嬉しさにガッツポーズを取るシヨウに向かってそう叫んだチャーリーが手だけ後席に見せるとシヨウはだろっ?と珍しくドヤ顔をしながらその手を叩いた。

〃  
〃  
〃

「し．．．指令？こちらに向かっていたミサイルが全て撃破された模様です．．．!?!」

何が起きたのか分からないと言った顔で報告して来るレーダー官の様子にフィッシュャーはずつと見ていた上空から視線を下すと分かっている．．．と答えながら溜息をついた。

「ハア．．．一体何者なんだ？ジャブローのクソ真面目なパイロットがあんな無茶な事するか普通!?!」

「そんな事言われましても．．．」

近くに居た所為か急に頭を抱えだすフィッシュャーに女性管制官が苦笑いを浮かべて

いると、緊急です!?!とまた新たな問題が起きたのか焦った声を出す部下に向かって今度は何だ・・・?と少し疲れた顔をしたフィッシャーは目を覆った・・・

「ハッ!港に展開中の防衛部隊からなのですが・・・どうも敵MSの上陸阻止に失敗したらしく救援を求めています。」

「チッ・・・やはり付け焼刃のMS隊では無理か・・・先程支援を申し出てくれた教導隊に向かう様に要請を頼む。」

ここは練度の高いブラックウイドウ隊とカスケード隊に望みをかけるしかないな・・・と思つたフィッシャーがそう指示を飛ばすと同時にピーつと自分のヘッドセットに通信が入った女性管制官からギョツとする顔が浮かんだのだ。

「あの指令・・・?」

「・・・聞きたくない。」

「CBP1から自分も港への援護に向かうと言ってますが・・・」

それを無視して説明する女性管制官が首を傾げると、もう好きにしてくれ・・・と答えるフィッツシャーの疲れた様子に了解しました。と答えた女性管制官は同情しながらも何かしそうなCBP1の働きに期待するように一言一句間違い無く伝えたので有った。

「おいチャーリー聞いたか・・・好きにしろつてよ!？」

「何か知らねえが話が分かるじゃねえか・・・それじゃあ行くぜシヨウ!!」

まさかの命令無視を許す許可に驚くシヨウに向かって叫んだチャーリーによってイヤッホオオー!!とダイブしたGTFORは機体を反転させながら敵機と交戦中らしいヒルダが率いる教導隊のブラックウイドウ隊と自分達が所属するカスケード隊の救援へと急行した。

## マドラス基地強襲・・・その8

「ラムダーからラムダ2、3へ・・・司令部から先行したフィシユアイ隊は既に全滅したとの模様だ。・気を引き締めて掛かれ！」

マドラス基地守備隊機械化混成部隊の一つで有るMS部隊ラムダ小隊はRAG-7 9アクアジム三機で沿岸部に有る港の増援へと向かっていたのだが、司令部からの幸先悪い通達に戦車兵上がりのライス少尉はすぐ後ろに追隨する二機のアクアジムへと注意を促したのだ・・・

「わーってますよ。」

「相変わらず慎重と言うか・・・ちよつとビビり過ぎてはいませんか？」

こんな感じで軽口を叩くのは先程アメリカとヒルダをナンパし返り討ちに有った軍曹二人組で有る。そしてそんな二人の上官で有るライスはまったくこいつ等と来たら・・・といつもの様に内心思いながらハア・・・と深く溜息をついた。

「良いか二人共・・・これは演習じゃ無く実戦だつて事を本当に分かつてるのか？」

「はいはい甘く見ていると早死にするんでしょう・・・分かつてますつて？」

ライスからのいつもの小言にラムダ2のアクアジムからうんざりした様に両手が少し上がると、それにですよ?とその隣のラムダ3からも同調すると同時にククつと笑い声が上ったのだ。

「噂じゃジオンよりも優秀なMS持つ連邦が巻き返しを始めたつて聞きますし・・・これは手柄を立てるチャンスなんじゃ?」

「確かにここで敵機の一機や二機でも倒せば出世間違い無しだなっおい!」

長引く戦争に戦線が停滞しアジア大陸の中でも比較的端に位置するのも相まって、ここマドラス基地にMS隊と言われる物が出来て早一か月・・・まだ一度もMSで実戦をした事も無いのにも関わらずハイテンションな二人を無視したライスは不安を感じながら目的地で有る港へと辿り着いた・・・

「おい何だよコレは・・・」

「確か俺達よりも先にベータの連中が先行してた筈・・・」

一方的に攻撃を受けたのか・・・二人が原型を留めていない程に破壊されたベータ隊のアクアジムの無惨な姿に呆然とすると、コイツはマズイな・・・と元戦車兵の勘が早くここから逃げろと警笛を鳴らすのが聞こえたライスはチツと舌打ちすると機体を驚いたまま固まっているラムダ2と3の方へ向けた。

「これよりラムダ隊は一旦この場から離脱し基地司令部との通信が出来る位置まで後退



する。」

「ちよつと待てよ隊長!?!こいつ等をこんな目に遭わせた奴をそのままにして逃げる気かよ!!」

ベータ隊の仇を討ちたいのか興奮するラムダ2がライスのラムダ1に詰め寄ると、おい止せて・・・と相棒よりも少し冷静なのかラムダ3が止める様にその肩を掴んだのだ・・・

「良く見ろつて・・・ベータだけじゃ無く沿岸警備をしていた61式まで全滅してんだ。」

「ここは隊長の言う通り下がって増援を待った方がよく無いか?」

「チツ・・・分かったよ。」

ラムダ2も完全には納得してない様だがラムダ3の説得に応じたのかライスのアクアジムから離れると、それでは行くぞ!とライスのアクアジムは元来た道に戻り始めた。

(周囲のミノフスキ粒子が戦闘濃度まで上がっている・・・ベータの連中からの救援要請が届かなかつたのは恐らくこの所為だな・・・)

ここで警戒すると見えない敵機を余計に刺激すると思えば早に港から離れようと考えたライスだったのだが・・・

「おいおい獲物が逃げんじゃねえよ．．．？」

ザバつと海から港へと上がって来たジオン機らしいMSが前方に立ち塞がるのを見たライスはやはり見逃してはくれないか．．．と苦笑いを浮かべながら背後のラムダ2とラムダ3へ叫んだ。

「ブレイク！俺がコイツの相手をする。お前らは司令部へ救援を頼むぞ!!」

そう指示を出したライスのアクアジムが駆け出すと同時に腰からビームピックを引き抜くのを見たラムダ3はその意図を感じると．．．ちよつと待てよ!?!と怒る様に叫ぶラムダ2の腕を引っ張ったのだ．．．

「あの人は自分を囿にして俺達を逃がそうとしてんだよ！分かんねえのか!?!」

「ああ！分かってるからムカついてんだよ．．．カッコつけやがってあの野郎!」

そんな相棒の様子にラムダ3の軍曹は、つたくよ．．．と困った様な声を上げると自機に持たせてるミサイランランチャーを構えた。

「一回だけだからな．．．一回援護したら離脱する。良いな?」

「そう来なくっちゃな．．．3カウントで撃つぞ!」

そうククつと笑いながら答えるラムダ2も自機のアクアジムが持つミサイラン

チャーを構えると悪戦苦闘しているラムダーを援護しようとジオンの水陸両用MS MS M-07ズゴッグへと狙いを定めたので有る。

「コイツっ!!」

「いい加減しつこいんだよっ!!」

一応はジムの直系機とは言え水中用の居地仕様で有るアクアジムで戦う必死なライスに向かつてイラっとした対MS戦も想定したズゴッグのパイロットはアクアジムが振るビームピックを掻い潜りながら引いていた右手を一気に振りに抜いたのだ・・・

「しまったっ!!」

ズゴッグの固定兵装アイアンネイルによる鋼鉄の爪によってアクアジムの右腕を肩ごと打ちぬかれたライスがギョツとするとアクアはジムはそのまま背中から吹き飛んでしまう。

「これでお終いだ・・・」

「クッ・・・」

トドメを刺そうとズゴッグの右手の爪からビームが発射しようとした瞬間・・・ドンっ！とライスの目の前で爆炎がズゴッグを襲ったので有った。

「今ですよ隊長!」

「早く離脱しろって!!」

そう言いながら更に撃つて来る二人に目を見開いたライスはあのバカ共!と怒りながらもこの窮地を救ってくれた事にククつと笑みを浮かべた．．．

「そこまでされちゃあ．．．意地でも逃げてやらなきやなつ!!」

そう叫んだライスがフットペダルを踏み込むと二人の撃ったミサイルによりダメーヂを負ったのか怯んでいるズゴッグに向かってバーニアを吹かしたアクアジムを起しながら体当たりをかましたのだ。

「ウオっ!!?」

水中用と言う事も有り緊急時のみしか使用出来ない奥の手を使ったライスのアクアジムがバーニアを使つての特攻に泡喰ったズゴッグのパイロットは更に思わぬダメーヂを負ってしまった。

「メインカメラが．．．」

「推進剤持てよ!」

その隙に離脱しようと思ったライスのアクアジムがラムダ2達と合流しようとした瞬間．．．この野郎!!と精度の劣るサブカメラを使つてのズゴッグからのビーム攻撃にラムダ1の右足が撃ち抜かれたので有った．．．

「チツ・・・お前らはさっさと離脱しろ!!」

そう起き上がりながら怒鳴ったライスはに了解・・・と答えたラムダ3がクツ・・・と悔しそうな声を上げるラムダ2と共に離脱をするの見送ったライスはズン・・・ズン・・・と地面を揺らしながらゆっくりと歩いて来るジオン機にククつと苦笑いを浮かべた。

「こんな機体にコケにされて随分と怒ってる様だな・・・?」

そんなライスの予想が当たっていたのか・・・忌々しい奴め!と行動不能となったアクアジムに向かつてズゴッグが確実に仕留めようとコクピットに向けて右手を押し当てて来るのを見てライスは諦めた様に目を閉じた・・・

(もし神が居るのならこのピンチを救ってくれるんだらうな・・・)

正直ライスは冗談でそう思ったのだが・・・気まぐれ天使が近くに居たのか、ドカン!!と轟音を立てながら突っ込んで来るRGM-79「G」陸戦型ジムの姿に目を見開いたのであった。

## マドラス基地強襲・・・その9

「何をボーツとしてるんですかあ!!?」

そう怒鳴ったアメリカの陸ジムがライスのアクアジムを左腕のシールドごとタックルし強引に吹き飛ばすと・・・ビシユ!と発射されたズゴッグの腕部ビーム砲を間一髪避けたアメリカはアクアジムと一緒に地面へと倒れ込むとメインモニターに映るズゴッグをロツクオンした。

「何だコイツはっ!!?」

「貫ったあー!!」

そんな声を上げるズゴッグのパイロットからの悲痛な顔など見る事も無くアメリカは機体を横滑りさせながらトリガーを引くと・・・ドドドド!!と低い銃声と同時に発射された100ミリマシンガンによつて右腕を前に出していたズゴッグはそのままガクつと前のめりに崩れ落ちたので有った・・・

「やれやれ・・・どうにかギリギリでしたね・・・」

機体を起しながらアメリカがコクピットでそう独り言ちると、こちらラムダー・・・聞こえるか?と行動不能らしく足元で倒れ込んだままのアクアジムからピーつと通信ア

チームが入って来た。

「こちら試験実験部隊カスケード隊のアメリカンウオーカー少尉です。お怪我は有りませんか？」

「こちらはマドラス基地所属ラムダ小隊のライス少尉だ。荒っぽい救援に感謝するよウオーカー少尉？」

ククつと冗談交じり笑いながら答えるライスの様子に及びません。とアメリカもクスつと笑い返している

と・・・ライス少尉「!?」と聞こえて来る声にその声は「!?」と驚いたアメリカの陸ジムは心配で戻って来たラムダ2とラムダ3に向けて指を向けたのだ。

「私の部下だが・・・知ってるのか？」

そんなアメリカの様子にライスも違和感を感じたのか首を傾げると、ええまあ・・・と苦笑いを浮べ曖昧に答えるアメリカの声に向こうも気付いたのか・・・さっきの暴力女あ!!?と軍曹達のアクアジムが先程植え付けられた恐怖の所為か後ずさりするのを見て、彼女と何が有ったんだ・・・?とアクアジムのコクピットから出て来るとライスは誰が暴力女ですかあー!?と怒鳴り返すアメリカ機を見ると首を傾げたので有った。

くくく

「とにかくここは危険ですので、ここは私に任せてライス少尉達は離脱を！」

「この基地を守る兵士としては悔しいが・・・ここは君に任せた方が良いみたいだな。」

自機を失った事とアメリカとは明らかに自分達とは練度の差が有り過ぎる為に逆に邪魔だと判断したライスが潔くアメリカの指示に従いラムダ2のアクアジムの手に乗ると、所で少尉！と叫ぶライスにアメリカはモニター越しに何ですか？と答えた。

「これが終わったら盛大に飲もう！勿論我々の奢りでな？」

「それは楽しみです。ウチの隊は皆が酒好きですので・・・」

そう言い掛けたアメリカがピーッと鳴るIFFの反応にチツ！と舌打ちすると陸ジムをその方向に100ミリマシンガンを構えた・・・

「敵機の反応・・・急いで下さい!!」

そう外部スピーカーで叫ぶアメリカ機に分かった・・・とライスが手でラムダ2に合図するとラムダ3共にゆっくりと後退を始めた。

「おい赤髪・・・死ぬんじゃないぞ?！」



「お前には借りが有るんだからなっ!!」

案外良い奴らしいですね・・・と自分を応援して来るナンパ野郎の二人にライス少尉の事を頼みますね?とアメリカはクスッと微笑んだ。

「うっかり落つことしたりなんかしたら後で私の鉄拳制裁が下りますからね!」

「そんなドジするかよっ!?!」

二人揃ってツツコンくる声にははいはい・・・それでは後程。と通信を切ったアメリカは気持ち切り替えようと自分の頬をバシッと叩いた・・・

「タダ酒を頂く為にもあの三人を守らないといけませんね・・・」

「えっ・・・ここは隊長が制圧した筈・・・ギャっ!?!」

そう独り言ちたアメリカの陸ジムが無警戒のままザバっつと海から上がって来たジョンの水陸両用MSに向けて100マシンガンを連射すると・・・どう言う事だ?とMSM-04アツガイのパイロットは先に上がった僚機から聞こえる悲鳴と爆散する機体に驚愕したのだ・・・

「シャーク02から各機へシャーク03がやられた!?!一斉に飛び出して片付けるぞ!!」

「シャーク04了解」

「シャーク05了解」

アメリカ機を警戒しての行動か・・・残ったアツガイ三機がバーニアを吹かしながら

飛び出して来るのをメインモニターで確認したアメリカからちよっ!?!と焦った声がかかった。

「同時に三機とか捌ききれぬ訳っ!?!」

「隊長とシャーク03の仇だーっ!?!」

バラバラッ!!とアメリカ機が撃つ100ミリマシンガンを掻い潜りながらシャーク02のアツガイが右腕のアイアンネイルをアメリカが居るコクピットへと振り抜こうとした瞬間・・・ビシユ!とその背後からアツガイの背中がビームによって撃ち抜かれたので有る。

「へっ・・・?」

「CSD1からアメリカへ・・・ヒヤヒヤさせんじゃねえぞ!?!」

そう怒声を上げる後方から駆け付けたイエーガー機のビームライフルによって間一髪危機を逃れたアメリカだったが・・・

「貴様あーっ!?!」

「良くもシャーク02を!」

更に追撃して来るアツガイ二機にチッ!!と舌打ちしたアメリカは腰からビームサーベルを引き抜きながらイエーガー援護を!と叫んだが、流石に近すぎるぞ!?!と敵機とアメリカ機の距離にイエーガーに緊張が走ると・・・

「だったら俺達がやるぜえ！イツヤホおおー！！！！」

そんな声を上げるチャーリーの雄叫びと共にキイーン!!と急降下して来た機体にハア!!?とイエーガーが素っ頓狂な声が上がると同時にシヨウがロツクした!とアツガイを捉えたシヨウがトリガーを絞ると・・・G T F O U Rの機体上部から発射されたビームキャノンが一機のアツガイの胸部を貫いたのだ。

## マドラス基地強襲・・・その10

「ビンゴッ!! どうだ見たかチャーリー!?!」

間一髪の所でアメリカの危機を救ったシヨウウから興奮気味にガッツポーズが上がる  
と同時に機体を引き起こしたチャーリーは下を見ながら健在なアメリカの陸ジムに  
ホツとしながら後席を見た。

「愛してるぜシヨウウ?」

「それはアメリカに言つてやれよバーカ!」

チャーリーからの冗談交じりの礼にシヨウウがククつと笑っていると、下でも決着がつ  
いたのかアメリカの陸ジムが残った最後のアツガイに向かってビームサーベルを突き  
刺していた・・・

「何だか良く分かりませんが・・・とにかく助かりました!」

フウツと安堵した様に息を吐いたアメリカが上空を飛ぶシヨウウとチャーリーが乗る  
戦闘機に向かってグツと親指を立てていると・・・バシュ!!と海面から突然飛び上つて  
来た機体にピーつと反応が有ったアメリカは咄嗟に機体を振り向かせたのだがそのま  
まガシつと両腕を掴む様に拘束されたので有る。

「よくも仲間を・・・!!」

「クツ・・・何て馬鹿力なんですかコイツっ!？」

ギリギリと自機を抑え込む大型のMS・・・MSMゴッグの怪力にアメリカからチツと舌打ちが上がりると同時にゴッグの腹部に装備されている腹部メガ粒子砲が充填を始めたのだ・・・

「チツ・・・ビームライフルの威力じゃ貫通してアメリカにも・・・」

アメリカ機の危機に対処をしかねたイエーガーが装備しているビームライフルでの攻撃を断念すると・・・イエーガーさんっ!!と聞こえて来たソフィーの声と同時に猛スピードでヒューーン!と高い音を上げ突っ込んで来るホバートラックに向かってソフィーかっ!?!と叫んだイエーガーは足元に急停車したウイスキードッグへと驚く声を上げた。

「足を狙って下さいっ!!」

「分かった!？」

到着早々ソフィーからの指示にこれしかない!と彼女に賭けたイエーガーが慎重に狙いを点けながらサイドステイクのトリガーを絞ると・・・ビシユ!と発射されたイエーガー機が撃ったビームライフルにより右脚部を撃ち抜かれたゴッグはバランスを崩すと焦ったのか撃つのを躊躇ったのだ・・・

「今ですシヨウさんっ！変形をっ!？」

再度降下して来るガンダムG T F O U Rを見てそう叫ぶソフィーに向かって了解  
！と答えたシヨウがフライングモードで有る戦闘機形態からM Sへと変形させると、何  
だあ!?!と驚いたゴツグのパイロットはガンダムG T F O U Rの本来の姿に驚いたの  
かアメリカの陸ジムから手を放したのだ。

「オラアアアー!!」

それを見たチャリーがチャンスだぜ!とフットペダルを踏み込みながらゴツグに  
向かってバーニアを吹かすと・・・ドガツ!と鳴る鈍い音と同時にガンダムG T F O  
U Rから勢いよくタックルされたゴツグはそのまま港のドッグへと突っ込んだ・・・  
「クッ!せめてお前だけでもアー!?!」

ピーピーと鳴り響く機体ダメージの警告音にゴツグのパイロットがメインモニター  
に映る立ち上がるうするG T F O U Rに向けメガ粒子砲を撃とうとした瞬間・・・そ  
うはさせるかよ!と叫んだイエーガーの陸戦型ガンダムのビームライフルによって胸  
部を撃ち抜かれたゴツグはパイロット共々沈黙したので有った・・・

〃  
〃  
〃

「皆さん無事ですかーっ!？」

戦闘が終了した事を確認したソフイーがホバートラックから降りて来るのを見ると、まあ何とかな・・・と答えたイエーガーが彼女の近くで陸ジムの膝を着かせると上部ハッチを開いた・・・

「それにしてもあの機体は何だ・・・戦闘機からMSに変形したが・・・?」

「RX計画の試作機でショウウさん達に無理言って乗って貰ったんです・・・ですが予想よりも出来上がってましたねっ♪」

そうコクコクと満足そうにソフイーにそうなんだな・・・とイエーガーが困った様に苦笑いを浮かべていると、ソフイー!?と叫びながら走って来たアメリカにソフイーはギョツと抱きつかれた。

「もう・・・心配したじゃないですか!？」

「すみませんっ・・・ちよつと色々有っちゃってっ?」

そう焦った声を上げるアメリカにアハハ・・・と笑ったソフイーがガンダムGTF-FOURを指差すと、所であの機体は何ですか・・・?と説明の為にアメリカは一緒に付いて来たショウウとチャーリーを見た。

「聞いて驚けアメリカー!」

「可変機構付きの新型でブースター付きの化け物だぜ！」

そんな二人からの声にムウ……と思案顔を浮かべたアメリカはそれは凄いですけど……と今度はソフィーを見たのだ……

「因みにですがMS形態のまま一度地上に降りた場合……戦闘機への変形はどうするんです?」

「それは無理ですねっ?そもそも空中での変形しか想定してない機体ですし……もし地上で戦闘機形態に戻ったとしても離陸できる速度と場所が必要となりまねえ……?」

良く考えて見れば当たり前な事にシヨウとチャーリーが目を見開くと……ただの欠陥機ですね。と結論を下すアメリカの背後でシヨウとチャーリーは被っていたヘルメットを地面へと叩きつけた。

「何だよ!使えない機体だな……」

「おいアメリカ!早く降りて俺と代われ!!」

ソフィーの説明を聞いて早々にあの有名なガンダムに乗ったにも関わらず見限ったのか……そんな二人にイヤに決まってるじゃないですか!?!と抗議したアメリカは元々の乗機で有るホバートラックに乗り込むと見慣れない人物が居る事に気付いた……

「この人は誰ですソフィー?」

「オーガスタ研のソーさんですっ♪私達に新しい装備を届けに来たそうですよっ?」



エヘへと笑うソフィーからの大雑把な自己紹介にこれはどうも・・・とアメリカは首を傾げたので有った・・・

## マドラス基地強襲・・・その11

「えっ・・・ウチへ試作武器の運用試験で？」

あれからソフィーを通じてソウタロウ⇨タカナシ技術大尉の事情を知ったアメリカは移動するホバートトラックの中で驚いたので有った。

「はい。上層部からの新型機の要求スペックが高すぎて先に試作のライフルが完成して困って居たら・・・実験部隊の責任者で有るジョン⇨コーウエン准将から是非にとオファーが有ったんです。」

「確かに・・・しかし実験部隊に試作武器を回して来る所を見るとコーウエン准将は優しそうに見えてクセが有るみたいですね？」

そう答えながら命令書を確認したアメリカがタカナシにムウ・・・と思案顔を浮べているとウォルフさんのメディアですっ！とホバートトラックの操縦をしていたソフィーから声が上ると・・・皆聞こえるわね！とアメリカは先程の先頭での補給と装備を変更を

する為に指示を出し始めた。

くくく

『シヨウはそこで試作機を降りて陸ジムで私達と共にオーガスタ研のハンガーへ新しい武器を取りに向きますよ?』

「こんな事になるならハナから陸ジムで出れば良かった・・・」

アメリカの指示でシヨウはガンダムG T—F O U Rから愛機で有るR G M—7 9「G」陸戦型ジムを機動させながらハア・・・と溜息をつく、だから言ったんですよ！とオーガスタ研のタカナシから抗議の声が上ったのだ。

「あれは運用試験中の試作機だつて言うのにソフィーさんが皆さんの援護に急ぐつて言うから・・・」

「ちよつと待つて下さいっ!？」

「まさかとは思うがお前……、まさかその機体に変形する所が見たかったとか言うは言わないよな……?」

そんな呆れた顔をするイエーガーに凶星だったのかソフィーからアハハ……と苦笑いが浮ぶとやつぱりか……とイエーガーがメカが大好きな彼女に頭を抱えながらガクつと頂垂れた……

「まつまあ……実戦データは取れましたし……ね?」

「タカナシ大尉がそう言うんなら……」

タカナシの声にムウ……とアメリカは思案顔を浮かべた。

(オーガスタ研と聞いていたから頭でつかちと思つてましたが……)

そう考えながらムウ……と唸るアメリカのヘッドセットにピーつと通信アラームが鳴るとモニターに先行していたブラックウイドウ隊の表示が上がったのだ……

『聞こえるアメリカ? 正面ゲートに新手が現れたわ……ちよつと苦戦してるから急いで合流して頂戴!』

「カスケード隊了解しました。すぐに急行します!」

珍しく焦った声を上げる教導隊のヒルダにそう答えたアメリカは聞こえましたね! とカスケード隊の各機へ叫んだ。

「これよりブラックウイドウ隊の支援の為、イエーガー CSD1はチャージャー CSD3を連れて先行! シヨウ CSD2はさつき言った通り私達と試作武器を受領をして合流・・・良いですね?」

「ちよつと待つてくださいいウォーカー少尉!」

そんなアメリカの指示にタカナシが慌て出すとアメリカはどうしたんです?と首を傾げた。

「まさかいきなり実戦で使用する気ですか!」

「問題は早めに出た方が良くないですか?それにウチのメカニックは優秀なので何とかすると思います。」

よほどソフィーを信用しているのか・・・そうですか。とアメリカの言葉にそう答え たタカナシはやれやれ・・・と頭を掻きだした。

「それでは急ぎましょう・・・そちらの機体とセットアップをしないとイケませんので!」

「分かりました。聞いての通りですイエーガー! 後の事は頼みますよ?」

ヘッドセット越しにそう叫ぶアメリカに任された! と陸戦型ガンダムの外装スピーカーで答えたイエーガーがチャリーチャーリーの陸ジムと共にヒルダの下へ救援へと向かうとアメリカは残ったシヨウの

陸ジムと一緒にホバートトラックでオーガスタ研の借りているハンガーへ武器を取りに移動を開始した。

(((

「当たれええええ!」

「ヒイイイ・・・止めろ来るな来るな!」

「な・・・何なんだこのMS・・・」

「ジオンのMSよりジムの方が性能が良いって言うのは嘘かよ!!」

そんな部下達の恐怖染みた声に基地守備隊の隊長はチツと舌打ちした。

「クソ・・・速すぎる!?!なんだあのMSは・・・」

次々と友軍機を撃破する黒いスカート付きに90ミリブルパップマシンガンを撃ちながら突っ込んだそのジムがビームサーベルを引き抜いたと同時ににいつの間にか後ろに回りこまれていたので有る・・・

「なっ!?!」

咄嗟に振り向いた小隊長機のジムがシールドで受け止めながらドムの放ったバズで吹っ飛ぶと・・・まだ生きている部下達はそのドムの動きにヒッ!?!と怯えだした。

「おいおい・・・その辺にしろって?」

「まだ彼らは未熟・・・代わりに我らが相手をしよう。」

そう言いながら地守備隊の前に出たイワンの指揮官型ジムとリー||フェイのジムライトアーマーからオープンチャンネルで尋ねられるとドムのパイロットはそれに応じたのか一旦距離を取った。